袖ケ浦市文脇遺跡

（中・近世編）

－主要地方道千葉鴨川線　（袖ケ浦市高谷）
県単道路改良事業埋蔵文化財発掘調査報告書１－
【第２分冊】

平成 29 年３月

千葉県教育委員会

そ で が う ら し ふ み わ き い せ き

袖ケ浦市文脇遺跡

（中・近世編）

－主要地方道千葉鴨川線　（袖ケ浦市高谷）

県単道路改良事業埋蔵文化財発掘調査報告書１－

【第２分冊】

第２章　検出された遺構と遺物

第２節　地下式坑

１　概要

地下室と地下室へ通じる入口の竪坑からなる地下式坑は、調査区内から 20 基検出された。遺構の分布は 22F グリッド以北に限られる。地下式坑からの出土遺物はそれほど多くない傾向であるが、中には多数の遺物を出土した遺構や、貝層が検出された遺構、仏飯器など珍しい遺物を出土した遺構、床面から完形に近い擂鉢を出土した遺構、入口覆土上部に完形のカワラケが置かれた遺構などがある。

地下式坑は、全ての調査年次を通して遺構種別記号に「SK」が用いられており、ここでは調査順に掲載する。

２　遺構と遺物

SK-020（第 97 図、図版５・122）

20F-60・61・70 ～ 72 グリッドに所在する。地下室の平面形は長方形で、東側に長軸 140㎝、短軸 90㎝ほどの隅丸方形状の入口部分を設けている。規模は、南北軸 262㎝、東西軸 168㎝であるが、入口部分を含めると東西軸は 250㎝ほどとなる。地下室の床面はほぼ平坦で、検出面から床面までの深さは 200㎝である。壁はほぼ垂直に立ち上がる。天井部は、遺構検出時に既に崩落していたが、床面から天井までの高さは 140㎝前後と推測される。入口部分には、床面から 88㎝上に段が設けられている。

図示した出土遺物は１点である。第 97 図１は、覆土中から出土した銭貨で、政和通寶である。書体は篆書である。遺存状態が悪く破損している。出土遺物はほかにはない。

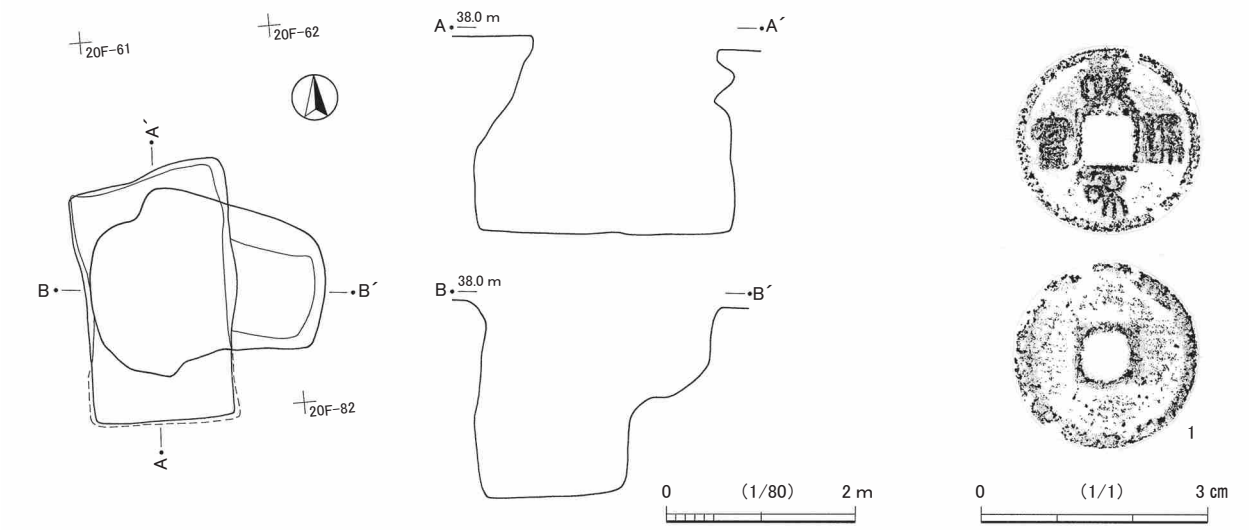
SK-052（第 98 図、図版７・95）

20F-96・97、21F-06・07 グリッドに所在する。地下室の平面形は長方形で、西側に径 210㎝ほどの円形状の入口部分を設けている。規模は、南北軸 278㎝、東西軸 170㎝であるが、入口部分を含めると東西軸は 330㎝となる。地下室の床面は平坦で、検出面から床面までの深さは 224㎝である。壁はほぼ垂直に立ち上がり、約 120㎝の高さから天井部に移行していく。天井部は残存しており、中央部で床面から 150㎝前後の高さを有している。入口部分には、方形状を呈する段が、床面から 90㎝上に設けられている。

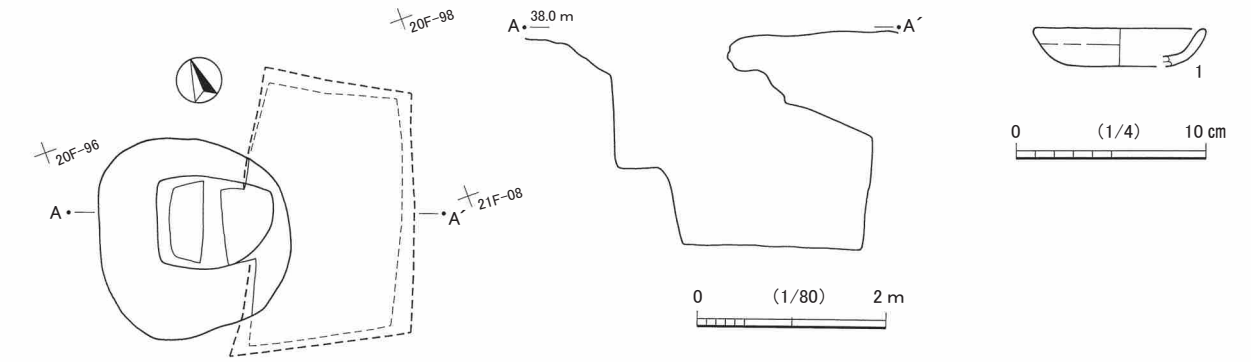
図示した遺物は１点である。第 98 図１は、覆土中層から出土したカワラケ小皿で、全体の 30％程度の遺存度である。ほかにも中・近世陶磁器及び土器が少量出土したが、図示していない。

SK-065（第 99 図、図版８・93・95）

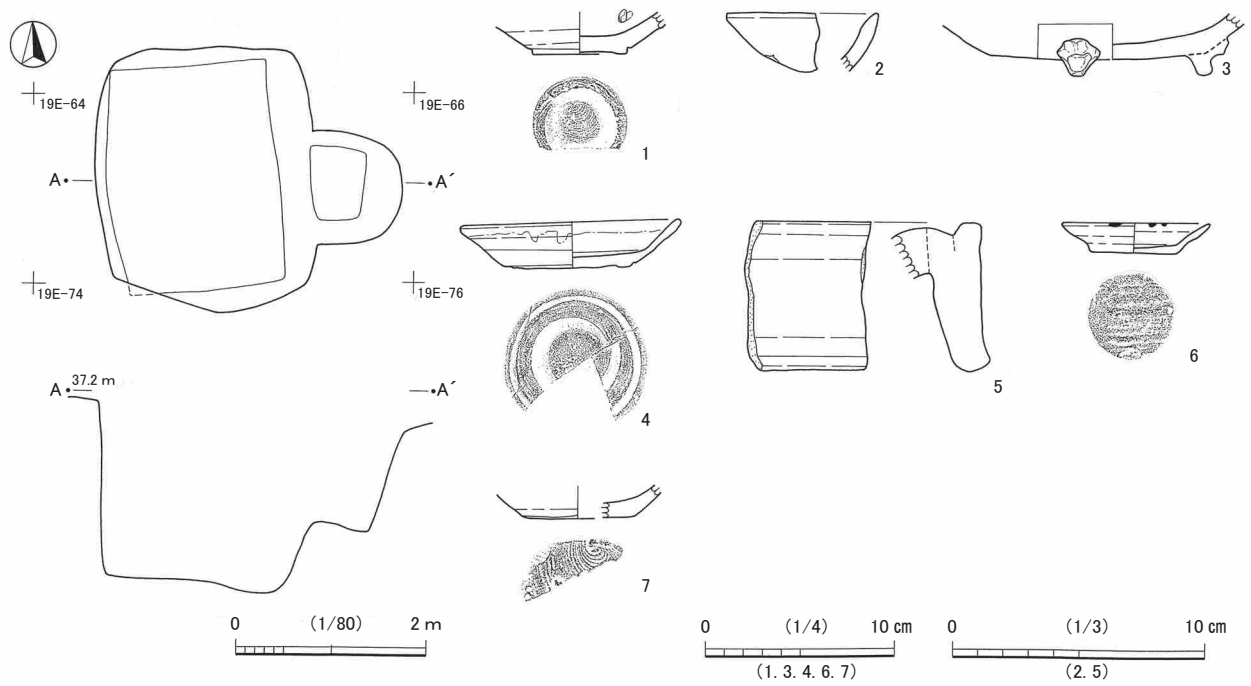
19E-54・55・64・65・74・75 グリッドに所在する。地下室の平面形は長方形で、東側に長軸 120㎝ほど、短軸 93㎝の隅丸方形状の入口部分を設けている。規模は、南北軸 280㎝、東西軸 230㎝であるが、入口部分を含めると東西軸は 323㎝となる。地下室の床面はほぼ平坦で、検出面から床面までの深さは 183㎝である。壁は垂直に近い角度で立ち上がる。天井部は遺構検出時に既に崩落しており、高さ等は不明である。入口部分には、床面から 57㎝上に段が設けられている。



第 97 図　SK-020 と出土遺物



第 98 図　SK-052 と出土遺物



第 99 図　SK-065 と出土遺物

図示した遺物は７点である。いずれも覆土中から出土したものである。第 99 図１～４は瀬戸・美濃製品で、１は灰釉平碗である。外面の釉は遺存部上端に僅かにあるのみで、削り出し高台及び胴下部から高台部分は露胎となっている。内面は全面的に釉が施され、重ね焼き痕が２か所認められる。古瀬戸後期様式Ⅲ期頃に位置づけられるものと考えられる。２も灰釉平碗で、遺存部の内外面全面に灰釉が施されている。古瀬戸後期様式Ⅰ～Ⅱ期頃に位置づけられるものと考えられる。３は灰釉盤類である。外面は露胎で脚が１か所認められる。内面は灰釉がハケ塗りされている。古瀬戸後期様式Ⅲ期頃の折縁深皿の可能性が考えられる。４は灰釉の縁釉小皿である。全体の 70％程度の遺存度である。外面底部は回転糸切り後、ヘラにより高台が削り出される。古瀬戸後期様式Ⅳ期新段階に位置づけられるものと考えられる。５は常滑甕で、８型式に比定されるものと考えられる。６はほぼ完形のカワラケ小皿である。口唇部に煤の付着が２か所認められる。７はカワラケ杯である。遺物はこれらのほか、アカニシの貝殻２点及びハマグリの貝殻１点も出土した。

SK-073（第 100 図、図版９・95・111・122）

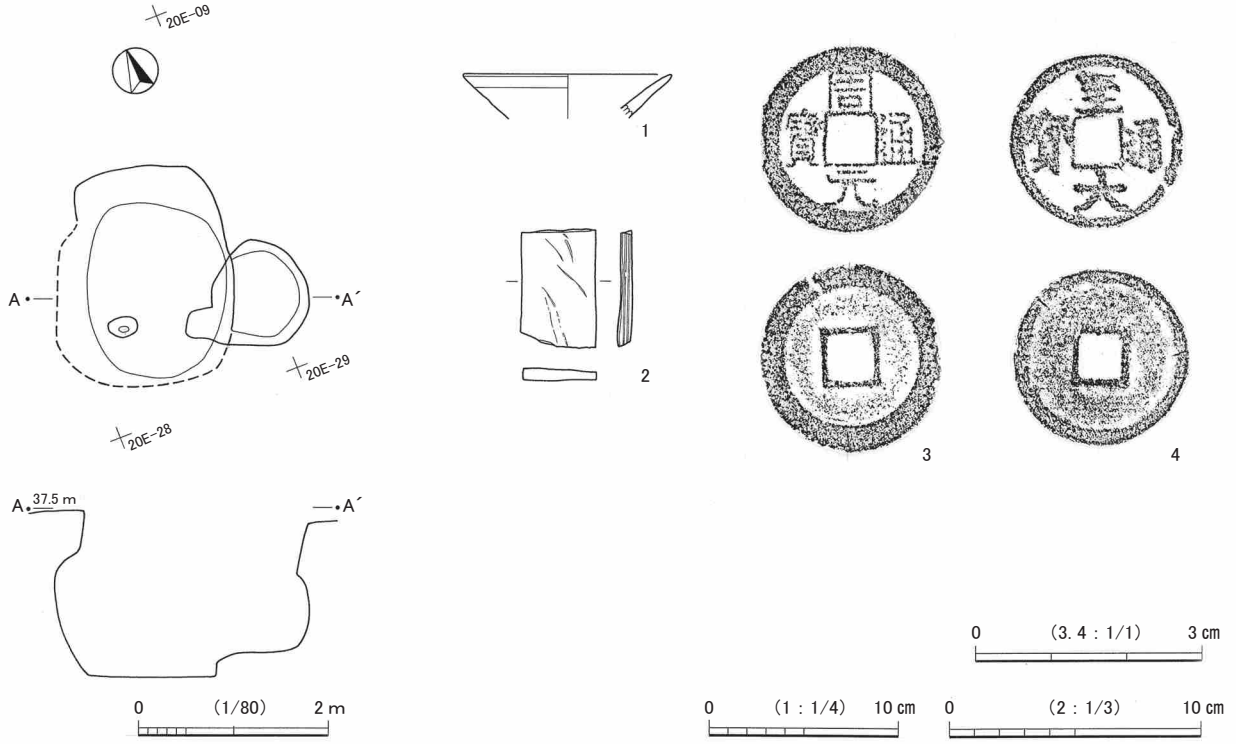
20E-08・17 ～ 19 グリッドに所在する。地下室の平面形は隅丸方形で、東側に径 112㎝ほどの円形状の入口部分を設けている。規模は、南北軸 230㎝、東西軸 190㎝であるが、入口部分を含めると東西軸は 270㎝となる。地下室の床面はほぼ平坦で、検出面から床面までの深さは 176㎝である。壁はオーバーハングして立ち上がり、緩やかに天井部に移行する。天井部は遺構検出時に既に崩落していたが、床面から天井部までの高さは 130㎝前後と推測される。入口部分には、現状で床面から 30㎝上に段がある。段の部分の壁はややオーバーハングしている。

図示した遺物は４点である。いずれも覆土中から出土したものである。第 100 図１はカワラケ杯である。２は厚さが 0.6㎝しかないが、砥石とみられる。上下端は欠損している。３・４は銭貨で、３は周通元寶である。背面は無文である。４は至大通寶である。遺物はこれらのほか、アカニシの貝殻１点も出土している。

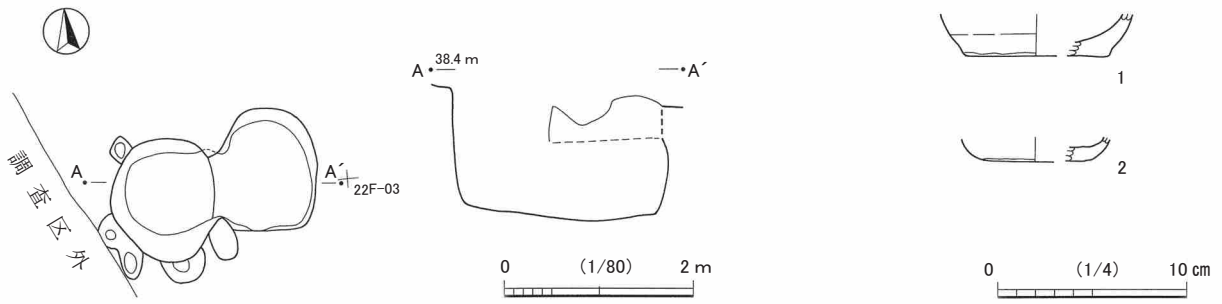
SK-082（第 101 図、図版９・95）

21F-91・92、22F-01・02 グリッドに所在する。地下室の平面形は隅丸方形状で、西側に径 108㎝の円形の入口部分を設けている。規模は、南北軸 135㎝、東西軸 125㎝であるが、入口部分を含めると東西軸は 218㎝となる。地下室の床面はほぼ平坦で、検出面から床面までの深さは 144㎝である。床面は中央部がやや凹むがほぼ平坦で、壁はややオーバーハングして立ち上がる。天井部は少し残存しており、壁から天井部へは緩やかに移行するとみられる。床面から天井部までの高さは、現状では 85㎝前後と推定される状況にあるが、天井の上部に落込みがあることから、本来の天井部はもっと高かった可能性が高い。入口部分は、床まで垂直方向の竪坑となっており段はない。入口部分の周囲にピットがいくつか検出されているが、検出面からの深さは 12㎝～ 46㎝と一定せず、平面形も統一性はない。遺構に伴うものかどうか、確定はできない。

図示した遺物は２点である。第 101 図１はカワラケ杯である。２はカワラケ小皿である。いずれも覆土中から出土したもので、器面は摩耗が著しい。



第 100 図　SK-073 と出土遺物

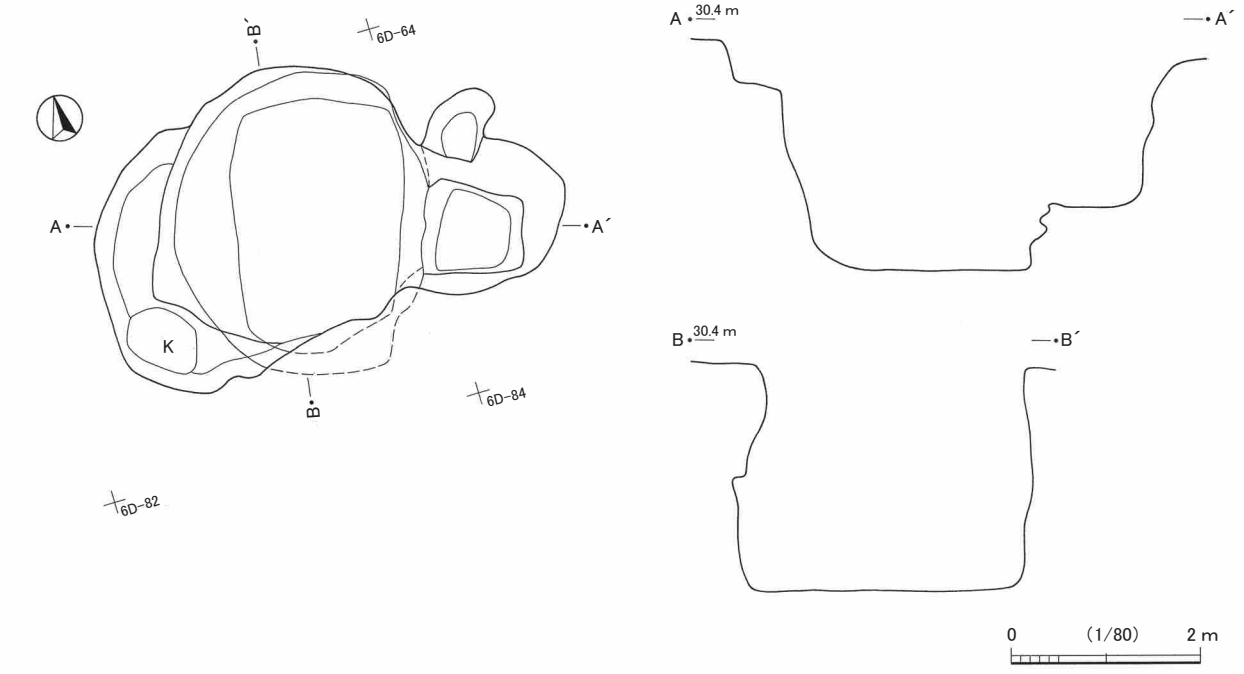


第 101 図　SK-082 と出土遺物

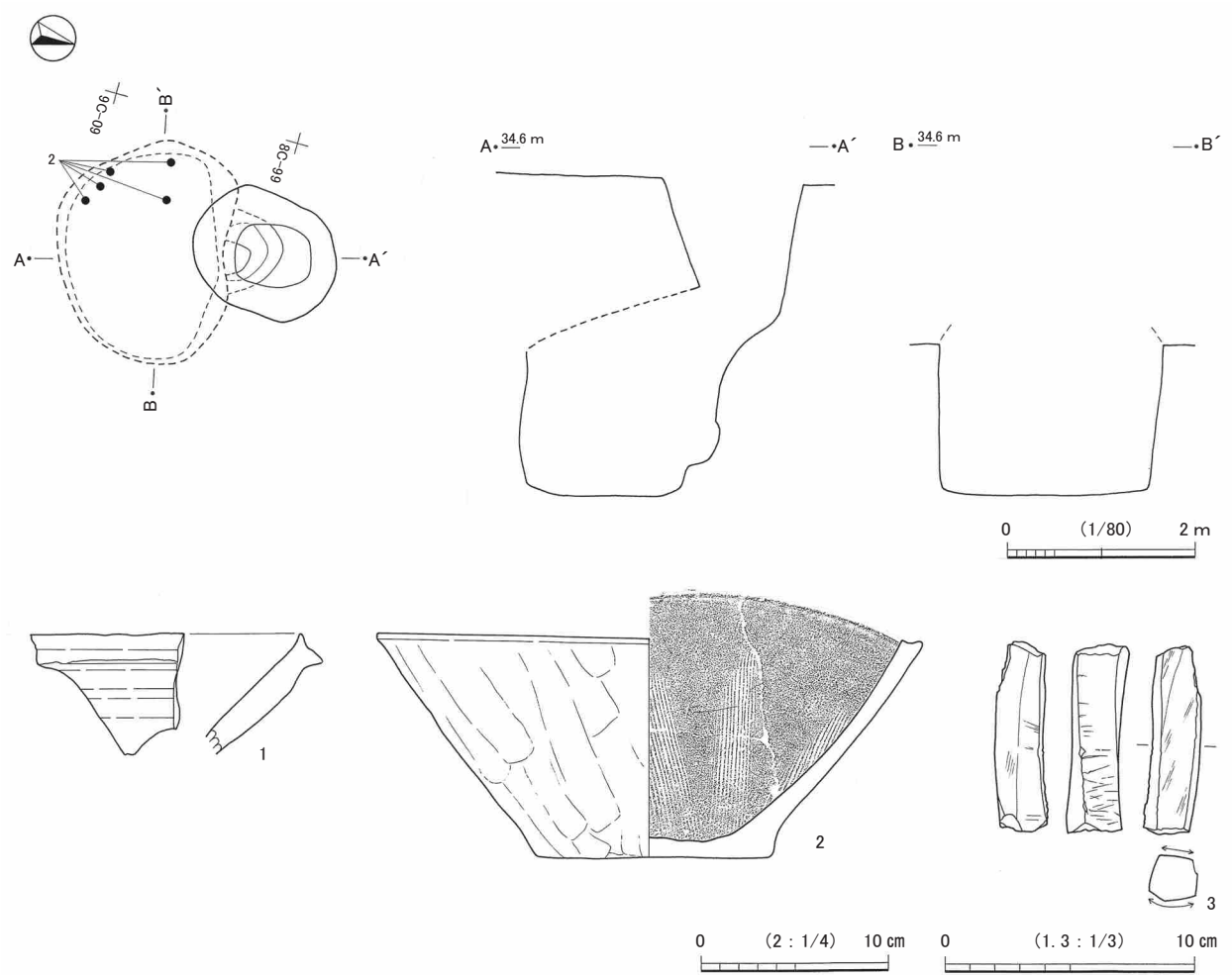
SK-095（第 102 図、図版 10）

6D-62 ～ 64・72 ～ 74 グリッドに所在する。地下室の形状は隅丸方形状で、東側に長軸 170㎝、短軸 150㎝ほどの隅丸方形状の入口部分を設けている。堀 SD-027 と土塁 SA-001 の内側にあたる部分に位置する地下式坑で、入口部分は溝状遺構 SD-028 の西側に隣接している。規模は、南北軸 320㎝、東西軸 350㎝であるが、入口部分を含めると東西軸は 500㎝ほどになる。地下室の床面はほぼ平坦で、検出面から床面までの深さは 245㎝である。壁は垂直に近い角度で立ち上がるが、ややオーバーハングするようにも見える。天井部は既に崩落しており、天井部の高さは明らかでない。入口部分には、床面から 67㎝上に段がある。

遺物は、混入品とみられる土器の小破片が少量出土したのみである。



第 102 図　SK-095



第 103 図　SK-116 と出土遺物

SK-116（第 103 図、図版 10・93・95・111）

8C-89・99、8D-90、9C-09 グリッドに所在する。地下室の形状は楕円形状で、北側に長径 155㎝、短径 130㎝の楕円形状の入口部分を設けている。規模は、南北軸 170㎝、東西軸 236㎝であるが、入口部分を含めると南北軸は 297㎝となる。地下室の床面は平坦で、検出面から床面までの深さは 330㎝である。壁はほぼ垂直に、ややオーバーハングするように立ち上がる。天井部が残存しており、崩落の危険があったため、調査は天井部を落として行った。床面からの天井中央部までの高さは 200㎝前後であったとみられる。入口部分はほぼなだらかな斜面状だが、地下室の床面から 40㎝上に壁面を抉った小さな段がある。また、その上部、地下室床面から 180㎝上にも、緩やかな段が認められる。当遺構は、SB-002 ～ 007 をはじめとする掘立柱建物跡群に隣接し、天井部の上には柵列 SA-002 も一部構築されている。それら遺構との関連も考えられるかもしれない。

図示した遺物は３点である。第 103 図１は常滑片口鉢である。２は、地下室奥のほぼ床面から壊れて出土した在地産擂鉢で、全体の 80％程度遺存している。底部外面はヘラナデで仕上げられており、底部の糸切り痕もヘラで丁寧にナデ消されている。内面の擂目は見込み部分にも１条認められる。胎土には砂粒や白色粒を多く含み、色調は内外面とも暗灰色を呈する。内面底部付近は、使用によるとみられる摩耗が著しい。時期は、古瀬戸後期様式Ⅳ期新段階併行と考えられる。３は砥石で、上下端は欠損している。遺物はほかに、近世以降陶磁器の小破片も少量出土した。

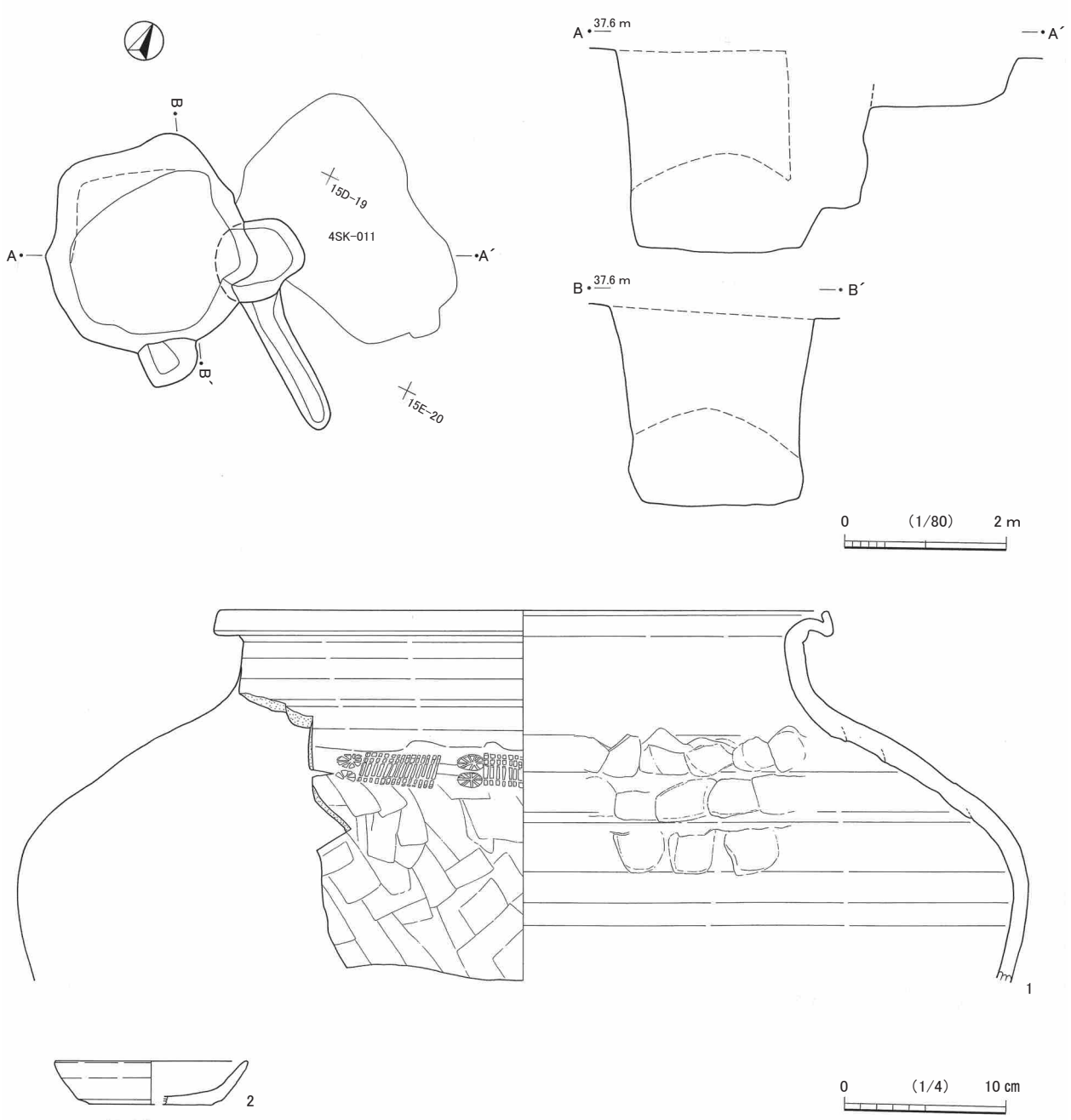
4SK-012（第 104 図、図版 12・95）

15D-17 ～ 19・27 ～ 29 グリッドに所在する。地下室の形状は隅丸方形状で、北東側に長軸 105㎝、短軸 90㎝ほどの隅丸方形状の入口部分を設けている。規模は、北東－南西軸 225㎝、北西－南東軸 255㎝であるが、入口部分を含めると北東－南西軸は 320㎝となる。地下室の床面はほぼ平坦で、検出面から床面までの深さは 249㎝である。壁はほぼ垂直に、ややオーバーハングするように立ち上がる。検出時、天井部は少し崩落していたが残存しており、調査は安全のため天井部を落として行った。床面からの天井中央部までの高さは 120㎝前後であったとみられる。入口部分には、床面から 50㎝上に段がある。遺構の南東辺に土坑状の張出しが、また入口部分にも溝状の張出しがあるが、当遺構に付随するものかどうかははっきりしない。検出面からの深さは、土坑状の部分は 63㎝、溝状の部分は 10㎝前後である。

図示した遺物は２点である。いずれも覆土中から出土したものである。第 104 図１は常滑の大甕で、復元口径は 37.6㎝、最大径は 62.6㎝ほどである。口唇は受け口状を呈する。外面肩部には、花文２個と格子文を１単位とする押印文がみられ、帯状に施されていたものとみられる。５型式に比定されるものと考えられる。２はカワラケ杯である。全体に器面が著しく摩耗している。ほかに、図示はしていないが、銭貨の小破片が出土している。銭貨は大破しており、銭種も不明である。また、近世以降陶磁器の小破片も少量出土した。

4SK-034（第 105 図、図版 13）

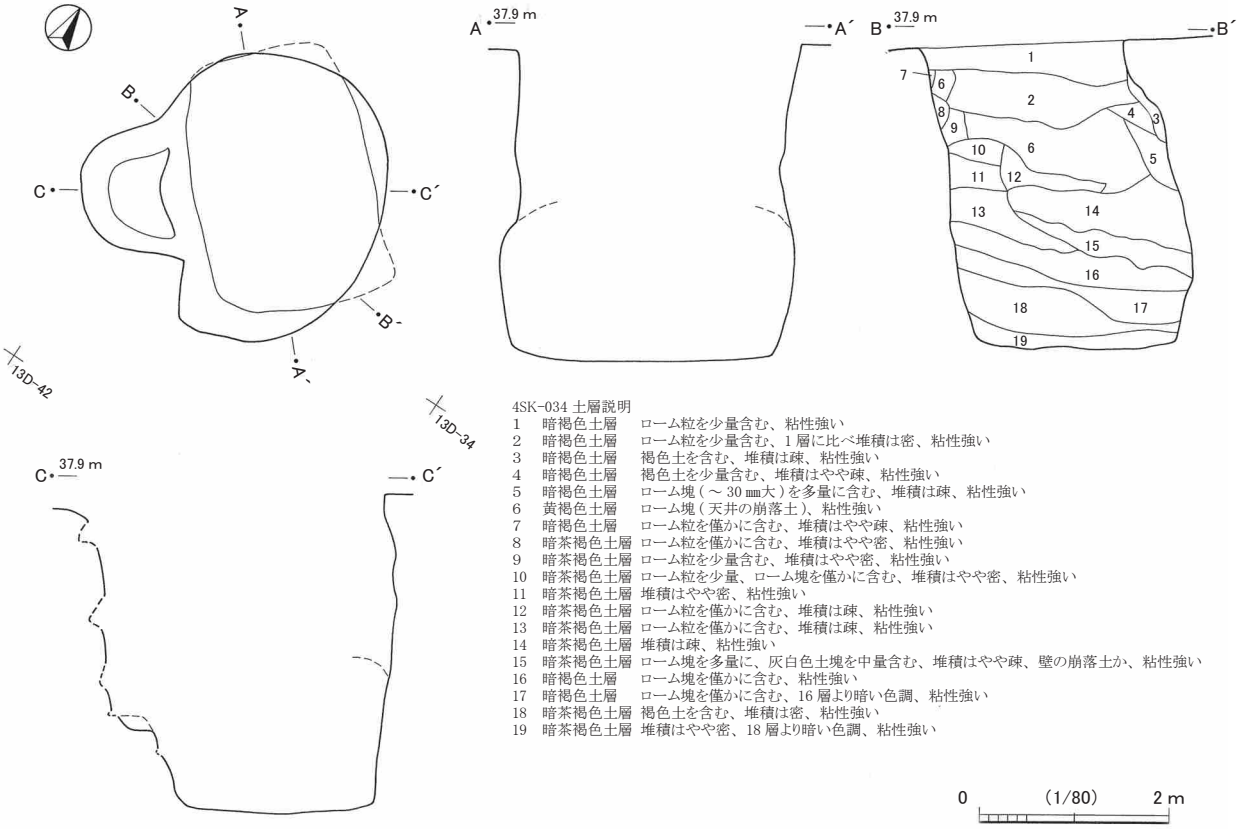
13D-12・21 ～ 23・31 ～ 33 グリッドに所在する。地下室の形状は隅丸方形状で、南西側に長軸 130㎝、短軸 100㎝ほどの隅丸方形状の入口部分を設けている。規模は、北西－南東軸 300㎝、北東－南西軸 215㎝であるが、入口部分を含めると北東－南西軸は 320㎝となる。地下室の床面はほぼ平坦で、検出面



第 104 図　4SK-012 と出土遺物

から床面までの深さは 338㎝である。壁はほぼ垂直に、ややオーバーハングするように立ち上がる。検出時、天井部は崩落していたが、床面からの天井中央部までの高さは 170㎝前後であったとみられる。入口部分には、床面から約 100㎝上に段があり、南西壁には足掛けと思われる奥行き 15㎝前後の凹みが 4 か所確認された。凹みから凹みの高さの間隔は 35㎝～ 80㎝ほどである。

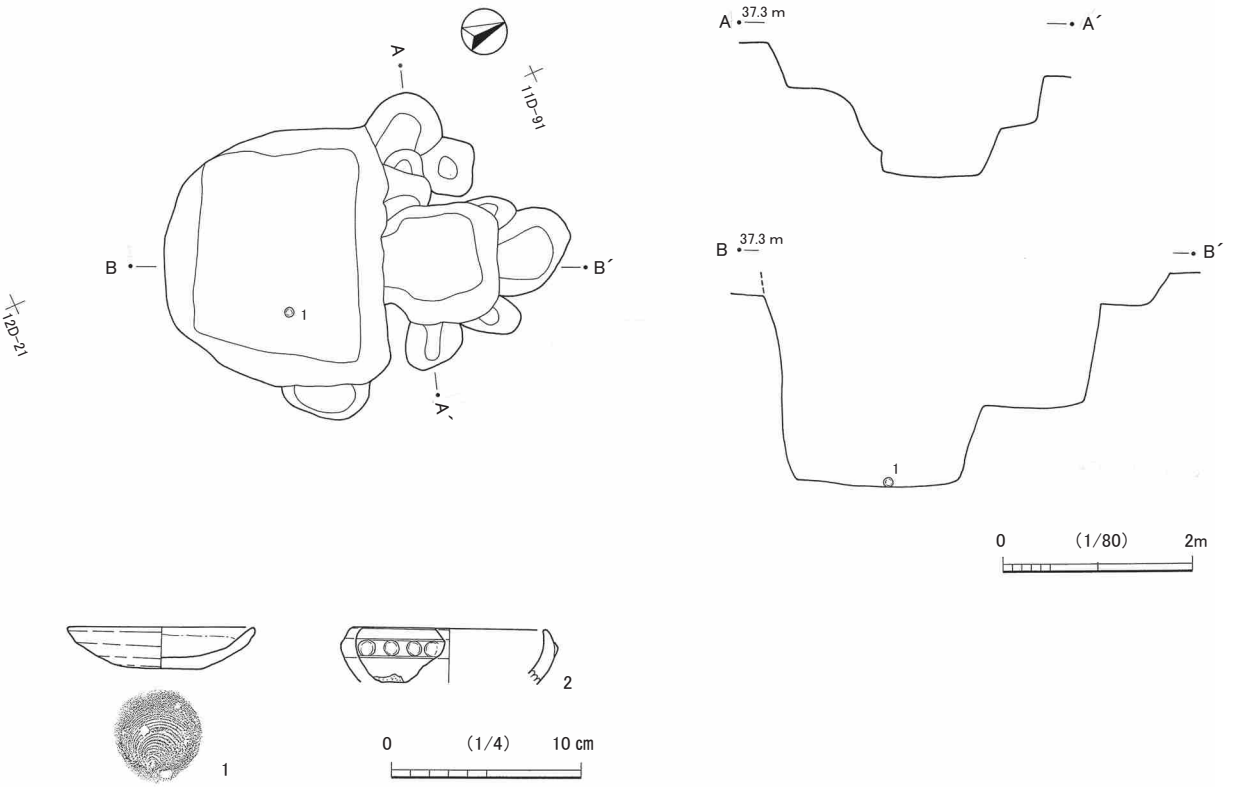
遺物は出土していない。



4SK-034 土層説明

1	暗褐色土層	ローム粒を少量含む、粘性強い
2	暗褐色土層	ローム粒を少量含む、1 層に比べ堆積は密、粘性強い
3	暗褐色土層	褐色土を含む、堆積は疎、粘性強い
4	暗褐色土層	褐色土を少量含む、堆積はやや疎、粘性強い
5	暗褐色土層	ローム塊（～ 30 ㎜大）を多量に含む、堆積は疎、粘性強い
6	黄褐色土層	ローム塊（天井の崩落土）、粘性強い
7	暗褐色土層	ローム粒を僅かに含む、堆積はやや疎、粘性強い
8	暗茶褐色土層	ローム粒を僅かに含む、堆積はやや密、粘性強い
9	暗茶褐色土層	ローム粒を少量含む、堆積はやや密、粘性強い
10	暗茶褐色土層	ローム粒を少量、ローム塊を僅かに含む、堆積はやや密、粘性強い
11	暗茶褐色土層	堆積はやや密、粘性強い
12	暗茶褐色土層	ローム粒を僅かに含む、堆積は疎、粘性強い
13	暗茶褐色土層	ローム粒を僅かに含む、堆積は疎、粘性強い
14	暗茶褐色土層	堆積は疎、粘性強い
15	暗茶褐色土層	ローム塊を多量に、灰白色土塊を中量含む、堆積はやや疎、壁の崩落土か、粘性強い
16	暗褐色土層	ローム塊を僅かに含む、粘性強い
17	暗褐色土層	ローム塊を僅かに含む、16 層より暗い色調、粘性強い
18	暗茶褐色土層	褐色土を含む、堆積は密、粘性強い
19	暗茶褐色土層	堆積はやや密、18 層より暗い色調、粘性強い

第 105 図　4SK-034



第 106 図　4SK-039 と出土遺物

4SK-039（第 106 図、図版 14・93・95）

11D-90 ～ 92、12D-00 ～ 02・10・11 グリッドに所在する。方形竪穴 4SK-038 と重複するが、新旧関係は、土層断面の観察により当遺構のほうが古い。地下室の形状は不整方形状で、北側に長軸 125㎝、短軸 120㎝の隅丸方形状の入口部分を設けている。入口部分の周囲には段状の張出し部分がいくつもみられる。地下室の規模は、東西軸 270㎝、南北軸 230㎝であるが、入口部分とその周囲の段状の部分を含めると、南北軸は 430㎝となる。地下室の床面はほぼ平坦で、検出面から床面までの深さは 230㎝である。壁はほぼ垂直に立ち上がる。検出時、天井部は崩落しており、天井の高さは明らかでない。

入口部分には、床面から 87㎝上に段があり、その北側 107㎝上には更に段状の部分がある。この部分の検出面からの深さは 36㎝である。入口部分の東西側にも段状の部分がいくつかあり、それぞれ検出面からの深さは 46㎝～ 117㎝で、地下室に近い南側ほど深い。

図示した遺物は２点である。第 106 図１は､地下室ほぼ中央の床面から正位で出土したほぼ完形の瀬戸・美濃縁釉小皿である。灰釉が施されるが、釉は灰白色を呈している。古瀬戸後期様式Ⅳ期に位置づけられるものと考えられる。２は覆土中から出土した瓦質土器である。口縁部下に押印による珠文が巡る。胎土は砂粒を少量含み淡黄褐色を呈するが、表面は内外面ともミガキが入り、黒色を呈している。

4SK-045（第 107 図、図版 14・95）

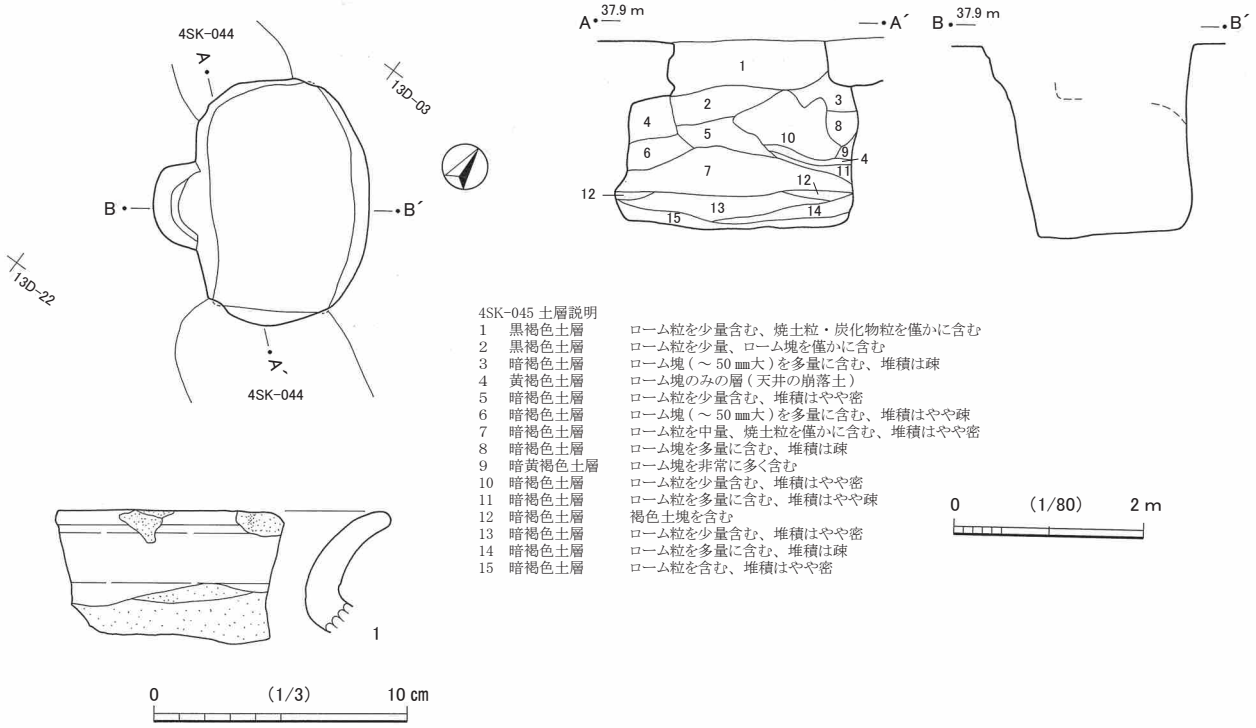
13D-02・03・12・13 グリッドに所在する。東側で方形竪穴 4SK-044 と重複するが、新旧関係は、土層断面の観察から当遺構のほうが古い。また、西側で方形竪穴 4SK-046 と接している。地下室の形状は不整方形状で、南西側に長軸 90㎝、短軸 45㎝ほどの隅丸方形状の入口部分を設けている。規模は、北西－南東軸 258㎝、北東－南西軸 180㎝であるが、入口部分を含めると北東－南西軸は 225㎝となる。地下室の床面はほぼ平坦で、検出面から床面までの深さは 202㎝である。壁はほぼ垂直に、ややオーバーハングするように立ち上がる。検出時、天井部は崩落していたが、床面からの天井中央部までの高さは 150㎝前後であったとみられる。入口部分には、床面から約 160㎝上に僅かな段がある。

図示した遺物は１点である。第 107 図１は地下室奥、東隅部の覆土下層から出土した東海系の甕で、渥美窯産の可能性がある。色調は暗灰色を呈する。内面頸部は光沢を帯びて摩耗しており、転用砥石として使用されているかもしれない。ほかには、図示していないが、覆土中から近世以降陶磁器及び土器の小破片が少量出土している。

4SK-055（第 108 図、図版 15・109・115・121）

10D-45・54 ～ 56・65・66 グリッドに所在する。地下室の形状は長方形状で、西側に長径 135㎝、短径 110㎝ほどの楕円形状の入口部分を設けている。規模は、南北軸、332㎝、東西軸 200㎝であるが、入口部分を含めると東西軸は 310㎝となる。地下室の床面はほぼ平坦であるが、南西部がやや低くなる。検出面から床面までの深さは 198㎝で、南西部は 208㎝である。壁はほぼ垂直に立ち上がる。検出時、天井部は一部残存しており、安全のために取り除いて調査した。床面からの天井の高さは 130㎝前後であったと推定される。入口部分に明確な段は認められないが、床面から緩やかに 40㎝ほど高くなっていく。

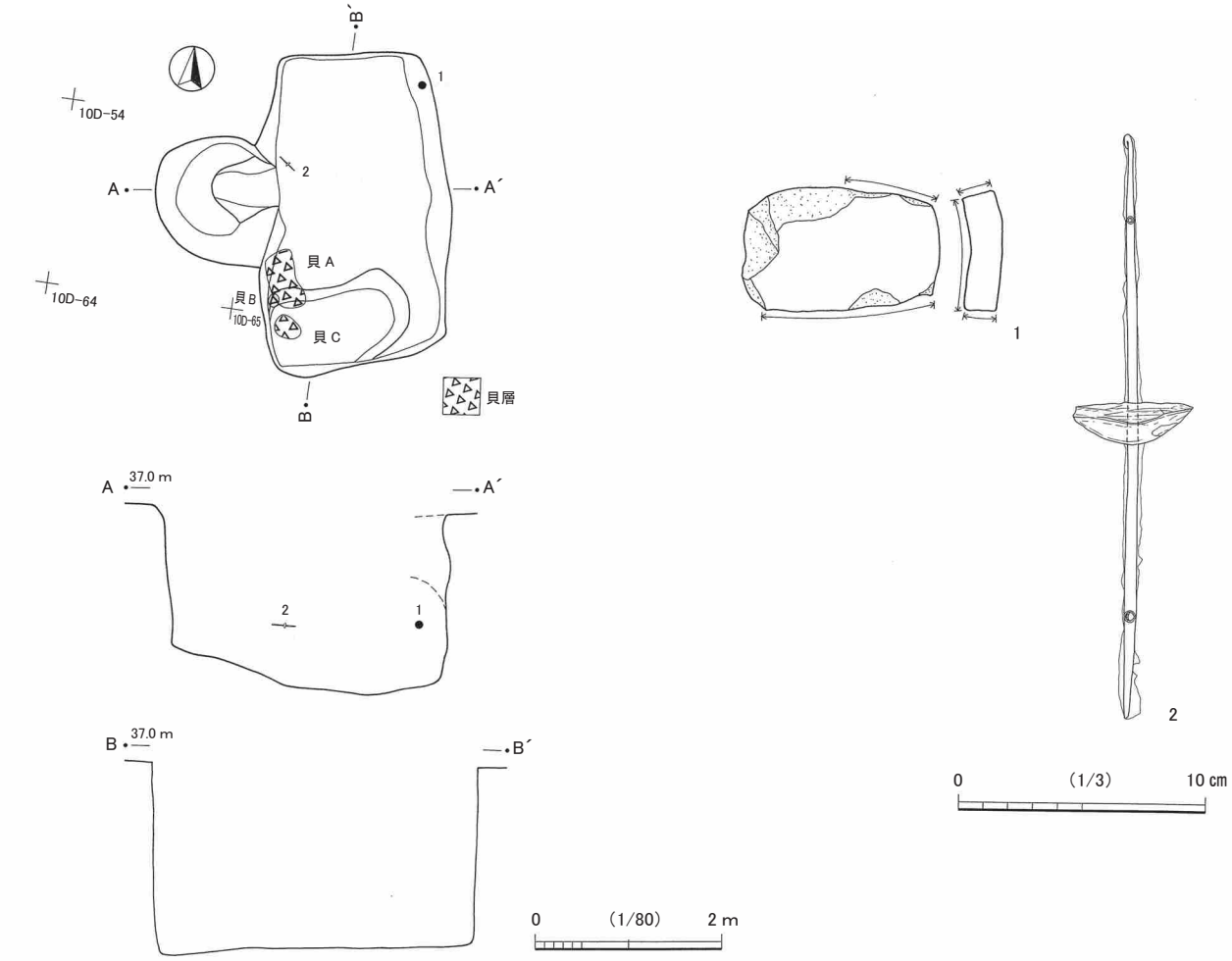
覆土中層には天井の崩落に伴うロームブロック主体の層があり、その直下からイボキサゴを主体とする貝層が検出された。貝層は３つのブロック状に存在しており、それぞれ「A」・「B」・「C」として全量を



4SK-045 土層説明

1	黒褐色土層	ローム粒を少量含む、焼土粒・炭化物粒を僅かに含む
2	黒褐色土層	ローム粒を少量、ローム塊を僅かに含む
3	暗褐色土層	ローム塊（～ 50 ㎜大）を多量に含む、堆積は疎
4	黄褐色土層	ローム塊のみの層（天井の崩落土）
5	暗褐色土層	ローム粒を少量含む、堆積はやや密
6	暗褐色土層	ローム塊（～ 50 ㎜大）を多量に含む、堆積はやや疎
7	暗褐色土層	ローム粒を中量、焼土粒を僅かに含む、堆積はやや密
8	暗褐色土層	ローム塊を多量に含む、堆積は疎
9	暗黄褐色土層	ローム塊を非常に多く含む
10	暗褐色土層	ローム粒を少量含む、堆積はやや密
11	暗褐色土層	ローム粒を多量に含む、堆積はやや疎
12	暗褐色土層	褐色土塊を含む
13	暗褐色土層	ローム粒を少量含む、堆積はやや密
14	暗褐色土層	ローム粒を多量に含む、堆積は疎
15	暗褐色土層	ローム粒を含む、堆積はやや密

第 107 図　4SK-045 と出土遺物



第 108 図　4SK-055 と出土遺物

サンプリングした。貝層中からは、貝類のほか、オオムギなどの植物遺体も検出された（付章参照）。

図示した遺物は２点である。いずれも覆土中から出土した。第 108 図１は常滑甕の胴部破片の転用砥石で、図の上下破断面を使用している。外面には自然釉がかかっている。２はほぼ完形の紡錘車である。軸は鉄製で、現状では先端は錆に覆われているが、一方が鍵状に曲げてあることがＸ線写真から明らかである。また、折れ面の観察から、薄く細長い鉄板を巻いて中空に造っていることがわかる。軸の太さは中央付近が最も太く 0.4㎝である。円盤は木製とみられ、平面形は長軸 4.8㎝、短軸 3.2㎝のアーモンド形を呈し、木目は長軸方向に通っている。厚さは 1.5㎝である。遺物はこれらのほか、図示していないが中・近世以降陶磁器及び土器の小破片が少量出土した。

4SK-085（第 109 図、図版 16・95・116）

12C-56・57・66・67 グリッドに所在する。地下室の形状は不整隅丸方形状で、東側に長径 145㎝、短径 125㎝ほどの楕円形状の入口部分を設けている。規模は、北東－南西軸 235㎝、北西－南東軸 165㎝ほどであるが、入口部分を含めると北西－南東軸は 310㎝ほどとなる。更に、北西辺に張出し部がみられるが、これを含めると、355㎝ほどとなる。張出し部分の機能は明らかでないが、検出面からの深さは 81㎝、床面からの高さは 170㎝ほどを測る。地下室の床面はほぼ平坦で、検出面からの深さは 266㎝である。壁はほぼ垂直に立ち上がる。検出時、天井部は崩落しており、床面から天井部までの高さは明らかでない。入口部分には床面から 108㎝ほど上に段がある。

図示した遺物は４点である。全て覆土中から出土したものである。第 109 図１はカワラケ杯である。２はカワラケ小皿である。３は鉄釘である。４は鉄製品の破片で、銭のようだが、肉眼でもＸ線写真でも文字は確認できない。復元径は 2.4㎝である。遺物はほかにも、中・近世以降陶磁器の小破片が少量出土している。

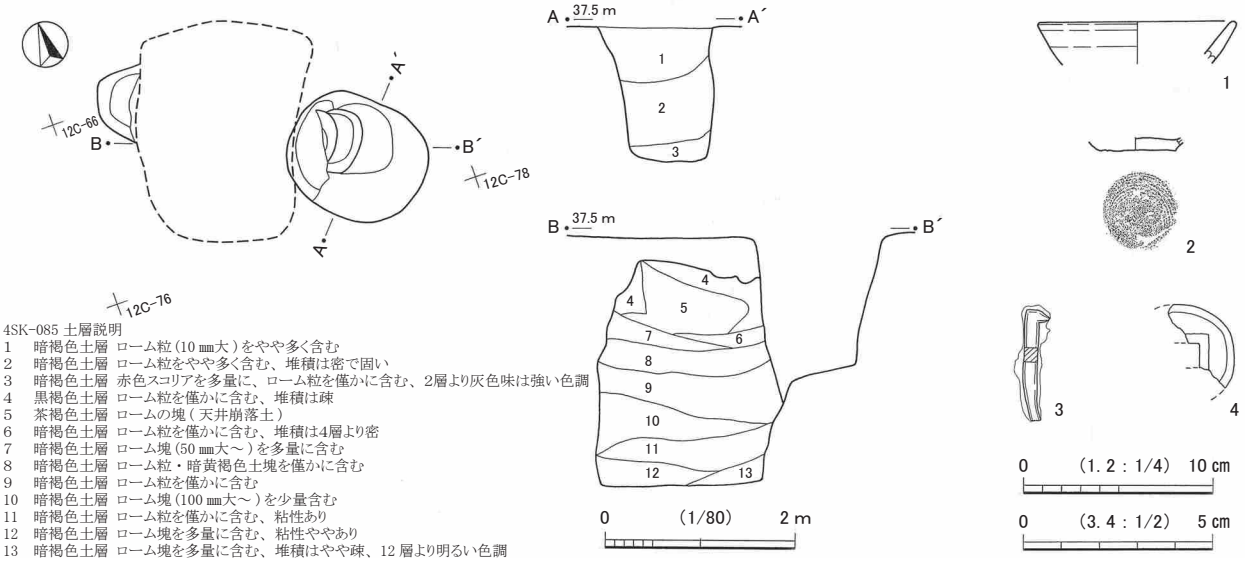
4SK-086（第 110 図、図版 16）

12C-75・76 グリッドに所在する。地下室部分は調査区外となり、入口部分のみ調査できた遺構である。地下室の形状や規模等は明らかでないが、近接する地下式坑 4SK-085 と同様、入口部分が東側に設けられた地下式坑である。入口部分の平面形は、径 105㎝の円形である。検出面から 137㎝の深さに段が設けられている。

遺物は出土していない。

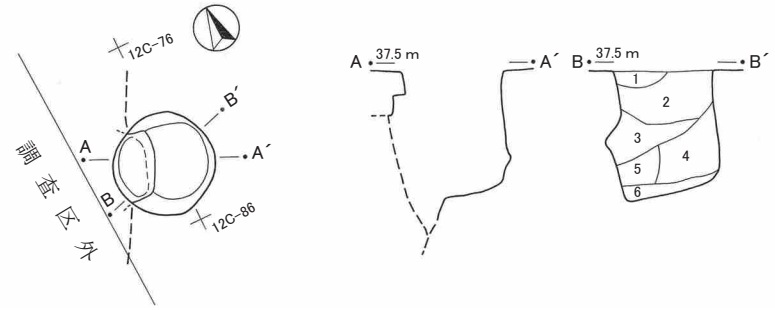
4SK-087（第 111 図、図版 17・115）

12C-95 ～ 97、13C-05 ～ 07 グリッドに所在する。地下式坑 4SK-088 の西側に隣接しているほか、方形竪穴 4SK-106 なども隣接している。地下室の形状は長方形で、南側に長軸 115㎝、短軸 95㎝ほどの隅丸方形状の入口部分を設けている。規模は、東西軸 310㎝、南北軸 225㎝であるが、入口部分を含めると南北軸は 320㎝ほどとなる。地下室の床面はやや凹凸があるがほぼ平坦で、検出面からの深さは 281㎝である。壁はややオーバーハングする部分もあるが、ほぼ垂直に立ち上がる。検出時、天井部は一部残存しており、床面から天井部中央までの高さは 150㎝前後と推定される。入口部分には床面から 109㎝ほど上に段があり、南壁には、段から 53㎝上に、幅 20㎝、奥行き５㎝ほどの足掛けとみられる凹みが１か所認



4SK-085 土層説明
1　暗褐色土層 ローム粒(10 ㎜大)をやや多く含む
2　暗褐色土層 ローム粒をやや多く含む、堆積は密で固い
3　暗褐色土層 赤色スコリアを多量に、ローム粒を僅かに含む、2層より灰色味は強い色調
4　黒褐色土層 ローム粒を僅かに含む、堆積は疎
5　茶褐色土層 ロームの塊(天井崩落土)
6　暗褐色土層 ローム粒を僅かに含む、堆積は4層より密
7　暗褐色土層 ローム塊(50 ㎜大～)を多量に含む
8　暗褐色土層 ローム粒・暗黄褐色土塊を僅かに含む
9　暗褐色土層 ローム粒を僅かに含む
10　暗褐色土層 ローム塊(100 ㎜大～)を少量含む
11　暗褐色土層 ローム粒を僅かに含む、粘性あり
12　暗褐色土層 ローム塊を多量に含む、粘性ややあり
13　暗褐色土層 ローム塊を多量に含む、堆積はやや疎、12 層より明るい色調

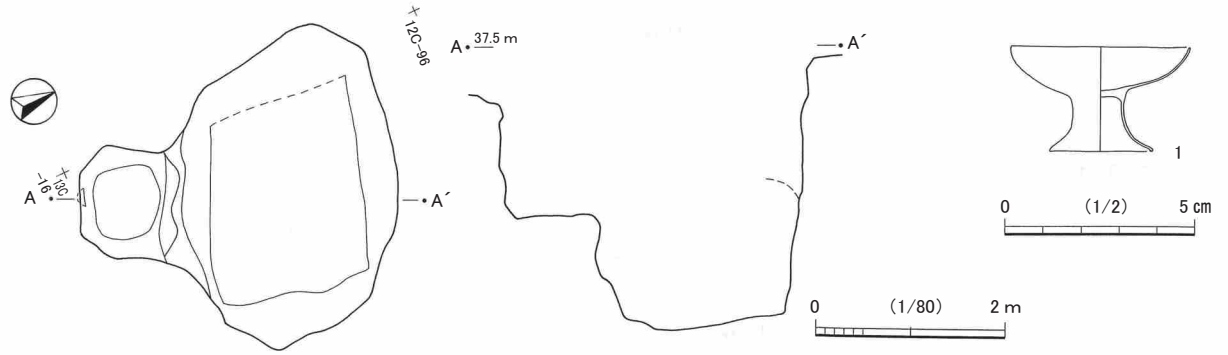
第 109 図　4SK-085 と出土遺物



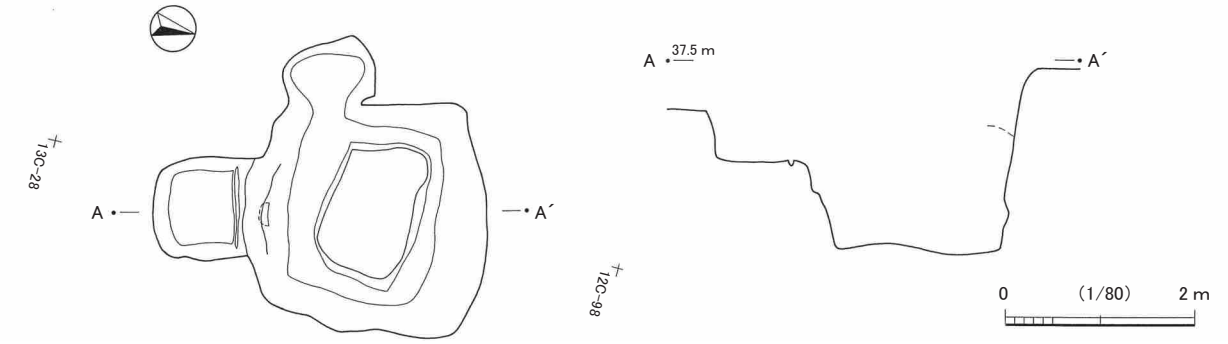
4SK-086 土層説明
1　灰褐色土層 灰色粘土を多量に含む
2　暗褐色土層 ローム粒(10 ㎜大)をやや多く含む
3　暗褐色土層 山砂を中量、ローム粒・灰白色粘土粒を僅かに含む、堆積はやや疎
4　灰褐色土層 灰白色粘土塊を多量に含む、粘性強い
5　暗褐色土層 ローム粒・ローム塊を僅かに含む、粘性あり
6　暗褐色土層 茶褐色土塊を多量に含む、粘性強い

0 (1/80) 2 m

第 110 図　4SK-086



第 111 図　4SK-087 と出土遺物



第 112 図　4SK-088

められる。

図示した遺物は1点である。第111図1は、銅製の仏飯器である。高杯状の形状で、口縁部・裾部ともに30％程度を欠損する。器厚はごく薄く、1㎜足らずで非常に脆い。遺物はこのほかには、種類等不明だが、貝殻が1点出土したのみである。

4SK-088（第112図、図版17）

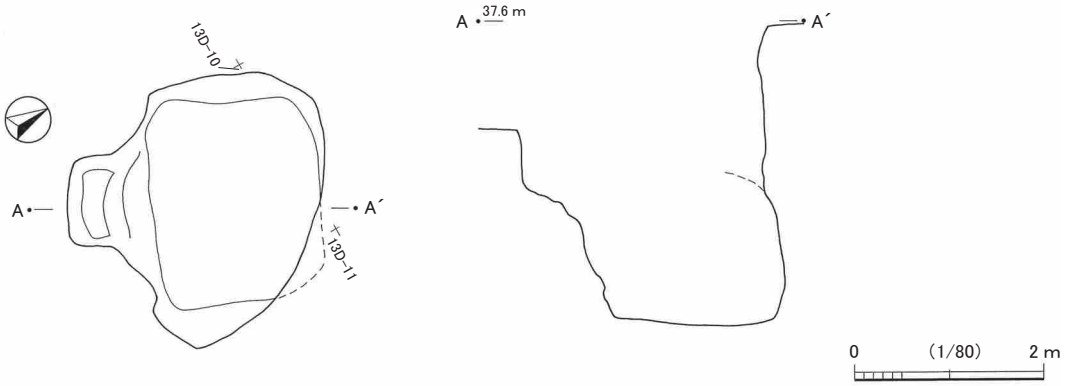
12C-97・98、13C-07・08・17・18グリッドに所在する。地下式坑4SK-087の東側に隣接し、4SK-108・109・110など多数の方形竪穴が南側～東側に接し或いは重複している。重複する遺構との新旧関係は、土層断面の観察から当遺構が方形竪穴4SK-109より古いことが明らかであるほかは、はっきりしない。地下室の形状は不整方形であるが、南西隅に奥行き60㎝ほど、不整形に造り出された部分がある。長軸105㎝、短軸95㎝の長方形を呈する入口部分は南側に設けられている。遺構の規模は、南北軸250㎝、東西軸240㎝であるが、造出し部分を含めると東西軸は300㎝ほど、入口部分を含めると南北軸は345㎝ほどとなる。地下室の床面は、20㎝～40㎝の幅で壁際が中央部に比べて数㎝ほど低くなっている。検出面から床面中央部までの深さは191㎝である。壁はほぼ垂直に立ち上がる。検出時、天井部は崩落していたが、床面から天井部中央部までの高さは140㎝前後と推測される。入口部分には、床面から94㎝上に段があり、地下室側の縁に沿って幅・深さともに5㎝ほどの溝が掘られている。また、床面から58㎝上の南壁面には、幅25㎝、奥行き10㎝ほどの足掛けとみられる凹みが1か所認められる。

遺物は出土していない。

4SK-091（第113図、巻頭図版7、図版17）

13D-00・10・11・20グリッドに所在する。方形竪穴4SK-114・115・117及び土坑4SK-113と重複する。地下室の形状は隅丸方形で、南側に長軸110㎝、短軸75㎝ほどの隅丸方形状の入口部分を設けている。規模は東西軸278㎝、南北軸205㎝ほどであるが、入口部分を含めると南北軸は280㎝ほどとなる。地下室の床面はほぼ平坦で、検出面からの深さは315㎝である。壁はややオーバーハングしながら立ち上がる。検出時、天井部は一部残存しており、床面から天井部中央までの高さは160㎝前後と推測される。入口部分には床面から130㎝ほど上に段がある。

遺物は出土していない。



第113図　4SK-091

4SK-092（第 114 ～ 116 図、図版 17・93・96・109・110・111・115・116・121・122）

13D-40・41・50・51 グリッドに所在する。地下室の形状はやや不整な隅丸方形で、南側に長径 115㎝、短径 95㎝の楕円形の入口部分が設けられている。規模は、東西軸 257㎝、南北軸 205㎝であるが、入口部分を含めると南北軸は 320㎝ほどとなる。地下室の床面はほぼ平坦で、検出面からの深さは 244㎝である。壁はほぼ垂直に立ち上がる。検出時、天井部は崩落しており、床面から天井部までの高さは不明である。入口部分には床面から 170㎝ほど上に段がある。入口部分の南側の壁には、足掛けと思われる幅 10㎝前後、奥行き 10㎝～ 25㎝程度の凹みが、床面から 60㎝～ 88㎝の高さに 6 か所確認された。

当遺構の埋没状況については、土層断面の観察から、まず入口方向から土が地下室に入り、天井部が落ち、入口部分が埋まった様子が伺えるが、入口部分を中心にイボキサゴを主体とするブロック状の貝層も検出された。貝層はそれぞれ「A」～「G」として全量をサンプリングした。貝層からは、貝殻のほか、ニシン科・スズキ属・タイ科・アジ科などの海産魚骨や、ネズミ・ヘビ類の骨、イネ・コムギ・ウメなどの植物遺体が確認された（付章参照）。また、入口部分の覆土上部からはほぼ完形のカワラケ杯 2 点（第 114 図 9 ・13）と重なった状態のほぼ完形のカワラケ小皿 2 点（第 115 図 28・30）がそれぞれほぼ正位で並んで出土した（図版 17）。入口部分を埋め戻してカワラケを置いた状況が考えられよう。

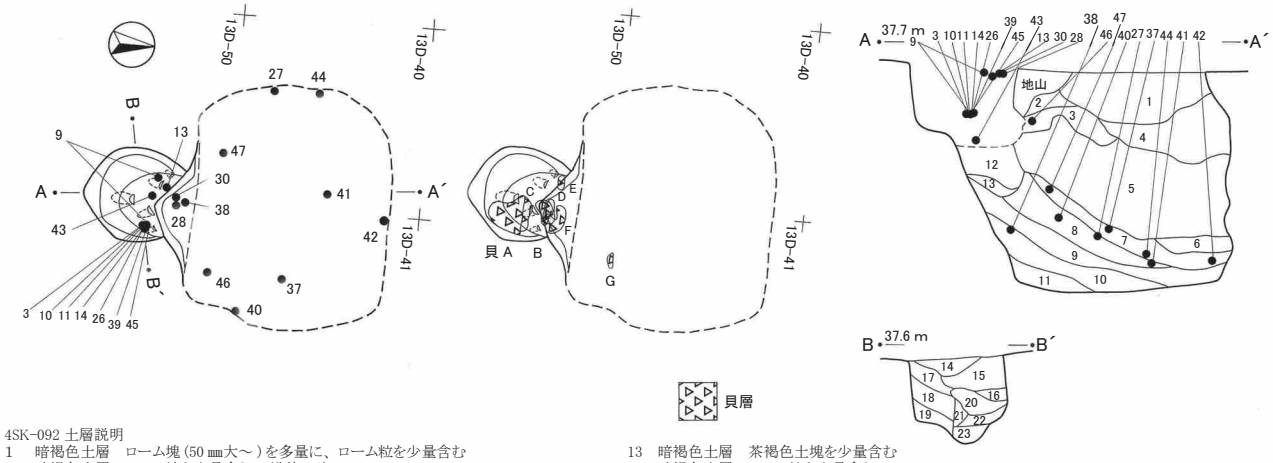
当遺構の覆土からは遺物が多数出土した。図示した遺物は 47 点である。図示したもののうち、入口部分の覆土から出土したのは先述のカワラケ 4 点ほか、第 114 図 3 ・10・11・14、第 115 図 26・39、第 116 図 43・45 である。そして、地下室の覆土上層から出土したものは第 116 図 46、下層から出土したものは第 115 図 27・37・38・40・41、第 116 図 42・44・47 である。そのほかは一括で取り上げられたものである。カワラケはほとんど入口部分から出土しており、金属製品は地下室部分から出土している傾向がみられる。

第 114 図 1 は青磁の鉢である。遺存部外面上端付近に陰刻文が観察されるが、はっきりせず図化できなかった。

2 ～ 6 は瀬戸・美濃製品である。 2 は縁釉小皿である。灰釉が施される。古瀬戸後期様式Ⅳ期に位置づけられるものと考えられる。3 は丸碗と考えられる。内外面とも灰釉が施釉されている。4 は折縁深皿で、内外面に灰釉が施釉されている。古瀬戸後期様式Ⅳ期古段階に位置づけられるものと考えられる。 5 ・ 6 は擂鉢である。 5 は古瀬戸後期様式Ⅳ期新段階に位置づけられるものと考えられる。 6 の擂目は、遺存部下端にごく僅かに遺存しているのみである。

7 は常滑甕の底部である。

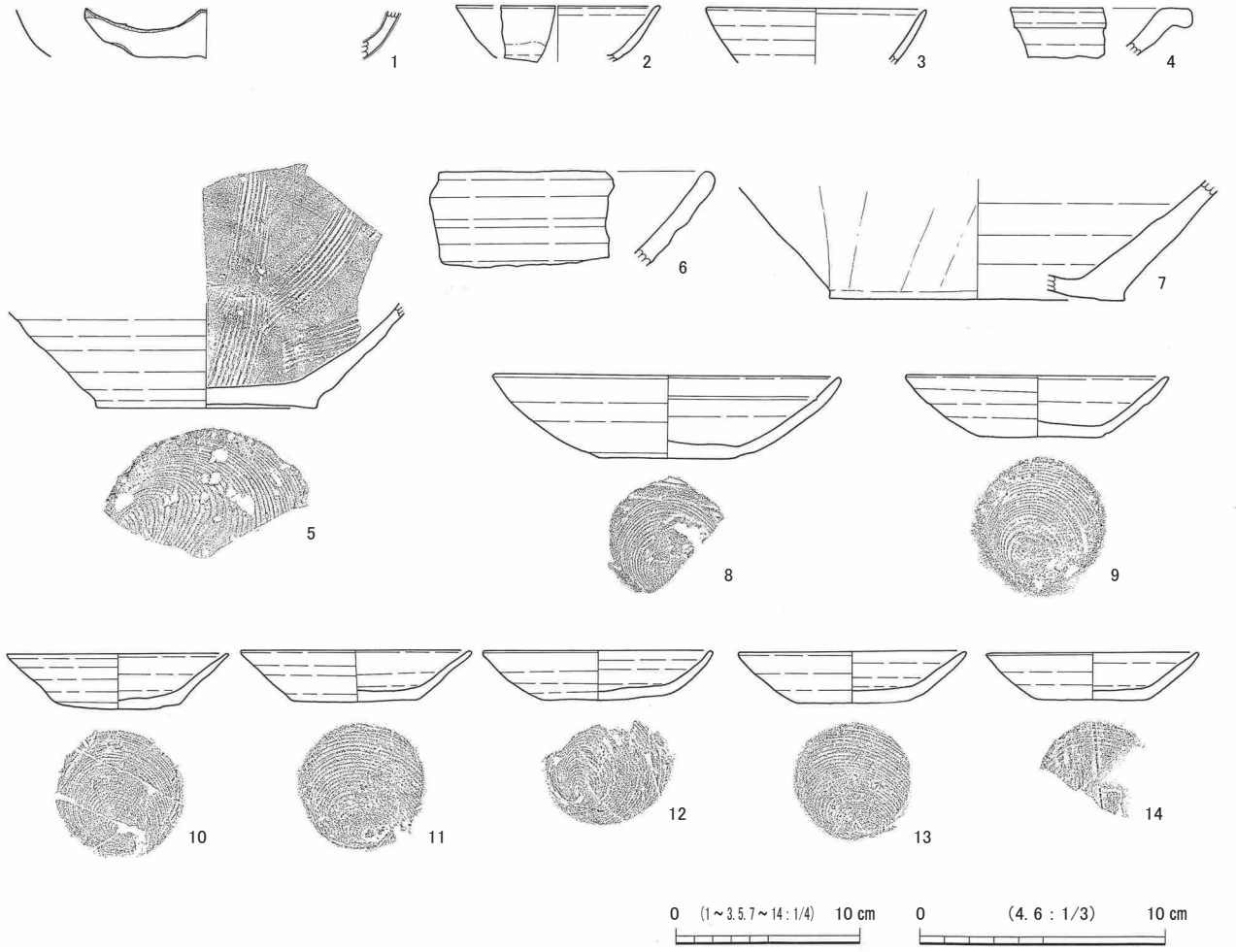
8 ～第 115 図 33 はカワラケで、 8 ～第 115 図 25 は杯、26 ～ 33 は小皿である。カワラケは全て胎土に砂粒と白色針状物質を含んでいる。 8 は、接合しない同一個体からの復元であるが、口径が 19㎝ほどに復元される。 9 は全体の 70％程度の遺存度である。10 は、底部は完存するが、口縁部はごく僅かしか遺存していない。やや丸底気味である。11・12 は一括で破片として取り上げられたが、接合して全体の 70％程度まで復元されたものである。13 はほぼ完形である。当遺構から出土したカワラケはほとんど全て暗茶褐色を呈しているが、11 ～ 13 は暗褐色を呈している。14 は全体の 25％程度の遺存度である。26 は、全体の 70％程度の遺存度で、遺存する口唇部に 1 か所、煤の付着が認められる。27 は完形である。28 はほぼ完形で暗黄褐色を呈するが、外面は全体的に煤けてほぼ黒色を呈している。29 もほぼ完形で、内外面全面的に煤けたように黒褐色を呈しており、内面見込み部分には磨滅がみられる。30 はほぼ完形で、



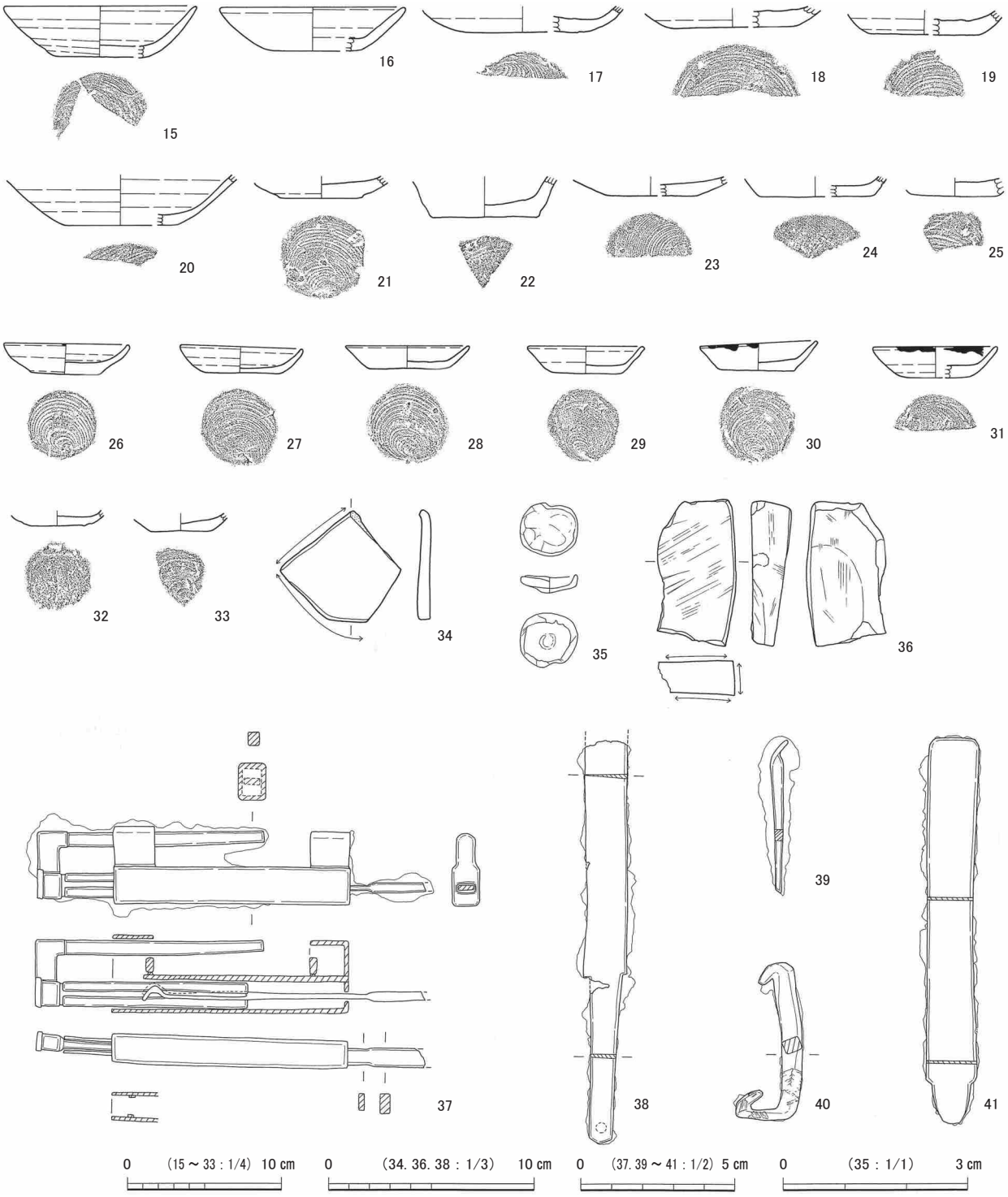
4SK-092 土層説明

1　暗褐色土層　ローム塊（50 ㎜大～）を多量に、ローム粒を少量含む
2　暗褐色土層　ローム塊を少量含む、堆積は疎
3　暗褐色土層　灰白色粘土粒を少量、ローム粒を僅かに含む
4　暗褐色土層　ローム粒をやや多く含む
5　黄褐色土層　ロームの堆積層（天井崩落土）
6　黒褐色土層　ローム粒を僅かに含む、堆積はやや密
7　黒褐色土層　灰白色粘土粒をやや多く、ローム粒を少量含む、堆積は疎
8　黒褐色土層　ローム粒・茶褐色土塊を少量、灰白色粘土粒を若干含む、堆積はやや密
9　黒褐色土層　ローム粒を少量含む、堆積はやや密
10　黒褐色土層　茶褐色土塊・灰白色粘土粒を多量に含む、堆積は疎
11　黒褐色土層　茶褐色土塊を多量に、ローム粒を若干含む
12　暗褐色土層　茶褐色土塊を多量に、ローム粒・灰白色粘土粒を若干含む
13　暗褐色土層　茶褐色土塊を少量含む
14　暗褐色土層　ローム粒を少量含む
15　暗褐色土層　ローム粒を含む
16　暗褐色土層　ローム粒を僅かに含む、堆積はやや疎
17　暗褐色土層　ローム粒を僅かに含む、堆積はやや疎
18　暗褐色土層　ローム粒を僅かに含む、堆積はやや密
19　暗褐色土層　ローム粒・灰白色粘土塊を僅かに含む
20　混貝土層　ハマグリ・ツメタガイ・アサリ・マテガイ・サルボオ・イボキサゴ等含む
21　暗褐色土層　ローム粒を僅かに含む、堆積はやや疎
22　暗褐色土層　貝を少量含む、堆積はやや疎
23　暗褐色土層　灰白色粘土塊を少量含む、やや粘性がある

0　(1/80)　2 m



第 114 図　4SK-092 と出土遺物（1）

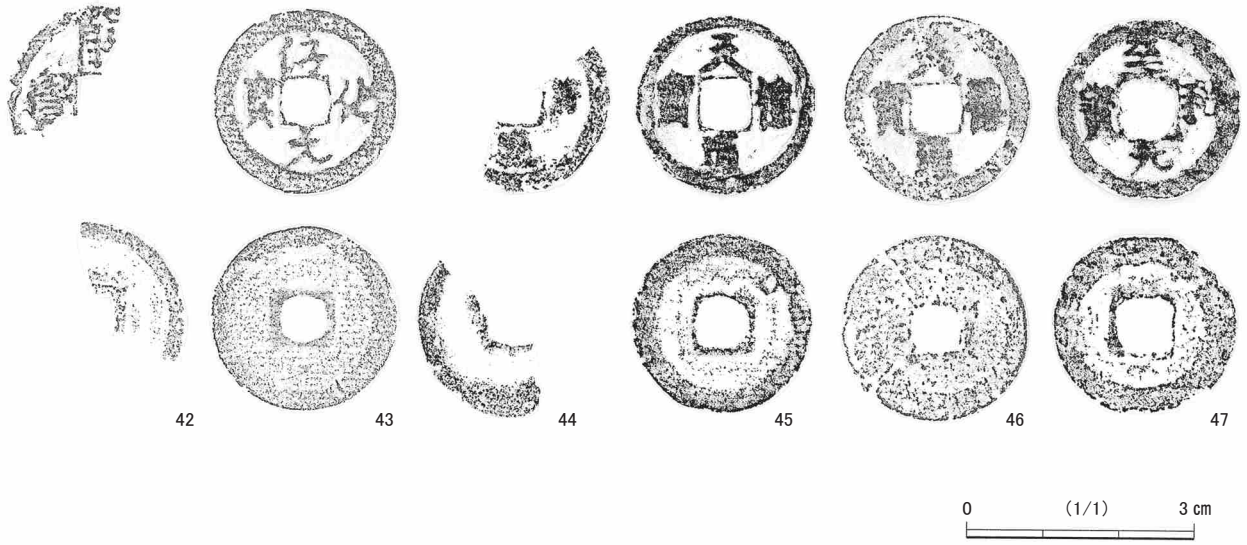


第 115 図　4SK-092 と出土遺物（2）

口唇部ほぼ全周に煤が付着している。31 は全体の 25％程度の遺存度であるが、遺存している口唇部全体には煤が付着している。

34 は須恵器甕の転用砥石で、破断面を使用している。内外面も摩耗しており、使用されている可能性がある。

35 は貝サンプル中から出土し、篩によって検出した土製品である。形状は器状で、大きさは口径・底



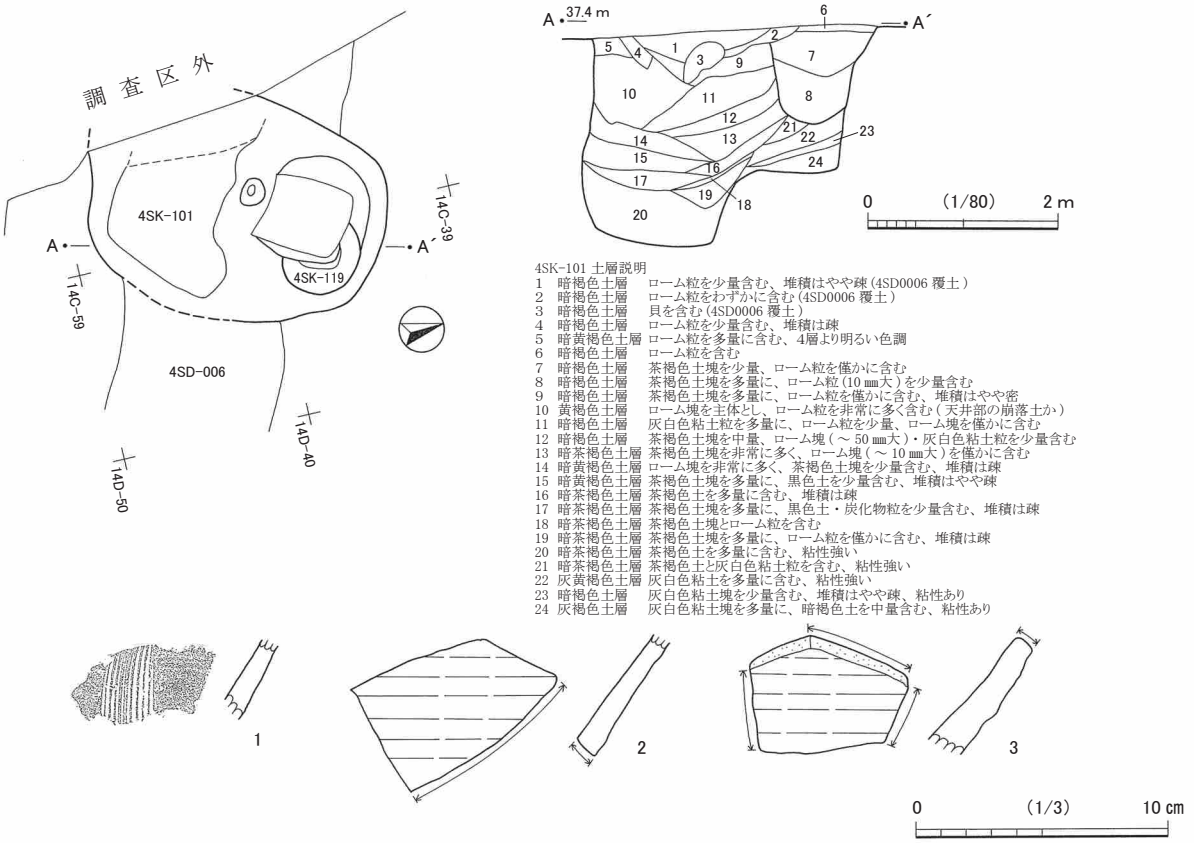
第 116 図　4SK-092 と出土遺物（3）

径ともに 0.9㎝、高さ 0.3㎝、器厚は 0.1㎝ほどしかないが、底部の周囲に側面の粘土紐を貼り付けて、内面の接合痕を丁寧にナデ消して作られている。外面は、底部がやや突出し、接合痕が残されている。胎土は緻密で、色調は褐色を呈している。完形と考えられるが、或いはその大きさから単独の土製品ではなく何かの一部である可能性もあるだろう。用途等は不明である。

36 は砥石である。図の上下端と左側面は欠損している。

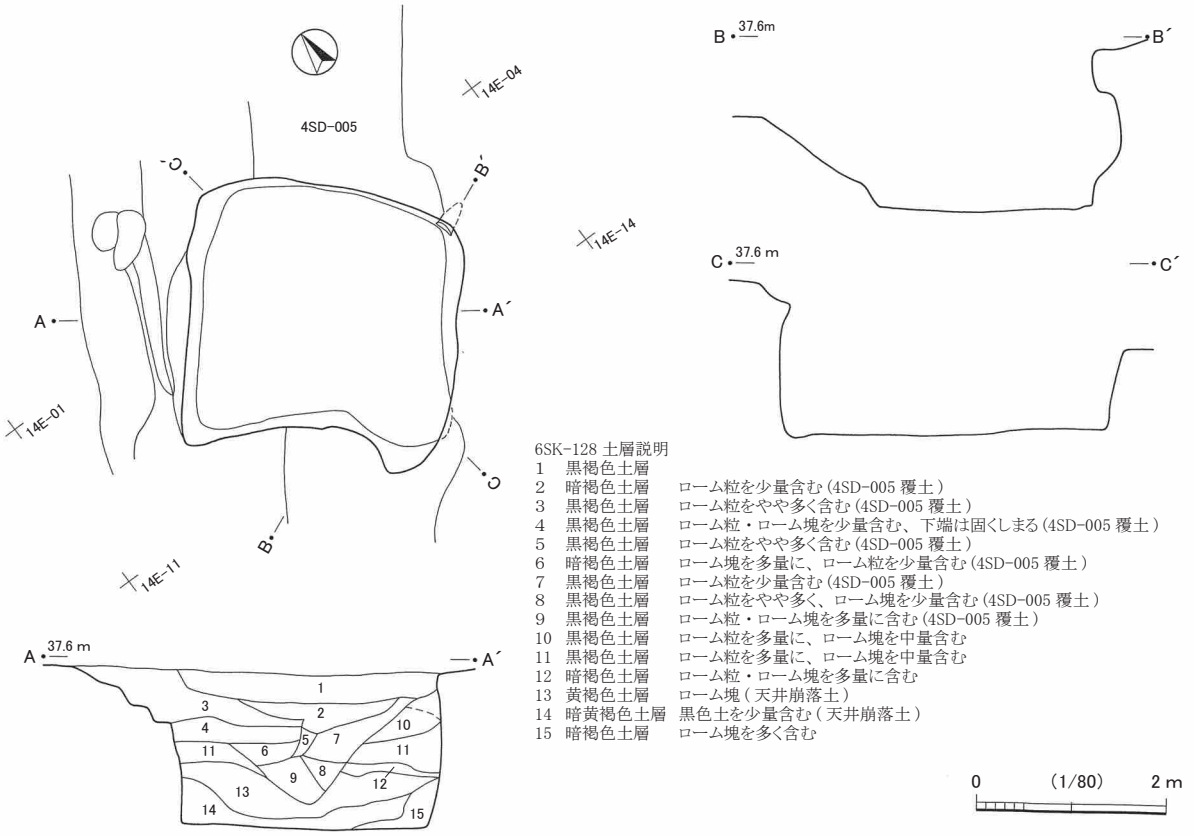
37 ～ 41 は金属製品である。37 は鉄製の錠前である。凹字状を呈する牝金具に図左側から牡金具が通されているが、図右側から鍵が差し込まれ、開いた状態のままで錆着している。錆がひどく、図はＸ線写真から推定復元したものであるが、細部は不明な部分が多い。牡金具は、露出部の錆が特にひどいが、バネ軸は縦に２段あり、バネが横位置になる形状とみられる。鍵は、柄部が僅かに露出するのみでほとんどが牝金具の中に入っており、細かい形状が明らかにならない。恐らく、解錠部の軸が二叉に分かれ、先端に付く鍵爪部の形状は基本的には凹字状と思われるが、Ｘ線写真では、横から見るとへ字状に屈曲しているように見える。露出している柄部には紐通し孔はみられず、折損していると考えられる。牝金具の全長は 7.6㎝、幅は 2.5㎝、厚さは 0.9㎝である。牡金具の推定全長は 7.4㎝である。鍵の推定現存長は 9.1㎝である。38 は短刀である。切先は欠損しており、全長 19.6㎝、刀身長 11.5㎝、茎長 8.1㎝である。刀身の最大幅は 2.1㎝、最大厚は 0.2㎝である。茎の端部にＸ線写真で目釘穴が１か所確認できる。39・40 は鉄釘である。39 は錆膨れが著しいが、ほぼ完形とみられる。頭部は薄い造りで、折り曲げられている。40 も複雑に曲がっているが、完形とみられる。木質が若干付着している。41 は細長い板状の鉄製品で、欠損部はないとみられる。下部には関があり、先端は丸く整えられている。

第 116 図 42 ～ 47 は銭貨である。42 は開元通寶である。全体の４分の３を欠損し状態が非常に悪いが、「開」と「寶」の字が読める。遺存部分の背面は無文である。43 は淳化元寶で、書体は草書である。44 は祥符通寶である。全体の４分の３を欠損し状態が非常に悪いが、「符」と「通」の字が読める。45・46 は天禧通寶である。47 は至和元寶で、書体は真書である。



4SK-101 土層説明
1 暗褐色土層 ローム粒を少量含む、堆積はやや疎(4SD0006 覆土)
2 暗褐色土層 ローム粒をわずかに含む(4SD0006 覆土)
3 暗褐色土層 貝を含む(4SD0006 覆土)
4 暗褐色土層 ローム粒を少量含む、堆積は疎
5 暗黄褐色土層 ローム粒を多量に含む、4層より明るい色調
6 暗褐色土層 ローム粒を含む
7 暗褐色土層 茶褐色土塊を少量、ローム粒を僅かに含む
8 暗褐色土層 茶褐色土塊を多量に、ローム粒(10㎜大)を少量含む
9 暗褐色土層 茶褐色土塊を多量に、ローム粒を僅かに含む、堆積はやや密
10 黄褐色土層 ローム塊を主体とし、ローム粒を非常に多く含む(天井部の崩落土か)
11 暗褐色土層 灰白色粘土粒を多量に、ローム粒を少量、ローム塊を僅かに含む
12 暗褐色土層 茶褐色土塊を中量、ローム塊(～50㎜大)・灰白色粘土粒を少量含む
13 暗茶褐色土層 茶褐色土塊を非常に多く、ローム塊(～10㎜大)を僅かに含む
14 暗黄褐色土層 ローム塊を非常に多く、茶褐色土塊を少量含む、堆積は疎
15 暗黄褐色土層 茶褐色土塊を多量に、黒色土を少量含む、堆積はやや疎
16 暗茶褐色土層 茶褐色土を多量に含む、堆積は疎
17 暗茶褐色土層 茶褐色土塊を多量に、黒色土・炭化物粒を少量含む、堆積は疎
18 暗茶褐色土層 茶褐色土塊とローム粒を含む
19 暗茶褐色土層 茶褐色土塊を多量に、ローム粒を僅かに含む、堆積は疎
20 暗茶褐色土層 茶褐色土を多量に含む、粘性強い
21 暗茶褐色土層 茶褐色土と灰白色粘土粒を含む、粘性強い
22 灰黄褐色土層 灰白色粘土を多量に含む、粘性強い
23 暗褐色土層 灰白色粘土塊を少量含む、堆積はやや疎、粘性あり
24 灰褐色土層 灰白色粘土塊を多量に、暗褐色土を中量含む、粘性あり

第 117 図 4SK-101 と出土遺物



6SK-128 土層説明
1 黒褐色土層
2 暗褐色土層 ローム粒を少量含む(4SD-005 覆土)
3 黒褐色土層 ローム粒をやや多く含む(4SD-005 覆土)
4 黒褐色土層 ローム粒・ローム塊を少量含む、下端は固くしまる(4SD-005 覆土)
5 黒褐色土層 ローム粒をやや多く含む(4SD-005 覆土)
6 暗褐色土層 ローム塊を多量に、ローム粒を少量含む(4SD-005 覆土)
7 黒褐色土層 ローム粒を少量含む(4SD-005 覆土)
8 黒褐色土層 ローム粒をやや多く、ローム塊を少量含む(4SD-005 覆土)
9 黒褐色土層 ローム粒・ローム塊を多量に含む(4SD-005 覆土)
10 黒褐色土層 ローム粒を多量に、ローム塊を中量含む
11 黒褐色土層 ローム粒を多量に、ローム塊を中量含む
12 暗褐色土層 ローム粒・ローム塊を多量に含む
13 黄褐色土層 ローム塊(天井崩落土)
14 暗黄褐色土層 黒色土を少量含む(天井崩落土)
15 暗褐色土層 ローム塊を多く含む

第 118 図 6SK-128

4SK-101（第 117 図、図版 18・96・109）

14C-38・39・48・49 グリッドに所在する。西隅は調査区外となる。溝状遺構 4SD-006 と重複するが、土層断面の観察から、当遺構の天井部が崩落してから 4SD-006 が構築されたのが明らかである。地下室の形状は、隅丸方形とみられる。北側に長軸 200㎝、短軸 125㎝ほどの隅丸方形の入口部分が設けられている。規模は、それぞれ現存値で東西軸 200㎝以上、南北軸 180㎝であるが、入口部分を含めると南北軸は 305㎝ほどである。地下室の床面はほぼ平坦で、検出面からの深さは 238㎝である。壁はややオーバーハングしながら立ち上がる。検出時、天井部は既に崩落しており、床面から天井部までの高さは不明である。入口部分には床面から 77㎝ほど上に段がある。

図示した遺物は３点である。第 117 図１は在地産擂鉢である。色調は暗灰色を呈する。２・３は転用砥石である。２は、遺存部分に擂目はみられないが、瀬戸・美濃擂鉢の破片で、破断面が使用されている。３はⅠ類に分類される常滑片口鉢の破片である。破断面が使用されている。

6SK-128（第 118・325 図、図版 19）

13E-92・93、14E-01 ～ 03・12・13 グリッドに所在する。溝状遺構 4SD-005 と重複するが、土層等の観察から、当遺構を埋め戻した後に 4SD-005 を構築したことが明らかである。当遺構は、検出時には入口部分は 4SD-005 によって削平されていたが、入口部分を南西側にもつ地下式坑であったと推定される。地下室の形状は、一辺 280㎝ほどの隅丸正方形状とみられる。地下室の床面はほぼ平坦で、検出面からの深さは 173㎝である。ややオーバーハングしながらほぼ垂直に立ち上がる壁の現存高は 145㎝ほどである。地下室部分はロームブロックで埋め戻され、天井部は遺存していなかったが、天井部の高さは 140㎝前後と推測される。なお、北西壁から外側に向かって階段状の掘込みがあるが、土層断面の観察から当遺構とは関係がないと考えられる。

遺物は、中世陶磁器の小破片が少量出土した。そのうち常滑片口鉢の破片１点は、4SD-005 から出土した破片と接合し、4SD-005 出土遺物として掲載した（第 325 図 15）。ほかは図示していない。

第３節　方形竪穴・竪穴状遺構

１　概要

単なる土坑とは異なり、竪穴住居のように床面が平らで堅く、壁がほぼ垂直に立ち上がる遺構のうち、平面形が方形を呈するものを方形竪穴、方形ではないものを竪穴状遺構とした。床面や遺構周辺にはピットを伴うこともあるが、特に遺構周辺に検出されるものは、遺構に伴うものかどうか判別し難い面もある。覆土は、いずれも単一など概して極めてシンプルで、一気に埋め戻された様相を呈している。出土遺物は、概して少ない傾向である。遺構の分布は 23G グリッド以北に限られる。

検出された方形竪穴・竪穴状遺構は複数基重複しているものも多く、その場合、調査中に重複が判明した段階でそれぞれ別の遺構番号や枝番号を付したものがある一方、番号を一つで通したものもある。あくまで遺構番号の付いた遺構数として、方形竪穴は 106 基、竪穴状遺構は 10 基検出された。

なお、方形竪穴と竪穴状遺構の遺構種別記号は、「SI」が付されている場合と「SK」が付されている場合とがあるが、ここでは「SI」を先に、「SK」を後とし、その中でそれぞれ、調査次・番号の若い順に並べて掲載することとした。

2　遺構と遺物

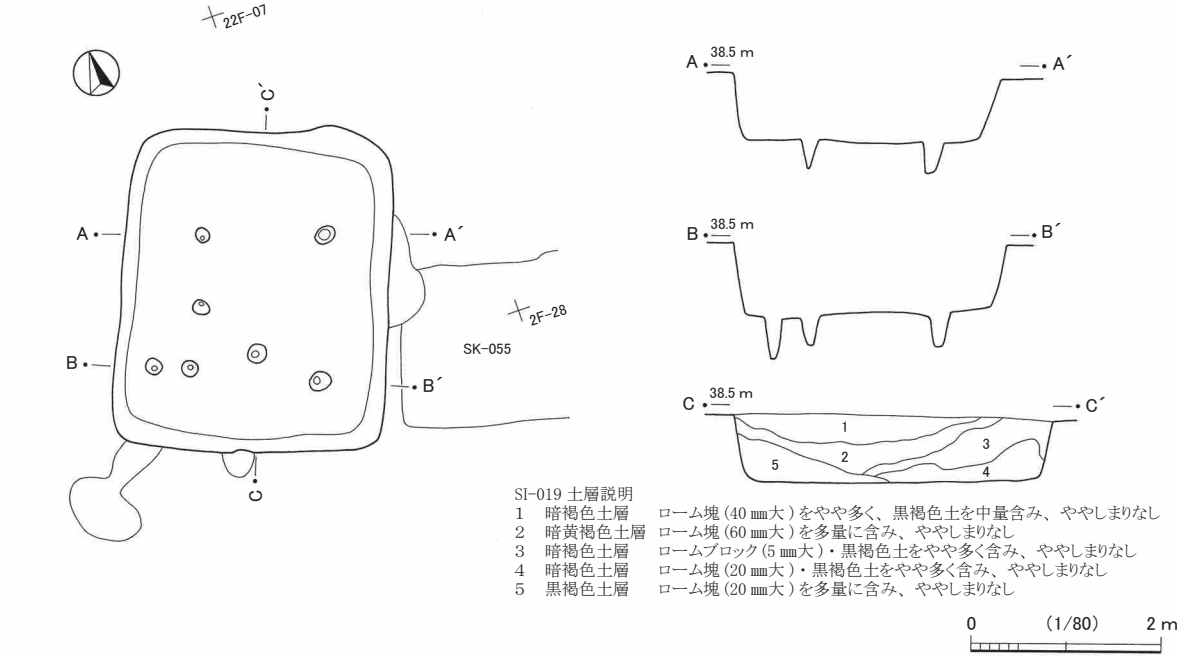
SI-019（第 119 図、図版３）

22F-06・07・15 ～ 17・25 ～ 27 グリッドに所在する方形竪穴である。東側には方形竪穴 SK-055 が隣接している。遺構の規模は長軸 340㎝、短軸 283㎝、検出面からの床面の深さは 76㎝である。床面には、深さ 30㎝～ 44㎝を測る複数のピットがみられるが、ピットは遺構周辺にも分布している。

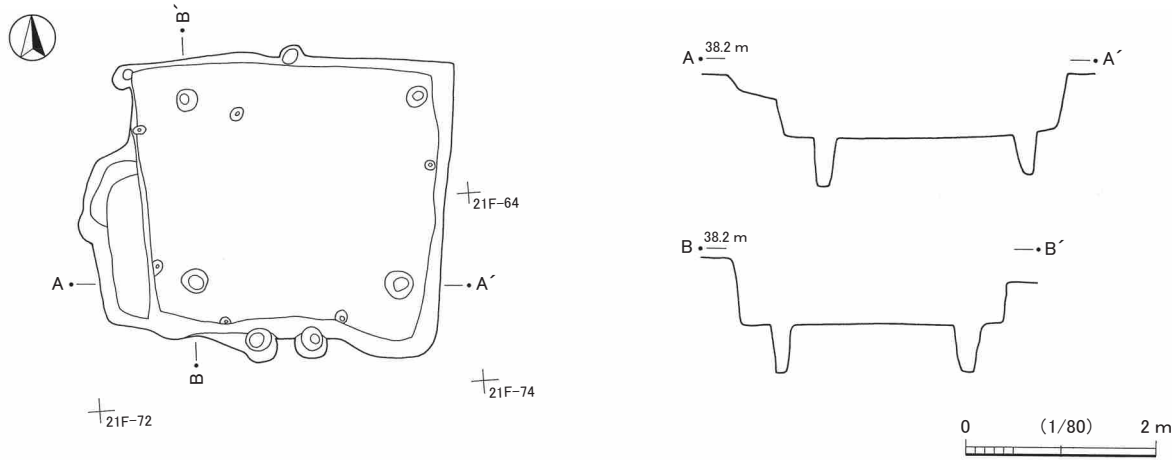
遺物は、混入品とみられる土器の小破片が少量出土したのみである。

SI-020（第 120 図、図版３）

21F-52・53・62・63 グリッドに所在する方形竪穴である。規模は長軸 230㎝、短軸 260㎝、検出面からの床面の深さは 72㎝である。南西部には幅 60㎝ほどの段が張り出し、段の高さは床面から 37㎝ほどである。床面や壁際には複数のピットが検出されており、中でも四隅のものが深く、床面から 35㎝～ 50㎝を測る。ほかのピットは、深さ 10㎝前後である。遺構の北側には、弧状に広がる溝状遺構 SD-014 が隣接している。



第 119 図　SI-019



第 120 図　SI-020

遺物は、中・近世以降陶磁器及び土器の小破片が少量、及び混入品とみられる土器の小破片が少量出土したが、図示したものはない。

SI-022・025・SK-041（第 121 図、図版３・97）

21F-67・76 ～ 79・86 ～ 88・89・97・98 グリッドに所在する方形竪穴群で、少なくとも３基以上の遺構が重複しているとみられる。新旧関係は、断面の観察から、SI-022 と SI-025 はいずれも SK-041 より新しく、更に SI-025 より SI-022 のほうが新しい。南西に位置する SI-022 は、現状で長軸 358㎝、短軸 255㎝を測るが、西側の段の部分は断面の観察から別の古い遺構とみられ、これを抜くと長軸は 263㎝となる。床面には円形土坑状にやや凹む部分と複数のピットがあり、円形土坑状の部分の深さは床面から 23㎝である。ピットの床面からの深さは、円形土坑状の凹みに接しているものは 13㎝で、そのほかは 30㎝～ 41㎝である。北東に位置する SI-025 は、長軸 395㎝、短軸 234㎝、検出面からの深さは 86㎝である。SI-022 と SI-025 を内包するように位置するのが SK-041 で、規模は推定長軸 595㎝、推定短軸 348㎝であるが、南東隅部分は、別の遺構と重複している可能性があり、その場合、長軸の規模はもう少し小規模となる。また、北西隅部分で土坑 SK-040 及び SK-042 と重複するが、新旧関係は明らかでない。検出面からの深さは 31㎝である。これら遺構の周囲にはピットがいくつか見られるが、遺構に伴うものかどうか不明である。

図示した出土遺物は１点である。第 121 図１は SI-025 の覆土中から出土した瀬戸・美濃天目茶碗である。古瀬戸後期様式Ⅱ～Ⅲ期に位置づけられるものと考えられる。SI-025 からは、そのほか近世以降陶磁器の小破片が少量とアカニシの貝殻１点が出土している。SI-022・SK-041 からは、いずれも混入品とみられる土器の小破片が少量出土したのみである。

SI-024（第 122 図、図版３）

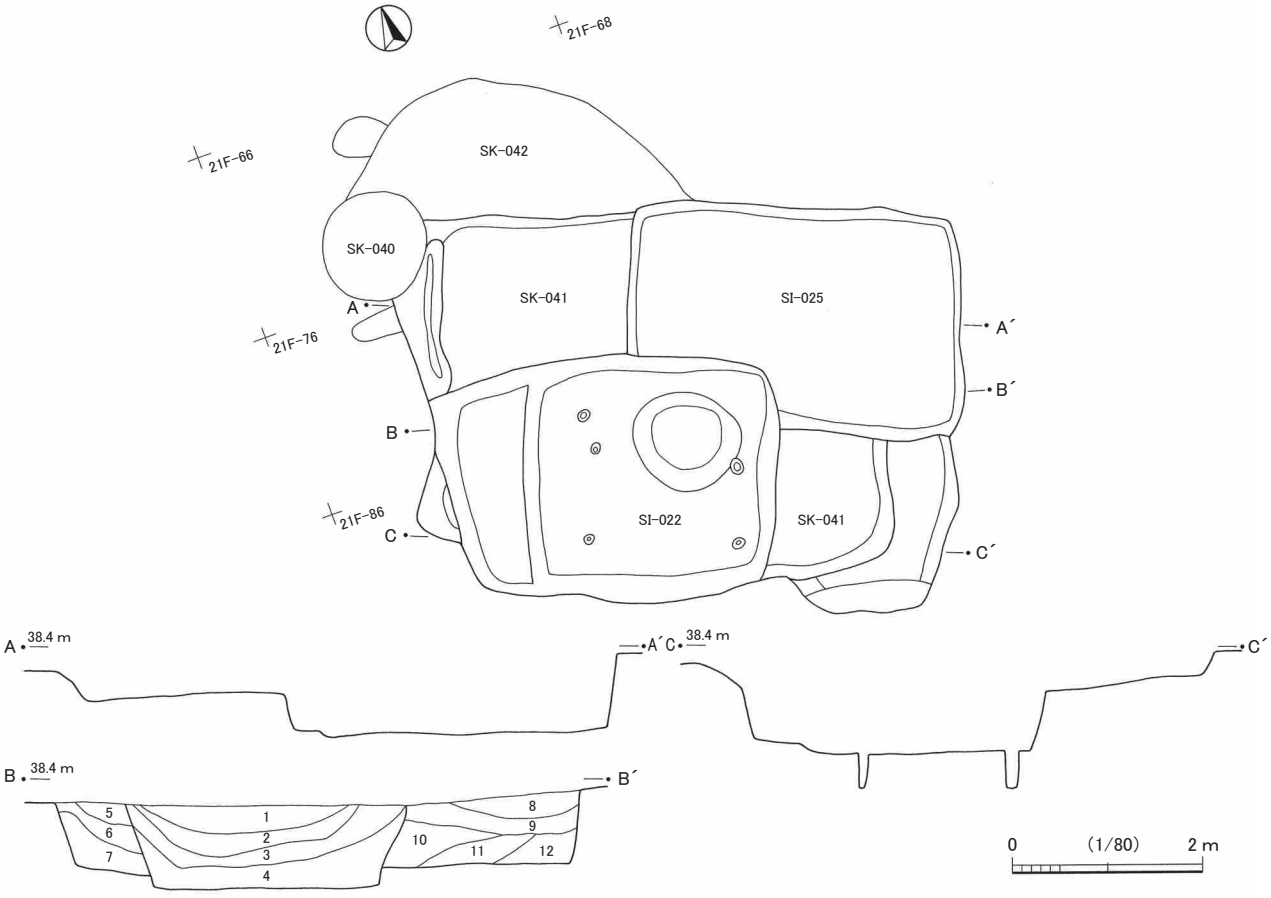
21F-64 ～ 66・74・75 グリッドに所在する方形竪穴である。規模は長軸 335㎝、短軸 242㎝、検出面からの床面の深さは 76㎝である。北西隅で方形竪穴 SK-038 と重複しており、新旧関係は、断面の観察から SK-038 のほうが新しいと判断されるが、いずれも覆土は全体的にしまりのない土で、あまり時間差はないと考えられる。床面からは複数のピットが検出されており、床面からの深さは 26㎝～ 32㎝である。なお、遺構の周辺からもピット群が検出されている。

遺物は、図示していないが中世陶磁器の小破片が少量出土した。

SI-028（第 123 図、図版 97・111）

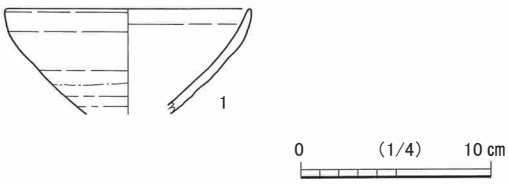
20E-59・69、20F-50・51・60・61 グリッドに所在する方形竪穴である。平面形は一辺 300㎝ほどの隅丸正方形を呈する。検出面からの床面の深さは 94㎝である。方形竪穴 SK-056 ～ 058 と重複するが、それらより新しいとみられる。床面には、壁溝と複数のピットが存在する。壁溝の床面からの深さは５㎝前後であるが、方形竪穴 SK-061・063 と隣接する南側には壁溝は検出されていない。ピットは、床面からの深さは 11㎝から 52㎝を測る。規則性ははっきりしないが、西側壁～北側壁のものが比較的深い。

図示した出土遺物は３点である。第 123 図１は N 字状折返し口縁をもつ常滑甕の破片である。８型式あたりに比定されるものと考えられる。２・３は砥石である。いずれも上端は折損している。遺物はほかに、近世以降陶磁器・土器の小破片も少量出土した。

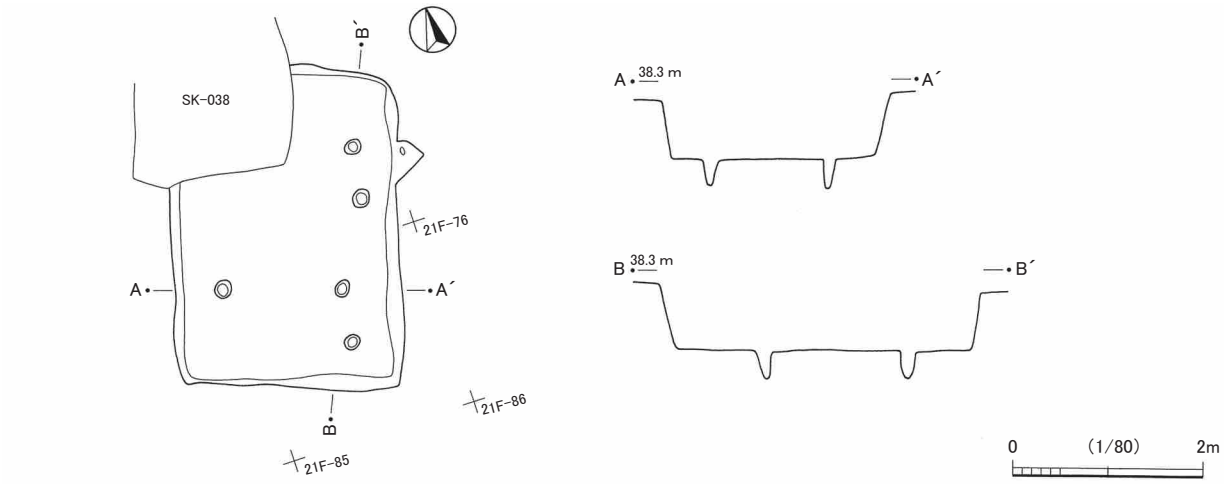


SI-022・025・SK-041 土層説明

1 暗褐色土層 ローム塊 (20㎜大) を少量含み、ややしまりなし
2 暗褐色土層 ローム粒を含む、１層より明るい色調で、ややしまりなし
3 暗褐色土層 ローム塊 (10㎜大) を少量含む、２層より暗い色調で、ややしまりなし
4 暗褐色土層 ロームブロックを少量含む、３層よりやや明るい色調、ややしまりなし
5 暗褐色土層 ローム粒を含み、ややしまりなし
6 暗褐色土層 ローム粒を含む、５層よりやや暗い色調で、ややしまりなし
7 暗褐色土層 ローム粒をやや多く含み、ややしまりなし
8 暗黄褐色土層 ローム粒をやや多く含み、ややしまりなし
9 暗褐色土層 ローム塊 (20㎜大) を少量含み、ややしまりなし
10 黄褐色土層 ローム塊 (30㎜大) を多量に含み、ややしまりなし
11 暗褐色土層 ローム塊 (30㎜大) を少量含み、ややしまりなし
12 黒褐色土層 ローム塊 (40㎜大) を少量含み、ややしまりなし



第 121 図 SI-022・025・SK-041 と出土遺物



第 122 図 SI-024

SI-029（第 124 図）

19E-56・57・66・67 グリッドに所在する方形竪穴である。北側は調査不能であったが、平面形は隅丸方形と考えられる。規模は、東西軸 294㎝、検出面からの床面の深さは 76㎝である。床面の東壁際と西壁際にはピットがある。ピットの床面からの深さは、東壁のものが 39㎝、西壁のものが 29㎝である。

遺物は、近世以降陶磁器・土器の小破片が出土した。

SI-033（第 125 図、図版３）

20E-26・27・36・37 グリッドに所在する方形竪穴である。北東から南西にかけて SD-020 と重複するが、平面形は一辺 265㎝ほどの正方形状を呈するとみられる。検出面からの床面の深さは 47㎝である。床面には不整形及びピット状の落込みがあり、落込みの床面からの深さはいずれも 30㎝前後である。また、壁面には、四隅及び東壁を除く各壁の中央部付近にピットが穿たれているほか、東壁と南壁の一部には壁溝もある。ピットの床面からの深さは、北東隅のものは 30㎝だが、ほかは 51㎝～ 72㎝を測る。

遺物は出土していない。

SI-036A（第 126 図）

20F-58・67 ～ 69・77 ～ 79・87 ～ 89 グリッドに所在する方形竪穴である。プランは明確ではないが、南北軸 423㎝、東西軸 386㎝、検出面からの床面の深さ 45㎝ほどの隅丸方形の部分を主体とし、その北側と東側には別の方形竪穴等の遺構が重複しているとみられる。床面上や壁際にはピットが多数あるが、床面からの深さは、いずれも深くても 30㎝程度で、浅いものが多い。

なお、遺構番号について、当遺構は平成 20 年度に「SI-036」として調査した方形竪穴であるが、平成 21 年度調査区においても「SI-036」として調査をした別の遺構（古墳時代竪穴住居跡）が存在している。報告にあたって、当遺構を「SI-036A」、竪穴住居跡を「SI-036B」として区別することとしたが、両遺構は直接重複関係にあるわけではない。また、「SI-036B」は本報告書には収録していない。

遺物は出土していない。

SI-041（第 127 図）

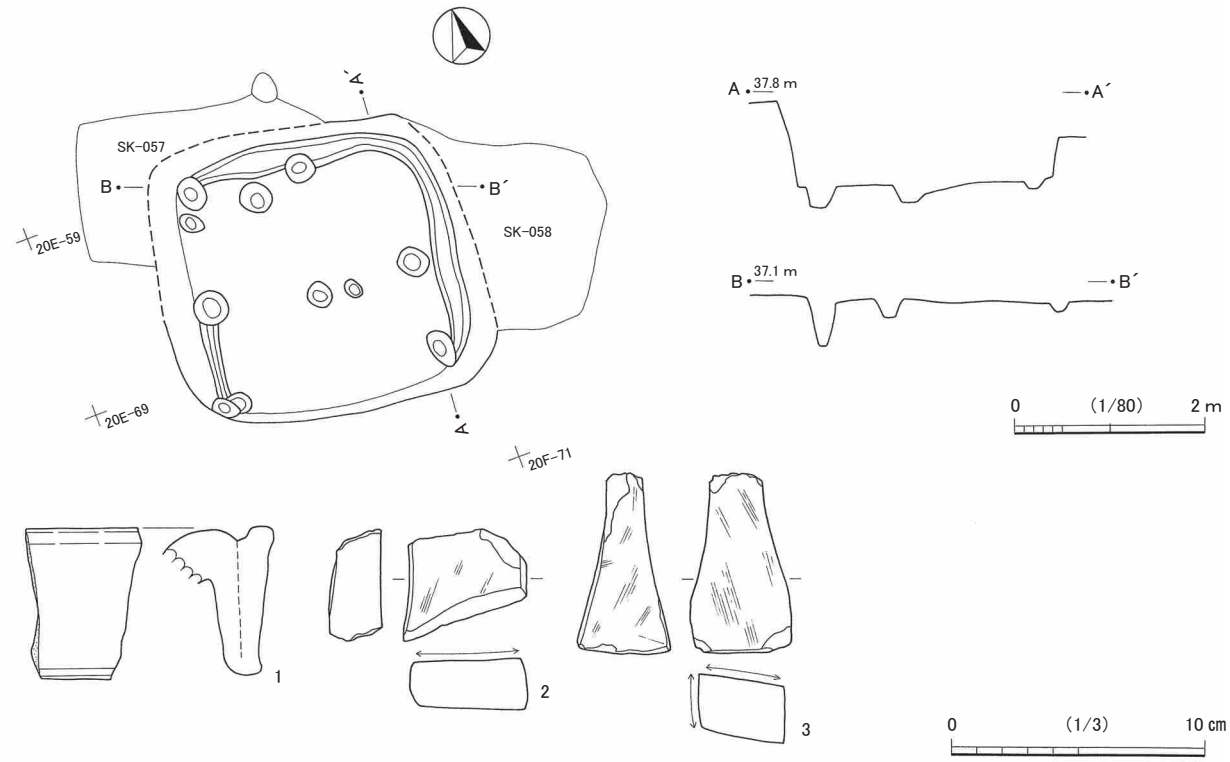
7C-52・62 グリッドに所在する竪穴状遺構である。遺構の大半は西側の調査区外へ続くとみられ、平面形ははっきりしないが、隅丸方形を呈する可能性もある。検出面からの床面の深さは 14㎝ほどである。遺存する東壁際にはピットがいくつかみられるが、床面からの深さは 24㎝・46㎝・62㎝と不統一である。

遺物は出土していない。

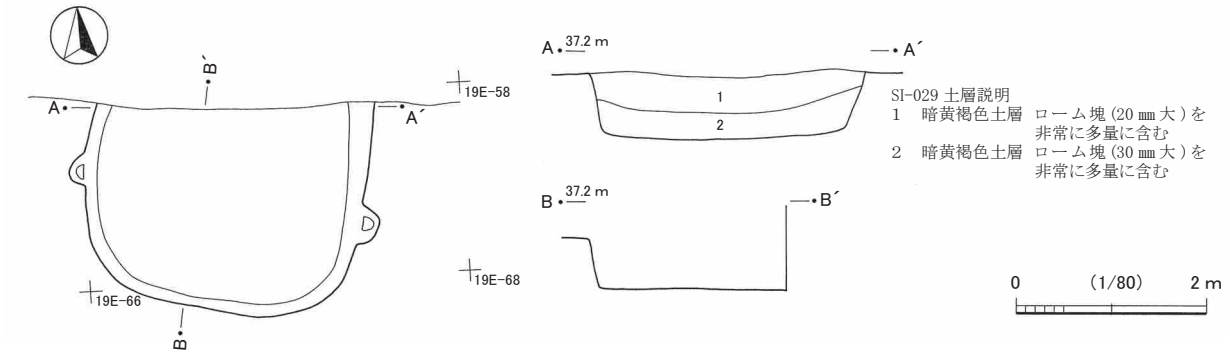
SI-042（第 128 図）

9D-14・24・25 グリッドに所在する竪穴状遺構である。平面形は長軸 180㎝、短軸 160㎝ほどの不整隅丸方形状を呈する。床面には、南側に深さが 45㎝～ 61㎝のピットが集中してみられる。検出面からの床面の深さは 19㎝である。当遺構は掘立柱建物跡群 SB-002 ～ 007 の南に隣接しており、軸方向もそのうちいくつかの掘立柱建物跡とほぼ一致していることから、それらとの関連性も考えられる。

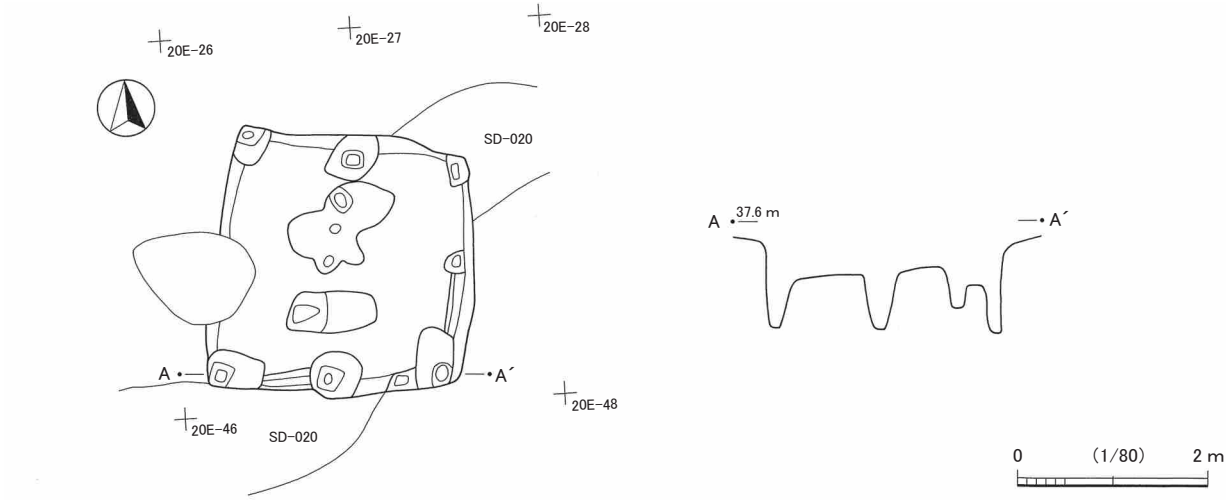
遺物は出土していない。



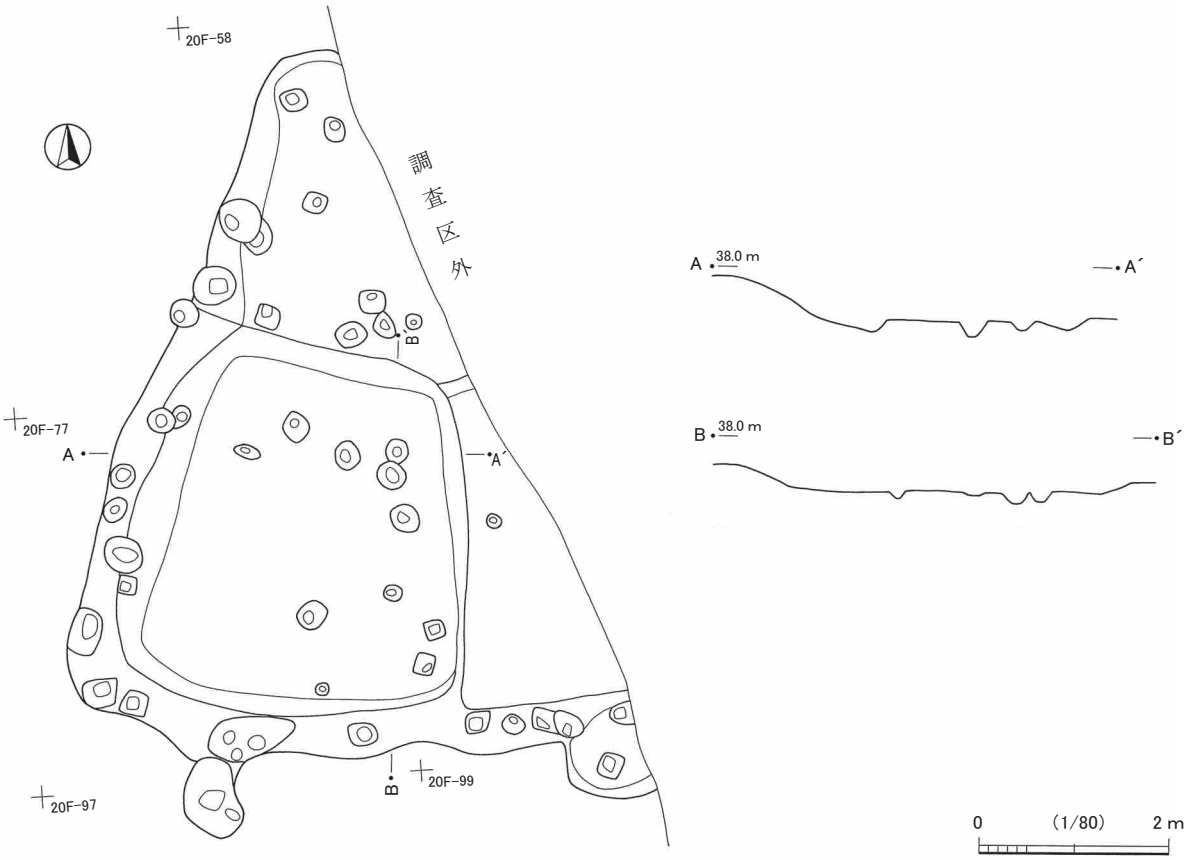
第 123 図　SI-028 と出土遺物



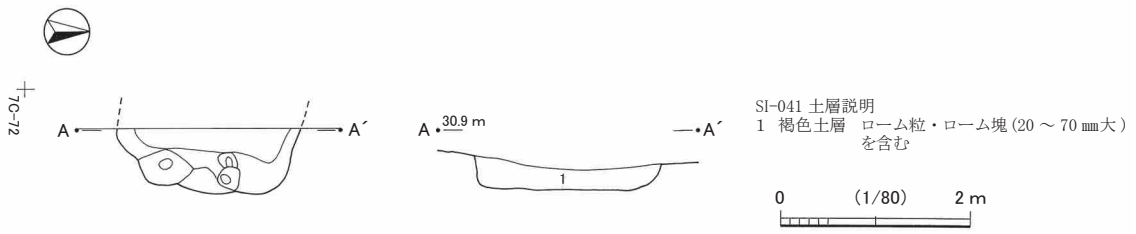
第 124 図　SI-029



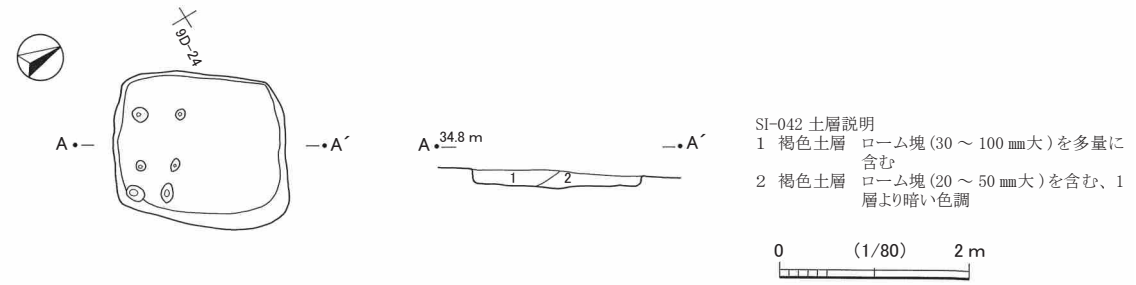
第 125 図　SI-033



第 126 図　SI-036A



第 127 図　SI-041



第 128 図　SI-042

SI-045（第 129 図）

土墨 SA-001 下から検出された、6C-59、6D-50・60 グリッドに位置する竪穴状遺構である。土坑 SK-126・127 と重複するが、新旧関係はいずれも明らかではない。平面形は長軸 210㎝、短軸 185㎝ほどの隅丸方形状を呈する。検出面からの床面の深さは 39㎝である。床面や壁にはピットがいくつかみられる。

遺物は、混入品とみられる土器の小破片が少量出土したのみである。

2SI-015（第 130 図、図版３）

23H-10・20 グリッドに所在する竪穴状遺構である。南側は撹乱により失われている。また、東側は調査区外へ続く。検出された部分からは、全体の平面形は直径２ｍほどの円形状になると推測される。検出面からの床面の深さは 10㎝前後で、床面には浅いピットがみられる。遺構周辺にはピットが群在しており、柵列 2SA-002 の延長上に位置することから、関連性も考えられよう。

遺物は出土していない。

2SI-017（第 131 図、図版３・116）

22G-77・78・87・88・96 ～ 98、23G-06 ～ 08 グリッドに所在する竪穴状遺構である。北側は調査区外へ続く。検出された部分からは、全体の平面形は隅丸方形状になると推測される。短軸は 330㎝、長軸は現存値で 730㎝ほどである。検出面からの床面の深さは 33㎝ほどである。壁は比較的緩やかな角度で立ち上がる。西側の床面と壁面にピットが集中してみられる。

図示した遺物は２点である。第 131 図１は板状の鉄製品である。２は棒状の鉄製品である。そのほかには、混入品とみられる土器の小破片が少量出土した。

SK-009・035（第 132 図、図版４・6）

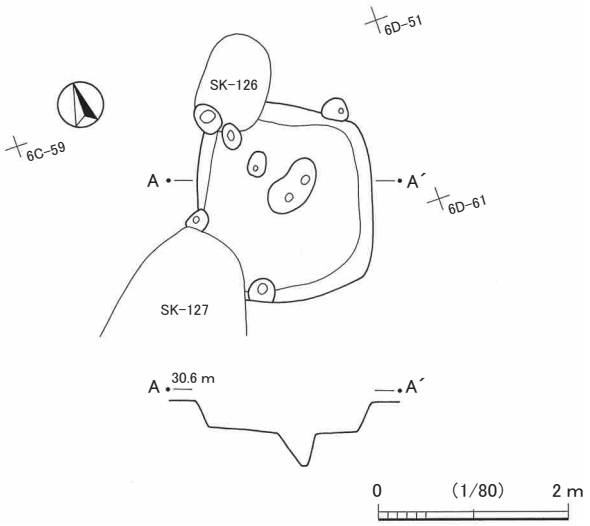
近接して存在する２基の方形竪穴で、SK-009 は 22F-14・15・24・25 グリッド、SK-035 は 22F-34・35・44 グリッドに所在する。規模は、SK-009 は長軸 140㎝、短軸 128㎝、SK-035 は長軸 203㎝、短軸 174㎝、検出面からの深さはそれぞれ 66㎝、101㎝である。

遺物は、SK-009 からアカニシの貝殻１点、SK-035 から混入品とみられる土器の小破片が少量出土したのみで、図示したものはない。

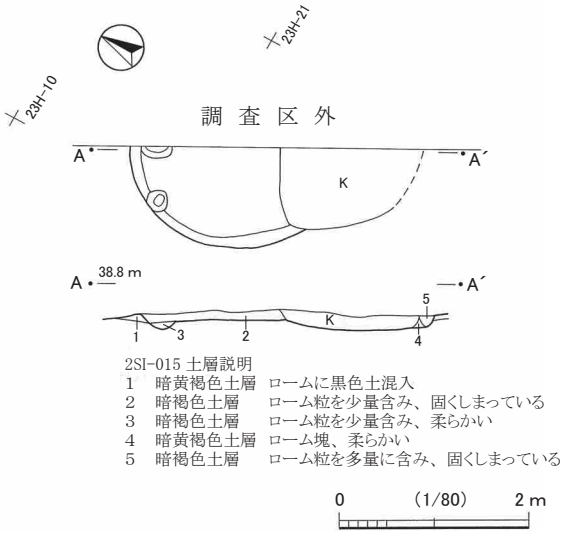
SK-011（第 133 図、図版４・97）

21F-81・82・91・92 グリッドに所在する方形竪穴である。平面形は、北西隅に複数のピットが連結したような張出しもあるが、概ね一辺 200㎝ほどの隅丸正方形状を呈する。遺構の南東部分で土坑 SK-025 と重複するが、新旧関係は明らかではない。床面中央部に長軸 88㎝、短軸 55㎝、床面からの深さ 20㎝ほどの楕円形の落込みがある。検出面からの床面の深さは 44㎝である。

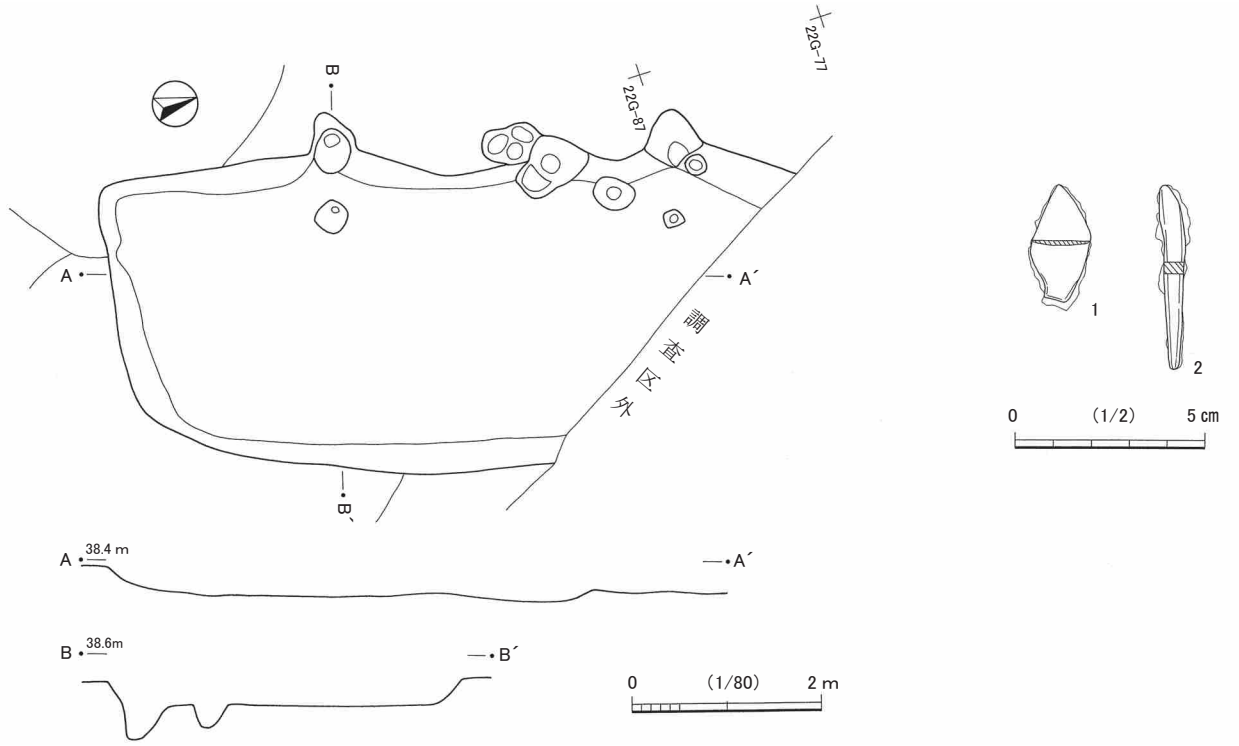
図示した遺物は１点である。第 133 図１は瀬戸・美濃の灰釉皿で、折縁中皿かもしれない。古瀬戸後期様式Ⅱ期頃に位置づけられるものと考えられる。内外面に施釉されるが、内面はハケ塗りがなされているようである。遺物はほかに、近世以降土器の小破片も少量出土した。



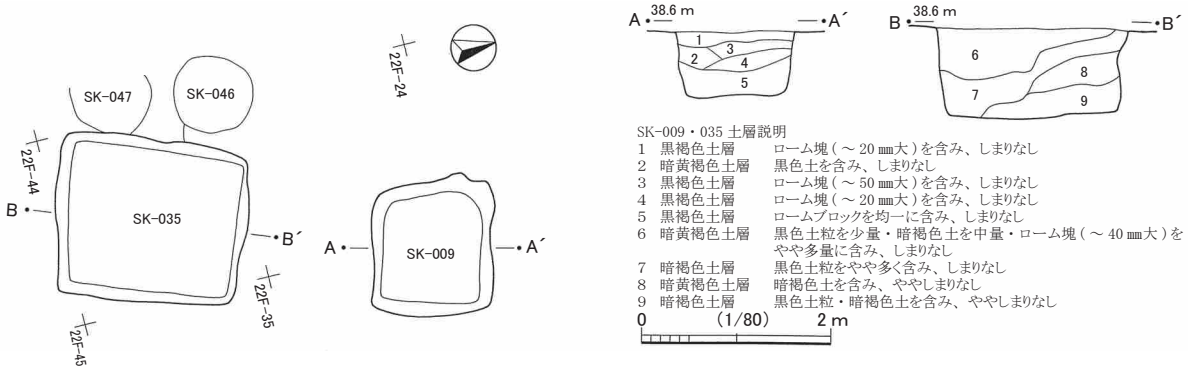
第 129 図　SI-045



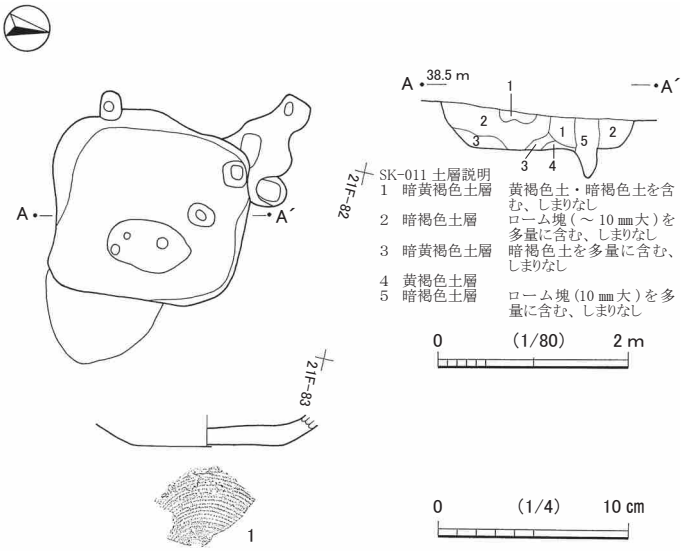
第 130 図　2SI-015



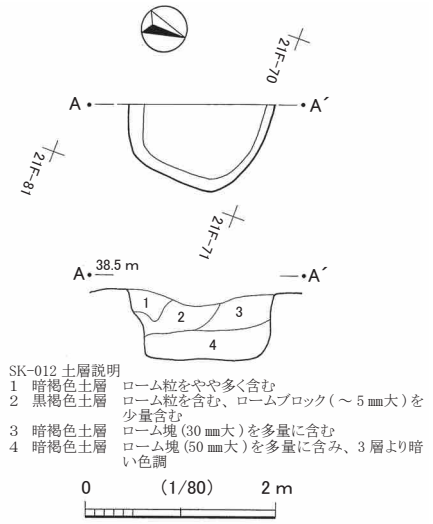
第 131 図　2SI-017 と出土遺物



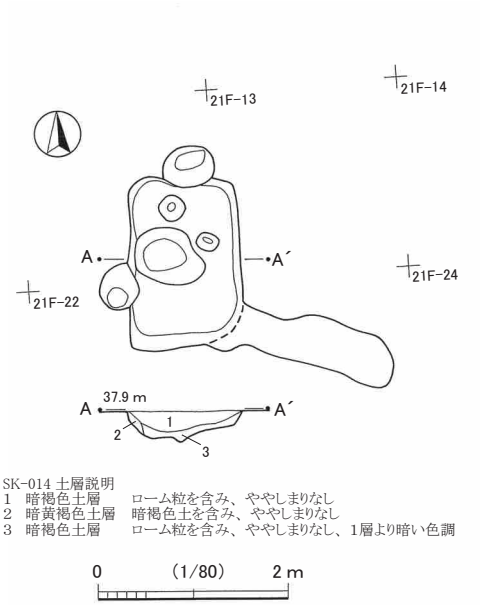
第 132 図　SK-009・035



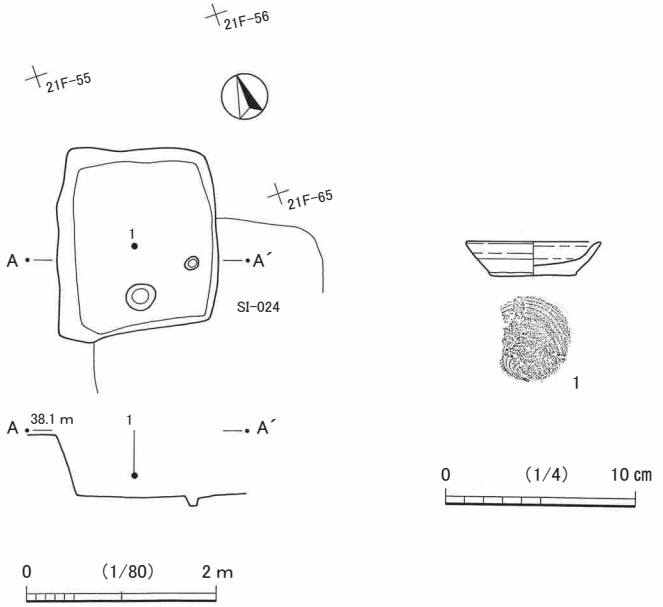
第 133 図　SK-011 と出土遺物



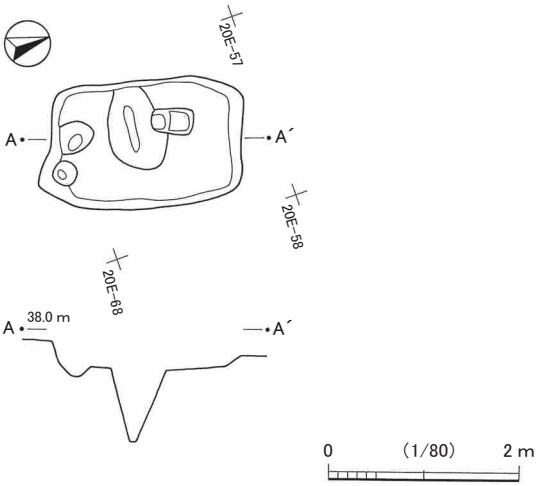
第 134 図　SK-012



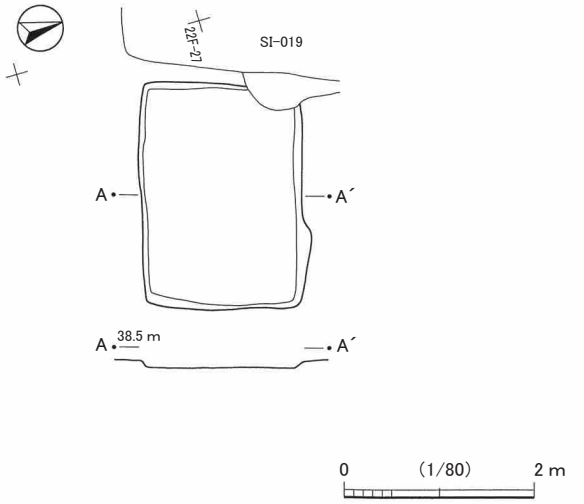
第 135 図　SK-014



第 136 図　SK-038 と出土遺物



第 137 図　SK-051



第 138 図　SK-055

SK-012（第 134 図、図版４）

21F-70 グリッドに所在する方形竪穴である。西側は調査区外となるが、平面形は隅丸方形を呈すると考えられる。規模は、調査した部分で南北軸 144㎝である。検出面からの床面の深さは 56㎝である。

遺物は図示したものはない。

SK-014（第 135 図）

21F-12・13・22・23 グリッドに所在する方形竪穴である。平面形は基本的には長軸 182㎝、短軸 118㎝の隅丸方形を呈する。床面中央部に、床面からの深さが 15㎝の土坑状の落込みと、30㎝前後のピットが２か所ある。そのほか壁際に、床面からの深さがそれぞれ 48㎝・32㎝のピットが２か所みられるが、遺構周辺にはピットが群在しており、それらとの関係もあるかもしれない。

遺物は、混入品とみられる土器の小破片が少量出土したのみである。

SK-038（第 136 図、図版３・93）

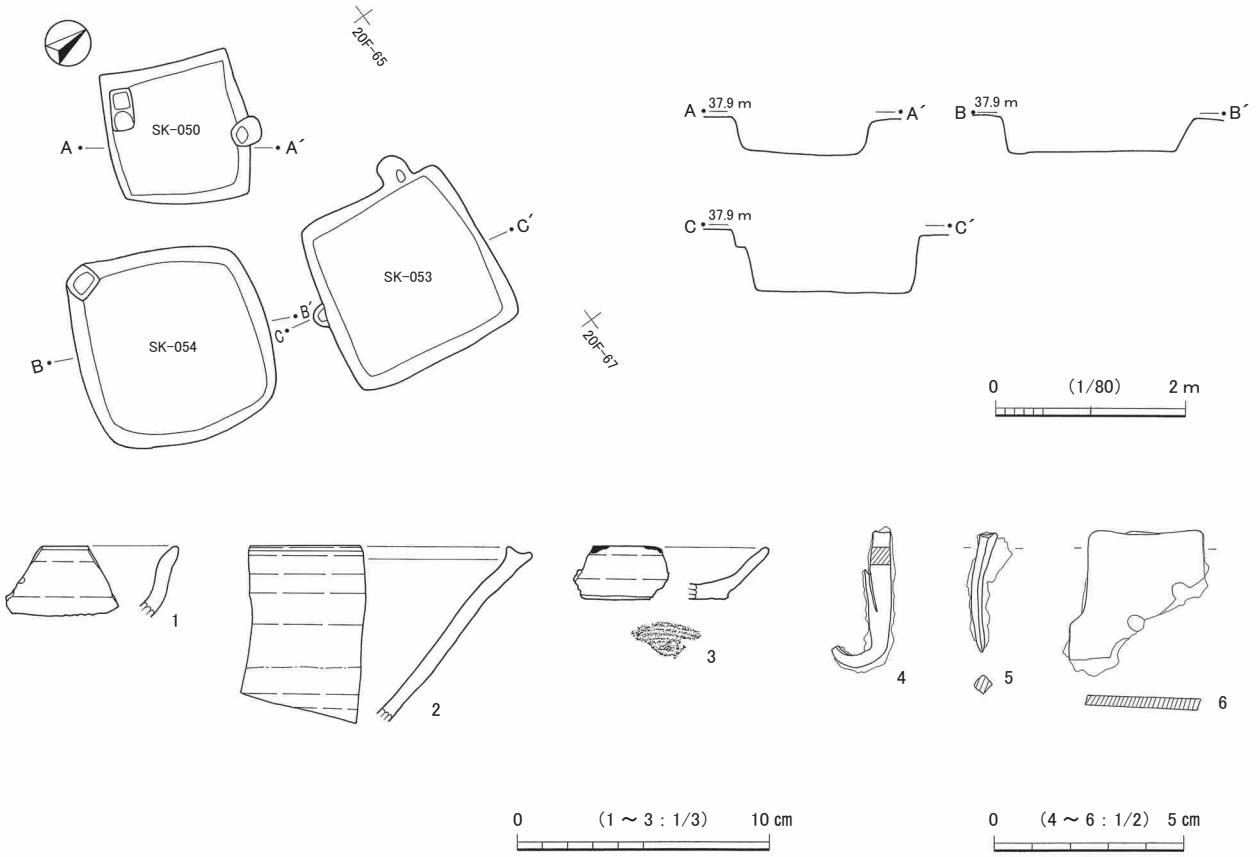
21F-54・55・64・65 グリッドに所在する方形竪穴である。規模は長軸 205㎝、短軸 176㎝、検出面からの床面の深さは 72㎝である。南東隅で方形竪穴 SI-024 と重複しており、新旧関係は、断面の観察から SK-038 のほうが新しいと判断される。床面からは２基のピットが検出されており、床面からの深さは南側のものが 43㎝、東側のものが 11㎝である。

図示した出土遺物は１点である。第 136 図１は、遺構中央、床面よりやや上のレベルから出土したカワラケ小皿である。全体の 60％程度の遺存度で、遺存部口唇部には煤が少し付着している。そのほか、角材・丸材・枝状のもの等を含む炭化材がごく細片を除いて 180 点（1,030 ｇ）出土したが、明らかな加工をもつものは見当たらない。

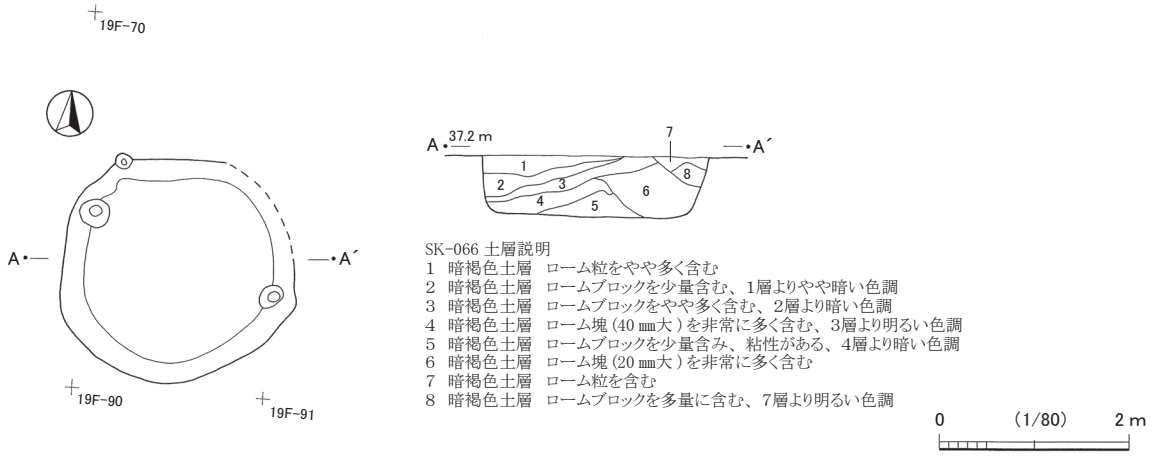
SK-050・053・054（第 139 図、図版７・８・97・116）

20F-64 ～ 66･74 ～ 76･85･86 グリッドに所在する３基のそれぞれ独立した方形竪穴である。平面形は、SK-050 は一辺約 140㎝の正方形状、SK-053 は一辺約 190㎝の正方形状、SK-054 は一辺約 200㎝の隅丸正方形状を呈している。検出面からの床面の深さは、SK-050 が 37㎝、SK-053 が 66㎝、SK-054 が 41㎝である。いずれも床面壁際にピットが一部みられるが、床面からの深さは全て 10㎝前後のごく浅いものである。

図示した遺物は６点である。第 139 図１・２は瀬戸・美濃製品で、１は灰釉平碗とみられる。内外面に施釉されている。古瀬戸後期様式のものと考えられる。２は折縁深皿である。内外面に灰釉が施されるが、灰釉は被熱により白く変質している。古瀬戸後期様式Ⅳ期新段階に位置づけられるものと考えられる。３はカワラケ小皿である。外面口唇部及び内面は煤が付着し黒色を呈している。４・５は鉄釘で、いずれも頭部は欠損している。６は板状の鉄製品で、孔が２か所認められる。１・２は SK-050 から、３は SK-054 から、４～６は SK-053 から出土した。なお、SK-050 からは、ほかにアカニシの貝殻１点も出土している。



第 139 図　SK-050・053・054 と出土遺物



SK-066 土層説明
1　暗褐色土層　ローム粒をやや多く含む
2　暗褐色土層　ロームブロックを少量含む、1層よりやや暗い色調
3　暗褐色土層　ロームブロックをやや多く含む、2層より暗い色調
4　暗褐色土層　ローム塊（40 ㎜大）を非常に多く含む、3層より明るい色調
5　暗褐色土層　ロームブロックを少量含み、粘性がある、4層より暗い色調
6　暗褐色土層　ローム塊（20 ㎜大）を非常に多く含む
7　暗褐色土層　ローム粒を含む
8　暗褐色土層　ロームブロックを多量に含む、7層より明るい色調

第 140 図　SK-066

SK-051（第 137 図、図版７）

20E-57・67 グリッドに所在する方形竪穴である。規模は長軸 200㎝、短軸 135㎝である。検出面からの床面の深さは 30㎝である。床面には楕円形状の落込みとピットがある。床面からの落込みの深さは 78㎝、ピットの深さは 10㎝～ 25㎝である。遺構周辺にはピットが群在しており、それらとの関係もあるかもしれない。

遺物は出土していない。

SK-055（第 138 図）

22F-17・18・27・28 グリッドに所在する方形竪穴である。規模は長軸 238㎝、短軸 171㎝、検出面からの床面の深さは 16㎝ほどである。床面ではピットは検出されなかったが、遺構周辺にはピットが多数分布している。また、遺構の西側には、方形竪穴 SK-055 が隣接している。

遺物は、混入品とみられる土器の小破片が少量出土したのみである。

SK-056 ～ 063（第 141 図、巻頭図版 7、図版 8 ・97・111）

20E-48・49・58・59・68・69・78・79・88・89、20F-40・50 ～ 52・60 ～ 62・70 グリッドに所在する、少なくとも 8 基が重複・隣接する方形竪穴群であるが、SK-056 ～ 058 は先に述べた方形竪穴 SI-028 に切られているとみられ、SI-028 を加えると 9 基以上が群衆していると言える。

SK-056 は、群のなかでも北西端に位置し、平面形は長方形を呈するとみられる。規模は現存部分で短軸方向が 200㎝ほどであるが、長軸方向は SI-028 に切られ不明である。検出面からの床面の深さは 45㎝ほどである。

SK-057 は SK-056 の東側に重複しており、南東側は SI-028 に切られる。平面形は長方形とみられ、確認できた規模は、短軸方向で 160㎝ほどである。検出面からの床面の深さは 60㎝である。

SK-058 は SI-028 の東側に重複している。平面形は長方形とみられ、確認できた規模は短軸方向で 194㎝である。検出面からの床面の深さは 83㎝である。

SK-059 は SK-058 の北東側に重複し、群のなかでも北東端に位置する。平面形は長軸 172㎝、短軸 122㎝の長方形を呈するが、北東隅部分にピット SH-024 があり、ピットとつながるように張出し部分がある。検出面からの床面の深さは 51㎝である。

SK-060 は SK-058 の東側、SK-059 の南側に位置する。遺構の南東隅部分しか遺存していない。検出面からの床面の深さは 32㎝である。

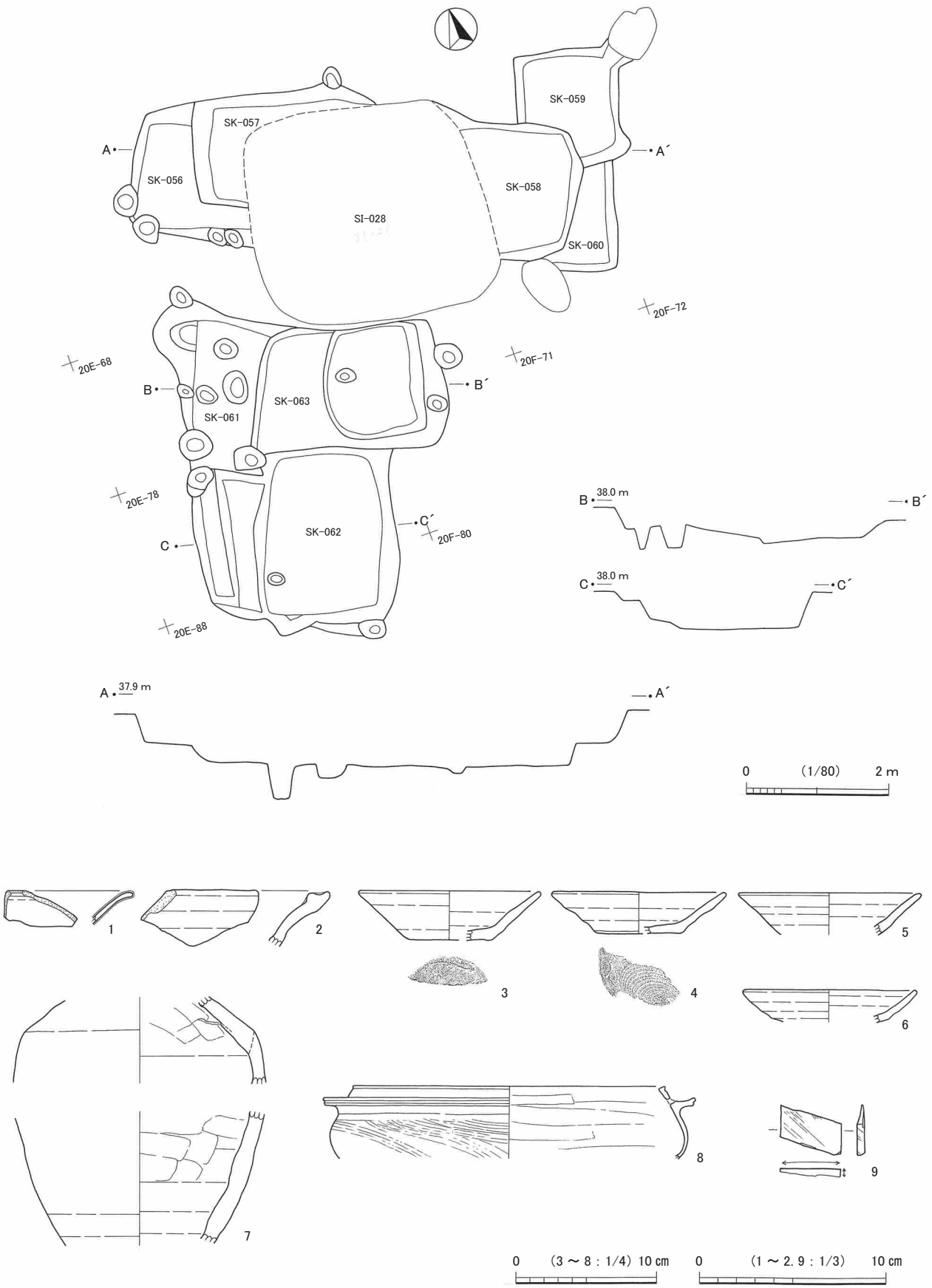
SK-061 は、東側で SK-063 と、南側で SK-062 と重複し、遺構の北西隅部分しか遺存していない。検出面からの床面の深さは 21㎝ほどである。

SK-062 は、群のなかでも最も南に位置する。現状で長軸方向が 290㎝である。床面には段差があるが、別遺構の可能性もあるかもしれない。検出面からの床面の深さは、最も深いところで 55㎝である。

SK-063 は SK-062 の北側に重複しており、西側で SK-061 と重複する。現存の規模は、短軸方向が 178㎝である。床面には段差があるが、別遺構の可能性もあるかもしれない。検出面からの床面の深さは、最も深いところで 35㎝である。

SK-058 ～ 060 を除く遺構で床面にピットが認められるが、床面からの深さは 50㎝～ 60㎝前後のものが多い。当遺構群の周辺にはピット群があるが、床面のピットだけでなく、遺構外のピットも遺構と同時に機能した可能性も考えられる。

図示した遺物は 9 点である。第 141 図 1 は龍泉窯系青磁の端反碗である。2 は瀬戸・美濃折縁深皿である。内外面に灰釉が施されるが、釉は被熱して劣化し、白っぽくなっている。古瀬戸後期様式Ⅳ期新段階に位置づけられるものと考えられる。 3 ～ 6 はカワラケ杯である。 7 は常滑壺の肩部と胴部の破片で、接点はないが同一個体と考えられ、図上で復元した。小型の壺で、復元現存器高は 17.6㎝である。外面には自然釉がみられる。 8 は東海系羽釜で、口縁部の 30％程度の遺存度である。接合しない同一個体の破片に、



第 141 図　SK-056 ～ 063 と出土遺物

焼成後穿孔が１か所認められる。９は砥石である。上下端及び裏面は欠損している。１～６・８・９はSK-061から、７はSK-060から出土した。なお、遺物はほかに、図示していないがSK-056から鉄製品、SK-059から中世陶磁器・土器の小破片が少量出土したのみで、SK-057・058・062・063からは出土していない。

SK-066（第140図、図版８）

19F-70・80・81グリッドに所在する竪穴状遺構である。平面形は径約235㎝の円形を呈する。検出面からの床面の深さは66㎝である。床面には、床面からの深さがいずれも10㎝ほどのピットが２か所、対極にみられる。また、北側の壁にも検出面からの深さ15㎝ほどのピットがある。当遺構は掘立柱建物跡SB-001の内部に位置することから、同時に機能した可能性も考えられるが、そのほかにも遺構周辺にはピットが群在しており、重複するピット１基との新旧関係は、土層断面の観察から当遺構のほうが新しい。

遺物は、混入品とみられる土器の小破片が少量出土したのみである。

SK-069（第142図、図版８・97・111）

20F-20～23・30～33・40～43グリッドに所在する竪穴状遺構である。平面形は、中央部にSD-020が重複するが、推定長軸740㎝、短軸600㎝ほどの卵形を呈するとみられる。検出面からの床面の深さは54㎝ほど、緩やかに立ち上がる壁にはピットが集中している。内部に土坑SK-075があるが、新旧関係は明らかでない。

図示した遺物は４点である。第142図１は瀬戸・美濃灰釉皿である。内外面とも釉がみられる。２は常滑片口鉢である。７型式に比定されるものと考えられる。３・４は砥石である。３は、上端は欠損している。４は上下端を欠損し、表裏面も剥落しているようである。

SK-074（第143図）

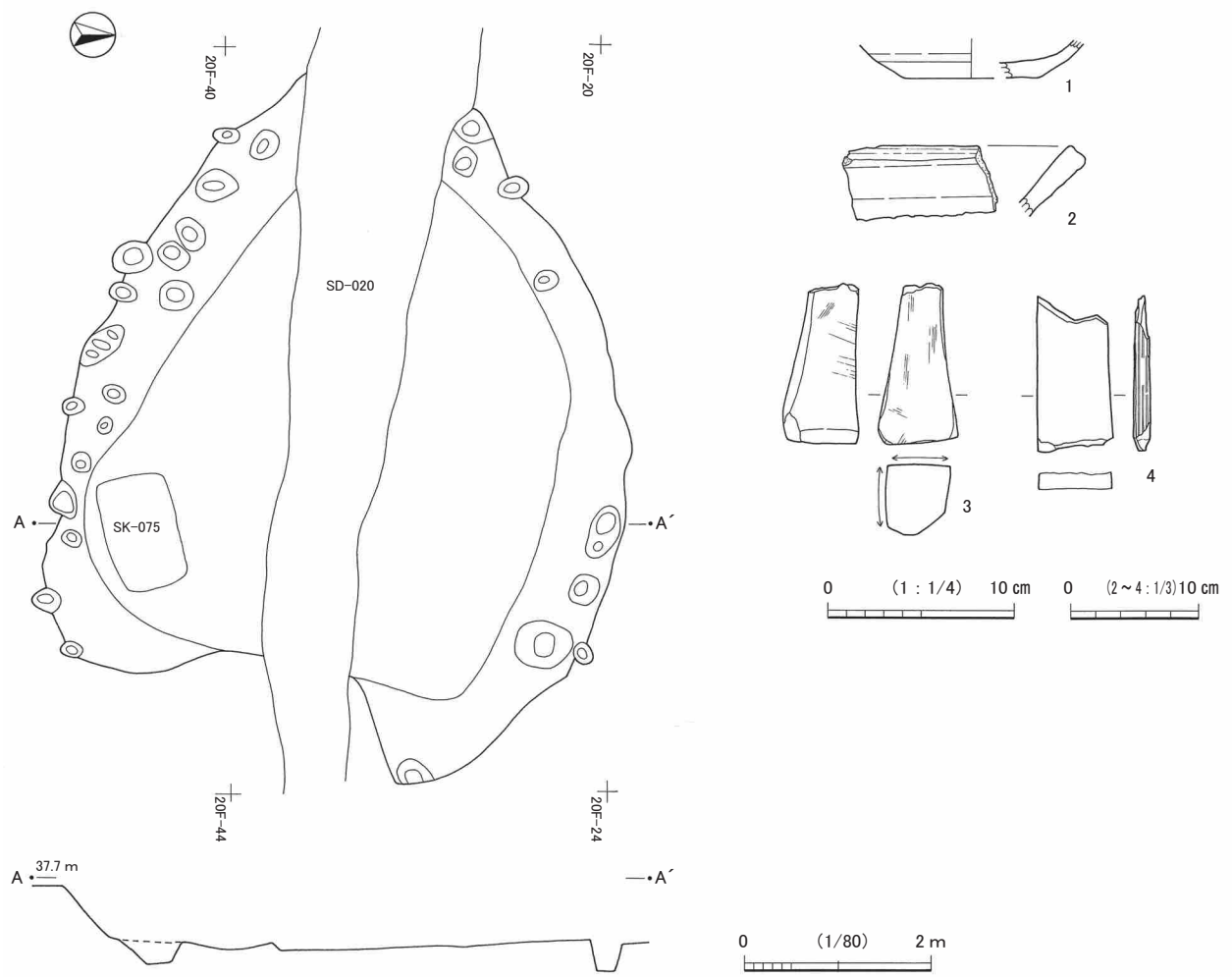
20F-80・81・90・91グリッドに所在する方形竪穴である。南側で土坑SK-033と重複するが、新旧関係は明らかでない。平面形は、長軸230㎝、短軸180㎝ほどの長方形状を呈する。検出面からの床面の深さは86㎝である。

遺物は出土していない。

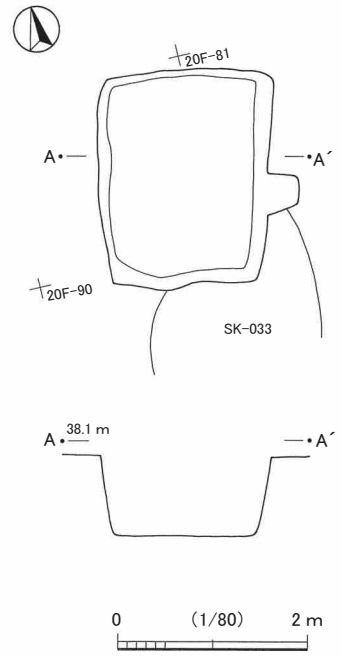
SK-099（第144図、図版10・97）

8D-85・86・95・96グリッドに所在する方形竪穴である。平面形は長軸160㎝、短軸140㎝の隅丸方形を呈する。床面は平坦であるが、壁際に深さ５㎝前後の浅い溝が巡る。検出面からの床面の深さは69㎝である。当遺構は掘立柱建物跡群中に位置しており、特にSB-004のプラン内に同じ軸方向で収まることから、関連性も考えられる。

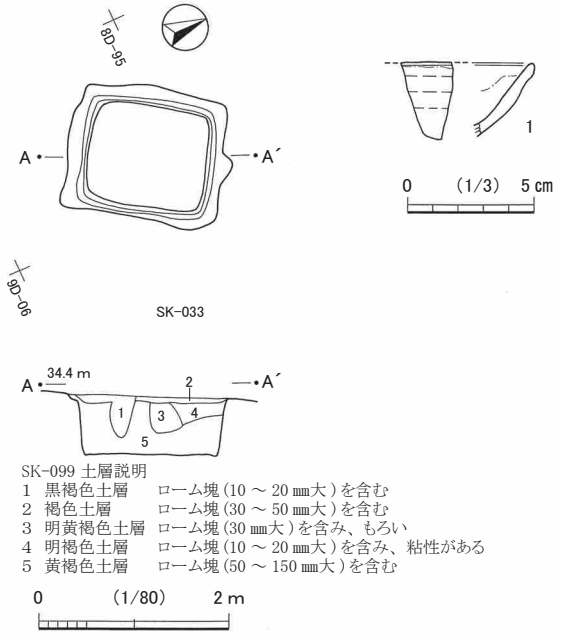
図示した遺物は１点である。第144図１は、瀬戸・美濃縁釉小皿である。灰釉が施される。古瀬戸後期様式Ⅳ期新段階に位置づけられるものと考えられる。遺物はほかに、近世以降陶磁器の小破片も少量出土した。



第 142 図　SK-069 と出土遺物



第 143 図　SK-074



第 144 図　SK-099 と出土遺物

SK-114（第 145 図）

8C-63・64 グリッドに所在する方形竪穴である。平面形は、長軸 245㎝、短軸 187㎝の長方形である。検出面からの床面の深さは 24㎝である。

遺物は、混入品とみられる土器の小破片が少量出土したのみである。

4SK-001（第 146 図、図版 11・111・116）

16E-04・05・14・15 グリッドに所在する方形竪穴である。平面形は、長軸 248㎝、短軸 220㎝の隅丸方形である。検出面からの床面の深さは 71㎝である。床面には、深さ 10㎝程度の落込みが 1 か所ある。また、壁際にはピットが 6 か所認められる。ピットの床面からの深さは、四隅のものは 20㎝前後だが、北辺中央部のものは 42㎝、南辺中央部のものは 34㎝である。

図示した遺物は 2 点である。第 146 図 1 は砥石である。上下端は欠損している。 2 は鉄釘である。頭部と先端のそれぞれごく一部が欠損している。ほかには、混入品とみられる土器の小破片が少量出土したのみである。

4SK-002（第 147 図）

16E-15 ～ 17・25 ～ 27・36・37 グリッドに所在する方形竪穴である。平面形は、複数の方形竪穴が重複しているような形状を呈するが、現状で長軸は 450㎝、短軸は 395㎝ほどである。床面は、東側にやや段状を呈する部分があるがほぼ平坦で、検出面からの床面の深さは 30㎝前後である。床面には、深さそれぞれ 12㎝・19㎝の 2 基のピットがみられる。

遺物は、図示はしていないが、中・近世以降陶磁器及び土器の小破片と銭貨の破片が少量出土した。銭貨は大破しており、銭種も不明である。

4SK-003（第 148 図、図版 11）

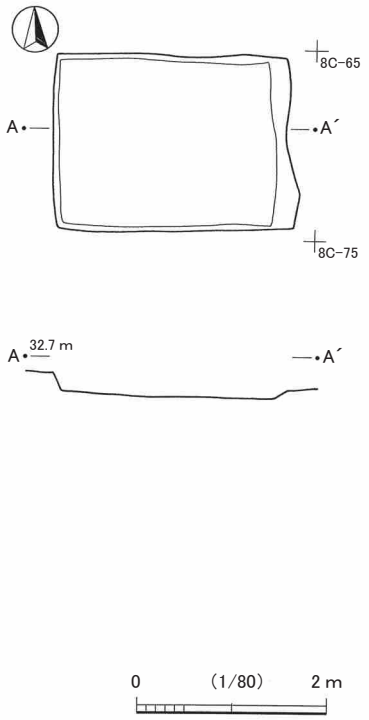
15E-86 ～ 88・96・97 グリッドに所在する方形竪穴である。平面形は、長軸 322㎝、短軸 214㎝の長方形状を呈する。床面には段差があり、北側の部分より南側の部分のほうが深く、南側の部分は中央が最も高く東西にそれぞれ 5 ㎝前後下がる。検出面からの床面の深さは、北側が 28㎝、南側中央部が 47㎝である。また、南側部分の東壁沿いに、床面からの深さ 4 ㎝ほどのピットが 1 か所ある。複数の遺構が重複している可能性もあるかもしれない。

遺物は、混入品とみられる土器の小破片が少量出土したのみである。

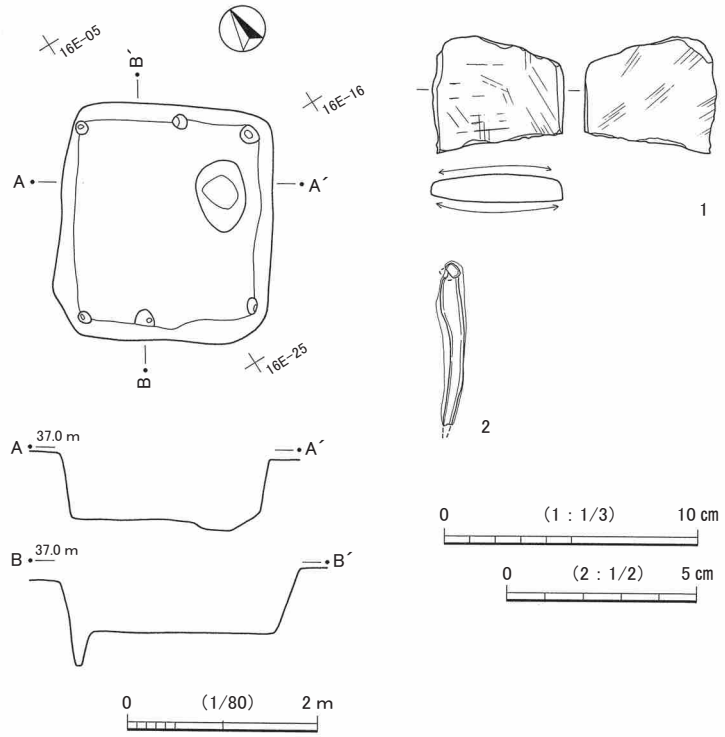
4SK-005（第 149 図、図版 93・94・116）

16E-12 ～ 14・23 ～ 25 グリッドに所在する方形竪穴である。本調査区の境界に位置し、全体を調査することはできなかった。平面形は複数の方形竪穴が重複しているような形状を呈し、床面の高さにも部分的に若干の段差がある。規模は、現状で長軸 700㎝、短軸 200㎝である。検出面からの床面の深さは、最も西側の部分で 40㎝、その東側の部分で 23㎝、最も東側の部分で 36㎝、最も広い中央部分で 31㎝である。

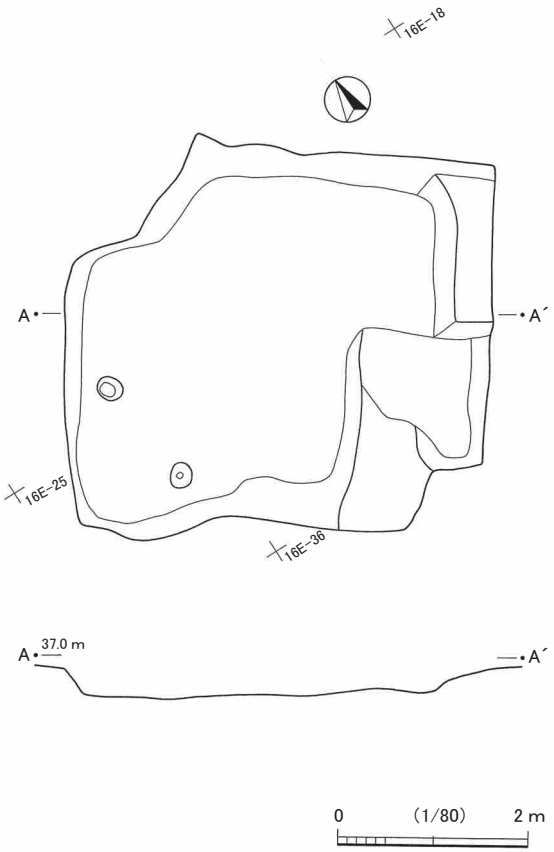
図示した遺物は 3 点である。第 149 図 1 ・ 2 は瀬戸・美濃製品である。 1 は入子で、全体の 50％ほどの遺存度である。口唇部にはキザミが施され、輪花状を呈している。遺存しているキザミは 4 か所であるが、



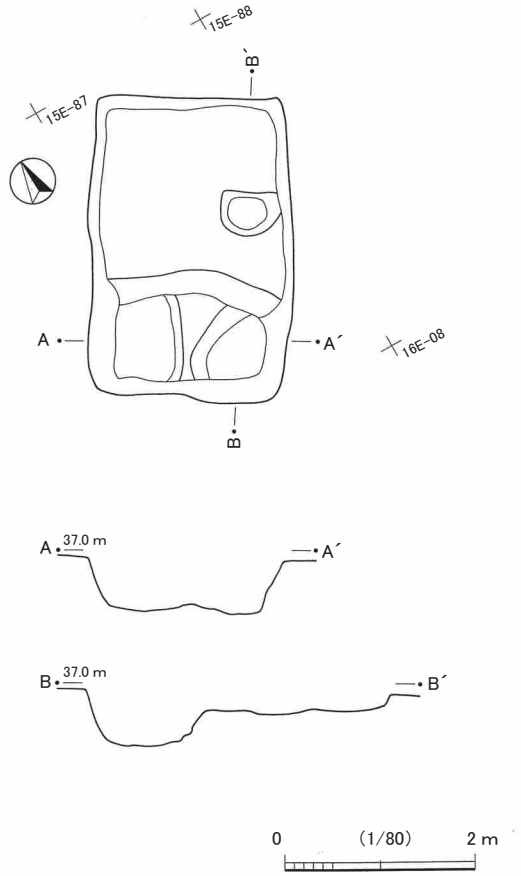
第 145 図　SK-114



第 146 図　4SK-001 と出土遺物



第 147 図　4SK-002



第 148 図　4SK-003

全体では８か所と推定される。色調は、外面は白褐色、内面はにぶい赤褐色を呈している。内面に紅とみられるものが付着しており、紅皿として使用されたようである。古瀬戸中期様式に位置づけられるものと考えられる。２は花瓶である。口縁部と高台部は欠損しているが、最大径 6.4㎝、現存器高 7.8㎝である。図の左右２か所には環耳が付くが、環耳は欠損している。頸部には変形文、胴部には印花文が、図の表面及び裏面に対照的に施されている。やや青みがかった暗赤褐色の鉄釉が外面全体に施され、内面頸部の上方にもみられる。古瀬戸中期様式に位置づけられるものである。３は板状の鉄製品である。ほかに、図示はしていないが、銭貨の小破片が出土している。銭貨は大破しており、銭種も不明である。

4SK-008（第 150 図、図版 11・97）

15D-69・79、15E-60 グリッドに所在する方形竪穴である。平面形は長軸 255㎝、短軸 131㎝の長方形状を呈する。床面は平坦で、検出面からの床面の深さは 40㎝である。北辺に接してピットがみられるが、遺構周辺にはピットが群在しており、必ずしも当遺構に付随するものでない可能性もある。ピットの検出面からの深さは 22㎝である。

図示した遺物は 1 点である。第 150 図 1 は瀬戸・美濃縁釉小皿の底部片である。遺存部分には釉は認められない。

4SK-009（第 151 図、図版 11・109）

14E-90・91、15E-00・01 グリッドに所在する方形竪穴である。平面形は長軸 220㎝、短軸 135㎝ほどの隅丸方形状を呈する。検出面からの床面の深さは 54㎝である。新旧関係は不明であるが、南西隅部分で方形竪穴 4SK-010 と重複している。

図示した遺物は 1 点である。第 151 図 1 は、常滑甕の転用砥石である。上下破断面が使用されている。

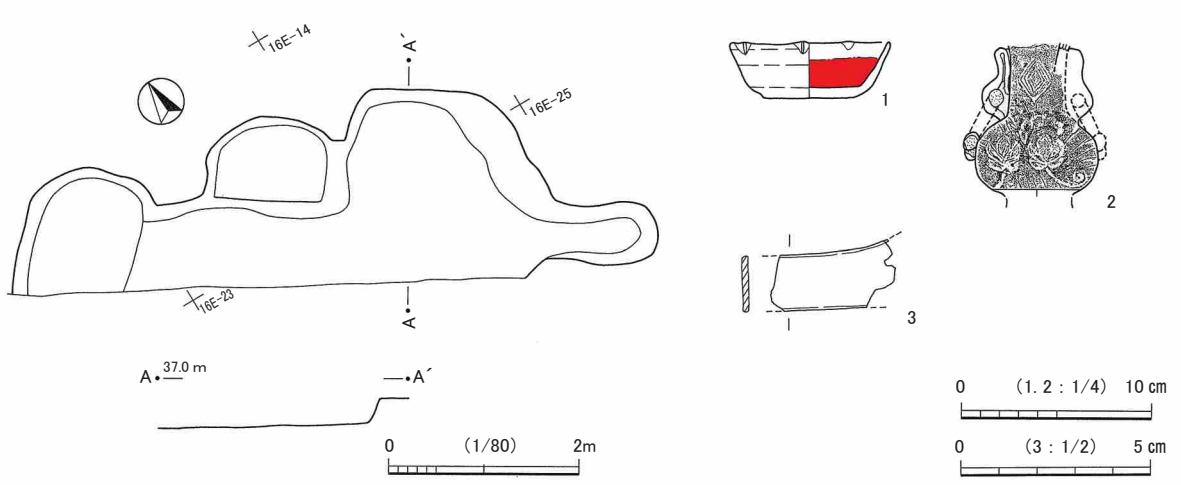
4SK-010（第 152 図、図版 11・97・116）

14D-99、14E-90、15D-09、15E-00 グリッドに所在する方形竪穴である。複数の遺構が重複しているような状況を呈しており、全体の規模は、長軸 485㎝、短軸 330㎝ほどである。床面は部分的に段差が生じているが、概ね中央部分が縁辺部分より深く、中央部分の検出面からの深さは、最も深い東寄りの部分で 70㎝、西寄りの部分で 62㎝、北側の部分で 57㎝である。縁辺部分についてはいずれも 35㎝前後である。床面や壁際にピットがいくつかみられる。北東部で方形竪穴 4SK-009 と、南西部で方形竪穴 4SK-011 と重複しているが、いずれも新旧関係は明らかでない。

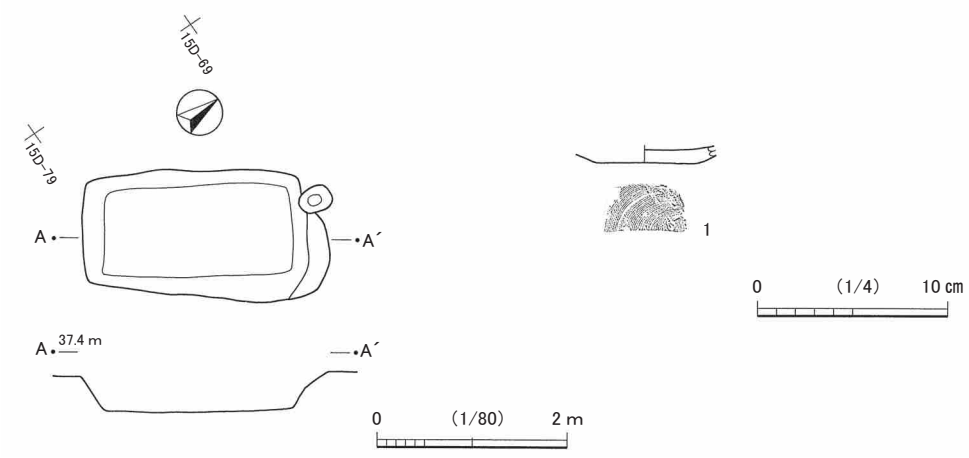
図示した遺物は 2 点である。第 152 図 1 は、瓦質土器である。横走する 1 条の沈線を挟んで上にはハート形文、下には珠文の押印文がそれぞれ巡る。器面は火を受けたように劣化しており、火鉢かもしれない。２は鉄釘である。頭部を欠損する。

4SK-011（第 153 図、図版 12・111）

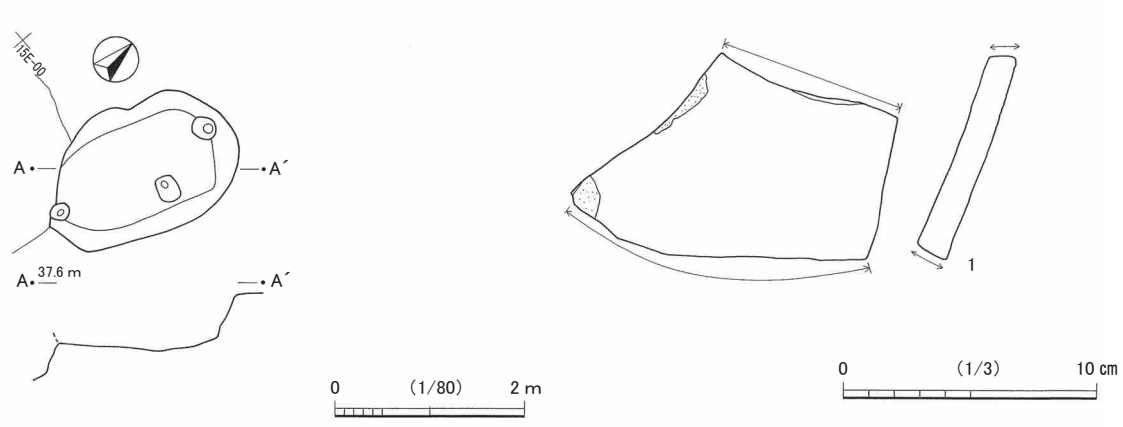
15D-08・09・18・19 グリッドに所在する方形竪穴である。平面形は、長軸 318㎝、短軸 200㎝の隅丸方形状を呈する。検出面からの深さは 60㎝である。東辺には検出面からの深さ 33㎝のピットが接している。南側で地下式坑 4SK-012 と重複しているが、新旧関係は明らかでない。



第 149 図　4SK-005 と出土遺物

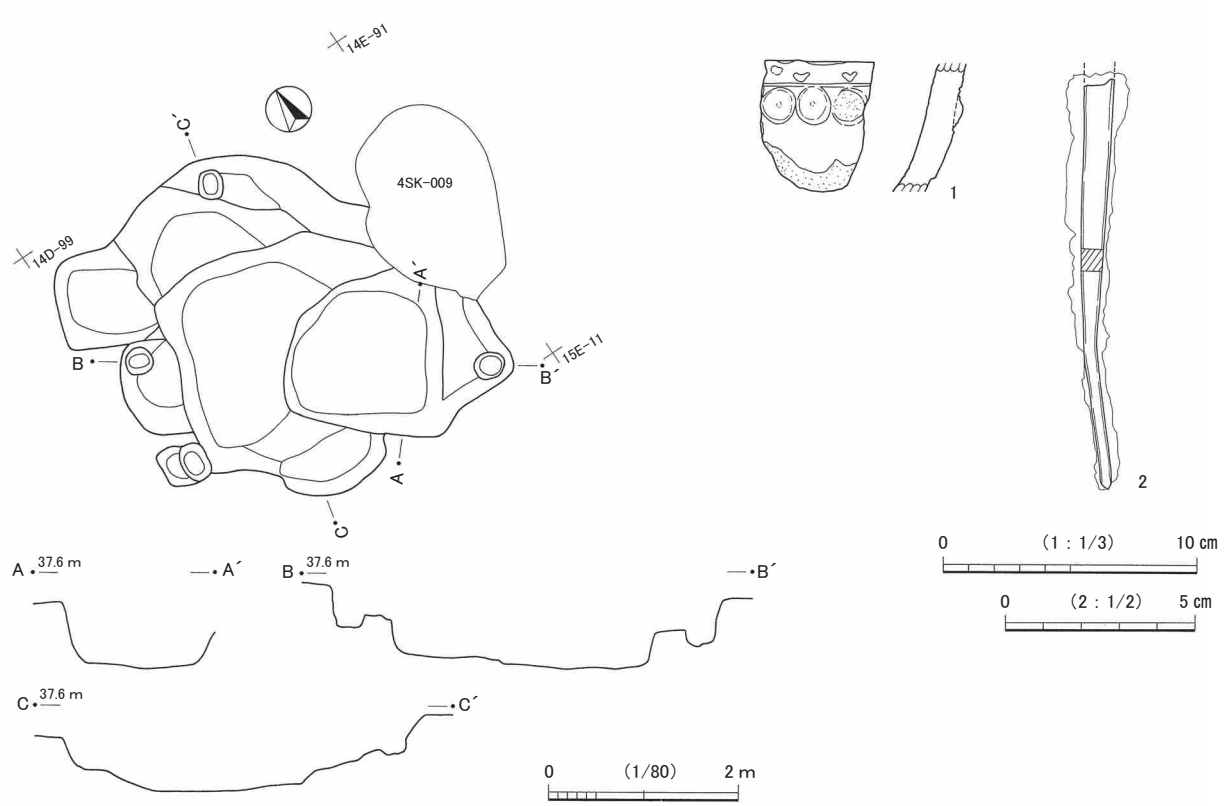


第 150 図　4SK-008 と出土遺物

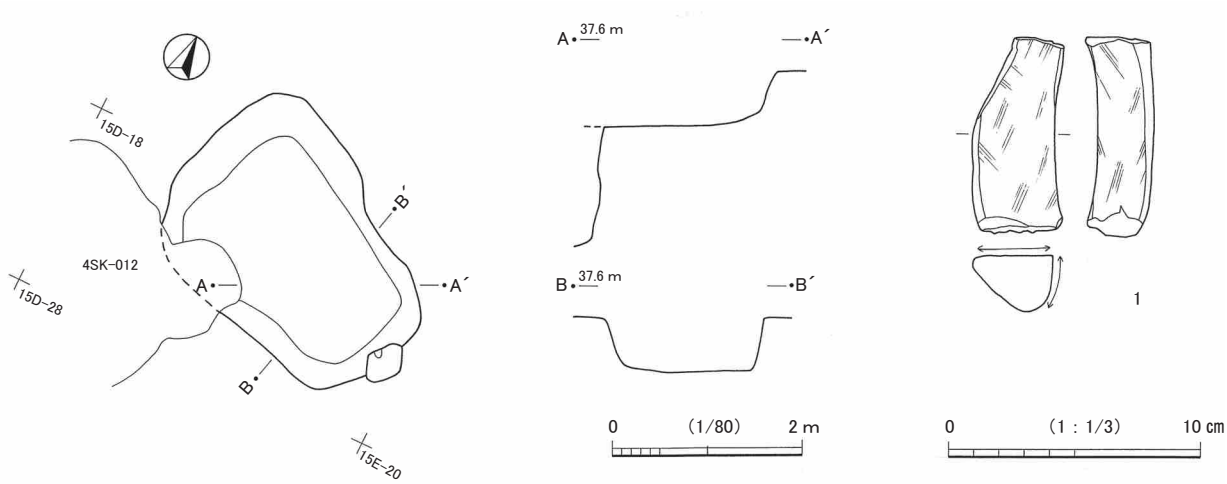


第 151 図　4SK-009 と出土遺物

図示した遺物は 1 点である。第 153 図 1 は砥石である。上下端は欠損している。遺物はほかには中世陶磁器・土器の小破片が少量出土しているが、図示していない。



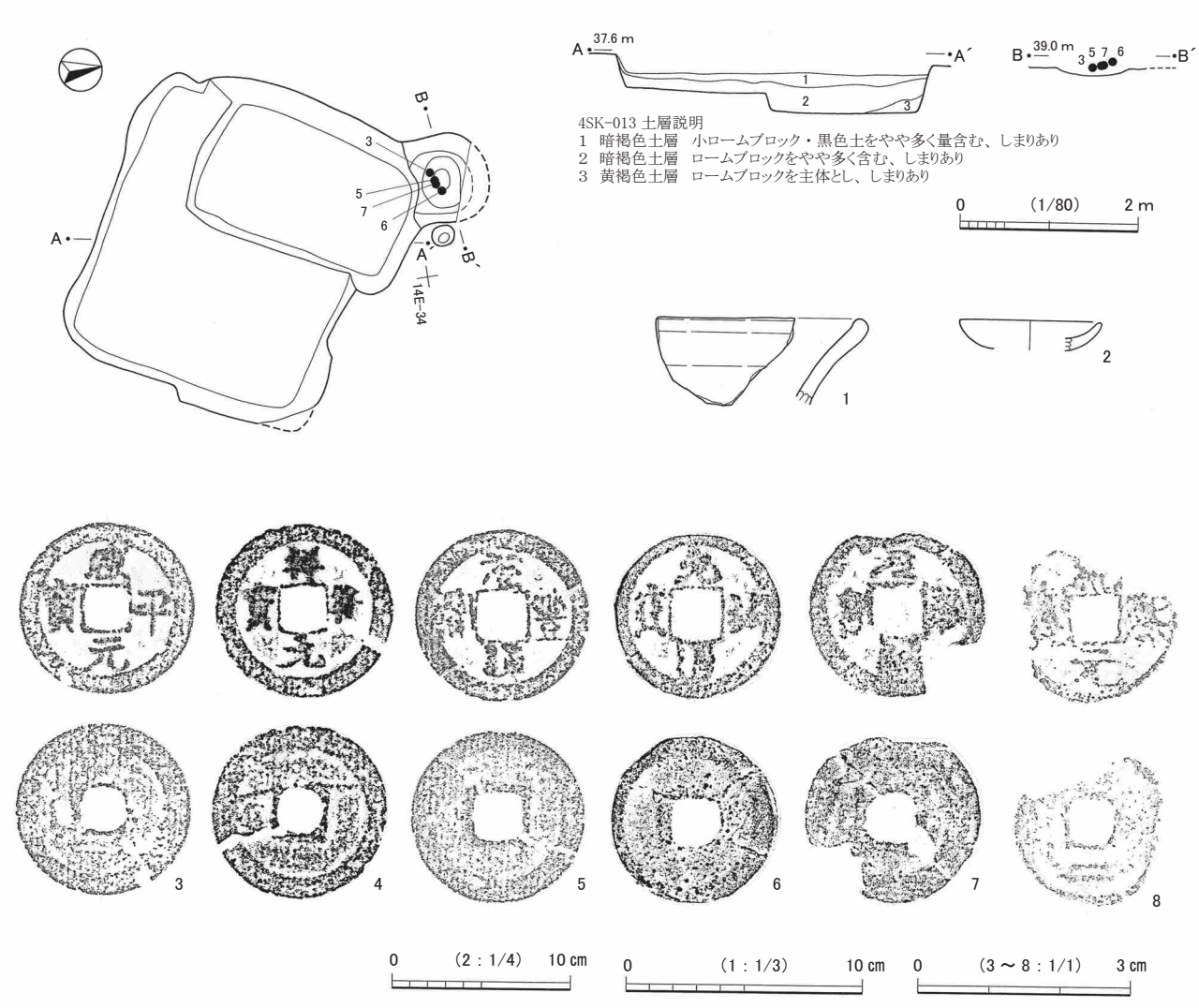
第 152 図　4SK-010 と出土遺物



第 153 図　4SK-011 と出土遺物

4SK-013（第 154 図、図版 12・97・122）

14E-23・32 ～ 34・42 ～ 44 グリッドに所在する方形竪穴である。長軸 370㎝、短軸 330㎝ほどの隅丸方形の北隅部に径 100㎝ほどの円形土坑が付随しているような平面形を呈する。方形の部分は２基の方形竪穴が重複しているようにも見えるが、土層断面の観察では切合い関係は認められず、同時に埋没したことが明らかである。円形の部分については、方形の部分との関係ははっきりしない。床面は、方形の部分は平坦であるが、北側の部分と南側の部分とで段差がある。検出面からの深さは北側の部分が深く 70㎝、南側の部分が 46㎝である。円形の部分は 74㎝である。なお、当遺構の南 40㎝先には、大量の銭貨を出



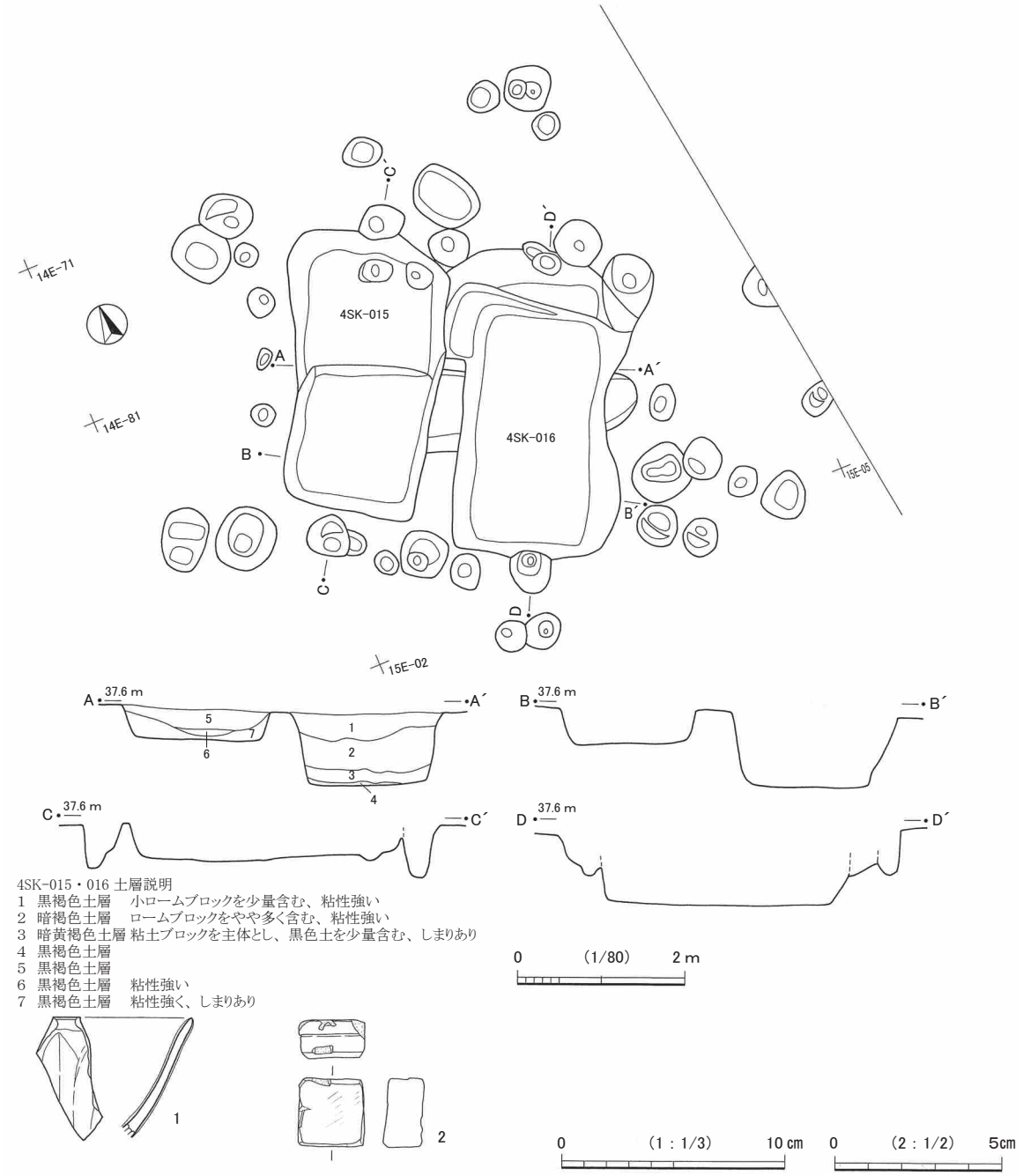
第 154 図　4SK-013 と出土遺物

土した土坑 4SK-014 が存在する。

図示した遺物は８点である。第 154 図１は常滑片口鉢で、Ⅰ類に分類されるものである。色調は内外面とも灰色を呈する。外面には自然釉がかかる。２はカワラケ小皿である。器面が摩耗している。３～８は銭貨である。３は咸平元寳、４は祥符元寳である。５は元豊通寳で、書体は篆書である。背面は無文である。６・７は元祐通寳で、書体は６が行書、７が篆書である。いずれも背面は無文とみられる。７は腐食して遺存状態が悪い。８は紹熙元寳である。遺存状態は悪いが、背面に「二」が観察される。銭貨は全て北隅部の円形土坑状の部分から出土し、３・５～７は底面付近のレベルから出土した。遺物はほかには、図示していないが、山茶碗と中・近世以降陶磁器及び土器の小破片が少量出土した。

4SK-015・016（第 155 図、巻頭図版 7、図版 12・97・110）

14E-72･73･81 ～ 84･92･93 グリッドに所在する方形竪穴群である。並んで存在する２基とみられるが、それぞれ複数の遺構が重複している可能性もある。平面形は、4SK-015 が概ね長軸 333㎝、短軸 160㎝、4SK-016 が長軸 365㎝、短軸 180㎝ほどの、いずれも隅丸方形状を呈している。周囲にはピットが多数



第 155 図　4SK-015・016 と出土遺物

みられ、これら遺構に関連するものと考えられる。底面は全体的に平坦ではあるが、いずれも部分的に段差がみられる。4SK-015 は、南半分のほうが北半分よりやや深く、検出面からの深さは 50㎝である。北半分は 41㎝である。4SK-016 の検出面からの深さは 83㎝であるが、北側に 30㎝ほど高い段差がある。

図示した遺物は 2 点である。いずれも 4SK-016 の覆土中から出土したもので、4SK-015 からは遺物は出土していない。第 155 図 1 は龍泉窯系青磁の鎬蓮弁文碗である。2 は、用途等不明であるが、立方体状を呈する土製品である。図上面には浅い溝が入るようである。色調は暗灰色を呈し、須恵器か瓦のような質感であるが、転用砥石ではなく、完形の土製品と考えられる。

4SK-018 ～ 022（第 156 図、図版 12）

14D-69・79、14E-40・50・60・70 グリッドに所在する５基の方形竪穴群である。南北方向に延びる溝状遺構 4SD-005 の東側沿いに、南北に列状に重複して存在している。4SK-018 は 4SD-005 に切られているが、ほかの遺構については現存の電柱に阻まれ調査できず、4SD-005 との関係は不明である。各方形竪穴の新旧関係は、土層断面の観察から、4SK-018 より 4SK-019 が新しい。また、4SK-019 より 4SK-020 が新しく、4SK-020 と 4SK-022 より 4SK-021 が新しいと判断される。覆土は全て粘性があった。

遺物は、いずれの遺構からも出土していない。

4SK-024（第 157 図、巻頭図版 7、図版 12・97）

13D-43・52 ～ 54・63・64 グリッドに所在する方形竪穴である。遺構の状態や土層断面の観察から、少なくとも３基が重複していると考えられる。最も新しい遺構は中央部に位置する方形竪穴で、一辺 220㎝程度の正方形状を呈するとみられる。次に新しい遺構は中央から南東方向にずれてあるもので、一辺 250㎝ほどの正方形状を呈するとみられる。最も古い遺構は中央から西側にずれてあるもので、西辺は 210㎝ほどであるが、そのほかの辺の長さは不明である。床面は全て基本的に平坦であるが、段差を生じている部分もある。検出面からの深さは、最も新しい遺構と次に新しい遺構は 90㎝前後でほとんど同じであるが、最も古い遺構は 68㎝で、それらより床面がやや高い。また、南側には深さ 13㎝の張り出した部分があるが、土層断面の観察から更に別の遺構である可能性がある。

図示した遺物は２点である。第 157 図 1 は青磁皿で、見込み部分に貼付双魚文がある。２はカワラケ杯である。

4SK-025（第 158 図、図版 12）

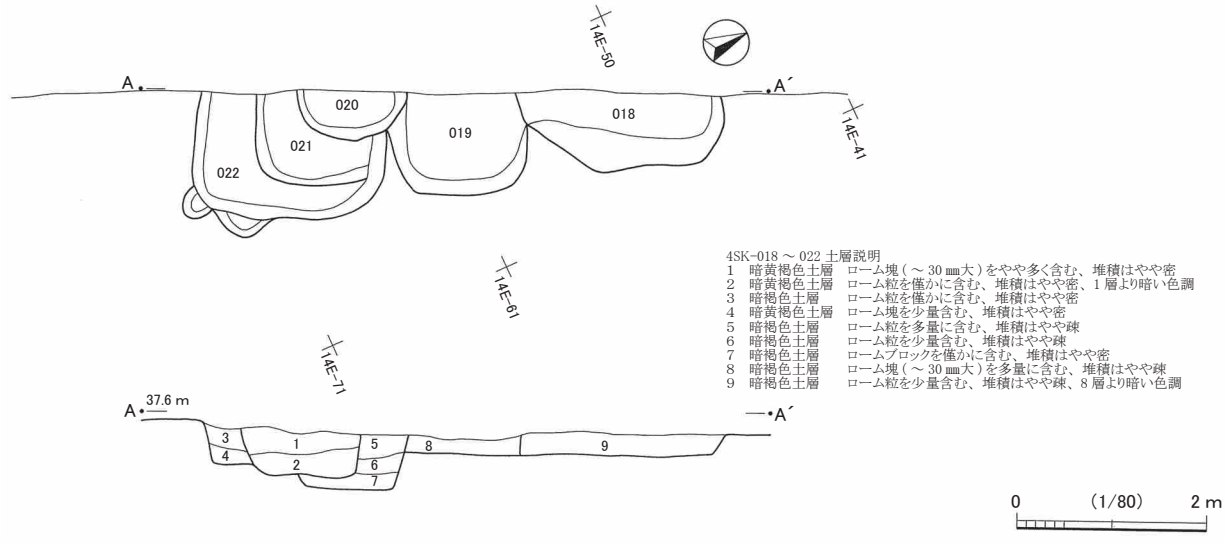
13D-24・25・34・35 グリッドに所在する方形竪穴である。平面形は 1 辺 230㎝ほどの不整正方形状を呈し、床面は平坦であるが、土層断面の観察から南北軸を長辺とする２基の遺構が東西に重複しているものと考えられる。西側の遺構のほうが新しく、その東西幅は 170㎝ほどとみられる。検出面からの深さはいずれも 65㎝ほどである。

遺物は、図示していないが中世陶磁器の小破片が少量出土した。

4SK-026・027（第 159 図、図版 13）

12D-72 ～ 74・83・84 グリッドに、隣接して所在する方形竪穴群である。4SK-027 の西側に位置する 4SK-026 は、長軸 145㎝、短軸 135㎝の方形を呈する。床面は平坦だが、北東隅部と南東隅部にピットがある。検出面からの床面の深さは 21㎝で、ピットの床面からの深さは北東隅部のものが 25㎝、南東隅部のものが６㎝である。4SK-026 の東側に位置する 4SK-027 は、土層断面の観察から、少なくとも東西２基の方形竪穴が重複していると考えられる。また、南側に張り出す部分は別の土坑の可能性があるが、現状で平面形は長軸 315㎝、短軸 230㎝ほどである。

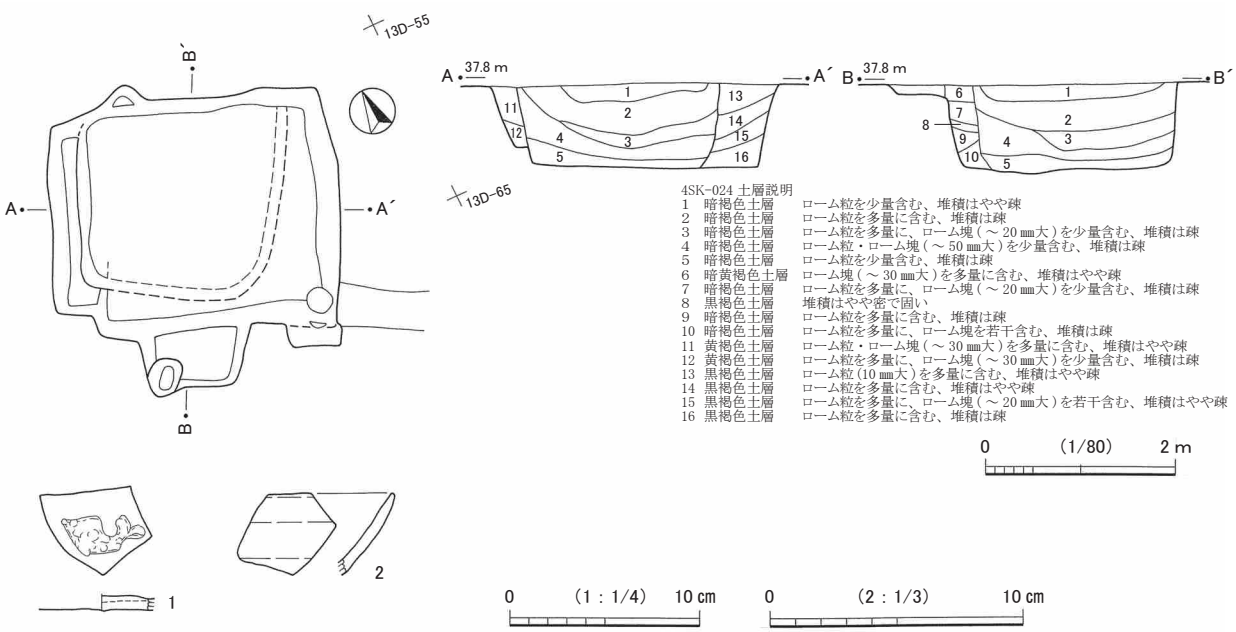
遺物は、図示していないが、いずれの遺構からも中世土器の小破片が少量出土した。



4SK-018 ～ 022 土層説明

1	暗黄褐色土層	ローム塊 (～ 30 ㎜大) をやや多く含む、堆積はやや密
2	暗黄褐色土層	ローム粒を僅かに含む、堆積はやや密、1 層より暗い色調
3	暗褐色土層	ローム粒を僅かに含む、堆積はやや密
4	暗黄褐色土層	ローム塊を少量含む、堆積はやや密
5	暗褐色土層	ローム粒を多量に含む、堆積はやや疎
6	暗褐色土層	ローム粒を少量含む、堆積はやや疎
7	暗褐色土層	ロームブロックを僅かに含む、堆積はやや密
8	暗褐色土層	ローム塊 (～ 30 ㎜大) を多量に含む、堆積はやや疎
9	暗褐色土層	ローム粒を少量含む、堆積はやや疎、8 層より暗い色調

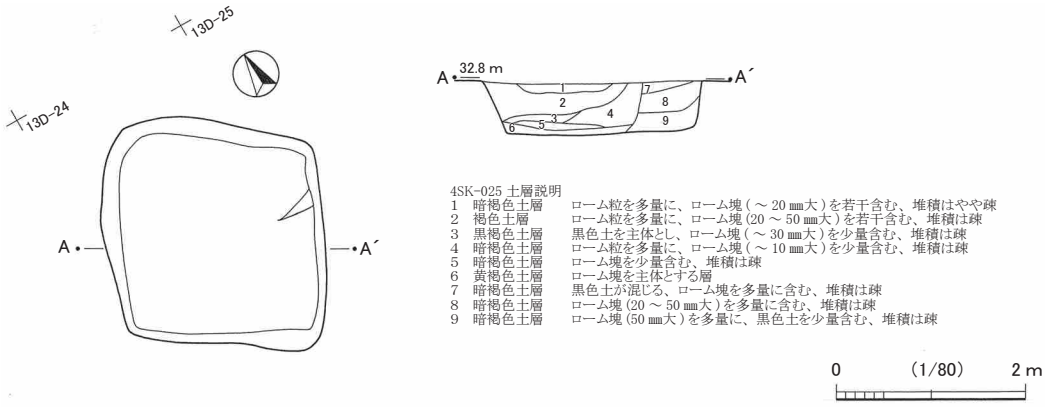
第 156 図　4SK-018 ～ 022



4SK-024 土層説明

1	暗褐色土層	ローム粒を少量含む、堆積はやや疎
2	暗褐色土層	ローム粒を多量に含む、堆積は疎
3	暗褐色土層	ローム粒を多量に、ローム塊 (～ 20 ㎜大) を少量含む、堆積は疎
4	暗褐色土層	ローム粒・ローム塊 (～ 50 ㎜大) を少量含む、堆積は疎
5	暗褐色土層	ローム粒を少量含む、堆積は疎
6	暗黄褐色土層	ローム塊 (～ 30 ㎜大) を多量に含む、堆積はやや疎
7	暗褐色土層	ローム粒を多量に、ローム塊 (～ 20 ㎜大) を少量含む、堆積は疎
8	黒褐色土層	堆積はやや密で固い
9	暗褐色土層	ローム粒を多量に含む、堆積は疎
10	暗褐色土層	ローム粒を多量に、ローム塊を若干含む、堆積は疎
11	黄褐色土層	ローム粒・ローム塊 (～ 30 ㎜大) を多量に含む、堆積はやや疎
12	黄褐色土層	ローム粒を多量に、ローム塊 (～ 30 ㎜大) を少量含む、堆積は疎
13	黒褐色土層	ローム粒 (10 ㎜大) を多量に含む、堆積はやや疎
14	黒褐色土層	ローム粒を多量に含む、堆積はやや疎
15	黒褐色土層	ローム粒を多量に、ローム塊 (～ 20 ㎜大) を若干含む、堆積はやや疎
16	黒褐色土層	ローム粒を多量に含む、堆積は疎

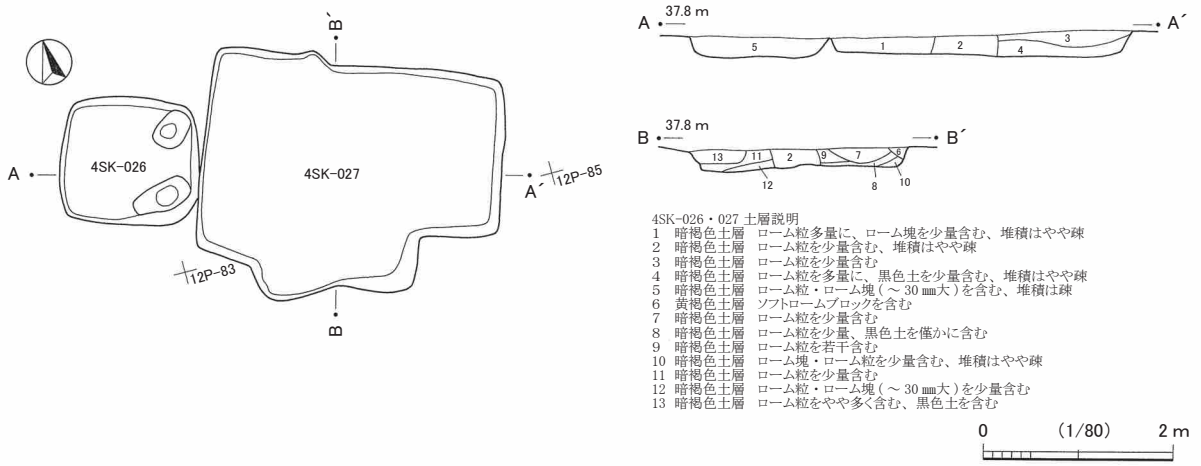
第 157 図　4SK-024 と出土遺物



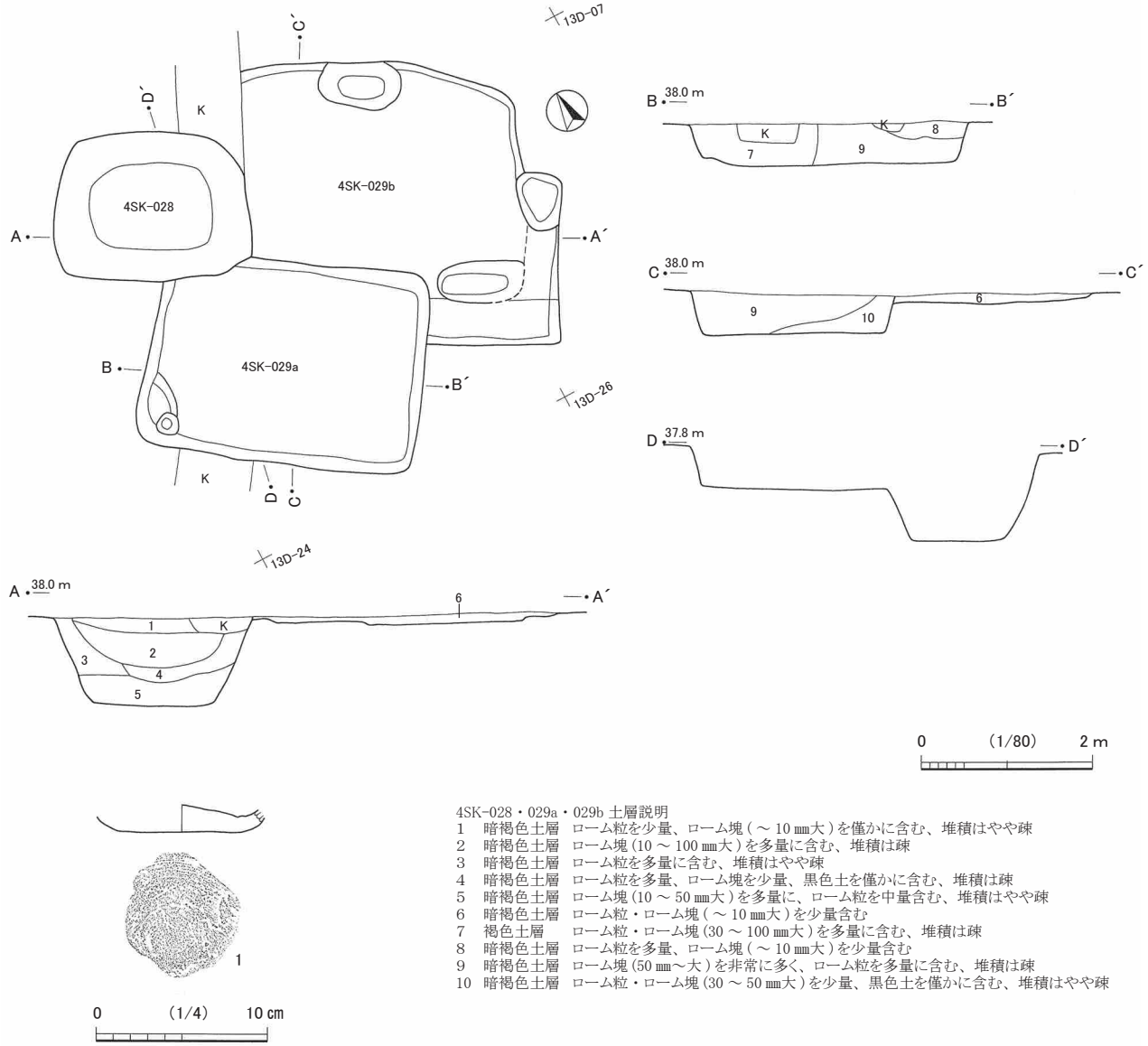
4SK-025 土層説明

1	暗褐色土層	ローム粒を多量に、ローム塊 (～ 20 ㎜大) を若干含む、堆積はやや疎
2	褐色土層	ローム粒を多量に、ローム塊 (20 ～ 50 ㎜大) を若干含む、堆積は疎
3	黒褐色土層	黒色土を主体とし、ローム塊 (～ 30 ㎜大) を少量含む、堆積は疎
4	暗褐色土層	ローム粒を多量に、ローム塊 (～ 10 ㎜大) を少量含む、堆積は疎
5	暗褐色土層	ローム塊を少量含む、堆積は疎
6	黄褐色土層	ローム塊を主体とする層
7	暗褐色土層	黒色土が混じる、ローム塊を多量に含む、堆積は疎
8	暗褐色土層	ローム塊 (20 ～ 50 ㎜大) を多量に含む、堆積は疎
9	暗褐色土層	ローム塊 (50 ㎜大) を多量に、黒色土を少量含む、堆積は疎

第 158 図　4SK-025



第 159 図　4SK-026・027



第 160 図　4SK-028・029a・029b と出土遺物

4SK-028・029a・029b（第 160 図、図版 13・98）

12D-93 ～ 96、13D-03 ～ 06・13 ～ 16 グリッドに、重複して所在する方形竪穴群である。当初 4SK-028・029 の２基の方形竪穴と考えたが、4SK-029 が２基の重複であることが明らかとなり、深くて新しい方を 4SK-029a、浅くて古い方を 4SK-029b として調査した。更に、土層断面の観察から 4SK-029a は２基の方形竪穴の重複であることが判明した。また、4SK-029b の東側にも別の方形竪穴の隅と考えられる部分が重複していることが明らかとなったが、いずれも遺構番号は別には付さなかった。

4SK-028 は、長軸 227㎝、短軸 175㎝の隅丸方形を呈する方形竪穴で、土層断面の観察から、東側で重複している 4SK-029b より新しいとみられる。検出面からの床面の深さは 105㎝である。

4SK-029a は２基が東西に重複しているとみられる方形竪穴で、4SK-028･4SK-029b とも重複している。現状で長軸 320㎝、短軸 235㎝の方形を呈する。床面は平坦で、検出面からの深さは重複する２基でほとんど差はなく、50㎝前後である。西隅部分が床面より 10㎝程度高まっており、そこに浅いピットが１か所ある。

4SK-029b は、西側に撹乱があり、東側には別の遺構が重複しているが、規模は長軸 360㎝、短軸 270㎝ほどと推定される。検出面からの深さは８㎝である。北側と南側の壁際には、それぞれ床面からの深さ６㎝、13㎝のピットがある。

図示した遺物は１点である。第 160 図１は、4SK-028 から出土したカワラケ杯である。器面は著しく摩耗している。ほかにも、図示はしていないが、4SK-028 から近世以降陶磁器の小破片が少量と、4SK-029a・029b から中世陶磁器・土器の小破片が少量出土した。

4SK-030（第 161 図、図版 13・111）

13D-19・29、13E-10・11・20・21 グリッドに所在する方形竪穴である。現状で一辺 330㎝ほどの正方形を呈しているが、土層断面の観察から２基の遺構が重複していると考えられる。但し、床面は平坦で段差はなく、検出面からの深さは 76㎝ほどである。また、方形竪穴 4SK-036 と接しており、土層断面の観察から、4SK-036 より新しいとみられる。

図示した遺物は１点である。第 161 図１は砥石と考えられる。砂岩製で、特に表裏面が平滑になっているが、ほぼ全面的に擦痕が認められる。ほかには、図示していないが、中世土器の小破片が少量出土した。

4SK-031（第 162 図、図版 13）

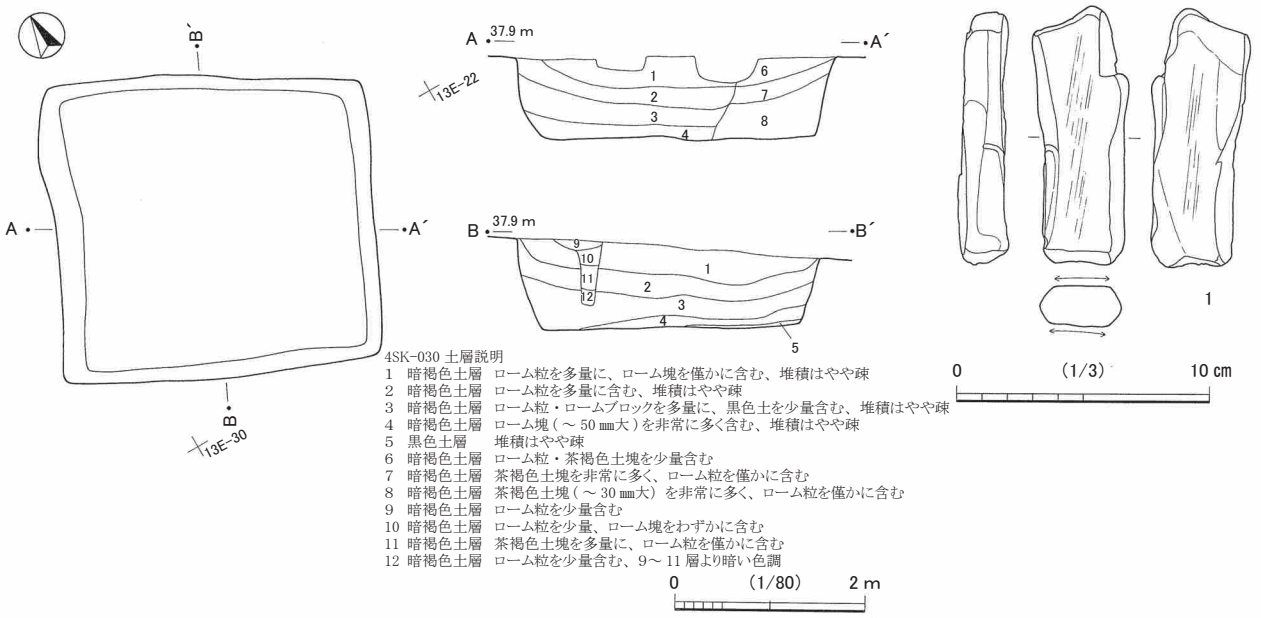
12D-46・47・56 ～ 58・66 ～ 68 グリッドに所在する方形竪穴である。平面形は長軸 480㎝、短軸 300㎝の長方形を呈する。検出面からの床面の深さは 100㎝ほどで、南壁及び東壁・西壁の南側にかけて、床面からの深さ５㎝前後の壁溝が廻っている。

遺物は、図示していないが、中世陶磁器・土器の小破片が少量出土した。

4SK-032a ～ 032c・033（第 163 図、図版 13・122）

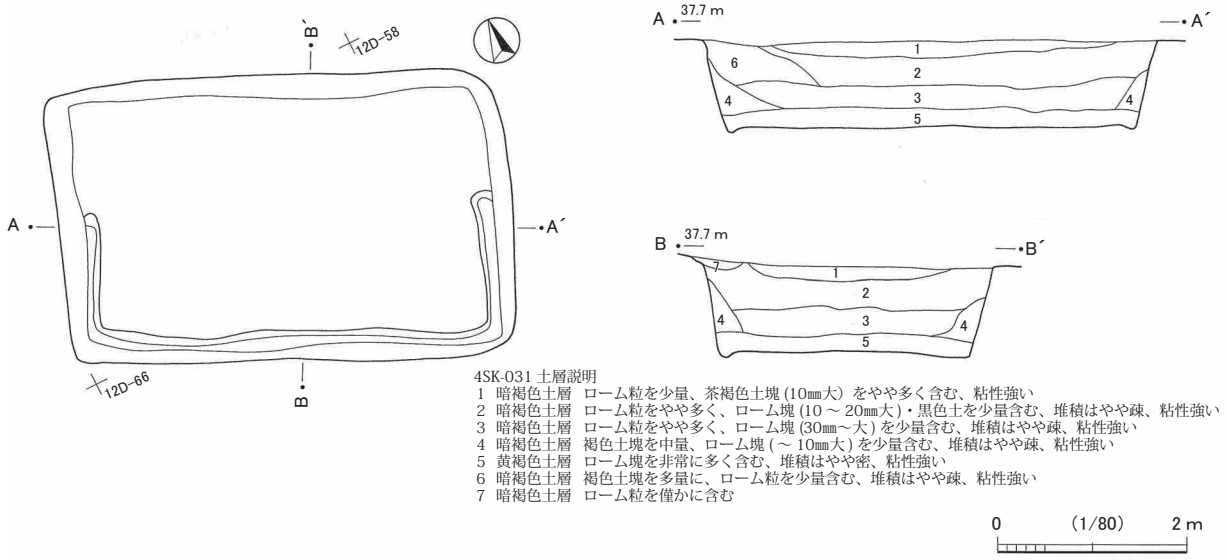
12D-82・90 ～ 92・93、13D-00 ～ 02 グリッドに、重複或いは接して所在する方形竪穴群である。

4SK-032 は、３基の方形竪穴と１基又は２基の土坑が重複している。３基の方形竪穴については、北側のものを 4SK-032a、東側のものを 4SK-032b、南側のものを 4SK-032c として調査した。新旧関係は、



4SK-030 土層説明
1　暗褐色土層　ローム粒を多量に、ローム塊を僅かに含む、堆積はやや疎
2　暗褐色土層　ローム粒を多量に含む、堆積はやや疎
3　暗褐色土層　ローム粒・ロームブロックを多量に、黒色土を少量含む、堆積はやや疎
4　暗褐色土層　ローム塊（～50㎜大）を非常に多く含む、堆積はやや疎
5　黒色土層　堆積はやや疎
6　暗褐色土層　ローム粒・茶褐色土塊を少量含む
7　暗褐色土層　茶褐色土塊を非常に多く、ローム粒を僅かに含む
8　暗褐色土層　茶褐色土塊（～30㎜大）を非常に多く、ローム粒を僅かに含む
9　暗褐色土層　ローム粒を少量含む
10　暗褐色土層　ローム粒を少量、ローム塊をわずかに含む
11　暗褐色土層　茶褐色土塊を多量に、ローム粒を僅かに含む
12　暗褐色土層　ローム粒を少量含む、9～11層より暗い色調

第161図　4SK-030と出土遺物

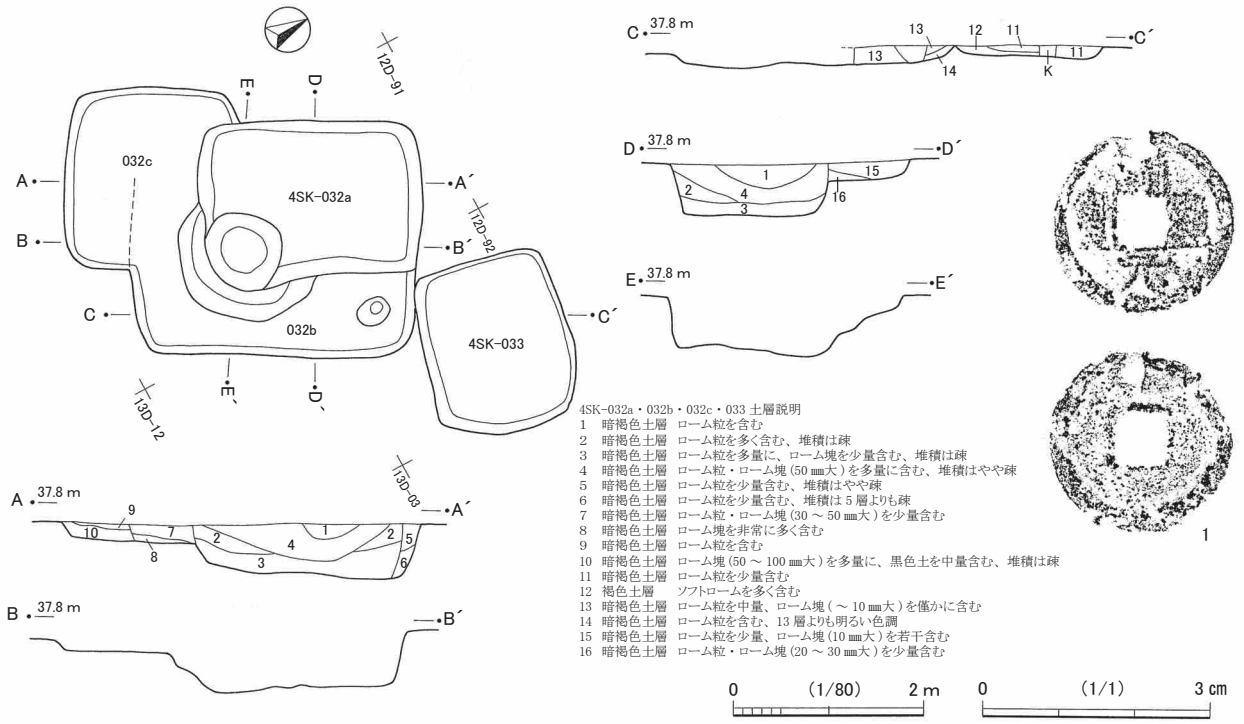


4SK-031 土層説明
1　暗褐色土層　ローム粒を少量、茶褐色土塊（10㎜大）をやや多く含む、粘性強い
2　暗褐色土層　ローム粒をやや多く、ローム塊（10～20㎜大）・黒色土を少量含む、堆積はやや疎、粘性強い
3　暗褐色土層　ローム粒をやや多く、ローム塊（30㎜～大）を少量含む、堆積はやや疎、粘性強い
4　暗褐色土層　褐色土塊を中量、ローム塊（～10㎜大）を少量含む、堆積はやや疎、粘性強い
5　黄褐色土層　ローム塊を非常に多く含む、堆積はやや密、粘性強い
6　暗褐色土層　褐色土塊を多量に、ローム粒を少量含む、堆積はやや疎、粘性強い
7　暗褐色土層　ローム粒を僅かに含む

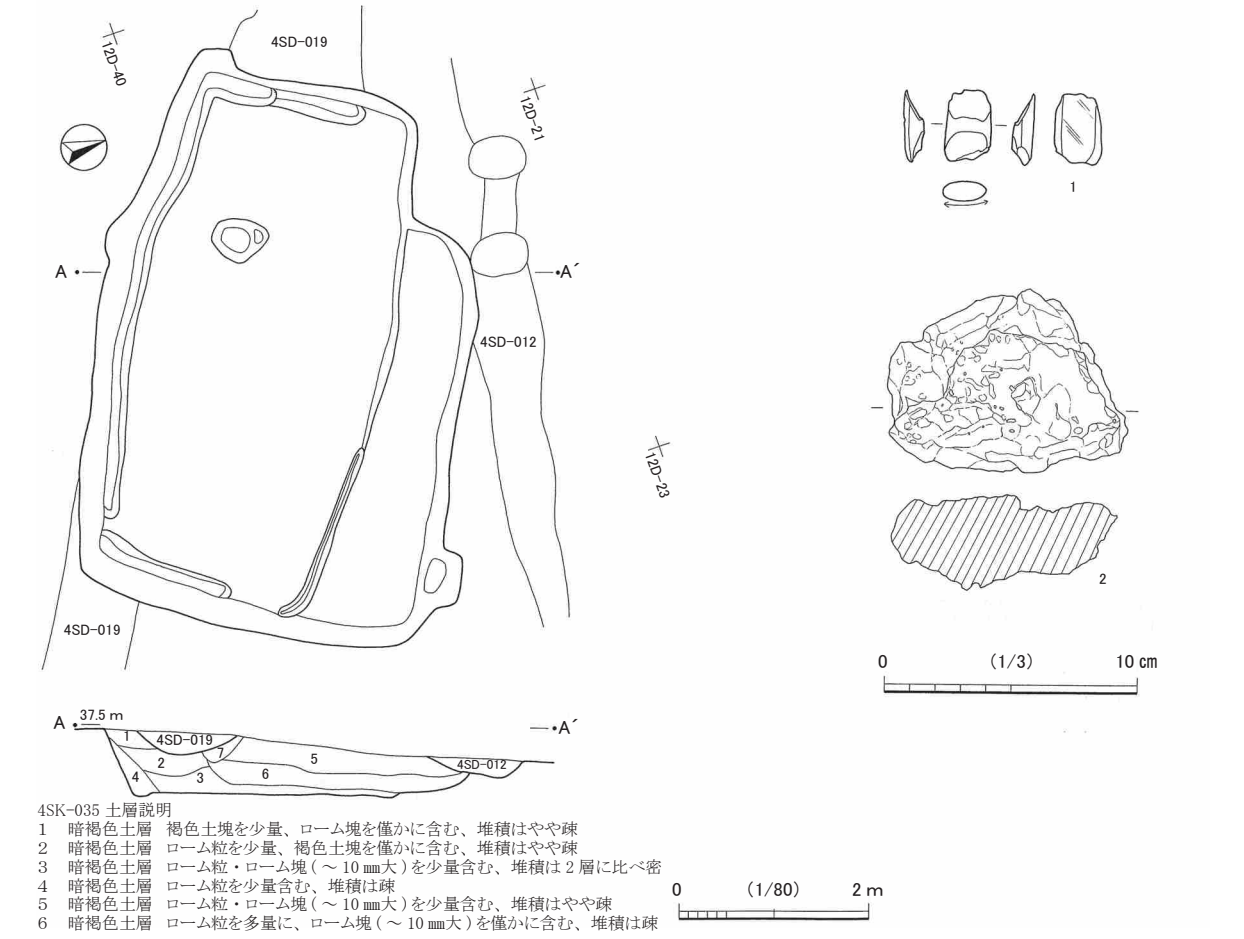
第162図　4SK-031

土層断面の観察から、最も新しいものが4SK-032a、次が032b、最も古いものが032cである。4SK-032aの規模は、長軸237㎝、短軸160㎝、検出面からの深さは３基中最も深く63㎝である。4SK-032bの規模は、南北軸は295㎝であるが、東西軸は明らかでない。検出面からの深さは21㎝である。4SK-032cの規模は、長軸190㎝、短軸は170㎝ほどと推定される。検出面からの深さは23㎝である。中央に位置する土坑は、4SK-032b・032cより新しく、4SK-032aより古いとみられる。径150㎝ほどの段のある円形土坑１基か、又は径150㎝と65㎝の２基の円形土坑が重複しているとみられる。検出面からの深さは、最も深いところで65㎝、段の部分で38㎝である。

4SK-033は、4SK-032bの北東に接している。長軸185㎝、短軸153㎝の隅丸方形状を呈する。検出面



第 163 図　4SK-032a ～ 032c・033 と出土遺物



第 164 図　4SK-035 と出土遺物

からの深さは 11㎝ほどである。なお、4SK-032b の東側には、方形竪穴 4SK-046 も接している。

図示した遺物は 1 点である。第 163 図 1 は 4SK-032 の覆土中から出土した銭貨で、開元通寶である。背面は無文とみられる。欠けや歪みがみられ、腐食も進んでいる。ほかには、図示していないが 4SK-032 から中世陶磁器・土器の小破片が少量出土した。4SK-033 からは混入品とみられる土器の小破片が少量出土したのみである。

4SK-035（第 164 図、図版 13・111・120）

12D-20 ～ 22・30 ～ 33・40 ～ 43 グリッドに所在する方形竪穴である。２基の方形竪穴が重複しているとみられるが、遺構番号には特に枝番は付さなかった。東西に重複する２基のうち、西側のほうが古い。西側の方形竪穴は、長軸 580㎝、短軸 315㎝ほどの長方形状を呈し、検出面からの深さは 70㎝である。壁際に床面からの深さ５㎝前後の壁溝をもつ。また、床面に床からの深さ 10㎝ほどのピットがある。この方形竪穴を切って構築された東側の方形竪穴は、規模は長軸 455㎝、短軸 280㎝ほどと復元され、床面の深さは 60㎝ほどである。そして、これら方形竪穴群を溝状遺構 4SD-012・019 が切っている。

図示した遺物は２点である。第 164 図 1 は砂岩製で、上下端は欠損しているが、表裏面に擦痕が認められる。砥石であろうか。２は椀形滓である。ほかには中・近世以降陶磁器の小破片が少量出土したが、図示していない。

4SK-036（第 165 図、図版 13・98）

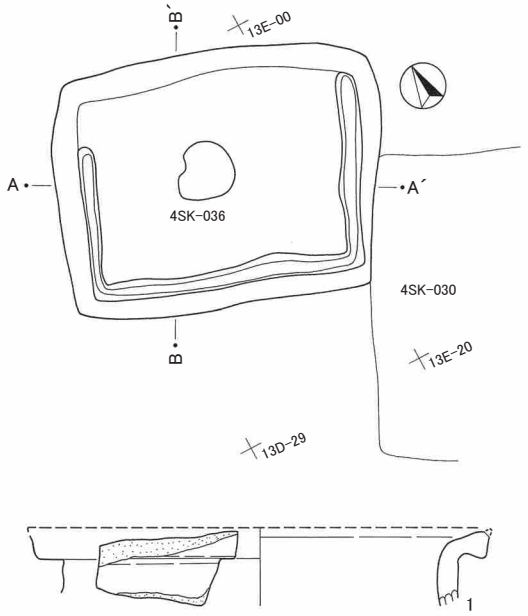
12D-99、13D-08・09・18・19、13E-00・10 グリッドに所在する方形竪穴である。方形竪穴 4SK-030 の西側に接しており、土層断面の観察から当遺構のほうが古いとみられる。平面形は長軸 340㎝、短軸 270㎝の長方形を呈し、検出面からの深さは 97㎝である。床面は平坦だが、中央部分はわずかに凹んでいる。また、東壁・南壁及び西壁の南側にかけて、床面からの深さ５㎝前後の壁溝がある。

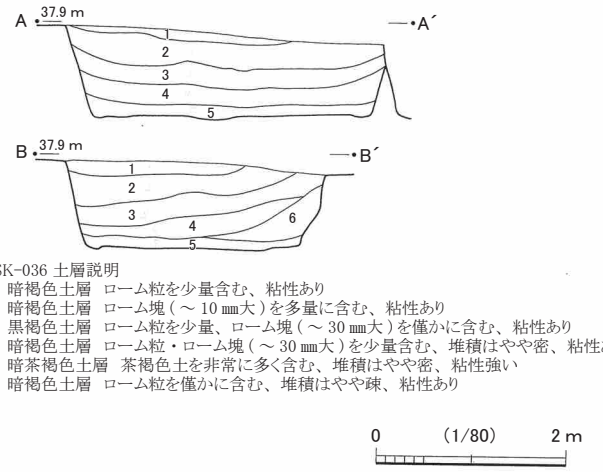
図示した遺物は 1 点である。第 165 図 1 は常滑広口壺である。口唇部は破損しているが、受け口状になるとみられる。５型式に比定されるものと考えられる。色調は内外面とも灰褐色で、内面口縁部には自然釉がかかる。

4SK-037（第 166 図、図版 14）

12E-50 ～ 52・60 ～ 62・70 ～ 72・80 ～ 82 グリッドに所在する竪穴状遺構である。東側が調査区の境界付近のため調査できなかったが、調査した部分から、平面形は不整な隅丸方形状を呈すると考えられる。規模は、西辺で 530㎝ほどである。床面は、中央ほど窪んでおり、検出面からの深さは南辺で 24㎝、中央部で 42㎝である。ピットが２か所認められ、中央部西側のものは長径 87㎝、短径 73㎝の楕円形を呈し、深さは 47㎝である。北壁付近のものは長径 150㎝、短径 110㎝、深さ 12㎝ほどである。また、西壁際には、ごく浅いが壁溝が認められる。

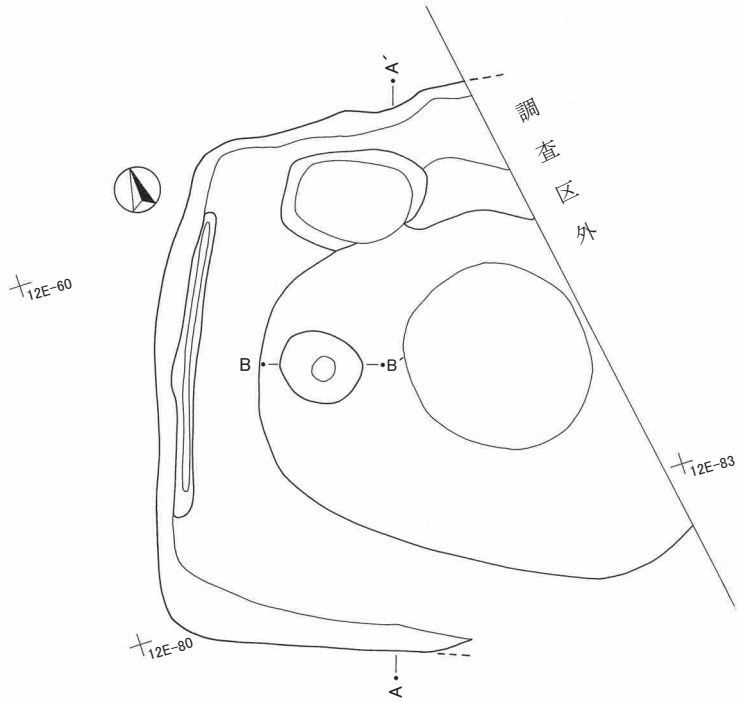
遺物は、図示していないが、中・近世以降陶磁器の小破片が少量出土した。

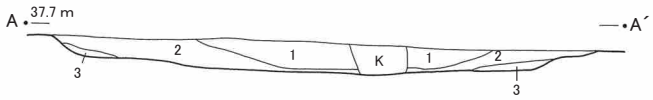


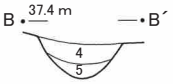


4SK-036 土層説明
1 暗褐色土層 ローム粒を少量含む、粘性あり
2 暗褐色土層 ローム塊（～10㎜大）を多量に含む、粘性あり
3 黒褐色土層 ローム粒を少量、ローム塊（～30㎜大）を僅かに含む、粘性あり
4 暗褐色土層 ローム粒・ローム塊（～30㎜大）を少量含む、堆積はやや密、粘性あり
5 暗茶褐色土層 茶褐色土を非常に多く含む、堆積はやや密、粘性強い
6 暗褐色土層 ローム粒を僅かに含む、堆積はやや疎、粘性あり

第165図 4SK-036と出土遺物



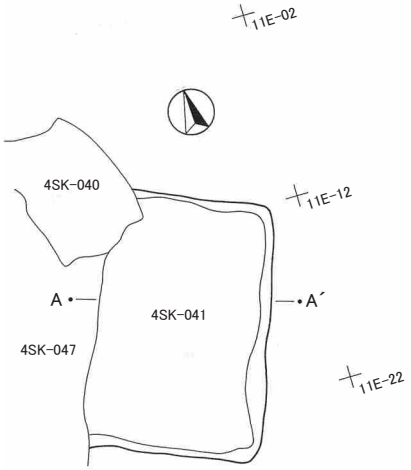


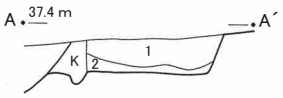


4SK-037 土層説明
1 灰褐色土層 灰褐色粘土の層、粘性強い
2 暗褐色土層 ローム粒僅かに含む、堆積はやや疎
3 暗褐色土層 ローム粒を若干含む、2層よりやや暗い色調
4 暗茶褐色土層 褐色土塊を多量に含む、堆積はやや密、粘性強い
5 暗茶褐色土層 褐色土塊を少量含む、堆積は4層より疎、粘性強い

0 (1/80) 2 m

第166図 4SK-037





4SK-041 土層説明
1 暗茶褐色土層 茶褐色土塊を多量に、ローム粒を中量含む、粘性あり
2 暗茶褐色土層 茶褐色土粒を少量含む

0 (1/80) 2 m

第167図 4SK-041

4SK-038（第 168 図、図版 14・109・111）

11D-90 ～ 93、12D-00 ～ 04・10 ～ 13・22・23 グリッドに所在する方形竪穴である。地下式坑 4SK-039 と重複するが、土層断面の観察により、4SK-039 崩落土を掘り込んで構築されていることが判明したため、当遺構のほうが新しいと考えられる。平面形は長軸 620㎝、短軸 505㎝の長方形を呈する。床面はほぼ平坦であるが、５㎝前後、床面より溝状に落ち込む部分がある。土層断面から、別の遺構が絡んでいる可能性も考えられる。床面の検出面からの深さは 42㎝である。

図示した遺物は３点である。第 168 図１・２は転用砥石である。１は常滑甕の破片の内面を使用したものである。粘土の継ぎ目に沿って叩きが入り、外面には押印文がみられる破片である。２は常滑片口鉢の破片で、口唇部及び外面が使用されている。10 型式に比定されるものと考えられる。３は表裏面のみ遺存し、周囲が欠損している石製品の破片で、表裏面とも光沢を帯びるほど滑らかに摩耗している。安山岩製とみられ、破断面は黒色、表裏面は赤色を呈するが、被熱しているかどうかは不明である。台石であろうか。ほかには、中・近世以降陶磁器及び土器の小破片が少量出土している。

4SK-041（第 167 図）

11E-01・10・11・20・21 グリッドに所在する方形竪穴である。北西側で土坑 4SK-040 と、南西側で竪穴状遺構 4SK-047 と重複する。土層断面の観察から、4SK-047 との新旧関係は当遺構のほうが古いとみられる。平面形は、南北軸が 272㎝、東西軸は現存値で 180㎝ほどである。検出面からの床面の深さは 32㎝である。

遺物は、混入品とみられる土器の小破片が少量出土したのみである。

4SK-044（第 169 図、図版 14）

13D-12 ～ 14・23・24 グリッドに所在する方形竪穴である。西側で地下式坑 4SK-045 と重複するが、新旧関係は、土層断面の観察から当遺構のほうが新しいと判断される。南側には、地下式坑 4SK-034 が隣接する。遺構の平面形は、長軸 280㎝、短軸 180㎝ほどの長方形を呈する。検出面からの床面の深さは 50㎝である。

遺物は、近世以降陶磁器・土器の小破片が少量出土したのみで、図示していない。

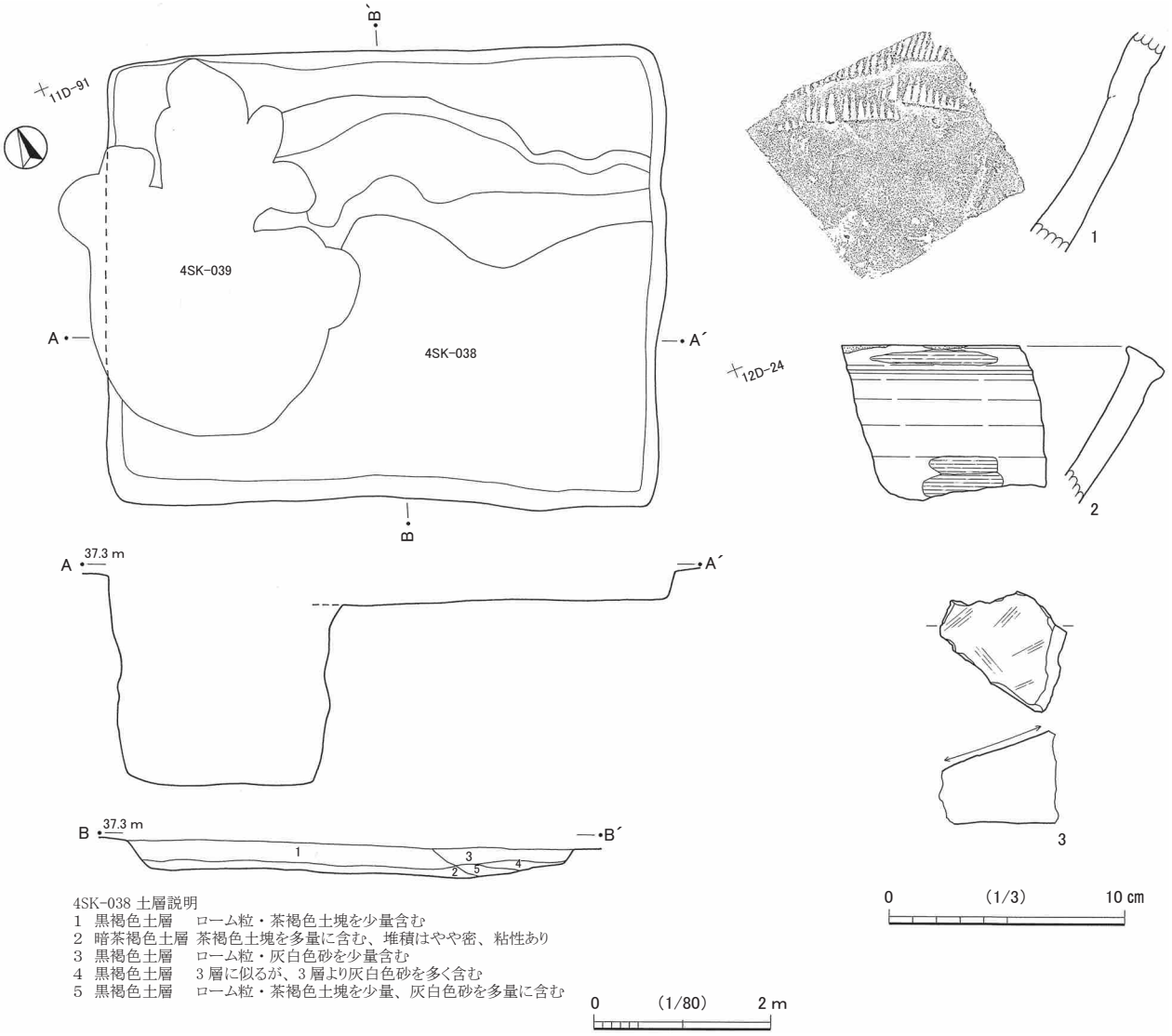
4SK-046（第 170 図、図版 14）

13D-02 グリッドに所在する方形竪穴である。東側で地下式坑 4SK-045 と隣接し、西側で方形竪穴 4SK-032b と隣接する。平面形は、一辺 110㎝ほどの不整隅丸正方形状を呈する。検出面からの床面の深さは 12㎝であるが、北側がやや凹む。

遺物は出土していない。

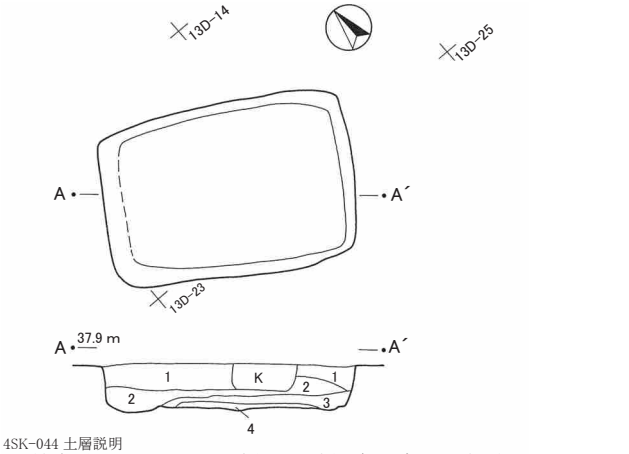
4SK-047・065（第 171 図、図版 14・93・98・116・121）

10D-78・79・87・88・97・98、11D-07 ～ 09・18・19・28・29、11E-00・10・20 グリッドに所在する竪穴状遺構群である。現状でいずれも不整形を呈する２基が、互いに、そしてほかの土坑などとも重複して更に複雑な形を呈している。床面はいずれも擂鉢状になだらかに凹んでおり、検出面からの深さ



4SK-038 土層説明
1 黒褐色土層　ローム粒・茶褐色土塊を少量含む
2 暗茶褐色土層 茶褐色土塊を多量に含む、堆積はやや密、粘性あり
3 黒褐色土層　ローム粒・灰白色砂を少量含む
4 黒褐色土層　3 層に似るが、3 層より灰白色砂を多く含む
5 黒褐色土層　ローム粒・茶褐色土塊を少量、灰白色砂を多量に含む

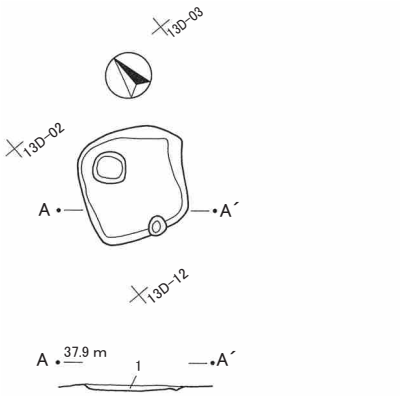
第 168 図　4SK-038 と出土遺物



4SK-044 土層説明
1 暗褐色土層　ローム粒・ローム塊（～ 30 ㎜大）を多量に含む、堆積は疎
2 暗褐色土層　ローム粒・ローム塊（30 ㎜大～）を多量に含む、堆積は疎
3 暗褐色土層　ローム粒・ローム塊（～ 50 ㎜大）を多量に、黒色土を少量含む、堆積は疎
4 暗黄褐色土層 ローム塊のみの層

0 (1/80) 2 m

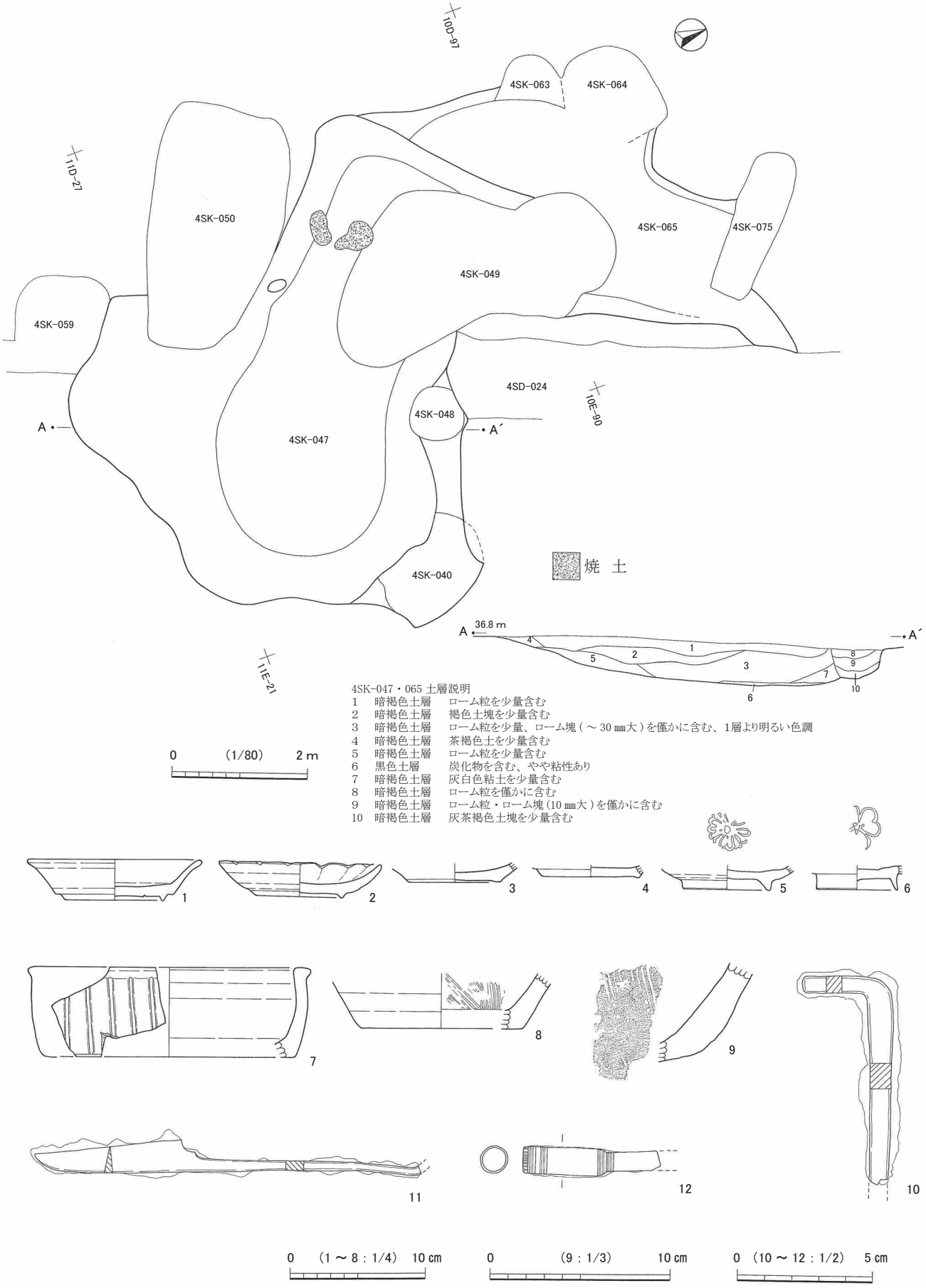
第 169 図　4SK-044



4SK-046 土層説明
1 暗褐色土層 ローム粒・ローム塊（～ 10 ㎜大）を含む

0 (1/80) 2 m

第 170 図　4SK-046



第 171 図　4SK-047・065 と出土遺物

はそれぞれ最も深い中央部で 4SK-047 は 87㎝、4SK-065 は 35㎝ほどである。4SK-047 の床面北西部では、薄く堆積する焼土が検出された。

それぞれ複数の遺構と重複しているが、新旧関係が明らかなものと明らかでないものがある。4SK-047 の範囲内にある土坑 4SK-048、及び 4SK-047 と 4SK-065 の境界付近に位置する土坑 4SK-049 は、いずれも土層断面の観察から 4SK-047 のほうが古いと考えられる。また、4SK-047 の東側で重複する方形竪穴 4SK-041 とは、4SK-047 のほうが新しいとみられる。これら以外の新旧関係は明らかでなく、4SK-047 と 4SK-065 の新旧関係も明らかでない。

図示した遺物は 12 点である。全て 4SK-047 から出土したものである。第 171 図 1 ～ 8 は瀬戸・美濃製品である。 1 は反り皿である。全体の 40％の遺存度である。削り出し高台をもつ。高台部も含め内外面全体に浅黄色の灰釉が施され、見込み部分と高台裏に円錐ピンの痕跡が 2 か所ずつみられる。時期は近世と考えられる。 2 は志野菊皿で、溝状遺構 4SD-024 から出土した破片と接合し、遺存度は全体の 60％となった。削り出し高台をもつ。内外面とも施釉されている。高台裏には 3 か所、円錐ピンの痕跡が認められる。大窯期第 4 段階末に位置づけられるものと考えられる。 3 ・ 4 は志野稜皿である。いずれも削り出し高台をもち、内外面施釉されている。 4 は遺存部分に 2 か所、円錐ピンの痕跡が認められ、全体では 3 か所と推測される。 5 は輪禿皿である。底部のみ遺存している。削り出し高台をもち、高台部分は露胎である。内面には灰釉が施され、見込み部分には菊花押印文がある。菊花の中央には鉄釉が一点施されている。 6 も 5 と同様の輪禿皿であるが、施釉は飴釉である。底部のみ 60％程度の遺存度である。 7 は、南側に近接する溝状遺構 4SD-019 から出土した破片と接合したものである。内外面に灰釉が施されていることから、香炉ではなく盤類とみられる。時期は大窯後期～近世と考えられる。 8 は擂鉢である。内面は使用によりかなり摩耗している。 9 は備前擂鉢と考えられる。色調は赤褐色を呈し、よく焼き締まっている。内面は使用によりかなり摩耗している。外面底部も摩耗しており、転用砥石として使用された可能性もある。10・11 は鉄製品で、10 は L 字形に屈曲する釘である。下端は欠損している。11 は鋏で、片側だけが遺存しているものである。現存長 14.2㎝、刃部長は 5.4㎝である。12 は煙管である。

4SK-065 からは近世以降陶磁器の小破片が少量出土したのみである。

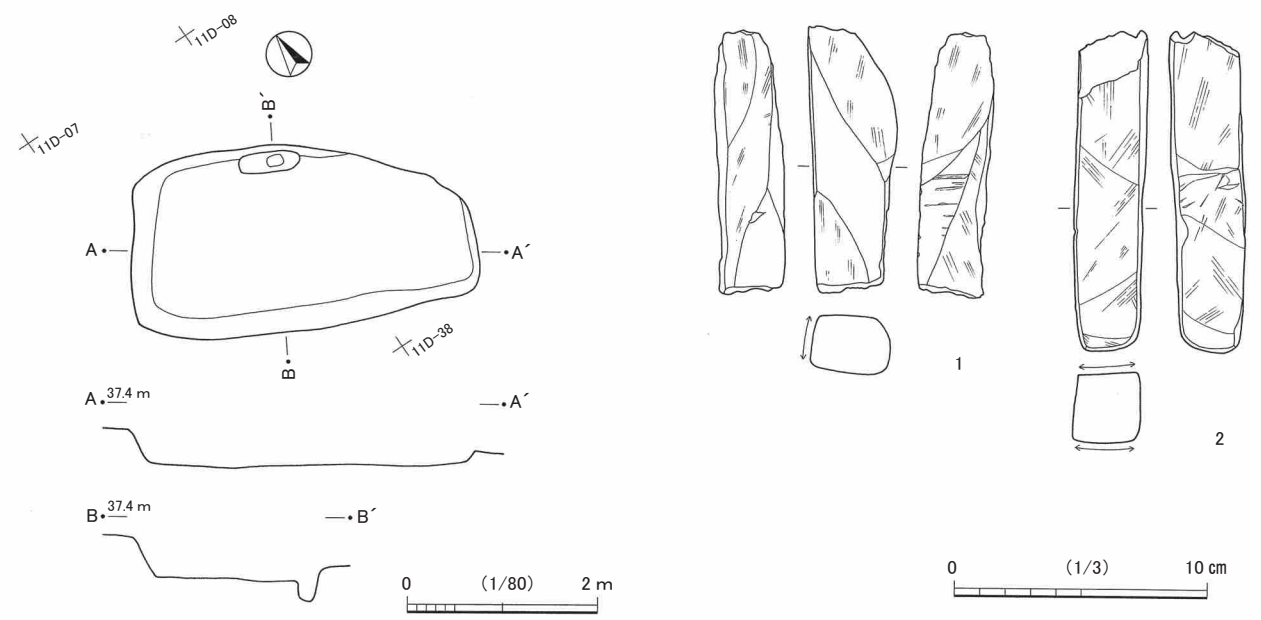
4SK-050（第 172・268 図、図版 15・111）

11D-07・08・17・18 グリッドに所在する方形竪穴である。東側で竪穴状遺構 4SK-047 と重複するが、新旧関係は明らかでない。平面形は長軸 355㎝、短軸 200㎝ほどの長方形状を呈する。床面はほぼ平坦で、検出面からの深さは 38㎝であるが、北壁際に床面から 20㎝ほどの深さで溝状に凹む部分がある。

図示した遺物は 2 点である。第 172 図 1 ・ 2 は砥石である。 1 は下端を欠損している。 2 は上端が欠損している。当遺構からは砥石の破片が別に 1 点出土したが、近接する土坑 4SK-049 から出土したものと接合し、4SK-049 出土遺物として図示した（第 268 図 3 ）。そのほかには、図示していないが中・近世以降陶磁器の小破片が少量出土した。

4SK-066 ～ 071（第 173・174 図、巻頭図版 7、図版 16・93・98・111・115・117・121）

10D-37・47・56 ～ 58・66 ～ 68・76 ～ 78・86・87 グリッドに所在する方形竪穴群である。それぞれの遺構の新旧関係は土層断面の観察からある程度明らかになるが、別遺構間で遺物が接合するものもあ



第 172 図　4SK-050 と出土遺物

り、全体としてはそれほど時間差をもたない可能性が高い。

4SK-066 は最も南側に位置し、平面形は長軸 247㎝、短軸 118㎝の隅丸方形状を呈する。4SK-067・068 とそれぞれ重複するが、新旧関係は、土層断面の観察からいずれよりも古いと考えられる。検出面からの深さは 30㎝である。

4SK-067 は、4SK-066・068・070 とそれぞれ重複するが、長軸 210㎝、短軸 175㎝ほどの方形を呈するとみられる。新旧関係は、土層断面の観察からいずれよりも新しい。検出面からの深さは 31㎝である。

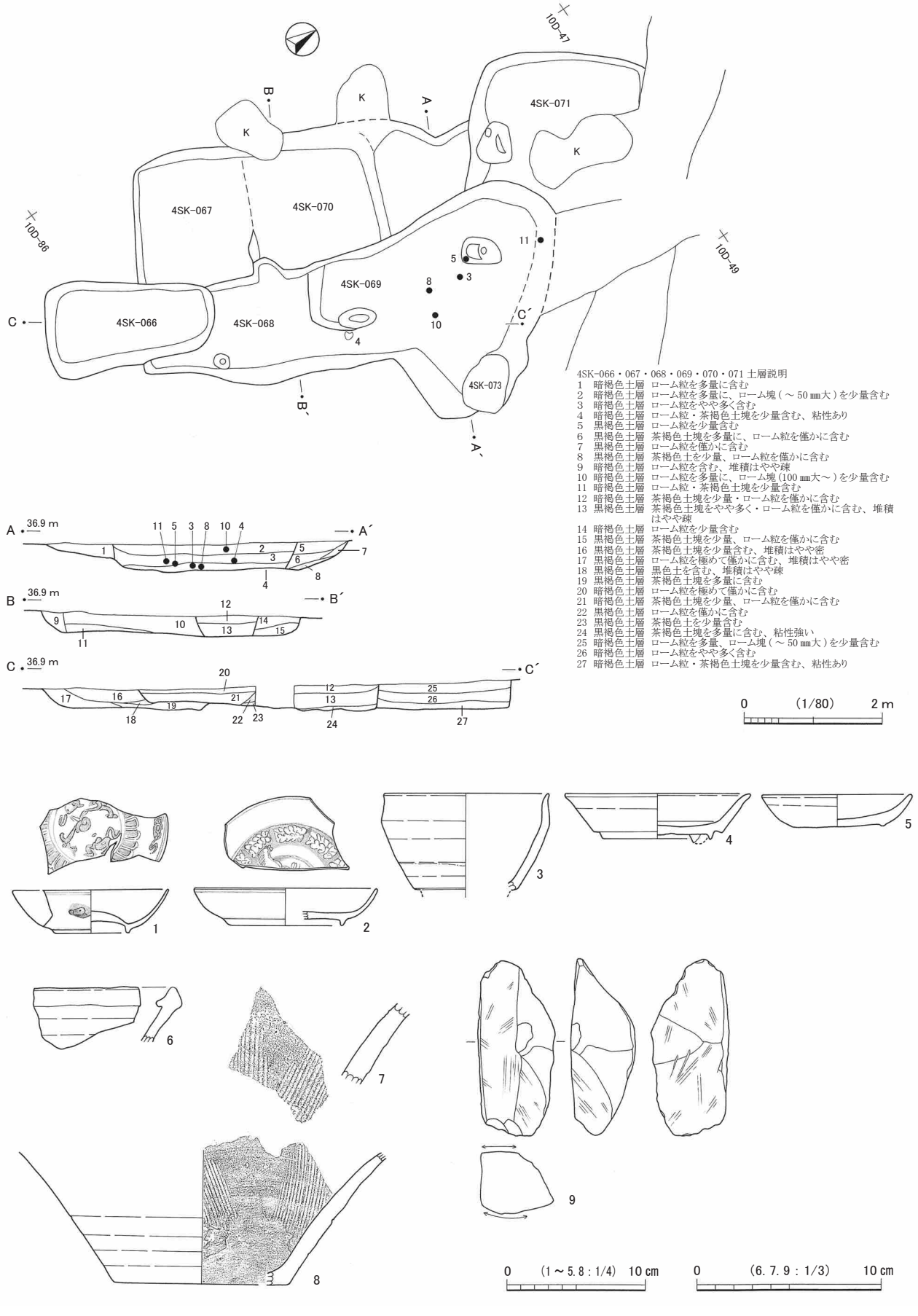
4SK-068 は、4SK-066・067・069・070 とそれぞれ重複するが、長軸 250㎝以上、短軸 150㎝ほどの方形状を呈するとみられる。重複する遺構との新旧関係は、土層断面の観察から 4SK-066・069・070 より新しく、4SK-067 より古い。検出面からの深さは 16㎝である。

4SK-069 は、4SK-068・070・071 及び土坑 4SK-073 とそれぞれ重複するが、長軸 350㎝、短軸 300㎝ほどの不整方形状を呈している。重複する遺構との新旧関係は、土層断面の観察から 4SK-070・071・073 より新しく、4SK-068 より古い。検出面からの深さは 20㎝前後である。

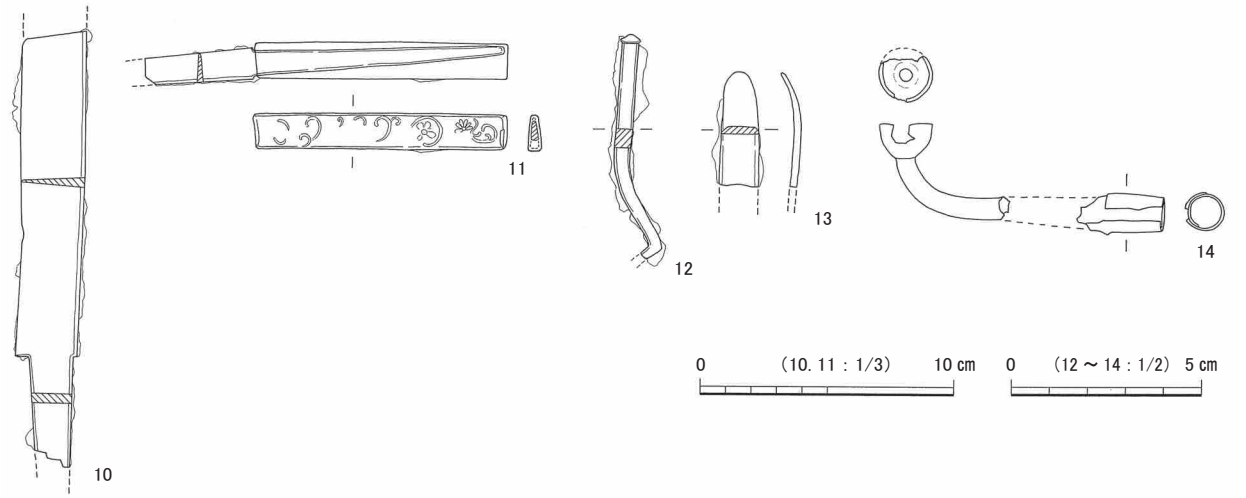
4SK-070 は、4SK-067・068・069・071 とそれぞれ重複するが、長軸 320㎝以上、短軸 200㎝以上の方形を呈するとみられる。重複する遺構との新旧関係は、4SK-071 との関係は不明であるが、それ以外のいずれの遺構よりも古いと考えられる。検出面からの床面の深さは 25㎝前後であるが、北側と南側との間に段差があり、南側が数㎝ほど低い。

4SK-071 は最も北側に位置する。4SK-069・070 とそれぞれ重複し、更に北側は溝状遺構 4SD-025 と重複するが、軸 240㎝以上、短軸 200㎝以上の方形状を呈するとみられる。重複する遺構との新旧関係は、土層断面の観察から 4SK-069 より古いが、4SK-070 及び 4SD-025 との関係は明らかでない。

図示した遺物は 14 点である。第 173 図 1 ・ 2 は染付皿である。 1 は、高台内に放射状のケズリ痕がみられる。4SK-067・068 からそれぞれ出土した破片が接合したものであるが、遺構から 90 mほど南に離れた 15E-22 グリッドからも、接合しない同一個体とみられる破片が出土した。 2 も高台内に放射状のケ



第173図　4SK-066～071と出土遺物（1）



第 174 図　4SK-066 ～ 071 と出土遺物（２）

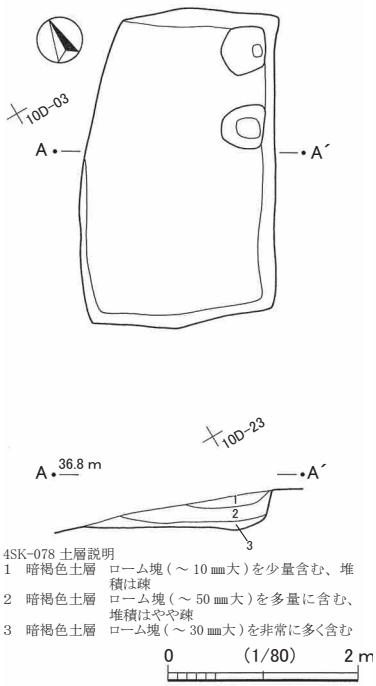
ズリ痕がみられる。4SK-070 から出土したものである。３～８は瀬戸・美濃製品である。３は天目茶碗である。4SK-068･069 からそれぞれ出土した破片が接合し、全体の 30％程度の遺存度となったものである。釉は暗褐色を呈する。大窯第３段階の所産と考えられる。４は 4SK-069 の覆土中層から出土した反り皿で、全体の 80％遺存している。削り出し高台をもち、内外面全面に浅黄色の灰釉が施釉される。見込み部分及び高台内には円錐ピンの痕跡がそれぞれ５か所ずつ認められ、そのうち高台内の３か所には円錐ピンそのものの残欠も付着しており、器として安定が悪い状態である。そのほかにも焼成の際の付着物が内外面にみられる。大窯第３段階の所産と考えられる。５は碁笥底の志野丸皿で、70％程度の遺存度である。釉は外面底部には施されていない。遺存部内面に円錐ピンの痕跡が２か所認められる。大窯第３段階後半の所産と考えられる。4SK-069 の覆土中層から出土した。６～８は擂鉢である。６は 4SK-068 から出土したもので、擂目は遺存部には認められない。７は 4SK-067 から出土した。８は 4SK-069 から出土したもので、よく使用され、擂目はほぼ消え、見込み部分の釉も禿げている。９は砥石である。

第 174 図 10 ～ 14 は金属製品で、10 ～ 11 は 4SK-069、12 ～ 14 は 4SK-070 から出土した。10 は短刀である。刀身及び茎の先端は欠損しており、現存長は 17.1㎝である。刀身の現存長は 12.8㎝、茎の現存長は 4.3㎝である。刀身の幅は 2.5㎝、背厚は 0.3㎝である。11 は小柄小刀である。切先部分を折損するが、全体の現存長は 14.1㎝で、刀身の現存長は 4.2㎝、最大幅は 1.2㎝である。柄部分は銅製で、腐食によりはっきりしないが唐草文や花文とみられる浮彫文様が表面に観察される。裏面は無文とみられる。柄部分の長さは 9.9㎝、幅は 1.4㎝である。12 は鉄釘である。先端は曲がって少し欠損している。13 はヘラ状の鉄製品で、ヤリガンナであろうか。14 は煙管である。接合しない２破片となっているが、復元現存長は 7.5㎝である。

なお、図示していないが、4SK-066 からは近世以降陶磁器の小破片、4SK-071 からは中・近世以降陶磁器及び土器の小破片が少量出土している。

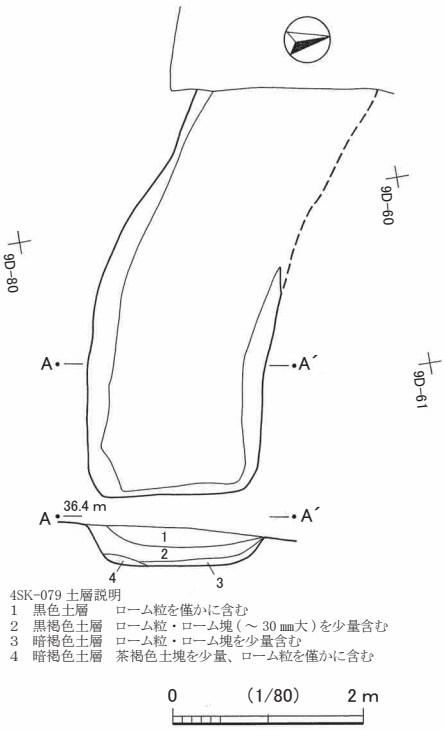
4SK-078（第 175 図、図版 16）

9D-93、10D-02 ～ 04・12・13 グリッドに位置する。西側は現道に削平されているが、現状で平面形は長軸 335㎝、短軸 202㎝の長方形を呈している。底面は平坦であるが、北東隅と東壁中央にピットがみ



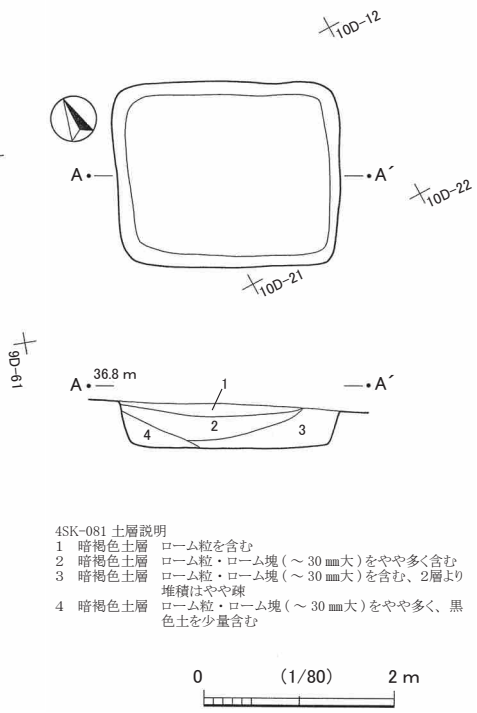
4SK-078 土層説明
1 暗褐色土層 ローム塊（～10㎜大）を少量含む、堆積は疎
2 暗褐色土層 ローム塊（～50㎜大）を多量に含む、堆積はやや疎
3 暗褐色土層 ローム塊（～30㎜大）を非常に多く含む

第175図 4SK-078



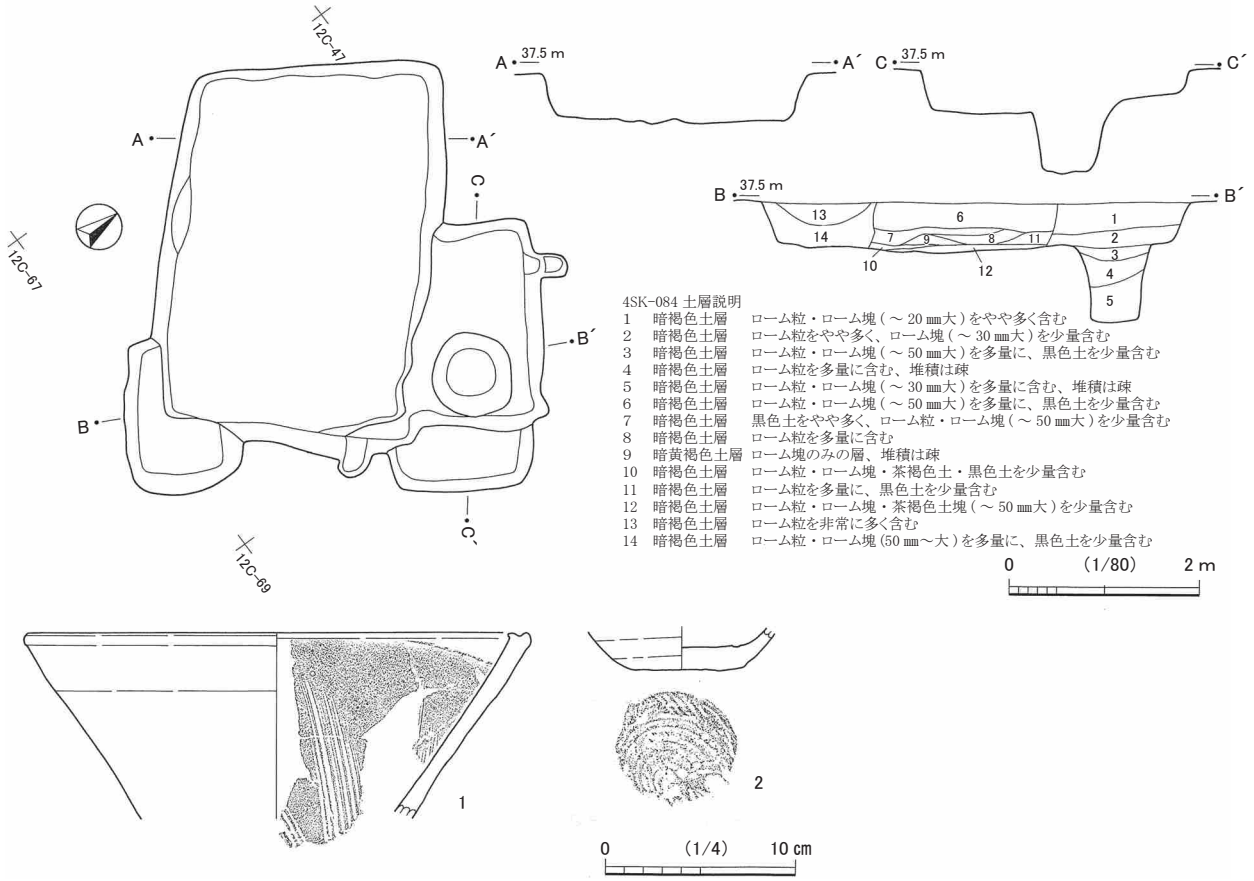
4SK-079 土層説明
1 黒色土層 ローム粒を僅かに含む
2 黒褐色土層 ローム粒・ローム塊（～30㎜大）を少量含む
3 暗褐色土層 ローム粒・ローム塊を少量含む
4 暗褐色土層 茶褐色土塊を少量、ローム粒を僅かに含む

第176図 4SK-079



4SK-081 土層説明
1 暗褐色土層 ローム粒を含む
2 暗褐色土層 ローム粒・ローム塊（～30㎜大）をやや多く含む
3 暗褐色土層 ローム粒・ローム塊（～30㎜大）を含む、2層より堆積はやや疎
4 暗褐色土層 ローム粒・ローム塊（～30㎜大）をやや多く、黒色土を少量含む

第177図 4SK-081



4SK-084 土層説明
1 暗褐色土層 ローム粒・ローム塊（～20㎜大）をやや多く含む
2 暗褐色土層 ローム粒をやや多く、ローム塊（～30㎜大）を少量含む
3 暗褐色土層 ローム粒・ローム塊（～50㎜大）を多量に、黒色土を少量含む
4 暗褐色土層 ローム粒を多量に含む、堆積は疎
5 暗褐色土層 ローム粒・ローム塊（～30㎜大）を多量に含む、堆積は疎
6 暗褐色土層 ローム粒・ローム塊（～50㎜大）を多量に、黒色土を少量含む
7 暗褐色土層 黒色土をやや多く、ローム粒・ローム塊（～50㎜大）を少量含む
8 暗褐色土層 ローム粒を多量に含む
9 暗黄褐色土層 ローム塊のみの層、堆積は疎
10 暗褐色土層 ローム粒・ローム塊・茶褐色土・黒色土を少量含む
11 暗褐色土層 ローム粒を多量に、黒色土を少量含む
12 暗褐色土層 ローム粒・ローム塊・茶褐色土塊（～50㎜大）を少量含む
13 暗褐色土層 ローム粒を非常に多く含む
14 暗褐色土層 ローム粒・ローム塊（50㎜～大）を多量に、黒色土を少量含む

第178図 4SK-084と出土遺物

られる。検出面からの床面の深さは 42㎝である。ピットの床面からの深さは、北東隅のものが 34㎝、東壁のものは 6 ㎝である。

遺物は出土していない。

4SK-079（第 176 図、図版 16）

9C-69・79、9D-60・61・70・71 グリッドに位置する。西側は削平されているが、平面形は長軸 350㎝以上、短軸 190㎝のやや歪んだ長方形状を呈するとみられる。底面はほぼ平坦で、検出面からの床面の深さは 46㎝である。

遺物は、図示していないが中世陶磁器の小破片が少量出土した。

4SK-081（第 177 図、図版 16）

10D-00・01・10・11 グリッドに所在する。平面形は長軸 235㎝、短軸 196㎝の隅丸方形を呈する。床面は平坦で、検出面からの深さは 52㎝である。覆土はローム粒等の量で分層されるが、ほとんど一様な土質で短期間に埋没した様相を呈している。

遺物は出土していない。

4SK-082（第 180 図、図版 16）

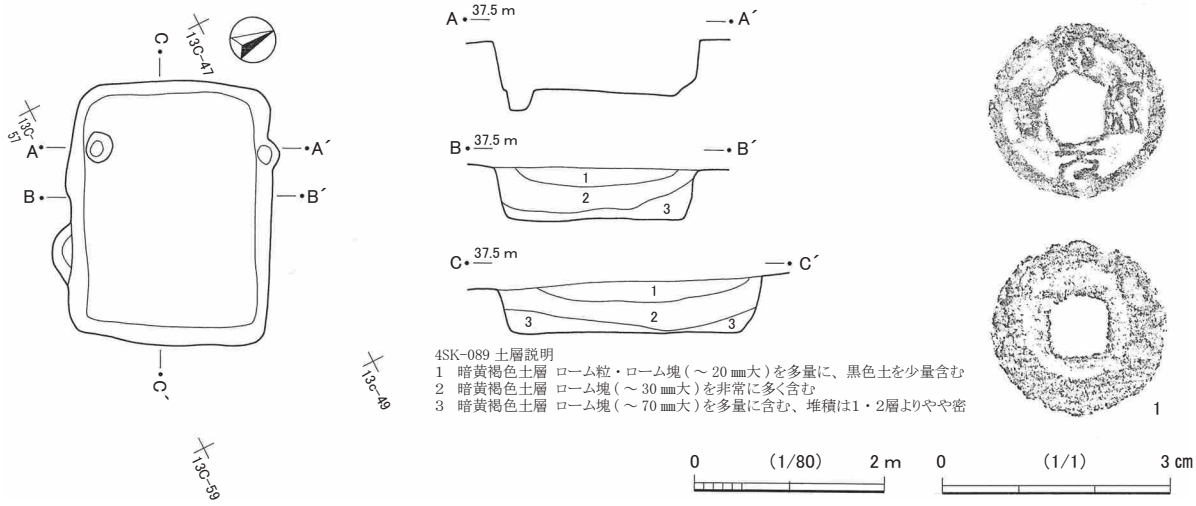
9C-63・64・73・74 グリッドに所在する。平面形は長軸 337㎝、短軸 147㎝の隅丸方形を呈し、壁がやや斜めに立ち上がる方形竪穴である。検出面からの床面の深さは 26㎝である。

遺物は混入品とみられる土器の小破片が少量出土したのみである。

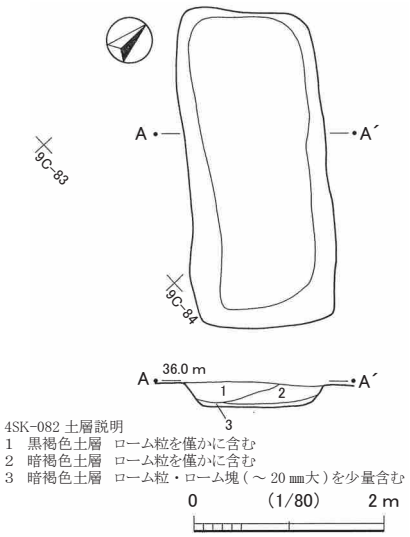
4SK-084（第 178 図、図版 16・98）

12C-37・38・46 ～ 49・57 ～ 59・68 グリッドに所在する。 4 基の方形竪穴と 1 基の土坑が重複していると考えられる遺構である。土層断面の観察から、大まかな新旧の流れとして北から南へ新しくなっていく様子が把握できる。すなわち、最も新しい遺構が最も南に位置する方形竪穴で、平面形は長軸 165㎝、短軸 125㎝ほどの隅丸方形に復元される。検出面からの深さは 50㎝である。この遺構の北側にある最も大きな方形竪穴がその次に新しく、平面形は長軸 315㎝、短軸 280㎝ほどの隅丸方形、検出面からの深さは 50㎝である。次に新しい遺構がその北側に位置する方形竪穴で、一辺は 215㎝ほど、もう一辺は 200㎝以上の隅丸方形または正方形を呈するものとみられる。検出面からの深さは 48㎝である。この方形竪穴と重複する径 85㎝ほどの円形土坑があるが、土層断面の観察から、方形竪穴は土坑を埋めて構築されたものとみられる。土坑の方形竪穴床面からの深さは 64㎝である。そして最も古い方形竪穴が北東部に位置するもので、平面形は明らかでないが、一辺 150㎝ほどの隅丸方形を呈すると考えられる。検出面からの深さは 32㎝である。

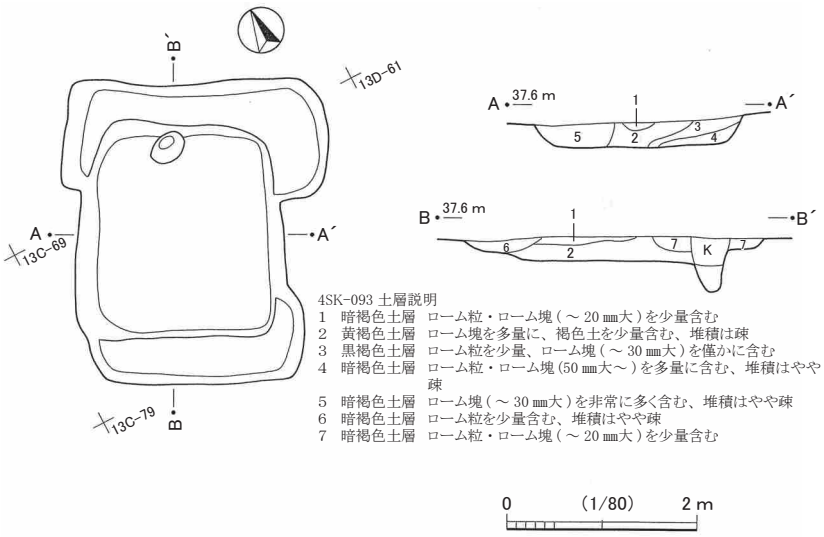
図示した遺物は 2 点である。いずれも、最も大きな方形竪穴の覆土中からの出土である。第 178 図 1 は在地産擂鉢である。胎土に白色粒子・赤色スコリア・砂粒を含み、焼成は良い。色調は黒褐色～暗赤褐色を呈する。時期は古瀬戸後期様式Ⅳ期新段階併行と考えられる。 2 はカワラケ杯である。特に底部が厚く、全体に重量感がある。



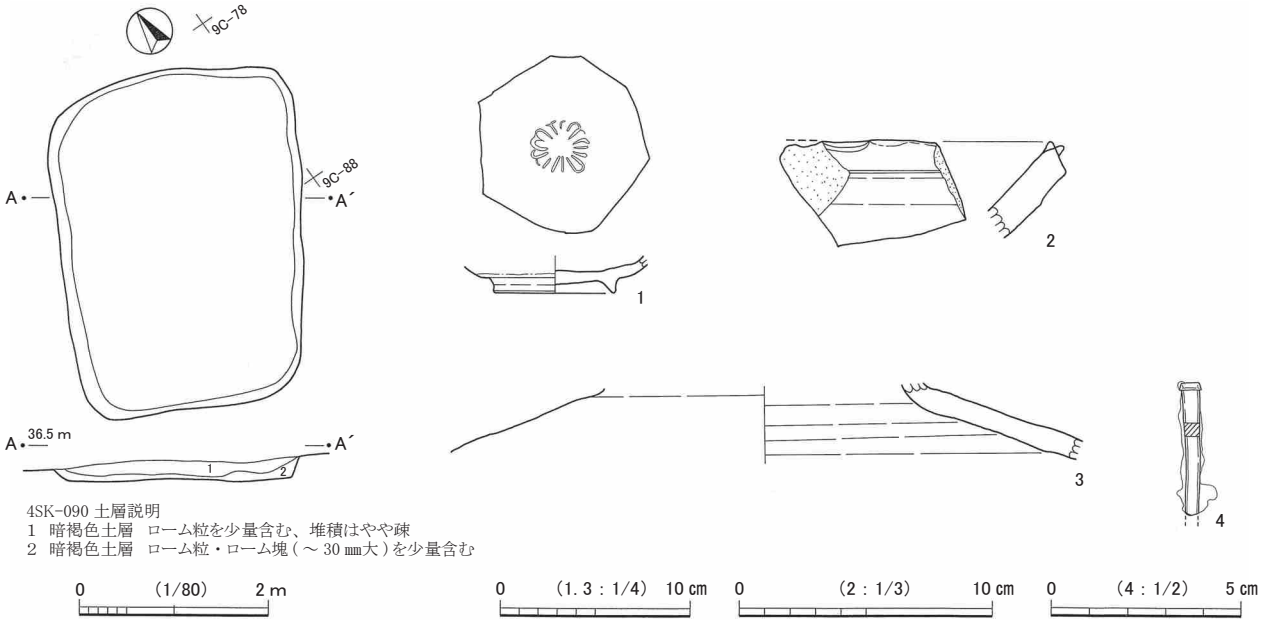
第179図　4SK-089と出土遺物



第180図　4SK-082



第181図　4SK-093



第182図　4SK-090と出土遺物

4SK-089（第 179 図・図版 17・122）

13C-37・47・48・57・58 グリッドに所在する。平面形は長軸 278㎝、短軸 210㎝の隅丸方形を呈している。床面西隅付近にピットがみられる。検出面からの床面の深さは 54㎝で、床面からのピットの深さは 23㎝である。

図示した遺物は 1 点である。第 179 図 1 は銭貨で、熙寧元寳である。書体は篆書である。背面は無文とみられる。全体に腐食が進んでいる。遺物はほかには、中世陶磁器の小破片が少量出土したのみである。

4SK-090（第 182 図、図版 17・99・117）

9C-67・76 ～ 78・86・87 グリッドに所在する。平面形は長軸 361㎝、255㎝ほどのややいびつな隅丸方形を呈している。検出面からの床面の深さは 32㎝ほどである。

図示した遺物は 4 点である。第 182 図 1 は瀬戸・美濃輪禿皿で、見込み部分に菊印花文がある。削り出し高台をもつ。灰釉が施されるが、高台部分は露胎である。 2 は常滑片口鉢である。 3 は常滑の壺又は甕の破片である。外面には自然釉がみられる。 4 は鉄釘である。下端部を欠損する。

4SK-093（第 181 図）

13C-59・69・79、13D-50・60・70 グリッドに所在する遺構で、少なくとも 3 基の方形竪穴が重複しているとみられる。主体となるのは中央の隅丸正方形状を呈するもので、一辺の長さは現状で 220㎝ほどである。検出面からの底面の深さは 39㎝である。北壁にピットがみられるが、撹乱の可能性もある。この遺構の南北に、それぞれ隅丸方形の遺構が重複している。北側のものは長軸 277㎝、短軸 130㎝、検出面からの深さ 15㎝、南側のものは長軸 227㎝、短軸は 100㎝ほどと推定され、検出面からの深さは 19㎝である。新旧関係は、土層断面の観察から、中央のものより南北のもののほうが新しい。

遺物は出土していない。

4SK-095・096（第 183 図、図版 18）

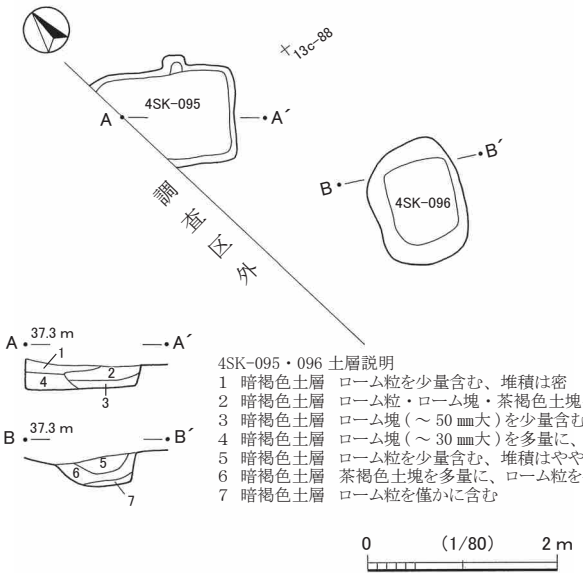
13C-77・87・88・97・98 グリッドに所在する 2 基の方形竪穴である。4SK-095 は、西側が調査区外となるが、平面形は短軸 105㎝、長軸 150㎝以上の長方形を呈する。検出面からの深さは 27㎝である。北東壁にピット状に張り出す部分があるが、深さは床面には達していない。4SK-096 は、長軸 128㎝、短軸 97㎝の隅丸方形状を呈する。検出面からの深さは 38㎝である。

遺物はいずれの遺構からも出土していない。

4SK-097（第 184 図、図版 18）

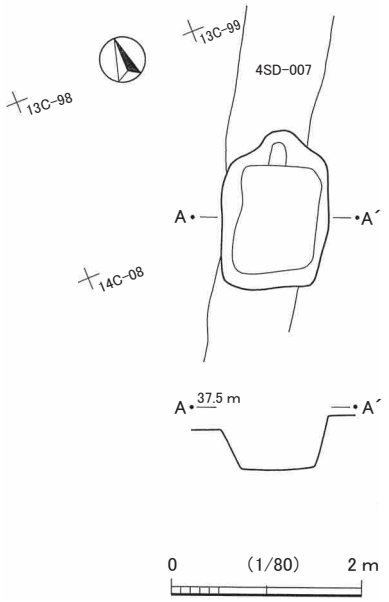
13C-98・99、14C-08・09 グリッドに所在する。直線的に延びて垂直に屈曲する溝状遺構 4SD-007 の西辺に収まるように、軸方向も同じく存在するが、新旧関係は明らかでない。平面形は、北壁にやや張り出している部分があるが、基本的には隅丸方形状を呈し、長軸 168㎝、短軸 110㎝である。検出面からの深さは 54㎝である。なお、4SD-007 底面からの深さは 30㎝ほどである。

遺物は、図示していないが中・近世以降陶磁器及び土器の小破片が少量出土した。

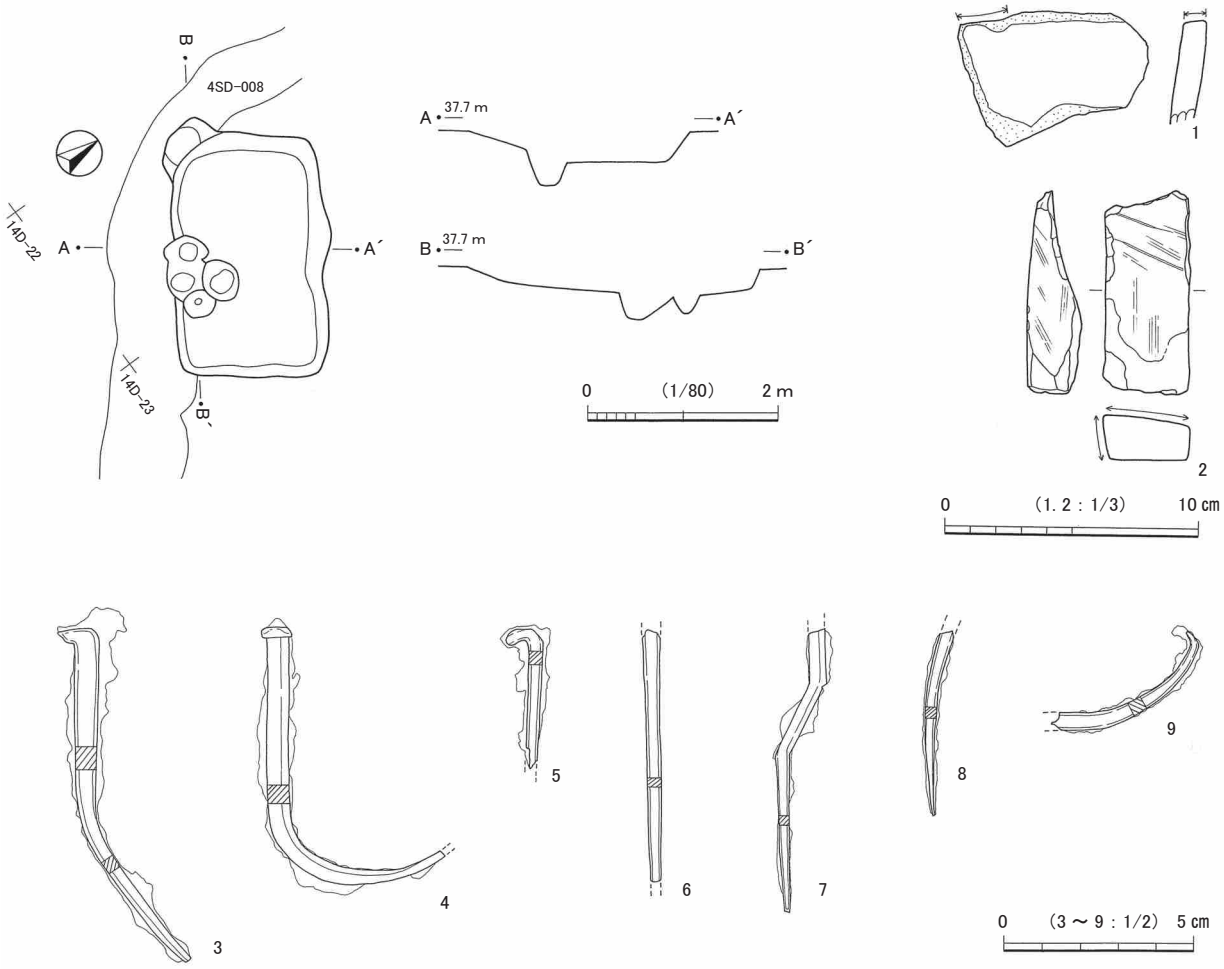


4SK-095・096 土層説明
1 暗褐色土層 ローム粒を少量含む、堆積は密
2 暗褐色土層 ローム粒・ローム塊・茶褐色土塊を少量含む
3 暗褐色土層 ローム塊（～50㎜大）を少量含む
4 暗褐色土層 ローム塊（～30㎜大）を多量に、ローム粒を少量含む
5 暗褐色土層 ローム粒を少量含む、堆積はやや疎、6・7層より暗い色調
6 暗褐色土層 茶褐色土塊を多量に、ローム粒を少量含む、堆積はやや疎
7 暗褐色土層 ローム粒を僅かに含む

第183図 4SK-095・096



第184図 4SK-097



第185図 4SK-098と出土遺物

4SK-098（第 185 図、図版 18・109・111・117）

14D-02・03・12・13 グリッドに所在する。溝状遺構 4SD-008 と重複するが、新旧関係は土層断面の観察から当遺構のほうが古い。平面形は長軸 257㎝、短軸 160㎝ほどの隅丸方形状を呈する。検出面からの深さは 33㎝である。なお、西側にピットがみられるが、少なくとも壁際でないものは土層断面の観察から当遺構より新しいものとみられる。覆土は、混入するローム粒・ローム塊・暗茶褐色土塊の量で分層できる暗黄褐色土層が上下２層に堆積していた。

図示した遺物は９点である。第 185 図１は常滑甕の転用砥石である。破断面の一部が使用されている。２は砥石である。上下端は欠損している。３～９は鉄製品で、３～８は釘である。３は中間部でやや曲がっているが、完形とみられ、全長は 8.8㎝である。４もほぼ完形だが、中間部で屈曲しており、屈曲していなければ全長は 10㎝ほどとなる。５・８は下部と上部がそれぞれ欠損する。６は上部と下端部が欠損する。７も、頭部を欠き折れ曲がっているが、釘と考えられるものである。９は、釘の可能性もあるかもしれないが、弧状に曲がるもので、端部が少し屈曲する。把手と考えられる。ほかには、図示していないが近世以降陶磁器の小破片が少量出土したのみである。

4SK-099（第 186 図、図版 18）

14D-21・22 グリッドに所在する。平面形は、長軸 175㎝、短軸 113㎝の隅丸方形状を呈する。北辺にピット状に張り出す部分があるが撹乱と考えられる。検出面からの床面の深さは 15㎝ほどであるが、遺構中央に径 40㎝、床面からの深さ 26㎝ほどのピットが１か所ある。

遺物は出土していない。

4SK-100（第 187 図、図版 18）

14C-19･29、14D-10･20 グリッドに所在する。南側で溝状遺構 4SD-037 と重複するが、新旧関係ははっきりしない。平面形は、現状で長軸 275㎝、短軸 200㎝である。検出面からの床面の深さは 58㎝である。

遺物は出土していない。

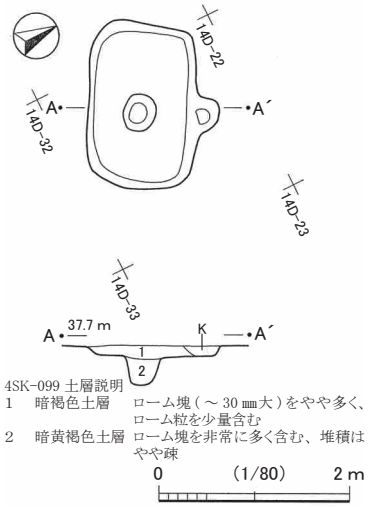
4SK-104・118（第 188 図、図版 18）

14D-52 ～ 54・62 ～ 64 グリッドに所在する、重複する２基の方形竪穴である。東西方向から南北方向へ屈曲し北へ延びる溝状遺構 4SD-006 の屈曲部分に重複して同じ軸方向で位置している。新旧関係は、土層断面の観察から 4SK-104 が 4SD-006 より古いことは明らかであるが、4SK-104・118 の関係ははっきりしない。

4SK-104 は、現状で隅丸方形状を呈し、短軸 185㎝、長軸は 215㎝と復元できる。検出面からの深さは 76㎝である。覆土はローム粒・ローム塊・茶褐色土塊の混入量によって分層可能な暗褐色土が３層水平堆積していた。

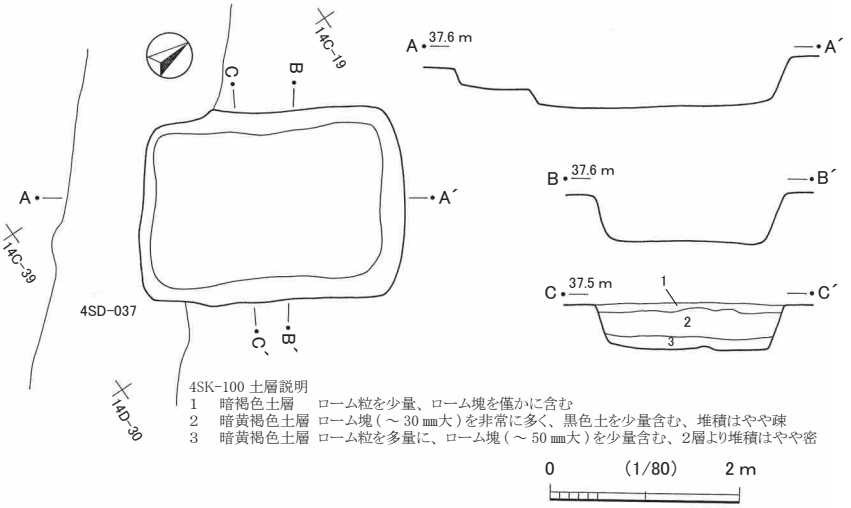
4SK-118 は、現状で長軸 220㎝、短軸 130㎝ほどの長方形を呈している。底面は平坦で、検出面からの深さは 109㎝である。

遺物はいずれの遺構からも出土していない。



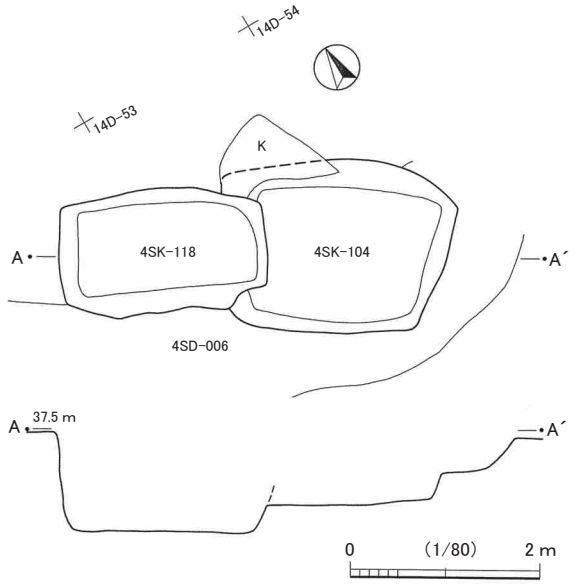
4SK-099 土層説明
1　暗褐色土層　ローム塊（～30㎜大）をやや多く、ローム粒を少量含む
2　暗黄褐色土層　ローム塊を非常に多く含む、堆積はやや疎

第186図　4SK-099

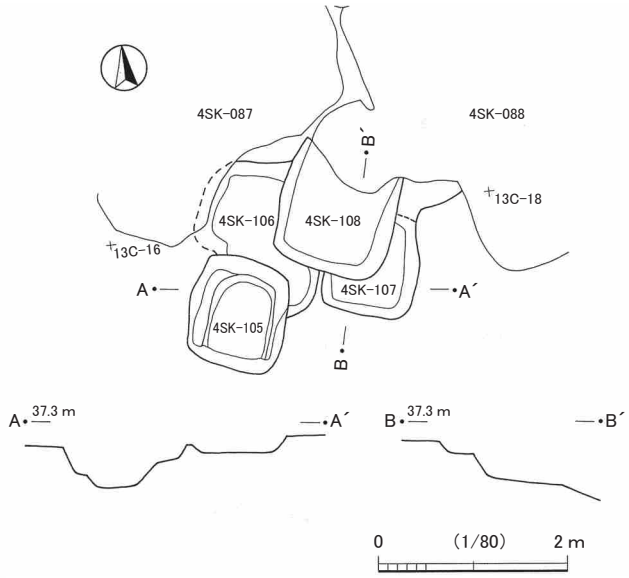


4SK-100 土層説明
1　暗褐色土層　ローム粒を少量、ローム塊を僅かに含む
2　暗黄褐色土層　ローム塊（～30㎜大）を非常に多く、黒色土を少量含む、堆積はやや疎
3　暗黄褐色土層　ローム粒を多量に、ローム塊（～50㎜大）を少量含む、2層より堆積はやや密

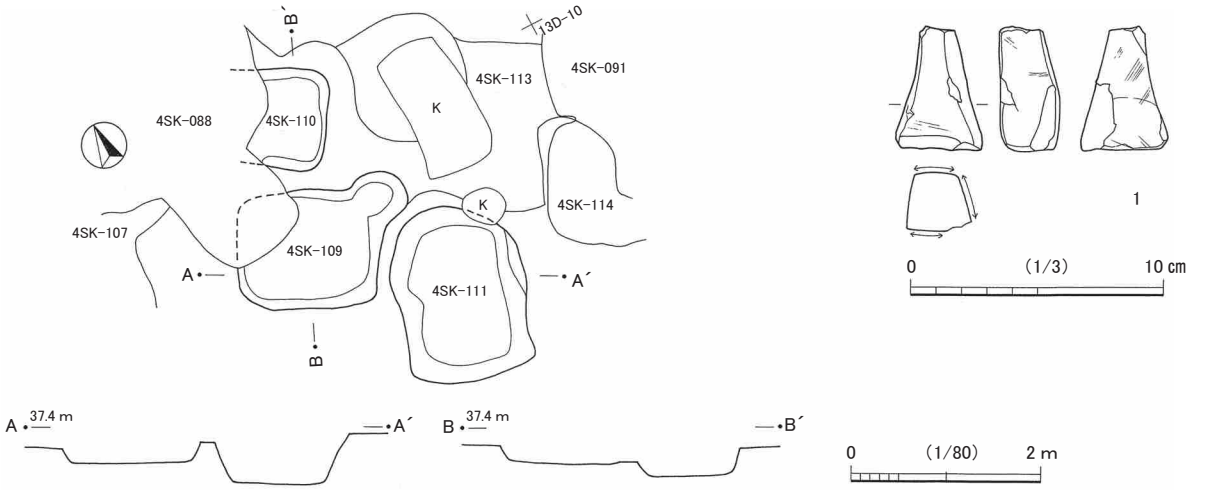
第187図　4SK-100



第188図　4SK-104・118



第189図　4SK-105～108



第190図　4SK-109～111と出土遺物

4SK-105 ～ 108（第 189 図、図版 18）

13C-06・07・16・17 グリッドに所在する、重複する 4 基の方形竪穴群である。地下式坑 4SK-087・088 の南側に隣接する。各遺構の新旧関係は、土層断面の観察から 4SK-105 より 4SK-106 のほうが古いことが判明したが、ほかは明らかでない。

4SK-105 は長軸 113㎝、短軸 103㎝の隅丸方形を呈する。壁に段があるが床面はほぼ平坦で、検出面からの深さは 42㎝である。覆土はローム粒・灰色粘土粒・茶褐色土塊の混入量により分層できる暗褐色土が 3 層水平堆積していた。

4SK-105 の北に重複して位置し、更に一部地下式坑 4SK-087 に食い込むように位置しているのが 4SK-106 である。4SK-106 は東側で 4SK-108 とも重複し、全体の形状や規模ははっきりしないが、隅丸方形状を呈する可能性が高い。検出面からの深さは 18㎝である。

4SK-107 は北西部分で 4SK-108 と重複するが、長軸 110㎝、短軸 95㎝ほどの隅丸方形を呈すると考えられる。検出面からの深さは 18㎝である。

4SK-108 は、形状ははっきりしないが長軸 130㎝以上、短軸 120㎝ほどの隅丸方形を呈するとみられる。検出面からの深さは 50㎝である。

遺物は、図示はしていないが 4SK-106 から中世陶磁器の小破片が少量出土したのみで、ほかの遺構からは出土していない。

4SK-109 ～ 111（第 190 図、図版 19・111）

13C-08・18・19・28・29 グリッドに位置する方形竪穴群である。4SK-109・110 は地下式坑 4SK-088 と重複している。各遺構の新旧関係は、土層断面の観察から地下式坑 4SK-088 より 4SK-109 のほうが新しいが、ほかは明らかでない。

4SK-109 は、北西隅で 4SK-088 の入口部分と重複しているが、平面形は長軸 145㎝、短軸 124㎝の隅丸方形を呈するとみられる。北東隅に円形に張り出す部分があるが、土層断面の観察から、当遺構よりも新しい別遺構であることが明らかである。検出面からの床面の深さは 22㎝である。

4SK-110 は、西側で 4SK-088 と重複する。平面形は隅丸方形を呈するとみられ、南北軸 105㎝、東西軸は現存の部分で 80㎝である。検出面からの床面の深さは 30㎝である。4SK-088 との新旧関係は明らかでない。

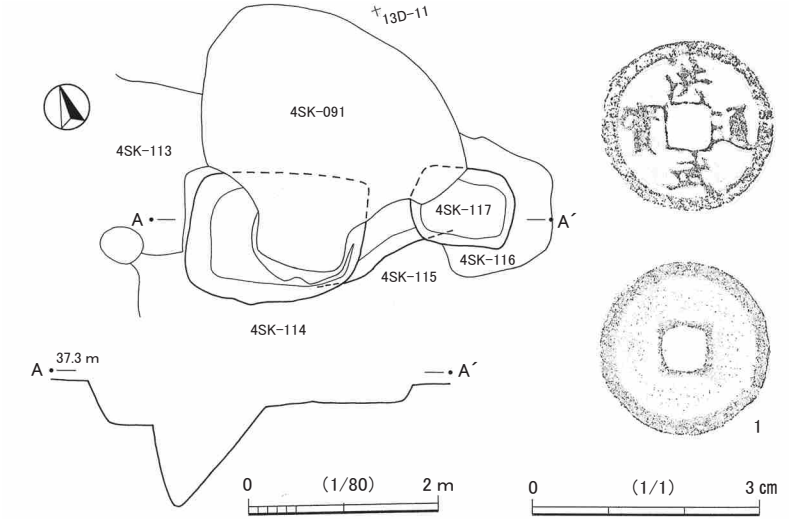
4SK-111 は長軸 185㎝、短軸 130㎝ほどの不整隅丸方形を呈している。検出面からの深さは 52㎝である。

図示した遺物は 1 点である。第 190 図 1 は、4SK-110 から出土した砥石である。上端は欠損している。ほかは、図示していないが 4SK-110 から中・近世以降陶磁器及び土器の小破片が少量出土したのみで、4SK-109・111 からは出土していない。

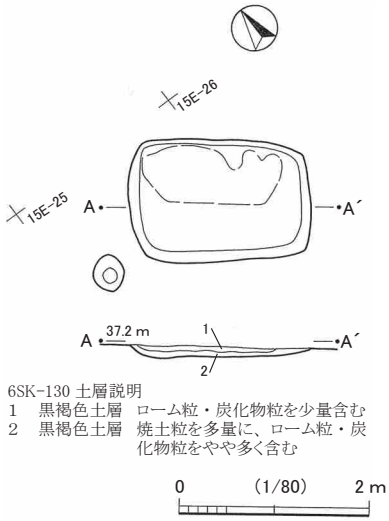
4SK-114・115・117（第 191 図、図版 19・122）

13C-19・29、13D-20・21 グリッドに所在する、重複する 3 基の方形竪穴である。互いに重複するだけでなく周囲の土坑や地下式坑とも重複し、やや複雑な状況を呈している。新旧関係はいずれもはっきりしない。

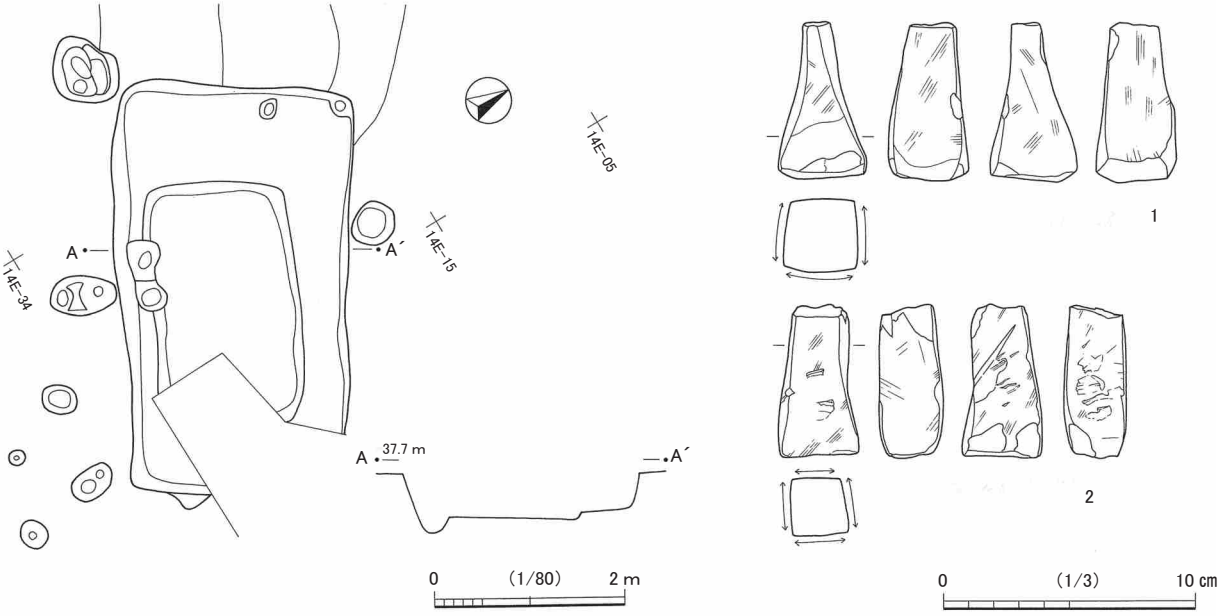
4SK-114 は、北東側で地下式坑 4SK-091 と、西で土坑 4SK-113 と、東で 4SK-115 と重複するが、平



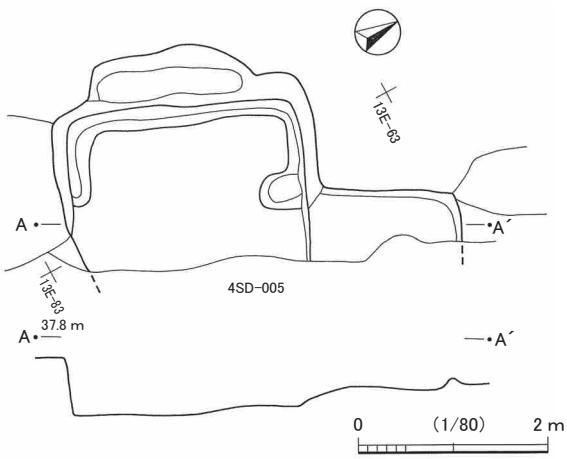
第 191 図　4SK-114・115・117 と出土遺物



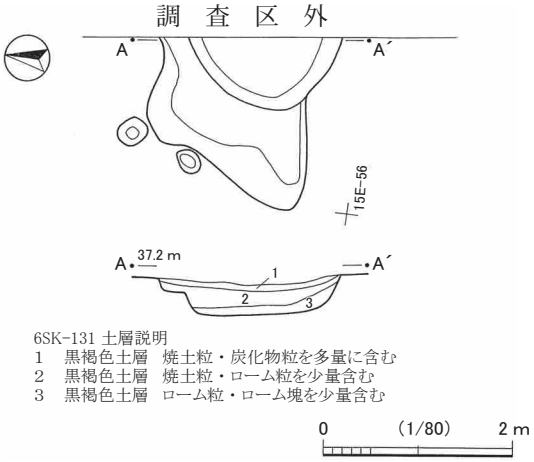
第 192 図　6SK-130



第 193 図　6SK-126 と出土遺物



第 194 図　6SK-127



第 195 図　6SK-131

面形は隅丸方形状とみられる。長軸は 180㎝ほど、短軸は 125㎝ほどと復元される。検出面からの床面の深さは 62㎝である。

4SK-115 は、西で 4SK-114、北西で地下式坑 4SK-091、東で 4SK-117 と重複し、平面形は明確でない。検出面からの深さは 21㎝である。

4SK-117 は、西で 4SK-115、北西で地下式坑 4SK-091、東で土坑 4SK-116 と重複するが、平面形は長軸 105㎝、短軸 80㎝ほどの隅丸方形と推定される。検出面からの床面の深さは 40㎝ほどである。

図示した遺物は 1 点である。第 191 図 1 は銭貨で、洪武通寶である。背面は無文である。遺物はほかには 4SK-117 から中世陶磁器の小破片が少量出土したのみで、4SK-114・115 からは出土していない。

6SK-126（第 193 図、図版 19・111）

14E-13 ～ 15・23 ～ 25 グリッドに所在する。平面形は長軸 430㎝、短軸 250㎝の長方形を呈する。検出面からの床面の深さは 43㎝であるが、中央の推定長軸 265㎝、短軸 155㎝の長方形の範囲がそれより 5㎝前後低くなっている。覆土はローム粒・ロームブロックの混入量で上下 2 層に分層可能な黒褐色土が堆積しており、複数の遺構が重複している痕跡はみられない。床面には、南西壁際に床面からの深さ 20㎝前後のピットがある。また、遺構の周囲にもピットがいくつかあり、遺構に伴う可能性がある。周囲のピットの深さは、西角際のものが 53㎝、南西壁際のものが 47㎝と深めで、そのほかは 20㎝前後である。

図示した遺物は 2 点である。第 193 図 1・2 は砥石である。いずれも、上端を欠損する。遺物はほかには中・近世以降陶磁器及び土器の小破片が少量出土したのみで、図示していない。

6SK-127（第 194 図）

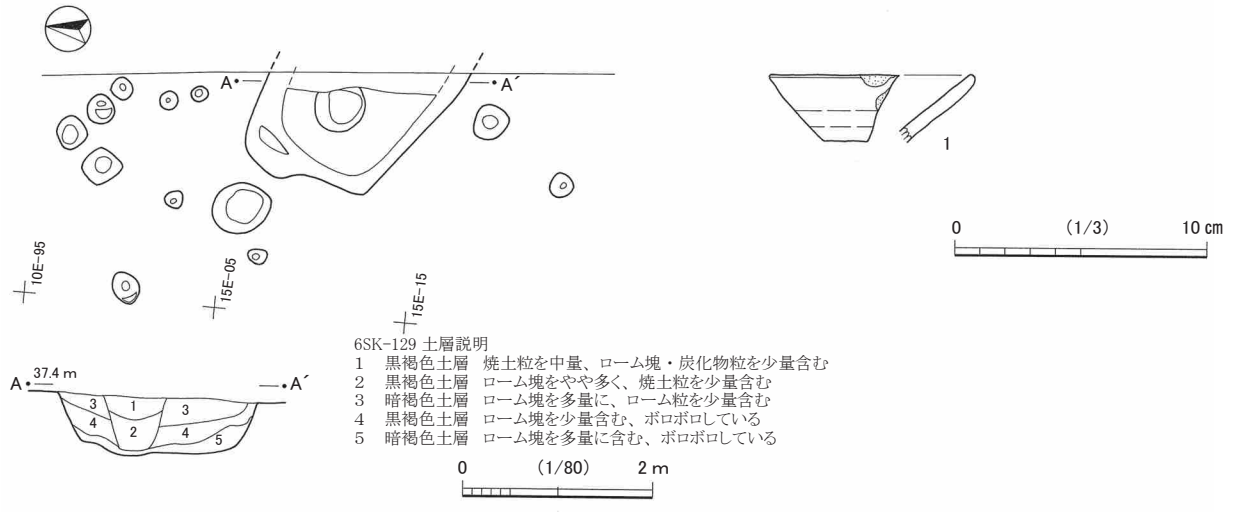
13E-62・63・72・73 グリッドに所在する。東側は溝状遺構 4SD-005 と重複する。複数の遺構が重複している可能性もあるが、平面形は基本的には南北軸 280㎝、東西軸 185㎝以上の隅丸方形を呈し、西側に長さ 170㎝、幅 45㎝ほどの段状に張り出す部分がみられる。また、北側にも張り出す部分があり、同時期に機能したものか別の遺構か不明ではあるが、張り出す部分を含めると、規模は南北軸 440㎝、東西軸 230㎝以上となる。検出面からの深さは、床面が 57㎝、西側の張り出す部分で 35㎝、北側で 34㎝である。主体となる部分の床面はほぼ平坦であるが、その西壁際から南壁際・北壁際の一部にかけて、深さ数㎝の壁溝が検出された。

遺物は出土していない。

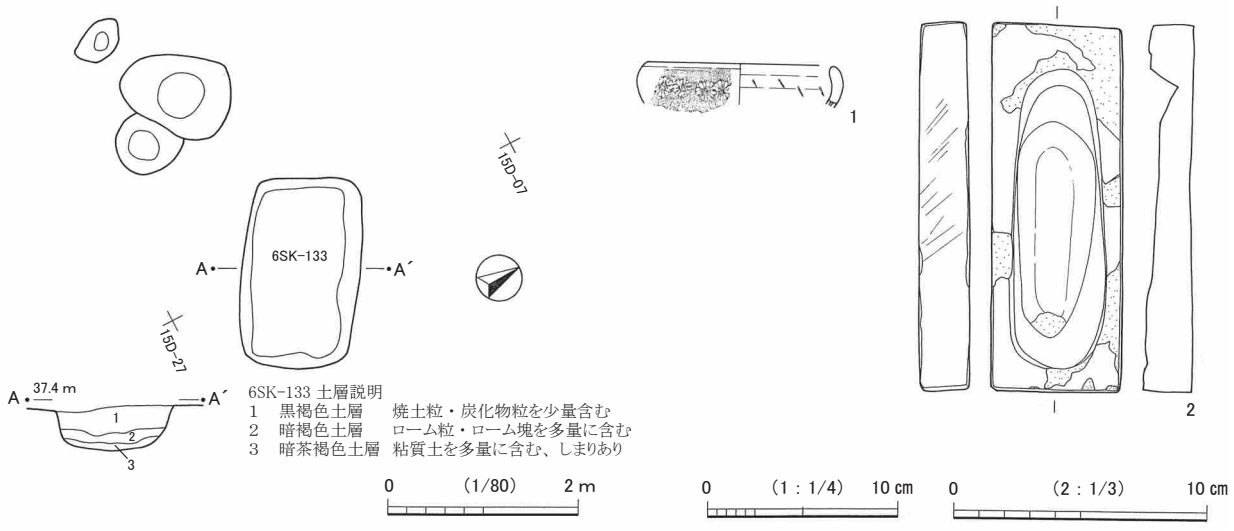
6SK-129（第 196 図、図版 19・99）

15E-05・06・16 グリッドに所在する。東側は調査区外となる。平面形は、北西隅がやや張り出すが、長軸 160㎝以上、短軸 155㎝の隅丸長方形状とみられる。検出面からの深さは 63㎝である。床面中央にやや凹む部分があるが、土層断面ではちょうどその上に別のピットが絡んでいるのが観察され、遺構と関係のあるものかどうかはっきりしない。周辺のピットとの関連もはっきりしない。

図示した遺物は 1 点である。第 196 図 1 はカワラケ杯である。



第 196 図　6SK-129 と出土遺物



第 197 図　6SK-133 と出土遺物

6SK-130（第 192 図）

15E-25・26 グリッドに所在する。平面形は長軸 190㎝、短軸 130㎝の隅丸方形を呈する。検出面からの床面の深さは 13㎝である。床面には焼土ブロックと炭化物が図の点線の範囲内に散布していた。壁は緩やかに立ち上がる。

遺物は、カワラケの小破片が少量出土したのみで、図示していない。

6SK-131（第 195 図）

15E-36・46 グリッドに所在する。平面形は不整形を呈し、東側は調査区外へ繋がる。床面には段差があり、一見複数の遺構が重複しているようにも見えるが、土層断面の観察から、少なくとも遺存部分については重複関係はみられず、一度に埋没したものであることが明らかである。検出面からの深さは、西側の浅い部分で 14㎝、東側の深い部分で 35㎝である。遺構の外側北西部に 2 基のピットがみられ、伴う可能性がある。検出面から深さは、北側のものが 35㎝、南側のものが 5 ㎝である。

遺物は、図示していないが中世陶磁器の小破片が少量出土した。

6SK-133（第 197 図、図版 19・99・111）

15D-06・07・16・17 グリッドに所在する。平面形は長軸 200㎝、短軸 123㎝の隅丸長方形を呈する。床面はほぼ平坦で、検出面からの深さは 38㎝である。

図示した遺物は２点である。第 197 図１は瓦質香炉である。外面には菊の押印文が巡る。内面には、ヘラナデのヘラ当て痕が観察される。胎土には１㎜～２㎜大の白色粒子を含み、色調は暗灰色を呈する。２は硯である。部分的に剥落・欠損があるがほぼ完形である。よく使い込まれている。

第４節　井戸

１　概要

調査区内から検出された井戸は３基である。10C ～ 14D グリッドの南北約 85 ｍの範囲内に、３基が集中して存在している。

２　遺構と遺物

4SE-001（第 198 図、図版 20・99）

14D-25 グリッドに所在する。平面形は径 125㎝の円形を呈する。調査は検出面から約 210㎝の深さまで行ったが、更にまだ１ｍ以上の深さがあると推定される。壁は垂直に近い角度で、壁の北西側には、足掛けと思われる奥行き 10㎝程度の凹みが３か所確認された。凹みから凹みの高さの間隔は、約 60㎝である。

図示した遺物は１点である。第 198 図１はカワラケ杯である。色調はにぶい橙色を呈し、焼成は比較的良い。近世の所産と考えられる。

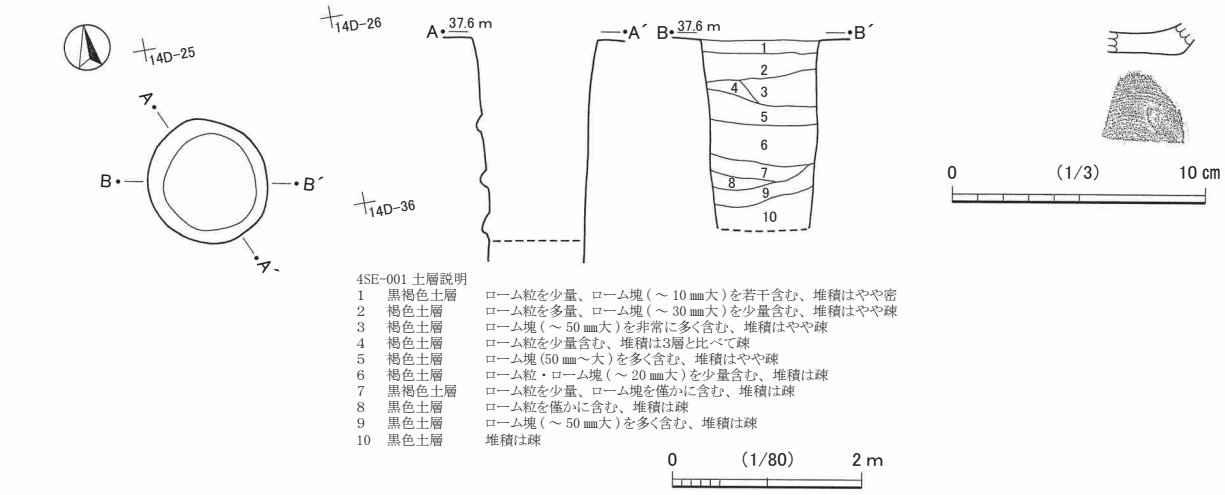
4SE-002（第 199 図、図版 20・110）

10C-38・47 ～ 49・57 ～ 59 グリッドに所在する。平面形は径 360㎝ほどの円形を呈する。調査は検出面から 240㎝の深さまで行ったが、更に深さがある。断面形は漏斗状を呈し、検出面から 60㎝程度の深さまでは緩い傾斜で落ち込み、その下はほとんど垂直の壁である。壁が垂直となっている部分の平面形は、径 125㎝の円形を呈する。壁の北西側と南東側には、足掛けと思われる奥行き 15㎝前後の凹みが３か所ずつ確認された。凹みから凹みの高さの間隔は 60㎝前後である。

図示した遺物は１点である。第 199 図１は、土錘である。上下端は面取りされ、どちらを上にしても安定して立つ。表面は平滑である。胎土に砂粒を多量に含み、焼成は良好、色調は赤褐色を呈している。このほかには、近世以降土器の小破片が少量出土したのみである。

6SE-005（第 200 図、図版 20・94）

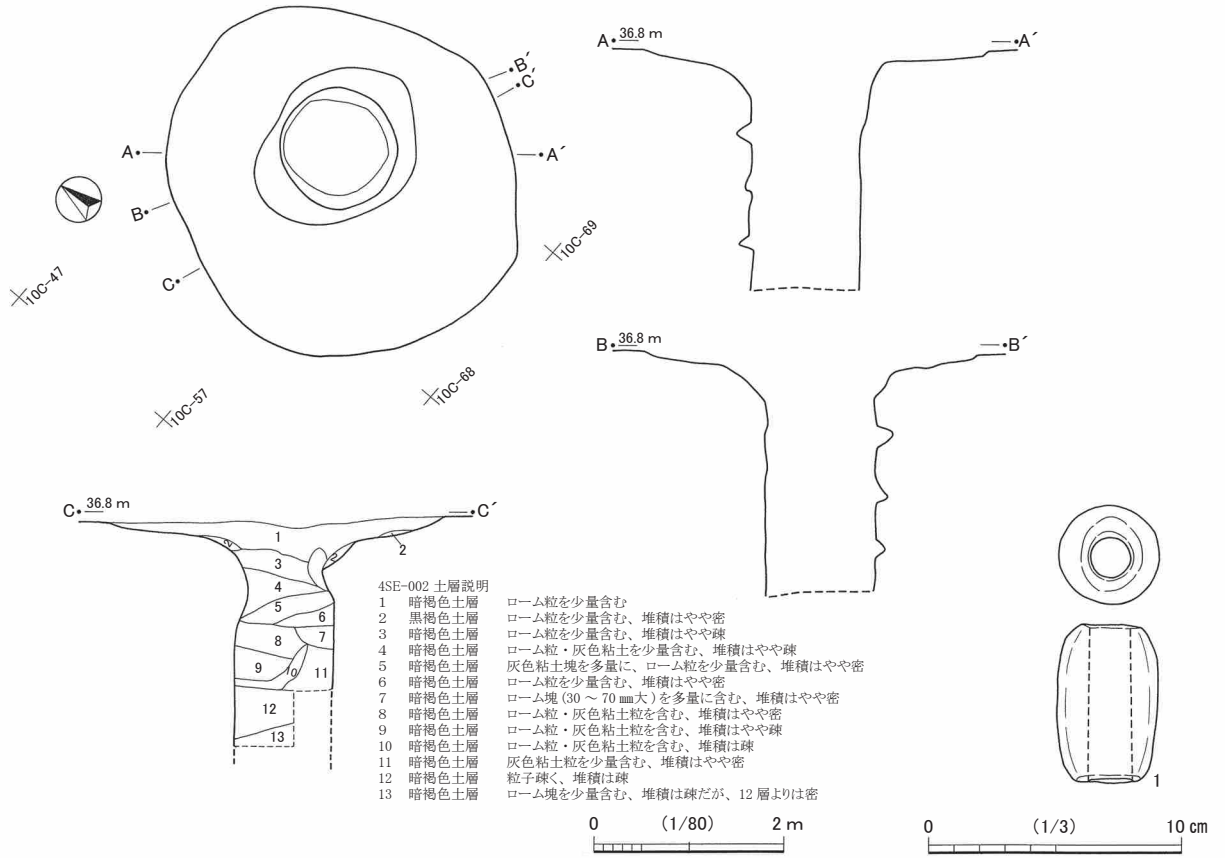
14D-67・68 グリッドに所在する。溝状遺構 4SD-005 と重複するが、土層断面の観察から当遺構のほうが古いとみられる。現存する電柱により調査不能の部分があるが、平面形は現状で一辺 95㎝ほどの隅丸正方形状を呈する。検出面からの深さは 230㎝ほどである。



4SE-001 土層説明

1	黒褐色土層	ローム粒を少量、ローム塊（～10㎜大）を若干含む、堆積はやや密
2	褐色土層	ローム粒を多量、ローム塊（～30㎜大）を少量含む、堆積はやや疎
3	褐色土層	ローム塊（～50㎜大）を非常に多く含む、堆積はやや疎
4	褐色土層	ローム粒を少量含む、堆積は3層と比べて疎
5	褐色土層	ローム塊（50㎜～大）を多く含む、堆積はやや疎
6	褐色土層	ローム粒・ローム塊（～20㎜大）を少量含む、堆積は疎
7	黒褐色土層	ローム粒を少量、ローム塊を僅かに含む、堆積は疎
8	黒色土層	ローム粒を僅かに含む、堆積は疎
9	黒色土層	ローム塊（～50㎜大）を多く含む、堆積は疎
10	黒色土層	堆積は疎

第 198 図　4SE-001 と出土遺物

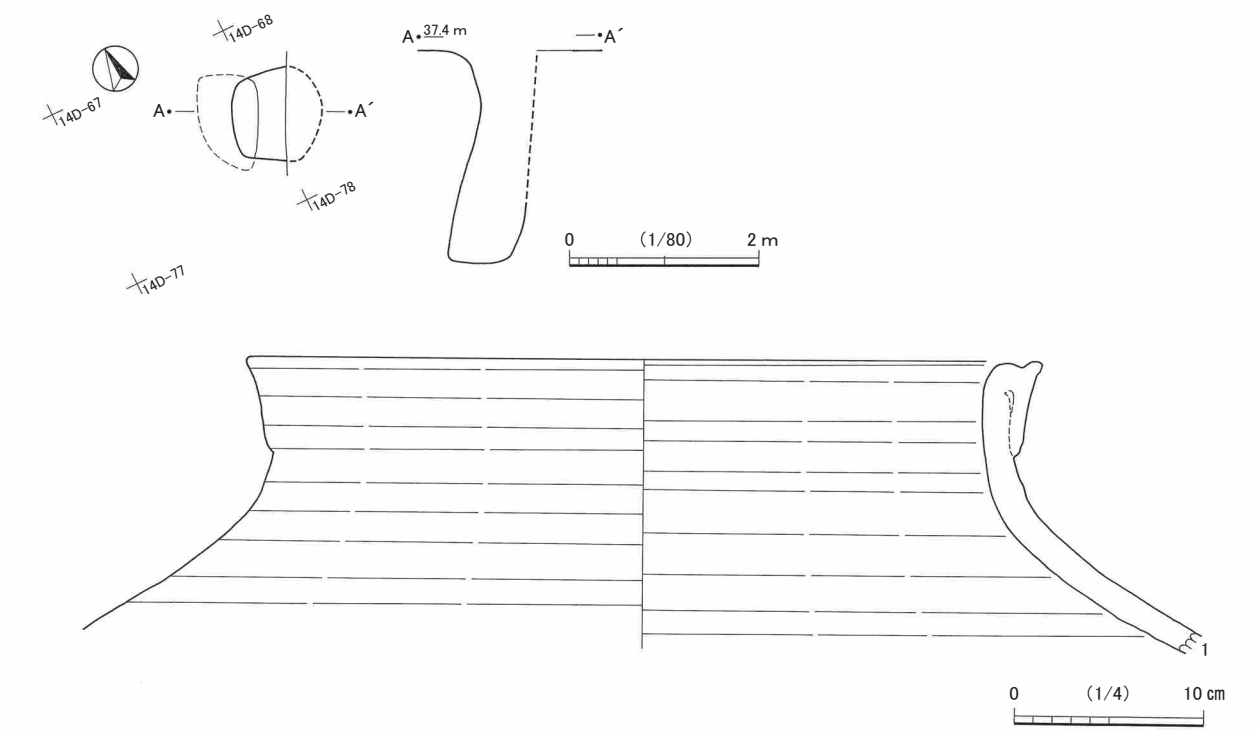


4SE-002 土層説明

1	暗褐色土層	ローム粒を少量含む
2	黒褐色土層	ローム粒を少量含む、堆積はやや密
3	暗褐色土層	ローム粒を少量含む、堆積はやや疎
4	暗褐色土層	ローム粒・灰色粘土を少量含む、堆積はやや疎
5	暗褐色土層	灰色粘土塊を多量に、ローム粒を少量含む、堆積はやや密
6	暗褐色土層	ローム粒を少量含む、堆積はやや密
7	暗褐色土層	ローム塊（30～70㎜大）を多量に含む、堆積はやや密
8	暗褐色土層	ローム粒・灰色粘土粒を含む、堆積はやや密
9	暗褐色土層	ローム粒・灰色粘土粒を含む、堆積はやや疎
10	暗褐色土層	ローム粒・灰色粘土粒を含む、堆積は疎
11	暗褐色土層	灰色粘土粒を少量含む、堆積はやや密
12	暗褐色土層	粒子疎く、堆積は疎
13	暗褐色土層	ローム塊を少量含む、堆積は疎だが、12 層よりは密

第 199 図　4SE-002 と出土遺物

図示した遺物は 1 点である。第 200 図 1 は一括で取り上げられた常滑大甕である。口縁部の 25% の遺存度で、復元口径は 42.0㎝である。折返し口縁をもつ。色調は外面が灰色、内面は暗赤褐色を呈する。9 型式に比定されるものと考えられる。ほかに、中・近世以降陶磁器の小破片も少量出土している。



第 200 図　6SE-005 と出土遺物

第 5 節　土坑

1　概要

調査区内では多数の遺構が検出されたが、地下式坑・方形竪穴・竪穴状遺構・井戸でないもののうち、柱穴等とは異なり一定規模をもつ遺構を土坑とした。平面形は方形のものや円形のもの、不整形のものなど様々である。分布範囲は地下式坑・方形竪穴・竪穴状遺構・井戸より広く、29K グリッド以北である。土坑の用途や機能は多くは不明であるが、中には銭貨が大量に埋納された 4SK-014 のような遺構もみられる。なお、4SK-014 については第 1 節にまとめて掲載している。

遺構種別記号には「SK」が付されているものが多いが、「SH」が付されているものもあり、ここでは「SK」を先に、「SH」を後とし、その中でそれぞれ、調査次・番号の若い順に並べて掲載することとした。

2　遺構と遺物

SK-001（第 201 図、図版 4）

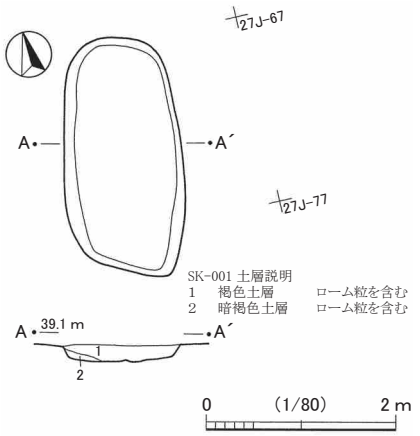
27J-66・76 グリッドに所在する。平面形は長軸 250㎝、短軸 123㎝の不整隅丸方形状を呈している。底面は平坦で、検出面からの深さは 20㎝ほどである。

遺物は出土していない。

SK-004（第 202 図、図版 4）

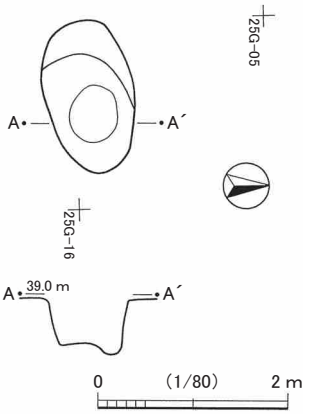
25G-05・15 グリッドに所在する。平面形は長軸 162㎝、90㎝の楕円形である。検出面からの深さは、深いところで 62㎝である。

遺物は出土していない。

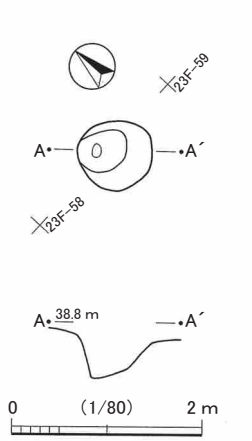


SK-001 土層説明
1　褐色土層　ローム粒を含む
2　暗褐色土層　ローム粒を含む

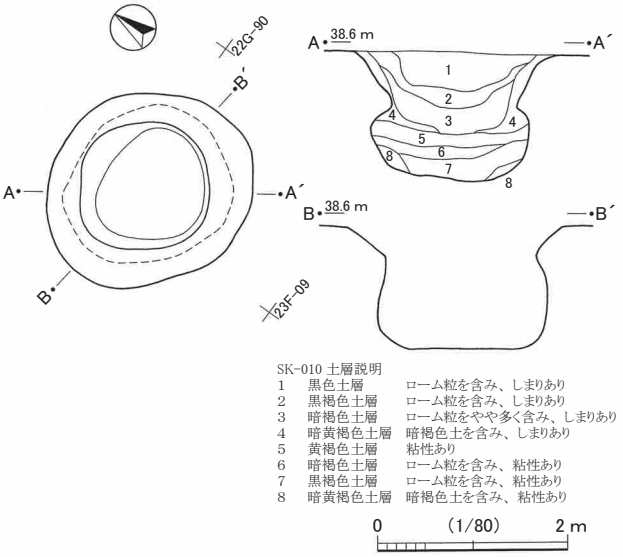
第 201 図　SK-001



第 202 図　SK-004

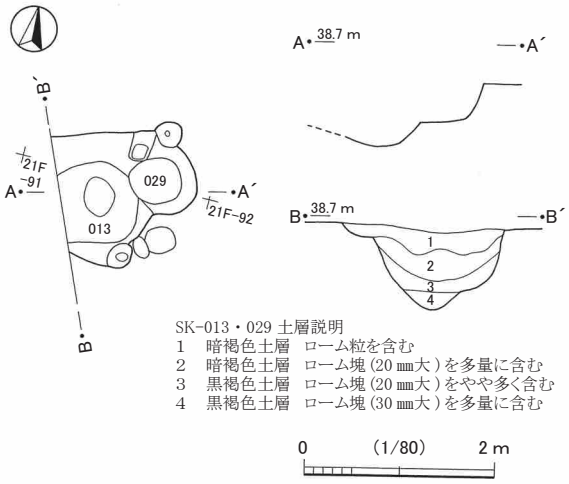


第 203 図　SK-008



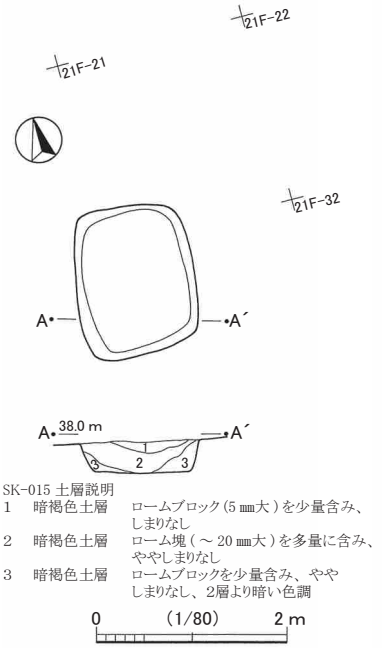
SK-010 土層説明
1　黒色土層　ローム粒を含み、しまりあり
2　黒褐色土層　ローム粒を含み、しまりあり
3　暗褐色土層　ローム粒をやや多く含み、しまりあり
4　暗黄褐色土層　暗褐色土を含み、しまりあり
5　黄褐色土層　粘性あり
6　暗褐色土層　ローム粒を含み、粘性あり
7　黒褐色土層　ローム粒を含み、粘性あり
8　暗黄褐色土層　暗褐色土を含み、粘性あり

第 204 図　SK-010



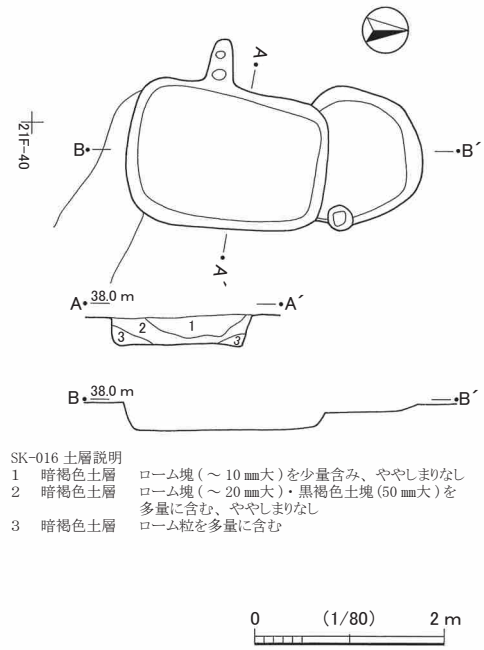
SK-013・029 土層説明
1　暗褐色土層　ローム粒を含む
2　暗褐色土層　ローム塊 (20 ㎜大) を多量に含む
3　黒褐色土層　ローム塊 (20 ㎜大) をやや多く含む
4　黒褐色土層　ローム塊 (30 ㎜大) を多量に含む

第 205 図　SK-013・029



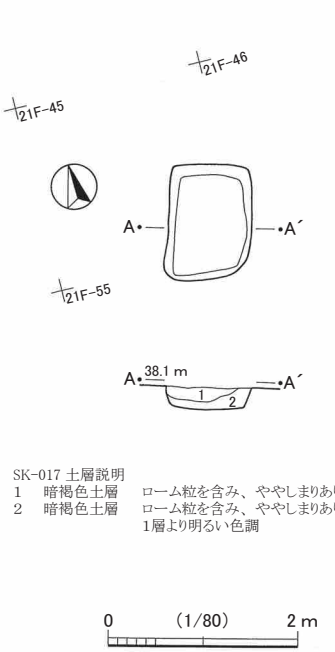
SK-015 土層説明
1　暗褐色土層　ロームブロック (5 ㎜大) を少量含み、しまりなし
2　暗褐色土層　ローム塊 (～ 20 ㎜大) を多量に含み、ややしまりなし
3　暗褐色土層　ロームブロックを少量含み、ややしまりなし、2層より暗い色調

第 206 図　SK-015



SK-016 土層説明
1　暗褐色土層　ローム塊 (～ 10 ㎜大) を少量含み、ややしまりなし
2　暗褐色土層　ローム塊 (～ 20 ㎜大)・黒褐色土塊 (50 ㎜大) を多量に含む、ややしまりなし
3　暗褐色土層　ローム粒を多量に含む

第 207 図　SK-016



SK-017 土層説明
1　暗褐色土層　ローム粒を含み、ややしまりあり
2　暗褐色土層　ローム粒を含み、ややしまりあり、1層より明るい色調

第 208 図　SK-017

SK-008（第 203 図、図版 4）

23F-48・58 グリッドに所在する。平面形は径約 79㎝の円形を呈する。断面形は擂鉢状を呈し、検出面からの深さは最も深いところで 48㎝である。

遺物は出土していない。

SK-010（第 204 図、図版 4）

22F-88・89・98・99 グリッドに所在する。平面形は長軸 230㎝、短軸 200㎝の楕円形を呈する。底面は平坦で、断面形は袋状を呈する。検出面からの深さは 136㎝である。

遺物は出土していない。

SK-013・029（第 205 図、図版 6）

21F-81･91 グリッドに所在する、重複する 2 基の土坑であるが、新旧関係は明らかでない。SK-013 は、西側が調査区外となるが、平面形は径約 135㎝の円形状、その東側に重複する SK-029 は径約 95㎝の円形状を呈するとみられる。いずれも浅いピットが付随するようだが、周辺にはピットが群在しており、これだけで機能したものではない可能性もある。なお、SK-029 の東には、方形竪穴 SK-011 が隣接する。

遺物は、SK-013 から混入品とみられる土器の小破片が少量出土したのみである。

SK-015（第 206 図、・図版 4）

21F-20・21・30・31 グリッドに所在する。平面形は長軸 162㎝、短軸 123㎝の隅丸方形を呈する。底面は平坦で、検出面からの深さは 39㎝である。方形竪穴とするには底面等があまりしっかりしていないことから、土坑とした。

遺物は、混入品とみられる土器の小破片が少量出土したのみである。

SK-016（第 207 図、図版 5）

21E-29・39、21F-20・30 グリッドに所在する。平面形は、長軸 212㎝、短軸 150㎝の隅丸方形の土坑の北側に径 145㎝ほどの円形土坑が重複している形である。いずれも底面は平坦で、検出面からの深さは方形部分が 32㎝、円形部分が 14㎝である。また、方形部分には、西壁中央部分に細く張り出す部分がある。方形部分については方形竪穴に分類することもできるかもしれないが、底面などがあまりしっかりしていないことから、土坑とした。

遺物は出土していない。

SK-017（第 208 図、図版 5）

21F-45･46･55 グリッドに所在する。平面形は、長軸 126㎝、短軸 88㎝の方形状を呈する。底面は平坦で、検出面からの深さは 26㎝である。方形竪穴とするには底面等があまりしっかりしていないことから、土坑とした。

遺物は出土していない。

SK-018・021（第 209 図、図版５）

21E-09・19、21F-00・10 グリッドに近接して所在する土坑である。平面形は、SK-018 は径約 123㎝と径約 105㎝の２基の円形の土坑が重複したような形状を呈しており、SK-021 は、東側が SH-014 と重複しているが、長軸 182㎝、最大幅 155㎝の卵形に復元できる。新旧関係は、断面の観察から SH-014 より SK-021 のほうが新しい。検出面からの深さは、SK-018 は深い部分で 33㎝、浅い部分で 13㎝である。SK-021 は 23㎝である。

遺物は、SK-021 から混入品とみられる鉄製品が出土したのみである。

SK-019（第 210 図）

21F-16・26 グリッドに所在する。平面形は、長軸 116㎝、短軸 72㎝の隅丸方形の土坑の北側に、径約 30㎝の円形のピットが重複しているような形状である。長方形部分の底面はほぼ平坦で、検出面からの深さは 31㎝、円形部分の深さは 51㎝である。遺構周辺にはピットが群在し、当遺構のみで機能していたのではない可能性もある。

遺物は出土していない。

SK-022（第 211 図、図版５）

21F-22・23・32・33 グリッドに所在する。平面形は長軸 168㎝、短軸 130㎝の隅丸方形を呈する。底面は平坦で、検出面からの深さは 21㎝である。方形竪穴とするには底面等があまりしっかりしていないことから、土坑とした。

遺物は出土していない。

SK-023（第 212 図、図版５）

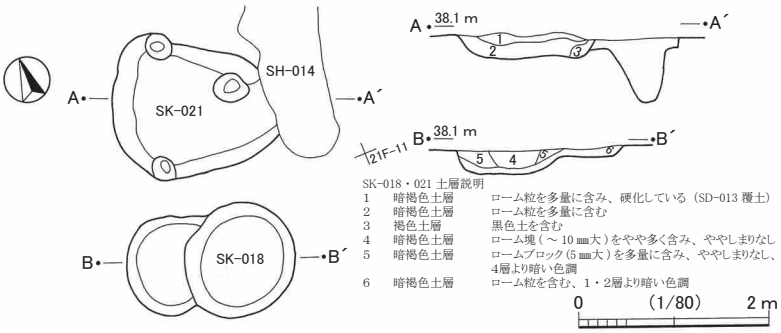
29K-48・57・58 グリッドに所在する。平面形は、長軸 284㎝、短軸 68㎝の長方形を基本とし、長辺の中間部に１か所ピット状の張出し部分がある。検出面からの底面の深さは 21㎝、ピット状張出し部分の底面からの深さは 26㎝である。溝状遺構 SD-015 の延長線上に位置し、軸方向が一致するが、覆土は SD-015 とは異なる、単独の土坑である。

遺物は、近世以降陶磁器が少量出土したのみである。

SK-024・025（第 213 図、図版５）

21F-82・83・92・93 グリッドに所在する、重複する２基の土坑であるが、SK-025 は方形竪穴 SK-011 と重複している。また、遺構周辺にはピットが群在しており、これだけで機能したものではない可能性もある。SK-024 は径 95㎝ほどのピットと径 50㎝ほどのピットが連結したような状態であり、検出面からの深さは、径の大きい方が浅く 40㎝、径の小さいほうが深く 69㎝を測る。SK-024 の東側で重複する SK-025 は、東側が SK-011 と重複しているが、径約 125㎝の円形状と推測することが可能である。検出面からの深さは 43㎝である。SK-024・025 と SK-011 の新旧関係はいずれも明らかでない。

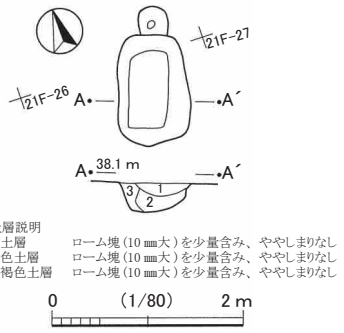
SK-024・025 とも遺物は出土していない。



SK-018・021 土層説明

1	暗褐色土層	ローム粒を多量に含み、硬化している（SD-013 覆土）
2	暗褐色土層	ローム粒を多量に含む
3	褐色土層	黒色土を含む
4	暗褐色土層	ローム塊（～10㎜大）をやや多く含み、ややしまりなし
5	暗褐色土層	ロームブロック（5㎜大）を多量に含み、ややしまりなし、4層より暗い色調
6	暗褐色土層	ローム粒を含む、1・2層より暗い色調

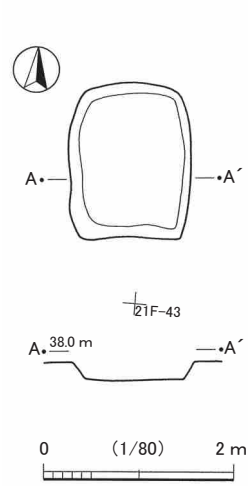
第 209 図　SK-018・021



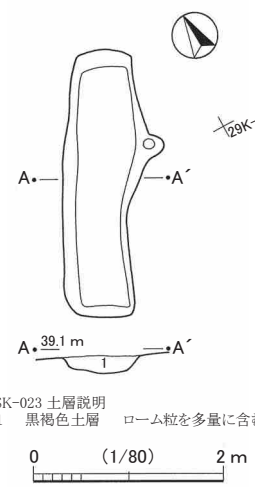
SK-019 土層説明

1	褐色土層	ローム塊（10㎜大）を少量含み、ややしまりなし
2	暗褐色土層	ローム塊（10㎜大）を少量含み、ややしまりなし
3	暗黄褐色土層	ローム塊（10㎜大）を少量含み、ややしまりなし

第 210 図　SK-019



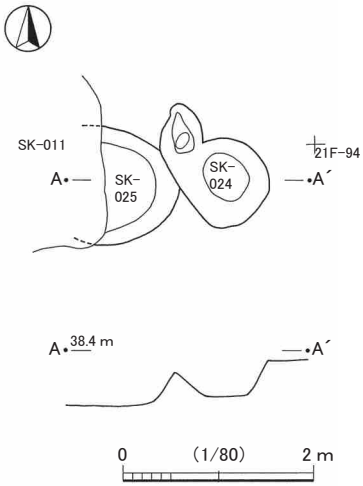
第 211 図　SK-022



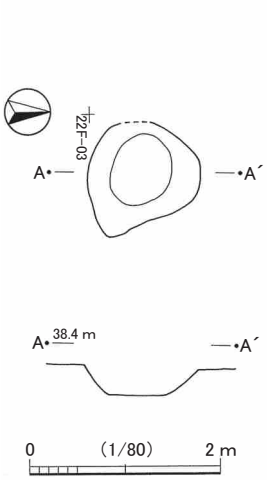
SK-023 土層説明

1　黒褐色土層　ローム粒を多量に含む

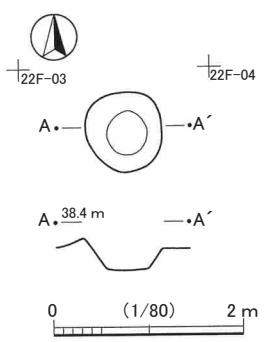
第 212 図　SK-023



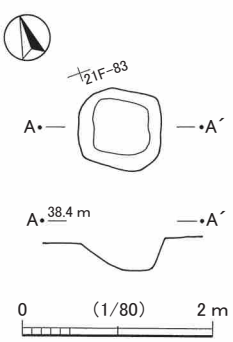
第 213 図　SK-024・025



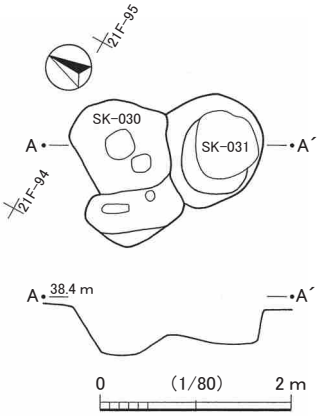
第 214 図　SK-026



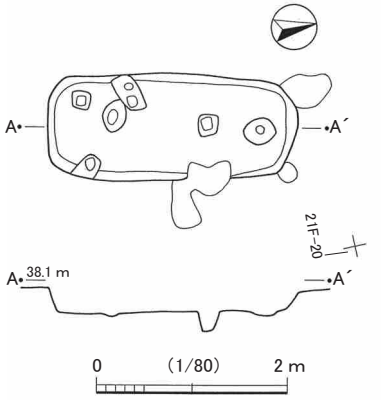
第 215 図　SK-027



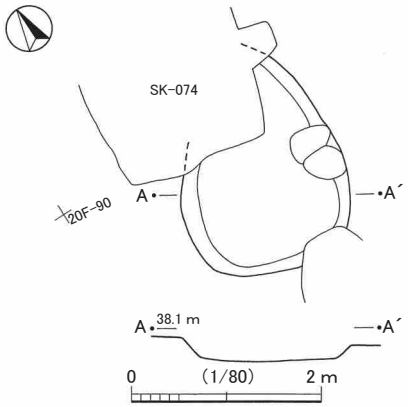
第 216 図　SK-028



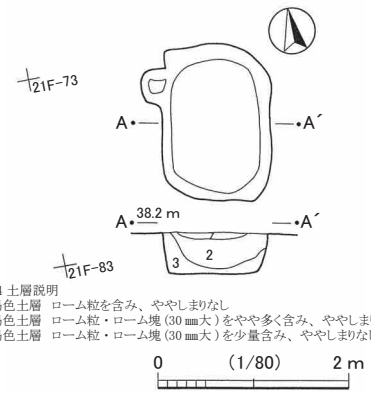
第 217 図　SK-030・031



第 218 図　SK-032



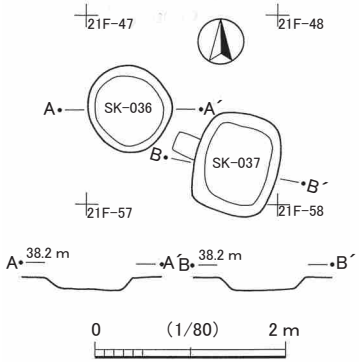
第 219 図　SK-033



SK-034 土層説明

1 暗褐色土層　ローム粒を含み、ややしまりなし
2 暗褐色土層　ローム粒・ローム塊（30㎜大）をやや多く含み、ややしまりなし
3 黒褐色土層　ローム粒・ローム塊（30㎜大）を少量含み、ややしまりなし

第 220 図　SK-034



第 221 図　SK-036・037

SK-026（第 214 図、図版６）

21F-93 グリッド、SK-024・025 の南に隣接して所在する。平面形は径 120㎝ほどの不整円形状を呈する。底面はやや平坦で、検出面からの深さは 34㎝である。遺構周辺にはピットが群在しており、当遺構のみで機能したものではない可能性もある。

遺物は出土していない。

SK-027（第 215 図、図版６）

22F-03 グリッド、SK-026 の南に隣接して所在する。平面形は径 85㎝の円形を呈する。底面はやや平坦で、検出面からの深さは 36㎝である。遺構周辺にはピットが群在しており、当遺構のみで機能したものではない可能性もある。

遺物は出土していない。

SK-028（第 216 図）

21F-82・83 グリッドに所在する。平面形は一辺 85㎝ほどの隅丸正方形状を呈する。検出面から底面までの深さは 32㎝である。

遺物は、アカニシの貝殻が 1 点出土したのみである。

SK-030・031（第 217 図、図版６）

21F-94 グリッドに所在する重複する土坑である。平面形は、SK-030・031 とも径 110㎝ほどの円形を呈する土坑が重複したところに、長軸 100㎝、短軸 55㎝の不整形の落込みが更に連結したような形状となっている。検出面からの深さは、SK-030 が 54㎝、SK-031 が 39㎝である。遺構は土坑 SK-024・026・027 に近接し、周辺にはピットが群在していることから、当遺構のみで機能したものではない可能性もある。

遺物は、SK-030 から混入品とみられる土器の小破片が少量出土したのみである。

SK-032（第 218 図、図版６）

21E-28・29・38・39 グリッドに所在する。平面形は長軸 260㎝、短軸 115㎝の隅丸方形を呈している。底面はほぼ平坦で、検出面からの深さは 30㎝である。底面や壁際にピットが複数みられるがいずれも底面からの深さは 20㎝前後である。遺構周辺にはピットが群在しており、同時に機能していた可能性もある。

遺物は出土していない。

SK-033（第 219 図）

20F-90・91 グリッドに所在する。北側で方形竪穴 SK-074 と重複し、平面形は現存部分で長径 232㎝、短径 178㎝ほどの卵形を呈している。底面はほぼ平坦で、検出面からの深さは 19㎝である。方形竪穴 SK-074 との新旧関係は明らかでない。

遺物は出土していない。

SK-034（第 220 図、図版６）

21F-73･74 グリッドに所在する。平面形は長軸 165㎝、短軸 113㎝の隅丸方形状を呈する。底面は平坦で、検出面からの深さは 56㎝である。北西部に張り出すピット状の部分は、底面からの深さが数㎝ほどである。遺構は弥生時代の竪穴住居跡を切って構築されており、周囲には竪穴住居跡の柱穴とみられるピットが複数分布している。方形竪穴とするには底面等があまりしっかりしていないことから、土坑とした。

遺物は、混入品とみられる土器の小破片が少量出土したのみである。

SK-036・037（第 221 図、図版６）

21F-47 グリッドに近接して所在する単独土坑２基である。SK-036 は、平面形は径約 90㎝の円形を呈する。底面は平坦で、検出面からの深さは 15㎝ほどである。SK-037 は、平面形は長軸 105㎝、短軸 87㎝の隅丸方形を呈する。底面は平坦で、検出面からの深さは 15㎝ほどである。

遺物は SK-036 から近世以降土器が少量、SK-037 から礫が少量出土したのみである。

SK-039（第 222 図、図版７）

21F-18・28 グリッドに所在する。平面形は長軸 130㎝、短軸 108㎝の隅丸方形を呈する。底面はほぼ平坦で、検出面からの深さは 23㎝である。北壁にピットがあり、底面からの深さは 46㎝である。

遺物は出土していない。

SK-040・042（第 223 図）

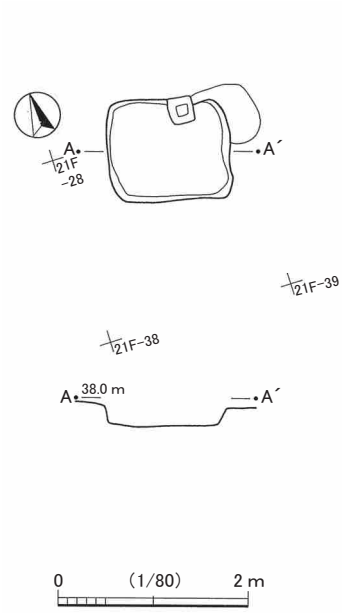
21F-66 ～ 68 グリッドに所在する２基の土坑で、方形竪穴 SI-025・SK-041 と重複する。新旧関係はいずれも明らかではない。SK-040 は現状で径 115㎝ほどの円形状を呈しているが、もとは楕円形状であった可能性がある。底面はやや平坦で、検出面からの深さは 13㎝ほどである。SK-042 は円形状を呈し、規模は最も長い部分で約 350㎝を測る。底面は西側にやや高い部分があるが、なだらかで、検出面からの深さは、最も深いところで 25㎝ほどである。北側の壁面沿い及び遺構の西側に隣接してピットがあり、壁際のピットの底面からの深さは、東側のものは 54㎝、西側のものは 32㎝である。遺構の西側に隣接しているピットの検出面からの深さは 10㎝である。

SK-040 からは遺物は出土していない。SK-042 からは混入品とみられる土器の小破片が少量出土したのみである。

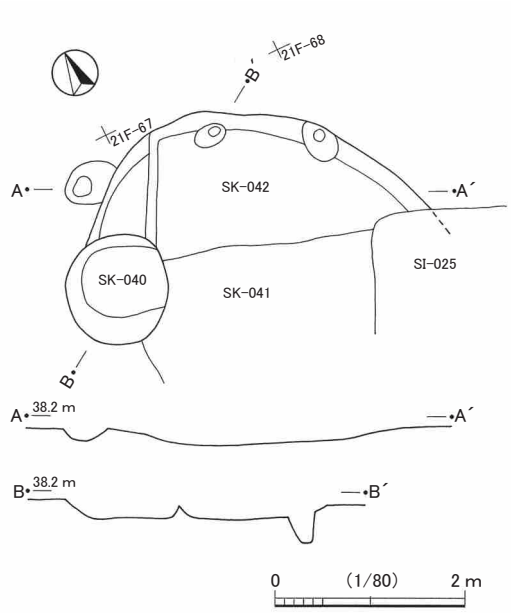
SK-043（第 224 図、図版７）

20E-55・56 グリッドに所在する。平面形は長方形を呈し、規模は検出できた部分で長軸 240㎝、短軸 132㎝である。底面は平坦で、検出面からの深さは 37㎝である。底面の東側と西壁にピットがあり、東側のものは底面からの深さ 46㎝、西壁のものは 55㎝である。また、南西隅にも、底面からの深さ 25㎝のピットがある。

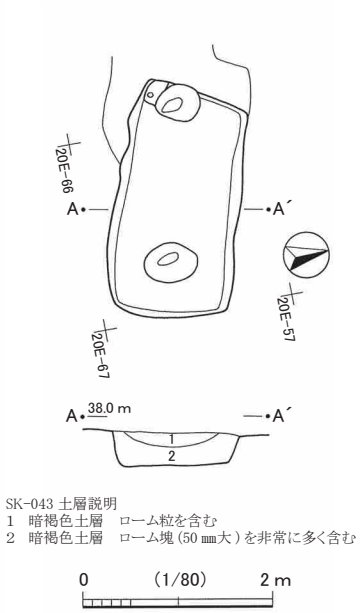
遺物は出土していない。



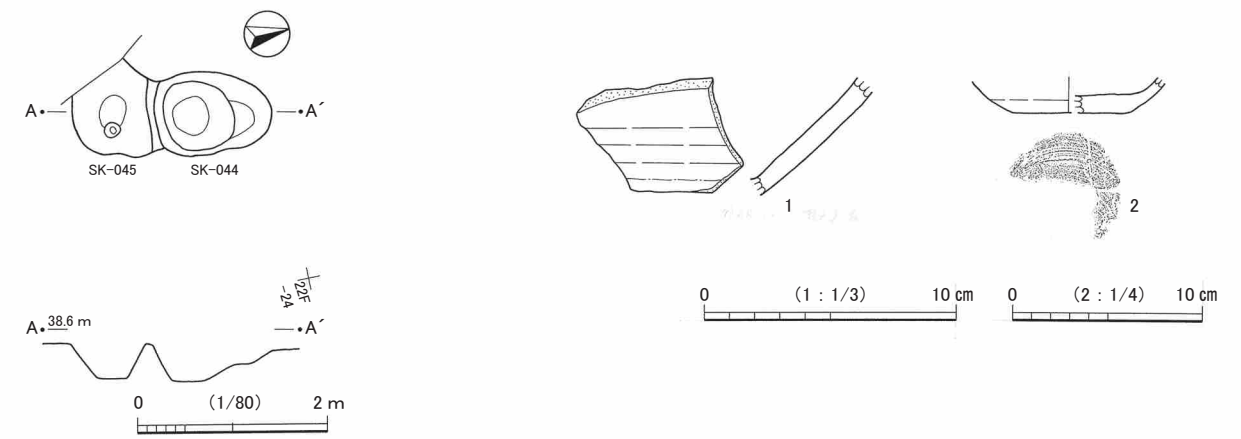
第 222 図　SK-039



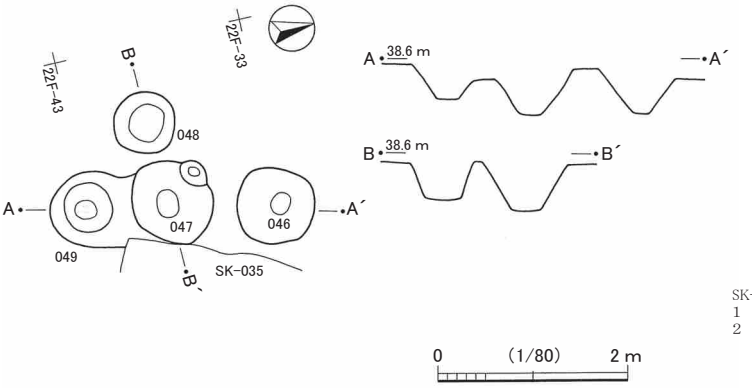
第 223 図　SK-040・042



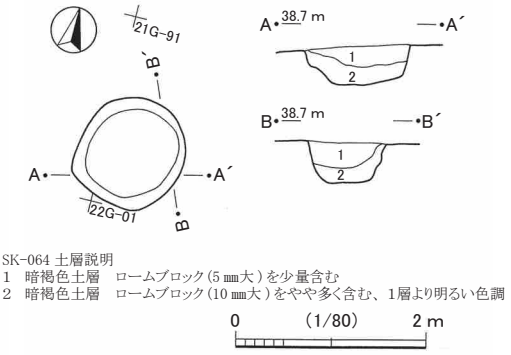
第 224 図　SK-043



第 225 図　SK-044・045 と出土遺物



第 226 図　SK-046 ～ 049



第 227 図　SK-064

SK-044・045（第 225 図、図版 7 ・100）

22F-22･23･32･33 グリッドに所在する、重複する 2 基の土坑である。平面形は、SK-044 は長軸 122㎝、短軸 88㎝の楕円形状、SK-045 は東側が調査区外へ続くが、検出された部分で径約 98㎝の不整円形状を

呈する。断面形はいずれも底部に平坦面を持ち、SK-044 は段状の部分も認められる。底面の検出面からの深さは SK-044 が 40㎝、SK-045 が 37㎝である。SK-045 の底面には更に 12㎝ほど深くなるピット状の落込みがある。

図示した出土遺物は２点である。第 225 図１は、SK-044 から出土した瀬戸・美濃製品で、折縁深皿又は直縁大皿と考えられる。内外面に灰釉が施されるが、外面の遺存部下端は露胎となっている。古瀬戸後期様式期のものと考えられる。２は、SK-045 から出土したカワラケ杯である。

SK-046 ～ 049（第 226 図、図版７）

22F-23･24･33･34･43 グリッドに所在する土坑４基である。いずれも平面形は円形､底面はやや平坦で、SK-046 は径約 80㎝・検出面からの深さ 51㎝、SK-047 は径約 85㎝・検出面からの深さ 50㎝、SK-048 は径約 67㎝・検出面からの深さ約 40㎝である。SK-049 は SK-047 と連結しているが、径約 80㎝・検出面からの深さは 38㎝である。東側に方形竪穴 SK-035 が隣接し、同時に機能した可能性も考えられる。

遺物は、いずれの土坑からも出土していない。

SK-064（第 227 図）

21G-91 グリッドに所在する。平面形は径 110㎝ほどの不整円形を呈する。底面はやや平坦で、検出面からの深さは 44㎝である。

遺物は出土していない。

SK-067・070・085 ～ 088（第 228 図、図版８・９・100・122）

19F-50 ～ 54・61 ～ 64・71 ～ 75・81 ～ 85 グリッドに群衆して所在する大小の土坑群である。掘立柱建物跡 SB-001 が隣接し、その柱穴を構成する SH-045 が SK-067 内に位置している。そのほかにも、本土坑群周辺にはピットが群在する。

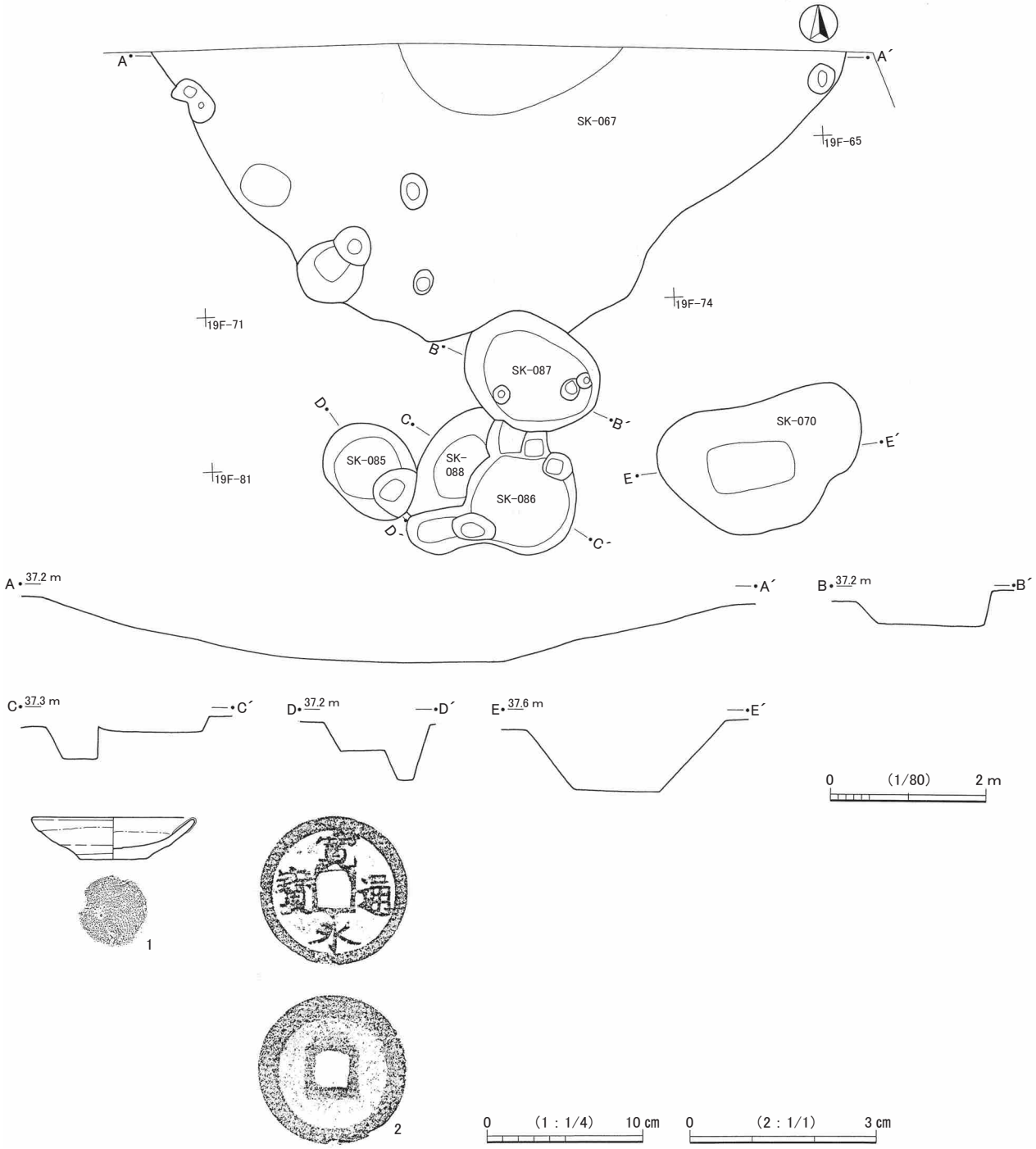
SK-067 は、立ち上がりの緩やかな凹み状を呈する土坑で、北側は本調査区外に続く。確認できた範囲で平面形は径 880㎝ほどの不整円形状を呈するとみられる。検出面からの深さは、最も深いところで 83㎝である。壁～底面にかけて､深さ 20㎝前後のピットが散在するほか､SB-001 の柱穴 SH-045 も存在する。

SK-067 の南には、一部重複するように SK-087 が隣接する。SK-087 は、南側が SK-086・088 と重複するが、平面形は長軸 185㎝、短軸 135㎝の楕円形状を呈する。底面はほぼ平坦で、検出面からの深さは 56㎝である。底面には、深さ 20㎝前後のピットが３基ある。

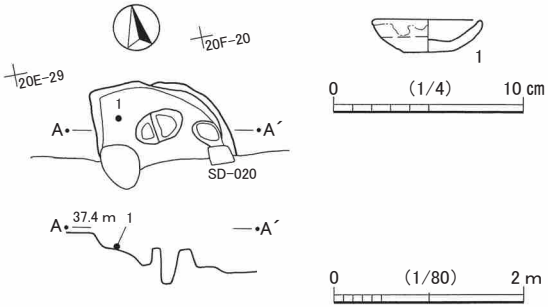
SK-085・086・088 は、SK-067 の南に一部重複しながら存在する。SK-085 は、東側でピット状の落込みを介して SK-088 と重複するが、平面形は長軸 124㎝、短軸 106㎝の楕円形状を呈する。検出面からの深さは 38㎝で、ピット状の部分は更に 38㎝ほど深くなる。

SK-086 は、北側が SK-087 と、西側が SK-088 とそれぞれ重複し、更にピットや張出し状の落込みも複雑にからんで全体の形状は不規則であるが、基本的には径約 140㎝の円形状を呈するとみられる。ほぼ平坦な底面の、検出面からの深さは 25㎝であるが、張出し状の部分は 40㎝である。ピットの深さは底面から 54㎝～ 74㎝ほどある。

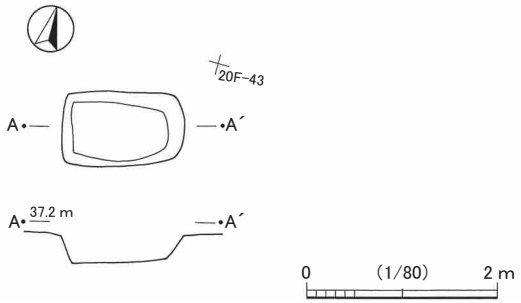
SK-088 は SK-085 と SK-086 に挟まれるように位置する土坑で、平面形は長軸 170㎝、短軸 120㎝ほ



第 228 図　SK-067・070・085 ～ 088 と出土遺物



第 229 図　SK-072 と出土遺物



第 230 図　SK-075

どの楕円形状と推測される。底面は平坦で、検出面からの深さは 40㎝である。

SK-070 は SK-086 の東に位置する。平面形は長軸 270㎝、短軸 160㎝ほどの不整楕円形状、断面形は擂鉢状を呈する。底面の検出面からの深さは 94㎝である。

重複するいずれの遺構も新旧関係ははっきりしない。

図示した遺物は２点である。第 228 図１は SK-067 の覆土中から出土した鉄釉の縁釉小皿である。全体の 20％程度の遺存度である。器形は瀬戸・美濃製品のようであるが、露胎部分の色調はにぶい赤褐色で、胎土・焼成とも常滑製品のような特徴を呈している。産地ははっきりしないが知多半島系とみられ、時期は 15 世紀代と考えることができよう。２は銭貨で、寛永通寶である。SK-067 の覆土上層から出土した。ほかには遺物は、SK-070 から近世以降土器が少量出土したのみである。

SK-072（第 229 図、図版８・93）

20E-29 グリッドに所在する。南側が SD-020 と重複し、全体の規模や形状は明確にならないが、平面形が方形状を呈する土坑とみられる。底面にはピットがある。検出面から底面までの深さは 18㎝ほどである。

図示した遺物は１点である。第 229 図１は完形の瀬戸・美濃鉄釉豆皿である。内面～外面口唇部まで施釉され、外面はほとんど露胎である。15 世紀の所産と考えられる。遺構底面から出土した。

SK-075（第 230 図・図版８）

20F-42 グリッドに所在する。平面形は長軸 120㎝、短軸 78㎝の長方形状を呈する。底面は平坦で、検出面からの深さは 29㎝である。竪穴状遺構 SK-069 の内部に位置するが、SK-069 との関係は明らかでない。

遺物は出土していない。

SK-076 ～ 081（第 231 図、図版９・118）

21F-29・38・39・48・49、21G-20・21・30・31・40 グリッドに所在する土坑群である。溝状遺構 SD-018 と重複するが、新旧関係はいずれも明らかではない。

SK-076 は SI-023 として調査された遺構であるが、整理作業中に遺構名を変更し、調査時の番号を欠番としたものである。東側で SK-077 と、西側で SK-079 と重複するが、平面形は長軸 250㎝、短軸 200㎝の隅丸方形を呈する。底面はほぼ平坦で、検出面からの深さは 57㎝である。

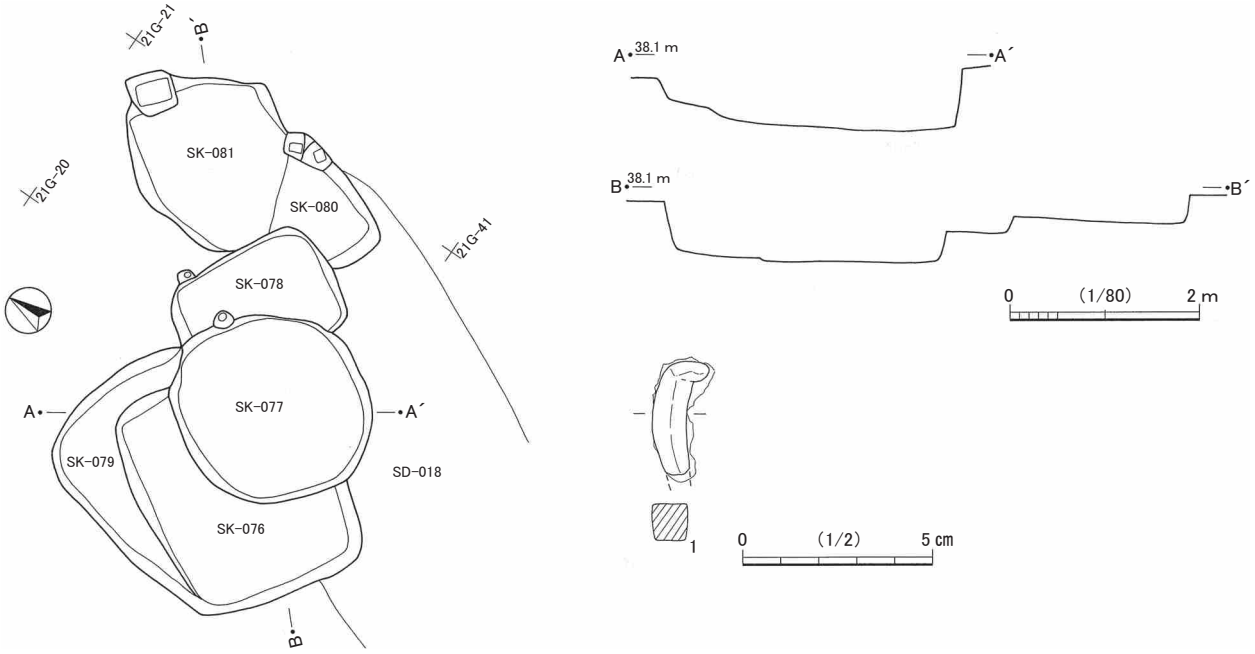
SK-077 は北東側で SK-078 と、西側で SK-076・079 と重複するが、平面形は径約 200㎝の円形状を呈する。底面はほぼ平坦で、検出面からの深さは 57㎝である。

SK-078 は北東側で SK-080・081 と、南西側で SK-078 と重複するが、平面形は長軸 175㎝、短軸 123㎝の隅丸方形とみられる。底面はほぼ平坦で、検出面からの深さは 27㎝である。

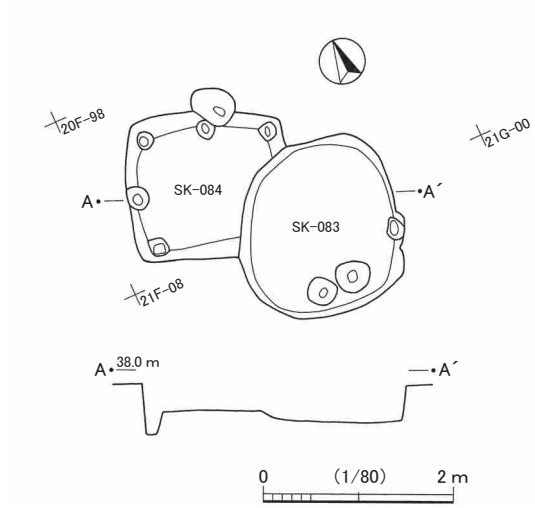
SK-079 は遺構のほとんどが SK-076・077 と重複し、北西隅を中心とした部分のみしか確認できないが、SK-076 とほぼ同規模の隅丸方形を呈する土坑とみられる。検出面からの深さは 32㎝である。

SK-080 は SK-078 の東側にあり、北側で SK-081 とも重複する。平面形は不整形を呈し、はっきりしない。掘込みは浅く、検出面からの深さは最も深いところで 13㎝ほどである。

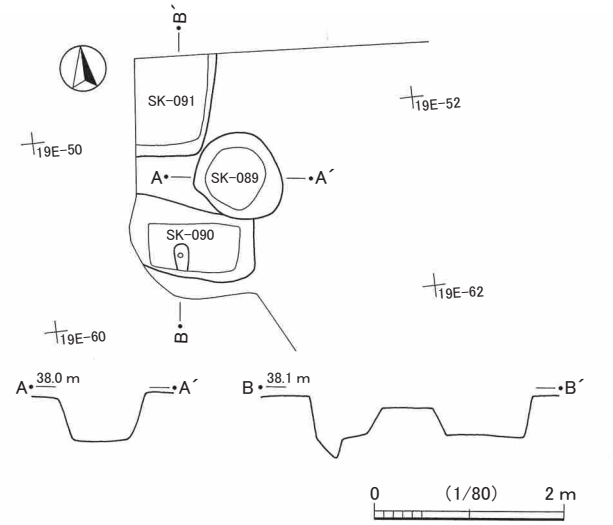
SK-081 も不整形を呈する土坑で、短軸は 170㎝ほどである。検出面からの深さは 26㎝ほどである。



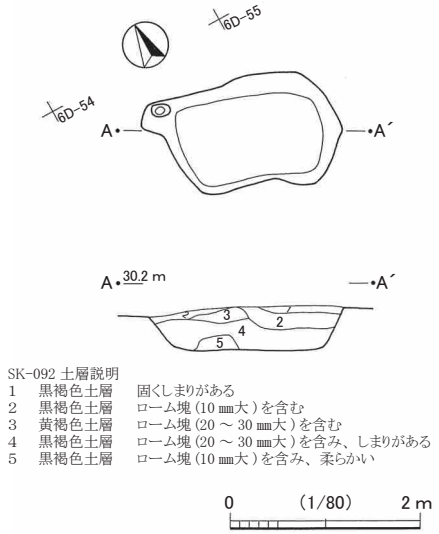
第 231 図　SK-076 ～ 081 と出土遺物



第 232 図　SK-083・084



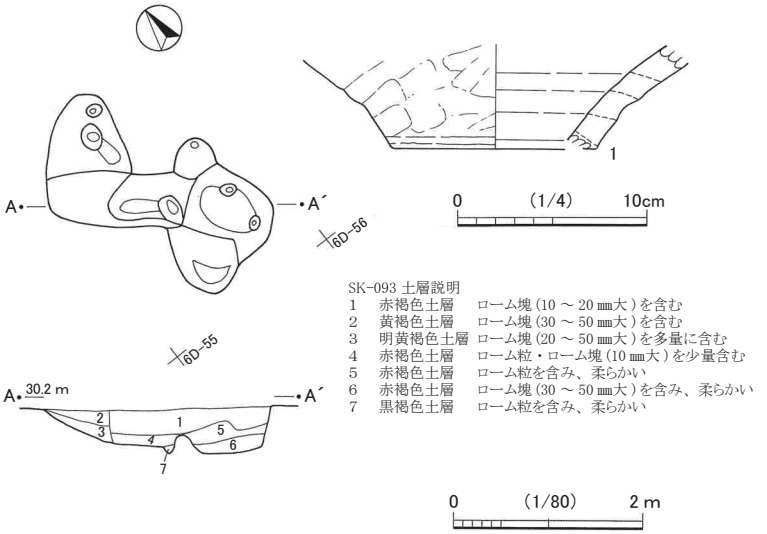
第 233 図　SK-089 ～ 091



SK-092 土層説明

1	黒褐色土層	固くしまりがある
2	黒褐色土層	ローム塊 (10 ㎜大) を含む
3	黄褐色土層	ローム塊 (20 ～ 30 ㎜大) を含む
4	黒褐色土層	ローム塊 (20 ～ 30 ㎜大) を含み、しまりがある
5	黒褐色土層	ローム塊 (10 ㎜大) を含み、柔らかい

第 234 図　SK-092



SK-093 土層説明

1	赤褐色土層	ローム塊 (10 ～ 20 ㎜大) を含む
2	黄褐色土層	ローム塊 (30 ～ 50 ㎜大) を含む
3	明黄褐色土層	ローム塊 (20 ～ 50 ㎜大) を多量に含む
4	赤褐色土層	ローム粒・ローム塊 (10 ㎜大) を少量含む
5	赤褐色土層	ローム粒を含み、柔らかい
6	赤褐色土層	ローム塊 (30 ～ 50 ㎜大) を含み、柔らかい
7	黒褐色土層	ローム粒を含み、柔らかい

第 235 図　SK-093 と出土遺物

いずれも方形竪穴もしくは竪穴状遺構と考えることもできるかもしれないが、底面等がそれほどしっかりしていないなどの状況から、土坑とした。ピットを伴っているものもあるが、いずれも底面から 10㎝前後の深さのものである。

図示した遺物は 1 点である。第 231 図 1 は、SK-076 から出土したもので、錆膨れが著しいが、鉄釘の頭部破片とみられる。SK-076 からは、ほかに混入品とみられる土器の小破片が少量出土したのみである。そのほか、SK-077 から図示はしていないが中世陶磁器・土器が少量と、SK-078 から近世以降土器が少量、SK-081 から混入品とみられる土器の小破片が少量出土した。

SK-083・084（第 232 図、図版 9）

20F-98・99、21F-08・09 グリッドに所在する重複する土坑 2 基であるが、新旧関係は明らかでない。平面形は、SK-083 が長径 192㎝、短径 158㎝の楕円形状を呈し、SK-084 が一辺 150㎝ほどの正方形状を呈する。底面はいずれもほぼ平坦で、検出面からの深さは SK-083 が 48㎝、SK-084 が 34㎝である。底面にはいずれもピットがみられ、SK-083 のものは、底面からの深さがそれぞれ 30㎝、39㎝、壁際のものは 7㎝である。SK-084 のものは四隅とその間の壁際に配置されており、底面からの深さは 10㎝～25㎝である。SK-084 には北側に隣接する、検出面からの深さ 51㎝のピットもみられるが、遺構周辺にはピットが群在しており、遺構に伴うピットについてははっきりしない面もある。なお、いずれも方形竪穴もしくは竪穴状遺構と考えることもできるかもしれないが、床面がそれほどしっかりしていないことなどから、土坑とした。

遺物は、いずれの遺構からも出土していない。

SK-089 ～ 091（第 233 図、図版 10）

19E-40・50・51 に所在する、群在する土坑 3 基である。平面形は、SK-089 が径約 90㎝の円形状、SK-089 の南に接するように位置する SK-090 が長軸 130㎝以上、短軸 70㎝の長方形状、SK-089 の北西に隣接する SK-091 が方形状を呈する。遺構群の西側は調査区外、北側は本調査区外となる。底面はいずれもほぼ平坦で、検出面からの深さは、SK-089 が 48㎝、SK-090 が現存部で 40㎝、SK-091 が現存部で 33㎝である。SK-090 には、底面に、底面からの深さ 20㎝のピットが 1 か所ある。

遺物は、SK-089 から近世以降陶磁器が少量と、SK-090 から中世陶磁器の小破片が少量出土したが、図示はしていない。

SK-092（第 234 図、図版 10）

6D-54・55 グリッドに所在する。堀 SD-027 と土塁 SA-001 の内側に位置し、溝状遺構 SD-028 の東側に隣接している。平面形は長軸 180㎝、短軸 115㎝の不整隅丸方形状を呈する。底面はほぼ平坦で、検出面からの底面の深さは 47㎝である。

遺物は、混入品とみられる土器の小破片が少量出土したのみである。

SK-093（第 235 図、図版 10・100）

6D-35・45 グリッドに所在する。堀 SD-027 及び土塁 SA-001 の内側に位置し、溝状遺構 SD-028 の東

側に隣接している。円形ないしは楕円形の複数の土坑が重複しているものとみられ、現状で平面形は不定形である。検出面からの底面の深さも、部分的には異なるが、概ね 40㎝前後である。

図示した遺物は 1 点である。第 235 図 1 は常滑片口鉢である。

SK-094（第 236 図、図版 10）

6D-34・44 グリッドに所在する 2 基の土坑である。堀 SD-027 及び土塁 SA-001 の内側に位置する。北側の 1 基は、周辺のピットがからんでいるが、主体の部分は平面形が長軸 130㎝、短軸 97㎝ほどの隅丸方形状を呈するとみられる。検出面からの底面の深さは 61㎝である。底面にはピット状の部分があり、その深さは底面から 37㎝である。南側に位置する土坑は、長軸 100㎝、短軸 90㎝の隅丸方形状を呈する。底面のほぼ中心にはピットがあり、検出面から底面までの深さは 22㎝、底面からのピットの深さは 20㎝である。

遺物は、混入品とみられる土器の小破片が少量出土したのみである。

SK-096・109（第 237 図）

8C-02・12 グリッド、土坑 SK-110 の南側及び土坑 SK-100 の西側に隣接して所在する、重複する土坑である。弥生時代竪穴住居跡のプラン内に位置し、どちらも西側は調査区外へ続くが、平面形は、SK-096 は径約 115㎝の円形、SK-109 は径約 130㎝の円形又は楕円形と推定される。検出面からの深さは、SK-096 が 53㎝、SK-109 が 41㎝である。

遺物は、SK-096 から混入品とみられる土器の小破片が少量出土したのみである。

SK-100・102・108（第 239 図、図版 115・122）

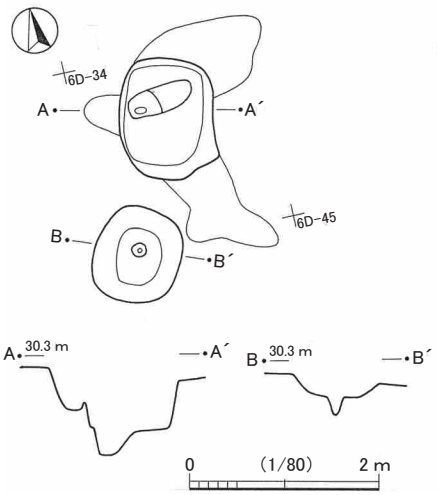
8C-12・13 グリッドに所在する、重複する土坑である。北側の SK-100・108 はそれぞれ別の円形土坑であったとみられるが、現状では一体化し、長径 190㎝、短径 130㎝の楕円形状を呈している。検出面からの深さは SK-100 が 53㎝、SK-108 が 60㎝である。覆土はどちらもローム塊を含み粘りのある黒褐色土層であった。SK-102 は SK-100・108 の南側に重複する、径約 115㎝の円形の土坑である。底面はほぼ平坦で、検出面からの底面の深さは 68㎝である。新旧関係はいずれも明確に捉えられなかった。

図示した遺物は 3 点である。3 点とも SK-100 から出土したもので、ほかには遺物はいずれの土坑からも出土していない。第 239 図 1 は、接合しない 2 破片の鉄製品で、毛抜きとみられる。2・3 は銭貨で、2 は皇宋通寳である。書体は篆書である。3 は約半分が欠損しているが「祥」「符」「寳」の字が確認できることから、祥符元寳か祥符通寳のいずれかと考えられる。

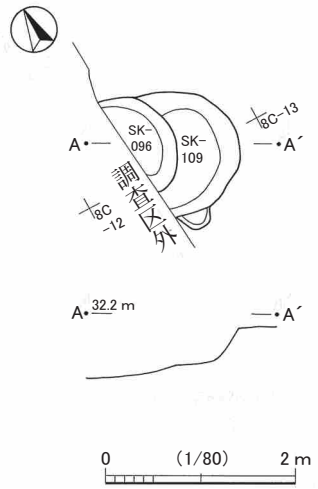
SK-104（第 238 図）

8D-86・87・96・97 グリッドに所在する。平面形は長軸 120㎝、短軸 90㎝の隅丸方形状を呈する。底面は平坦で、検出面からの深さは 38㎝である。覆土はローム塊を含む赤褐色土層で、土坑 SK-106 と類似する。掘立柱建物跡群の東に隣接しており、掘立柱建物との関連も考えられる。

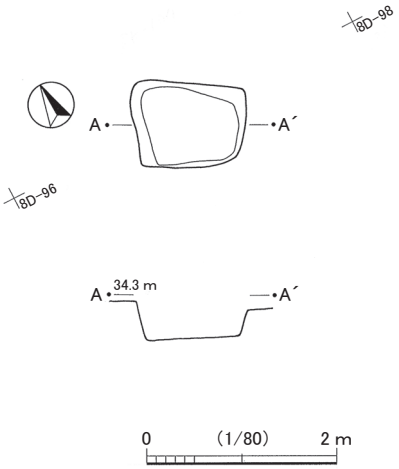
遺物は、鉄製品の小破片が少量出土したのみである。



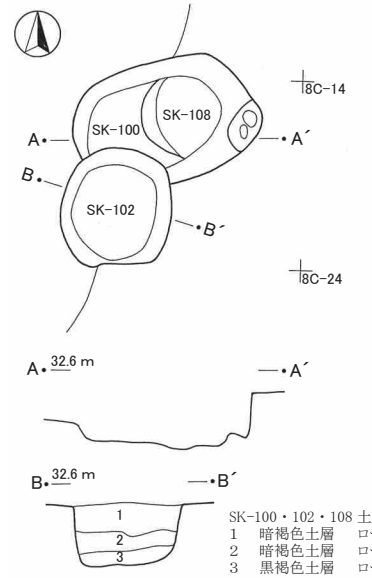
第 236 図　SK-094



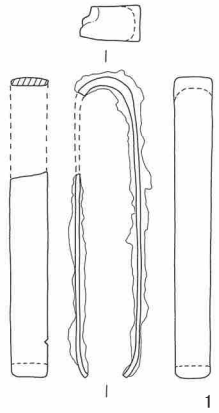
第 237 図　SK-096・109

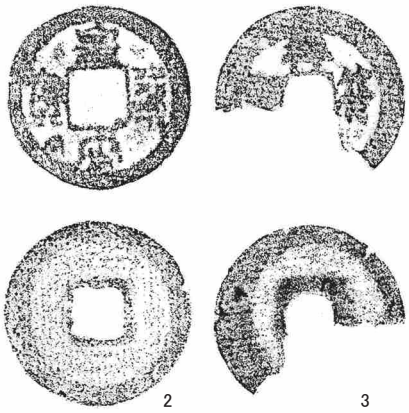


第 238 図　SK-104



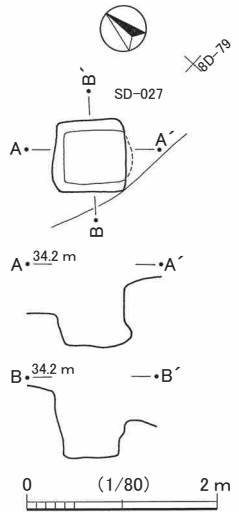
SK-100・102・108 土層説明
1　暗褐色土層　ローム塊（60 ～ 100 ㎜大）を含み、柔らかい
2　暗褐色土層　ローム塊（10 ～ 50 ㎜大）を含み、粘性がある
3　黒褐色土層　ローム塊（20 ～ 50 ㎜大）を含み、もろい



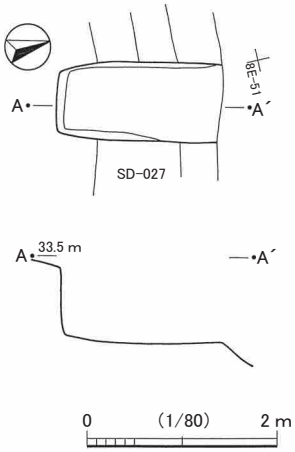


0 (1/80) 2 m　0 (1 : 1/2) 5 cm　0 (2. 3 : 1/1) 3 cm

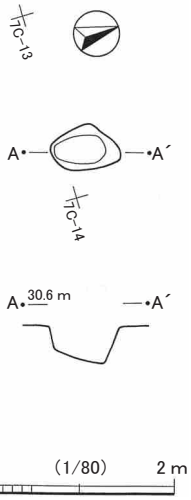
第 239 図　SK-100・102・108 と出土遺物



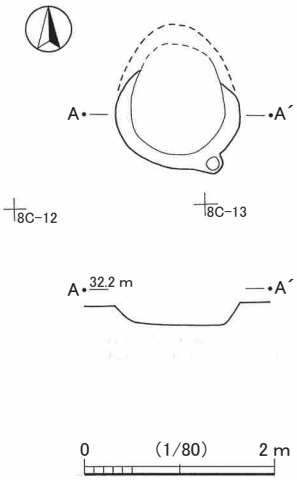
第 240 図　SK-105



第 241 図　SK-106



第 242 図　SK-107



第 243 図　SK-110

SK-105（第 240 図）

8D-68・78 グリッド、堀 SD-027 の壁面の部分で検出された土坑である。堀に削平されているが、現状で平面形は一辺 80㎝ほどの正方形である。底面はほぼ平坦で、ほぼ垂直に立ち上がる壁の高さは最も高い部分で 68㎝である。

遺物は出土していない。

SK-106（第 241 図）

8E-50・51 グリッド、堀 SD-027 の底面～壁面の部分で検出された土坑である。平面形は、堀に削平されているが長方形を呈するとみられ、現存値で短軸 85㎝、長軸は 175㎝である。底面は平坦で、ほぼ垂直に立ち上がる壁の高さは最も高い部分で 78㎝である。覆土はローム塊を含む赤褐色土の単一層で、堀とは異なり土坑 SK-104 と類似している。

遺物は出土していない。

SK-107（第 242 図）

7C-03 グリッドに所在する。平面形は長軸 73㎝、短軸 50㎝の不整楕円形状を呈する。底面は北側のほうが南側より低く、検出面からの深さは北側で 33㎝である。

遺物は、混入品とみられる土器の小破片が少量出土したのみである。

SK-110（第 243 図）

8C-02・03 グリッド、土坑 SK-100・109 の北側に隣接する土坑である。弥生時代の竪穴住居跡のプラン内に位置し、北側は更に別の竪穴住居跡と重複しているが、平面形は径約 110㎝の円形を呈すると推定できる。検出面からの深さは 20㎝前後である。

遺物は出土していない。

SK-111（第 244 図）

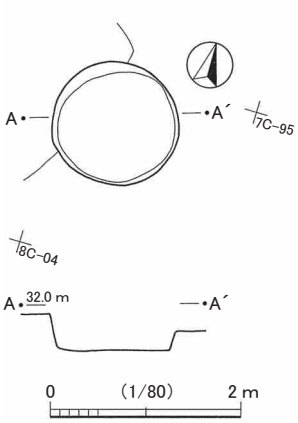
7C-94 グリッド、溝状遺構 SD-030 の南に隣接し、弥生時代竪穴住居跡と一部重複する土坑である。平面形は径 130㎝の円形で、平坦な底面の検出面からの深さは 50㎝ほどである。

遺物は、混入品とみられる土器の小破片が少量出土したのみである。

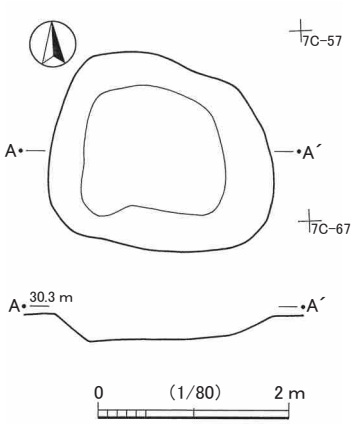
SK-112（第 245 図）

7C-55・56 グリッド、堀 SD-027 が二叉に分かれる地点の外側に所在する。平面形は長軸 238㎝、短軸 200㎝の不整隅丸方形状を呈する。底面はほぼ平坦で、検出面からの深さは 28㎝である。

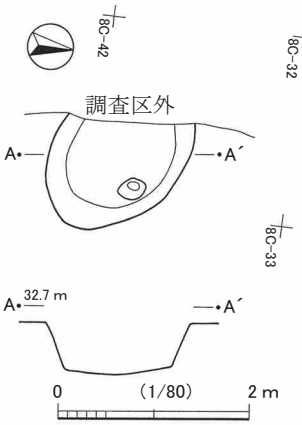
遺物は、混入品とみられる鉄製品の小破片と、近世以降陶磁器の小破片が少量出土したのみである。



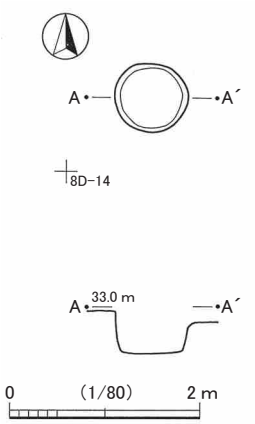
第 244 図　SK-111



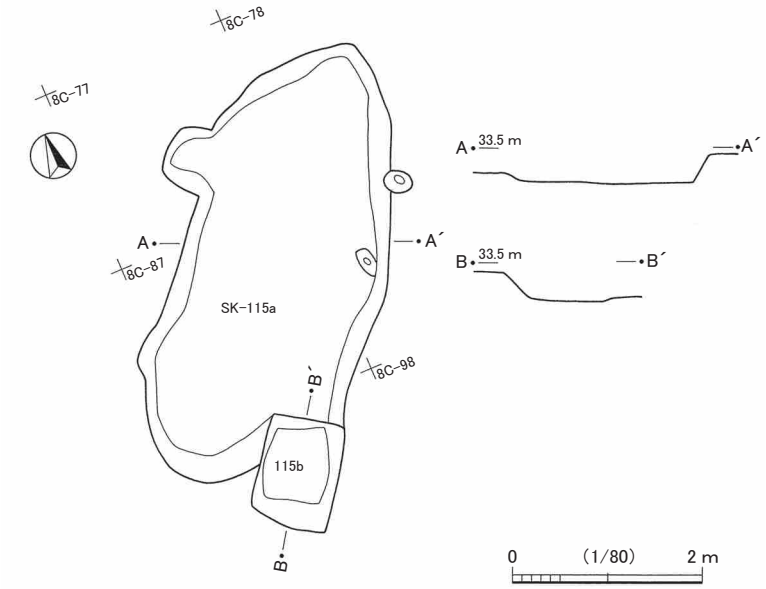
第 245 図　SK-112



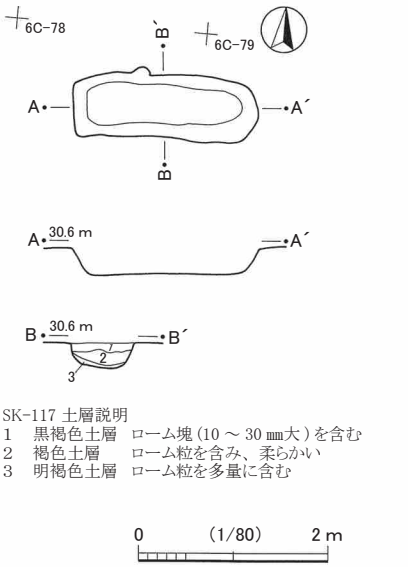
第 246 図　SK-113



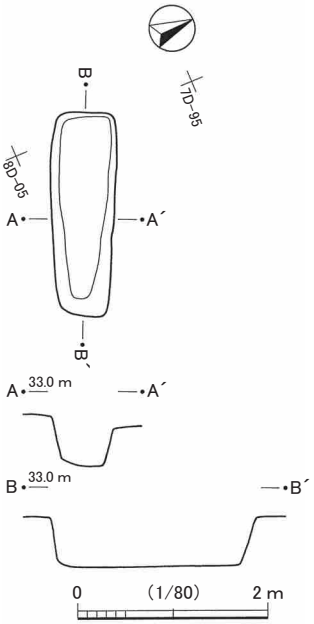
第 247 図　SK-120



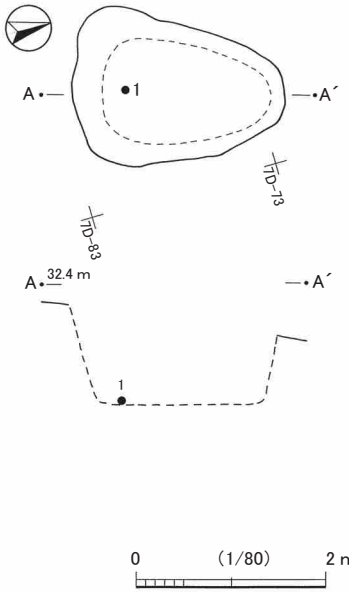
第 248 図　SK-115a・115b

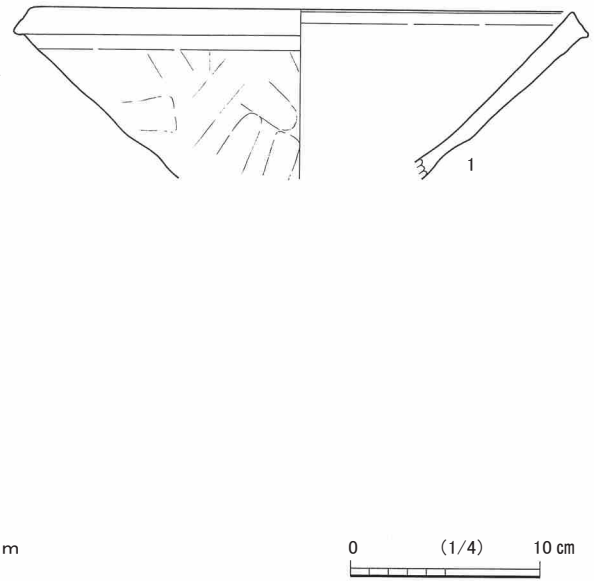


第 249 図　SK-117



第 250 図　SK-118





第 251 図　SK-119 と出土遺物

SK-113（第 246 図）

8C-32・33・42・43 グリッドに所在する。西側は調査区外に続くが、平面形は、推定長軸 190㎝、短軸 135㎝の楕円形とみられる。検出面からの深さは 57㎝である。底面にはピットが 1 か所あり、底面からの深さは 25㎝である。

遺物は出土していない。

SK-115a・115b（第 248 図）

8C-77・78・86 ～ 88・96・97 グリッドに所在する重複する 2 基の土坑で、調査時に既に「SK-115a」「SK-115b」として調査されたものである。新旧関係ははっきりしないが、どちらも柵列 SA-002 の標高差約 70㎝の段差下部分に位置している。北側の SK-115a は、平面形は概ね長径 490㎝、短径 217㎝ほどの楕円形状を呈しており、長軸方向は段差面に対して平行方向である。底面は、ほぼ水平で平坦である。検出面は、遺構の東側が段差の高い部分、西側が低い部分であるが、検出面からの深さは、高い方からで 28㎝ほどである。SK-115b は、SK-115a の南に重複している。平面形は長軸 115㎝、短軸 84㎝の長方形で、長軸方向は段差面に対して平行方向である。底面は、ほぼ水平で平坦である。検出面は、遺構の東側が段差の高い部分、西側が低い部分であるが、検出面からの深さは、高い方からで 43㎝ほどである。底面のレベルは、SK-115a より 10㎝前後低い。

遺物はいずれの土坑からも出土していない。

SK-117（第 249 図）

6C-78・79 グリッドに位置する土坑で、土塁 SA-001 下から検出された。平面形は長軸 195㎝、短軸 65㎝の隅丸方形状を呈する。底面は平坦で、検出面から底面までの深さは 27㎝である。覆土は、下層がローム粒を含み柔らかい褐色土、上層はローム塊を含む黒褐色土が水平に堆積していた。

遺物は、土器の小破片が少量出土したのみで、混入品とみられる。

SK-118（第 250 図、図版 10）

7D-94・95 グリッドに所在する。平面形は長軸 230㎝、短軸 65㎝の隅丸方形状を呈する。底面は平坦で、検出面から底面までの深さは 57㎝である。覆土は、砂利やローム塊を含む赤褐色土の単層であった。

遺物は、瓦の小破片が少量出土したのみである。

SK-119（第 251 図、図版 100）

7D-62・71・72 グリッドに所在する土坑で、土塁 SA-001 下から検出された。堀 SD-027「虎口」部分の南に隣接している土坑で、検出面は南から北に向かって傾斜している。平面形は長軸 222㎝、短軸 162㎝の卵形を呈する。底面の状態や深さは記録がないが、第 251 図 1 が遺構南側の検出面から 101㎝の深さで出土していることから、少なくともそれ以上の深さがあったと考えられる。覆土はローム塊を含む赤褐色土の単層であった。

図示した遺物は 1 点である。第 251 図 1 は常滑片口鉢である。９型式に比定されるものと考えられる。外面に重ね焼き痕が認められる。内面には自然釉がかかっている。

SK-120（第 247 図）

8D-04 グリッドに所在する。平面形は径約 75㎝の円形を呈する。底面は平坦で、検出面からの深さは 47㎝である。覆土は砂や砂利を含む褐色土で、近接する土塁 SA-001 の盛土と類似するものであった。

遺物は出土していない。

SK-125（第 252 図）

7C-09・19、7D-00・10 グリッドに所在する土坑で、土塁 SA-001 下から検出された。平面形は、長軸 186㎝、短軸 92㎝の長方形状である。底面は平坦で、検出面から底面までの深さは 24㎝である。掘立柱建物跡 SB-008 と重複し、軸方向もほぼ一致することから、関連性も考えられる。

遺物は出土していない。

SK-126・127（第 255 図）

6C-59・68・69、6D-40・50 グリッドに位置する 2 基の土坑で、土塁 SA-001 下から検出された。竪穴状遺構 SI-045 とそれぞれ重複するが、いずれも新旧関係は明らかでない。

SK-126 は、長径 110㎝、短径 70㎝の楕円形状を呈する。底面から壁面にかけてピットがいくつかみられるが、検出面から底面までの深さは 39㎝である。SK-127 は、長軸 250㎝、177㎝の卵形を呈し、検出面からの深さは 56㎝である。

遺物は、SK-127 から土器の小破片が少量出土したのみで、混入品とみられる。SK-126 からは出土していない。

SK-128（第 253 図）

6D-30・31 グリッドに位置する土坑で、土塁 SA-001 下から検出された。平面形は、東側が若干削平されているが現存値で長軸 145㎝、短軸 124㎝の隅丸方形状を呈している。底面は平坦で、検出面からの深さは 17㎝である。

遺物は出土していない。

SK-129（第 254 図、図版 10）

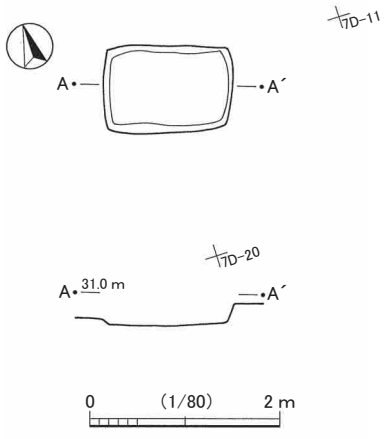
6C-79・89、6D-70・80 グリッドに位置する土坑で、土塁 SA-001 下から検出された。平面形は、長径 297㎝、短径 155㎝の不整楕円形を呈している。検出面から底面までの深さは 38㎝である。壁面にピットが 4 基みられる。

遺物は土器の小破片が少量出土したのみで、混入品とみられる。

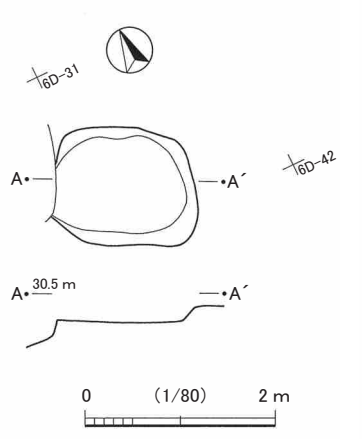
2SK-002（第 256 図、図版 11）

24G-28・38 グリッドに所在する土坑である。東側と西側の一部が撹乱により失われているが、平面形は、長径 150㎝、短径 95㎝ほどの不整楕円形状を呈するとみられる。検出面から底面までの深さは最も深い部分で 51㎝である。

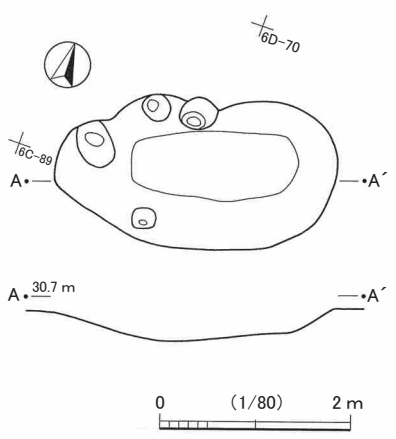
遺物は出土していない。



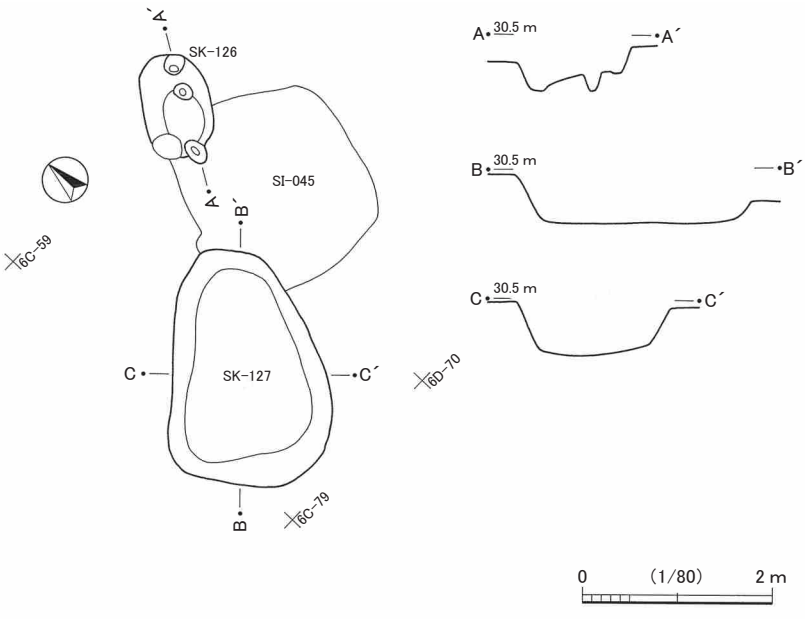
第 252 図　SK-125



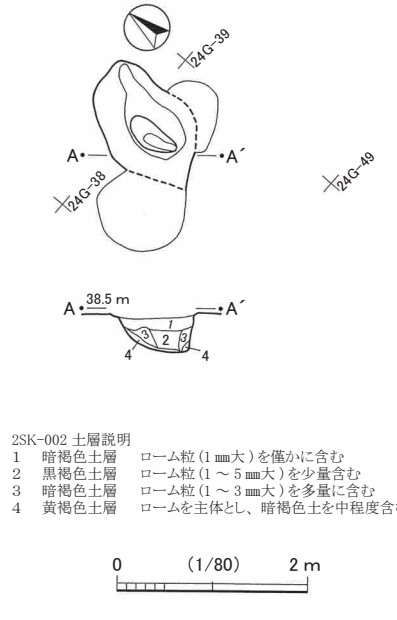
第 253 図　SK-128



第 254 図　SK-129

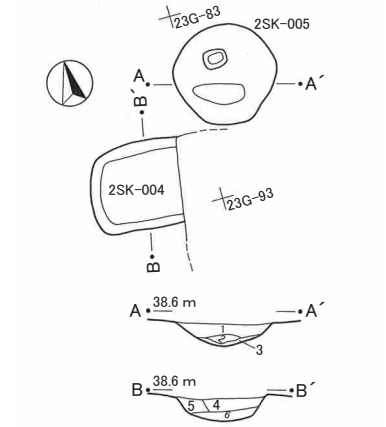


第 255 図　SK-126・127



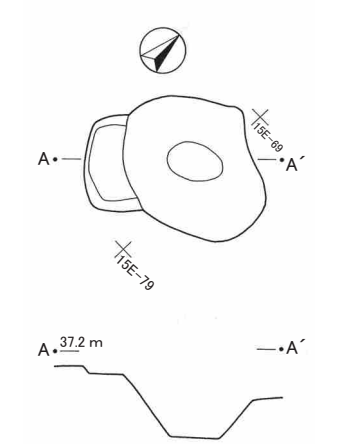
2SK-002 土層説明
1　暗褐色土層　ローム粒（1 ㎜大）を僅かに含む
2　黒褐色土層　ローム粒（1 ～ 5 ㎜大）を少量含む
3　暗褐色土層　ローム粒（1 ～ 3 ㎜大）を多量に含む
4　黄褐色土層　ロームを主体とし、暗褐色土を中程度含む

第 256 図　2SK-002

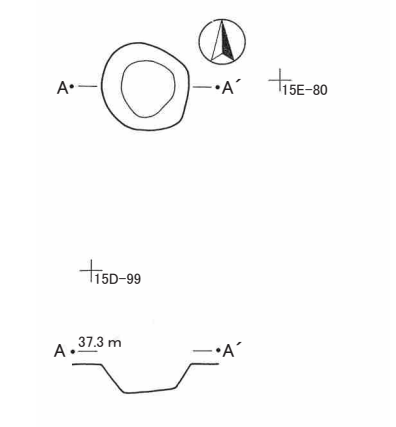


2SK-004・005 土層説明
1　黒褐色土層　ローム粒を僅かに含む
2　黒褐色土層　ローム粒を僅かに含む、1 層より暗い色調
3　暗黄褐色土層　ローム粒と黒褐色土を主体とした土層
4　黒褐色土層　ローム粒を僅かに含む
5　暗褐色土層　ローム粒を中程度含む
6　暗黄褐色土層　ローム粒を主体とし、黒褐色土を含む

第 257 図　2SK-004・005



第 258 図　4SK-004



第 259 図　4SK-007

2SK-004・005（第 257 図、図版 11）

23G-82・83 グリッドに所在する２基の土坑である。2SK-004 は、東側が古墳時代の竪穴住居跡と重複するが隅丸方形の土坑とみられ、短軸は 93㎝、長軸は現存値で 100㎝ほどである。検出面から底面までの深さは 31㎝である。2SK-005 は、2SK-004 の北東方向に位置する土坑で、径 110㎝ほどの円形の土坑である。検出面から底面までの深さは 33㎝である。底面にはピットがみられ、ピットの底面からの深さは 17㎝である。

遺物は、2SK-004 から土器の小破片が出土したのみで、混入品とみられる。

4SK-004（第 258 図、図版 11）

15E-68・69 グリッドに所在する。平面形は、径 150㎝ほどの円形の土坑に、長軸 100㎝、短軸 40㎝ほどの隅丸方形状の段状部分が付随したような形状を呈している。底面は平坦で、検出面からの深さは 81㎝、段状部分は 10㎝ほどである。

遺物は中世陶磁器・土器の小破片が少量出土したが、図示していない。

4SK-006（第 260 図、巻頭図版 7、図版 100）

15D-87･88 グリッドに所在する。平面形は、長径 150㎝、短径 125㎝の楕円形を呈する。底面は平坦で、検出面からの深さは 11㎝である。

図示した遺物は６点である。第 260 図１は青磁の洗である。口縁部は玉縁状である。内外面に施釉され、色調はオリーブ灰色を呈している。２は瀬戸･美濃縁釉小皿である。遺存部分のほとんどは露胎であるが、内外面上端部にそれぞれ僅かに灰釉が認められる。内面にごく一部鉄釉の付着もあるが、鉄釉製品と同じ窯で焼成して付いたものかもしれない。３～６は常滑製品である。３・４は片口鉢である。４は外面に重ね焼き痕が認められる。９型式に比定されるものと考えられる。５・６は甕である。５は、外面は灰色、内面は暗赤褐色を呈し、外面と口唇部に自然釉がかかっている。９型式に比定されるものと考えられる。６は内外面とも灰色を呈し、外面には押印文がある。

4SK-007（第 259 図）

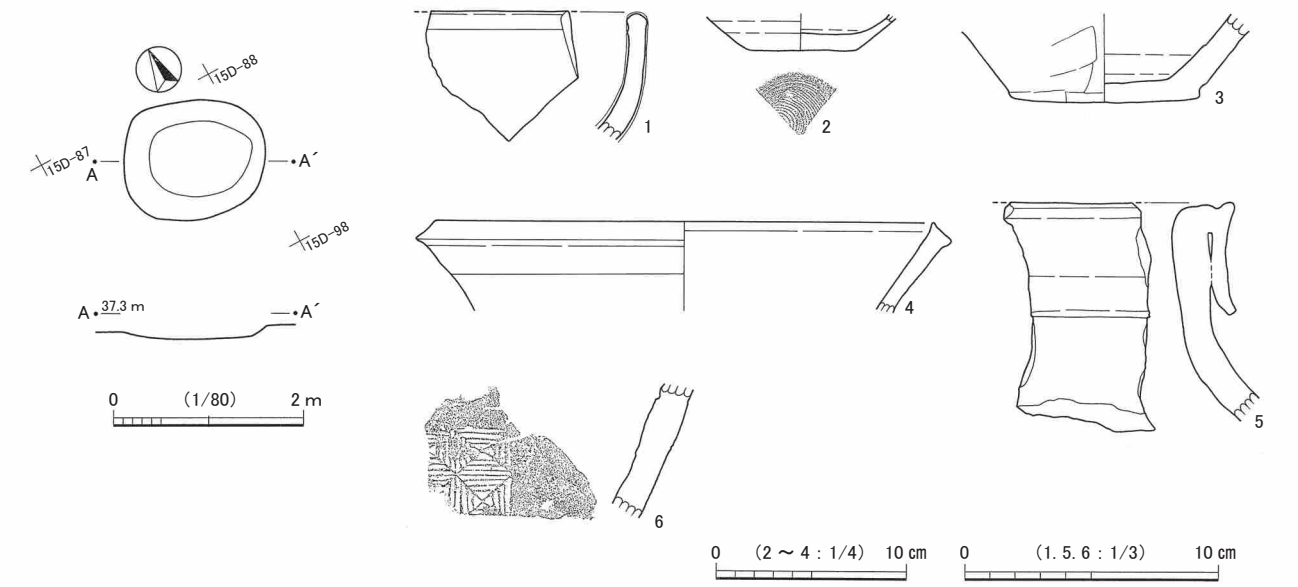
15D-79・89 グリッドに所在する。平面形は径 90㎝ほどの円形を呈する。底面は平坦で、検出面からの深さは 33㎝である。

遺物は混入品とみられる土器の小破片が少量出土したのみである。

4SK-017（第 261 図・図版 122）

15E-04・05 グリッドに所在する。調査区の境界部分に位置し一部調査できなかったが、平面形は長軸 130㎝、短軸 115㎝ほどの隅丸方形状を呈するとみられる。底面はほぼ平坦であるが、ピットが１か所みられる。検出面からの底面の深さは 33㎝、床面からのピットの深さは 11㎝である。

図示した遺物は１点である。第 261 図１は覆土中から出土した銭貨で、開元通寶である。背面は無文である。ほかには、図示していないが混入品とみられる中世土器の小破片が少量出土した。



第 260 図　4SK-006 と出土遺物

4SK-023（第 262 図、図版 12）

13D-73・74 グリッドに所在する。平面形は径約 150㎝の不整円形状を呈する。底面は平坦で、検出面からの深さは 53㎝である。

遺物は出土していない。

4SK-040（第 263 図）

11E-00・01 グリッドに所在する。竪穴状遺構 4SK-047 の範囲内で検出された土坑である。4SK-047 の一部とみることも可能かもしれないが、調査時の状況等から別の土坑と考えた。また、東側で方形竪穴 4SK-041 と重複するが、新旧関係は明らかでない。平面形は、径 190㎝ほどの楕円形と考えられる。検出面からの深さは 64㎝である。

遺物は出土していない。

4SK-042（第 264 図、図版 14）

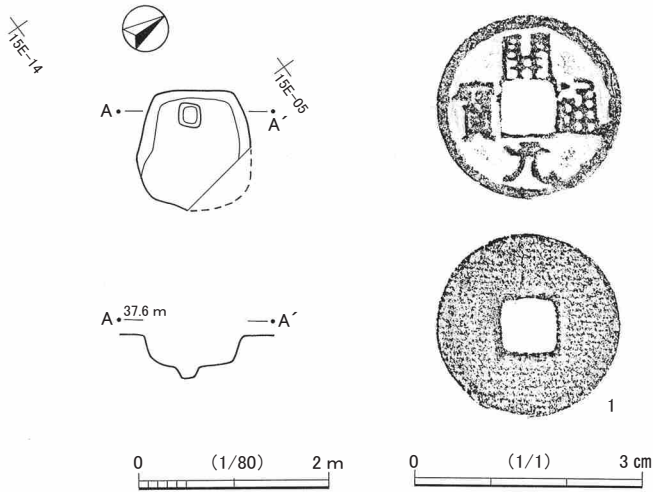
11D-97・98、12D-07・08 グリッドに所在する。平面形は、撹乱を受けているが長径 155㎝、推定短径 135㎝の不整楕円形状とみられる。底面は平坦で、検出面からの深さは 30㎝である。

遺物は、図示していないが中世陶磁器の小破片が少量出土した。

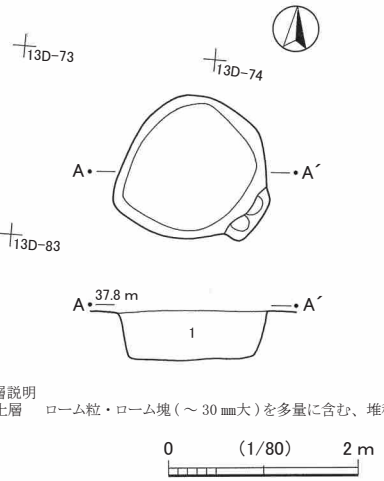
4SK-043（第 266 図、図版 14・100）

11D-97・98、12D-07・08 グリッドに所在する。平面形は、長径 211㎝、推定短径 180㎝の不整楕円形状を呈する。検出面からの深さは 37㎝である。

図示した遺物は 1 点である。第 266 図 1 は常滑片口鉢である。外面に重ね焼き痕が認められる。10 型式に比定されるものと考えられる。

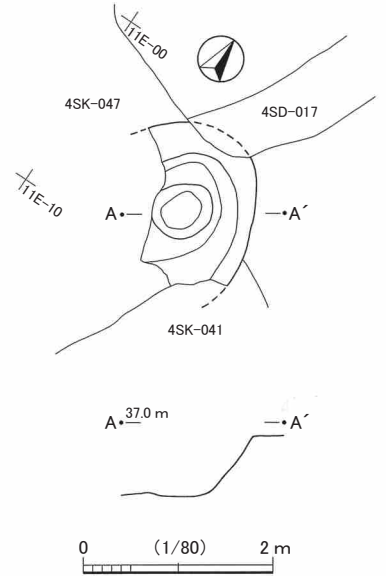


第 261 図　4SK-017 と出土遺物

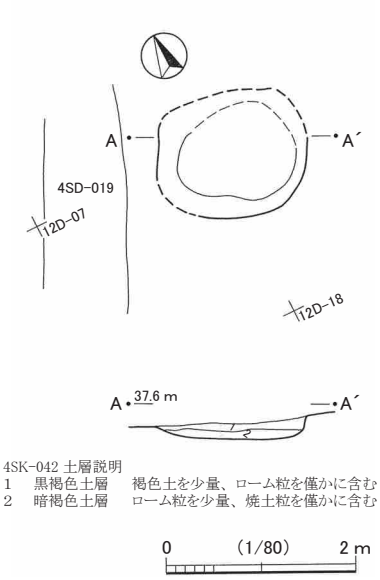


4SK-023 土層説明
1　暗褐色土層　ローム粒・ローム塊（～ 30 ㎜大）を多量に含む、堆積はやや疎

第 262 図　4SK-023

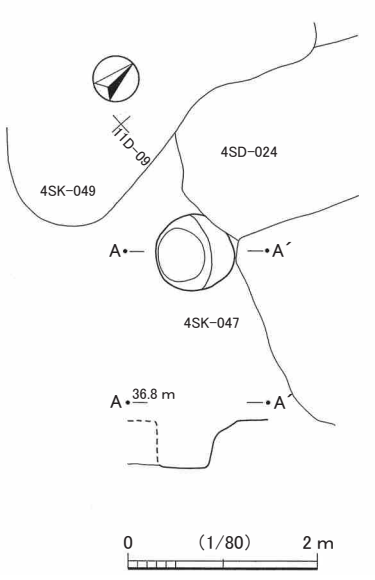


第 263 図　4SK-040

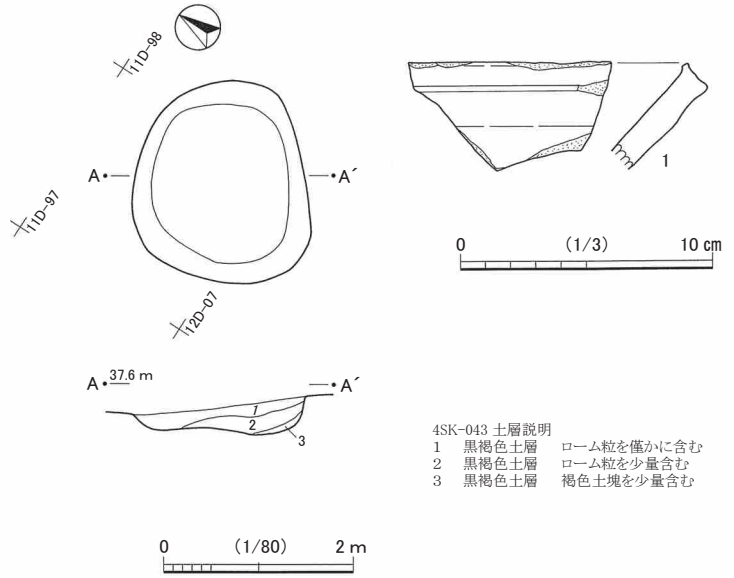


4SK-042 土層説明
1　黒褐色土層　褐色土を少量、ローム粒を僅かに含む
2　暗褐色土層　ローム粒を少量、焼土粒を僅かに含む

第 264 図　4SK-042

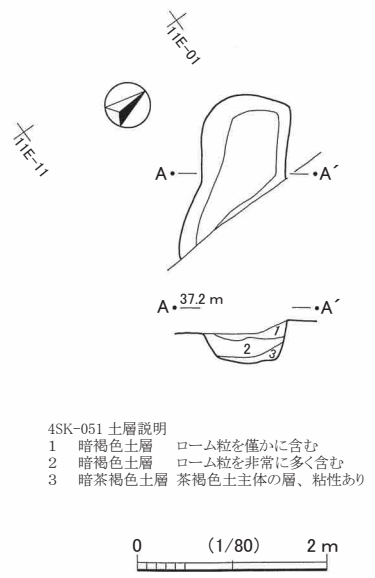


第 265 図　4SK-048



4SK-043 土層説明
1　黒褐色土層　ローム粒を僅かに含む
2　黒褐色土層　ローム粒を少量含む
3　黒褐色土層　褐色土塊を少量含む

第 266 図　4SK-043 と出土遺物



4SK-051 土層説明
1　暗褐色土層　ローム粒を僅かに含む
2　暗褐色土層　ローム粒を非常に多く含む
3　暗茶褐色土層　茶褐色土主体の層、粘性あり

第 267 図　4SK-051

4SK-048（第 265 図）

11D-09 グリッドに所在する。竪穴状遺構 4SK-047 の範囲内で検出された土坑である。土層断面の観察から、4SK-047 を切って構築されたものとみられる。平面形は、径 80㎝ほどの円形と復元できる。検出面からの深さは 54㎝である。

遺物は出土していない。

4SK-049（第 268 図、図版 14・100・112・118）

10D-88・89・98・99、11D-08・09 グリッドに、竪穴状遺構 4SK-047 と重複して所在する。新旧関係は、土層断面の観察から当遺構のほうが新しい。平面形は長軸 435㎝、短軸 200㎝ほどの不整形を呈する。底面は擂鉢状を呈し、検出面からの深さは最も深いところで 60㎝ほどである。

図示した遺物は 4 点である。第 268 図 1・2 は常滑片口鉢である。 1 は外面に重ね焼き痕が認められる。10 型式に比定されるものと考えられる。 3 は砥石で、近接する方形竪穴 4SK-050 から出土した破片と接合した。上下端は欠損しているとみられる。 4 は環状を呈する鉄製品である。錆膨れが著しいが、断面形は四角形とみられる。

4SK-051（第 267 図、図版 15）

10E-91、11E-01 グリッドに所在する。東側は調査不能であった。平面形は現存値で長軸 150㎝以上、短軸 90㎝ほどの長方形状を呈している。検出面からの深さは 40㎝である。

遺物は出土していない。

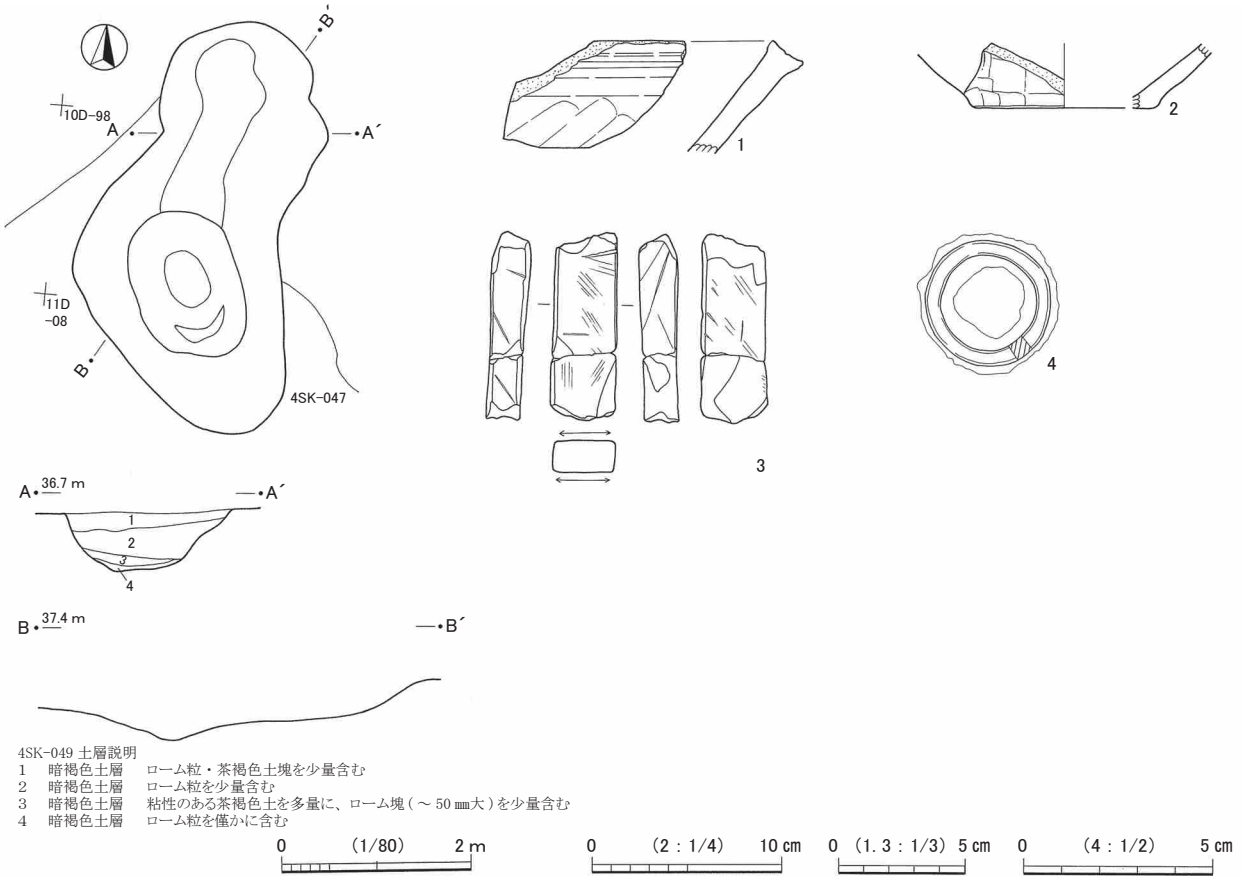
4SK-053（第 269 図、巻頭図版 7、図版 15・93・100）

11D-15・25・34・35 グリッドに位置する。正方形を描く溝状遺構 4SD-019 の北辺中心部あたりに直交するように存在する土坑であるが、新旧関係は明らかでない。平面形は、全体的には長軸 430㎝、短軸 130㎝ほどの隅丸方形状を呈するが、南北 2 基の楕円形または隅丸方形状の土坑が繋がったような状態である。土坑状の部分は、いずれも底面は平坦である。北側の土坑状の部分は壁がややオーバーハングして立ち上がり、検出面からの深さは 153㎝である。南側の部分は壁がほぼ垂直に立ち上がり、検出面からの深さは 149㎝である。土坑状の部分を繋ぐ部分は、検出面から 94㎝の深さがある。溝状遺構 4SD-019 の北辺底面にはピットがいくつか並んでいるが、当遺構の両脇の部分にもそれぞれピットがあり、同時に機能した可能性もあるだろう。

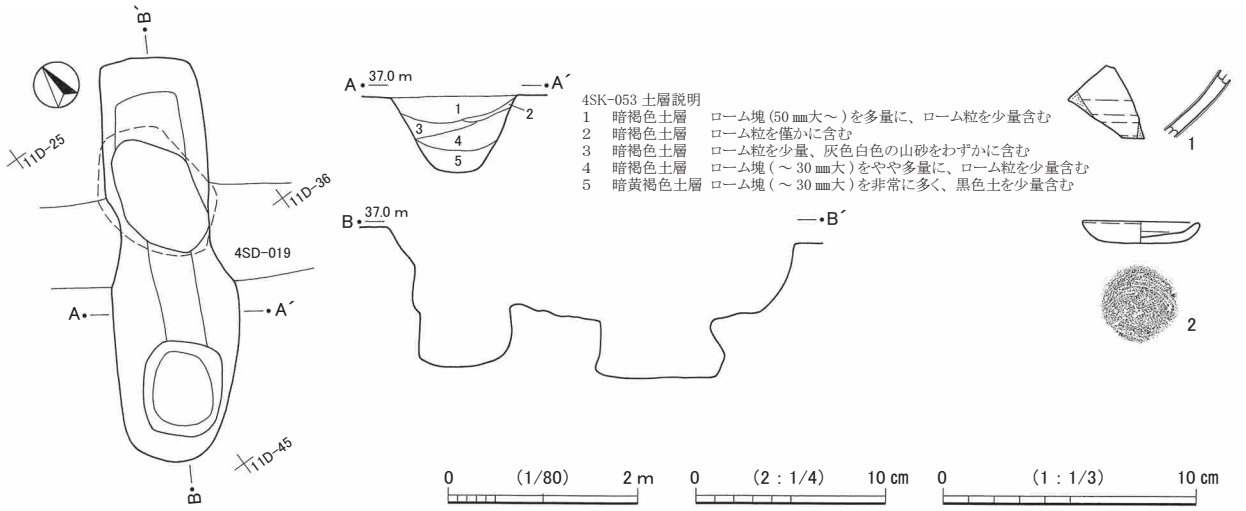
図示した遺物は 2 点である。第 269 図 1 は青磁碗である。内面には僅かに陰刻文が認められるが、文様は不明である。釉はオリーブ灰色を呈する。2 はカワラケ小皿である。全体の 70％程度の遺存度である。器面は摩耗している。

4SK-054（第 270 図、図版 15・122）

10D-53・54・63・64・73 グリッドに所在する。複数の土坑が重複しているとみられ、現状は長軸 300㎝、短軸 170㎝ほどの不整形を呈する。検出面からの深さは、最も深い北東の部分で 70㎝ほどである。底面には浅いピットがいくつかみられる。



第 268 図　4SK-049 と出土遺物

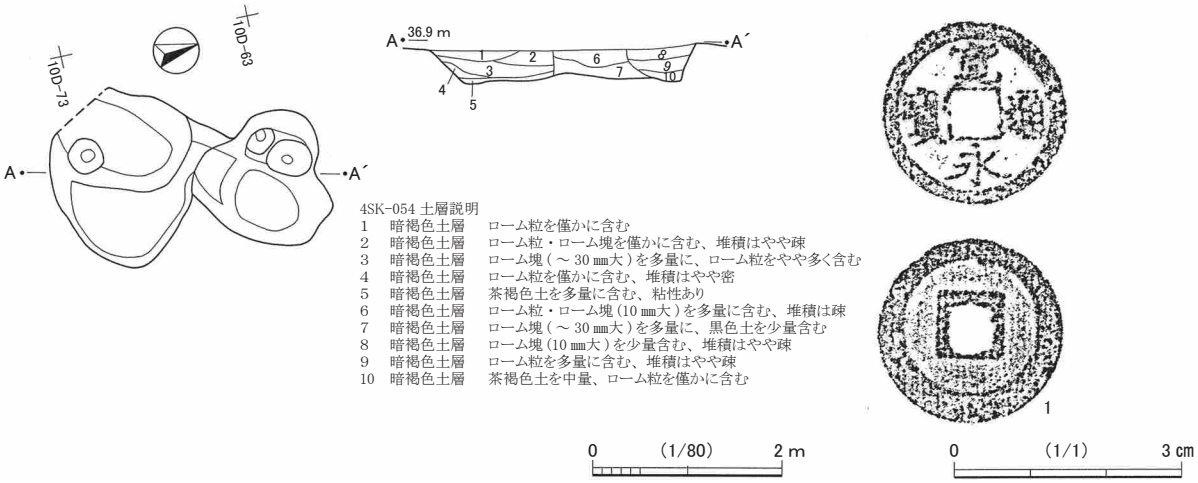


第 269 図　4SK-053 と出土遺物

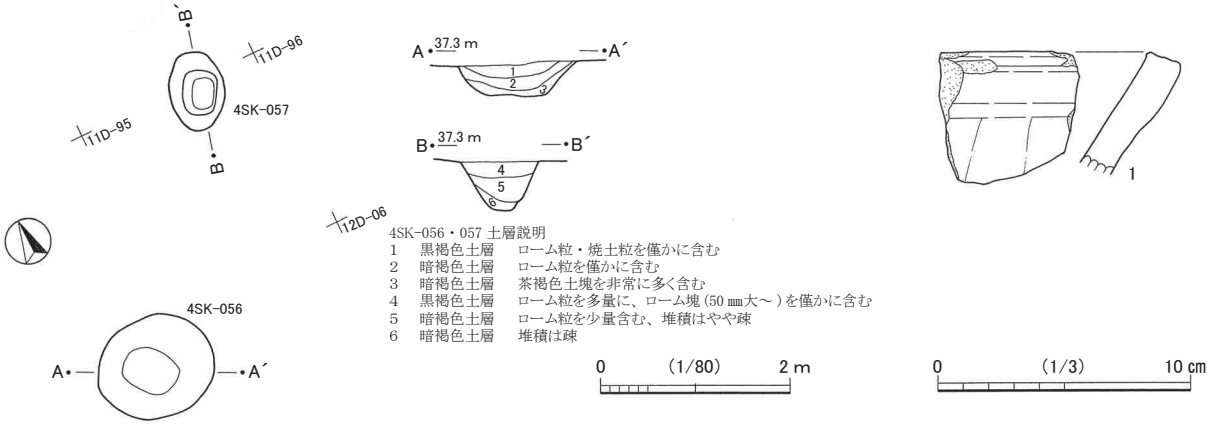
図示した遺物は 1 点である。第 270 図 1 は銭貨で、寛永通寶である。ほかには近世以降陶磁器の小破片が少量出土したのみである。

4SK-056・057（第 271 図、図版 15・100）

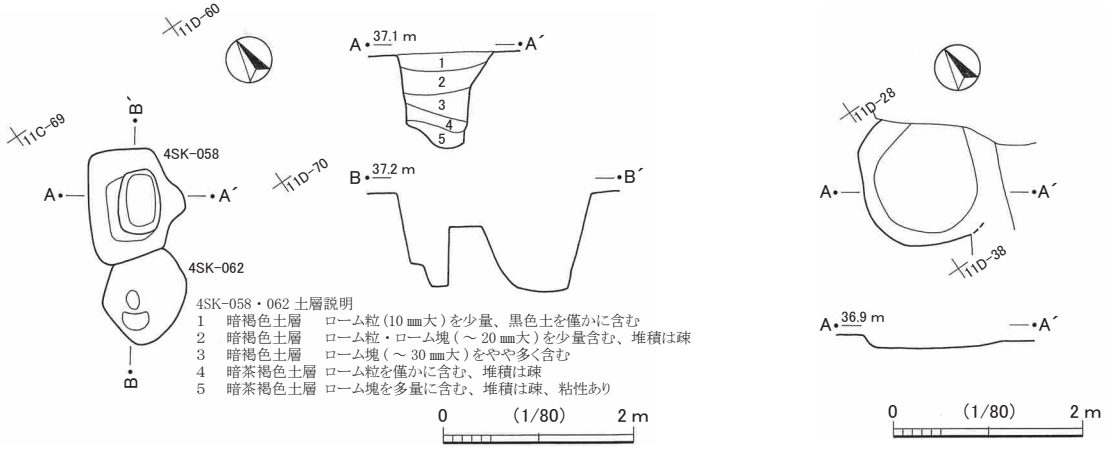
2 mほど離れて存在する 2 基の土坑で、4SK-056 は 12D-04・05 グリッドに、4SK-057 は 11D-85・95 グリッドにそれぞれ位置する。4SK-056 は径 120㎝ほどの円形を呈する土坑である。底面はやや平坦で、



第 270 図　4SK-054 と出土遺物

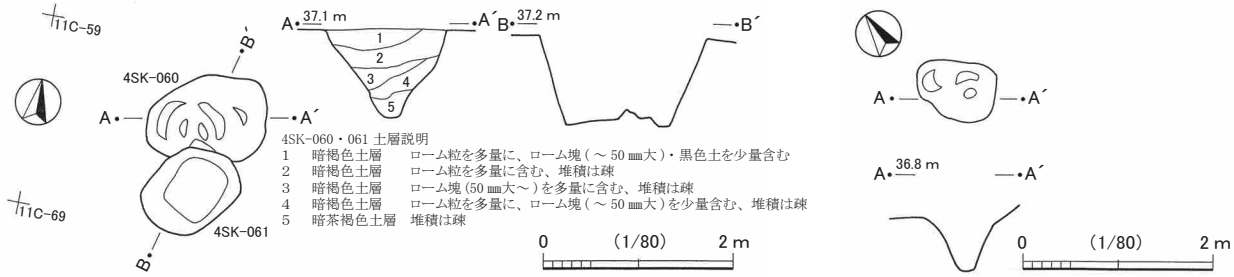


第 271 図　4SK-056・057 と出土遺物



第 272 図　4SK-058・062

第 273 図　4SK-059



第 274 図　4SK-060・061

第 275 図　4SK-073

検出面からの深さは 37㎝である。4SK-057 は長径 86㎝、短径 60㎝の楕円形状を呈する土坑で、底面までの深さは 70㎝である。両土坑は溝状遺構 4SD-024 の延長線上にあり、また２基をつなぐラインは、東側にある溝状遺構 4SD-019 の一辺及び西側にある 4SD-020 とほぼ同じ軸方向となっている。これらと何らかの関係がある可能性も考えられるかもしれない。

図示した遺物は 1 点である。第 271 図 1 は常滑片口鉢である。内面には自然釉がみられる。4SK-056 から出土した。4SK-057 からは遺物は出土していない。

4SK-058・062（第 272 図、図版 15）

11C-68・69・78・79 グリッドに所在する、重複する土坑２基である。新旧関係は明らかでない。4SK-058 は現状で長軸 120㎝、80㎝ほどの長方形状を呈し、検出面からの深さは 103㎝である。その南側に連なる 4SK-062 は長径 100㎝、短径 80㎝ほどの楕円形状を呈し、検出面からの深さは 98㎝である。正方形状に屈曲する溝状遺構 4SD-019 の内部に位置し、軸方向も一致していることから、4SD-019 との関連性も考えられるだろう。

遺物は、図示していないが 4SK-058 から中世陶磁器・土器の小破片が少量出土した。4SK-062 からは遺物は出土していない。

4SK-059（第 273 図）

11D-27・28 グリッドに所在する。竪穴状遺構 4SK-047 と溝状遺構 4SD-024 と重複する。新旧関係は、4SK-047 とは明らかでないが、4SD-024 とは土層断面の観察から当遺構のほうが古い。平面形は径 140㎝ほどの円形と復元できる。底面はほぼ平坦で、検出面からの深さは 16㎝ほどである。

遺物は出土していない。

4SK-060・061（第 274 図、図版 15）

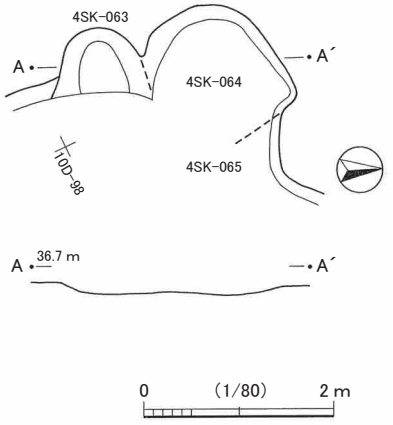
11C-59、11D-50 グリッドに所在する、重複する土坑２基である。新旧関係は明らかでない。4SK-060 は長径 130㎝、短径 95㎝の不整楕円形状を呈し、検出面からの深さは最も深いところで 92㎝である。その南側に連なる 4SK-061 は長径 100㎝、短径 80㎝の楕円形状を呈し、検出面からの深さは 92㎝である。正方形状に屈曲する溝状遺構 4SD-019 の内部に位置し、軸方向も一致していることから、4SD-019 との関連性も考えられるだろう。

遺物は 4SK-060 から近世以降陶磁器の小破片が少量出土したのみで、4SK-061 からは出土していない。

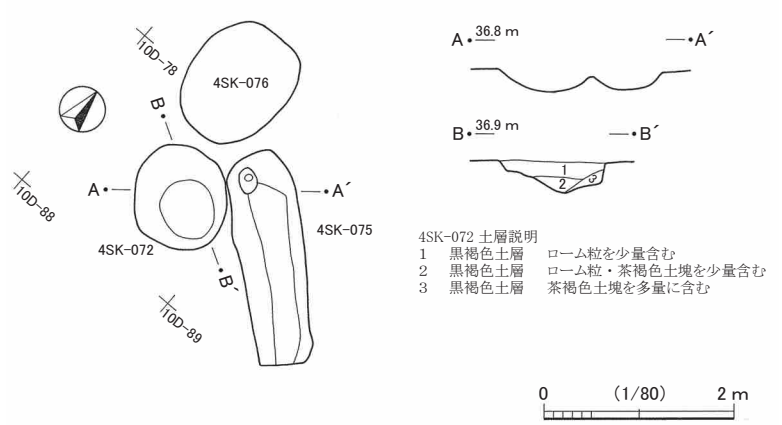
4SK-063・064（第 276 図）

10D-77・78・87・88 グリッドに所在する、重複する土坑２基である。両遺構とも、竪穴状遺構 4SK-065 とも重複するが、新旧関係は明らかでない。4SK-063 は楕円形状を、4SK-064 は隅丸方形状を呈するとみられ、ともに底面は平坦で、検出面からの深さは 15㎝前後である。

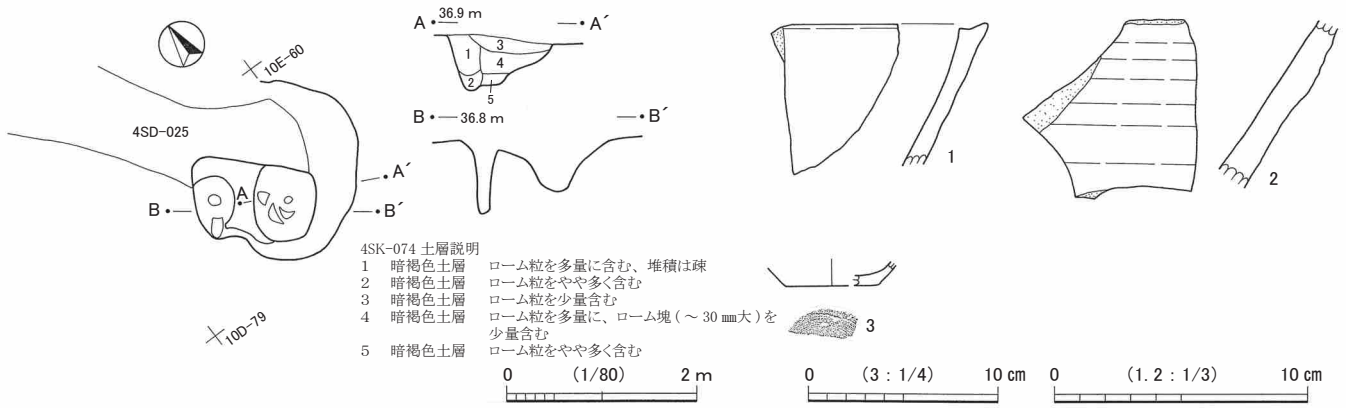
遺物は、図示していないが 4SK-064 から中・近世以降陶磁器の小破片が少量出土した。4SK-063 からは遺物は出土していない。



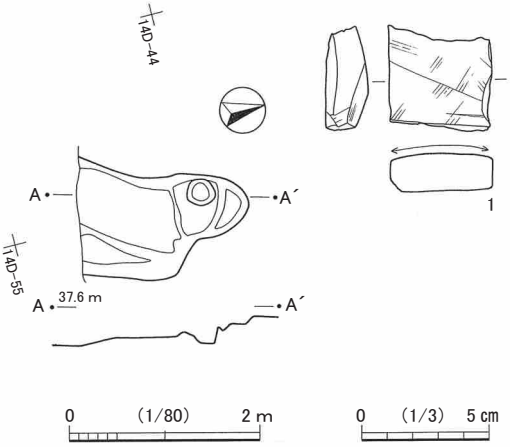
第 276 図　4SK-063・064



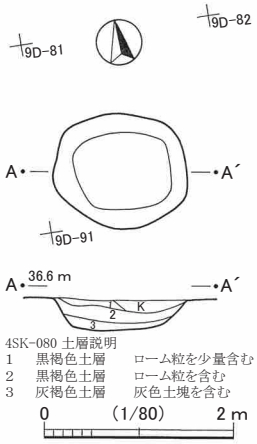
第 277 図　4SK-072・075・076



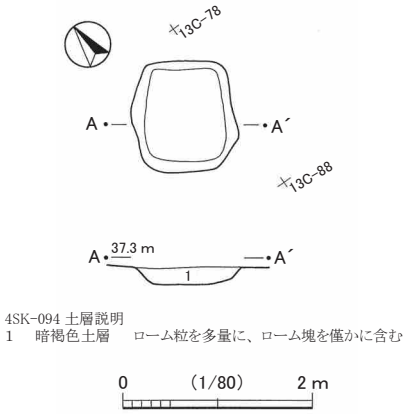
第 278 図　4SK-074 と出土遺物



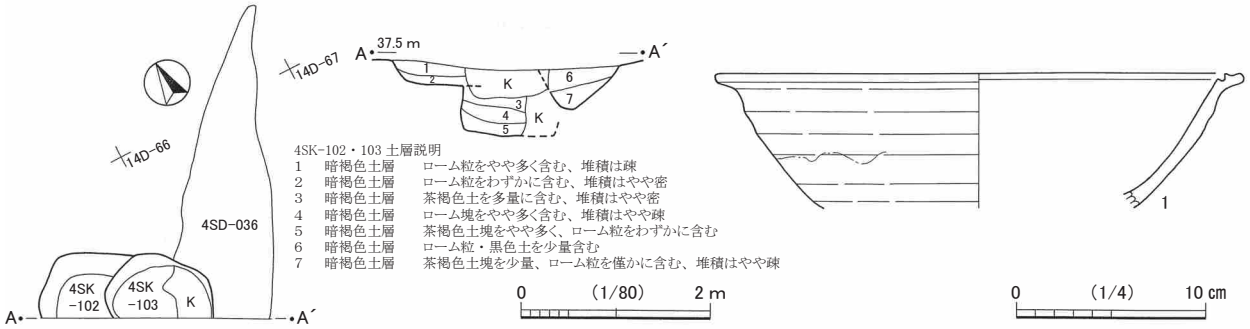
第 279 図　4SK-077 と出土遺物



第 280 図　4SK-080



第 281 図　4SK-094



第 282 図　4SK-102・103 と出土遺物

4SK-072・075・076（第 277 図）

10D-68・78・79 グリッドに隣接して所在する３基の土坑である。

4SK-072 は、平面形は長径 115㎝、短径 100㎝の楕円形を呈する。検出面からの深さは 27㎝である。

4SK-075 は、4SK-072 の北東に接するように位置し竪穴状遺構 4SK-065 と重複している。平面形は現状で長軸 220㎝、短軸 90㎝ほどの隅丸方形状を呈する。検出面からの深さは 22㎝である。北西隅に床面からの深さ 28㎝のピットが１か所認められる。

4SK-076 は、長径 135㎝、短径 105㎝ほどの楕円形状を呈する、深さ５㎝前後の浅い土坑である。

遺物は、4SK-075・076 から近世以降陶磁器の小破片がそれぞれ少量出土したのみで、4SK-072 からは出土していない。

4SK-073（第 275 図、図版 16）

10D-58・59・68・69 グリッドに所在する。方形竪穴 4SK-069 と重複しており、現状で平面形は長軸 85㎝、短軸 60㎝ほどの不整楕円形状を呈している。新旧関係は、土層断面の観察から当遺構のほうが古い。検出面からの深さは北側で 22㎝、東側で 42㎝、最も深い南側で 71㎝である。

遺物は出土していない。

4SK-074（第 278 図・図版 100）

10D-69 グリッドに所在し、溝状遺構 4SD-025 を切って構築されている。平面形は長径 130㎝、短径 70㎝ほどの楕円形状を呈するが、２基の土坑が重複しているとみられ、底面の深さは西側で 75㎝、東側で 64㎝である。

図示した遺物は３点である。第 278 図１は在地産擂鉢である。胎土に白色針状物質や砂粒を含み、色調は暗褐色を呈する。内面にごく僅かに擂目が残る。時期は古瀬戸後期様式Ⅳ期併行と考えられる。２は備前擂鉢である。内面には擂目があるが、使用によりほとんど平滑になっている。近世の所産と考えられる。３はカワラケ小皿である。

4SK-077（第 279 図、図版 112）

14D-34・35・44・45 グリッドに所在する。現状で長軸 180㎝、短軸 105㎝の不整形を呈する土坑である。複数の遺構が重複している可能性もある。検出面からの深さは一様ではなく、最も深いところで 28㎝である。

図示した遺物は１点である。第 279 図１は砥石である。上下端は欠損する。ほかには、近世以降陶磁器の小破片が少量出土したのみである。

4SK-080（第 280 図、図版 16）

9D-81 グリッドに所在する。平面形は長径 143㎝、短径 121㎝の楕円形を呈する。底面はほぼ平坦で、検出面からの深さは 34㎝である。

遺物は出土していない。

4SK-094（第 281 図、図版 18）

13C-77・78 グリッドに所在する。平面形は、長軸 117㎝、短軸 110㎝の隅丸方形状を呈する。検出面からの深さは 19㎝である。方形竪穴 4SK-095 に隣接しており、軸方向も一致することから、当遺構も方形竪穴と考えることも可能かもしれないが、床面のしまりのなさや壁の立ち上がりの角度の緩やかさ等から土坑とした。

遺物は出土していない。

4SK-102・103（第 282 図、図版 18・100）

14D-65 グリッドに所在する、重複する２基の土坑である。溝状遺構 4SD-036 と重複する。新旧関係は、土層断面の観察から、4SK-102 のほうが 4SK-103 より新しく、また 4SK-103 より 4SD-036 のほうが新しいとみられる。4SK-102 は現状では径 65㎝ほどの不整円形を呈する。検出面からの深さは 28㎝である。4SK-103 は径 115㎝ほどの不整円形を呈し、検出面からの深さは 83㎝である。

図示した遺物は１点である。第 282 図１は、4SK-103 から出土した瀬戸・美濃折縁深皿で、口縁部の破片及び接合しない胴部破片から復元したものである。ハケ塗りによって灰釉が施される。古瀬戸後期様式Ⅲ期に位置づけられるものと考えられる。

4SK-112・113（第 283 図、図版 19・100）

13C-09・19 グリッドに所在する２基の土坑である。互いに重複するだけでなく、周囲に 4SK-108・109・110・111・114 といった方形竪穴群が重複しており、複雑な様相を呈している。新旧関係はいずれも明らかではない。

4SK-112 は東側に 4SK-113 があり、西には 4SK-110、南西には 4SK-109、南には 4SK-111 が重複し、その上中央部分に大きな撹乱が入っているが、平面形は径 130㎝ほどの円形と推定できる。検出面からの深さは、63㎝である。

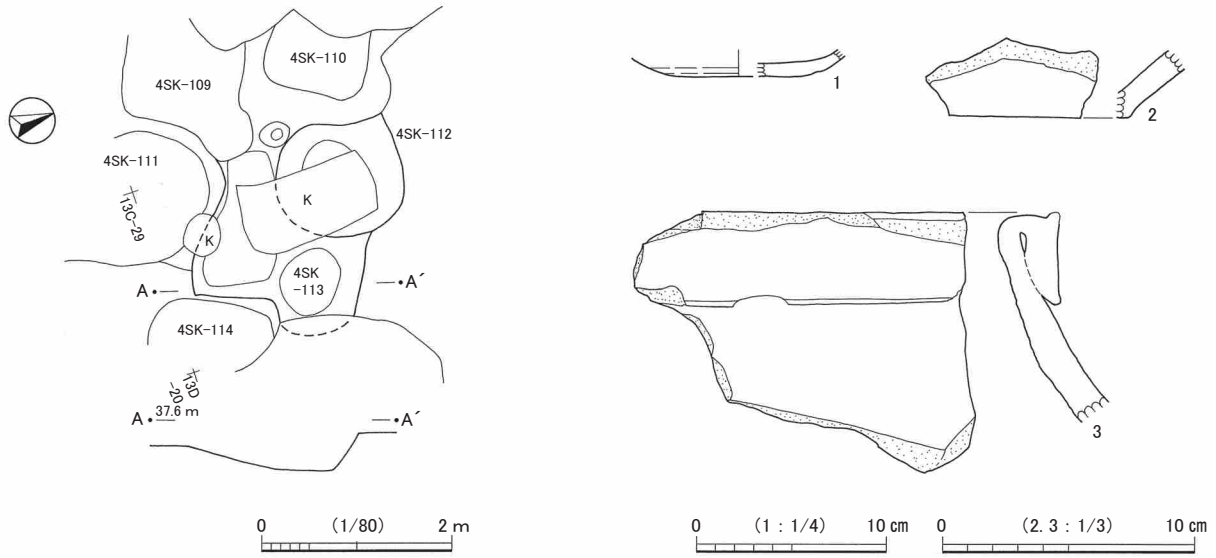
4SK-113 は西側に 4SK-112 があり、南西には 4SK-111、南には 4SK-114、東には地下式坑 4SK-091 が重複しているが、平面形は径 90㎝ほどの円形と推定される。検出面からの深さは 38㎝である。

図示した遺物は３点である。第 283 図１・２は瀬戸・美濃製品で、１は縁釉小皿、２は擂鉢である。１は遺存部分には釉はみられない。内外面とも器面が摩耗しており、転用砥石として使用された可能性もある。２は、内面に擂目は認められるが摩耗が著しく、錆釉もほとんど禿げてしまっている。３は常滑甕である。焼成が不良で、外面の摩滅、内面の剥落が著しい。９型式に比定されるものと考えられる。いずれも 4SK-113 から出土したもので、4SK-112 からは遺物は出土していない。

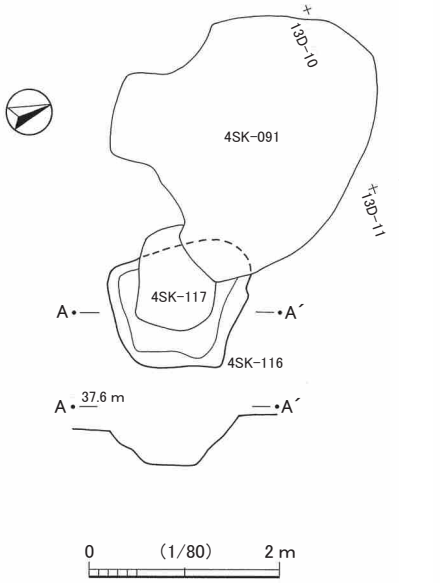
4SK-116（第 284 図、図版 19）

13D-11・21 グリッドに所在する。方形竪穴 4SK-117 と重複し、北西には地下式坑 4SK-091 が重複するが、新旧関係はいずれも明らかでない。平面形ははっきりしないが、130㎝、120㎝ほどの不整方形状を呈するとみられる。検出面からの深さは、重複する方形竪穴 4SK-117 のほうが深くはっきりしないが、現存部分で 31㎝である。

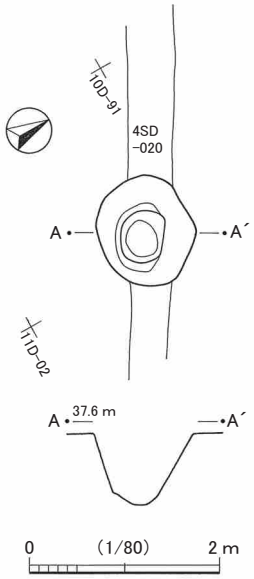
遺物は出土していない。



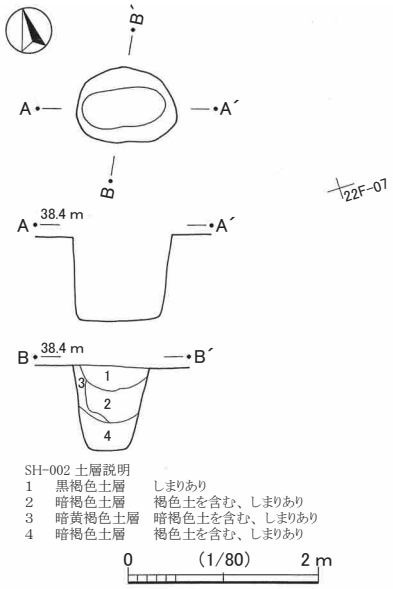
第 283 図　4SK-112・113 と出土遺物



第 284 図　4SK-116

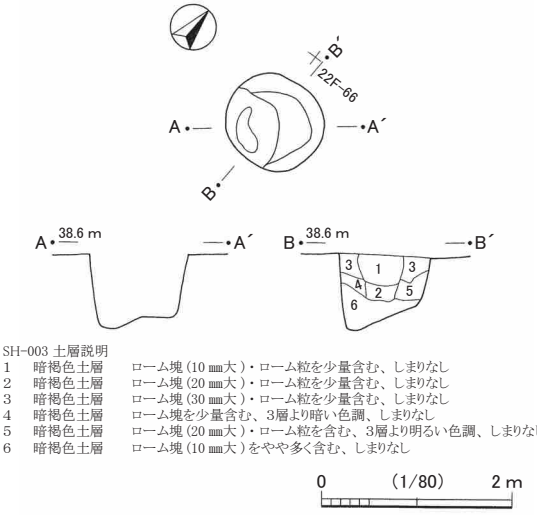


第 285 図　4SK-120



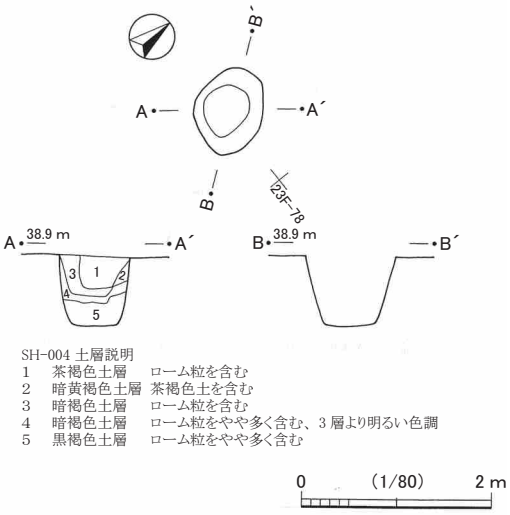
SH-002 土層説明
1　黒褐色土層　しまりあり
2　暗褐色土層　褐色土を含む、しまりあり
3　暗黄褐色土層　暗褐色土を含む、しまりあり
4　暗褐色土層　褐色土を含む、しまりあり

第 286 図　SH-002



SH-003 土層説明
1　暗褐色土層　ローム塊（10 ㎜大）・ローム粒を少量含む、しまりなし
2　暗褐色土層　ローム塊（20 ㎜大）・ローム粒を少量含む、しまりなし
3　暗褐色土層　ローム塊（30 ㎜大）・ローム粒を少量含む、しまりなし
4　暗褐色土層　ローム塊を少量含む、3層より暗い色調、しまりなし
5　暗褐色土層　ローム塊（20 ㎜大）・ローム粒を含む、3層より明るい色調、しまりなし
6　暗褐色土層　ローム塊（10 ㎜大）をやや多く含む、しまりなし

第 287 図　SH-003



SH-004 土層説明
1　茶褐色土層　ローム粒を含む
2　暗黄褐色土層　茶褐色土を含む
3　暗褐色土層　ローム粒を含む
4　暗褐色土層　ローム粒をやや多く含む、3 層より明るい色調
5　黒褐色土層　ローム粒をやや多く含む

第 288 図　SH-004

4SK-120（第 285 図、図版 19）

10D-91･92 グリッドに所在する土坑である。溝状遺構 4SD-021 と重複するが、新旧関係は明らかでない。平面形は径約 110㎝の円形状を呈する。検出面からの深さは 74㎝である。

遺物は、掲載していないが中世陶磁器の小破片が少量出土した。

SH-002（第 286 図、図版 20）

21F-95・96 グリッドに所在する。調査時はピットとして調査したが、比較的規模が大きく、土坑として掲載することとした。平面形は長径 105㎝、短径 78㎝の楕円形を呈する。底面は平坦で、検出面からの深さは 94㎝である。覆土は全体にしまりがあった。

遺物は出土していない。

SH-003（第 287 図、図版 20）

22F-65・66 グリッドに所在する。調査時はピットとして調査したが、比較的規模が大きく、土坑として掲載することとした。平面形は径約 100㎝の円形を呈する。検出面からの深さは最も深いところで 78㎝である。覆土は全体にしまりに欠ける状況であった。

遺物は、混入品とみられる土器の小片が少量出土したのみである。

SH-004（第 288 図、図版 20）

23F-67・77 グリッドに所在する。調査時はピットとして調査したが、比較的規模が大きく、土坑として掲載することとした。平面形は長径 93㎝、短径 72㎝の楕円形を呈する。底面は平坦で、検出面からの深さは 74㎝である。

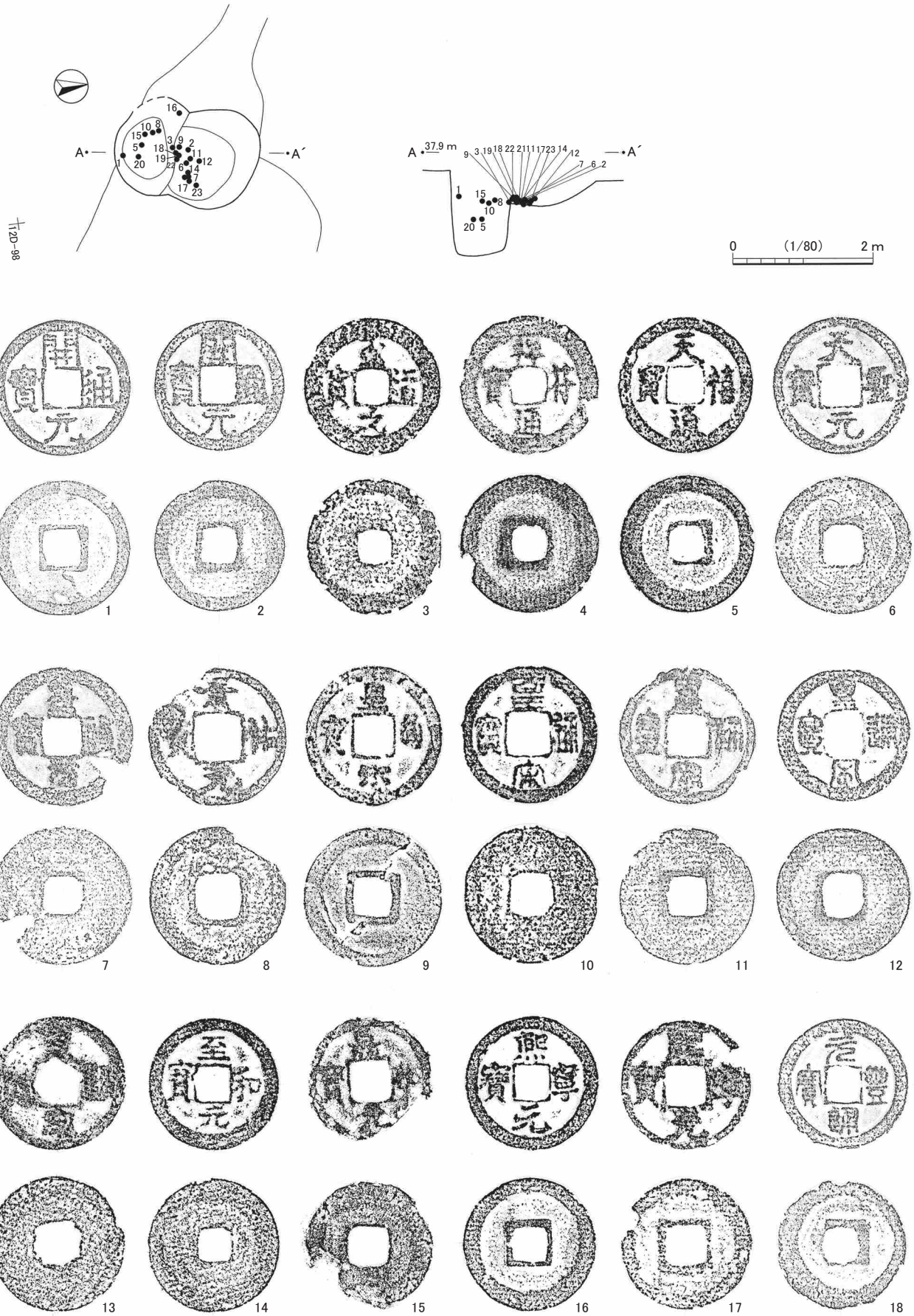
遺物は出土していない。

4SH-012（第 289・290 図、図版 20・122・123）

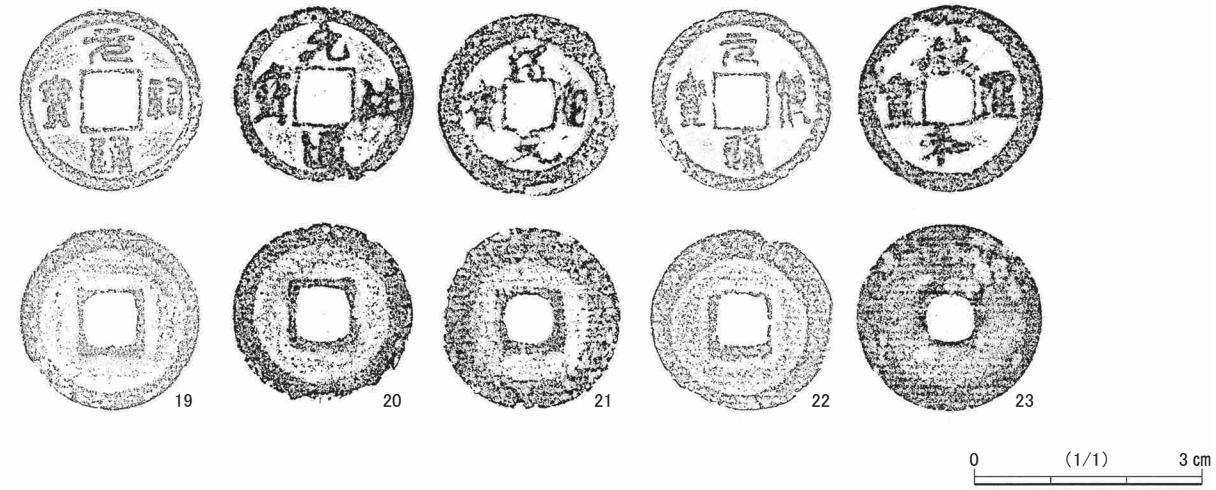
12D-77・78・87 グリッドに所在する。調査時はピットとして調査したが、比較的規模が大きく、また銭貨が多数出土したため、土坑として掲載することとした。溝状遺構 4SD-010・027 が重複する場所に重複して位置するが、それらとの新旧関係等は明らかでない。南北に 2 基のピットが連なったような形状で、全体として平面形は長径 113㎝、短径 72㎝の楕円形状を呈するが、検出面からの深さは段差があり、南側が 60㎝、北側は 18㎝である。

当遺構からは 23 点の銭貨が出土し、第 289・290 図 1 ～ 23 として全て掲載した。銭種は、唐銭の開元通寶のほかは全て北宋銭で、皇宋通寶が最も多く 5 枚出土している。

1・2 は開元通寶である。1 の背面下には月文がある。3 は至道元寶である。書体は行書である。4 は祥符通寶である。5 は天禧通寶である。6 は天聖元寶である。書体は真書である。7・8 は景祐元寶である。書体は 7 は篆書、8 は真書である。9 ～ 13 は皇宋通寶である。書体は、9 は真書、10 ～ 13 は篆書である。14 は至和元寶である。書体は真書である。15 は嘉祐元寶である。書体は真書である。16・17 は熙寧元寶である。書体はいずれも真書である。背文はいずれも認められない。18 は元豊通寶である。書体は篆書である。背文はない。19・20 は元祐通寶である。書体は 19 は篆書、20 は行書である。21 は紹聖元



第 289 図　4SH-012 と出土遺物（1）



第 290 図　4SH-012 と出土遺物（2）

寶である。書体は行書である。22 は元符通寶である。書体は篆書である。背面は無文とみられる。23 は政和通寶である。書体は分楷である。

遺物は、銭貨のほかには、混入品とみられる土器の小破片が少量出土したのみである。

第 6 節　堀・土塁

1　概要

調査区の北端に、堀 SD-027 が検出された。堀の内側には、堀に沿うように土塁 SA-001 が存在し、堀と土塁はほぼ同時に機能していたと考えられるが、堀覆土や土塁の土の様相が部分的に異なっており、検出された部分の全てが同時期に機能していたわけではない可能性もある。

2　遺構と遺物

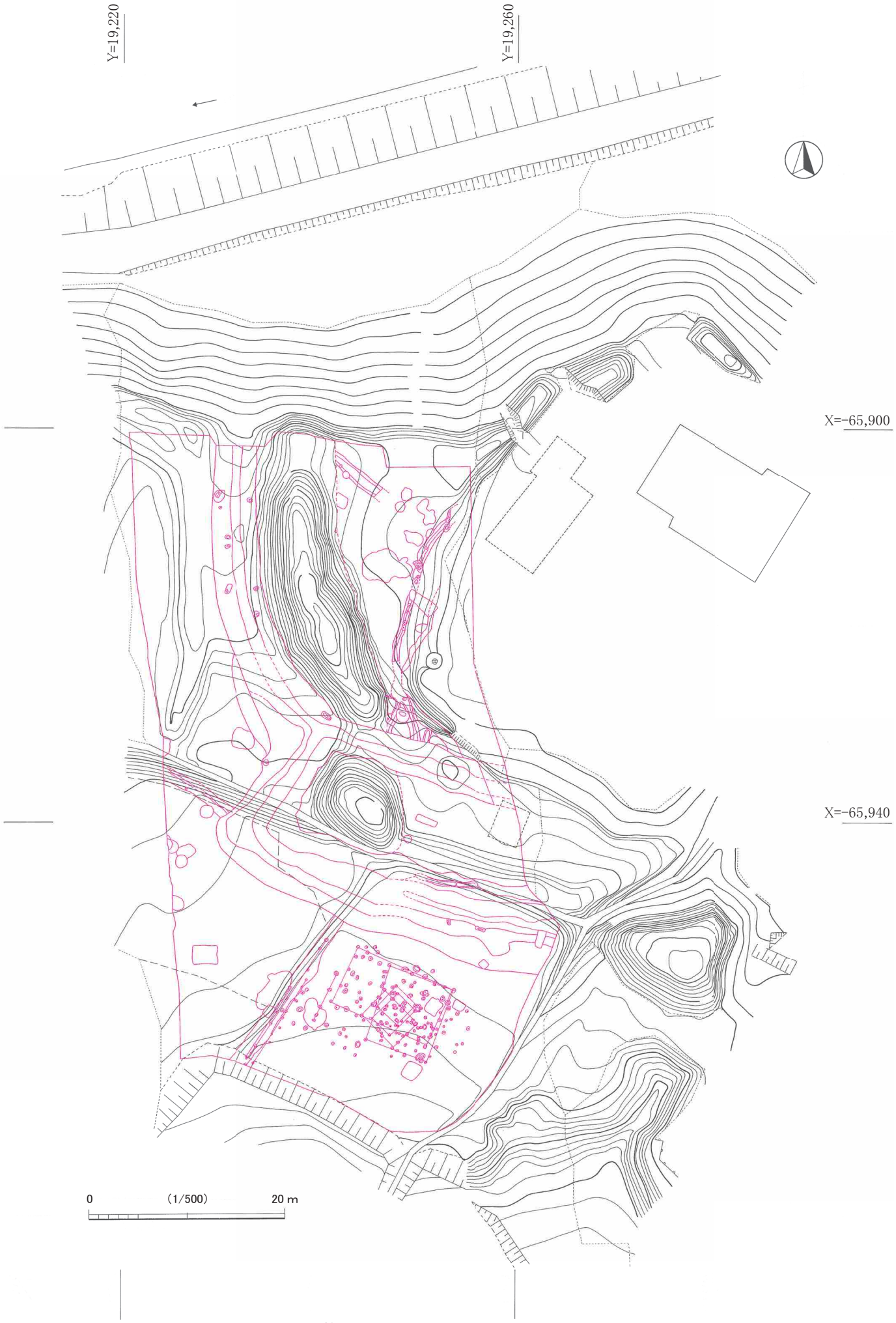
SD-027（第 291 ～ 295 図、巻頭図版 7、図版 24・94・99・109・112・114・118）

6C・7C・7D・8C・8D・8E グリッドに所在する堀である。カーブを描きながら南北方向に延び、南で二叉に分かれながら東へと屈曲し、２条となった堀が平行に調査区外へと続いていく。北端は本調査区外へ続くとみられるが、急斜面となっており、その下には松川が東から西へと流れている。

当遺構は長大なため、調査時には便宜的に分割し、それぞれの部分に名称をつけて調査を行った。名称は、断面 C-C' から北側の部分を「北側堀」、C-C' ～ D-D' の部分を「南側堀」、D-D' から東側の部分を「東側堀」、E-E' から東側の部分を「虎口」とした（第 292 図）。遺構の様子はそれぞれで異なっており、説明にあたって便利であることから、報告においてもこの名称を用いることとする。

「北側堀」は、若干のカーブを描きながらほぼ南北方向に延びる部分である。検出された長さは約 25 m、幅は約 5 mで、断面形は底面が幅 1 mほどの平坦面を呈する箱堀状である。検出面からの深さは 200㎝前後である。壁面には径 50㎝程度のピットがいくつか検出されたが、杭が残存しているものもみられた。遺構の東側には、沿うように土塁 SA-001 が存在している。

「南側堀」は、屈曲しながら二叉に分かれ、南北方向から東西方向へと延びる部分である。沿うように存在する土塁 SA-001 は、この部分までで途切れる。「南側堀」の検出された長さは約 35 m、幅は南北方



第 291 図　堀・土塁周辺現況図

向より東西方向の部分のほうが広く、約５m～７mである。断面形はＵ字形で、東西方向の部分のほうが緩やかな形状を呈している。検出面からの深さは、「北側堀」に近い南北方向の部分で 180㎝前後、「東側堀」に近い東西方向の部分では 60㎝前後である。南北から東西方向に屈曲する部分で、東西方向のＶ字溝 SD-030 と交わっているが、同時に機能したものかどうか不明である。覆土は、「北側堀」とは異なり、砂や砂利が含まれ、堅く締まっている部分もみられた。上層部には、宝永の火山灰も検出された。また、虎口との分岐点周辺の底面付近からは、ウマの全身骨とウシの頭骨が出土した（第３章第２節３及び付章参照）。

「東側堀」は、「南側堀」に引き続き東西方向に延びる部分である。検出された長さは約 15 m、幅は８m前後で、断面形は緩やかなＵ字状を呈するが、底面は更にやや掘り窪められたようになっている。検出面から底面までの深さは 140㎝前後で、覆土には砂利を含んでいる。遺構のすぐ南側は台地整形面となっており、掘立柱建物跡群や柵列等が存在する。堀と軸方向がほぼ合致しているものもあり、関連性も考えられよう。なお、底面及び壁面から土坑 SK-105・106 が検出されたが、覆土の状況から、当遺構より古いものとみられる。

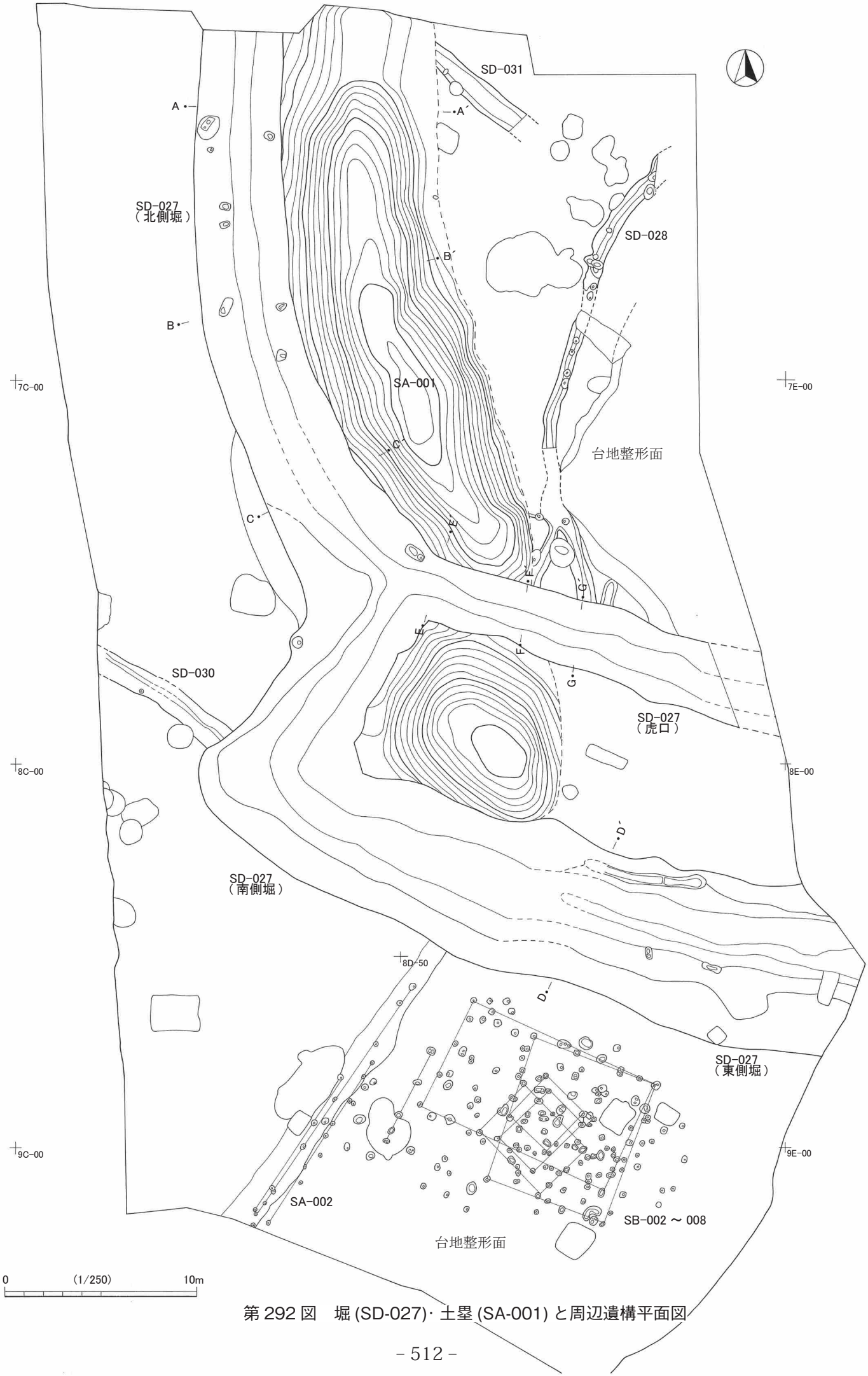
「虎口」は、「南側堀」から二叉に分かれ、土塁を切って東西方向に延びる部分である。検出された長さは約 26 m、幅は 3.5 m前後で、断面形は「北側堀」と同様、底面が幅１mほどの平坦面となっているが、壁は「北側堀」よりも急斜度で、検出面からの深さも 250㎝前後と深い。覆土は水平堆積で、下層はローム塊や黒土を含む明褐色土、上層は砂と砂利を多量に含む明褐色～暗黄褐色土であった。北側には南北方向の溝状遺構 SD-028 があり合流しているが、同時に機能したものかどうかははっきりしない。

SD-027 の規模は、検出された部分の北端～南端で約 45 m、東端～西端で約 35 m、全長は延べ 101 mに及ぶ。この範囲の検出面の標高は一定ではなく、松川に面した北側のほうが南側より概して低い。SD-027 底面の標高も検出面の標高と同様な傾向で、北側が低く、南側にいくほど高くなっている。具体的な数値を示すと、SD-027 底面の標高は、北端部で 28.052 m、「北側堀」と「南側堀」の境界（C-C’）付近で 28.243 m、「南側堀」が東西方向に屈曲する付近で 31.397 m、「南側堀」と「東側堀」の境界（D-D’）付近では 32.375 mで、南端と北端とでは底面の標高に４m以上の差が生じている。なお、東西方向は、東側に比べて西側のほうがやや低い。

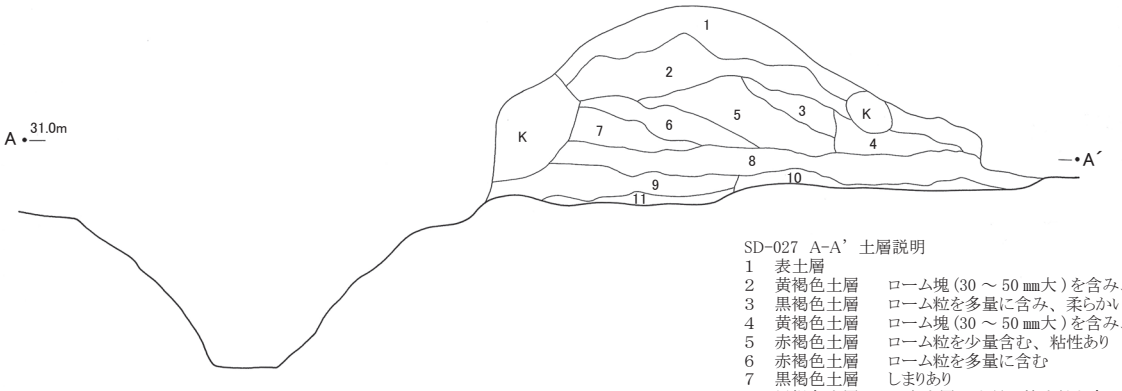
SD-027 は、遺構は長大であるが、出土遺物はそれほど多くはない。また、出土遺物を見ても、地点や層位によって時期が異なる様子は特にみられなかった。

出土遺物のうち、19 点を図示した。第 295 図１は青磁の酒会壺である。緑灰色を呈する釉が内外面に厚く施されるが、口唇部の釉は拭き取られ、露胎となっている。受口部は玉縁状にはならない。

２～６は瀬戸・美濃製品である。２は天目茶碗である。内外面に黒褐色の鉄釉が施される。古瀬戸後期様式Ⅲ期に位置づけられるものと考えられる。３は灰釉の縁釉小皿である。古瀬戸後期様式Ⅳ期に位置づけられるものと考えられる。４は折縁皿である。全体の 50％の遺存度である。削り出し高台をもつ。内外面全体に灰釉が施されるが、見込み部分と高台内にそれぞれ輪状に重ね焼き痕が認められる。大窯第４段階後半の所産と考えられる。５は志野丸皿である。削り出し高台をもつ。内外面全体に釉が施され、色調は灰色を呈している。大窯第４段階末に位置づけられるものと考えられる。６は直縁大皿である。口縁部破片で、口径は 30.0㎝と復元できる。内外面全体に灰釉が施され、色調は灰オリーブ色を呈している。古瀬戸後期様式Ⅲ期に位置づけられるものと考えられる。

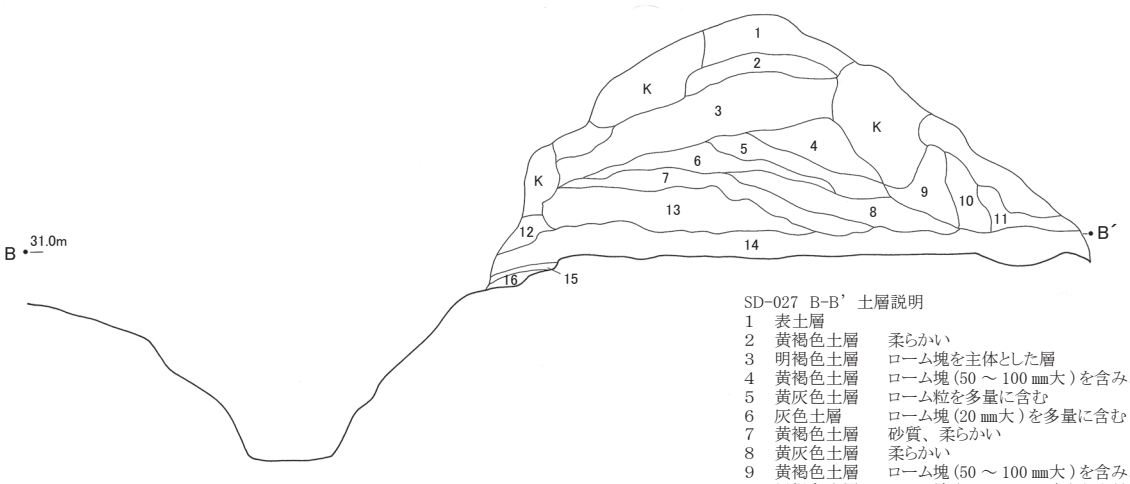


第 292 図　堀 (SD-027)・土塁 (SA-001) と周辺遺構平面図



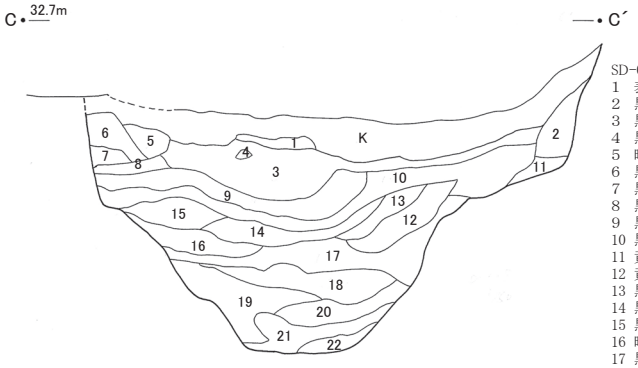
SD-027 A-A’ 土層説明

1 表土層
2 黄褐色土層 ローム塊（30 ～ 50 ㎜大）を含み、柔らかい
3 黒褐色土層 ローム粒を多量に含み、柔らかい
4 黄褐色土層 ローム塊（30 ～ 50 ㎜大）を含み、柔らかい
5 赤褐色土層 ローム粒を少量含む、粘性あり
6 赤褐色土層 ローム粒を多量に含む
7 黒褐色土層 しまりあり
8 黒褐色土層 旧表土層、少量の焼土粒を含む
9 黒褐色土層 焼土粒を含む（古墳時代住居跡覆土）
10 黒褐色土層 Ⅱ層（地山層）
11 黒褐色土層 焼土を多量に含む（古墳時代住居跡覆土）



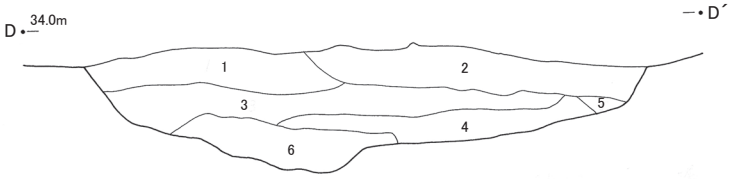
SD-027 B-B’ 土層説明

1 表土層
2 黄褐色土層 柔らかい
3 明褐色土層 ローム塊を主体とした層
4 黄褐色土層 ローム塊（50 ～ 100 ㎜大）を含み、柔らかい
5 黄灰色土層 ローム粒を多量に含む
6 灰色土層 ローム塊（20 ㎜大）を多量に含む
7 黄褐色土層 砂質、柔らかい
8 黄灰色土層 柔らかい
9 黄褐色土層 ローム塊（50 ～ 100 ㎜大）を含み、粘性がある
10 黒褐色土層 ローム塊（50 ～ 100 ㎜大）を少量含む
11 黒褐色土層 柔らかい
12 明黄褐色土層 ローム塊（20 ～ 30 ㎜大）を含む
13 黄褐色土層 粘性あり
14 黒褐色土層 旧表土層、固くしまっている
15 黒褐色土層 Ⅱ層（地山層）
16 黄褐色土層 ローム層（地山層）



SD-027 C-C’ 土層説明

1 表土層
2 黒褐色土層 土塁の旧表土層
3 黒褐色土層 砂利を多量に含み、しまっている
4 黒褐色土層 3層に似るが、一部火山灰を含む
5 暗黄褐色土層 ローム粒を含む
6 黒褐色土層 ローム塊（50 ～ 70 ㎜大）を含み、固くしまっている
7 黒褐色土層 ローム塊（10 ～ 20 ㎜大）を含み、砂質、柔らかい
8 黒褐色土層 砂利を少量含む
9 黒褐色土層 3層に似るが、ローム粒、ローム塊（10 ㎜大）を含む
10 黒褐色土層 ローム粒、ローム塊（10 ～ 20 ㎜大）、砂利を含む
11 黄褐色土層 ローム層（地山層）
12 黄褐色土層 ローム粒・ローム塊（10 ～ 20 ㎜大）を多量に含む、ローム塊（70 ㎜大）も含む
13 黒褐色土層 ローム塊（10 ㎜大）と少量のローム粒を含み、柔らかい
14 黒褐色土層 ローム粒を含み、固くしまっている
15 黒褐色土層 ローム塊（10 ～ 20 ㎜大）を含む
16 暗赤褐色土層 ローム粒、ローム塊（20 ～ 30 ㎜大）を含む
17 黒褐色土層 ローム塊（20 ～ 50 ㎜大）を含み、固くしまっている
18 赤褐色土層 ローム塊（10 ㎜大）を含み、柔らかい
19 暗黄褐色土層 ローム粒、ローム塊（20 ～ 50 ㎜大）を含む
20 灰黄褐色土層 ローム塊（10 ～ 13 ㎜大）を含み、固くしまっている
21 黄褐色土層 ローム粒を多量に含む
22 褐灰色土層 砂状の土質、ローム粒を少量含む

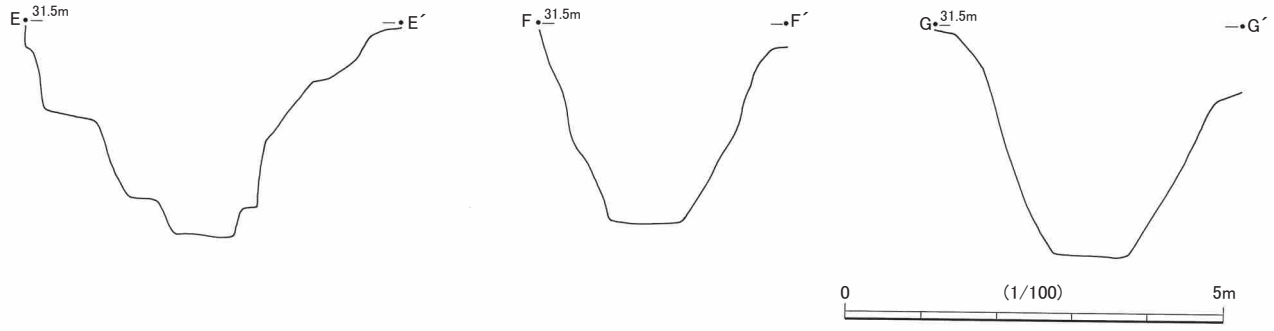


SD-027 D-D’ 土層説明

1 赤褐色土層 砂利を含む
2 赤褐色土層 ローム塊（70 ～ 100 ㎜大）を含む
3 暗黄褐色土層 ローム粒・砂利を多量に含む
4 灰黄褐色土層 ローム塊（20 ㎜大）を含む
5 黒褐色土層 柔らかい
6 黄褐色土層 ローム塊（10 ～ 15 ㎜大）を含む

0 (1/100) 5m

第 293 図 堀 (SD-027)・土塁 (SA-001) 断面図（1）



第 294 図　堀 (SD-027)・土墨 (SA-001) 断面図（2）

第 295 図　堀 (SD-027) 出土遺物

7は常滑片口鉢である。外面に重ね焼き痕が認められる。10型式に比定されるものと考えられる。

8・9は瀬戸・美濃擂鉢である。8は古瀬戸後期様式Ⅳ期に位置づけられるものと考えられる。9は底部の50％の遺存度である。古瀬戸後期様式Ⅳ期新段階に位置づけられるものと考えられる。

10は備前擂鉢である。色調は内外面とも暗灰色、断面は暗赤褐色を呈する。

11は常滑甕の破片である。図の右破断面と下破断面に、漆接ぎの痕跡がある。内面は著しく摩滅している。10型式に比定されるものと考えられる。

12は常滑甕を転用した転用砥石で、破断面及び内外面も使用されている。

13～17は砥石である。13は完形である。14は上下端が欠損している。15も上端は欠損しているとみられる。16は下端を欠損する。17は、左側面の下部を欠損しているようである。18は五輪塔の断片と考えられる。球状を呈するが、径4㎝ほどの平坦部分が認められ、水輪の可能性がある。被熱しているとみられ、全体がやや赤みがかっている。なお、土塁SA-001からも水輪の破片とみられるものが出土しているが、石質が異なることから、同一個体ではないと考えられる。

19は鉄鍋の破片と考えられる。脚が1か所確認できる。鍛鉄製とみられる。

それぞれの遺物の出土地点は、「北側堀」の壁際が8、「虎口」が4・13～16、「東側堀」の壁際が9・11である。また、「南側堀」から出土したもののうち、覆土下層が1・2・5～7・12、覆土上層が17・19、壁際が3・10・18である。

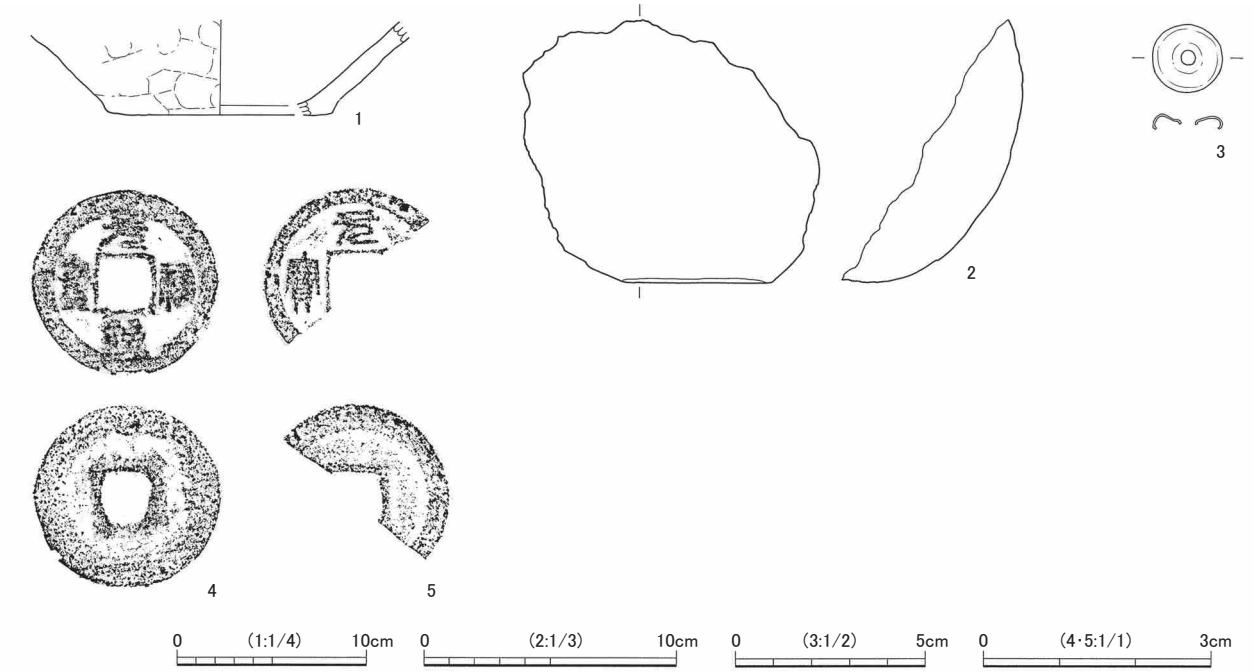
SA-001（第291～294・296図、図版23・99・114・118・123）

堀SD-027に沿うように、6C・6D・7C・7D・8Dグリッドにかけて直線上に位置する土塁である。現状では調査区の北端部からSD-027「南側堀」が東西方向に屈曲する部分まで確認されているが、SD-027によって分断される場所があり、その周辺を「虎口」と称した。

検出された長さは、北側、つまり調査区北端から堀SD-027「虎口」までが約29ｍ、南側、つまり「虎口」から南が約9ｍである。幅は、北側で約8ｍ、南側で約10ｍである。高さは、調査前の測量図では周辺に比べて3ｍ以上高くなっているが、調査の結果、旧表土上に約150㎝～240㎝の盛土をして構築されていることが明らかとなった。堀の底から測ると、土塁上まで5ｍ以上の高さとなる部分もある。

土塁は、ローム粒や焼土粒を含む黄褐色土・黒褐色土・赤褐色土などで構築されている。焼土は、土塁下の竪穴住居跡等の遺構が破壊されたことに由来するものと考えられる。土層断面を観察すると、下層では東側に垂直方向の境界線がみられ、その境界線に向けて堀SD-027の方向から堆積させられている様子が窺える。垂直方向の境界線は、板などを立てた土留めの痕跡とみられる。そしてその上には、別の盛土が水平方向になされており、堀を掘削し、土を盛りながら土塁を構築したことが推測される。なお、「虎口」から北側と南側とでは土塁の盛土も堀の覆土も異なり、特に南側では砂や砂利が多く含まれるとの調査時所見がある。「虎口」を境として、堀や土塁の機能した時期が異なる可能性が考えられる。

土塁下からは、弥生時代・古墳時代の竪穴住居跡のほか、中世と考えられる掘立柱建物跡SB-008や竪穴状遺構SI-045、土坑SK-117・119・125～129などの遺構が検出された。SK-119からは9型式に比定される常滑片口鉢（第251図1）が出土している。また、土塁下の7D-10グリッド、7D-00グリッドから、それぞれ古瀬戸後期様式Ⅱ～Ⅲ期頃とみられる瀬戸・美濃灰釉平碗（第351図4）と古瀬戸後期様式Ⅲ期に位置づけられると考えられる瀬戸・美濃灰釉盤類の破片（第351図25）が出土している。こ



第 296 図　土塁 (SA-001) 出土遺物

れらのことから、土塁の構築は概ね 15 世紀半ば以降と考えることができるだろう。なお、盛土下から検出された掘立柱建物跡 SB-008 の周辺では、アカニシの貝殻が 4 点ほど出土している。アカニシの貝殻は堀を挟んだ対岸付近でも 1 点出土しており、掘立柱建物の廃絶に関係するものか、或いは土塁構築に関連する可能性も考えられるだろう。

図示した遺物は、いずれも北側の土塁の盛土下部から出土したものである。第 296 図 1 は常滑片口鉢である。底部の 20％程度の破片である。 2 は五輪塔の破片と考えられる。球状を呈するがやや平坦な部分が一部認められ、水輪の可能性がある。なお、堀 SD-027 からも水輪と考えられる破片が出土しているが、(第 295 図 18)、石質が異なることから同一個体ではないとみられる。 3 は銅製品だが、何かの部品の可能性もある。厚さは 0.5㎜とごく薄い。 4 ・ 5 は銭貨で、 4 は元祐通寶である。書体は篆書である。背面は無文とみられる。 5 は半分ほど欠損しているが、篆書体の「元」「寶」が読めることから、 4 と同じ元祐通寶の可能性もあるが、元豊通寶や元符通寶の可能性もあるだろう。遺存部分の背面は無文である。

第 7 節　掘立柱建物跡・柵列

1　概要

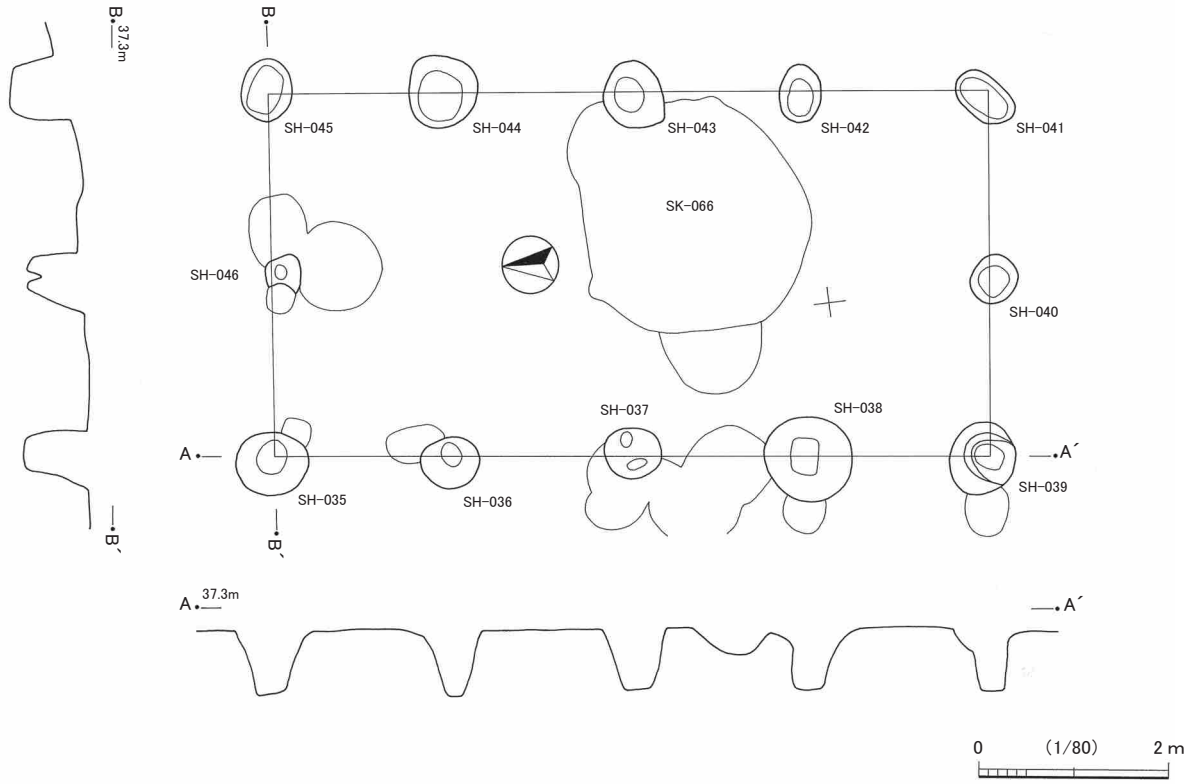
柱穴とみられるピットが集中して存在する地点はあるが、調査時点で掘立柱建物跡や柵列として把握できた遺構は多くはない。把握できた遺構は、掘立柱建物跡 9 棟及び柵列 3 条であった。報告にあたっては、これらのみ本節に掲載することとし、把握できなかったものについては、ピット群として第 8 節に掲載することとした。なお、遺構番号は、報告にあたって改めて通し番号に振り替えている。調査時と報告時の遺構対照表は第 1 表を参照されたい。

2　遺構と遺物

SB-001（SH-035 ～ 046）（第 297 図、図版 21）

19E-59・69・79・89・99、19F-60・61・71・81・90・91 グリッドに所在する、SH-035 ～ 046 の柱穴で構成される掘立柱建物跡である。桁行 4 間（7.6 m）、梁行 2 間（3.8m）の建物と考えられる。柱間間隔は、桁行・梁行ともにほぼ 1.9 m と等間隔である。柱穴の直径は約 50㎝（SH-040）～約 90㎝（SH-038）で、検出面からの深さは 59㎝（SH-043）～ 77㎝（SH-041）である。遺構中央部には円形の竪穴状遺構 SK-066 が存在し、当遺構との関連も考えられるかもしれない。また、北東隅の柱穴 SH-045 は土坑 SK-067 と重複している。周辺にはピットや土坑が群在しており、建替えが行われた可能性や別の掘立柱建物跡があった可能性も考えられる。

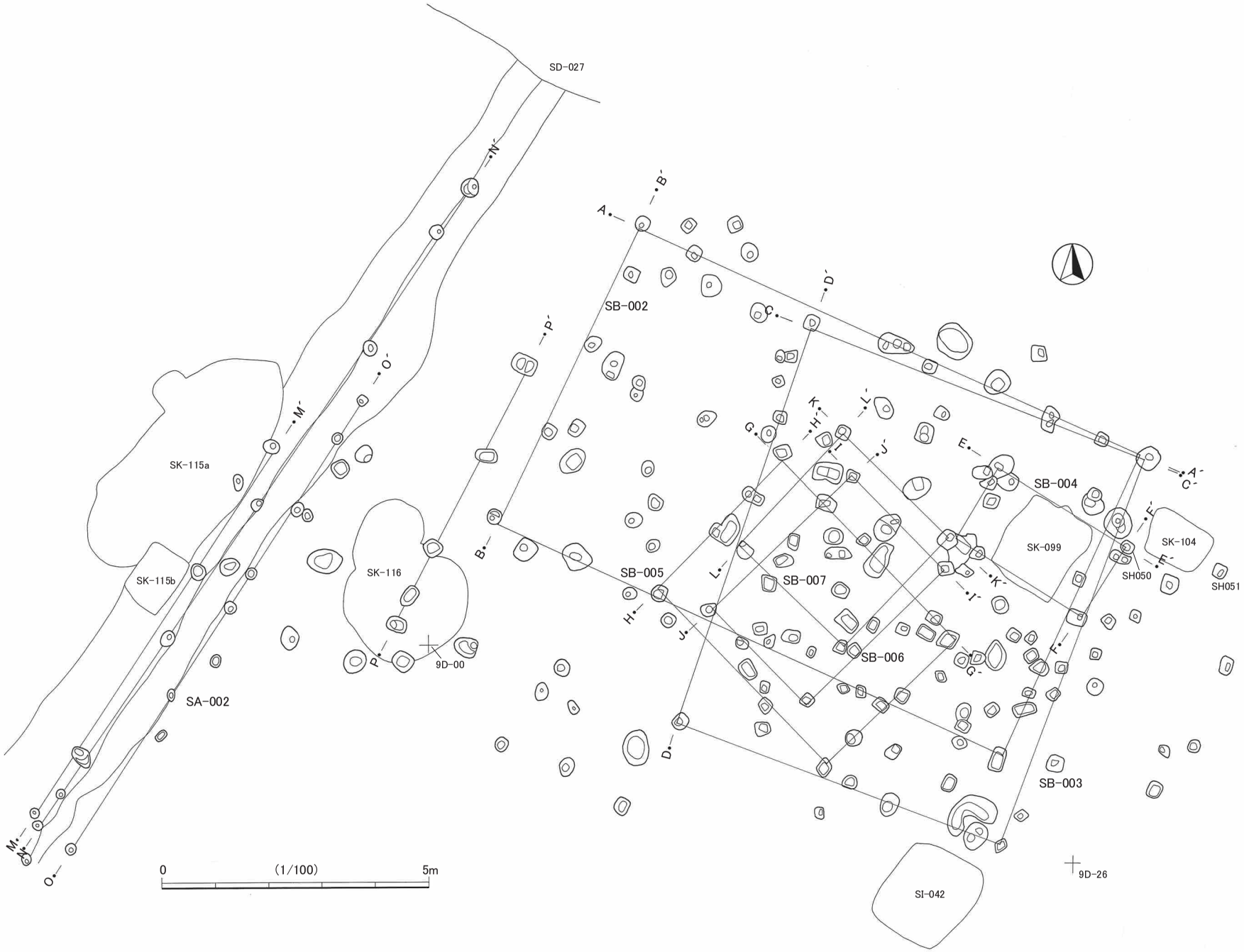
遺物はどの柱穴からも出土していない。



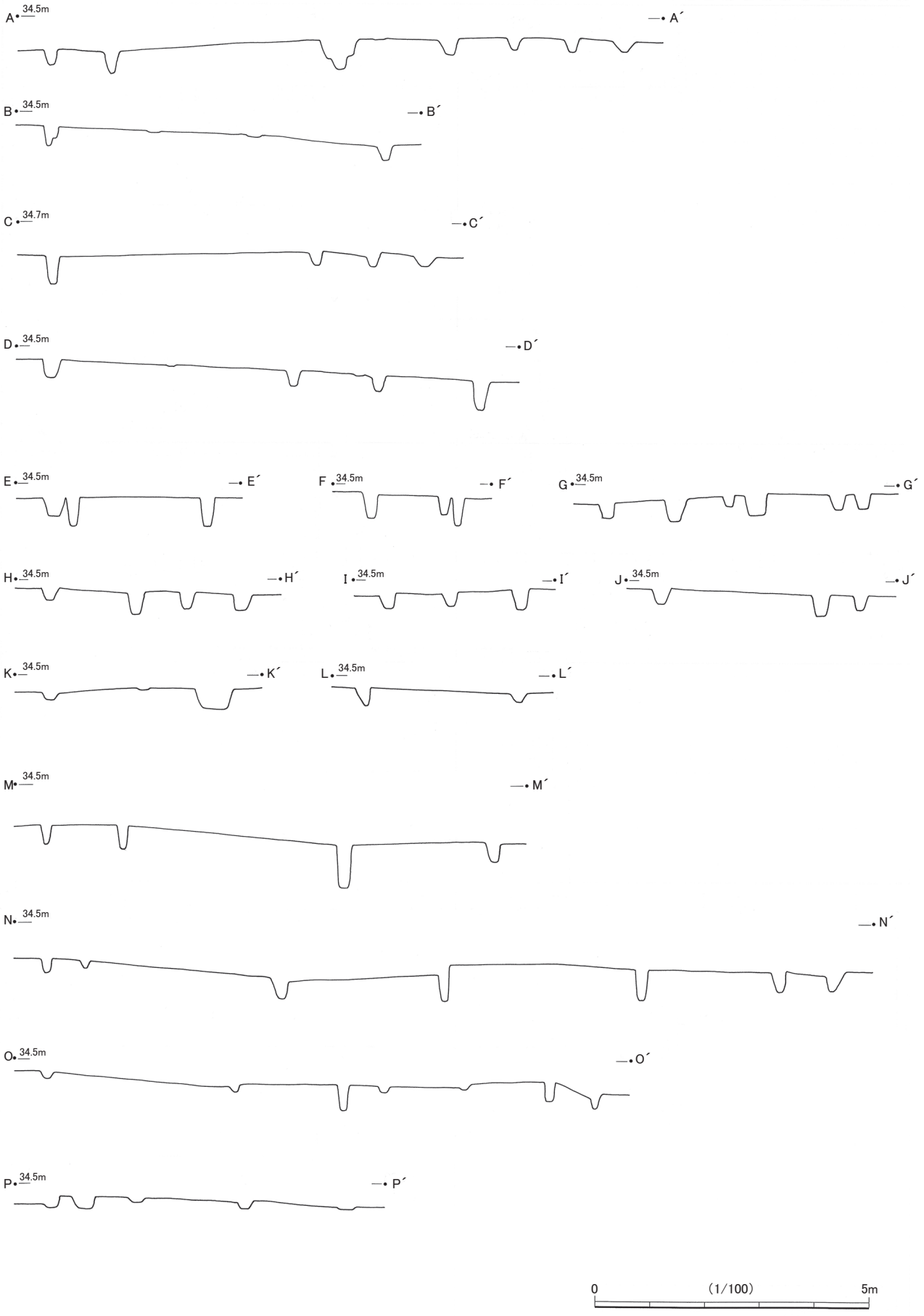
第 297 図　SB-001

SB-002 ～ 007（第 298・299 図、図版 21）

堀 SD-027 の南側、8D-62 ～ 9D-15 グリッド付近に所在する掘立柱建物跡群である。柱穴とみられるピットが多数検出されたもので、建物としての把握は困難ではあったが、直線的に並ぶ配置等から、調査時に 6 棟の重複する建物を確認したものである。柱間等は不揃いなものもあるが、検出面が多少傾斜している部分があり、歪みが出ていることも考えられる。建物は、確認したもの以外にも重複していた可能性が高いが、軸方向について概ね堀 SD-027 と同一或いは直交方向のもの（SB-002 ～ 004）と、45°前後ずれるもの（SB-005 ～ 007）とがあるようである。なお、建物跡群の西側は約 70㎝の段差をもって低くなっており、台地整形がなされているとみられる。段差部分には柵列 SA-002 や土坑 SK-115a・115b が SD-027 に対して直交方向に位置しており、建物を区画等する構築物として、建物と同時に機能していた可能性も考えられる。



第 298 図　SB-002 ～ 007 と SA-002 平面図



第 299 図　SB-002 ～ 007 と SA-002 断面図

SB-002 は、桁行 6 間（10.4 m）、梁行 4 間（6.1 m）程度の建物で、最も大型である。梁方位は N-75°-W の東西棟とみられ、北側に隣接する堀 SD-027 の軸方向とほぼ一致している。

SB-003 は、桁行 4 間（7.7 m）、梁行 4 間（6.8 m）程度の建物で、ほとんど SB-002 と重複するが、南北棟の建物になるとみられる。梁方位は N-18°-E である。南側には隣接して方形竪穴 SI-042 があるが、軸方向がほぼ一致しており、同時に機能した可能性も考えられる。

SB-004 は桁行 1 間（2.57 m）、梁行 1 間（1.6 m）の建物と想定した。梁方位は N-27°-W である。範囲内には方形竪穴 SK-099 がちょうど収まり、軸方向もほぼ一致することから、SK-099 の上屋などとして同時に機能した関連性も考えられる。

SB-005 は、桁行 3 間（4.7 m）、梁行 2 間（3.3 m）の建物と想定した。SB-002・003 とは軸方向が異なり、梁方位は N-45°-W である。

SB-006 は SB-005 と重複するが、桁行 3 間（3.7 m）、梁行 2 間（2.5 m）の建物と想定した。梁方位は N-45°-E である。

SB-007 は 1 間（3 m）、1 間（2.8 m）もしくは 2 間、2 間の建物と想定した。梁方位は N-45°-E である。

いずれの柱穴からも遺物は出土していない。

SB-008（第 300 図）

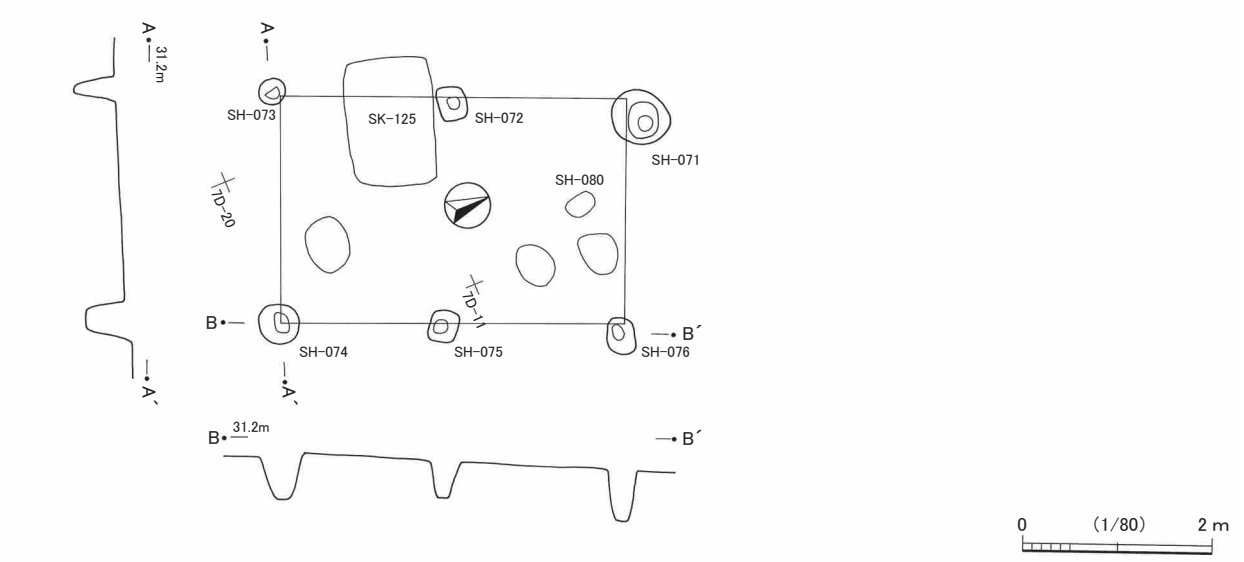
6D-90、7C-19、7D-00・01・10・11・20 グリッドに所在する、SH-071 ～ 076 の柱穴で構成される掘立柱建物跡である。土塁 SA-001 下から検出された。周辺は柱穴とみられるピットが群在しているが、ピットの規模や並びから桁行 2 間（3.6 m）、梁行 1 間（2.4 m）の建物を把握したものである。柱間間隔は、桁行が 1.8 m、梁行は 2.4 m である。柱穴の直径は約 30㎝（SH-073）～約 65㎝（SH-071）で、検出面からの深さは 39㎝（SH-075）～ 72㎝（SH-071）である。SH-072・073 の間に土坑 SK-125 が所在する。軸方向がほぼ一致しており、当遺構との関連も考えられるかもしれない。

遺物は出土していないが、柱穴周辺からアカニシの貝殻が 4 点出土している。当遺構の廃絶に関係するか、或いは土塁の構築に関係する可能性が考えられるだろう。

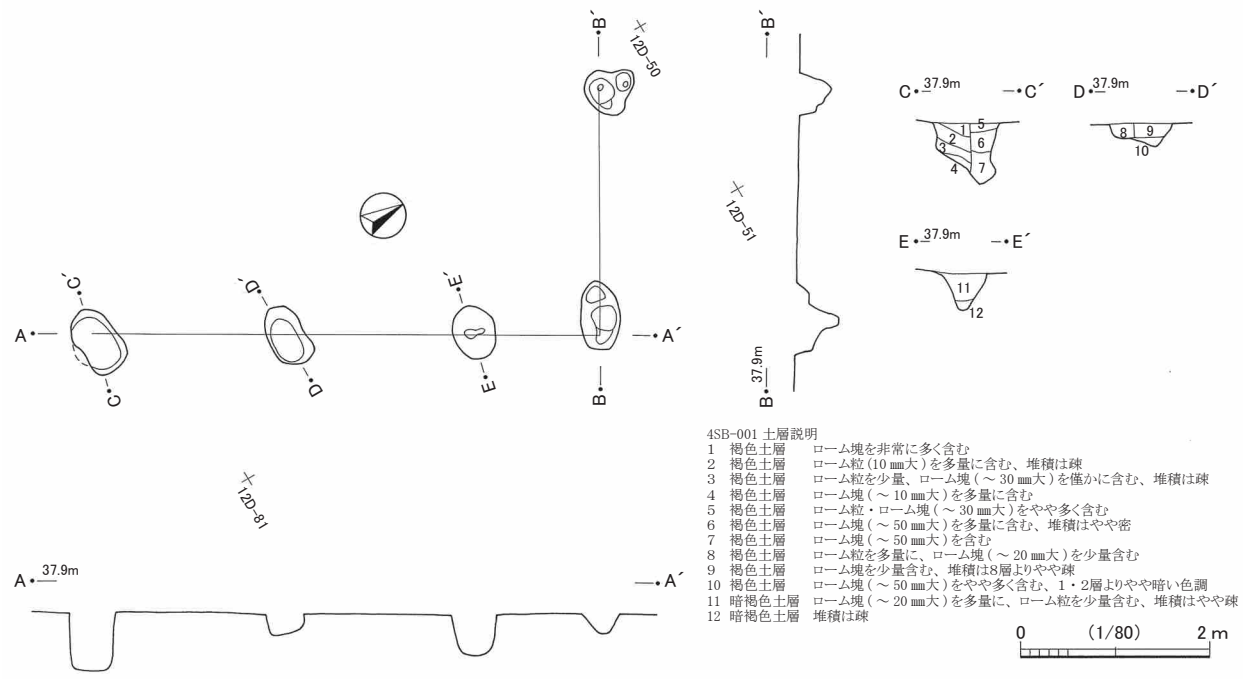
4SB-001（第 301 図、図版 21）

12C-89、12D-50・51・60・61・70・80 グリッドに所在する掘立柱建物跡である。5 基のピットが L 字状に並んで検出されたもので、周辺にはほかにピットは検出されなかったが、桁行 3 間（5.4 m）以上、梁行 1 間（2.6 m）以上の建物跡と考えられる。柱穴の平面形は、いずれも長径 60㎝前後の歪な楕円形状を呈し、検出面からの深さは 21㎝～ 61㎝である。

遺物は、図示していないがカワラケの小破片が少量出土した。



第 300 図　SB-008



第 301 図　4SB-001

SA-002（第 298・299 図、図版 22）

8C・8D・9C グリッド、堀 SD-027 の南に直交方向に延びている柱穴列で、複数条の柵列と考えられる。いずれも掘立柱建物跡群の西側に位置し、間隔が不揃いな部分もあるが、掘立柱建物跡に隣接するもの 1 条（第 298 図 P-P’）と、標高差約 70㎝の台地整形の段差部分に、段差面に対して平行方向に延びるもの 3 条（第 298 図 M-M’・N-N’・O-O’）の計 4 条が想定できた。掘立柱建物跡に隣接する 1 条のピットは、地下式坑 SK-116 の天井部上で一部重複している。掘立柱建物を区画等する構築物の可能性が考えられる。なお、段差部分には土坑 SK-115a・115b もあり、関連する可能性もある。

遺物は出土していない。

2SA-001（第 302 図、図版 22）

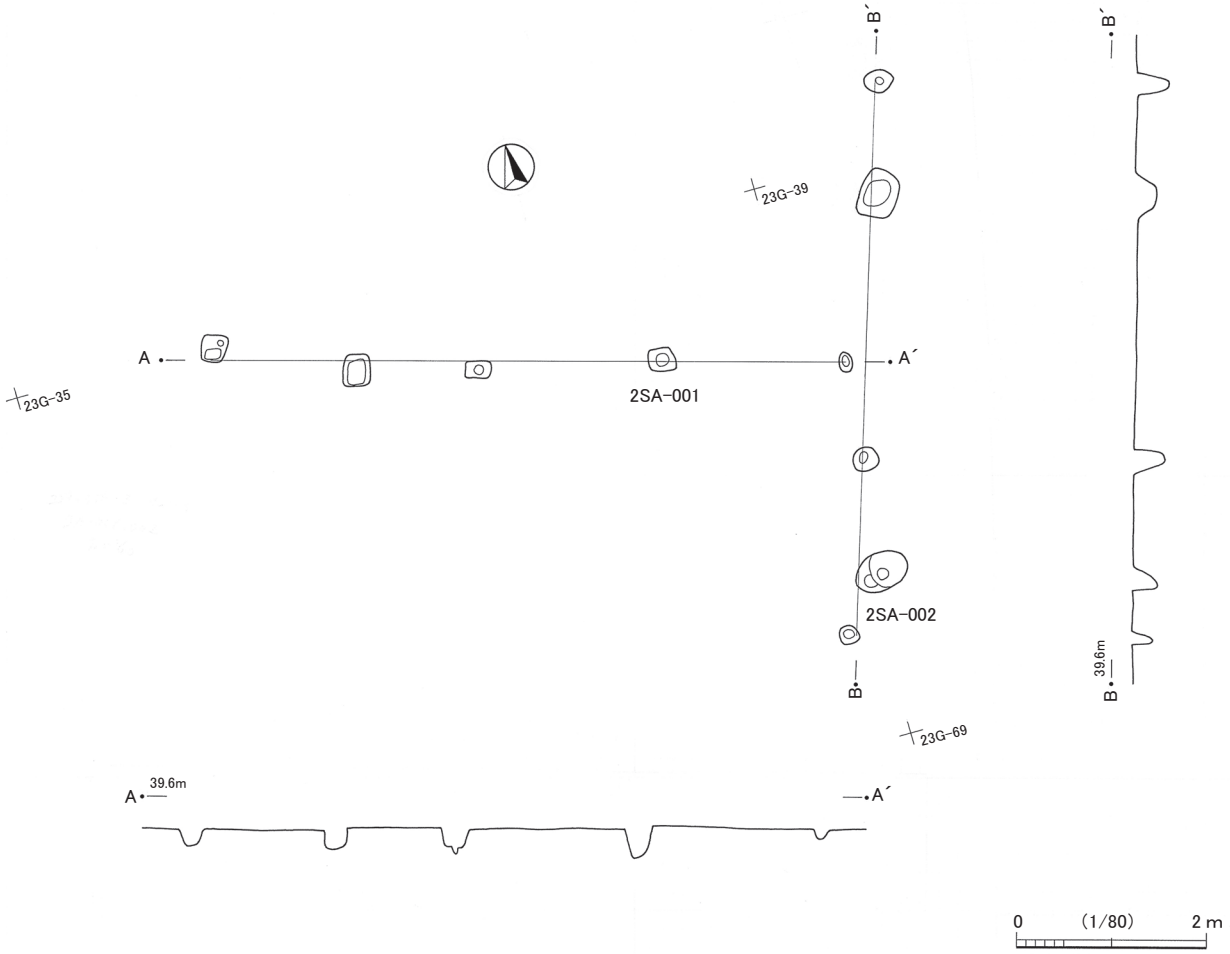
23G-36 ～ 39 グリッドに所在する。ピットが群在する中、長軸 30㎝前後のやや方形を呈する柱穴が 5 基、東西方向に一直線に並ぶことから、柵列と判断したものである。柱穴の検出面からの深さは 11㎝～ 34㎝である。遺構の東側に位置する柵列 2SA-002 や西側に位置する SD-026 とは直交方向に、南側に位置する溝状遺構 SD-012 とは平行方向に延びており、それらと関連する可能性も考えられる。

遺物は出土していない。

2SA-002（第 302 図、図版 22）

23G-29・39・49・58・59 グリッドに所在する。ピットが群在する中、長軸 25㎝～ 50㎝程度の円形からやや方形を呈する柱穴が南北方向に一直線に並ぶことから、柵列と判断したものである。柱穴の検出面からの深さは 21㎝～ 35㎝である。遺構のすぐ西側に位置する 2SA-001 や南側に位置する SD-012 とは直交方向に、西側 15m ほど離れたところに位置する SD-026 とは平行方向に延びており、それらと関連する可能性も考えられる。

遺物は出土していない。



第 302 図　2SA-001・2SA-002

第８節　ピット群

１　概要

調査区内では、柱穴等と考えられるピットが多数検出された。それらは集中する地点はあるものの、構造物として明確に捉えることは難しい状況であった。そこで、掘立柱建物跡や柵列、或いは方形竪穴や溝状遺構等に伴うものとして調査段階で把握できたピットについてはそれぞれの節で扱い、本節ではそれ以外をピット群としてまとめて扱うこととした。

２　遺構と遺物（第 303 ～ 309 図、図版 8・20・94・101・112・118・123）

第303図～第308図は、調査区内で検出されたピットの全てを網羅したものである。調査時に「ピット群」として記録された地点もあり、また、それぞれ番号が付されたものと付されなかったものとがある。

ピットは、中・近世遺構の周辺に集中する傾向があり、特に掘立柱建物跡や柵列の周辺及び方形竪穴や地下式坑などが多い地点の近くに密集する傾向がみられる。遺物が出土したピットは多くはないが、出土したものはほとんど中･近世の遺物である。このような状況から、調査時には把握できなかったものの、中･近世の建物やそれに伴う構造物、柵列などの痕跡と推測することができよう。

検出された各ピットの遺構番号は、調査年次によって付し方が異なっている。記録された全てのピットに遺構番号があるわけではなく、付してあるものも、検出した全てのピットに付してある場合や、遺物の出土したもののみの場合等があり、更に番号の付し方も、前年度からの連番の場合や新たに 001 から振り直している場合がある。また、遺構種別記号は、基本的には「SH」を使用しているが、平成 27 年度調査次は「SP」を使用している。報告に当たっては、平面図は任意のエリアで区切り、全測図的に掲載することとした。そして遺構番号は、原則として遺物が出土したピットのみ付して、平面図と遺構一覧表（第１表）に記載し、ほかは割愛することとした。

なお、調査年次ごとのピットの取扱いについては、以下のとおりである。

平成 19 年度調査：「ピット群」として調査を行ったが、調査段階で各ピットには番号を付していないため、報告にあたっても付していない。

平成 20 年度調査：多数のピットが検出され、調査段階で SH-001 ～ SH-047 を付したピットがある。そのうち SH-002 ～ 004 は報告時に土坑として扱うこととし、第５節に掲載した。それら以外は、遺物が出土したピットと掘立柱建物跡を構成するピット（SH-035 ～ 046）のみ、遺構番号をそのまま掲載した。なお、掘立柱建物跡を構成するピットは、掘立柱建物跡 SB-001 として第７節に掲載した。

平成 21 年度 -1 調査：多数のピットが検出され、平成 20 年度調査からの連番を付して調査を行ったが、遺物が出土したのは２基のみ（SH-050・051）であり、これらのみ遺構番号をそのまま掲載した。

平成 21 年度 -2 調査：「ピット群」として、平成 21 年度 -1 調査からの連番を付して調査を行った。それらのうち、遺物が出土したピットと掘立柱建物跡を構成するピット（SH-071 ～ 076）のみ、遺構番号をそのまま掲載した。なお、掘立柱建物跡を構成するピットは、掘立柱建物跡 SB-008 として第７節に掲載した。

平成 21 年度 -3 調査：「ピット群」として検出された各ピットに 001 から番号を付して調査を行ったが、遺物が出土したのは２基のみ（SH-001・002）であり、これらのみ遺構番号を振り替えて掲載した。振

替えは、ほかの当該年次調査遺構と同様に、遺構種別記号の前に「２」を付けた番号とした。

平成 22 年度調査：多数のピットが検出されたが、遺物が出土したピットのみ 001 から番号を付して調査を行ったため、全て遺構番号を振り替えて掲載することとした。振替えは、ほかの当該年次調査遺構と同様に、遺構種別記号の前に「４」を付けた番号とした。なお、SH-012 は報告時に土坑として扱うこととし、第５節に掲載した。

平成 23 年度調査：ピットは検出されていない。

平成 24 年度調査：多数のピットが検出されたが、遺物が出土したものや特殊なもののみ平成 22 年度からの連番を付して調査を行った。報告にあたっては、遺物が出土した２基のみ（SH-021・022）、遺構番号を振り替えて掲載することとした。振替えは、ほかの当該年次調査遺構と同様に、遺構種別記号の前に「６」を付けた番号とした。

平成 27 年度調査：多数のピットが検出され、各ピットに 001 から番号を付して調査を行ったが、遺物が出土したのは３基のみ（7SP-009・013・016）であり、これらのみ遺構番号をそのまま掲載した。

遺物が出土したピットは多くはない。ピット群から出土した遺物のうち、15 点を第 309 図に図示した。出土したピットは、それぞれ挿図番号の横に明記した。

第 309 図１～４は瀬戸・美濃製品である。１は折縁深皿である。内外面に灰釉が施される。古瀬戸後期様式Ⅲ期に位置づけられるものと考えられる。２・３は直縁大皿である。２は内外面に灰釉が施される。古瀬戸後期様式Ⅳ期古段階に位置づけられるものと考えられる。３も内外面に灰釉が施されるが、内面の下端部は露胎となっている。外面の下端部も僅かに露胎となっている。古瀬戸後期様式Ⅱ期に位置づけられる可能性がある。４は瓶子で、Ⅱ類に分類されるものである。外面にはオリーブ黄色の灰釉が少しみられる。露胎部の色調は灰色である。古瀬戸後期様式に位置づけられるものと考えられる。

５は常滑大甕である。頸部下から肩部にかけての破片で、外面には自然釉がみられる。

６・７はカワラケ杯、８～11 はカワラケ小皿である。８は完形で、20E-28・29 グリッドに所在する SH-034 から出土したものである。色調は内外面とも暗褐色を呈している。９は全体の 60％程度の遺存度で、21F-05・06 グリッドに所在する SH-007 から出土したものである。遺存部分の口唇部３か所に煤が付着している。10・11 は同じ遺構から出土したもので、どちらも遺存度は全体の 20％程度である。胎土や色調はよく似ているが、別個体と考える。

12 は砥石である。上端部は欠損している。13 も砥石の欠損品とみられる。表面と裏面に擦痕が認められる。

14 は鉄釘で、錆膨れが著しいが完形とみられる。

15 は銭貨で、元祐通寶である。書体は篆書である。遺存状態が悪く、腐食し破損している。背文はないとみられる。

そのほか、SH-014 からアカニシの貝殻が１点出土した。

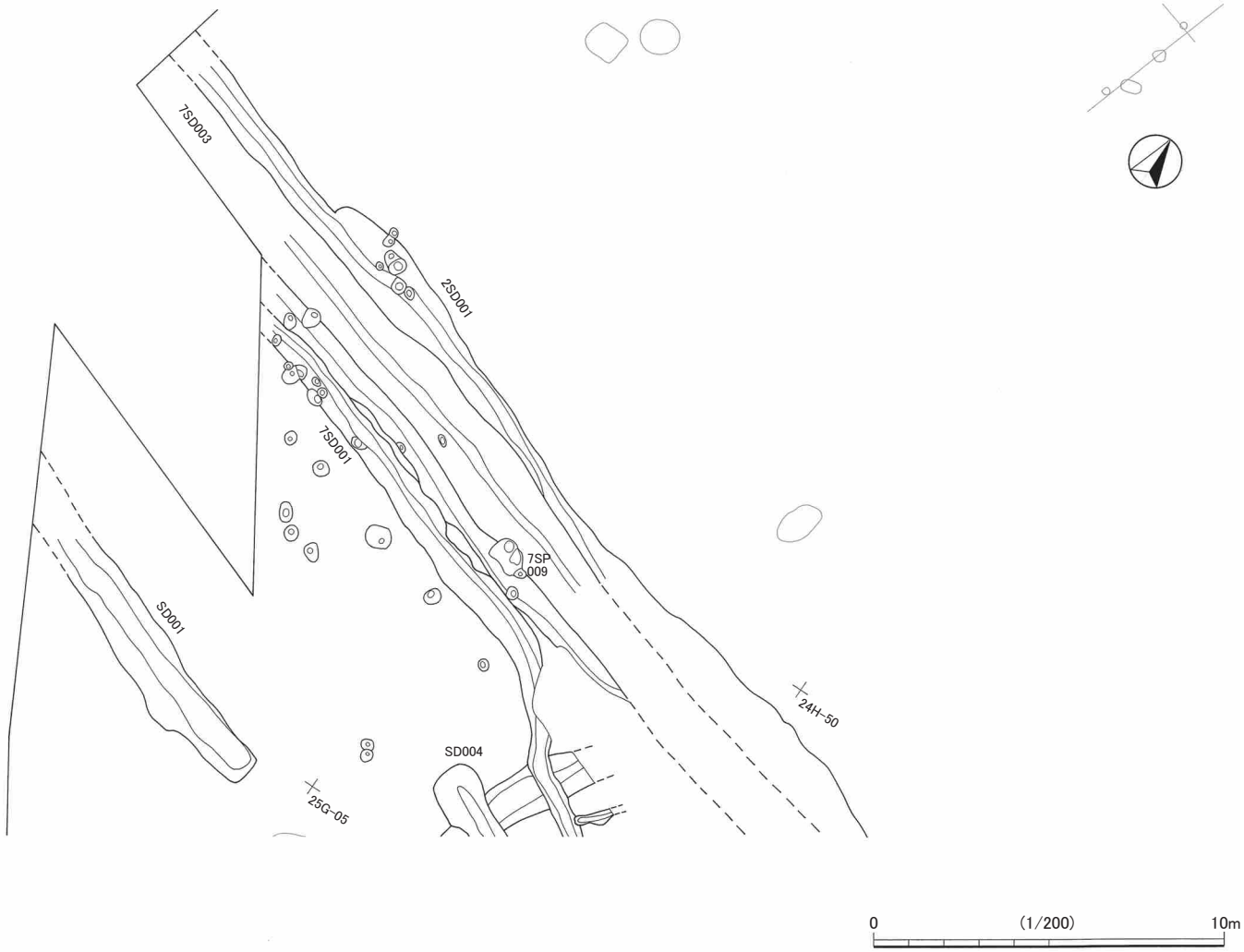
第 303 図　ピット群平面図（1）

第 304 図　ピット群平面図（2）

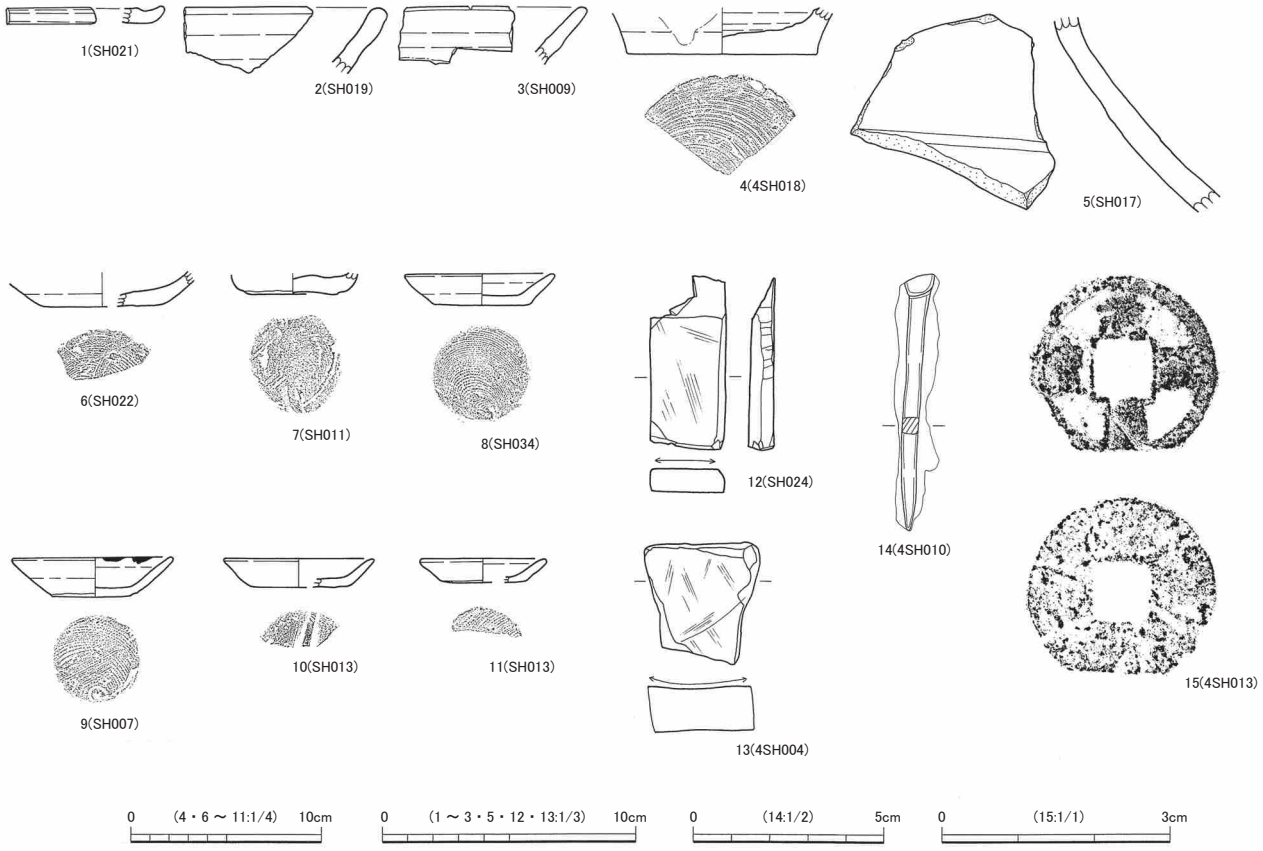
第 305 図　ピット群平面図（3）

第 306 図　ピット群平面図（4）

第 307 図　ピット群平面図（5）



第 308 図　ピット群平面図（6）



第 309 図　ピット内出土遺物

第９節　溝状遺構

１　概要

溝状遺構は、長大なもの、土坑状のもの、深いもの、浅いもの、硬化面をもつもの等様々あるが、軸方向はいずれもほぼ揃っており、概ねＮ－20°－Ｅとなる南北方向のものと、直交方向の東西方向に延びるものとがある。分布は調査区全体に及んでおり、現道と近い方向・位置に存在するものも多い。現代にも繋がる道路や区画溝として機能していたものが多いとみられる。

なお、長大な溝状遺構については、年次をまたいで調査が行われたものがある。調査時に別の遺構番号を付して調査を行った後、同じ遺構であることが判明することもあり、報告にあたっては先に調査したほうの遺構番号に統合することとした。

２　遺構と遺物

SD-001（第 10・310 図・図版 25・101）

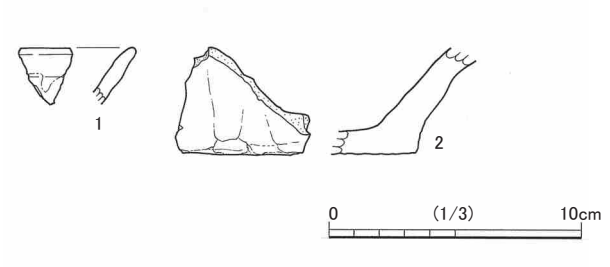
24G・25G グリッドに所在する、東西方向に直線的に延びる溝状遺構で、西端は調査区外へ続くとみられる。検出された長さは 8.5 ｍで、幅は 120㎝前後である。断面形はＵ字形で、検出面からの深さは 50㎝前後である。覆土は、下層にローム粒を含む暗褐色土が堆積し、上層に黒褐色土が堆積していた。

図示した遺物は２点である。第 310 図１は瀬戸・美濃縁釉小皿である。灰釉が施されている。古瀬戸後期様式に位置づけられるものと考えられる。２は常滑片口鉢である。時期は 15 世紀代と考えられる。

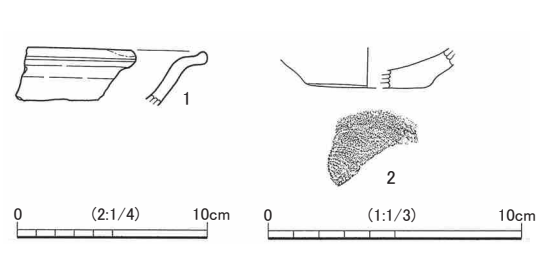
SD-002（第 10・312 図、図版 25・28・101）

24G・24H・25G グリッドに所在する溝状遺構である。平成 19 年度に南北方向に延びる溝状遺構として調査を行ったが、北側に続く部分が平成 27 年度に検出された結果、北東方向に屈曲して延び、東西方向の溝状遺構 7SD-003 に合流することが明らかとなった。なお、平成 27 年度には「7SD-007」として調査を行ったが、報告にあたり統合して欠番とした。屈曲部分付近で SD-004 と交差し、その北側で 7SD-008 と交差する。南端は、SD-003 が沿うように重複しながら調査区外へと続く。検出された長さは約 31 ｍで、幅は広い部分で 300㎝ほどある。断面形はＶ字状であるが、底面は幅 35㎝前後平坦になっており、検出面からの深さは 125㎝前後ある。一部壁面には、ピットがみられる。覆土は全体にしまりのない土で、下層にローム塊を少量含む黒褐色土が堆積し、上層にはローム塊やローム粒の量で３層に分層できる暗褐色土が堆積していた。新旧関係は、合流する 7SD-003 とは当遺構のほうが新しい。また、交差する SD-004･008 とは、いずれよりも当遺構のほうが古い。また、南端で重複する SD-003 とも当遺構の方が古い。

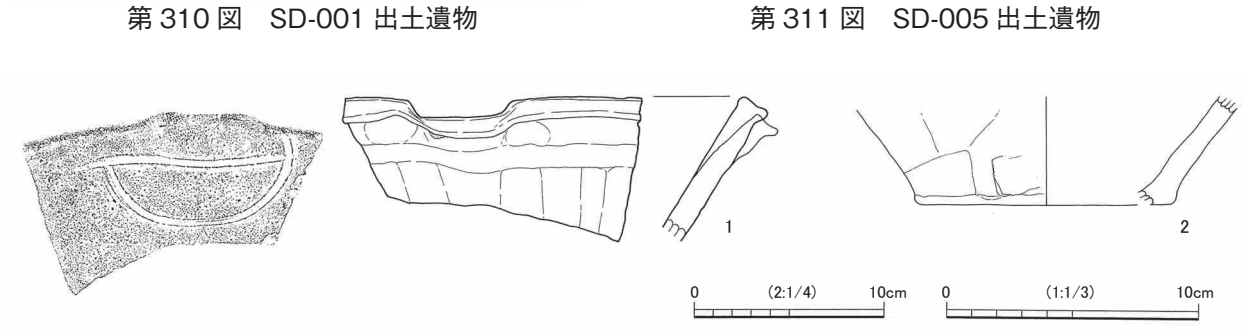
図示した遺物は２点である。第 312 図１・２はともに常滑片口鉢である。１は平成 27 年度調査で出土したもので、片口部分内面にヘラ描きがある。色調は内外面とも灰褐色を呈する。破片の破断面全てに、漆接ぎの痕跡が残る。10 型式に比定されるものと考えられる。２は平成 19 年度調査で出土したものである。色調は内面が灰白色、外面は白褐色を呈している。そのほか、平成 27 年度調査で、覆土上面からウマとみられる獣骨・歯が出土した。



第 310 図　SD-001 出土遺物

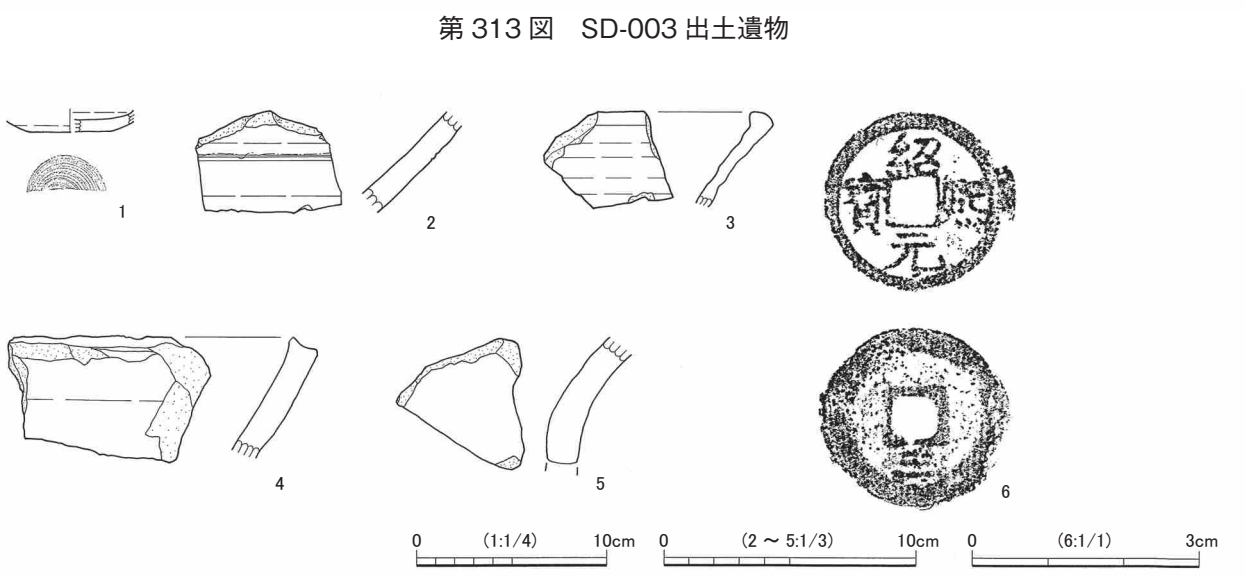


第 311 図　SD-005 出土遺物

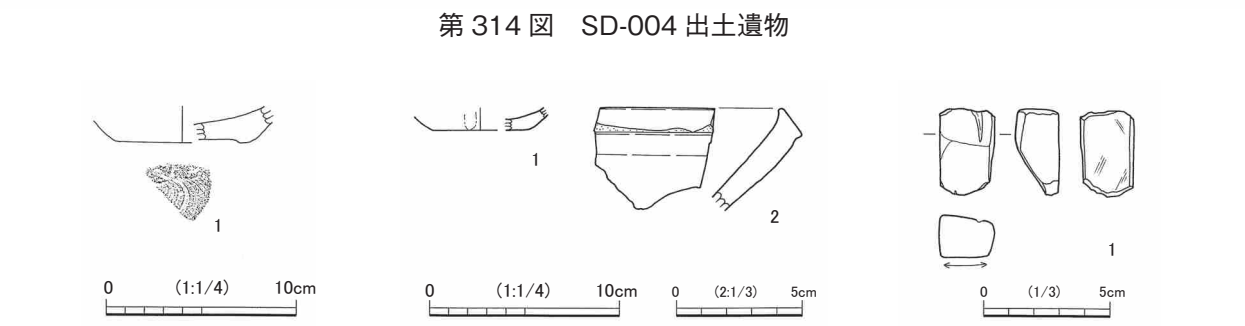


第 312 図　SD-002 出土遺物

第 313 図　SD-003 出土遺物



第 314 図　SD-004 出土遺物



第 315 図　SD-012 出土遺物　　第 316 図　SD-013 出土遺物　　第 317 図　SD-018 出土遺物

SD-003（第 10・313 図、巻頭図版 7、図版 25・101）

25G グリッドで、SD-002 に沿うように重複して検出された、南北方向に延びる溝状遺構である。南端は調査区外へ続き、北端は弥生時代の竪穴住居跡と重複し明らかでないが、SD-002 と合流している可能性もある。検出された長さは約３m、幅は約 170㎝とみられる。断面形はＶ字状であるが、底面は 30㎝前後の平坦部分があり、検出面からの深さは 111㎝前後である。土層断面の観察から、SD-002 より新しいと判断される。覆土は、ローム粒の量で分層できる暗褐色土層が４層堆積していた。

図示した遺物は３点である。第313図１は龍泉窯系青磁の鎬蓮弁文碗である。2・3は常滑片口鉢である。２は口唇部が少し破損しているが、９型式に比定されるものと考えられる。３も恐らく 15 世紀代の所産であろう。遺物はそのほかにも、中・近世以降陶磁器が出土した。

SD-004（第 10・314 図、図版 28・101・109・123）

24G・25G・25H・25I グリッドに所在する溝状遺構である。平成 19 年度に、東西方向に延びる溝状遺構の一端を調査後、平成 27 年度に続きの部分を検出し調査した。平成 27 年度は「7SD-004」として調査を行ったが、報告にあたり統合して欠番とした。ほぼ同軸方向で並走する 7SD-005 と合流するが、新旧関係は土層断面の観察から当遺構のほうが新しい。検出された長さは約 40 mで、幅は平均的な部分で 130㎝ほどである。断面形はＶ字状であるが、底面は幅 30㎝前後平坦になっている。検出面からの深さは 80㎝前後ある。覆土はローム粒・ロームブロック・褐色土粒の含有量で分層可能な黒褐色土層が複数堆積していた。調査所見では、小石等も含む覆土が新しい様相であることから、中世の遺物が出土してはいるものの、近世の所産である可能性が高いとしている。なお、溝状遺構 SD-002、7SD-006 とほぼ直交方向で交わるが、新旧関係はいずれよりも当遺構のほうが新しい。

図示した遺物は６点である。第 314 図１～３は瀬戸・美濃製品である。１は縁釉小皿で、オリーブ灰色の灰釉が内外面に点状にみられる。露胎部分は暗灰褐色を呈している。２は盤類で、白色を呈する灰釉が外面の上部と内面全体的にみられるが、内面はハケ塗りされている。折縁深皿又は直縁大皿とみられる。古瀬戸後期様式Ⅲ期に位置づけられるものと考えられる。３は擂鉢である。内外面に錆釉が施されている。古瀬戸後期様式Ⅳ期新段階に位置づけられるものと考えられる。４は常滑片口鉢である。10 型式に比定されるものと考えられる。後代の傷が多くみられる破片である。５は常滑甕頸部の転用砥石で、外面には自然釉がかかっている。破断面が使用されている。６は銭貨で紹熙元寶である。背文には「三」が認められる。ほかには、遺構の西端部の覆土中から獣骨が、東部でアカニシの貝殻が２点出土している。

SD-005（第 11・311 図、図版 25・101）

29K・30K・31J グリッドに所在する、南北方向に直線的に延びる溝状遺構で、平成 19 年度に検出された後、続きとみられる部分が平成 20 年度に検出された。北端と南端は調査区外へ続く。検出された長さは約 60m、幅は 150㎝前後である。断面形はＶ字状だが、底面は幅 30㎝前後の平坦面で、検出面から底面までの深さは 92㎝ほどである。覆土は、ローム塊やローム粒を含む暗褐色土層が何層にも水平堆積しており、覆土上層部分の上面が硬化していたことから、少なくとも新しい時期には道路として機能していたものと考えられる。遺構の東側には SD-015 が並走し、SD-007 ～ 009 と直交する。新旧関係ははっきりしないが、同時に機能した可能性も考えられる。

図示した遺物は２点である。第 311 図１は瀬戸･美濃折縁中皿である。内外面全体的に灰釉が施される。釉の色調は灰白色である。古瀬戸後期様式Ⅲ期に位置づけられるものと考えられる。２はカワラケ杯である。器面は摩耗している。

SD-006（第 11 図）

31J グリッドに所在する、北東～南西方向に延びる溝状遺構である。検出された長さは約３ｍである。

南西隅で SD-005 と並走または重複するとみられるが、弥生時代の竪穴住居跡と重複しており、明らかでない。幅は、検出された部分では北東部ほど広がっており、最も広いところで 100㎝ほどとなる。検出面らの深さは 10㎝前後である。

遺物は出土していない。

SD-007（第 11 図、図版 25）

30J・30K グリッドに所在する、東西方向に直線的に延びる溝状遺構である。検出された長さは約 23ｍで、東端は君津郡市によって調査・報告された「12 号溝」へ続き、西端は調査区外へ続くとみられる。SD-005 と直交する。幅は西側ほど広く、平均的な部分で 140㎝前後であるが、西側は 200㎝ほどある。断面形は緩い U 字形である。検出面からの深さも西側ほど深く、平均的な部分で 25㎝前後であるが、西側では 45㎝前後となる。覆土は、ローム塊やローム粒の量で２～３層に分層できるややしまりのない暗褐色土層が堆積していた。

遺物は出土していない。

SD-008（第 11 図、図版 25）

30J・31K グリッドに所在する、南北方向から東西方向に屈曲して延びる溝状遺構である。検出された長さは 13.5 ｍで、東へ延びる東端は君津郡市によって調査・報告された「14 号溝」へ続くとみられる。SD-005 と直交し、西側で北方向に折れるが、SD-007 とは合流せずに止まる。幅は、平均的な部分で 60㎝ほどである。断面形は U 字形で、検出面からの深さは 10㎝～ 20㎝である。覆土はいずれもローム粒を含む土層で、下層に黒褐色土、上層に暗褐色土が堆積していた。

遺物は、混入品とみられる土器の小破片が少量出土したのみである。

SD-009（第 11 図）

30K グリッドに所在する、東西方向に直線的に延びる溝状遺構である。検出された長さは 1.2 ｍで、東端は君津郡市によって調査･報告された｢13 号溝｣へ続き､西端は直交する SD-005 に合流する。幅は 60㎝、検出面からの深さは 20㎝前後である。

遺物は出土していない。

SD-010（第 11 図）

32J グリッドに所在する、北東～南西方向に延びる溝状遺構である。検出された長さは 2.5 ｍで、東端は君津郡市によって調査・報告された「15 号溝」へ続き、西端は調査区外へ続くとみられる。幅は 100

㎝前後、検出面からの深さは 20㎝前後である。

遺物は出土していない。

SD-011（第 9・10 図、図版 28）

23F グリッドに所在する、北西～南東方向に直線的に延びる溝状遺構で、南東端は溝状遺構 SD-026 と合流し、北西端は調査区外へ続く。SD-026 との新旧関係は明らかでない。検出された長さは 8.4 m、幅は 60㎝前後である。底面はやや平坦で、検出面から底面までの深さは 10㎝ほどである。覆土は暗褐色土の単一層であった。

遺物は、近世以降陶磁器が少量出土したのみである。

SD-012（第 9・10・315 図、図版 25・101）

23F・23G・23H グリッドに所在する、東西方向に直線的に延びる溝状遺構で、溝状遺構 SD-026 と直交し、東端と西端は調査区外へ続く。SD-026 との新旧関係は明らかでない。検出された長さは約 38 mで、幅は西側の広い部分で 115㎝ほどである。断面形はＶ字状だが、底面は幅 25㎝前後の平坦面となっている。検出面から底面までの深さは 60㎝ほどである。覆土は、下層にローム粒を多量に含む暗黄褐色土が少し堆積していたが、ローム粒を含む暗褐色土のほぼ単一層と言える状況で、一気に埋め戻されたものとみられる。

図示した遺物は 1 点である。第 315 図 1 は在地産カワラケ杯である。器面は摩耗している。

SD-013（第 9 ・316 図、図版 101）

20F・21F グリッドに所在する。掘込みはほとんどなく、全面的に硬化しており、道路として機能していたものと考えられる。土坑 SK-018・021・033 及び方形竪穴 SK-074 の上部に重複して検出された。検出された長さは約 9 m、幅は最も広いところで 108㎝、掘込みの深さは深いところで 5 ㎝前後である。覆土はローム粒を多量に含む暗褐色土層の単一層であった。

図示した遺物は 2 点である。第 316 図 1 は瀬戸・美濃縁釉小皿である。外面に鉄釉が一部みられる。古瀬戸後期様式Ⅳ期頃に位置づけられるものであろうか。 2 は常滑片口鉢である。 9 型式に比定されるものと考えられる。

SD-014（第 9 図、図版 25）

21F グリッドに所在する。平面形は弧状を呈し、方形竪穴 SI-020 の北側に隣接するように位置する溝状遺構である。幅は広いところで 105㎝ほどである。断面形は基本的に平坦で、中央部分が更に平坦に一段下がる。検出面からの深さは、中段部分が 17㎝、中央部分が 27㎝である。覆土は、ローム粒を含むやや粘質な褐色土層であった。

遺物は、礫が少量出土したのみである。

SD-015（第 11 図、図版 25）

29K・30K グリッドに所在する、南北方向に直線的に延びる溝状遺構で、溝状遺構 SD-005 に並走する

ように位置している。検出された長さは 7.7 mで、南端は未調査区内となる。幅は 130㎝ほどである。断面形は箱形を呈し、底面は平坦である。検出面から底面までの深さは 20㎝前後で、覆土はローム塊やローム粒を含む、ややしまりのない暗褐色土であった。

遺物は、近世以降陶磁器が少量出土したのみである。

SD-016（第９図）

21E グリッドに所在する、南北方向に延びる溝状遺構で、SD-013･017 と並走するように位置している。検出された長さは約５mで、幅は 70㎝前後である。断面形は緩い U 字状で、検出面からの深さは 22㎝である。覆土は下層に暗褐色土を含む暗黄褐色土層、上層にローム粒を含む暗褐色土層が堆積していた。

遺物は出土していない。

SD-017（第９図）

21E グリッドに所在する、南北方向に延びる溝状遺構で、SD-013･016 と並走するように位置している。検出された長さは約４で、幅は 70㎝前後である。断面形は緩い U 字状で、検出面からの深さは 25㎝である。覆土は、ローム粒をやや多く含む暗褐色土層であった。

遺物は出土していない。

SD-018（第９・317 図、図版 112）

21F・21G グリッドに所在する、南北方向に延びる溝状遺構である。北端は土坑 SK-076 ～ 081 と重複する。また、SD-021 とほぼ直交している。検出された長さは約８m、幅は 480㎝ほどである。東側が段状に高いが、底面はほぼ平坦で、検出面からの深さは 10㎝程度である。

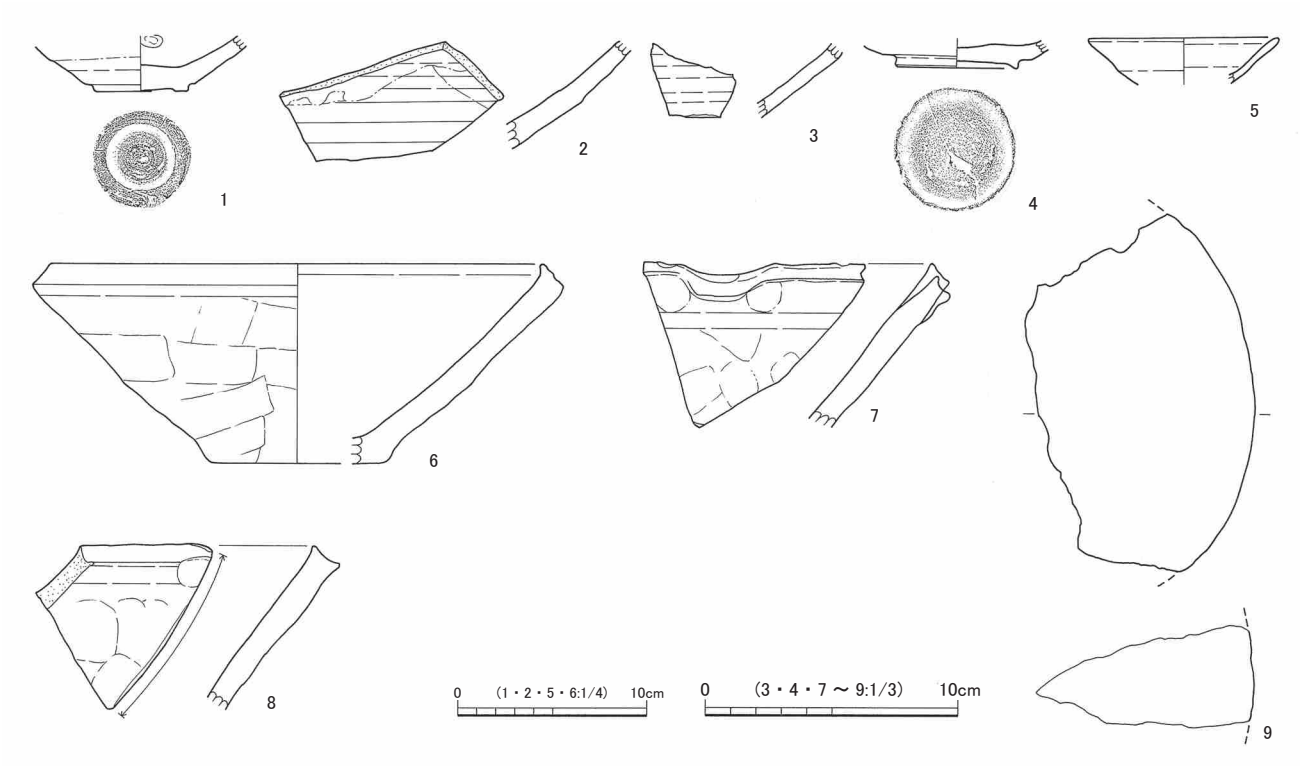
図示した遺物は１点である。第 317 図１は砥石である。上下端は欠損している。

SD-019（第９・318 図、図版 26・102・114）

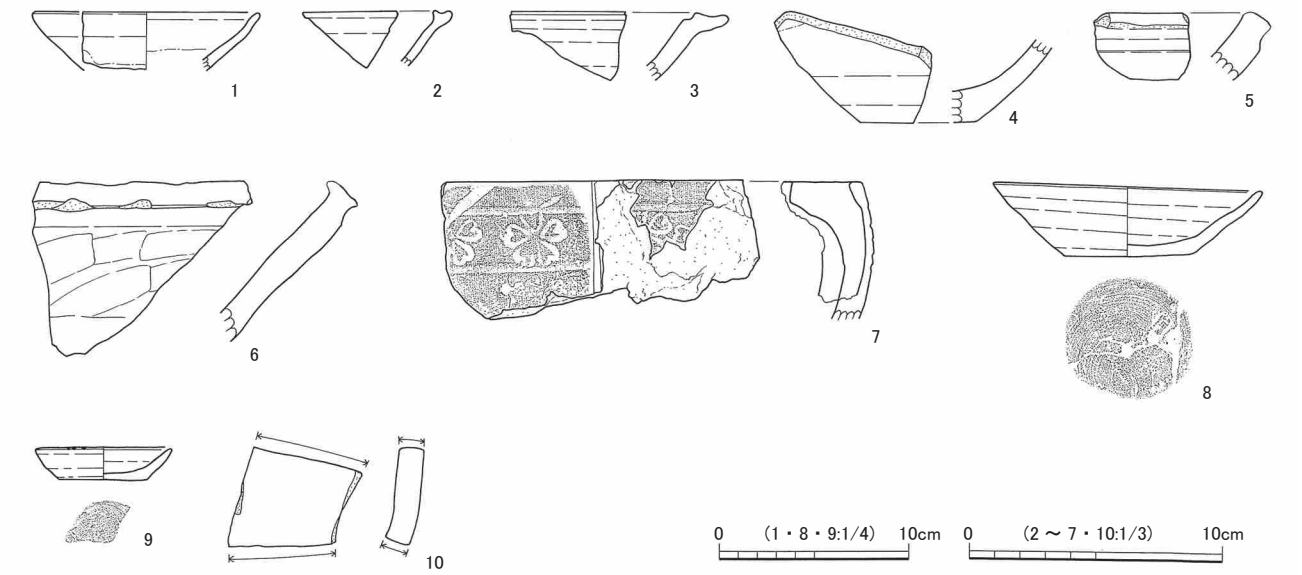
19E・20E・20F グリッドに所在する、東西方向に延びる溝状遺構で、SD-020 と並走するように位置している。東端は調査区外へ続く。検出された長さは約 19 m、幅は約 200㎝である。断面形は緩いＵ字状で、検出面からの深さは 50㎝である。覆土は、ローム粒の量で分層できる暗褐色土層が上下層に堆積していた。

図示した遺物は９点である。第 318 図１～３は瀬戸・美濃製品である。１は平碗である。外面の上端部と内面全体に灰釉が施され、内面には重ね焼き痕が２か所残る。削り出し高台をもつ。古瀬戸後期様式Ⅲ期頃に位置づけられるものと考えられる。２は盤類で、折縁深皿か直縁大皿とみられる。外面上部及び内面は下部を中心に全体的に灰釉がみられる。内面下部の釉はハケ塗りで施釉されている。露胎部分の色調は淡褐色を呈している。古瀬戸後期様式に位置づけられるものと考えられる。３も盤類で、折縁深皿か直縁大皿とみられる。内外面全体にオリーブ灰色の灰釉が施される。古瀬戸後期様式に位置づけられるものと考えられる。

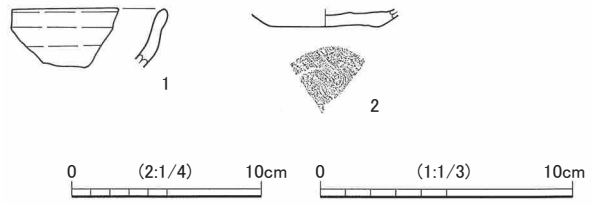
４は在地産土師質土器とみられるが、焼成が非常に良く、陶器のように硬質である。底部は回転糸切り後、高台が貼り付けられている。美濃皿を模倣したものかもしれないが、古代に遡る可能性もあるかもしれない。



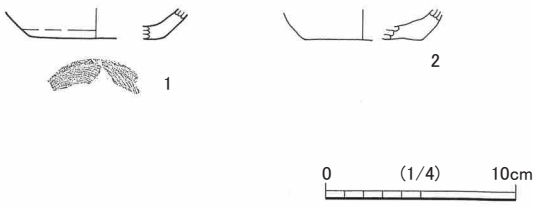
第 318 図　SD-019 出土遺物



第 319 図　SD-020 出土遺物



第 320 図　SD-021 出土遺物



第 321 図　SD-026 出土遺物

５は在地産カワラケ小皿である。

６～８は常滑片口鉢である。６は全体の 20％程度の破片である。口唇部は上方に張り出している。９型式に比定されるものと考えられる。７は片口部分が遺存する破片である。外面には重ね焼き痕が認められる。８～９型式に比定されるものと考えられる。８は、口縁部の外面右端に指頭圧痕が認められ、右側に片口部分が続いていたことが推定される。図の右破断面が平滑になっており、転用砥石として使用されたようである。10 型式に比定されるものであろうか。

９は円柱状又は球状の石製品断片で、五輪塔の空風輪か水輪の破片と考えられる。復元径は 18.8㎝である。

SD-020（第９・319 図、図版 26・94・102・109）

20E・20F グリッドに所在する。西側で若干蛇行するが、概ね東西方向に延びる溝状遺構で、SD-019 と並走するように位置している。方形竪穴 SI-033 や竪穴状遺構 SK-069、土坑 SK-072 と重複する。検出された長さは約 31 m、幅は平均的な部分で 200㎝ほどである。断面形は緩い U 字状で、検出面からの深さは 52㎝である。覆土は、ローム粒の量で分層できる暗褐色土層が上下層に堆積していた。

図示した遺物は 10 点である。第 319 図１～４は瀬戸・美濃製品である。１は浅碗である。口縁部内外面に鉄釉が施されている。下部は露胎で、露胎部分の色調は灰色である。古瀬戸後期様式Ⅲ期に位置づけられるものと考えられる。２は卸皿である。内外面に灰釉が施されている。古瀬戸後期様式Ⅱ～Ⅲ期頃に位置づけられるものであろうか。３は折縁深皿である。内外面に灰釉がハケ塗りで施されている。釉の色調は白色を呈している。瀬戸後期様式Ⅲ期に位置づけられるものと考えられる。４は盤類で、折縁深皿か直縁大皿と考えられる。内外面のそれぞれ上端部にのみ、僅かに灰釉がみられる。古瀬戸後期様式に位置づけられるものと考えられる。

５・６は常滑片口鉢である。５の口唇部は特に摩滅している。８型式に比定されるものであろうか。６も口唇部が摩滅しているが、上方に突起が出ているのが確認できる。９～ 10 型式に比定されるものと考えられる。

７は瓦質火鉢である。外面に花形押印文が巡る。胎土には赤色スコリアや砂粒を多く含む。外面は丁寧にミガキが施され、色調は黒褐色を呈する。８はカワラケ杯である。全体の 70％程度の遺存度である。９はカワラケ小皿で、全体の 30％程度の遺存度である。口唇部に１か所、煤が付着している。

10 は、常滑甕の破片を転用した転用砥石である。破断面及び外面が使用されている。

出土遺物としては、ほかにアカニシの貝殻１点、ウシの歯１点がある。

SD-021（第９・320 図、図版 26・102）

21F グリッドに所在する、ややカーブを描きながら東西方向に延びる溝状遺構である。検出された長さは約７ｍで、幅は 50㎝前後、検出面からの深さは 10㎝前後である。東端は溝状遺構 SD-018 と合流する。

図示した遺物は２点である。第 320 図１は瀬戸・美濃の端反碗である。内外面に灰釉が施されている。古瀬戸後期様式Ⅱ～Ⅲ期頃に位置づけられるものと考えられる。２はカワラケ杯である。底部の 25％程度の遺存度である。遺物としてはこのほか、アカニシの貝殻が１点出土した。

SD-022（第９・322 図、図版 94・103）

19E・20E グリッドに所在する、南北方向に延びる溝状遺構である。検出された長さは約 7.5 ｍで、幅は 80㎝前後、検出面からの深さは 10㎝前後である。覆土はローム粒を含む暗褐色土層であった。同位置で同方向に延びる幅 200㎝ほどの溝状遺構と重複しているようで、土層断面の観察から、これを掘り直して構築されたものとみることができる。

図示した遺物は３点である。第 322 図１は常滑片口鉢である。破片の外面下部は平滑になっており、転用されたとみられる。10 型式に比定されるものと考えられる。２・３はカワラケ杯である。２は全体の 20％程度、３は 30％程度の遺存度で、いずれも器面が摩耗している。

SD-023（第９図、図版 26）

19E グリッドに所在する、南北方向に延びる溝状遺構で、北端は本調査区外へ、南端は調査区外へ続くとみられる。検出された長さは約４ｍで、幅は 120㎝ほどである。断面形は V 字形で、底面は幅 25㎝ほど平坦面となっている。検出面から底面までの深さは 40㎝ほどである。

遺物は、混入品とみられる土器の小破片が少量出土したのみである。

SD-024（第９図、図版 26）

20E グリッドに所在する、南北方向に延びる溝状遺構である。同方向に並走する２本の溝が結合しているようで、検出された長さは約７ｍ、幅は 140㎝前後、検出面からの深さは 10㎝前後である。

遺物は出土していない。

SD-025（第９図、図版 26）

19E グリッドに所在する、東西方向に延びる溝状遺構である。東端は溝状遺構 SD-022 に接し、西端は調査区外へ続くとみられる。検出された長さは 3.3 ｍ、平均的な幅は 80㎝である。断面形は箱形を呈し、底面は平坦である。検出面から底面までの深さは 40㎝ほどである。

遺物は出土していない。

SD-026（第 10・321 図、図版 26・102）

22G・23F・23G・24F グリッドに所在する、南北方向に直線的に延びる溝状遺構である。検出された長さは約 40 ｍで、北端は調査区外へ続く。幅は 70㎝前後、検出面からの深さは 110㎝前後である。断面形は V 字状だが､底面は幅 30㎝前後の平坦面となっている。検出面から底面までの深さは 42㎝である。覆土は、ローム塊・ローム粒の混入量により分層可能だがほぼ黒褐色土の単一層と言える状況であった。溝状遺構 SD-012 と直交するが、新旧関係ははっきりしない。

図示した遺物は２点である。第 321 図１・２はともにカワラケ杯である。いずれも底部の 20％程度の遺存度である。２は器面が著しく摩耗している。

SD-028（第７図、図版 26）

6D・7D グリッドに所在する。ややカーブを描きながら南北方向に延びる溝状遺構である。北端部は調査区外へ続くとみられる。南端はいったん途切れ、その先で二叉に分かれて堀 SD-027 に合流するとみられるが、調査時には、二叉部分から南は別に「虎口曲輪内遺構」と称した。報告に当たっては、一連の遺構 SD-028 と捉えることとする。検出された長さは、全体で 23 mほどとなる。幅は 80㎝前後、検出面からの深さは、二叉に分かれた部分で 50㎝前後、北側の部分で 20㎝前後である。但し、底面の標高は、南側の堀に接する部分が最も高く、北端部へいくほど低くなっている。覆土は、主としてローム粒・ローム塊を含む明褐色土であった。底面には深さ 10㎝前後のピットが並ぶ部分もみられる。また、二叉に分かれる部分には、長径 150㎝、短径 120㎝、深さ 97㎝ほどの楕円形状の落込みがある。いずれも機能等はっきりしないが、当遺構の東側にはほぼ平行するように台地整形区画の段差がみられ、区画に関連する遺構であった可能性も考えられるかもしれない。

遺物は出土していない。

SD-030（第７図、図版 27）

7C グリッドに所在する、東西方向に延びる溝状遺構である。東端は堀 SD-027 に合流し、西端は調査区外へ続く。検出された長さは約８ m、幅は 150㎝前後である。断面形は V 字形状だが、底面は幅 20㎝ほど、平坦面となっている。検出面からの深さは、SD-027 と合流する東側のほうが深く約 80㎝、西側は 30㎝前後である。覆土は褐色土で、上層はローム塊を含んで堅く、下層はローム塊を含まず粘りのある土であった。

遺物は近世以降陶磁器の小破片が少量出土したのみである。

2SD-001（第 10 図）

24G・24H グリッドに所在する、東西方向に延びる溝状遺構である。平成 21 年度に調査を行った後、平成 22 年度に西側の部分を調査した。西端は更に調査区外へ延びるが、東端は現道の存在により調査不能であった。また、遺構の南側の部分は平成 27 年度調査の 7SD-003 と重複し、更に南側には現道が存在する。調査できた部分の長さは約 20 m、幅は広い部分で 80㎝ほどである。断面形は緩い U 字形で、検出面からの深さは 90㎝ほどである。覆土には硬化面が複数面みられ、道路として機能したと推測されるが、硬化面以外は総じて柔らかく、遺構の時期は近世以降の可能性が高い。7SD-003 とは部分的に同じ遺構と考えられるところもあり、新旧関係は明確にはならなかった。

遺物は、混入品とみられる土器の小破片が少量出土したのみであった。

4SD-001（第８図）

15E・16E グリッドに所在する。東へ向かって南北二叉に分かれて延びる溝状遺構である。北側のほうは溝状遺構 4SD-003 と合流する。南側のほうは溝状遺構 4SD-004 と直交し、同軸方向の溝状遺構 4SD-002 と重複する。東端は調査区外へ続くとみられる。検出された長さは、北側のほうは約３ m、南側のほうは約 13 mである。幅は平均的な部分で 60㎝ほどで、検出面からの深さは 10㎝ほどである。

遺物は、図示はしていないが、銭貨の小破片が出土している。銭貨は大破しており、銭種も不明である。

そのほかには、混入品とみられる土器の小破片が少量出土したのみである。

4SD-002（第８・323 図、図版 103）

15E・16E グリッドに所在する、東西方向の溝状遺構である。西端は方形竪穴 4SK-003 と重複し、東端は調査区外へ続くとみられる。北側は同軸方向の溝状遺構と 4SD-001 と重複するが、新旧関係は明らかでない。検出された長さは 3.6 m、幅は最大 230㎝である。検出面からの深さは 15㎝前後である。

図示した遺物は２点である。第 323 図１・２は瀬戸・美濃縁釉小皿である。いずれも内外面に灰釉がみられる。

4SD-003（第８・324 図、図版 109）

15E グリッドに所在する、東西方向の溝状遺構である。溝状遺構 4SD-001・004 と交差するが、新旧関係は明らかでない。検出された長さは約６m、幅は広いところで 125㎝である。検出面からの深さは 25㎝前後である。

図示した遺物は１点である。第 324 図１は常滑甕底部の転用砥石である。破断面を使用している。

4SD-004（第８図）

15E グリッドに所在する、東西方向の溝状遺構である。溝状遺構 4SD-001・003 と交差するが、新旧関係は明らかでない。また、東端は土坑 4SK-004 に繋がる。検出された長さは約８m、幅は 60㎝ほどである。検出面からの深さは僅かに５㎝前後である。

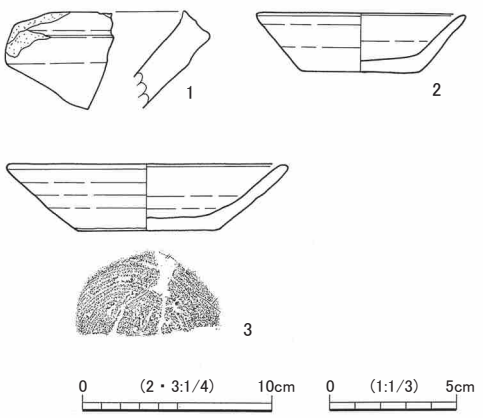
遺物は出土していない。

4SD-005（第８・325・326 図、図版 94・103・104・109・114）

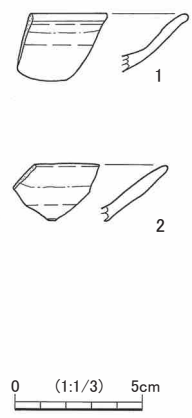
13E・14D・14E・15D グリッドに所在する、南北に延びる溝状遺構である。平成 22 年度に現存の道路や住宅、電柱等の構築物に阻まれながら主に南側の調査を行い、それらが撤去された後、平成 24 年度に更に調査を行った。平成 24 年度には「SD-005」として調査を行ったが、報告にあたり遺構番号を統合した。北側では２条に分かれ、北端は調査区外へと続く。南端は確認調査区から調査区外へ続くとみられる。方形竪穴 6SK-127 や地下式坑 6SK-128、井戸 6SE-005 等の遺構と重複するが、土層断面の観察から 6SK-127・128 より新しく、SE-005 とは不明である。検出された遺構の長さは約 40 m、幅は南端付近で 230㎝ほど、２条となっている北端付近ではそれぞれ西寄りが 130㎝程度、東寄りが 180㎝程度である。断面形はＶ字状であるが、底面は 15㎝～ 20㎝ほどの幅で平坦になっている。検出面からの深さは、南端付近で 122㎝、北端付近の西寄りで 81㎝、同東寄りで 142㎝である。覆土は、ローム粒を含みしまりがあって堅い黒褐色土や黒色土が互層に堆積していた。道路として機能したものと考えられる。

遺物は、中世～近世以降の陶磁器片が比較的多く出土した。図示した遺物は 28 点である。第 325 図６を除き、全て平成 24 年度調査において出土したものである。

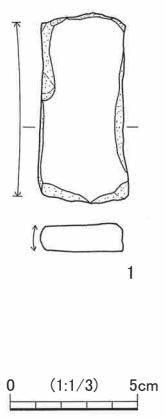
第 325 図１～９は瀬戸・美濃製品である。１は平碗である。削り出し高台をもつ。内面全面に灰釉が施されており、外面は露胎である。古瀬戸後期様式Ⅲ期頃に位置づけられるものと考えられる。２・３は縁釉小皿である。２は全体の 60％程度、３は 40％の遺存度である。いずれも内外面に灰釉が施される。



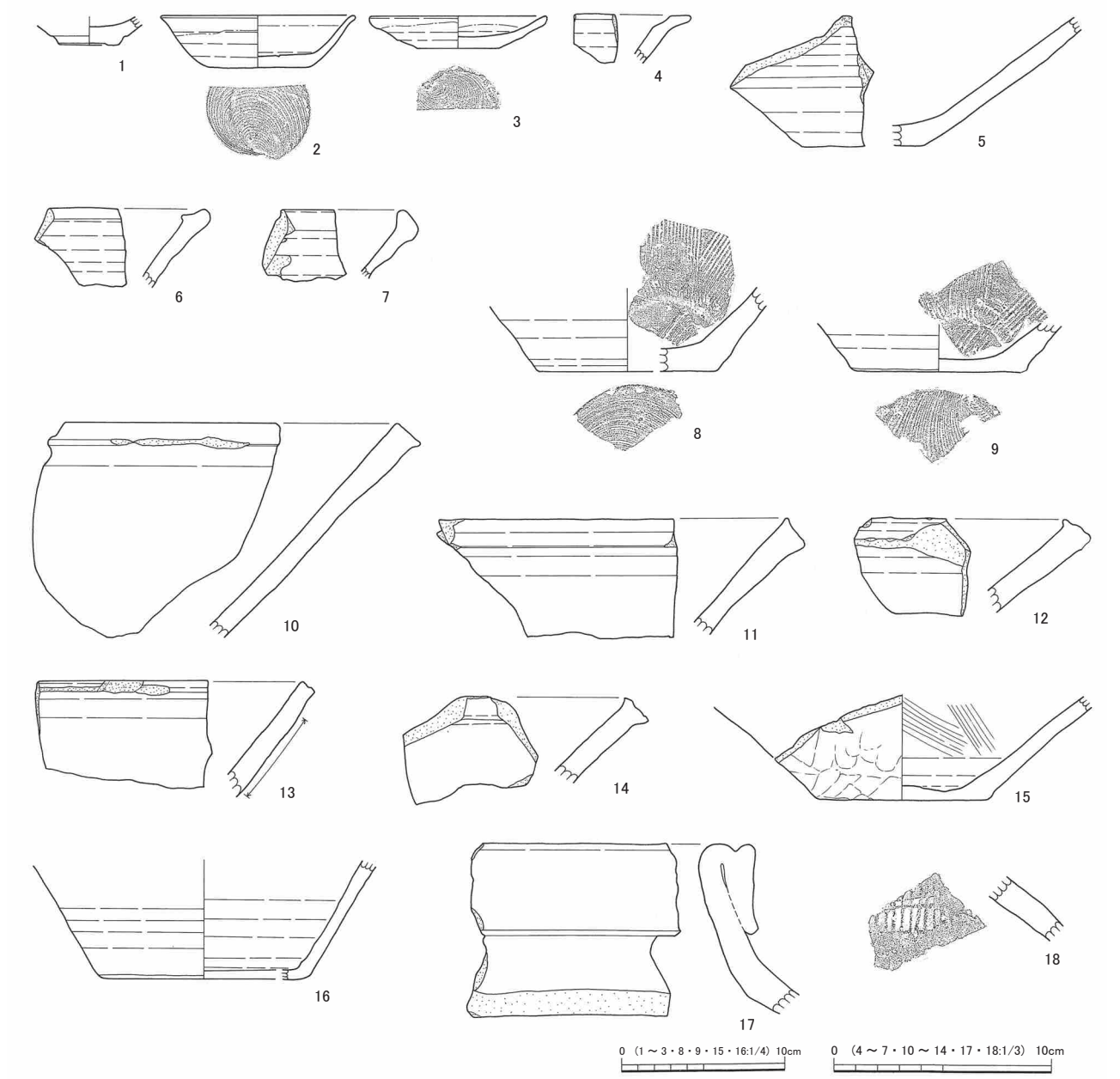
第 322 図　SD-022 出土遺物



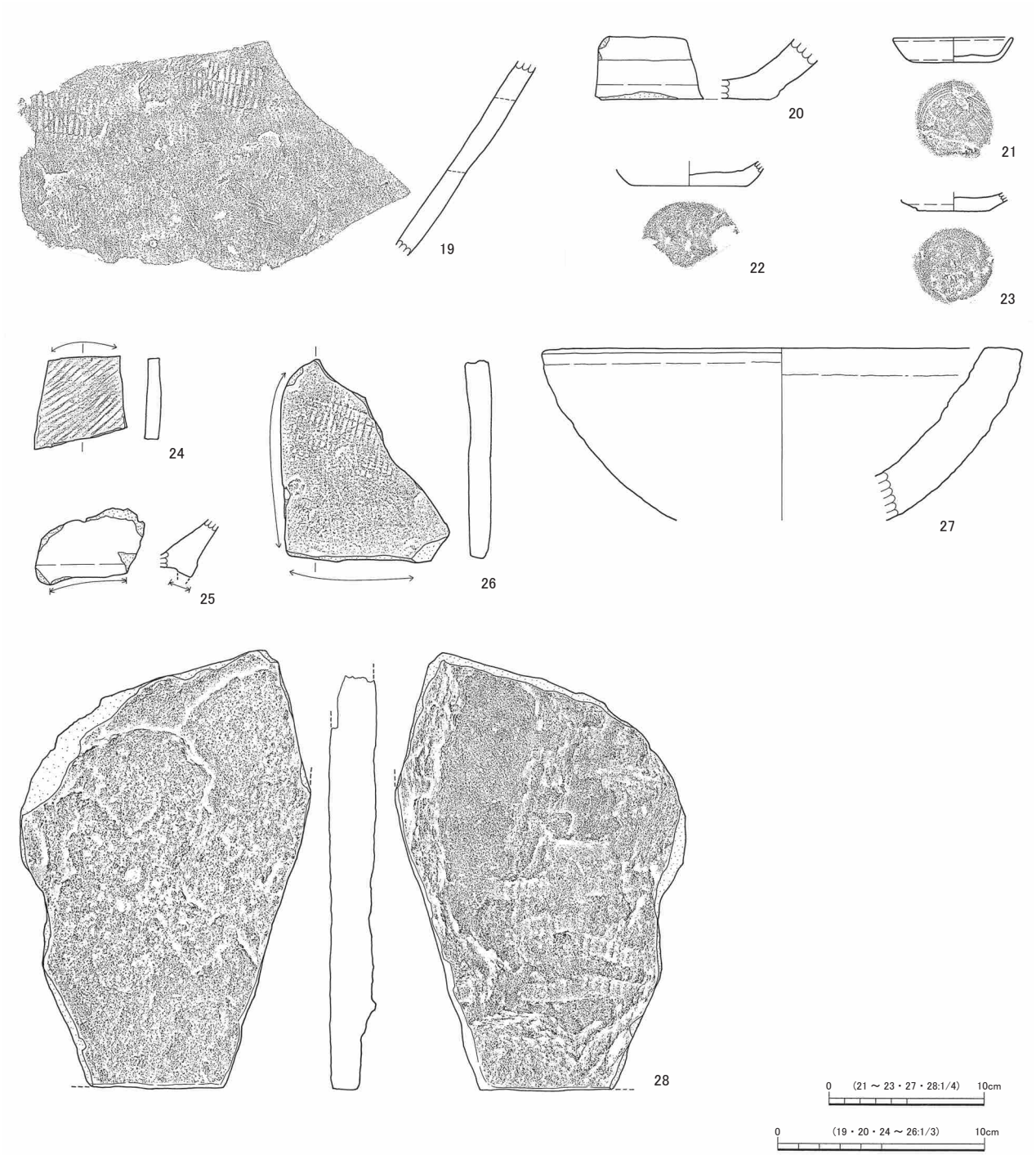
第 323 図　4SD-002 出土遺物



第 324 図　4SD-003 出土遺物



第 325 図　4SD-005 出土遺物（1）



第 326 図　4SD-005 出土遺物（2）

3の露胎部分の色調は灰色を呈している。4は折縁深皿である。内外面とも灰釉が施されている。古瀬戸後期様式Ⅲ期に位置づけられるものと考えられる。5は盤類で、折縁深皿又は直縁大皿とみられる。内外面に灰釉が施される。外面は、遺存部上部のみツケガケで施釉され、下部は露胎である。内面は上部がツケガケ、見込みはハケ塗りで施釉されている。6～9は擂鉢である。6は内外面に錆釉が施される。大窯第4段階の所産と考えられる。7はⅠ類に分類されるもので、内外面に錆釉が施される。8・9は底部の破片で、いずれも遺存部の内外面全面に錆釉が施されている。

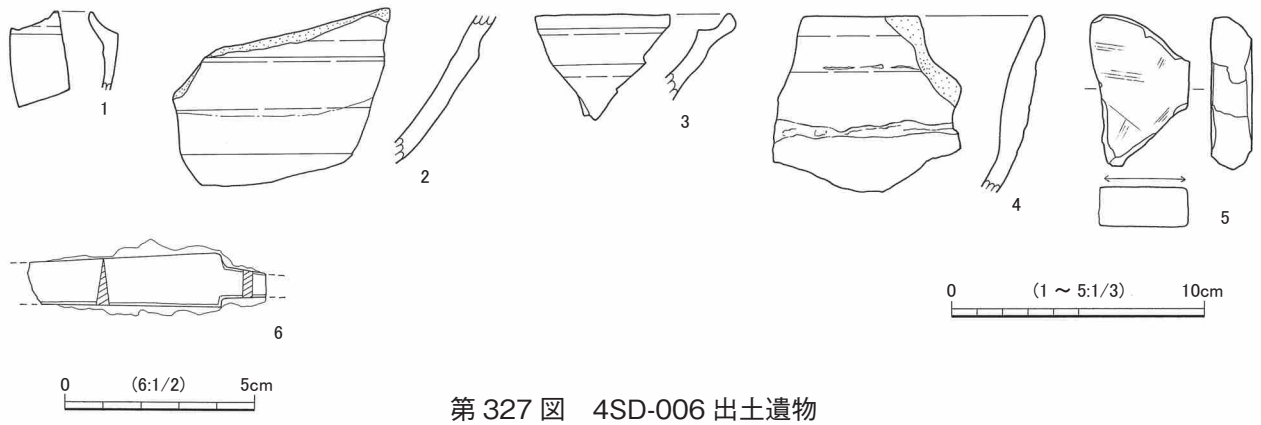
10～19は常滑製品で、10～16は片口鉢、17～19は甕である。10～12の内面は使用により摩耗

している。いずれも 10 型式に比定されるものと考えられる。13 は 8 型式に比定されるものと考えられる。外面下部が二次的な使用により平滑になっている。14 の口唇部はごく僅かしか遺存していないが、10 型式に比定されるものと考えられる。15 は、重複する地下式坑 6SK-128 覆土から出土した破片と接合したもので、底部の 30％程度の遺存度である。内面にはハケ目状の調整痕がみられる。見込み部分はヨコナデ調整である。16 は底部の 20％程度の遺存度である。全体に薄手で丁寧な作りである。外面底部の縁辺が転用砥石として使用されている。17 は折返し口縁をもつ甕である。9 型式に比定されるものと考えられる。18 は胴部の破片で、全体に自然釉がかかる。外面には押印文がみられる。第 326 図 19 は大甕の胴部破片で、外面には押印文が 2 か所みられる。20 は在地産内耳土鍋の底部破片である。胎土には白色粒と砂粒を少量含む。色調は褐色であるが、外面と内面見込み部分は黒褐色である。21 はカワラケ小皿である。全体の 70％程度遺存している。口縁部は約 30％の遺存度であるが、遺存部分の口唇には点々と煤の付着が観察される。胎土は少量の砂粒や白色針状物質を含み、色調は淡暗褐色を呈する。器面は摩耗し、一部剥落している。22・23 はカワラケ杯である。22 は底部の 40％程度の遺存度である。胎土に赤色スコリアを多量に含み、色調は橙色を呈する。器面が著しく摩耗している。23 は底部のみ全部遺存している。胎土に砂粒を多く含み、色調は淡褐色を呈する。器面が摩耗している。

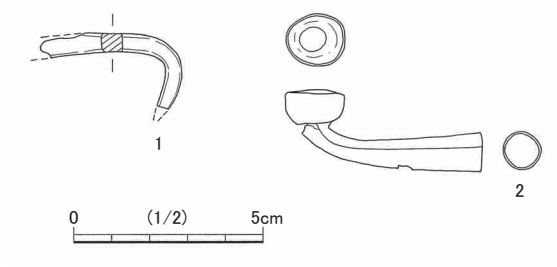
24～26 は転用砥石で、24 は須恵器甕の転用である。破断面を使用しているが、内面も平滑になっており、使用されている可能性がある。25 は I 類に分類される常滑片口鉢の底部破片を転用したものである。外面体部と高台部が使用されている。26 は常滑甕を転用したものである。外面には押印文がみられる。破断面が使用されている。27 は石臼の破片とみられる。鉢状を呈し、径の 20％程度の遺存度であるが、復元口径は 30.8㎝、復元現存器高は 11.1㎝である。内面は使用により平滑になっている。28 は板碑の基部片である。左側面及び上部は欠損しているが、下面及び右側面下半は丁寧に平らに整形されているのが観察できる。表面は無文である。裏面にはノミ加工痕が顕著にみられる。遺物はほかに、図示はしていないが、銭貨の小破片が出土している。銭貨は大破しており、銭種も不明である。

4SD-006（第 8 ・327 図、図版 27・105・112・118・121）

12E・13E・14C・14D グリッドに所在する。現道である平成 22 年度調査区と 24 年度調査区の境界に沿う形で存在するため詳細が不明な部分もあるが、平成 22 年度の調査において東西方向から東端で南北方向へ屈曲し北へ延びる溝状遺構であることが確認され、更に平成 24 年度の調査で 4SD-009 と重複しながら北へ延びて調査区外へ続くことが明らかとなった。平成 24 年度には「SD-006」として調査を行ったが、報告にあたり遺構番号を統合した。4SD-009 とは、土層断面の観察から当遺構のほうが新しいとみられる。西端は調査区外へ続くとみられるが、東西方向から屈曲して南下する 4SD-007 と調査区外で繋がる可能性もある。西端では地下式坑 4SK-101 と重複するが、新旧関係は、4SK-101 の天井崩落土とみられる土の上に掘り込まれていることから 4SK-101 より新しいと考えられる。ほかに重複する遺構としては、屈曲部分に方形竪穴 4SK-118・104 があるが、新旧関係は土層断面の観察から 4SK-104 より新しいことが明らかである。検出された長さは、東西方向の部分が約 16 m、南北方向の部分は約 44 mである。幅は 160㎝ほどで、検出面からの深さは東西方向の部分で 40㎝ほど、4SD-009 と重複する北端付近では 10㎝前後である。覆土は、ローム粒の混入量で分層できる暗褐色土層が上下層に堆積しており、上層は硬化していた。道路として機能していたものと考えられる。なお、4SK-101 と重複する部分の底部から、厚さ



第 327 図　4SD-006 出土遺物



第 328 図　4SD-007 出土遺物

10㎝前後の貝層が 50㎝× 25㎝ほどの範囲で検出された（第 117 図）。構成貝種は記録がなく不明である。

図示した遺物は６点である。第 327 図１～３は瀬戸・美濃製品である。１は茶入である。外面全体に灰褐色の鉄釉が施されている。内面頸部にも僅かに釉が認められる。２は盤類である。内外面に灰釉がみられる。外面は上部にツケガケで施釉され、下部は露胎である。内面は、見込みはハケ塗りで上部はツケガケで施釉されている。３は擂鉢である。内外面に錆釉が施されている。遺存部に擂目はない。古瀬戸後期様式Ⅳ期に位置づけられるものと考えられる。４は内耳土鍋である。胎土に雲母を多く含む。色調は、内面は褐色で、外面は煤けて黒色～暗褐色を呈している。近世の所産かもしれない。５は砥石とみられる。

６は小柄小刀である。切先と茎の端部をそれぞれ欠く。現存長は 6.3㎝で、刀身長は 5.1㎝、茎長は 1.2㎝である。６は平成 22 年度調査で遺構南側の部分から出土したものであるが、それ以外は平成 24 年度の調査で遺構北側の部分から出土したものである。

4SD-007（第８・328 図、図版 27・118）

14C・14D グリッドに所在する。東西方向から西端で南北方向へ屈曲し南へ延びる溝状遺構である。東端は方形状のピット 4SH-010 と重複する。その僅かな先には南北方向に位置する 4SD-006 があるが、合流しない。南端は調査区外へ続く。溝状遺構 4SD-037 や方形竪穴 4SK-097 と重複するが、新旧関係ははっきりしない。検出された長さは、東西方向の部分が約 17 m、南北方向の部分が約９ｍである。幅は 100㎝ほどである。断面形はＵ字形を呈し、検出面からの深さは 20㎝前後である。覆土はローム粒やローム塊、茶褐色土塊の混入量で分層できる暗褐色土が上下層に堆積していた。

図示した遺物は２点である。第 328 図１は錆膨れがひどいが、鎹の破片と考えられる。２は煙管である。ほかには中・近世以降陶磁器及び土器の小破片が少量出土したのみである。

4SD-008（第８・329 図、巻頭図版 7、図版 104）

14D グリッドに所在する。北西－南東方向にややカーブして延びる溝状遺構である。３ｍほど北側にほぼ並行して延びる 4SD-007 とは、径 160㎝ほど、深さ 10㎝ほどの浅い落込みを介して繋がるようである。また、方形竪穴 4SK-098 と重複しているが、土層断面の観察から当遺構のほうが新しい。検出された長さは約９ｍ、幅は 90㎝ほどである。検出面からの深さは 15㎝前後である。覆土は、ローム粒のほか、炭化物粒・焼土粒を僅かに含む暗褐色土の単層であった。

図示した遺物は３点である。第 329 図１は青白磁の壺で、口縁部の 20％程度の破片である。内外面に施釉されるが、口唇部は拭取りされている。二次的に被熱したとみられ、表面はざらついている。色調は灰白色である。17 世紀初め頃の所産であろうか。２は瀬戸・美濃丸皿である。全体の 20％程度の遺存度である。内面と外面の上半に灰釉が施され、碁笥底の底部は露胎である。色調は釉がオリーブ褐色、露胎部分は灰褐色である。大窯第４段階の所産と考えられる。３は常滑片口鉢である。

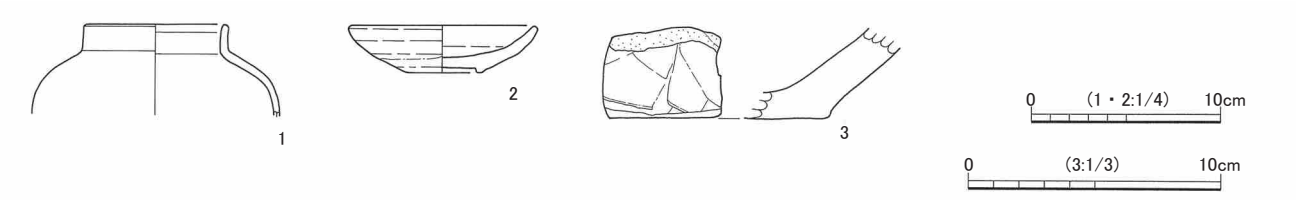
4SD-009（第８・330 図、巻頭図版 7、図版 94・104・109）

12E・13E・14D グリッドに所在する。南北方向に延びる溝状遺構で、調査は平成 22 年度と平成 24 年度に実施した。平成 24 年度には「SD-009」として調査したが、報告にあたり遺構番号を統合した。現道である平成 22 年度調査区と平成 24 年度調査区の境界線に沿う形で存在するため、詳細が明らかにならない部分もあるが、南東側で 4SD-006 と重複し、更に東側には 6SD-036 が隣接して並走している。北端は調査区外へ続くとみられる。重複する 4SD-006 とは、土層断面の観察から当遺構のほうが古いとみられる。検出された長さは約 22 ｍ、現存幅は 150㎝である。検出面からの深さは 20㎝～ 50㎝ほどである。覆土は、ローム粒を含みしまりのある暗褐色土と黒褐色土が３層ほど堆積していた。道路として機能していたものと考えられる。

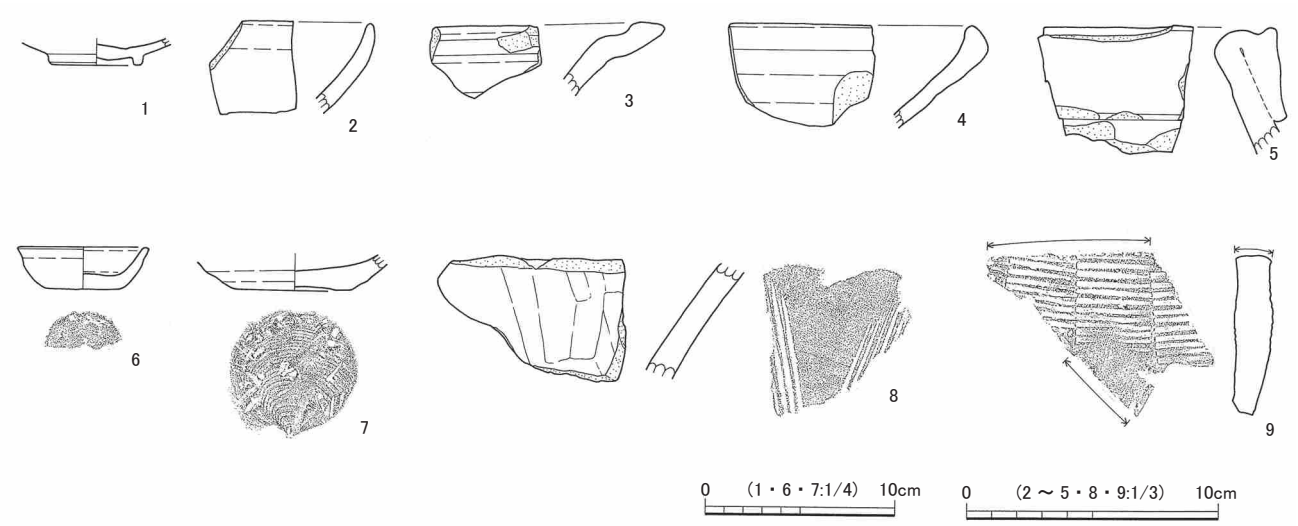
図示した遺物は９点である。第 330 図１は青白磁の碗である。底部の 50％程度の遺存度である。見込み部分には細い沈線が１本巡る。高台は削り出し高台である。釉は内外面に施されるが、高台内部は露胎である。２～４は瀬戸・美濃製品である。２は天目茶碗である。内外面に鉄釉が施されるが、遺存部の下端のみ僅かに露胎になっているのが認められる。釉の色調は、口縁部は光沢のある暗茶褐色で、その下は光沢のない黒褐色を呈している。古瀬戸後期様式Ⅱ期に位置づけられるものと考えられる。３は折縁深皿である。内外面に灰釉が施されている。古瀬戸中期様式Ⅳ期に位置づけられるものと考えられる。４は擂鉢である。内外面に錆釉が施される。古瀬戸後期様式Ⅳ期新段階に位置づけられるものと考えられる。５は常滑甕の口縁部破片である。色調はにぶい赤褐色を呈する。９型式に比定されるものと考えられる。６～８は在地産で、６はカワラケ小皿である。全体の 40％程度の遺存度である。７はカワラケ杯である。比較的焼成が良く、硬質である。８は擂鉢である。外面の調整は縦方向のヘラナデである。胎土には砂粒を少量含む。焼成は良好で、比較的硬質である。色調は褐色を呈する。９は常滑甕の転用砥石である。外面に押印文がみられる。破断面を使用している。

4SD-010（第８図、図版 27）

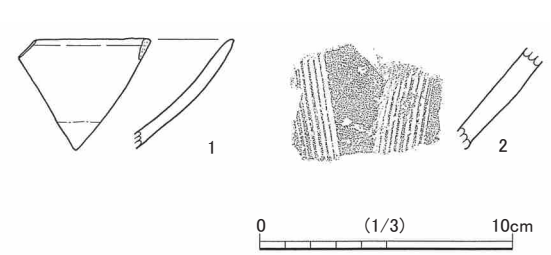
12D・12E グリッドに所在する。東西方向に延びる溝状遺構で、東端は 4SD-009 と直交し、西端は、同じ軸方向で東西に延びる 4SD-027 へ重複しながら続く。重複部分には土坑 4SH-012 が存在する。4SD-



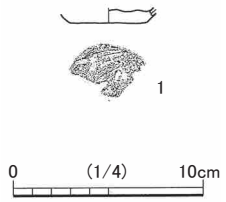
第 329 図　4SD-008 出土遺物



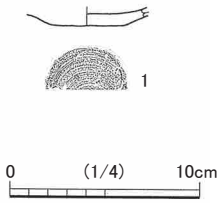
第 330 図　4SD-009 出土遺物



第 331 図　4SD-011 出土遺物



第 332 図　4SD-014 出土遺物



第 333 図　4SD-015 出土遺物

027 との新旧関係は、土層断面の観察から当遺構のほうが 4SD-027 よりも古い。検出された長さは約 13 mである。幅は 150㎝ほどで、検出面からの深さは 30㎝である。覆土はローム粒と褐色土塊の量で分層可能な暗褐色土層が上下２層に堆積していた。

遺物は出土していない。

4SD-011（第８・331 図、図版 104）

12D・12E グリッドに所在する。東西方向に延びる溝状遺構で、東端は調査区外へ続くとみられる。4SD-014 と直交し、新旧関係は土層断面の観察から当遺構のほうが 4SD-014 より古い。検出された長さは約 13 mである。幅は広い部分で 170㎝ほど、検出面からの深さは 31㎝である。覆土はローム粒と褐色土塊の量で分層可能な暗褐色土層が上下３層に堆積していた。

図示した遺物は２点である。第 331 図１は、瀬戸・美濃平碗である。内面全体と外面の上半に灰釉が

施されるが、釉は二次的に被熱しているとみられ、表面がざらついている。古瀬戸後期様式Ⅱ期に位置づけられるものと考えられる。２は在地産擂鉢である。胎土に白色粒を含む。色調は、内面は灰色、外面は黒褐色を呈している。

4SD-012（第８図）

12C・12D・12E グリッドに所在する。東西方向に延びる溝状遺構で、東側で 4SD-013 と分岐し、分岐点付近で 4SD-014 と直交している。新旧関係は、土層断面の観察から、当遺構のほうが 4SD-013・4SD-014 より古い。東端は調査区外へ続く。西側は 4SD-019 と合流し、西端は調査区外へ続く。検出された長さは約 35 mである。幅は 90㎝ほど、検出面からの深さは 41㎝ほどである。覆土はローム粒と褐色土の含む量で分層可能な黒褐色土が上下４層に堆積していた。

遺物は出土していない。

4SD-013（第８・334 図、図版 27・104・112・114・124）

12C・12D・12E グリッドに所在する。東西方向に延びる溝状遺構で、4SD-012 と同方向で重複するように存在している。新旧関係は、土層断面の観察から、当遺構のほうが 4SD-012 より新しい。東側で 4SD-014 と直交し、東端は調査区外へ続く。検出された長さは、完全に 4SD-012 と重複する部分も含めて約 28 mである。幅は 70㎝ほど、検出面からの深さは 15㎝ほどである。覆土はローム粒の含む量で分層可能な黒褐色土が上下層に堆積していた。

図示した遺物は５点である。第 334 図１は瀬戸・美濃直縁大皿である。内外面全体に灰釉が施される。釉の色調は灰白色を呈している。古瀬戸後期様式Ⅱ期に位置づけられるものと考えられる。２は火打石とみられる。３は砥石である。ほぼ全面的に使用されている。４は石臼の破片である。５は銭貨で元豊通寶である。書体は行書である。背面は無文とみられる。

4SD-014（第８・332 図、図版 104）

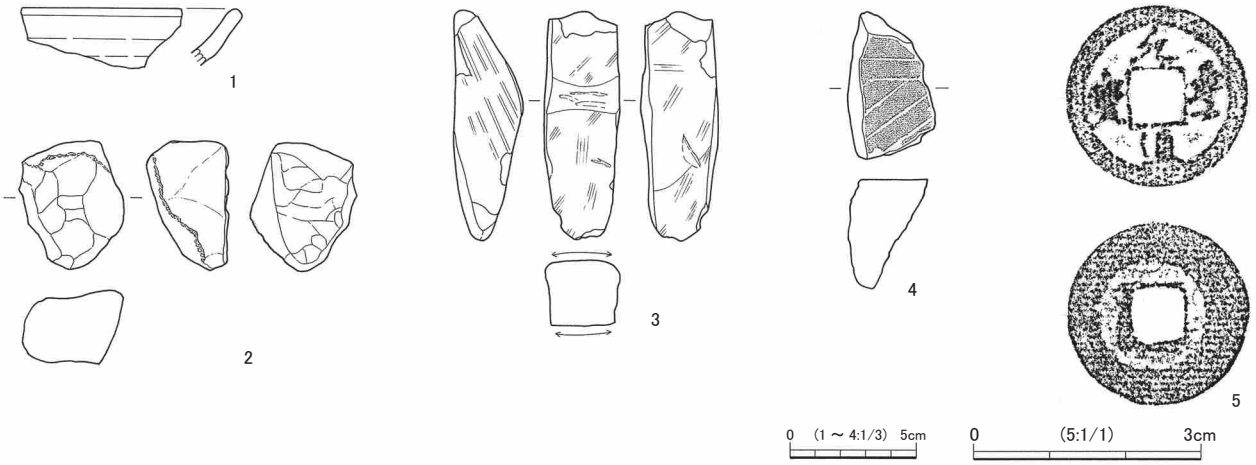
12D・12E グリッドに所在する。南北方向に延びる溝状遺構で、北から 4SD-013・012・011 とそれぞれ直交するが、新旧関係は土層断面の観察から当遺構のほうが 4SD-011 より新しい。南端は 4SD-010 に接する。北端は調査区外へ続くとみられる。検出された長さは約 17 mである。幅は 80㎝ほど、検出面からの深さは 25㎝ほどである。覆土はローム粒の含む量で分層可能な黒褐色土が上下層に堆積していた。

図示した遺物は１点である。第 332 図１は、カワラケ小皿である。底部の 30％の遺存度である。

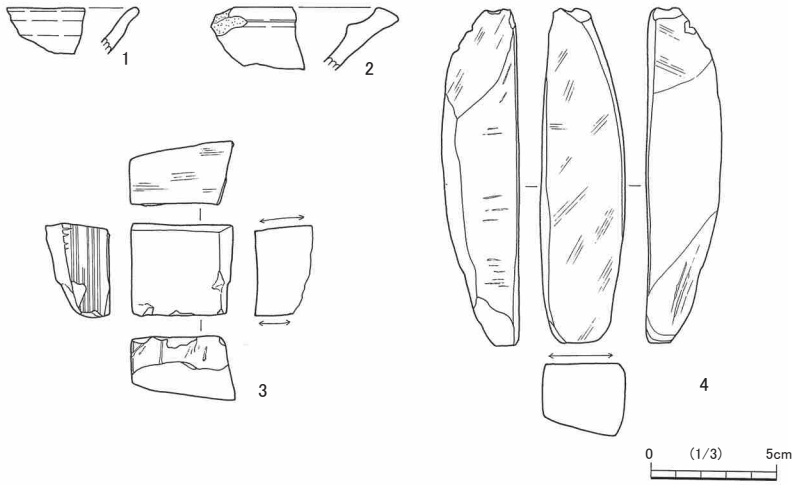
4SD-015（第８・333 図、図版 104）

12E グリッドに所在する。ややカーブしながら南北方向に延びる溝状遺構で、4SD-016 と直交する。新旧関係は土層断面の観察から当遺構のほうが 4SD-016 より古い。南端は 4SD-013 に接する。北端は調査区外へ続くとみられる。検出された長さは 6.5 mである。幅は 100㎝ほど、検出面からの深さは 20㎝ほどである。覆土はローム粒の含む量で分層可能な黒褐色土が上下層に堆積していた。

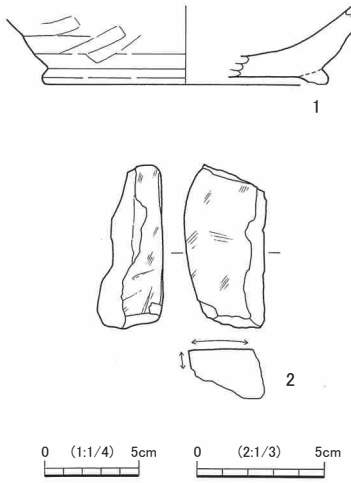
図示した遺物は１点である。第 333 図１は、瀬戸・美濃縁釉小皿である。底部の 50％の遺存度で、遺存部分には釉はみられない。内面は二次的な使用によるものか、平滑になっている。



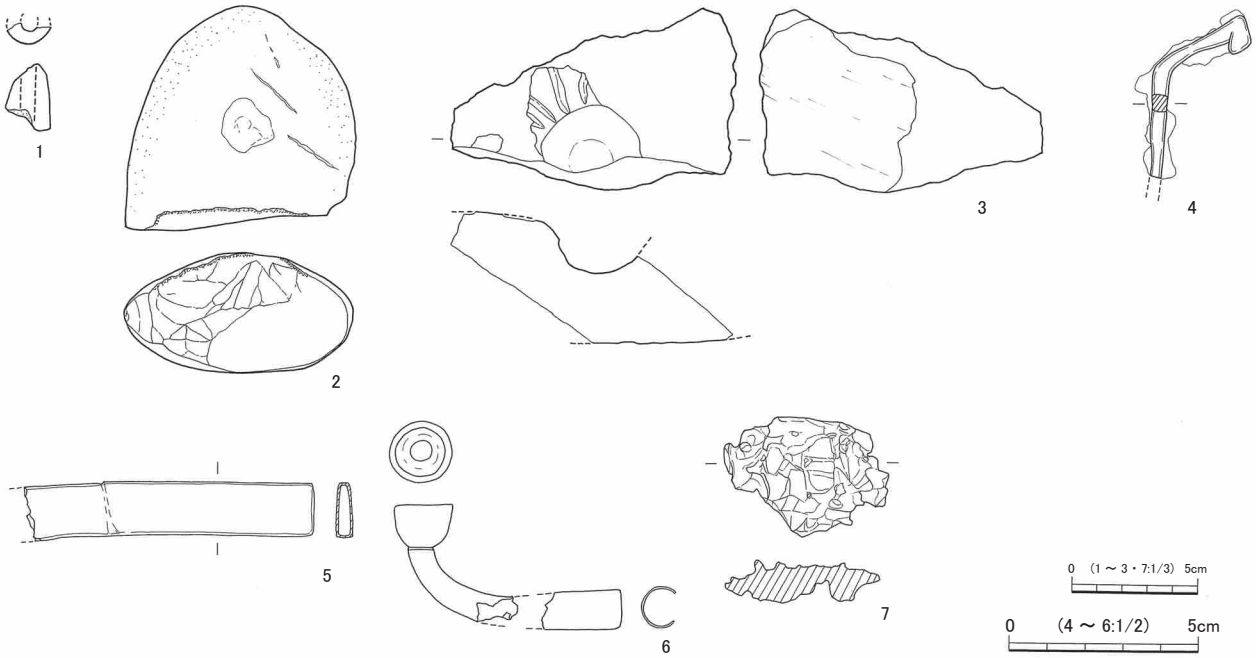
第 334 図　4SD-013 出土遺物



第 335 図　4SD-016 出土遺物



第 336 図　4SD-018 出土遺物



第 337 図　4SD-017 出土遺物

4SD-016（第８・335 図、図版 104・112）

11D・12E グリッドに所在する。ややカーブしながら東西方向に延びる溝状遺構で、4SD-015 と直交し、東端は 4SD-014 に合流する。新旧関係は土層断面の観察から当遺構のほうが 4SD-015 より新しい。西端は削平されている。検出された長さは約 10 mである。幅は 80㎝ほど、検出面からの深さは 15㎝ほどである。覆土はローム粒の含む量で分層可能な黒褐色土が上下２層に堆積していた。

図示した遺物は４点である。第 335 図１・２は瀬戸・美濃製品である。１は志野丸皿で、内外面とも黄白色の釉が施されている。大窯第４段階の所産と考えられる。２は擂鉢である。内外面とも錆釉が施される。近世の所産と考えられる。３は砥石とみられる。４も砥石で、ほぼ完形である。

4SD-017（第７・337 図、図版 110・112・114・118・120）

10E・11D グリッドに所在する、南北方向に延びる溝状遺構である。南端は、方形を描く溝状遺構 4SD-019 の東辺に繋がるが、土層断面の観察から、当遺構のほうが 4SD-019 より新しいとみられる。また、竪穴状遺構 4SK-047 とも重複するが、新旧関係は明らかでない。検出された長さは約 18 mである。幅は 80㎝ほどで、検出面からの深さは 35㎝ほどである。覆土はローム粒を少量含む黒褐色土を主体とする土層であった。

図示した遺物は７点である。第 337 図１は土錘の破片である。長さは不明であるが、復元幅は 1.8㎝、復元孔径は 0.6㎝である。胎土は緻密で色調は黄橙色を呈する。２は火打石とみられる。チャートの礫片を利用したもので、折れ面の縁辺が微細に潰れているのが観察される。３は石臼の破片である。４は全体にく字状に曲がり下端部を欠損した鉄釘である。５は小柄小刀の柄の部分で銅製である。中は空洞で、中間部で折れ曲がり、刀身側は折損している。表裏面とも文様はみられない。６は煙管である。接合しない２破片となっており、復元現存長は 6.0㎝である。７は鉄滓である。

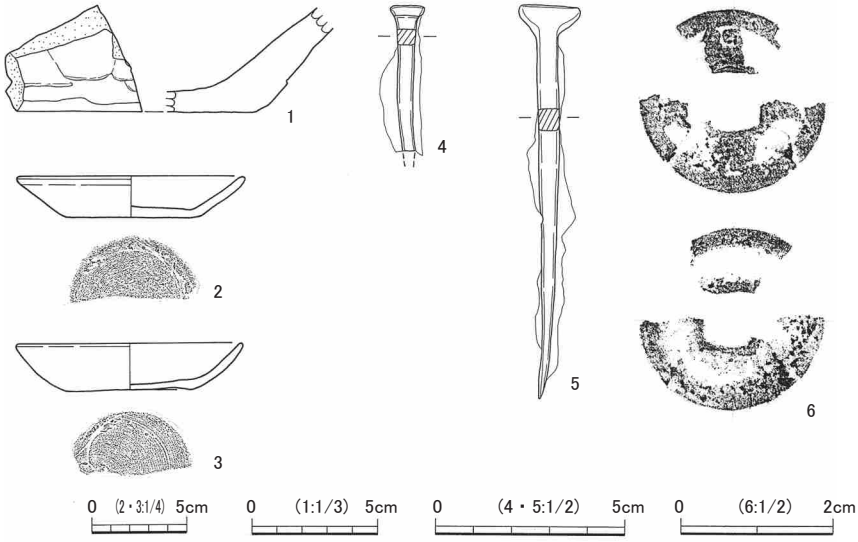
4SD-018（第７・336 図、図版 27・94・112）

9D・10D・10E グリッドに所在する。南北方向に延びるが、北端で屈曲して西へ延びる溝状遺構である。南端は調査区外へ続くとみられる。検出された長さは、全体で約 18 mである。幅は広い部分で 130㎝ほどで、検出面からの深さは 65㎝ほどである。断面の観察から、一度埋まった後、掘り返されたとみられる。覆土は、古い部分はローム粒を含む暗褐色土で、新しい部分はローム粒を少量含む黒褐色土であった。

図示した遺物は２点である。第 336 図１は常滑片口鉢である。底部の 15％程度の破片であるが、貼付高台をもち、底径は 14.8㎝と復元される。色調は灰色を呈する。摩滅・剥落など器面の劣化が著しい。３型式に比定されるものと考えられる。２は砥石の欠損品である。表面と左側面に使用痕がある。

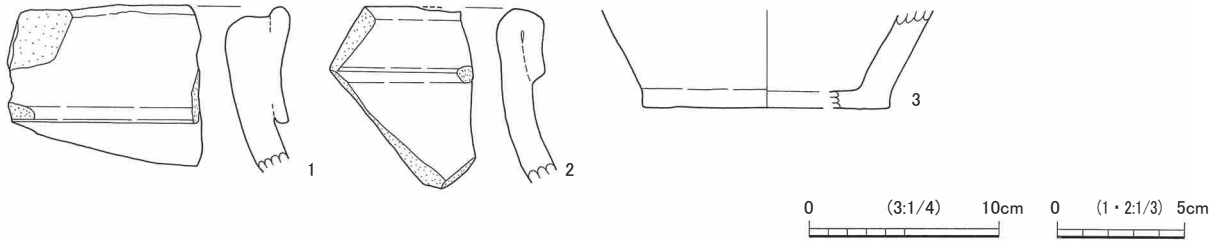
4SD-019（第８・338 図、図版 27・28・94・104・119）

11C・11D・12C・12D グリッドに所在する。一辺約 18 mの正方形を描くように屈曲している溝状遺構で、正方形の西隅部は調査区外にあるとみられる。遺構の幅は 90㎝ほどである。底面はほぼ平坦であるが、深さ 10㎝～ 30㎝ほどのピットが底面にみられる部分もある。検出面からの底面までの深さは 50㎝前後である。覆土は、ローム粒や茶褐色土粒・塊の含む量によって分層できる暗褐色土層が３～４層堆積していた。東隅部は、南北方向の溝状遺構 4SD-017 と重複するが、土層断面の観察から当遺構のほうが古い

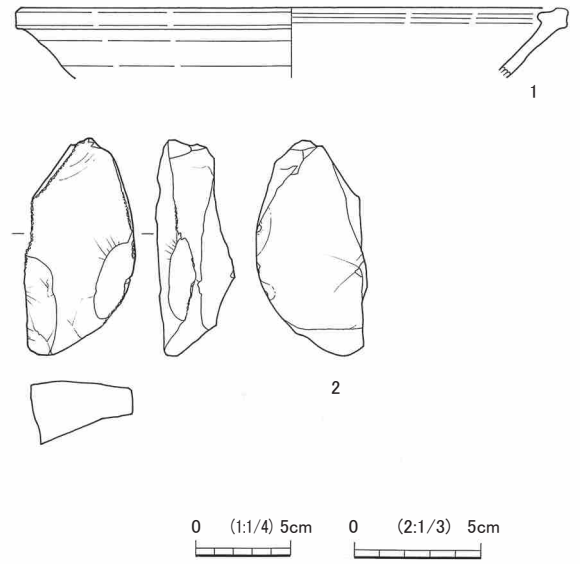


第 338 図　4SD-019 出土遺物

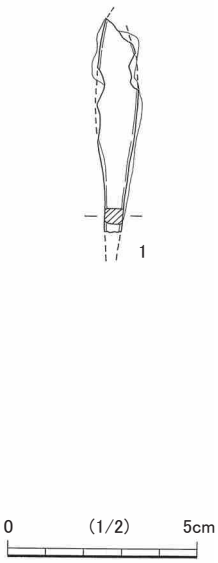
第 339 図　4SD-020 出土遺物



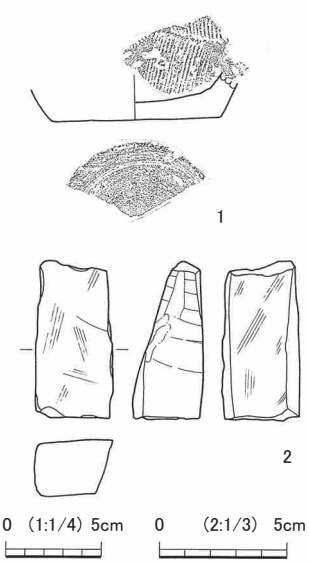
第 340 図　4SD-024 出土遺物



第 341 図　4SD-026 出土遺物



第 342 図
4SD-034 出土遺物



第 343 図　4SD-035 出土遺物

とみられる。北隅部には 4SD-021 が連結する。このほか、溝状遺構 4SD-012 や方形竪穴 4SK-035、土坑 4SK-053 等とも一部重複している。また、正方形に囲まれた内部には、溝状遺構や一列に並ぶ土坑群及び地下式坑 4SK-039 や方形竪穴 4SK-038 などがあるが、ほぼ全て当遺構と軸方向を同じくしており、関係する可能性もあるが、はっきりしない。

図示した遺物は６点である。第 338 図１は常滑片口鉢である。２・３はカワラケ杯である。２は全体の 40％程度の遺存度である。胎土に赤色スコリアを多く含む。色調は橙色を呈する。器面が摩耗している。３は遺構の西辺に並走する溝状遺構 4SD-034 から出土した破片と接合したもので、全体の 25％程度の遺存度である。胎土に赤色スコリアを多量に含む。色調は淡褐色を呈する。４・５は鉄釘である。４は下端を欠損する。５はほぼ完形とみられ、全長 10.4㎝である。６は銭貨で、遺存状態が非常に悪く、破損し全体の３分の１が欠損しているが、紹聖元寶である。書体は篆書である。遺存部分には背文は認められない。

4SD-020（第８・339 図、図版 27・112）

11D グリッドに所在する。北東－南西方向に直線的に延びる溝状遺構である。正方形状に廻る溝状遺構 4SD-019 に囲まれた内部に位置し、軸方向も一致するが、関連性は明らかでない。検出された長さは約６ｍ、幅は 80㎝ほど、検出面からの深さは 10㎝前後である。覆土は、ローム粒や褐色土粒等の混入物によって分層できる暗褐色土が３層堆積していた。

図示した遺物は１点である。第 339 図１は、砥石とみられる。下端は欠損している。

4SD-021（第７図、図版 28）

10D・11D・11E グリッドに所在する。一部、継続が明らかでない部分もあるが、位置関係や遺構の状況等から調査時に同遺構と判断したもので、東西方向に延び、西端で屈曲して 4SD-019 に連結する溝状遺構である。東側では南北方向の溝状遺構 4SD-022 が合流し、東端は調査区外へ続くとみられる。断面の観察から、当遺構のほうが 4SD-022 よりも新しい。西側では土坑 4SK-120 と重複するが、新旧関係は明らかではない。検出された長さは、東西方向が推定で約 24 ｍ、南北方向は約２ｍである。幅は東側の部分で約 50㎝、検出面からの深さは同じく約 15㎝である。

遺物は図示していないが、近世以降陶磁器の小破片が少量出土した。

4SD-022（第８図、図版 28）

11E グリッドに所在する。南北に延びる溝状遺構であるが、南端は 4SD-021 に合流し、北端は弥生時代の竪穴住居跡と重複するが、詳細は明らかでない。4SD-021 との新旧関係は、断面の観察から当遺構のほうが古い。検出された長さは約２ｍ、幅は約 80㎝である。検出面からの深さは 15㎝前後である。

遺物は混入品とみられる土器の小破片が少量出土したのみである。

4SD-023（第８図）

11D・11E グリッドに所在する。南北方向に延びる溝状遺構で、検出された長さは 6.4 ｍ、幅は 70㎝、断面形は U 字形を呈し、検出面からの深さは 23㎝ほどである。覆土は上層にローム粒を僅かに含む黒褐色土が、下層にはローム塊をやや多く含む黒褐色土が堆積していた。

遺物は図示していないが、中世陶磁器・土器の小破片が少量出土した。

4SD-024（第７・340 図、図版 105）

10D・10E・11D グリッドに所在する。南北方向に延びるが、北端で西方向に屈曲して延びる溝状遺構である。南北方向の部分は、竪穴状遺構 4SK-047・土坑 4SK-059 と一部重複し、4SD-019 と直交する。このうち、土坑 4SK-059 との新旧関係は、土層断面の観察により当遺構のほうが新しい。西端は確認できなかったが、延長上にある同軸方向の溝状遺構 4SD-025 に合流する可能性もある。検出された長さは、南北方向の部分が約 24 m、東西方向の部分が約５mである。幅は 50㎝、検出面からの深さは 10㎝ほどである。

図示した遺物は３点である。第 340 図１～３はいずれも常滑製品である。１・２は甕の口縁部破片で、いずれも９型式に比定されるものと考えられる。１の色調は、外面が灰色、内面はにぶい黄褐色を呈している。２の外面には自然釉が厚くかかっている。３は壺又は甕の底部で、20％程度の遺存度である。色調は内外面とも灰色を呈する。

4SD-025（第７図）

9D・10D グリッドに所在する。やや屈曲しながら北西－南東方向に延びる溝状遺構である。検出された長さは約 17 mである。幅は 80㎝ほど、検出面からの深さは 20㎝ほどである。覆土は、下層に硬化した暗褐色土層が３層認められ、上層は黒褐色土が堆積していた。道路として機能していた遺構と考えられる。

遺物は出土していない。

4SD-026（第７・341 図、図版 105・112）

10D グリッドに所在する。東西方向の溝状遺構である。検出された長さは 4.7 mである。幅は 100㎝ほど、検出面からの深さは 15㎝ほどである。覆土は、ローム粒と茶褐色土塊の混入程度で分層可能な暗褐色土層が上下２層に堆積していた。

図示した遺物は２点である。第 341 図１は瀬戸・美濃擂鉢である。口縁部の 15％程度の遺存度である。内外面とも錆釉が施される。口唇部は使用により著しく摩耗している。大窯第４段階の所産と考えられる。２は火打石である。チャートの小礫片を利用したもので、剥離面の縁辺が微細に潰れているのが観察される。

4SD-027（第８図）

12D グリッドに所在する。東西方向に延びる溝状遺構で、西端は削平されているが、東端は同方向に延びる溝状遺構 4SD-010 と重複する。4SD-010 との新旧関係は、土層断面の観察から、当遺構のほうが 4SD-010 より新しい。また、重複部分には土坑 4SH-012 が存在し、北側には溝状遺構 4SD-028 が並走する。検出された長さは約 19 mである。幅は 40㎝、検出面からの深さは 11㎝ほどである。覆土はローム粒と褐色土塊の量で分層可能な暗褐色土層が上下２層に堆積していた。

遺物は出土していない。

4SD-028（第８図）

12C・12D グリッドに所在する。東西方向に延びる溝状遺構で、西端は調査区外へ続く。南側には 4SD-027 が並走する。検出された長さは約 27 mである。幅は 90㎝ほどで、検出面からの深さは 12㎝である。覆土は含まれる褐色土の量で分層可能な暗褐色土層が上下２層に堆積していた。

遺物は出土していない。

4SD-034（第８・342 図、図版 27・119）

11C グリッドに所在する。正方形を描く溝状遺構 4SD-019 の西辺外側に沿うように延びる南北方向の溝状遺構である。南端は調査区外に続くとみられる。検出された長さは約 17 m、幅は 90㎝ほどである。検出面からの深さは 30㎝前後である。断面形は U 字形で、覆土はローム粒・塊の量によって分層可能な暗褐色土層が上下２層に堆積していた。

図示した遺物は１点である。第 342 図１は棒状の鉄製品である。錆膨れと剥落がひどく、上部と下部を欠損しているとみられるが、断面形は遺存部上端も四角形とみられる。このほか、中世陶磁器・土器の小破片が少量出土し、そのうちカワラケ片は 4SD-019 から出土した破片と接合したため 4SD-019 として掲載した（第 338 図３）。

4SD-035（第７・343 図、図版 105・112）

10D グリッドに所在する北西－南東方向の溝状遺構で、長さは 4.2 m、幅は 60㎝である。南東端が土坑状の落込みとなっており、これが 4SD-021 と重複する土坑 4SK-120 と接する。検出面からの深さは 25㎝前後であるが、土坑状の部分は 49㎝である。

図示した遺物は２点である。第 343 図１は瀬戸・美濃擂鉢である。内外面に錆釉が施される。２は砥石である。上下端は欠損している。

4SD-036（第８図）

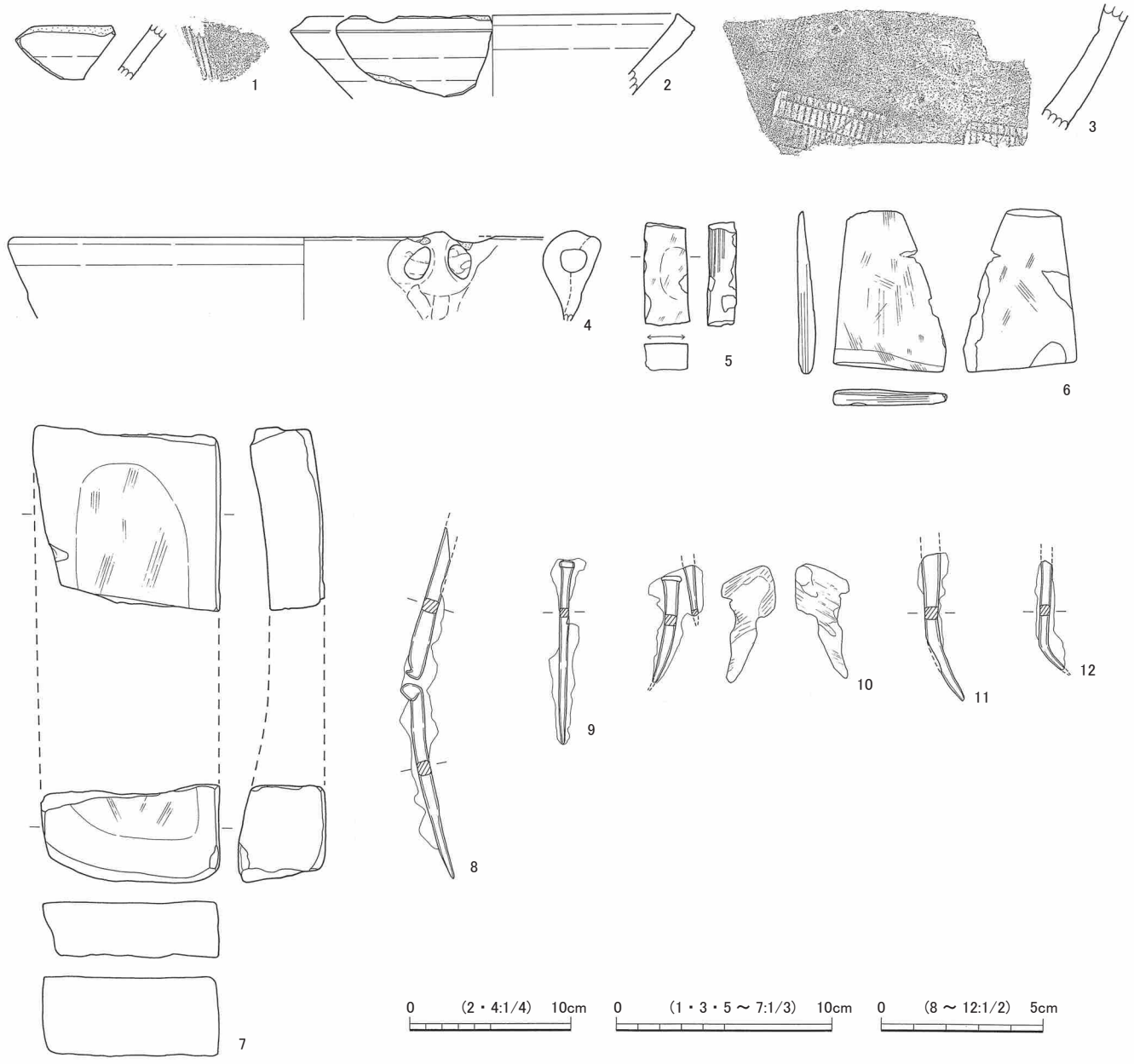
14D グリッドに所在する、南北に延びる溝状遺構である。北方向の延長線上には 6SD-036 があり、繋がっていた可能性がある。土坑 4SK-103 と重複するが、当遺構のほうが新しいとみられる。検出された長さは約 12 m、幅は 100㎝ほどである。検出面からの深さは 60㎝ほどである。断面形は V 字状であるが、底面が幅 10㎝ほど平坦面となっている。覆土はローム粒や黒色土、茶褐色土塊の混入物の量等によって分層できる暗褐色土が上下２層に堆積していた。

遺物は出土していない。

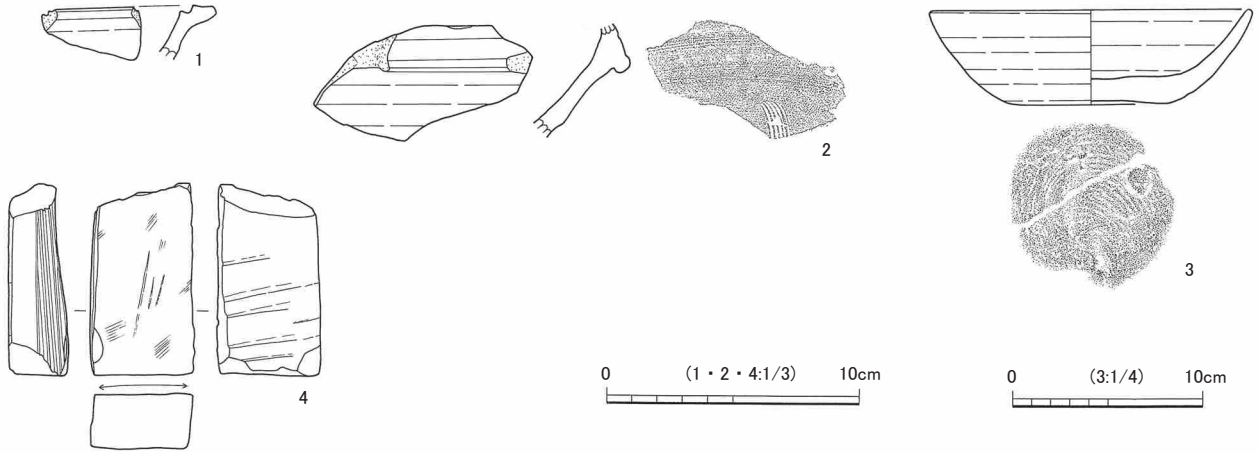
4SD-037（第８・344 図、図版 28・105・112・113・119・121）

14C・14D グリッドに所在する。東西方向の溝状遺構で、長さ 7.4 m、幅 150㎝前後である。西側で 4SD-007 と重複するが、新旧関係は明らかでない。断面形は緩い U 字形であるが、底面はやや平坦である。検出面からの深さは 15㎝前後、覆土はローム粒と炭化物粒を少量含む暗褐色土の単層であった。

遺物は中・近世陶磁器・土器が比較的多く出土した。図示した遺物は 12 点である。第 344 図１は瀬戸・美濃擂鉢である。内外面に錆釉が施される。２・３は常滑製品である。２は片口鉢である。外面には重ね



第 344 図　4SD-037 出土遺物



第 345 図　6SD-036 出土遺物

焼き痕が認められる。９型式に比定されるものと考えられる。３は甕である。自然釉に覆われた外面には、押印文が認められる。４は内耳土鍋である。胎土に白色針状物質や雲母を少量含む。色調は淡褐色である。５は砥石である。上下端が欠損する。表面と右側面がよく使用されている。６は扁平な形状であるが、砥石とみられる。上部と右側面の大半を欠損しているが、右側面の下端部に僅かに使用面が残されている。７も砥石である。黄褐色を呈し縞目模様が特徴的な石材で、接合しない２破片であるが同一個体と考えられる。厚さと縞目模様から長さ 21.1㎝、幅 8.3㎝と復元されるが、上端は欠損している。８～ 12 は鉄釘である。８は２本の釘が頭部同士で錆着したもので、１本は完形、もう１本は下端が欠損しているとみられる。９は完形とみられる。10 は並行の２本の釘が錆着したもので、表裏面に木質が付着している。11 は頭部を欠損する。12 も頭部を欠損しており、下端は少し屈曲している。

6SD-036（第８・345 図、図版 94・104・113）

12E･13E グリッドに所在する。南北方向に延びる溝状遺構で、南方向の延長線上には 4SD-036 があり、繋がっていた可能性がある。西側には 4SD-006・009 が、東側には 4SD-005 が隣接して並走している。方形竪穴 6SK-127 と重複するが、土層断面の観察から当遺構のほうが古いとみられる。検出された長さは約 18 ｍで、幅は最も広い部分で 150㎝ほどである。検出面からの深さは 15㎝前後である。覆土はしまりのある黒褐色土層と暗褐色土層が堆積しており、道路として機能したものと考えられる。

図示した遺物は４点である。第 345 図１・２は瀬戸・美濃製品で、１は折縁深皿である。内外面に灰釉が施される。古瀬戸後期様式Ⅲ期に位置づけられるものと考えられる。２は擂鉢である。内外面に錆釉が施されている。大窯期の所産と考えられる。３はカワラケ杯である。全体の 30％程度の遺存度である。口唇部はほとんど遺存していないが、復元口径は 17.0㎝ほどとなる。器面はやや摩耗している。４は砥石である。上端は欠損している。

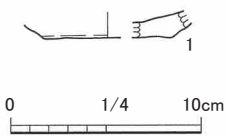
7SD-001（第９・10 図、図版 28）

24G グリッドに所在する。東西方向に延びる溝状遺構で、西側は調査区外へ続く。東側はやや南へ屈曲する。電柱等による調査不能部分を挟み、7SD-009 と繋がる可能性が高い。検出された長さは約 19 ｍ、幅は 100㎝ほどである。断面形は緩い U 字形であり、検出面からの深さは 20㎝前後である。覆土はローム塊を含む黒褐色土層が上下２層堆積していた。部分的に重複しながら北側に並行して存在する 7SD-002 とは、土層断面の観察から当遺構のほうが古く、また屈曲部分付近で交わる南北方向の溝状遺構 7SD-006 とも当遺構のほうが古い。

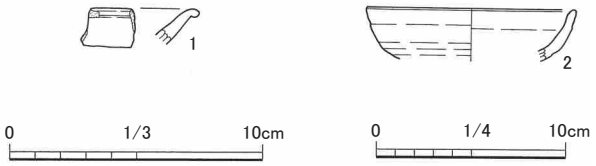
遺物は、混入品とみられる土器の小破片が少量出土した。また、24G-51 グリッド付近のほぼ底面から、サルボオを主体とし、少量のハマグリやツメタガイを含む小規模な貝ブロックが検出された。

7SD-002（第９・10・346 図、図版 28・105）

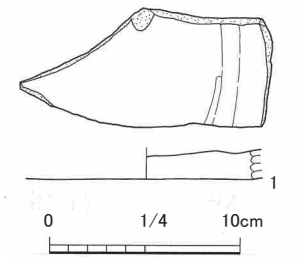
24G グリッドに所在する。北側の 7SD-003 と重複しながら東西方向に延びる溝状遺構で、西側は調査区外へ続く。東側も、電柱等による調査不能部分に阻まれるが、調査区外へ続いていくものと推測される。検出された長さは約 23 ｍである。幅は 210㎝ほどであったと推定される。断面形は緩い U 字形で、検出面からの深さは 25㎝ほどである。覆土は、ロームブロックやローム粒を含む暗褐色土が２層堆積しており、



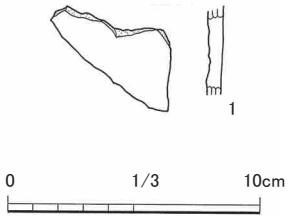
第 346 図　7SD-002 出土遺物



第 347 図　7SD-003 出土遺物



第 348 図　7SD-008 出土遺物



第 349 図　7SD-010 出土遺物

底面は硬化していた。道路として機能したものと考えられる。同じく道路として機能したと考えられる溝状遺構 7SD-003 とは土層断面の観察から当遺構のほうが新しく、7SD-003 を埋めて新たに構築したとみられる。

図示した遺物は 1 点である。第 346 図 1 はカワラケ杯である。器面は摩耗が著しく調整痕がはっきりしないが、ロクロ調整で、底部の切離しは回転糸切りと考えられる。

7SD-003（第 9・10・347 図、図版 28・105）

24F・24G・24H グリッドに所在する。北側は平成 21 年度調査の 2SD-001 と、南側は 7SD-002 と重複しながら東西方向に延びる溝状遺構で、西側は調査区外へ続くとみられる。東側は、電柱等による調査不能部分に阻まれた先で、南北方向から南西－北東方向へ屈曲して延びる溝状遺構 SD-002 と合流し、更に東の調査区外へ現道に沿って続き、君津郡市によって調査・報告された「1 号道路状遺構・8 号溝」へ続くとみられる。SD-002 との合流地点付近では、7SD-010 とも合流する。検出された長さは約 34 m、復元幅は 180㎝ほどである。断面形は V 字状であるが、底面は幅 30㎝ほどの平坦面となっている。検出面からの深さは 80㎝前後で、覆土はローム粒やロームブロックを含む硬化面をもつ黒褐色土が複数枚堆積していた。当遺構は、土層断面の観察から、同じく硬化面をもつ 7SD-002 に先行する溝状遺構とみられる。なお、合流する SD-002・7SD-010 とは、当遺構のほうが古い。2SD-001 とは、部分的に同じ遺構と考えられるところもあり、新旧関係は明確にはならなかった。

図示した遺物は 2 点である。第 347 図 1 は瀬戸･美濃製品で､志野端反皿である。口縁部は玉縁状になっている。内外面にはやや厚く釉が施されている。2 はカワラケ杯とみられる。これらのほか、SD-002 との交差部分付近の覆土中から、ウマとみられる獣骨と歯がまとまって出土した。近世のものとみられる。

7SD-005（第 10 図、図版 28）

25H・25I グリッドに所在する、東西方向に延びる溝状遺構である。西端はほぼ同軸方向で延びる SD-004 と合流し、東端は水道管等に阻まれ詳細が明らかにならないが、調査区外へ続くとみられる。検出された長さは約 18 m、幅は SD-004 との重複のないところで 95㎝である。断面形は緩い U 字形で、検出

面からの深さは 20㎝前後である。覆土は、下層に褐色土粒を含む黒褐色土、上層にロームブロックを含む黒褐色土が堆積していた。SD-004 との新旧関係は、土層断面の観察から当遺構のほうが古い。

遺物は混入品とみられる土器の小破片が少量出土したのみである。

7SD-006（第 9・10 図、図版 28）

24G グリッドに所在する南北方向の溝状遺構であるが、電柱や埋設水道管等の存在により、調査できた部分は僅かである。遺構南端は SD-002 に合流し、北端は調査不能部分に阻まれ明確にならないが、東西方向の溝状遺構 7SD-003 に合流する可能性が高い。また、東西方向に延びる溝状遺構 7SD-001・005 と交差する。検出された長さは約 5 m、幅は重複のない部分で 95㎝ほどである。断面形は緩い U 字形で、検出面からの深さは 20㎝前後である。覆土は、下層に褐色土粒を含む黒褐色土、上層にロームブロックを含む黒褐色土が堆積していた。SD-004 との新旧関係は、土層断面の観察から当遺構のほうが古い。

遺物は混入品とみられる土器の小破片が少量出土したのみである。

7SD-008（第 9・10・348 図、図版 28・109）

24H グリッドに所在する。東西方向の 7SD-003 と 7SD-009 の間でそれぞれ重複しながら並走する溝状遺構である。西端は SD-002 と合流し、東端は調査区外へと続くとみられる。検出された長さは約 8 m、幅は 110㎝ほどである。断面形は緩い U 字形で、検出面からの深さは 33㎝ほどである。覆土はローム粒・褐色土粒を若干含む黒褐色土の単層であった。ピットが集中的に検出されており、地境溝などとして機能したと考えることができる。新旧関係は、土層断面の観察から、並行して重複する 7SD-009 とは当遺構のほうが古く、合流する SD-002 とは当遺構の方が新しい。

図示した遺物は 1 点である。第 348 図 1 は当遺構と 7SD-009 から出土した破片が接合したもので、常滑片口鉢底部の転用砥石である。外面及び破断面が転用されているとみられる。内面も平滑になっているが、片口鉢としての使用痕と考えられる。

7SD-009（第 9・10 図、図版 28）

24H グリッドに所在する。東西方向の溝強遺構 7SD-008 の南側に重複しながら並走し、南北方向の溝状遺構 7SD-011 が合流する。西端は SD-002 と合流し、その先で電柱等による調査不能区域を挟み 7SD-001 に繋がる可能性が高い。東端は調査区外へ続くとみられる。検出された長さは約 12 mで、幅は 130㎝ほどである。断面形は U 字形で、検出面からの深さは 48㎝ほどである。覆土はロームブロックと炭化物を含む黒褐色土層が 2 層堆積していた。重複する 7SD-008 との新旧関係は、当遺構のほうが新しい。

第 348 図 1 は 7SD-008 出土遺物として掲載したが、当遺構から出土した破片と接合したものである。ほかには混入品と見られる土器の小破片が少量出土したのみである。

7SD-010（第 9・10・349 図、巻頭図版 7、図版 28・105）

24H グリッドに所在する。調査不能部分と複数の溝状遺構に囲まれる中、辛うじて検出された北東－南西方向の溝状遺構である。北東端は 7SD-003 に合流するが、新旧関係は当遺構のほうが新しい。南西端は SD-002 に合流すると考えられる。検出された長さは僅かに 60㎝、幅は 40㎝である。断面形は緩い U

字形で、検出面からの深さは23㎝である。覆土はロームブロック塊を若干含む黒褐色土の単層で、調査所見として新しい様相であったという。青磁片（第349図1）が覆土中から出土したが、遺構は近世以降の所産である可能性が考えられる。

図示した遺物は1点である。第349図1は青磁壺の破片である。外面は無文で、内面はロクロ目が顕著である。内外面とも施釉されオリーブ灰色を呈している。胎土は灰白色である。

7SD-011（第10図、図版28）

24H・25Hグリッドに所在する。南北方向の溝状遺構で、東西方向の溝状遺構7SD-005と7SD-009を繋ぐように存在する。それら遺構との切合い関係は認められないことから、同時に併存したものと考えられる。検出された長さは4.8 m、幅は100㎝ほどである。断面形は緩いU字形で、検出面からの深さは18㎝ほどである。

遺物は出土していない。

第10節　遺構外出土遺物

ここでは、遺構を伴わずに出土した遺物、或いは時期の異なる遺構から出土し混入品とみられる遺物をまとめて掲載する。

1　陶磁器・土器

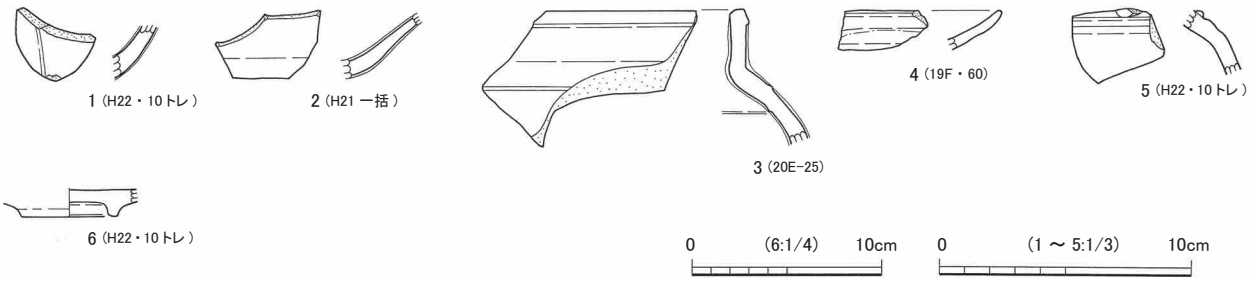
（1）貿易陶磁器（第350図、巻頭図版7、図版106）

第350図1～3は青磁、4・5は白磁、6は青白磁である。

1は青磁蓮弁文碗である。内外面に施釉されるが、釉層は薄い。2は青磁皿とみられる破片である。内外面に釉が施されている。3は青磁の酒会壺とみられる。遺存部分の外面下端に陰刻文と思われるものが少し観察されるが、文様等不明である。釉は内外面に施されるが、口唇部は拭取りされている。時期は中世前半に位置づけられるものと考えられる。表面はややざらついており、二次的に被熱したとみられる。また、図右側の破断面がやや平滑になっており、砥石として転用された可能性がある。

4は白磁の小皿である。内面全面と外面の口縁部に釉が施される。時期は15世紀代と考えられる。5は白磁壺の肩部破片であるが、外面上端部にある付着物が耳部の一部とみられることから、四耳壺であろう。2本の沈線が巡る。

6は青白磁皿である。底部の15％程度の遺存度である。削り出し高台をもつ。内外面に施釉されるが、高台端部は拭取りされている。



第350図　遺構外出土　貿易陶磁器

（2）瀬戸・美濃産陶磁器（第 351・352 図、図版 106・107）

第 351 図 1 ～ 4 は平碗である。 1 は口縁部の 25％程度の破片である。内面全体と外面の上部に灰釉が施されるが、二次的に被熱したとみられ、釉の表面はざらつき、色調も白っぽく変化している。外面下部には重ね焼きのトチン痕跡が観察される。古瀬戸後期様式Ⅳ期に位置づけられるものと考えられる。 2 も内面全体と外面の上部に灰釉が施されている。古瀬戸後期様式Ⅲ～Ⅳ期に位置づけられるものと考えられる。 3 は内外面全体に灰釉が施される。古瀬戸後期様式Ⅲ期に位置づけられるものと考えられる。 4 は内面全体と外面の上部に灰釉が施される。内面下部には重ね焼き痕がみられる。外面下端部には、僅かに削り出し高台の痕跡が認められる。古瀬戸後期様式Ⅱ～Ⅲ期に位置づけられるものと考えられる。土塁 SA-001 の下から出土した。

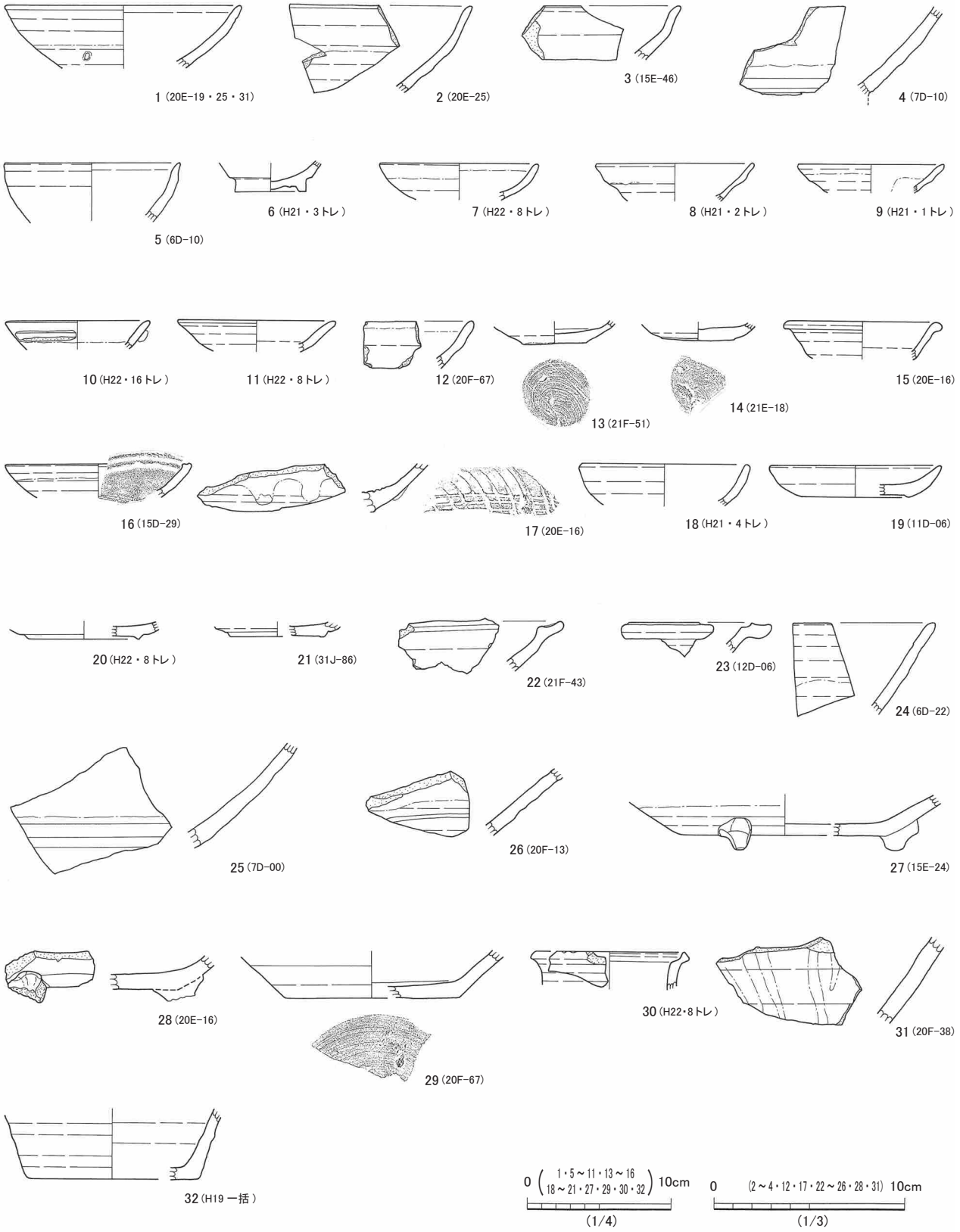
5 ・ 6 は天目茶碗である。 5 は口縁部の 25％程度の破片で、弥生時代の竪穴住居覆土から出土したものである。内外面全体に褐灰色～黒色の鉄釉がみられるが、内面は気泡が入り、表面が荒れている。古瀬戸後期様式Ⅲ期に位置づけられるものと考えられる。 6 は内面にのみ黒褐色の鉄釉がみられ、外面は露胎である。高台は削り出し高台である。大窯第 4 段階以降の所産と考えられる。

7 ～ 10･12 ～ 14 は縁釉小皿である。7 は内外面口縁部に灰釉が施される。露胎部の色調は暗灰色である。古瀬戸後期様式Ⅳ期に位置づけられるものと考えられる。8 は内面全体と外面口縁部に灰釉が施されるが、内外面の口縁部はツケガケ、内面は全体的にハケ塗りによって施されている。 9 は内外面の口縁部に灰釉が施されるが、内面は遺存部下方まで釉が垂れている。被熱したとみられ、釉の色調は灰白色～灰オリーブ色を呈し、表面がざらついている。古瀬戸後期様式Ⅳ期に位置づけられるものと考えられる。10 は内外面に灰釉が施されるが、外面には、別個体の口縁部の破片が釉で密着している。重ね焼き後、剥離に失敗したものとみられる。古瀬戸後期Ⅲ期に位置づけられるものと考えられる。12 の灰釉は光沢のない灰オリーブ色で、被熱して劣化しているとみられる。古瀬戸後期様式Ⅳ期新段階に位置づけられるものであろうか。13 は底部のみ全部遺存しており、内外面に点状に少量の灰釉がみられる。古瀬戸後期様式Ⅲ～Ⅳ期に位置づけられるものと考えられる。14 は底部の 60％程度の遺存度である。内外面に点状に少量の鉄釉がみられる。古瀬戸後期様式、恐らくⅣ期に位置づけられるものであろう。11 は皿類で、口縁部の 10％程度の破片である。内外面全体的に灰釉が施されている。

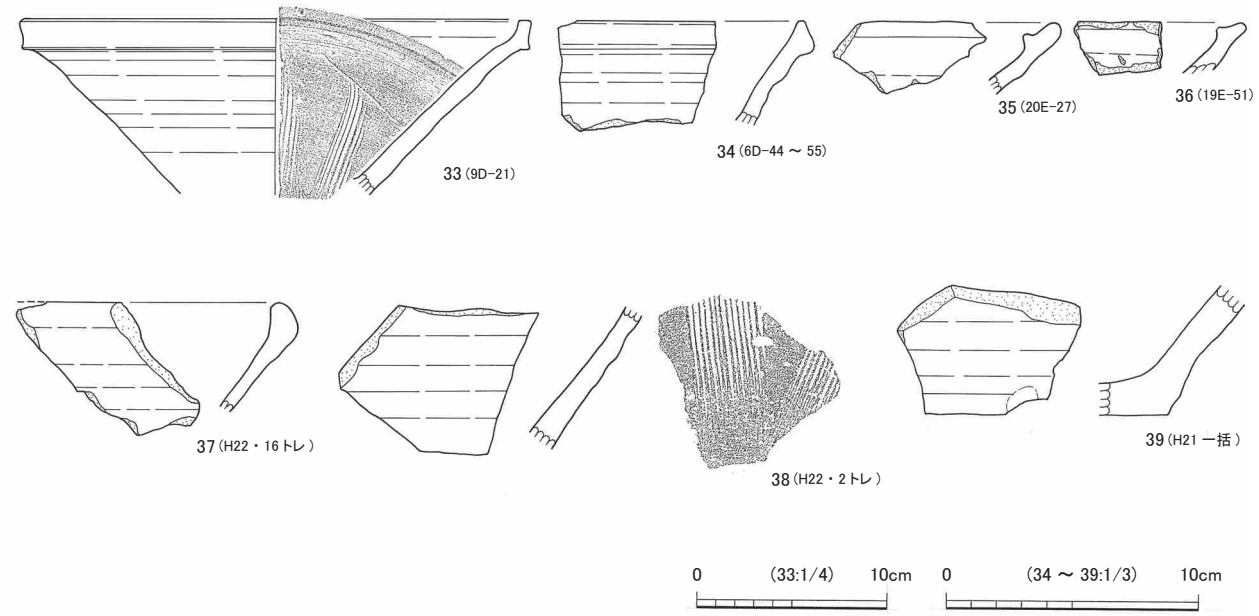
15 は小鉢とみられる。内外面とも灰釉が施される。古瀬戸後期様式Ⅲ期に位置づけられるものと考えられる。

16・17 は卸皿である。16 は口縁部の 20％程度の破片で、内面下端部に僅かに卸目が確認できる。口唇部と外面口縁部に薄く灰釉が施されている。古瀬戸後期様式Ⅲ期に位置づけられるものと考えられる。17 は内外面の遺存部上部に灰釉が施される。古瀬戸後期様式Ⅲ～Ⅳ期に位置づけられるものと考えられる。

18 ～ 21 は志野丸皿である。18 は、口縁部の 10％程度の破片である。釉は、内面は全体的に、外面は口縁部付近に施され、外面下部は露胎である。近世以降の所産と考えられる。19 の高台は削り出し高台である。内外面全面に釉が施されている。大窯第 4 段階の所産と考えられる。20 の高台は削り出し高台である。内外面に釉が施されている。大窯第 4 段階以降の所産と考えられる。21 は弥生時代の竪穴住居覆土から出土したものである。内外面全体に施釉されるが、高台内部は拭取りされている。高台は削り出し高台である。



第 351 図　遺構外出土　瀬戸・美濃産陶磁器（1）



第 352 図　遺構外出土　瀬戸・美濃産陶磁器（2）

22・23 は折縁深皿である。22 は内外面全体に灰釉が施されるが、被熱により劣化している。古瀬戸後期様式Ⅳ期新段階に位置づけられるものと考えられる。23 は内外面に灰釉が施されている。古瀬戸後期様式Ⅲ期に位置づけられると考えられる。

24 は直縁大皿である。内外面のそれぞれ上半部にのみ灰釉が施釉され、内面には帯状の重ね焼き痕が認められる。古瀬戸後期様式Ⅲ期に位置づけられるものと考えられる。

25 ～ 29 は盤類で、折縁深皿又は直縁大皿とみられる。25 は内外面に灰釉が施されるが、内面全体に薄くハケ塗りした後、内外面上部にツケガケを行っているものとみられる。露胎部の色調は灰黄色である。古瀬戸後期様式Ⅲ期に位置づけられるものであろうか。土塁 SA-001 の下から出土した。26 は内面全体と外面の上部に灰釉が施されるが、内面は拭取りされている。釉は被熱し劣化している。古瀬戸後期様式に位置づけられるものと考えられる。27・28 はいずれも獣脚が 1 か所残存する破片であるが、28 の脚端部は破損している。27 は底部の 15％程度の破片で、内面全体に灰釉が薄く施される。施釉はハケ塗りによるとみられる。外面は上部に灰釉が施され、ほかは露胎である。古瀬戸後期様式Ⅲ期に位置づけられるものと考えられる。28 は内面体部に少量の黄白色の灰釉がみられ、外面は露胎である。古瀬戸後期様式Ⅲ～Ⅳ期に位置づけられるものであろうか。29 は内面に灰釉がハケ塗りされている。外面は露胎である。釉の色調は白色である。露胎部分の色調は暗黄褐色を呈している。古瀬戸後期様式Ⅱ～Ⅲ期に位置づけられるものであろうか。

30 は片口瓶で、内外面全体に灰釉が施される。古瀬戸後期様式Ⅳ期に位置づけられるものと考えられる。

31 は瓶壺類の胴部下半分とみられる破片である。外面に灰釉が薄く施されるが、縦帯状に細く釉が剥げている部分がある。被熱して剥落したものとみられる。古瀬戸前期様式～後期様式に位置づけられる可能性があるが、恐らく後期であろう。

32 は鉢であろうか。底部の 10％程度の破片である。内外面に鉄釉が施されるが、外面底部には部分的にしか釉がみられず、回転糸切り痕が残されている。

第 352 図 33 ～ 39 は擂鉢である。33・34 は Ⅰ 類に分類されるもので、内外面に錆釉が施される。33

は口縁部の 25％程度の破片である。大窯第３段階に比定されるものと考えられる。34 は大窯第１段階に比定されるものと考えられる。35 は内外面に錆釉が施される。器面は被熱して劣化している。古瀬戸後期様式Ⅳ期新段階に位置づけられるものと考えられる。36 も内外面に鉄釉が施され、古瀬戸後期様式Ⅳ期新段階に位置づけられるものと考えられる。37 も内外面に錆釉が施される。遺存部分には、擂目はない。古瀬戸後期様式Ⅳ期新段階に位置づけられるものと考えられる。38・39 も内外面に錆釉が施される。いずれも内面はかなり使い込まれたとみられ、著しく摩耗し擂目が一部消えている。39 は土塁 SA-001 下から出土した。

（３）常滑産陶磁器（第 353 図、図版 94・107・108）

第 353 図１～９は片口鉢である。１は全体の 25％程度の遺存度で、片口部分が遺存している。９型式に比定されるものと考えられる。２は 10 型式に比定されるものと考えられる。３は外面に重ね焼き痕がみられる。８型式に比定されるものと考えられる。４は９型式に比定されるものと考えられる。５は内面に指頭圧痕が残されており、使用痕はみられない。８型式に比定されるものである。６は 10 型式に比定されるものと考えられる。７は底部の 20％程度の破片である。８は底部の 15％程度の破片である。内面は使用により摩耗している。外面底部も二次的な使用によるものか、摩耗している。９は底部の 10％程度の破片である。色調は外面と内面上部は赤褐色、内面下部は暗灰色を呈している。

10 ～ 13 は甕である。10 は灰色～暗灰色を呈している。６ｂ型式に比定されるものであろうか。11 は表面の欠損・摩滅が著しいが、９～ 10 型式に位置づけられるものとみられる。12 は内外面に自然釉がみられる。９型式に位置づけられるものであろうか。13 は外面にハケ調整痕が僅かに残存する。９型式に比定されるものと考えられる。右側下部の破断面が平滑になっており、砥石として転用されたとみられる。

14 は広口壺である。内外面に自然釉がかかっている。15 も壺の肩部付近の破片で、恐らく広口壺であろう。肩部に縦に２条の沈線が刻まれている。色調は内外面とも暗灰色を呈している。

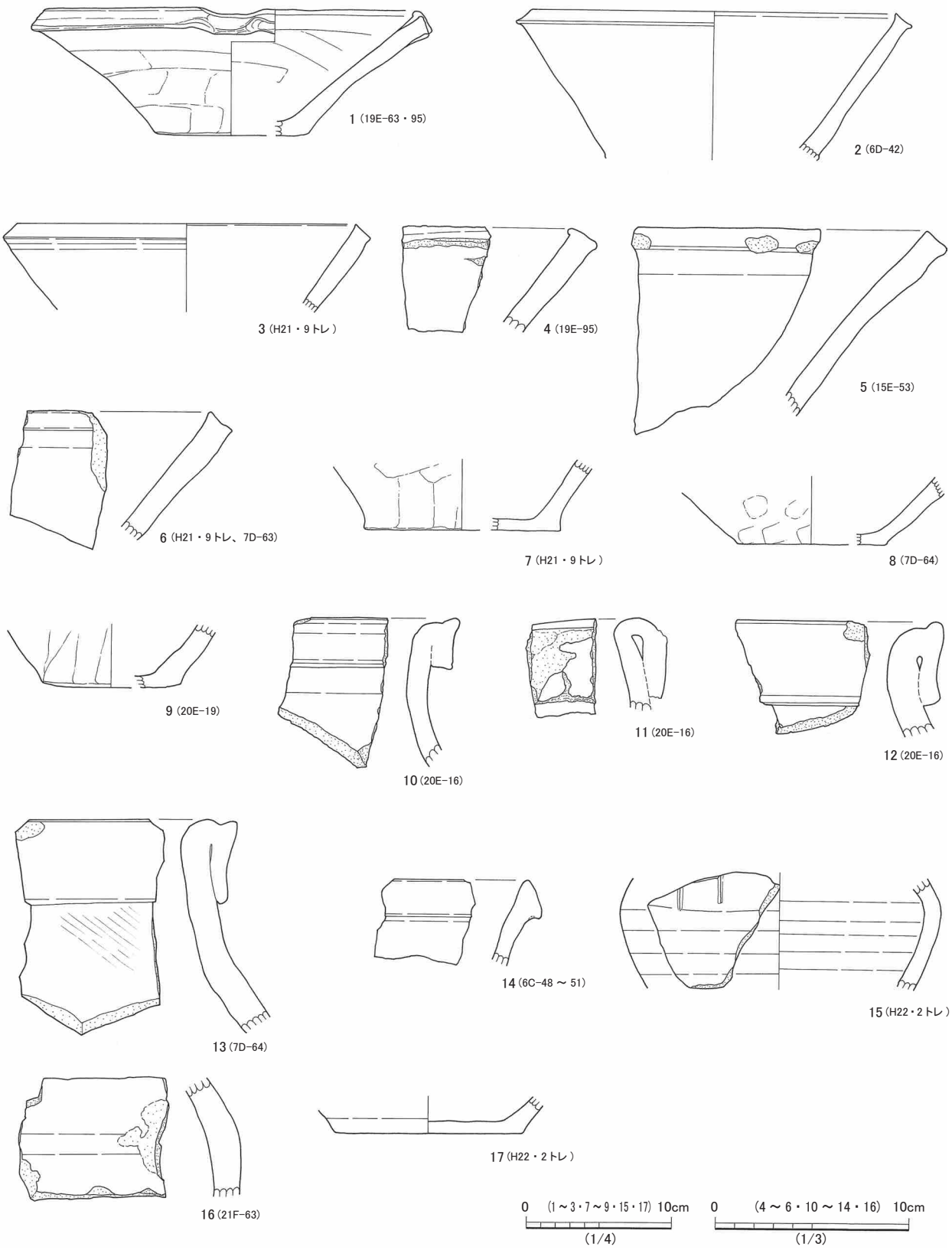
16 は甕である。外面全体に自然釉がみられる。17 は甕又は壺の底部破片である。底部は未調整である。

（４）土器（第 354 図、図版 94・108）

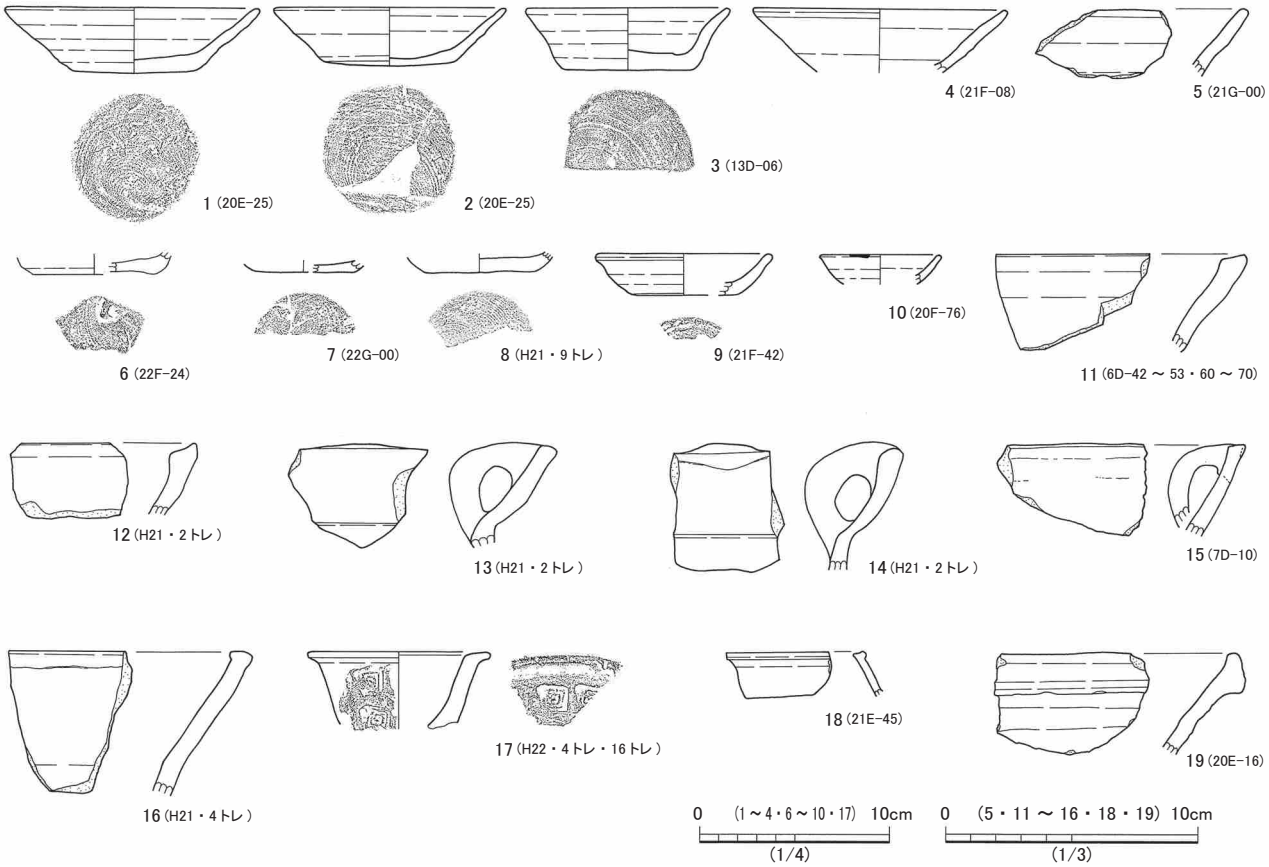
第 354 図１～８はカワラケ杯である。１は全体の 30％程度の遺存度である。復元口径は 13.2㎝で、底部から口縁部まで直線的に開く形状である。胎土に白色針状物質や雲母を少量含む。２は全体の 50％程度の遺存度で、１と同様の胎土、器形である。３は全体の 40％程度の遺存度である。胎土には赤色スコリアと少量の白色針状物質・雲母を含む。器面は摩耗している。４は口縁部の 30％の破片である。胎土に白色針状物質を少量含む。焼成は比較的良好である。５は胎土に白色針状物質と少量の雲母を含む。６は底部の 25％程度の破片である。器面が摩耗している。弥生時代の竪穴住居覆土から出土した。７は底部の 40％程度の破片である。８は底部の 30％程度の破片である。胎土に雲母が少量含まれる。

９・10 はカワラケ小皿である。９は全体の 20％程度の破片である。胎土に白色針状物質や雲母を少量含む。10 は口縁部の 25％程度の破片である。遺存部の口唇部には煤が付着している。

11・12 は在地産擂鉢である。いずれも胎土に白色粒子を少量含み、色調は内外面とも黒褐色を呈している。破片には擂目はみられない。出土位置は互いに近く、同一個体の可能性もある。



第 353 図　遺構外出土　常滑産陶磁器



第 354 図　遺構外出土　土器

13 ～ 16 は内耳土鍋で、13 ～ 15 は内耳部分の破片である。13 と 14 は外面が明瞭に屈曲して開く形である。両者は作りや胎土等似ており、また出土位置も近いことから、同一個体の可能性がある。15 は、土塁 SA-001 下から出土した破片である。器厚が薄く、口縁部に角度がついている。また、口縁部は外面にやや折り返される。耳の部分は口縁部に沿って貼り付けられており、その幅は細く 9 ㎜ほどしかない。16 は耳のない部分であるが、器厚が薄く、口縁部の形状や胎土等が 15 に類似しており、15 と同一個体の可能性がある。

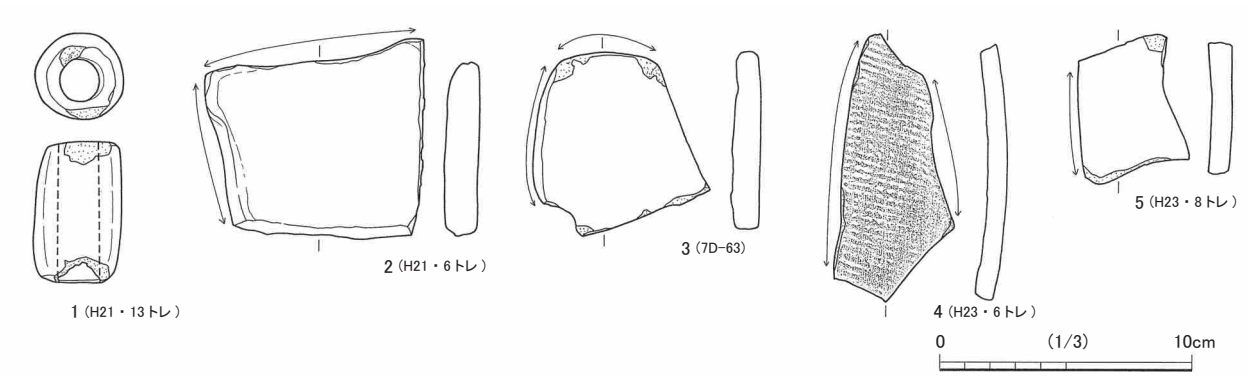
17 は土師質土器である。接合しない 2 破片であるが、復元口径は 9.6㎝、現存器高 4.1㎝である。外面に押印文が上下 2 段に施される。胎土に赤色スコリア、白色粒子を含む。色調は内外面とも明赤褐色を呈している。近世の所産とみられる。

18 は東海系羽釜である。内外面とも灰白色を呈し、外面には一部薄く煤けている部分がある。胎土は緻密で、混入物はほとんど認められない。

19 は東播系中世須恵器と考えられるもので、魚住窯産であろうか。器種は片口鉢とみられ、13 世紀前半頃に比定される可能性がある。外面口縁部に自然釉がかかる。胎土には白色粒子を少量含み、色調は灰色を呈している。

2　土製品（第 355 図、図版 109・110）

第 355 図 1 は土錘である。上下端は面取りされている。上下端部が破損しているが、使用によるものかもしれない。胎土に白色粒子を多量に含む。色調は赤褐色を呈し、焼成は良好である。2～5は転用砥石である。2は常滑甕の破片で、破断面のほか内外面も使用されている。3も常滑甕の破片で、破断面及び外面が使用されている。外面には自然釉がみられる。4は須恵器甕の転用である。外面には格子目状の叩き目、内面には同心円状の当て具痕がみられる。破断面を使用している。5も須恵器甕の転用で、破断面が使用されているが、内面も平滑で使用された可能性がある。



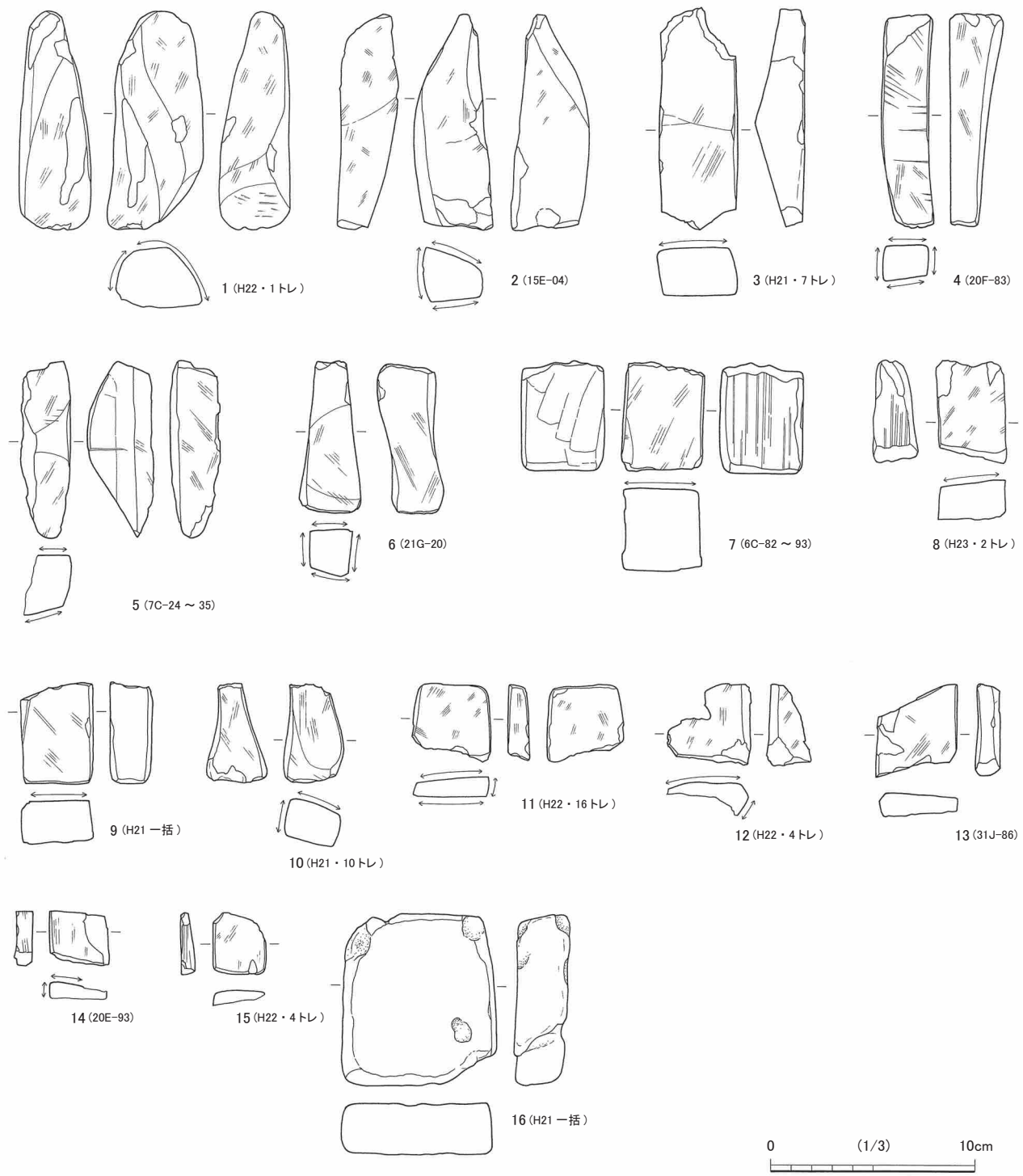
第 355 図　遺構外出土　土製品

3　石器・石製品（第 356 図、図版 113）

第 356 図 1 ～ 15 は砥石である。1はほぼ完形である。2・4は下端を欠損する。3・8・11・13・14 は上下端を欠損する。5・15 は上端と裏面を欠損する。6・7・9・10 は上端を欠損する。12 は上下端及び裏面を欠損し一部しか遺存していないが、砥石とみられる。16 は、砥石であろうか。極めて軟質な軽石製で摩耗が著しく、使用痕や調整痕等観察できない。現状で直方体状を呈しており、あたかも完形のように見えるが、同一個体と思われる接合しない破片が別に存在しており、その厚さ等から、少なくとも表面と裏面以外の面で欠損しているものと考えられる。

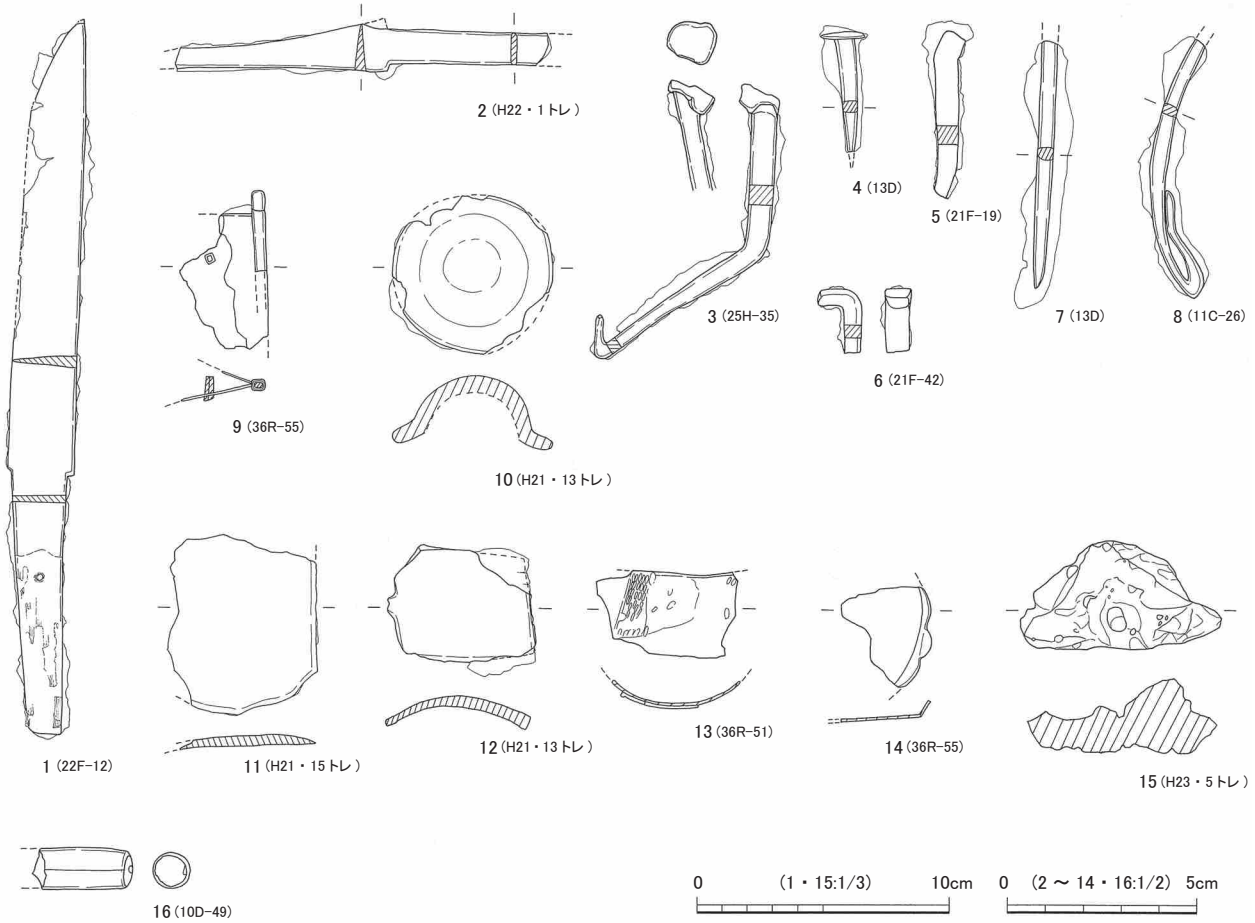
4　金属製品（第 357 図、図版 115・119・120・121）

第 357 図 1 は 22F-12 グリッドから出土した短刀である。ピットが群在する地点から出土したが、特に遺構は検出されなかった。切先を僅かに欠くが、現存長は 28.0㎝、刀身長 17.8㎝、茎長 10.2㎝である。刀身部の最大幅は 2.5㎝、背厚の最大厚は 0.5㎝である。柄部分には木質が若干遺存し、目釘穴が 1 か所認められる。2は小柄小刀である。切先と茎の端部をそれぞれ欠損している。3～8は鉄釘である。3は完形とみられる。中間部と端部が屈曲している。4は下端部を欠損する。5は錆のためはっきりしないが、頭部と下端部を欠損するようである。6は頭部の破片である。7は錆膨れが著しいが、頭部を欠損する釘と考えられる。8は、頭部を欠損する。下端部は、X線写真の観察によると、かなり屈曲しているようである。9は、蝶番の破片とみられる。長さ 6 ㎜ほどの断面四角形の目釘が遺存している。10 は、錆膨れがひどく詳細は明らかでないが、厚さ 0.5㎝の円形の鉄板の中央部が高く打ち出され、帽子のような形状を呈している。11 は板状の鉄製品であるが、断面形は裏面が平坦で表面は縁辺部が薄くなる形状である。12 は



第 356 図　遺構外出土　石器・石製品

板状の鉄製品で、厚さ 0.3㎝の鉄板が反るように曲げられている。左側面には細い柄が付くような折れ面が認められる。13 は厚さ 2 ㎜ほどの帯状の鉄板にカーブを付け輪状にしたものである。帯の幅は現状で 2.3 ㎝であるが、下端は折れており、本体はもっと幅広であったとみられる。表裏面に布目痕のようなものが観察される。14 は円形を呈する板状の鉄製品の破片とみられる。板の厚さは 0.1㎝ほどで、フリル状の縁辺部が垂直に立つ。15 は椀形滓である。16 は煙管の破片である。



第357図　遺構外出土　金属製品

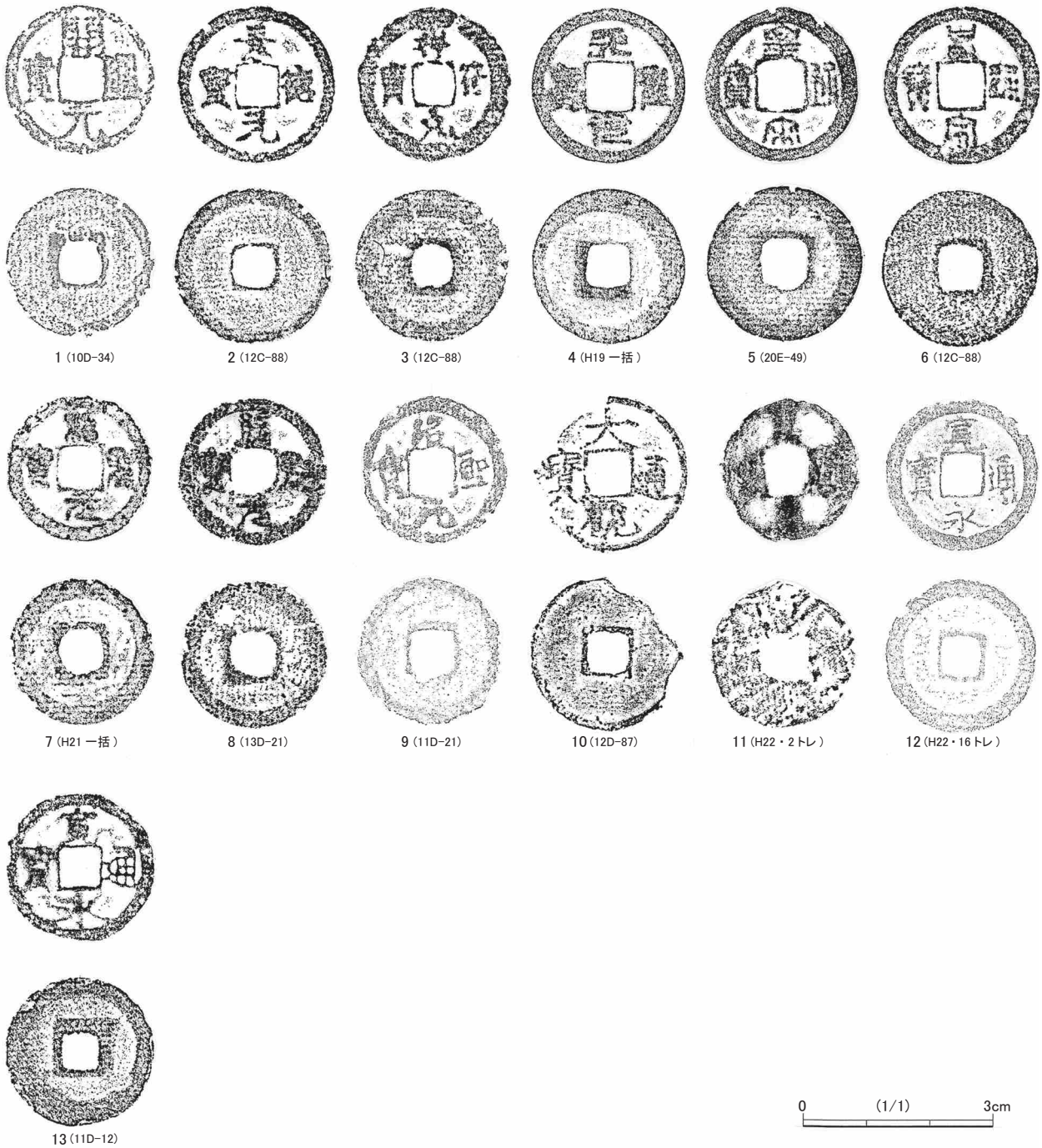
5　銭貨（第358図・図版124）

第358図1は開元通寶である。背面は無文とみられる。2は景徳元寶である。3は祥符元寶である。4は天聖元寶である。書体は篆書である。5・6は皇宋元寶である。いずれも書体は篆書である。7～9は紹聖元寶で、書体は7・8が篆書で9が行書である。いずれも背面は無文である。10は大観通寶である。11は表面を内側にしてV字状に折れ曲がってしまっている。ちょうど上下の文字の部分で谷折り状に折れ曲がっているとみられ、実物からはもちろん、辛うじて採拓した拓影図からも銭文を読み取ることは困難で、銭種は不明である。12・13は寛永通寶である。13は腐食している。

ほかに、図示はしていないが、平成22年度調査10トレンチ及び15D-57・15E-03グリッドから、それぞれ銭貨の小破片が出土している。3点の銭貨はいずれも大破しており、銭種も不明である。

6　火葬人骨（第10図・図版110）

溝状遺構SD-004の南側、25H-11グリッドで出土し、一括で取り上げられた人骨である。周辺にはピットが群在しているが、人骨に伴う遺構や遺物は検出されなかった。人骨は強い火を受けて灰白色化し、ひび割れの著しい骨が100 g取り上げられている。小片のみだが、四肢骨と肋骨がみられる。火葬人骨と推定される。時期は明らかにはならないが、周辺の遺構の状況から、中・近世の可能性が高いと考えられる。



第 358 図　遺構外出土　銭貨

第 15 表　掲載陶磁器・土器一覧表

挿図番号	調査年度	遺構番号(報告時)	産地	器種	編年等	法量:cm　()復元・現存値			備考
						口径	底径	器高	
第 98 図 1	H20	SK-052	在地	カワラケ小皿		(8.9)	—	(2.1)	
第 99 図 1	H20	SK-065	瀬戸・美濃	平碗	古後Ⅲ	—	5.0	(2.3)	灰釉
第 99 図 2	H20	SK-065	瀬戸・美濃	平碗	古後Ⅰ～Ⅱ	—	—	(2.4)	灰釉
第 99 図 3	H20	SK-065	瀬戸・美濃	盤類	古後Ⅲ	—	—	(3.3)	折縁深皿か、灰釉
第 99 図 4	H20	SK-065	瀬戸・美濃	縁釉小皿	古後Ⅳ新	11.3	6.3	2.5	灰釉
第 99 図 5	H20	SK-065	常滑	甕	8型式	—	—	5.8	
第 99 図 6	H20	SK-065	在地	カワラケ小皿		7.7	4.6	1.8	口唇部煤付着
第 99 図 7	H20	SK-065	在地	カワラケ杯		—	(6.0)	1.7	
第 100 図 1	H20	SK-073	在地	カワラケ杯		—	—	(2.6)	
第 101 図 1	H20	SK-082	在地	カワラケ杯		—	(7.8)	(2.3)	器面摩耗
第 101 図 2	H20	SK-082	在地	カワラケ小皿		—	(6.0)	(1.3)	器面摩耗
第 103 図 1	H21	SK-116	常滑	片口鉢	10型式	—	—	(4.8)	
第 103 図 2	H21	SK-116	在地	擂鉢	古後Ⅳ新併行	29	12.6	12.0	
第 104 図 1	H22	4SK-012	常滑	大甕	5型式	(37.6)	—	(23.0)	肩部に押印帯
第 104 図 2	H22	4SK-012	在地	カワラケ杯		(11.8)	(7.4)	(2.7)	器面摩耗
第 106 図 1	H22	4SK-039	瀬戸・美濃	縁釉小皿	古後Ⅳ	9.8	4.4	2.2	灰釉
第 106 図 2	H22	4SK-039	在地	瓦質土器		(10.2)	—	(2.9)	
第 107 図 1	H22	4SK-045	東海系	甕		—	—	(5.3)	渥美窯か、内面転用か
第 109 図 1	H22	4SK-085	在地	カワラケ杯		(10.4)	—	(2.3)	
第 109 図 2	H22	4SK-085	在地	カワラケ小皿		—	4.0	(0.6)	
第 114 図 1	H22	4SK-092	中国	青磁鉢		—	—	(2.6)	龍泉窯系
第 114 図 2	H22	4SK-092	瀬戸・美濃	縁釉小皿	古後Ⅳ	(11.0)	—	(3.0)	灰釉
第 114 図 3	H22	4SK-092	瀬戸・美濃	丸碗	大窯	(12.2)	—	(3.0)	灰釉
第 114 図 4	H22	4SK-092	瀬戸・美濃	折縁深皿	古後Ⅳ古	—	—	(2.1)	灰釉
第 114 図 5	H22	4SK-092	瀬戸・美濃	擂鉢	古後Ⅳ新	—	(12.0)	(5.4)	錆釉
第 114 図 6	H22	4SK-092	瀬戸・美濃	擂鉢		—	—	(3.8)	錆釉
第 114 図 7	H22	4SK-092	常滑	甕		—	(16.0)	(6.0)	
第 114 図 8	H22	4SK-092	在地	カワラケ杯		(19.0)	(7.4)	(4.5)	
第 114 図 9	H22	4SK-092	在地	カワラケ杯		14.4	7.0	3.3	
第 114 図 10	H22	4SK-092	在地	カワラケ杯		(12.0)	7.0	3.0	
第 114 図 11	H22	4SK-092	在地	カワラケ杯		12.6	6.8	2.8	
第 114 図 12	H22	4SK-092	在地	カワラケ杯		(12.4)	6.6	2.7	
第 114 図 13	H22	4SK-092	在地	カワラケ杯		12.4	6.2	2.8	
第 114 図 14	H22	4SK-092	在地	カワラケ杯		(11.6)	(6.0)	2.6	
第 115 図 15	H22	4SK-092	在地	カワラケ杯		12.4	6.0	3.3	
第 115 図 16	H22	4SK-092	在地	カワラケ杯		(12.0)	(6.6)	2.8	
第 115 図 17	H22	4SK-092	在地	カワラケ杯		—	(8.0)	(1.5)	
第 115 図 18	H22	4SK-092	在地	カワラケ杯		—	(8.0)	(1.3)	
第 115 図 19	H22	4SK-092	在地	カワラケ杯		—	(7.0)	(1.3)	
第 115 図 20	H22	4SK-092	在地	カワラケ杯		—	(7.4)	(3.2)	
第 115 図 21	H22	4SK-092	在地	カワラケ杯		—	5.4	(1.4)	器面摩耗
第 115 図 22	H22	4SK-092	在地	カワラケ杯		—	(7.0)	(2.5)	
第 115 図 23	H22	4SK-092	在地	カワラケ杯		—	(6.0)	(1.3)	
第 115 図 24	H22	4SK-092	在地	カワラケ杯		—	(7.4)	(1.2)	器面摩耗
第 115 図 25	H22	4SK-092	在地	カワラケ杯		—	(5.4)	(1.2)	器面摩耗
第 115 図 26	H22	4SK-092	在地	カワラケ小皿		8.0	5.0	21.0	口唇部煤付着
第 115 図 27	H22	4SK-092	在地	カワラケ小皿		8.0	5.0	1.7	
第 115 図 28	H22	4SK-092	在地	カワラケ小皿		8.0	5.0	1.5	外面煤付着
第 115 図 29	H22	4SK-092	在地	カワラケ小皿		7.6	2.2	1.8	
第 115 図 30	H22	4SK-092	在地	カワラケ小皿		7.6	5.0	1.8	
第 115 図 31	H22	4SK-092	在地	カワラケ小皿		(8.0)	(4.4)	2.0	
第 115 図 32	H22	4SK-092	在地	カワラケ小皿		—	4.0	(0.6)	
第 115 図 33	H22	4SK-092	在地	カワラケ小皿		—	(4.0)	(1.2)	
第 117 図 1	H22	4SK-101	在地	擂鉢		—	—	(3.1)	
第 121 図 1	H20	SI-025	瀬戸・美濃	天目茶碗	古後Ⅱ～Ⅲ	(13.1)	—	(5.7)	鉄釉
第 123 図 1	H20	SI-028	常滑	甕	8型式	—	—	(5.9)	
第 133 図 1	H20	SK-011	瀬戸・美濃	皿	古後Ⅱ	—	(8.0)	(1.7)	折縁中皿か、灰釉
第 136 図 1	H20	SK-038	在地	カワラケ小皿		(7.0)	(4.6)	(1.8)	口唇部煤付着
第 139 図 1	H20	SK-050	瀬戸・美濃	平碗	古後	—	—	(2.8)	灰釉
第 139 図 2	H20	SK-050	瀬戸・美濃	折縁深皿	古後Ⅳ新	—	—	(6.8)	灰釉
第 139 図 3	H20	SK-054	在地	カワラケ小皿		—	—	2.1	口唇部・内面煤付着
第 141 図 1	H20	SK-061	中国	青磁端反碗		—	—	(2.5)	龍泉窯系
第 141 図 2	H20	SK-061	瀬戸・美濃	折縁深皿	古後Ⅳ新	—	—	(2.6)	灰釉
第 141 図 3	H20	SK-061	在地	カワラケ杯		(12.6)	(6.3)	(3.6)	
第 141 図 4	H20	SK-061	在地	カワラケ杯		(12.1)	(6.1)	(3.0)	
第 141 図 5	H20	SK-061	在地	カワラケ杯		(13.7)	—	(3.7)	
第 141 図 6	H20	SK-061	在地	カワラケ杯		(12.0)	—	(2.3)	
第 141 図 7	H20	SK-060	常滑	壺		—	—	(17.6)	接合しない2破片
第 141 図 8	H20	SK-061	東海系	羽釜		(22.2)	—	(5.4)	
第 142 図 1	H20	SK-069	瀬戸・美濃	皿		—	(7.4)	(2.1)	灰釉
第 142 図 2	H20	SK-069	常滑	片口鉢	7型式	—	—	(2.9)	
第 144 図 1	H21	SK-099	瀬戸・美濃	縁釉小皿	古後Ⅳ新	—	—	(3.0)	灰釉
第 149 図 1	H22	4SK-005	瀬戸・美濃	入子	古中	8.4	5.0	3.0	紅皿として使用
第 149 図 2	H22	4SK-005	瀬戸・美濃	花瓶	古中	—	—	(7.8)	ＩＢ類、鉄釉
第 150 図 1	H22	4SK-008	瀬戸・美濃	縁釉小皿		—	(5.0)	(0.9)	
第 152 図 1	H22	4SK-010	在地	瓦質土器		—	—	(5.1)	火鉢か
第 154 図 1	H22	4SK-013	常滑	片口鉢	5型式	—	—	(3.7)	Ⅰ類
第 154 図 2	H22	4SK-013	在地	カワラケ小皿		(8.0)	—	(1.6)	器面摩耗
第 155 図 1	H22	4SK-016	中国	青磁鎬蓮弁文碗		—	—	(5.5)	龍泉窯系
第 157 図 1	H22	4SK-024	中国	青磁双魚文皿		—	—	(0.6)	
第 157 図 2	H22	4SK-024	在地	カワラケ杯		—	—	(3.2)	
第 160 図 1	H22	4SK-028	在地	カワラケ杯		—	(7.2)	(1.6)	器面摩耗
第 165 図 1	H22	4SK-036	常滑	広口壺	5型式	(24.4)	—	(4.2)	
第 171 図 1	H22	4SK-047	瀬戸・美濃	反り皿	連房	(13.0)	(7.4)	(3.0)	灰釉
第 171 図 2	H22	4SK-047・4SD-024	瀬戸・美濃	志野菊皿	大窯4末	12.0	6.4	2.5	
第 171 図 3	H22	4SK-047	瀬戸・美濃	志野稜皿	大窯	—	(7.0)	(1.5)	
第 171 図 4	H22	4SK-047	瀬戸・美濃	志野稜皿	大窯	—	7.2	(0.9)	
第 171 図 5	H22	4SK-047	瀬戸・美濃	輪禿皿		—	6.4	(1.8)	灰釉
第 171 図 6	H22	4SK-047	瀬戸・美濃	輪禿皿		—	(6.0)	(1.8)	飴釉
第 171 図 7	H22	4SK-047・4SD-019	瀬戸・美濃	盤類	大窯後～連房	(21.0)	(17.0)	(6.6)	灰釉
第 171 図 8	H22	4SK-047	瀬戸・美濃	擂鉢		—	(12.0)	(2.5)	錆釉
第 171 図 9	H22	4SK-047	備前	擂鉢		—	—	(5.6)	底部外面転用か
第 173 図 1	H22	4SK-067・4SK-068・15E-22	中国	染付皿		(11.0)	(5.4)	(2.9)	
第 173 図 2	H22	4SK-070	中国	染付皿		(13.2)	(8.0)	(2.7)	
第 173 図 3	H22	4SK-068・069	瀬戸・美濃	天目茶碗	大窯3	(12.0)	—	(7.0)	鉄釉
第 173 図 4	H22	4SK-069	瀬戸・美濃	反り皿	大窯3	13.4	7.6	3.3	灰釉
第 173 図 5	H22	4SK-069・10D-49	瀬戸・美濃	志野丸皿	大窯3後	10.8	6.2	2.4	
第 173 図 6	H22	4SK-068	瀬戸・美濃	擂鉢		—	—	(3.3)	錆釉
第 173 図 7	H22	4SK-067	瀬戸・美濃	擂鉢		—	—	(4.4)	錆釉
第 173 図 8	H22	4SK-069	瀬戸・美濃	擂鉢		—	(12.8)	(9.5)	錆釉

挿図番号	調査年度	遺構番号(報告時)	産地	器種	編年等	法量:cm ()復元・現存値 口径	底径	器高	備考
第 178 図 1	H22	4SK-084	在地	擂鉢	古後Ⅳ新併行	(26.6)	—	(9.8)	
第 178 図 2	H22	4SK-084	在地	カワラケ杯		—	(6.4)	(2.4)	
第 182 図 1	H22	4SK-090	瀬戸・美濃	輪禿皿		—	6.4	1.6	灰釉
第 182 図 2	H22	4SK-090	常滑	片口鉢	8型式	—	—	(3.2)	
第 182 図 3	H22	4SK-090	常滑	壺or甕		—	—	(4.0)	
第 196 図 1	H24	6SK-129	在地	カワラケ杯		—	—	(2.6)	
第 197 図 1	H24	6SK-133	在地	瓦質香炉		(10.0)	—	(2.2)	
第 198 図 1	H22	4SE-001	在地	カワラケ杯		—	—	(1.2)	
第 200 図 1	H24	6SE-005	常滑	大甕	9型式	(42.0)	—	(15.4)	
第 225 図 1	H20	SK-044	瀬戸・美濃	盤類	古後	—	—	(4.9)	折縁深皿or直縁大皿、灰釉
第 225 図 2	H20	SK-045	在地	カワラケ杯		—	(6.0)	(1.9)	
第 228 図 1	H20	SK-067	不明	緑釉小皿		(10.6)	4.3	2.7	知多半島系、鉄釉
第 229 図 1	H20	SK-072	瀬戸・美濃	豆皿		5.6	2.8	1.9	鉄釉
第 235 図 1	H21	SK-093	常滑	片口鉢		—	(10.8)	(5.5)	
第 251 図 1	H21	SK-119	常滑	片口鉢	9型式	(28.4)	—	(8.9)	
第 260 図 1	H22	4SK-006	中国	青磁洗		—	—	(5.1)	
第 260 図 2	H22	4SK-006	瀬戸・美濃	緑釉小皿		—	(5.8)	(1.9)	灰釉
第 260 図 3	H22	4SK-006	常滑	片口鉢		—	(10.0)	(4.9)	
第 260 図 4	H22	4SK-006	常滑	片口鉢	9型式	(26.0)	—	(4.8)	
第 260 図 5	H22	4SK-006	常滑	甕	9型式	—	—	(9.1)	
第 260 図 6	H22	4SK-006	常滑	甕		—	—	(5.4)	外面に押印文
第 266 図 1	H22	4SK-043	常滑	片口鉢	10型式	—	—	(3.2)	
第 268 図 1	H22	4SK-049	常滑	片口鉢	10型式	—	—	(4.4)	
第 268 図 2	H22	4SK-049	常滑	片口鉢		—	(9.8)	(2.9)	
第 269 図 1	H22	4SK-053	中国	青磁碗		—	—	(2.7)	
第 269 図 2	H22	4SK-053	在地	カワラケ小皿		6.1	4.0	1.1	器面摩耗
第 271 図 1	H22	4SK-056	常滑	片口鉢		—	—	(5.2)	
第 278 図 1	H22	4SK-074	在地	擂鉢	古後Ⅳ併行	—	—	(5.9)	
第 278 図 2	H22	4SK-074	備前	擂鉢		—	—	(7.0)	
第 278 図 3	H22	4SK-074	在地	カワラケ小皿		—	(5.0)	(1.0)	
第 282 図 1	H22	4SK-103	瀬戸・美濃	折縁深皿	古後Ⅲ	(27.8)	—	(7.1)	灰釉
第 283 図 1	H22	4SK-113	瀬戸・美濃	緑釉小皿		—	(6.0)	(1.2)	内外面転用か
第 283 図 2	H22	4SK-113	瀬戸・美濃	擂鉢		—	—	(3.1)	錆釉
第 283 図 3	H22	4SK-113	常滑	甕	9型式	—	—	(10.3)	器面摩滅・剥落
第 295 図 1	H21	SD-027	中国	青磁酒会壺		—	—	(3.0)	
第 295 図 2	H21	SD-027	瀬戸・美濃	天目茶碗	古後Ⅲ	(11.0)	—	(3.8)	鉄釉
第 295 図 3	H21	SD-027	瀬戸・美濃	緑釉小皿	古後Ⅳ	(10.0)	—	(2.5)	灰釉
第 295 図 4	H21	SD-027	瀬戸・美濃	折縁皿	大窯4後	11.5	6.3	2.2	灰釉
第 295 図 5	H21	SD-027	瀬戸・美濃	志野丸皿	大窯4末	—	(6.0)	(0.8)	
第 295 図 6	H21	SD-027	瀬戸・美濃	直縁大皿	古後Ⅲ	(30.0)	—	(4.7)	灰釉
第 295 図 7	H21	SD-027	常滑	片口鉢	10型式	—	—	(4.1)	
第 295 図 8	H21	SD-027	瀬戸・美濃	擂鉢	古後Ⅳ	—	—	(4.2)	錆釉
第 295 図 9	H21	SD-027・15トレンチ	瀬戸・美濃	擂鉢	古後Ⅳ新	—	(8.8)	(4.5)	錆釉
第 295 図 10	H21	SD-027	備前	擂鉢		—	(13.6)	(4.3)	
第 295 図 11	H21	SD-027	常滑	甕	10型式	—	—	(8.3)	
第 296 図 1	H21	SA-001	常滑	片口鉢		—	(12.0)	(5.0)	
第 309 図 1	H20	SH-021	瀬戸・美濃	折縁深皿	古後Ⅲ	—	—	(0.6)	灰釉
第 309 図 2	H20	SH-019	瀬戸・美濃	直縁大皿	古後Ⅳ古	—	—	(2.5)	灰釉
第 309 図 3	H20	SH-009	瀬戸・美濃	直縁大皿	古後Ⅱか	—	—	(2.3)	灰釉
第 309 図 4	H22	4SH-018	瀬戸・美濃	瓶子	古後	—	(10.0)	(2.5)	Ⅱ類、灰釉
第 309 図 5	H20	SH-017	常滑	大甕		—	—	(7.6)	
第 309 図 6	H20	SH-022	在地	カワラケ杯		—	(6.4)	(1.8)	
第 309 図 7	H20	SH-011	在地	カワラケ杯		—	4.8	(1.1)	
第 309 図 8	H20	SH-034	在地	カワラケ小皿		7.8	5.0	1.8	
第 309 図 9	H20	SH-007	在地	カワラケ小皿		(8.4)	4.5	2.1	煤付着
第 309 図 10	H20	SH-013	在地	カワラケ小皿		(7.7)	(5.1)	1.5	
第 309 図 11	H20	SH-013	在地	カワラケ小皿		(6.6)	(4.5)	(1.3)	
第 310 図 1	H19	SD-001	瀬戸・美濃	緑釉小皿	古後	—	—	(2.3)	灰釉
第 310 図 2	H19	SD-001	常滑	片口鉢		—	—	(4.2)	
第 311 図 1	H19	SD-005	瀬戸・美濃	折縁中皿	古後Ⅲか	—	—	(2.1)	灰釉
第 311 図 2	H19	SD-005	在地	カワラケ杯			(6.4)	(2.2)	器面摩耗
第 312 図 1	H27	SD-002	常滑	片口鉢	10型式	—	—	(5.7)	
第 312 図 2	H19	SD-002	常滑	片口鉢		—	(13.6)	(5.7)	
第 313 図 1	H19	SD-003	中国	青磁鎬蓮弁文碗		—	—	(3.9)	龍泉窯系
第 313 図 2	H19	SD-003	常滑	片口鉢	9型式か	—	—	(3.4)	
第 313 図 3	H19	SD-003	常滑	片口鉢		—	—	(4.8)	
第 314 図 1	H27	SD-004	瀬戸・美濃	緑釉小皿		—	(4.2)	(1.2)	灰釉
第 314 図 2	H19	SD-004	瀬戸・美濃	盤類	古後Ⅲか	—	—	(4.0)	折縁深皿or直縁大皿、灰釉
第 314 図 3	H27	SD-004	瀬戸・美濃	擂鉢	古後Ⅳ新	—	—	(3.8)	錆釉
第 314 図 4	H27	SD-004	常滑	片口鉢	10型式	—	—	(4.9)	
第 315 図 1	H21	SD-012	在地	カワラケ杯		—	(7.4)	(1.8)	器面摩耗
第 316 図 1	H20	SD-013	瀬戸・美濃	緑釉小皿	古後Ⅳか	—	—	(1.0)	鉄釉
第 316 図 2	H20	SD-013	常滑	片口鉢	9型式	—	—	(4.4)	
第 318 図 1	H20	SD-019	瀬戸・美濃	平碗	古後Ⅲか	—	5.0	(2.9)	灰釉
第 318 図 2	H20	SD-019	瀬戸・美濃	盤類	古後	—	—	(4.7)	折縁深皿or直縁大皿、灰釉
第 318 図 3	H20	SD-019	瀬戸・美濃	盤類	古後	—	—	(4.1)	折縁深皿or直縁大皿、灰釉
第 318 図 4	H20	SD-019	在地	土師質土器		—	6.2	(1.5)	美濃の模倣か
第 318 図 5	H20	SD-019	在地	カワラケ小皿		(10.0)	—	(2.5)	
第 318 図 6	H20	SD-019	常滑	片口鉢	9型式	(26.0)	(9.0)	(10.5)	
第 318 図 7	H20	SD-019	常滑	片口鉢	8～9型式	—	—	(6.5)	
第 318 図 8	H20	SD-019	常滑	片口鉢	10型式か	—	—	(6.4)	破断面一部転用
第 319 図 1	H20	SD-020	瀬戸・美濃	浅碗	古後Ⅲ	—	—	(3.1)	鉄釉
第 319 図 2	H20	SD-020	瀬戸・美濃	卸皿	古後Ⅱ～Ⅲか	—	—	(2.2)	灰釉
第 319 図 3	H20	SD-020	瀬戸・美濃	折縁深皿	古後Ⅲ	—	—	(2.7)	灰釉
第 319 図 4	H20	SD-020	瀬戸・美濃	盤類	古後	—	—	(4.4)	折縁深皿or直縁大皿、灰釉
第 319 図 5	H20	SD-020	常滑	片口鉢	8型式か	—	—	(2.7)	
第 319 図 6	H20	SD-020	常滑	片口鉢	9～10型式	—	—	(6.8)	
第 319 図 7	H20	SD-020	在地	瓦質火鉢		—	—	(5.4)	
第 319 図 8	H20	SD-020	在地	カワラケ杯		14.2	6.6	3.6	
第 319 図 9	H20	SD-020	在地	カワラケ小皿		(7.2)	(4.6)	1.6	口唇部煤付着
第 320 図 1	H20	SD-021	瀬戸・美濃	端反碗	古後Ⅱ～Ⅲ	—	—	(2.3)	灰釉
第 320 図 2	H20	SD-021	在地	カワラケ杯		—	(6.0)	(0.9)	
第 321 図 1	H20	SD-026	在地	カワラケ杯		—	(6.8)	(1.6)	
第 321 図 2	H21	SD-026	在地	カワラケ杯		—	(6.1)	(1.6)	器面摩耗
第 322 図 1	H20	SD-022	常滑	片口鉢	10型式	—	—	(3.8)	外面転用か
第 322 図 2	H20	SD-022	在地	カワラケ杯		(11.0)	(6.2)	3.1	器面摩耗
第 322 図 3	H20	SD-022	在地	カワラケ杯		(14.8)	(7.2)	3.5	器面摩耗
第 323 図 1	H22	4SD-002	瀬戸・美濃	緑釉小皿		—	—	(2.7)	灰釉
第 323 図 2	H22	4SD-002	瀬戸・美濃	緑釉小皿		—	—	(2.3)	灰釉
第 325 図 1	H24	4SD-005	瀬戸・美濃	平碗	古後Ⅲ	—	(3.8)	(1.7)	灰釉
第 325 図 2	H24	4SD-005	瀬戸・美濃	緑釉小皿	古後Ⅳ新	(12.0)	(6.0)	3.2	灰釉
第 325 図 3	H24	4SD-005	瀬戸・美濃	緑釉小皿	古後Ⅳ新	(11.0)	(5.0)	2.0	灰釉
第 325 図 4	H24	4SD-005	瀬戸・美濃	折縁深皿	古後Ⅲ	—	—	(2.2)	灰釉
第 325 図 5	H24	4SD-005	瀬戸・美濃	盤類		—	—	(6.0)	灰釉
第 325 図 6	H22	4SD-005	瀬戸・美濃	擂鉢	大窯4	—	—	(3.6)	錆釉
第 325 図 7	H24	4SD-005	瀬戸・美濃	擂鉢		—	—	(3.3)	Ⅰ類、錆釉

挿図番号	調査年度	遺構番号(報告時)	産地	器種	編年等	法量:cm ()復元・現存値 口径	底径	器高	備考
第 325 図 8	H24	4SD-005	瀬戸・美濃	擂鉢		—	(11.0)	(5.2)	錆釉
第 325 図 9	H24	4SD-005	瀬戸・美濃	擂鉢		—	(11.0)	(3.0)	錆釉
第 325 図 10	H24	4SD-005	常滑	片口鉢	10型式	—	—	(9.9)	
第 325 図 11	H24	4SD-005	常滑	片口鉢	10型式	—	—	(5.5)	
第 325 図 12	H24	4SD-005	常滑	片口鉢	10型式	—	—	(4.5)	
第 325 図 13	H24	4SD-005	常滑	片口鉢	8型式	—	—	(4.9)	外面砥石に転用
第 325 図 14	H24	4SD-005	常滑	片口鉢	10型式	—	—	—	
第 325 図 15	H24	6SK-128・4SD-005	常滑	片口鉢		—	(11.0)	(6.5)	
第 325 図 16	H24	4SD-005	常滑	片口鉢		—	(13.3)	(7.4)	底部外面砥石に転用
第 325 図 17	H24	4SD-005	常滑	甕	9型式	—	—	(8.0)	
第 325 図 18	H24	4SD-005	常滑	甕		—	—	(3.0)	外面に押印文
第 326 図 19	H24	4SD-005	常滑	大甕		—	—	(9.4)	外面に押印文
第 326 図 20	H24	4SD-005	在地	内耳土鍋		—	—	(3.0)	
第 326 図 21	H24	4SD-005	在地	カワラケ小皿		(7.8)	5.0	1.6	器面摩耗・剥落、口唇部煤付着
第 326 図 22	H24	4SD-005	在地	カワラケ杯		—	(7.4)	(1.6)	器面摩耗
第 326 図 23	H24	4SD-005	在地	カワラケ杯		—	(4.6)	(1.2)	器面摩耗
第 327 図 1	H24	4SD-006	瀬戸・美濃	茶入		—	—	(3.8)	鉄釉
第 327 図 2	H24	4SD-006	瀬戸・美濃	盤類		—	—	(6.9)	灰釉
第 327 図 3	H24	4SD-006	瀬戸・美濃	擂鉢	古後Ⅳ	—	—	(4.1)	錆釉
第 327 図 4	H24	4SD-006	在地	内耳土鍋		—	—	(6.9)	外面煤付着
第 329 図 1	H22	4SD-008	中国	青白磁壺		(7.6)	—	(4.8)	
第 329 図 2	H22	4SD-008	瀬戸・美濃	丸皿	大窯4	(10.0)	(4.0)	2.5	灰釉
第 329 図 3	H22	4SD-008	常滑	片口鉢		—	—	(3.6)	
第 330 図 1	H24	4SD-009	中国	青白磁碗		—	(4.8)	(1.5)	
第 330 図 2	H24	4SD-009	瀬戸・美濃	天目茶碗	古後Ⅱ	—	—	(3.7)	鉄釉
第 330 図 3	H22	4SD-009	瀬戸・美濃	折縁深皿	古中Ⅳ	—	—	(2.9)	灰釉
第 330 図 4	H24	4SD-009	瀬戸・美濃	擂鉢	古後Ⅳ新	—	—	(4.0)	錆釉
第 330 図 5	H22	4SD-009	常滑	甕	9型式	—	—	(5.1)	
第 330 図 6	H24	4SD-009	在地	カワラケ小皿		(7.0)	(4.0)	2.2	
第 330 図 7	H24	4SD-009	在地	カワラケ杯		—	6.5	(2.0)	
第 330 図 8	H24	4SD-009	在地	擂鉢		—	—	(4.8)	
第 331 図 1	H22	4SD-011	瀬戸・美濃	平碗	古後Ⅱ	—	—	(4.4)	灰釉
第 331 図 2	H22	4SD-011	在地	擂鉢		—	—	(3.8)	
第 332 図 1	H22	4SD-014	在地	カワラケ小皿		—	(4.0)	(0.8)	
第 333 図 1	H22	4SD-015	瀬戸・美濃	縁釉小皿		—	(4.0)	(1.0)	内面砥石に転用か
第 334 図 1	H22	4SD-013	瀬戸・美濃	直縁大皿	古後Ⅱ	—	—	(2.5)	灰釉
第 335 図 1	H22	4SD-016	瀬戸・美濃	志野丸皿	大窯4	—	—	(1.8)	
第 335 図 2	H22	4SD-016	瀬戸・美濃	擂鉢	連房	—	—	(2.4)	錆釉
第 336 図 1	H22	4SD-018	常滑	片口鉢	3型式	—	(14.8)	(3.5)	Ⅰ類、器面摩滅・剥落
第 338 図 1	H22	4SD-019	常滑	片口鉢		—	—	(4.2)	
第 338 図 2	H22	4SD-019	在地	カワラケ杯		(12.0)	(7.0)	2.2	器面摩耗
第 338 図 3	H22	4SD-019・4SD-034	在地	カワラケ杯		(12.0)	(6.4)	2.5	
第 340 図 1	H22	4SD-024	常滑	甕	9型式	—	—	(6.5)	
第 340 図 2	H22	4SD-024	常滑	甕	9型式	—	—	(7.2)	
第 340 図 3	H22	4SD-024	常滑	壺or甕		—	(13.0)	(5.0)	
第 341 図 1	H22	4SD-026	瀬戸・美濃	擂鉢	大窯4	(29.0)	—	(3.8)	錆釉
第 343 図 1	H22	4SD-035	瀬戸・美濃	擂鉢		—	(9.0)	(2.5)	錆釉
第 344 図 1	H22	4SD-037	瀬戸・美濃	擂鉢		—	—	(2.5)	錆釉
第 344 図 2	H22	4SD-037	常滑	片口鉢	9型式	(22.4)	—	(5.0)	
第 344 図 3	H22	4SD-037	常滑	甕		—	—	(5.8)	外面押印文
第 344 図 4	H22	4SD-037	在地	内耳土鍋		(36.6)	—	(5.0)	
第 345 図 1	H24	6SD-036	瀬戸・美濃	折縁深皿	古後Ⅲ	—	—	(2.1)	灰釉
第 345 図 2	H24	6SD-036	瀬戸・美濃	擂鉢	大窯	—	—	(4.5)	錆釉
第 345 図 3	H24	6SD-036	在地	カワラケ杯		(17.0)	8.0	5.0	器面摩耗
第 346 図 1	H27	7SD-002	在地	カワラケ杯		—	(6.8)	(1.4)	器面摩耗
第 347 図 1	H27	7SD-003	瀬戸・美濃	志野端反皿		—	—	(1.5)	
第 347 図 2	H27	7SD-003	在地	カワラケ杯		(11.0)	—	(2.7)	
第 349 図 1	H27	7SD-010	中国	青磁壺		—	—	(5.0)	
第 350 図 1	H22	10トレンチ	中国	青磁蓮弁文碗		—	—	(3.0)	
第 350 図 2	H21	H21一括	中国	青磁皿		—	—	(2.7)	
第 350 図 3	H20	20E-25	中国	青磁酒会壺		—	—	(5.6)	龍泉窯系、破断面転用か
第 350 図 4	H20	19F-60	中国	白磁小皿		—	—	(1.6)	
第 350 図 5	H22	10トレンチ	中国	白磁壺		—	—	(2.8)	
第 350 図 6	H22	10トレンチ	中国	青白磁皿		—	(5.2)	(1.5)	
第 351 図 1	H20	20E-19・25・31	瀬戸・美濃	平碗	古後Ⅳ	(15.3)	—	(4.4)	灰釉
第 351 図 2	H20	20E-25	瀬戸・美濃	平碗	古後Ⅲ～Ⅳ	—	—	(4.1)	灰釉
第 351 図 3	H22	15E-46	瀬戸・美濃	平碗	古後Ⅲ	—	—	(2.9)	灰釉
第 351 図 4	H21	7D-10	瀬戸・美濃	平碗	古後Ⅱ～Ⅲ	—	—	(4.7)	灰釉
第 351 図 5	H21	6D-10付近(SI-044)	瀬戸・美濃	天目茶碗	古後Ⅲ	(12.2)	—	(4.2)	鉄釉
第 351 図 6	H21	3トレンチ	瀬戸・美濃	天目茶碗	大窯4～	—	6.0	(2.0)	鉄釉
第 351 図 7	H22	8トレンチ	瀬戸・美濃	縁釉小皿	古後Ⅳ	(11.0)	—	(2.6)	灰釉
第 351 図 8	H21	2トレンチ	瀬戸・美濃	縁釉小皿	古後Ⅱ	(11.0)	—	(2.6)	灰釉
第 351 図 9	H21	1トレンチ	瀬戸・美濃	縁釉小皿	古後Ⅳ	(10.2)	—	(2.0)	灰釉
第 351 図 10	H22	16トレンチ	瀬戸・美濃	縁釉小皿	古後Ⅲ	(10.0)	—	(2.1)	灰釉
第 351 図 11	H22	8トレンチ	瀬戸・美濃	皿類		(11.0)	—	(2.3)	灰釉
第 351 図 12	H20	20F-67	瀬戸・美濃	縁釉小皿	古後Ⅳ新か	—	—	(2.4)	灰釉
第 351 図 13	H20	21F-51	瀬戸・美濃	縁釉小皿	古後Ⅲ～Ⅳ	—	4.5	(1.6)	灰釉
第 351 図 14	H20	21E-18	瀬戸・美濃	縁釉小皿	古後Ⅳか	—	(5.2)	(1.3)	鉄釉
第 351 図 15	H20	20E-16	瀬戸・美濃	小鉢	古後Ⅲ	(11.0)	—	(2.6)	灰釉
第 351 図 16	H22	15D-29	瀬戸・美濃	卸皿	古後Ⅲ	(13.0)	—	(2.3)	灰釉
第 351 図 17	H20	20E-16	瀬戸・美濃	卸皿	古後Ⅲ～Ⅳ	—	—	(2.6)	灰釉
第 351 図 18	H21	4トレンチ	瀬戸・美濃	志野丸皿	連房	(12.0)	—	(3.0)	
第 351 図 19	H22	11D-06	瀬戸・美濃	志野丸皿	大窯4	(12.0)	(7.8)	(2.2)	
第 351 図 20	H22	8トレンチ	瀬戸・美濃	志野丸皿	大窯4～	—	(7.0)	(1.2)	
第 351 図 21	H19	31J-86付近(SI-014)	瀬戸・美濃	志野丸皿	大窯4	—	(6.3)	(1.0)	
第 351 図 22	H20	21F-43	瀬戸・美濃	折縁深皿	古後Ⅳ新	—	—	(2.7)	灰釉
第 351 図 23	H22	12D-06	瀬戸・美濃	折縁深皿	古後Ⅲ	—	—	(1.8)	灰釉
第 351 図 24	H21	6D-22	瀬戸・美濃	直縁大皿	古後Ⅲ	—	—	(4.8)	灰釉
第 351 図 25	H21	7D-00	瀬戸・美濃	盤類	古後Ⅲか	—	—	(6.5)	折縁深皿or直縁大皿、灰釉
第 351 図 26	H20	20F-13	瀬戸・美濃	盤類	古後	—	—	(3.5)	折縁深皿or直縁大皿、灰釉
第 351 図 27	H22	15E-24	瀬戸・美濃	盤類	古後Ⅲ	—	(14.0)	(3.9)	折縁深皿or直縁大皿、灰釉
第 351 図 28	H20	20E-16	瀬戸・美濃	盤類	古後Ⅱ～Ⅳか	—	—	(2.5)	折縁深皿or直縁大皿、灰釉
第 351 図 29	H20	20F-67	瀬戸・美濃	盤類	古後Ⅱ～Ⅲか	—	(12.2)	(3.4)	折縁深皿or直縁大皿、灰釉
第 351 図 30	H22	8トレンチ	瀬戸・美濃	片口瓶	古後Ⅳ	(10.4)	—	(2.6)	灰釉
第 351 図 31	H20	20F-38	瀬戸・美濃	瓶壺類	古前～後か	—	—	(4.5)	灰釉
第 351 図 32	H19	H19一括	瀬戸・美濃	鉢か		—	(12.0)	(5.0)	鉄釉
第 352 図 33	H21	9D-21	瀬戸・美濃	擂鉢	大窯3	(22.0)	—	(9.3)	Ⅰ類、錆釉
第 352 図 34	H21	6D-44～55	瀬戸・美濃	擂鉢	大窯1	—	—	(4.3)	Ⅰ類、錆釉

挿図番号	調査年度	遺構番号(報告時)	産地	器種	編年等	法量:cm ()復元・現存値 口径	底径	器高	備考
第 352 図 35	H20	20E-27	瀬戸・美濃	擂鉢	古後Ⅳ新	—	—	(2.8)	錆釉
第 352 図 36	H20	19E-51	瀬戸・美濃	擂鉢	古後Ⅳ新	—	—	(2.0)	錆釉
第 352 図 37	H22	16トレンチ	瀬戸・美濃	擂鉢	古後Ⅳ新	—	—	(5.2)	錆釉
第 352 図 38	H22	2トレンチ	瀬戸・美濃	擂鉢		—	—	(5.8)	錆釉
第 352 図 39	H21	H21一括	瀬戸・美濃	擂鉢		—	—	(5.0)	錆釉
第 353 図 1	H20	19E-63・95	常滑	片口鉢	9型式	(25.3)	(10.6)	8.7	
第 353 図 2	H21	6D-42	常滑	片口鉢	10型式	(27.2)	—	(10.2)	
第 353 図 3	H21	9トレンチ	常滑	片口鉢	8型式	(25.2)	—	(6.0)	
第 353 図 4	H20	19E-95	常滑	片口鉢	9型式	—	—	(5.5)	
第 353 図 5	H22	15E-53	常滑	片口鉢	8型式	—	—	(10.7)	
第 353 図 6	H21	9トレンチ・7D-63	常滑	片口鉢	10型式	—	—	(7.1)	
第 353 図 7	H21	9トレンチ	常滑	片口鉢		—	(13.4)	(4.0)	
第 353 図 8	H21	7D-64	常滑	片口鉢		—	(10.4)	(4.8)	
第 353 図 9	H20	20E-19	常滑	片口鉢		—	(9.6)	(4.6)	
第 353 図 10	H20	20E-16	常滑	甕	6b型式か	—	—	(7.7)	
第 353 図 11	H20	20E-16	常滑	甕	9～10型式	—	—	(4.5)	
第 353 図 12	H20	20E-16	常滑	甕	9型式か	—	—	(6.0)	
第 353 図 13	H21	7D-64	常滑	甕	9型式	—	—	(11.1)	破断面一部転用
第 353 図 14	H21	6C-48～51	常滑	広口壺		—	—	(4.4)	
第 353 図 15	H22	2トレンチ	常滑	壺		—	—	(7.8)	広口壺か
第 353 図 16	H20	21F-63	常滑	甕		—	—	(6.1)	
第 353 図 17	H22	2トレンチ	常滑	甕or壺		—	(12.8)	(1.9)	
第 354 図 1	H20	20E-25	在地	カワラケ杯		(13.2)	(6.7)	3.5	
第 354 図 2	H20	20E-25	在地	カワラケ杯		(12.0)	7.0	3.1	
第 354 図 3	H22	13D-06	在地	カワラケ杯		(10.6)	(6.8)	3.3	器面摩耗
第 354 図 4	H20	21F-08	在地	カワラケ杯		(13.3)	—	(3.3)	
第 354 図 5	H20	21G-00	在地	カワラケ杯		—	—	(2.7)	
第 354 図 6	H20	22F-24付近 (SI018)	在地	カワラケ杯		—	(6.4)	(1.1)	器面摩耗
第 354 図 7	H20	22G-00	在地	カワラケ杯		—	(5.3)	(0.7)	
第 354 図 8	H21	9トレンチ	在地	カワラケ杯		—	(5.6)	(1.0)	
第 354 図 9	H20	21F-42	在地	カワラケ小皿		(9.0)	(5.5)	2.2	
第 354 図 10	H20	20F-76	在地	カワラケ小皿		(6.3)	—	(1.5)	口唇部煤付着
第 354 図 11	H21	6D42～53・60～70	在地	擂鉢		—	—	(3.8)	
第 354 図 12	H21	2トレンチ	在地	擂鉢		—	—	(2.9)	
第 354 図 13	H21	2トレンチ	在地	内耳土鍋		—	—	(4.1)	
第 354 図 14	H21	2トレンチ	在地	内耳土鍋		—	—	(5.1)	
第 354 図 15	H21	7D-10	在地	内耳土鍋		—	—	(3.5)	
第 354 図 16	H21	4トレンチ	在地	内耳土鍋		—	—	(5.6)	
第 354 図 17	H22	4トレンチ・16トレンチ	在地	土師質土器		(9.6)	—	(4.0)	
第 354 図 18	H20	21E-45	東海系	羽釜		—	—	(2.0)	
第 354 図 19	H20	20E-16	東播系か	片口鉢か		—	—	(3.9)	東播系中世須恵器、魚住窯産か

第 16 表　掲載中・近世土製品一覧表

挿図番号	調査年度	遺構番号(報告時)	遺物名	寸法 長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	備考
第 108 図 1	H22	4SK-055	転用砥石	5.0	7.8	1.2	82.0	(常滑甕)
第 115 図 34	H22	4SK-092	転用砥石	5.5	5.4	0.5	16.2	(須恵器甕)
第 115 図 35	H22	4SK-092	土製品	0.9	0.9	0.3	0.2	ミニチュア土器状
第 117 図 2	H22	4SK-101	転用砥石	6.5	8.0	1.0	45.4	(瀬戸・美濃擂鉢)
第 117 図 3	H22	4SK-101	転用砥石	4.0	5.8	1.3	56.6	(常滑片口鉢)
第 151 図 1	H22	4SK-009	転用砥石	8.0	12.0	1.2	159.7	(常滑甕)
第 155 図 2	H22	4SK-016	土製品	2.1	1.9	1.2	6.4	砥石状
第 168 図 1	H22	4SK-038	転用砥石	8.4	9.0	1.4	196.4	(常滑甕)
第 168 図 2	H22	4SK-038	転用砥石	6.5	7.5	1.4	111.4	(常滑片口鉢)
第 185 図 1	H22	4SK-098	転用砥石	5.4	7.5	1.0	52.6	(常滑甕)
第 199 図 1	H22	4SE-002	土錘	6.2	4.0	3.9	99.4	孔径1.4×1.5cm
第 295 図 12	H21	SD-027	転用砥石	7.4	8.4	1.8	122.4	(常滑甕)
第 314 図 5	H27	SD-004	転用砥石	5.2	5.0	1.4	37.7	(常滑甕)
第 319 図 10	H20	SD-020	転用砥石	4.0	5.0	1.0	26.8	(常滑甕)
第 324 図 1	H22	4SD-003	転用砥石	7.5	3.5	1.0	43.4	(常滑甕)
第 326 図 24	H24	4SD-005	転用砥石	4.4	4.5	0.7	18.8	(須恵器甕)
第 326 図 25	H24	4SD-005	転用砥石	4.0	5.2	1.5	29.7	(常滑片口鉢)
第 326 図 26	H24	4SD-005	転用砥石	9.7	8.0	1.1	98.7	(常滑甕)
第 330 図 9	H24	4SD-009	転用砥石	7.0	6.4	1.5	80.5	(常滑甕)
第 337 図 1	H22	4SD-017	土錘	2.6	1.8	0.8	2.3	復元孔径0.6cm
第 348 図 1	H27	7SD-008・7SD-009	転用砥石	4.6	9.5	1.2	55.8	(常滑片口鉢)
第 355 図 1	H21	13トレンチ	土錘	5.5	3.5	2.4	56.7	孔径1.6cm
第 355 図 2	H21	6トレンチ	転用砥石	7.9	8.7	1.5	142.4	(常滑甕)
第 355 図 3	H21	7D-63	転用砥石	7.2	6.7	1.2	71.5	(常滑甕)
第 355 図 4	H23	6トレンチ	転用砥石	10.6	4.4	0.8	48.4	(須恵器甕)
第 355 図 5	H23	8トレンチ	転用砥石	5.0	4.0	0.9	31.6	(須恵器甕)

第 17 表　掲載中・近世石器・石製品一覧表

挿図番号	調査年度	遺構番号(報告時)	遺物名	石材	寸法				備考
					長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	
第 100 図 2	H20	SK-073	砥石	凝灰岩	4.7	2.9	0.6	12.6	
第 103 図 3	H21	SK-116	砥石	凝灰岩	7.5	2.2	1.9	47.5	
第 115 図 36	H22	4SK-092	砥石	凝灰岩	7.2	3.9	1.9	76.1	
第 123 図 2	H20	SI-028	砥石	凝灰岩	3.9	4.6	2.0	50.0	
第 123 図 3	H20	SI-028	砥石	凝灰岩	7.0	4.0	3.4	99.7	
第 141 図 9	H20	SK-061	砥石	凝灰岩	1.7	3.3	0.4	4.0	
第 142 図 3	H20	SK-069	砥石	凝灰岩	6.3	2.8	2.8	15.6	
第 142 図 4	H20	SK-069	砥石	凝灰岩	6.3	2.8	0.6	18.8	
第 146 図 1	H22	4SK-001	砥石	凝灰岩	4.6	5.2	1.1	37.1	
第 153 図 1	H22	4SK-011	砥石	凝灰岩	7.9	3.3	2.4	77.1	
第 161 図 1	H22	4SK-030	砥石か	砂岩	10.2	3.6	1.8	104.0	
第 164 図 1	H22	4SK-035	砥石か	砂岩	2.8	1.8	0.8	4.9	
第 168 図 3	H22	4SK-038	台石か	安山岩	5.2	5.3	4.0	115.5	
第 172 図 1	H22	4SK-050	砥石	凝灰岩	10.6	3.3	2.6	108.5	
第 172 図 2	H22	4SK-050	砥石	凝灰岩	12.6	2.7	2.8	179.7	
第 173 図 9	H22	4SK-067	砥石	凝灰岩	9.6	4.2	3.4	114.9	
第 185 図 2	H22	4SK-098	砥石	凝灰岩	8.1	3.2	2.1	72.3	
第 190 図 1	H22	4SK-110	砥石	凝灰岩	4.9	3.5	2.3	43.3	
第 193 図 1	H24	6SK-126	砥石	凝灰岩	6.2	3.4	3.1	69.3	
第 193 図 2	H24	6SK-126	砥石	凝灰岩	5.9	3.1	2.5	66.5	
第 197 図 2	H24	6SK-133	硯	粘板岩	14.5	5.1	2.0	282.3	
第 268 図 3	H22	4SK-049・4SK-050	砥石	凝灰岩	7.3	2.5	1.5	45.6	
第 279 図 1	H22	4SK-077	砥石	凝灰岩	4.3	4.0	1.5	36.6	
第 295 図 13	H21	SD-027	砥石	凝灰岩	10.3	3.2	2.4	113.0	
第 295 図 14	H21	SD-027	砥石	凝灰岩	7.1	2.8	2.9	75.8	
第 295 図 15	H21	SD-027	砥石	凝灰岩	8.0	3.5	2.6	51.5	
第 295 図 16	H21	SD-027	砥石	凝灰岩	4.0	2.8	2.4	42.5	
第 295 図 17	H21	SD-027	砥石	凝灰岩	1.0	3.5	3.4	103.3	
第 295 図 18	H21	SD-027	五輪塔	安山岩	12.2	6.1	3.5	509.1	水輪か、被熱か
第 296 図 2	H21	SA-001	五輪塔	安山岩	10.3	11.6	3.9	622.0	水輪か
第 309 図 12	H20	SH-024	砥石	凝灰岩	6.8	2.8	0.9	30.0	
第 309 図 13	H22	4SH-004	砥石	砂岩	4.8	4.5	1.8	57.1	
第 317 図 1	H20	SD-018	砥石	凝灰岩	3.4	2.2	1.7	67.5	
第 318 図 9	H20	SD-019	五輪塔	安山岩	14.0	9.0	4.0	440.0	水輪か
第 326 図 27	H24	4SD-005	石臼(鉢)	安山岩	径(30.8)、器高(11.1)		0.3	959.6	
第 326 図 28	H24	4SD-005	板碑	緑泥片岩	28.1	18.0	3.0	2038.0	
第 327 図 5	H24	4SD-006	砥石	砂岩	6.1	3.7	1.6	37.2	
第 334 図 2	H22	4SD-013	火打石	玉髄	3.4	2.8	2.2	22.7	
第 334 図 3	H22	4SD-013	砥石	凝灰岩	9.0	2.9	2.7	87.4	
第 334 図 4	H22	4SD-013	石臼	安山岩	5.8	3.3	4.3	90.3	
第 335 図 3	H22	4SD-016	砥石	凝灰岩	4.1	2.4	2.5	53.4	
第 335 図 4	H22	4SD-016	砥石	凝灰岩	13.2	3.2	2.9	163.3	
第 336 図 2	H22	4SD-018	砥石	凝灰岩	6.5	3.2	2.5	55.6	
第 337 図 2	H22	4SD-017	火打石	チャート	6.0	3.2	5.9	146.7	
第 337 図 3	H22	4SD-017	石臼	砂岩	7.2	11.1	5.1	269.8	
第 339 図 1	H22	4SD-020	砥石	凝灰岩	3.4	2.6	1.3	14.8	
第 341 図 2	H22	4SD-026	火打石	チャート	5.7	2.9	2.1	33.6	
第 343 図 2	H22	4SD-035	砥石	凝灰岩	6.2	3.0	2.7	67.5	
第 344 図 5	H22	4SD-037	砥石	凝灰岩	4.8	2.0	1.3	23.0	
第 344 図 6	H22	4SD-037	砥石か	凝灰岩	7.6	5.2	0.8	30.7	
第 344 図 7	H22	4SD-037	砥石	砂岩	(21.1)	8.3	4.0	561.4	接合しない2破片
第 345 図 4	H24	6SD-036	砥石	凝灰岩	7.5	4.0	2.3	119.5	
第 356 図 1	H22	1トレンチ	砥石	凝灰岩	10.7	4.3	3.0	180.3	
第 356 図 2	H22	15E-04	砥石	凝灰岩	10.6	3.5	2.8	116.5	
第 356 図 3	H21	7ﾄﾚﾝﾁ	砥石	凝灰岩	10.8	2.4	3.2	117.9	
第 356 図 4	H20	20F-83	砥石	凝灰岩	10.4	2.2	1.7	77.9	
第 356 図 5	H21	7C-24～35	砥石	凝灰岩	8.6	2.4	3.1	59.0	
第 356 図 6	H20	21G-20	砥石	凝灰岩	6.9	2.9	2.7	65.4	
第 356 図 7	H21	6C-82～93	砥石	凝灰岩	5.2	3.9	4.0	141.1	
第 356 図 8	H23	2トレンチ	砥石	凝灰岩	5.0	3.3	1.9	50.3	
第 356 図 9	H21	H21一括	砥石	凝灰岩	5.0	3.5	2.0	57.5	
第 356 図 10	H21	10トレンチ	砥石	凝灰岩	4.9	2.9	2.9	43.6	
第 356 図 11	H22	16トレンチ	砥石	凝灰岩	3.8	3.8	1.0	20.8	
第 356 図 12	H22	4トレンチ	砥石	凝灰岩	4.0	4.1	1.2	22.2	
第 356 図 13	H19	31J-86付近(SI-014)	砥石	凝灰岩	4.8	4.0	1.3	25.4	
第 356 図 14	H20	20E-93	砥石	凝灰岩	2.4	2.9	0.9	8.0	
第 356 図 15	H22	4トレンチ	砥石	凝灰岩	3.0	2.5	0.7	6.3	
第 356 図 16	H21	H21一括	砥石か	軽石	8.5	7.4	2.5	63.8	

第 18 表　掲載金属製品一覧表

挿図番号	調査年度	遺構番号(報告時)	遺物名	寸法				備考
				長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	
第 108 図 2	H22	4SK-055	紡錘車	23.4	4.8	1.5	27.9	軸部鉄製・車部木製
第 109 図 3	H22	4SK-085	釘	2.9	0.7	0.5	2.4	
第 109 図 4	H22	4SK-085	銭状鉄製品	2.2	1.7	0.3	1.9	
第 111 図 1	H22	4SK-087	仏飯器	口径4.7	底径2.7	器高2.8	14.9	銅製
第 115 図 37	H22	4SK-092	錠前	12.6	2.5	0.9	60.4	牡金具・牝金具・鍵が錆着
第 115 図 38	H22	4SK-092	短刀	19.6	2.1	0.2	49.7	
第 115 図 39	H22	4SK-092	釘	5.0	0.5	0.4	4.4	
第 115 図 40	H22	4SK-092	釘	5.1	2.2	0.5	4.9	
第 115 図 41	H22	4SK-092	板状鉄製品	12.5	1.6	0.1	19.4	
第 131 図 1	H21	2SI-017	板状鉄製品	3.1	1.6	0.1	2.8	
第 131 図 2	H21	2SI-017	棒状鉄製品	4.9	0.6	0.5	3.3	
第 139 図 4	H20	SK-053	釘	3.6	0.6	0.5	6.1	
第 139 図 5	H20	SK-053	釘	3.1	0.4	0.4	1.8	
第 139 図 6	H20	SK-053	板状鉄製品	3.4	3.1	0.3	15.2	
第 146 図 2	H22	4SK-001	釘	4.3	0.5	0.3	2.2	
第 149 図 3	H22	4SK-005	板状鉄製品	3.2	1.9	0.2	3.3	
第 152 図 2	H22	4SK-010	釘	10.8	0.8	0.6	17.6	
第 164 図 2	H22	4SK-035	椀形滓	7.2	9.4	3.5	357.4	
第 171 図 10	H22	4SK-047	釘	7.7	3.3	1.0	24.7	
第 171 図 11	H22	4SK-047	鋏	14.2	1.2	0.7	17.0	
第 171 図 12	H22	4SK-047	煙管	5.1	1.0	1.0	7.0	銅製
第 174 図 10	H22	4SK-069	短刀	17.1	2.5	0.4	53.8	
第 174 図 11	H22	4SK-069	小柄小刀	14.1	1.4	0.6	37.4	柄銅製
第 174 図 12	H22	4SK-070	釘	5.9	0.5	0.5	6.6	
第 174 図 13	H22	4SK-070	ヘラ状鉄製品	3.0	1.0	0.2	2.1	
第 174 図 14	H22	4SK-070	煙管	7.5	0.9	1.4	4.3	銅製、接合しない2破片
第 182 図 4	H22	4SK-090	釘	3.5	0.6	0.4	2.6	
第 185 図 3	H22	4SK-098	釘	8.8	1.3	0.7	11.7	
第 185 図 4	H22	4SK-098	釘	6.9	4.9	0.5	14.2	
第 185 図 5	H22	4SK-098	釘	3.7	1.0	0.4	2.0	
第 185 図 6	H22	4SK-098	釘	6.7	0.6	0.3	4.2	
第 185 図 7	H22	4SK-098	釘	7.5	0.4	0.3	4.0	
第 185 図 8	H22	4SK-098	釘	4.9	0.4	0.3	1.8	
第 185 図 9	H22	4SK-098	把手	3.8	0.5	0.4	2.6	
第 231 図 1	H20	SK-076	釘	3.0	1.2	1.0	7.5	
第 239 図 1	H21	SK-100	毛抜き	8.0	1.8	0.1	11.1	接合しない破片
第 268 図 4	H22	4SK-049	環状鉄製品	3.3	3.3	0.5	16.7	
第 295 図 19	H21	SD-027	鉄鍋	6.5	5.5	0.2	54.7	鍛鉄製
第 296 図 3	H21	SA-001	不明銅製品	1.8	1.8	0.5	1.4	銅製
第 309 図 14	H22	4SH-010	釘	6.7	0.8	0.5	11.7	
第 327 図 6	H22	4SD-006	小柄小刀	6.3	1.5	0.4	9.9	
第 328 図 1	H22	4SD-007	鎹	3.7	0.6	0.5	6.9	
第 328 図 2	H22	4SD-007	煙管	5.1	1.6	1.4	5.2	銅製
第 337 図 4	H22	4SD-017	釘	4.3	0.8	0.4	7.5	
第 337 図 5	H22	4SD-017	小柄小刀	7.6	1.4	0.5	12.3	柄銅製、接合しない破片あり
第 337 図 6	H22	4SD-017	煙管	6.0	1.1	1.6	5.7	銅製、接合しない2破片
第 337 図 7	H22	4SD-017	鉄滓	4.8	6.3	1.5	39.7	
第 338 図 4	H22	4SD-019	釘	3.7	0.9	0.5	5.6	
第 338 図 5	H22	4SD-019	釘	10.4	1.6	0.5	12.2	
第 342 図 1	H22	4SD-034	棒状鉄製品	5.6	1.0	0.5	7.6	
第 344 図 8	H22	4SD-037	釘	6.2 4.8	0.6 0.5	0.4 0.4	10.3	2本錆着
第 344 図 9	H22	4SD-037	釘	5.6	0.4	0.3	4.2	
第 344 図 10	H22	4SD-037	釘	3.4 1.5	0.6 0.4	0.4 0.2	4.0	2本錆着
第 344 図 11	H22	4SD-037	釘	4.4	0.6	0.4	2.8	
第 344 図 12	H22	4SD-037	釘	3.5	0.5	0.3	2.3	
第 357 図 1	H20	22F-12	短刀	28.0	2.5	0.5	85.7	
第 357 図 2	H22	1トレンチ	小柄小刀	9.8	1.2	0.4	9.1	
第 357 図 3	H19	25H-35	釘	7.5	4.5	0.6	14.0	
第 357 図 4	H22	13D	釘	3.1	1.2	0.4	3.4	
第 357 図 5	H20	21F-19	釘	4.4	0.6	0.5	7.9	
第 357 図 6	H20	21F-42	釘	1.7	0.4	0.7	2.3	
第 357 図 7	H22	13D	釘	6.5	0.5	0.4	12.1	
第 357 図 8	H22	11C-26付近(4SD-033)	釘	6.7	1.0	0.4	7.4	
第 357 図 9	H23	36R-55	蝶番	4.1	2.2	0.8	4.9	
第 357 図 10	H21	13トレンチ	円形鉄製品	4.0	4.0	1.9	21.1	
第 357 図 11	H21	15トレンチ	板状鉄製品	4.0	4.4	0.3	30.2	
第 357 図 12	H21	13トレンチ	板状鉄製品	2.9	3.8	0.8	16.4	
第 357 図 13	H23	36R-51付近(5SI-004)	板状鉄製品	2.3	3.7	0.7	4.4	
第 357 図 14	H23	36R-55	板状鉄製品	2.6	2.6	0.4	2.3	
第 357 図 15	H23	5トレンチ	椀形滓	8.0	4.3	3.0	57.7	
第 357 図 16	H22	10D-49	煙管	2.6	1.1	1.1	2.7	銅製

第 19 表　出土銭貨一覧表（4SK-014 以外）

掲載番号			調査年度	遺構番号(報告時)	銭ID	銭種	書体	背文	縦径	横径	縦内径	横内径	縦外郭	横外郭	縦内郭	横内郭	厚	重量	部分	研磨後	色調	穿形	加工等	備考(銭種)	備考
第	97	図 1	H20	SK-020	68	政和通寶	篆書		24.89	24.97	21.76	21.54	8.60	8.29	6.22	6.57	1.76	2.25		2.21	不明		割れ・腐食		破損
第	100	図 3	H20	SK-073	25	周通元寶			24.76	24.57	18.88	19.09	7.45	7.40	6.18	6.31	1.61	3.03		3.01	黄色				
第	100	図 4	H20	SK-073	123	至大通寶			23.34	23.47	19.69	19.67	6.96	6.88	5.67	5.51	1.78	3.66		3.64	黄色				
第	116	図 42	H22	4SK-092	11	開元通寶													0.96	0.78	不明		腐食		破損計測不能・破損3/4欠損
第	116	図 43	H22	4SK-092	31	淳化元寶	草書		24.57	24.52	18.43	18.65	7.17	7.16	5.84	6.09	1.16	3.15		3.14	黄色				
第	116	図 44	H22	4SK-092	36	祥符通寶													1.35	1.32	不明		腐食		破損計測不能・破損3/4欠損
第	116	図 45	H22	4SK-092	37	天禧通寶			23.91	24.08	19.32	19.29	7.40	7.57	6.50	6.55	1.28	2.28		2.18	黄色		腐食		
第	116	図 46	H22	4SK-092	37	天禧通寶			24.80	24.99	19.94	19.16	7.36	7.49	6.04	6.17	1.44	2.17		2.12	不明		欠け・腐食		
第	116	図 47	H22	4SK-092	43	至和元寶	真書		23.81	24.51	19.10	18.49	8.12	8.34	7.38	7.19	1.16	2.61		2.60	黄色		欠け・腐食		
第	154	図 3	H22	4SK-013	33	咸平元寶			24.59	24.78	18.73	18.93	7.33	7.37	5.92	6.11	1.48	1.99		1.95	黄色		割れ		
第	154	図 4	H22	4SK-013	35	祥符元寶			24.71	24.99	19.09	18.91	7.47	7.37	6.22	6.23	1.39	2.75		2.70	黄色		割れ		
第	154	図 5	H22	4SK-013	51	元豊通寶	篆書		24.54	24.50	18.70	18.53	6.60	6.77	6.64	6.64	1.20	1.94		1.89	黄色		割れ		
第	154	図 6	H22	4SK-013	53	元祐通寶	行書		23.94	23.79	19.12	18.88	8.24	8.17	7.05	6.68	1.53	1.59		1.57	不明	穿内未仕上げ	割れ・腐食		
第	154	図 7	H22	4SK-013	53	元祐通寶	篆書		24.42	24.99	19.19	19.18	9.22	8.23	7.41	6.45	1.35	1.38		1.36	不明		割れ・腐食		
第	154	図 8	H22	4SK-013	90	紹熙元寶		背二	21.99	21.21			7.55	7.62	6.21	6.19	1.81	1.52		1.45	黄色		割れ・腐食		
第	163	図 1	H22	4SK-032	11	開元通寶			24.08	24.24	19.82	19.71	7.96	7.74	6.71	6.50	1.73	2.37		2.37	不明		欠け・割れ・ゆがみ・腐食		
第	179	図 1	H22	4SK-089	49	熙寧元寶	篆書		23.48	23.67	19.22	18.89	8.51	8.19	7.29	7.63	1.17	2.40		2.39	黄色	穿欠け	欠け・腐食		
第	191	図 1	H22	4SK-115	132	洪武通寶			22.94	23.05	18.71	18.43	6.64	6.63	5.75	5.77	1.73	3.48		3.48	黄色				
第	228	図 2	H20	SK-067		寛永通寶			24.35	24.42	19.74	19.75	7.15	7.81	5.88	5.30	1.16	2.65		2.63	白色		欠け		
第	239	図 2	H21-1	SK-100	41	皇宋通寶	篆書		24.83	24.92	19.89	19.67	8.63	8.72	7.15	7.38	1.27	3.04		3.03	不明		腐食		
第	239	図 3	H21-1	SK-100	999	不明			22.55	25.38		17.72		7.27		6.21	1.30		1.97	1.94	黄色		欠け・ゆがみ	祥符口寶	破損・1／2欠損
第	261	図 1	H22	4SK-017	11	開元通寶			24.44	24.61	20.58	20.90	8.34	8.30	6.95	7.14	1.08	2.23		2.22	黄色				
第	270	図 1	H22	4SK-054		寛永通寶			24.47	24.52	19.15	19.75	6.95	7.59	5.89	6.07	1.52	3.30		3.26	黄色				
第	289	図 1	H22	4SH-012	11	開元通寶		背下月	24.53	24.58	20.60	20.53	7.77	7.62	6.63	6.71	1.35	2.80		2.80	白色		割れ		
第	289	図 2	H22	4SH-012	11	開元通寶			23.64	23.56	19.50	18.89	7.82	7.26	6.46	6.01	1.23	1.94		1.90	不明		欠け・腐食		
第	289	図 3	H22	4SH-012	32	至道元寶	行書		24.55	24.60	17.56	18.05	7.14	7.43	6.06	5.95	1.40	2.61		2.56	不明		欠け・腐食		
第	289	図 4	H22	4SH-012	36	祥符通寶			25.15	25.19	18.25	17.90	7.11	7.02	6.25	6.18	1.27	2.51		2.46	黄色		欠け		
第	289	図 5	H22	4SH-012	37	天禧通寶			24.59	24.51	19.65	19.48	7.20	7.57	6.26	6.14	1.43	2.26		2.21	黄色				
第	289	図 6	H22	4SH-012	38	天聖元寶	真書		24.83	24.70	20.96	20.48	8.33	8.34	7.14	6.99	1.37	2.16		2.14	不明		腐食		
第	289	図 7	H22	4SH-012	40	景祐元寶	篆書		25.25	25.29	19.53	19.45	8.02	7.98	6.52	6.64	1.44	2.30		2.26	黄色		欠け		
第	289	図 8	H22	4SH-012	40	景祐元寶	真書		24.92	24.97	20.92	20.99	9.82	9.39	8.16	8.24	1.39	2.21		2.19	黄色		欠け		
第	289	図 9	H22	4SH-012	41	皇宋通寶	真書		25.15	25.20	20.16	20.23	8.23	8.43	6.56	6.89	1.45	2.19		2.18	不明		腐食		
第	289	図 10	H22	4SH-012	41	皇宋通寶	篆書		24.81	24.52	19.58	19.49	8.35	8.51	7.52	7.45	1.26	2.14		2.08	不明		欠け・腐食		
第	289	図 11	H22	4SH-012	41	皇宋通寶	篆書		24.72	24.64	20.19	20.32	9.29	8.65	7.15	7.15	1.34	2.40		2.38	不明		欠け・腐食		
第	289	図 12	H22	4SH-012	41	皇宋通寶	篆書		24.08	24.26	18.85	19.00	7.88	7.51	7.82	7.11	1.25	2.04		2.03	不明	穿欠け	欠け・腐食		
第	289	図 13	H22	4SH-012	41	皇宋通寶	篆書		24.15	24.49	19.41	20.40	9.47	9.03	7.66	7.87	1.21	2.18		2.14	不明	星形	欠け・腐食		
第	289	図 14	H22	4SH-012	43	至和元寶	真書		23.90	23.72	18.19	18.19	7.42	6.97	6.06	5.87	1.45	3.22		3.22	白色				
第	289	図 15	H22	4SH-012	45	嘉祐元寶	真書		22.09	23.20	18.98	18.93	9.00	8.31	7.16	7.15	1.62	1.85		1.81	不明		欠け・腐食		
第	289	図 16	H22	4SH-012	49	熙寧元寶	真書		24.19	24.24	19.14	18.96	7.11	7.14	6.18	6.09	1.56	2.67		2.64	白色				
第	289	図 17	H22	4SH-012	49	熙寧元寶	真書		23.78	23.86	20.13	19.89	9.35	9.04	7.09	7.11	1.31	2.72		2.68	黄色		欠け		
第	289	図 18	H22	4SH-012	51	元豊通寶	篆書		23.33	23.50	18.31	18.63	7.24	7.24	6.27	6.20	1.56	2.78		2.76	黄色				
第	289	図 19	H22	4SH-012	53	元祐通寶	篆書		24.28	24.29	19.68	20.69	8.49	8.63	6.94	6.96	1.30	2.67		2.64	黄色		欠け		
第	289	図 20	H22	4SH-012	53	元祐通寶	行書		23.49	24.21	19.63	19.82	8.34	8.51	6.95	6.99	1.39	2.12		2.12	不明		欠け・腐食		
第	289	図 21	H22	4SH-012	55	紹聖元寶	行書		24.13	24.32	16.86	17.26	7.48	7.54	6.14	6.19	1.35	2.39		2.30	黄色		欠け・腐食		
第	289	図 22	H22	4SH-012	58	元符通寶	篆書		24.42	24.40	19.74	19.83	8.07	8.23	6.44	6.56	1.49	2.52		2.47	黄色		欠け		
第	289	図 23	H22	4SH-012	68	政和通寶	分楷		24.89	24.82	19.41	18.90	7.48	7.48	6.20	6.04	1.34	2.77		2.70	黄色				
第	296	図 4	H21-2	SA-001	53	元祐通寶	篆書		24.62	25.05	18.66	19.24	8.33	8.56	6.60	6.91	1.41	2.88		2.84	不明	穿内未仕上げ	腐食		
第	296	図 5	H21-2	SA-001	999	不明	篆書										1.66		1.42	1.40	黄色		切銭？	元口口寶(篆書)	破損・1／2欠損
第	309	図 15	H22	4SH-013	53	元祐通寶	篆書												1.55	1.54	不明		欠け・腐食		破損・腐食計測不能
第	314	図 6	H27	SD-004	90	紹熙元寶		背三	24.03	25.62	19.59	19.43	7.11	7.07	5.65	5.78	1.63	2.75		2.71	不明	穿内未仕上げ	腐食		銭損じ
第	334	図 5	H22	4SD-013	51	元豊通寶	行書		24.26	24.28	18.47	18.62	6.94	6.84	6.92	6.85	1.37	2.93		2.92	黄色				
第	338	図 6	H22	4SD-019	55	紹聖元寶	篆書												0.99	0.98	不明		欠け・腐食		破損計測不能・破損1/3欠損
第	358	図 1	H22	10D-34	11	開元通寶			23.76	23.60	20.65	20.39	7.83	8.04	6.72	7.02	1.19	2.29		2.24	黄色	穿欠け			
第	358	図 2	H22	12C-88	34	景徳元寶			24.74	25.17	20.67	20.89	7.16	7.54	6.28	6.37	1.21	3.19		3.19	黄色		欠け		
第	358	図 3	H22	12C-88	35	祥符元寶			24.45	24.30	18.49	18.01	7.07	7.09	6.22	6.30	1.21	2.93		2.92	黄色		欠け・割れ		
第	358	図 4	H19	H19一括	38	天聖元寶	篆書		25.09	24.80	20.42	20.49	8.40	8.31	7.11	7.13	1.68	3.41		3.31	黄色				
第	358	図 5	H20	20E-49	41	皇宋通寶	篆書		24.94	25.09	19.68	19.18	8.33	8.53	7.63	7.29	1.30	2.62		2.58	白色				
第	358	図 6	H22	12C-88	41	皇宋通寶	篆書		24.97	24.86	20.35	20.09	8.30	8.30	6.90	6.87	1.14	2.68		2.68	黄色				
第	358	図 7	～H21	H21一括	55	紹聖元寶	篆書		23.41	23.38	18.89	18.51	7.45	7.68	6.61	6.55	1.41	2.58		2.55	不明		腐食		
第	358	図 8	H22	13D-21	55	紹聖元寶	篆書		23.68	23.62	18.74	18.66	7.74	8.14	6.85	6.94	1.53	2.26		2.24	不明		腐食		
第	358	図 9	H22	11D-21	55	紹聖元寶	行書		(23.46)	(22.82)	18.90	18.99	8.15	8.06	6.77	6.48	1.24	2.07		2.04	黄色	穿欠け	欠け・腐食		
第	358	図 10	H22	12D-87	65	大観通寶			24.96	23.87	22.73		7.73	8.06	6.61	6.60	1.67	1.77		1.70	不明		欠け・割れ・腐食		
第	358	図 11	H22	2トレンチ	999	不明													2.06	1.85	赤色				変形の為計測不能
第	358	図 12	H22	16トレンチ		寛永通寶			24.34	24.14	19.37	19.32	7.19	6.95	6.22	6.10	0.96	2.05		2.03	赤色		欠け		
第	358	図 13	H22	11D-12		寛永通寶			(23.73)	(23.74)	19.24	19.48	7.36	6.99	5.69	5.81	1.21	2.25		2.24	黄色		欠け・腐食		
非掲載			H22	4SK-002	999	不明													0.51						破損計測不能・大破
非掲載			H22	4SK-005	999	不明													1.10						破損計測不能・大破
非掲載			H22	4SK-012	999	不明													0.73						破損計測不能・大破
非掲載			H22	4SD-001	999	不明													0.16						破損計測不能・破片
非掲載			H22	4SD-005	999	不明													1.47						破損計測不能・破損3/4欠損
非掲載			H22	10トレンチ	999	不明													0.26						破損計測不能・破片
非掲載			H22	15D-57	999	不明													0.43						破損計測不能・破片
非掲載			H22	15E-03	999	不明													0.32						破損計測不能・破片

第 20 表　遺構別出土陶磁器・土器破片数（単位：個）

調査年度	遺構名	貿易陶磁						瀬戸・美濃							常滑			その他	土器		近世以降	備考
		青磁		白磁		青白磁	染付	碗	皿	盤	瓶	天目茶碗	擂鉢	その他	片口鉢	壺・甕	その他		カワラケ	鍋・釜		
		碗	その他	皿	その他		皿															
21	SA-001														1	1						
22	4SB-001																		1			
19	SD-001								1						1							
19	SD-002														2							
19	SD-003	1													3	2					1	
19	SD-004								1	1			1		1	3		1				常滑甕うち1は転用砥石、その他1は在地産擂鉢
19	SD-005								1						1				1		1	
20	SD-011																				1	
20	SD-012																		2			
20	SD-013								1													
20	SD-015																				1	
20	SD-018														1							
20	SD-019							1		2					4	6		1	1			その他1は土師質土器
20	SD-020	1							1	2		1			2	4		2	3			常滑甕うち1は転用砥石、その他2は瓦質火鉢
20	SD-021							1							1				2			
20	SD-022														2	2			2		1	
20	SD-026																		2		1	
21	SD-027		1					1	4	2		1	2		1	9		2			8	青磁その他1は壺類、常滑甕うち1は転用砥石、その他2は擂鉢（備前か）
21	SD-030																				1	
22	4SD-002							1	2										1			
22	4SD-003														1	1			1			常滑片口鉢うち1は転用砥石
22	4SD-005	1	1					1	2	9	1	1	4		5	55			5	1	9	青磁その他1は壺、常滑甕うち1は転用砥石
22	4SD-006									1			1	1		6					39	瀬戸・美濃その他1は鉄釉茶入
22	4SD-007															3			2		6	
22	4SD-008					1			1						1						5	青白磁1は壺
22	4SD-009	1				1				1		1	1		3	19		1	9	1	5	青白磁1は皿、常滑甕うち1は転用砥石、その他1は東播系か
22	4SD-011							1		1						5		1				その他1は在地産擂鉢
22	4SD-013									1			1		1	9		1	3		11	その他1は在地産擂鉢
22	4SD-014																		2			
22	4SD-015								1							1						
22	4SD-016								1				1			8			2		9	
22	4SD-017							1	4				1			14			3		13	
22	4SD-018										1			1	1	4		1		1	2	瀬戸・美濃その他1は茶壺、その他1は在地産土器
22	4SD-019										1				1	3			7		24	
22	4SD-021																				1	
22	4SD-023															1			3			
22	4SD-024															4			2		7	
22	4SD-026												1									
22	4SD-031																				2	方形周溝墓（弥生、11C-26グリッド付近）
22	4SD-032																		1			方形周溝墓（弥生、11C-26グリッド付近）
22	4SD-034							1											1			
22	4SD-035												1						1			
22	4SD-037												1		2	4				44	79	鍋44には近世も一部含む
24	6SD-036	1						1		1			1			7			2		20	
27	7SD-002																		2		1	
27	7SD-003																		1		4	
27	7SD-008														1							
27	7SD-010		1																			青磁その他1は壺
22	4SE-001																				1	
22	4SE-002																				1	
24	6SE-005							1								1					1	
20	SH-007															2			1			
20	SH-009									1												
20	SH-011																		1			
20	SH-013																		2			
20	SH-017															2						
20	SH-019									1												
20	SH-021									1												
20	SH-022																		1			
20	SH-023																		1			
20	SH-034																		1			
20	SH-051															1						
22	4SH-005															1						
22	4SH-013															1						
22	4SH-015															1					1	
22	4SH-017															3						
22	4SH-018										1											
19	SI-001																				1	竪穴住居跡（弥生、25G-11グリッド付近）
19	SI-003																				1	竪穴住居跡（弥生、24G-94グリッド付近）
19	SI-007																				1	竪穴住居跡（弥生、25G-87付近）
19	SI-014																				2	竪穴住居跡（弥生、31J-86グリッド付近）
20	SI-018																		1			竪穴住居跡（弥生、22F-24グリッド付近）
20	SI-020									1											1	
20	SI-024									1												
20	SI-025											1									1	
20	SI-028															1					2	
20	SI-029																				3	
20	SI-032																				1	竪穴住居跡（弥生、22G-31グリッド付近）
21	SI-044											1										竪穴住居跡（弥生、6D-10グリッド付近）
23	5SI-001																				2	竪穴住居跡（古墳、36S-52グリッド付近）
20	SK-011								1												1	
20	SK-012																		1			
20	SK-023																				1	
20	SK-036																				1	
20	SK-038															1			1			
20	SK-044									1												
20	SK-045																		1			
20	SK-050							2		1												
20	SK-052							2								1			1		2	

調査年度	遺構名	貿易陶磁						瀬戸・美濃							常滑			その他	土器		近世以降	備考
		青磁		白磁		青白磁	染付	碗	皿	盤	瓶	天目茶碗	擂鉢	その他	片口鉢	壺・甕	その他		カワラケ	鍋・釜		
		碗	その他	皿	その他		皿															
20	SK-054									1									1			
20	SK-059											1							1			
20	SK-060															3			2			
20	SK-061	1							1	1						2			10	2	2	
20	SK-065							2	1	1					2	2		1	5			その他1は須恵器転用砥石
20	SK-067																	1				その他1は知多半島系緑釉小皿(鉄釉)
20	SK-069							2	1	2					1	2			1			常滑甕うち1は転用砥石
20	SK-070																				1	
20	SK-072								1													
20	SK-073															2			4			
20	SK-077															1			1			
20	SK-078																				1	
20	SK-082							1											4			
20	SK-089																				3	
20	SK-090															1						
21	SK-093														1							
21	SK-099								1												1	
21	SK-112																				2	
21	SK-116														1			1			2	その他1は在地産擂鉢
21	SK-119														1							
22	4SK-002															1			1		1	
22	4SK-004									1									1			
22	4SK-005								1		1					1			1			
22	4SK-006		1					1	1				1		3	13			1	1	3	青磁その他1は鉢
22	4SK-008								1							1						
22	4SK-009															2						常滑甕うち1は転用砥石
22	4SK-010														1			1	2			その他1は瓦質鉢
22	4SK-011															2			1			
22	4SK-012															3			2		1	
22	4SK-013													1					1		2	瀬戸・美濃その他1は山茶碗
22	4SK-016	1														1			1			
22	4SK-017																		1			
22	4SK-024		1																3			青磁その他1は魚文皿
22	4SK-025															3						
22	4SK-026																		1			
22	4SK-027																		6			
22	4SK-028																		1		1	
22	4SK-029															1			2			
22	4SK-030																		1			
22	4SK-031														1	1		1	3			その他1は在地産鉢
22	4SK-032															1			7			
22	4SK-035															3					5	
22	4SK-036														1	3			3			
22	4SK-037												1			6					1	
22	4SK-038							1	1			1	1		1	8			1		7	常滑甕うち1は転用砥石
22	4SK-039								1									1				その他1は瓦質土器
22	4SK-042															3		1				その他1は在地産鉢
22	4SK-043														1	1						
22	4SK-044																				2	
22	4SK-045																	1			7	その他1は東海系
22	4SK-047								7				1			5		1			11	その他1は備前擂鉢
22	4SK-049														2	2			1		5	
22	4SK-050															1					3	
22	4SK-053	1						1										1	1		2	その他1は須恵器転用砥石
22	4SK-054																				1	
22	4SK-055															2			1		3	常滑甕うち1は転用砥石
22	4SK-056														1	4						
22	4SK-058															1			2			
22	4SK-060																				3	
22	4SK-064														1						4	
22	4SK-065																				1	
22	4SK-066																				2	
22	4SK-067												1								1	
22	4SK-068						1						1			1					7	
22	4SK-069	1	1					1	2			1	1			2					4	
22	4SK-070						1															
22	4SK-071															1		1			5	その他1は在地産擂鉢
22	4SK-074																	1	1		2	その他1は在地産擂鉢
22	4SK-075																				6	
22	4SK-076																				1	
22	4SK-077																				1	
22	4SK-079							1														
22	4SK-084														1	6		1	2		1	その他1は在地産擂鉢
22	4SK-085	1						1										4	2		2	その他4は在地産擂鉢
22	4SK-089															1						
22	4SK-090							1	1						1	2			1		2	
22	4SK-092		1					1	1	1			4			2		1	61			青磁その他1は鉢、その他1は須恵器転用砥石
22	4SK-097										1					2			2		4	
22	4SK-098															1					4	常滑甕うち1は転用砥石
22	4SK-101												3		1	7		1			6	常滑片口鉢うち1は転用砥石、その他1は在地産擂鉢
22	4SK-103									1						2					8	
22	4SK-106															4						
22	4SK-110															7			4		13	
22	4SK-113								1	1			1			3					1	
22	4SK-117								1							2						
22	4SK-120							1					1									
24	6SK-126								1							7			1		2	
24	6SK-128															3						
24	6SK-129																		1			
24	6SK-130																		3			
24	6SK-131															1						
24	6SK-133							1										1				その他1は瓦質土器

調査年度	遺構名	貿易陶磁						瀬戸・美濃							常滑			その他	土器		近世以降	備考
		青磁		白磁		青白磁	染付	碗	皿	盤	瓶	天目茶碗	擂鉢	その他	片口鉢	壺・甕	その他		カワラケ	鍋・釜		
		碗	その他	皿	その他		皿															
19	SS-001																				1	方形周溝墓(弥生、26H-19グリッド付近)
21	SS-006																				1	方形周溝墓(弥生、7C-03グリッド付近)
21	1トレンチ								1												1	
21	2トレンチ								1									1		2	4	その他1は在地産擂鉢、近世うち2は転用砥石
21	3トレンチ											1									2	
21	4トレンチ								1							3		1		1	12	常滑甕うち1は転用砥石、その他1は在地産擂鉢
21	5トレンチ																				1	
21	6トレンチ															1						常滑甕1は転用砥石
21	7トレンチ									1					1						1	
21	8トレンチ																				2	
21	9トレンチ														4				1			
21	12トレンチ															1						常滑甕1は転用砥石
21	15トレンチ														1	7				1		
22	1トレンチ																		3		2	
22	2トレンチ												1		2	6					6	
22	3トレンチ									2			1			4						
22	4トレンチ								1	1			1		1	4			4		5	
22	5トレンチ															1					2	
22	8トレンチ							1	2		1			1							3	
22	10トレンチ	2			1	1							1		1	8			2		6	白磁その他1は壺、青白磁1は皿
22	12トレンチ								1							1					1	
22	13トレンチ																		5		3	
22	15トレンチ								1													
22	16トレンチ	1							1				1			1					4	
22	17トレンチ																				1	
22	18トレンチ																				4	
23	1トレンチ																				1	
23	2トレンチ																		1		7	
23	4トレンチ																				1	
23	6トレンチ																	1			1	その他1は須恵器転用砥石
23	8トレンチ																	1				その他1は須恵器転用砥石
23	11トレンチ										1					1					3	
23	16トレンチ																				1	
21	6C-29															1						常滑甕1は転用砥石
21	6C-48～51															1						
21	6C-82～93												1									
21	6C-84～95																				1	
21	6D-22								1													
21	6D-42～53														1	1		1			1	その他1は在地産擂鉢
21	6D-44～55								1												1	
21	6D-61																				1	
21	6D-82～93																				1	
21	7C-04～15														1	1						
21	7C-22～33																				4	
21	7C-22～39												1									
21	7C-24～35																				2	
21	7C-45															1						
21	7C-62～73																				1	
21	7D-00									1												
21	7D-10							1												1		
21	7D-20															1						常滑甕1は転用砥石
21	7D-54																				2	
21	7D-63															1					2	常滑甕1は転用砥石
21	7D-64														1	1						
21	7D-92																				1	
21	7D-94																				1	
21	8C-14															1						
21	8D-05																				1	
21	8D-44～55																				1	
21	9D-22																				2	
22	10C-78																		2			
22	10D																				1	
22	10D-49																				4	
22	10D-71	1																			1	
22	10E-80															1					5	
22	11D-06								1													
22	11D															3			1		3	
22	12D							1		1						3						
22	12D-06									1												
22	13D															7					28	
22	13D-06																		1			
22	14D													1		1						瀬戸・美濃その他1は茶壺
22	15D-29								1													
22	15D-39															1						
22	15E-53														1							
22	15E-46							1											2		3	
22	15E-23									1											1	
22	15E-24									1												
20	19E-51												1									
20	19E-63														1							
20	19E-67															1			3			
20	19E-95														1							
20	19F-60			1																		
20	19F-80															1						
20	20E-16			1						1				2	1	6		2	1			その他2は東播系片口鉢1・瓦質火鉢1、瀬・美その他2は小鉢・卸皿
20	20E-17															1						
20	20E-18																		1			
20	20E-19							1							1	1						
20	20E-25		1					2								5			5			青磁その他1は酒会壺
20	20E-26															1						
20	20E-27												1			1						
20	20E-35															2						

調査年度	遺構名	貿易陶磁						瀬戸・美濃							常滑			その他	土器		近世以降	備考
		青磁		白磁		青白磁	染付	碗	皿	盤	瓶	天目茶碗	擂鉢	その他	片口鉢	壺・甕	その他		カワラケ	鍋・釜		
		碗	その他	皿	その他		皿															
20	20E-37															1					1	
20	20E-38															1						
20	20E-39																		1			
20	20E-47															1						
20	20E-65									1									3			
20	20E-75																		1		1	
20	20E-77															1						
20	20E-97								1										1		2	
20	20F-10															1						
20	20F-11														1							
20	20F-12															1						
20	20F-13									1									1			
20	20F-23																		1			
20	20F-26																				1	
20	20F-28																		3			
20	20F-35																				1	
20	20F-38										1											
20	20F-54															1						
20	20F-57															1						
20	20F-67								1	1												
20	20F-76															2			1			
20	21E-18								1										2		3	
20	21E-45																		1	1		
20	21F-07																		1			
20	21F-08																		8			
20	21F-09																		8			
20	21F-10															1						
20	21F-18	1														1						
20	21F-42								1							1			3		1	
20	21F-43									1						2						
20	21F-51								1													
20	21F-53															2						
20	21F-62																		1			
20	21F-63															1						
20	21F-69																		1			
20	21F-72																		1			
20	21G-00																		1			
20	21G-40																			1		
20	22G-00							1											1		1	
19	25H-35																				1	
19	27J-82																	1				その他1は山茶碗か
23	36R-55												1		1							
23	36S																				1	
19	H19一括								1		1			1							17	瀬戸・美濃その他1は鉄釉鉢
21	H21一括	1											1								2	
22	H22一括							1	1				1			3			3		9	
計		16	8	2	1	3	2	38	65	51	10	10	44	8	77	425	0	38	301	57	608	

※接合作業後の個数をカウントした
※別遺構で接合した個体は代表遺構でカウントした
※非掲載遺物を含む

第３章　まとめ

文脇遺跡のこれまでの調査では、中・近世についての成果は限定的なものであった。今回、幅約 40 m×長さ約 950 mという狭長な範囲の調査ではあったが、ある程度まとまった成果が得られたと言えよう。これまでの成果とあわせることによって、中・近世における文脇遺跡について考えてみたい。

第１節　中・近世の遺構について

今回報告の中・近世遺構は、地下式坑 20 基、方形竪穴・竪穴状遺構 116 基、井戸３基、土坑 127 基、堀１条、土塁１条、掘立柱建物跡９棟、柵列３条、溝状遺構 71 条、ピット群などである（第 359･360 図）。これらについて、遺構ごとにまとめてみる。

まず地下式坑についてであるが、調査区内で検出されたものの分布は 22F グリッド以北に限られ、中でも 12C・12D・13C・13D グリッド付近に集中する傾向が窺える。地下式坑についてはあまり重複関係はみられないが、方形竪穴や土坑、溝状遺構と重複する場合、いずれも地下式坑のほうが古いようである。なお、地下式坑同士での重複はみられない。

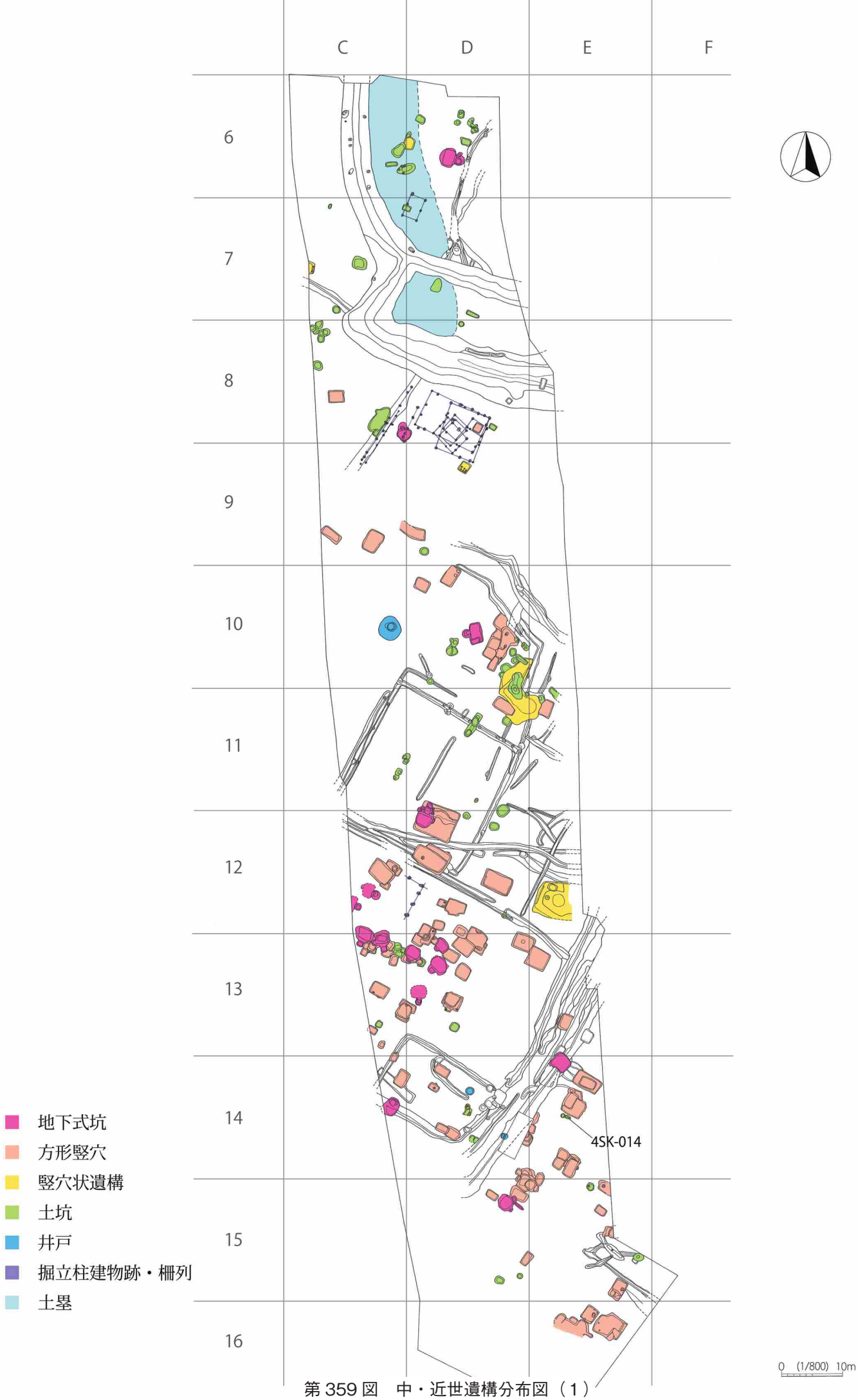
地下式坑の基本的な構造は、地下室に通じる竪坑と地下室とからなる。主に千葉県内の地下式坑について竪坑と地下室の関係からＡ類～Ｈ類に分類し、編年的見通しを立てた簗瀬裕一氏の研究があるが[1)]、その分類案によれば、文脇遺跡で今回検出された地下式坑は、竪坑が地下室に接して設けられるＢ類と、竪坑が地下室壁面に重なってくるＣ類が多いと言えそうである。

地下式坑から出土した遺物はあまり多くはなく、時期についてははっきりしない。しかしながら、例えば SK-116 の床面からは、古瀬戸後期様式Ⅳ期新段階併行とみられる遺存度の高い在地産擂鉢が出土している。また、4SK-039 の床面から、古瀬戸後期様式Ⅳ期に位置づけられるほぼ完形の瀬戸・美濃縁釉小皿が出土しており、これらが年代を推定する手がかりとなり得るだろう。中世の陶磁器・土器に混じって近世以降の遺物が覆土から出土している遺構もあるが、地下式坑の年代は、概ね 15 世紀後半頃を主体とすると言えるのではないだろうか。

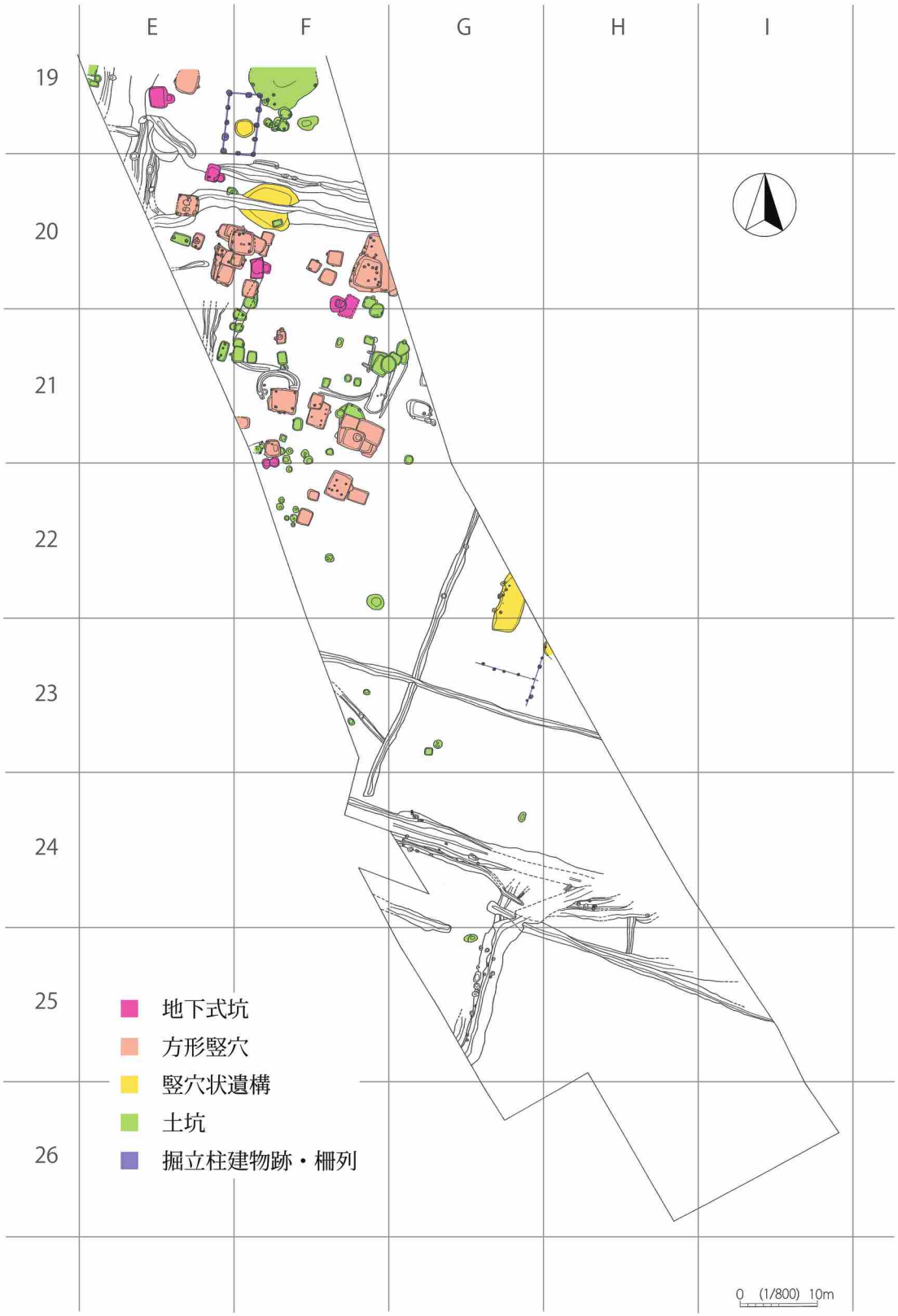
地下式坑の用途・機能についても、従来、墓など葬送関連施設とみる見解と、地下倉庫など貯蔵施設とみる見解などがあるようだが、一概にははっきりとは言えない状況である。

文脇遺跡と同じく、千葉鴨川線事業に伴って調査された荒久 (2) 遺跡では、副葬品とみられる遺物を伴って人骨が出土した地下式坑があるが[2)]、文脇遺跡では人骨は出土しておらず、明確に墓として使われたと言えるものはない。ただ、覆土から銭貨が出土した遺構や、仏飯器が出土した遺構などがあり、埋葬との関連を想起させるものは若干ある。

一方、覆土に貝層を伴う地下式坑が２基検出されたが（4SK-055・4SK-092）、貝層の分析の結果、イボキサゴを主体とする貝類のほかに、海産魚類の骨、ネズミ類・ヘビ類の骨、イネ胚乳（コメ）やオオムギ・コムギなどの植物遺体が確認された。貝層は、遺構の埋没に伴って持ち込まれ投棄された食料残滓である可能性も否定はできないものの、もともと遺構内或いは周辺にあったものを集めた可能性も考えられるだろう。イボキサゴについては、袖ケ浦市周辺では、昭和初期に化学肥料が普及するまで田の肥料として珍重されたことが知られているが[3)]、他の貝や魚骨等を含んでいても肥料としては問題ないと思われる。



第 359 図　中・近世遺構分布図（1）



第 360 図　中・近世遺構分布図（2）

これらのことから、地下式坑において肥料やコメ・オオムギ・コムギなどの農作物が収納され、そこにネズミやヘビが寄って来るような、倉庫のような使用状況があったことも考えられるだろう。

4SK-092 では、多数の遺物を伴った特殊な埋没状況が明らかとなり、廃絶にあたり何らかの祭祀的行為が行われたことも推測される。入口埋土上には、完形のカワラケが置かれていた。カワラケは覆土中からも多数出土しており、覆土中からはほかに銭貨や錠前、短刀といった金属製品なども出土している。天井部が遺存した状態で検出された地下式坑もある一方で、特殊な埋没状況を示す地下式坑もあるということも指摘できよう。

次に、方形竪穴・竪穴状遺構についてであるが、単なる土坑とは異なり、竪穴住居のように床面が堅く、壁がほぼ垂直に立ち上がる遺構のうち、平面形が方形を呈するものを方形竪穴、それ以外を竪穴状遺構としたが、これらの遺構はそれまでの文脇遺跡の調査でも検出されている。これらの遺構は、床面にピットが検出される場合はあるが、火床部はなく、居住施設ではないとみられる。覆土は一気に埋め戻された様相を呈しており、具体的な用途ははっきりしないものの、倉庫などの貯蔵施設や作業場として機能していた可能性が考えられるものである。方形竪穴・竪穴状遺構の分布は 23G グリッド以北に限られ、中でも 10D ～ 16E グリッド、21E ～ 22F グリッド付近では、１基ずつ存在するというより数基が隣接或いは重複するように密集して存在する傾向があるようである。

方形竪穴・竪穴状遺構のうち、特に北宋銭５枚・南宋銭１枚の計６枚の銭貨と、５型式に比定される常滑広口壺とが出土した方形竪穴 4SK-013 は注目されよう。一括出土銭の出土した土坑 4SK-014 の僅か 40㎝北側に存在しており、銭の貯蔵に関連する遺構であった可能性も考えられる。

方形竪穴・竪穴状遺構も、地下式坑と同様に出土遺物が少なく、出土しても多くは埋土に混入する破片といった状態であることから、いずれも遺構の時期を推定するのは難しい状況である。しかし、強いて言えば、全体的には 15 世紀後半頃を主体とし、それよりも古い遺構と新しい遺構とが少数ずつあると言えそうである。古い遺構としては、古瀬戸中期様式の入子と花瓶が出土した 4SK-005 などがあり、概ね 14 世紀代～ 15 世紀前半頃の時期が考えられる。新しいものとしては、大窯期以降の遺物が出土した 4SK-047･068･069 などがあり、概ね 16 世紀～ 17 世紀の年代が考えられる。なお、遺構の分布範囲としては、時期によって偏る傾向はみられないようである。

次に、井戸についてであるが、井戸は調査区内から３基しか検出されていない。道路幅の調査であることから、調査区外にあった可能性は考えられるが、地下式坑や方形竪穴・竪穴状遺構の集中する地点の南北約 85 mの範囲内に３基が存在し、形状や規模もほぼ似通っている。時期は、6SE-005 から９型式に比定される常滑大甕が出土しているものの、近世以降陶磁器・土器片も出土している。また 4SE-001 から近世の所産とみられるカワラケが出土しており、いずれも近世に機能した可能性が高いが、中世に遡る可能性もあると言えるだろう。

次に、調査区の北端、松川を見下ろす台地端部に位置している堀 SD-027 と土塁 SA-001 についてであるが、これらは位置関係のほか土層断面の観察から、一緒に構築されたものとみられる。時期は、土塁下から出土した遺物から 15 世紀半ば以降と考えることができるが、堀の覆土上層に宝永火山灰がみられることから、18 世紀前葉には堀が埋没していたことが明らかである。出土した陶磁器も 15 世紀前半頃～近世を主体とするものであり、比較的長期間機能した可能性が考えられる。但し、堀の覆土と土塁の盛土が「虎口」を境に様子が異なることが調査所見としてあり、それが時期差を示しているかもしれず、検出

された形のまま機能し続けたわけではなく、途中で形を変えて機能し続けた可能性は高い。

周辺には城館の存在を示す文献資料は残っていないようであるが、SD-027 と SA-001 は館を方形状に巡る堀と土塁と思われる。堀と土塁の内側部分には溝状遺構 SD-028 が、そのすぐ東側には台地整形区画があり、更に東側には、調査区外となるが現存の住宅が存在している。館の本体部分はその付近と推測されよう。

また、堀の外となる南側にも隣接して台地整形区画があり、その一段高い部分に掘立柱建物跡群が、段差部分に柵列が検出された。それらは何度も建て替えられたとみられるが、軸方向が大きく分けて２種類あり、堀・土塁と同様、時期差をもって機能していた可能性も考えられる。

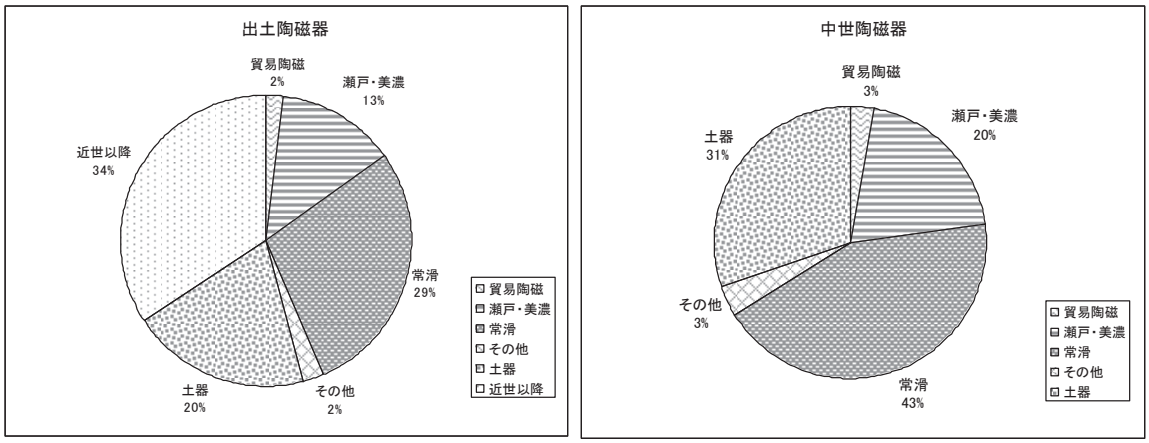
掘立柱建物跡は、上記のほかに３棟しか検出されなかった。そのうち１棟は土塁下から検出されたもので、ほか２棟は地下式坑や方形竪穴・竪穴状遺構等が集中する地点で検出された。付近には柱穴とみられるピットが群衆しており、現場では組めなかったもののそれらが掘立柱建物跡であった可能性はあるだろう。居住スペースとみられる掘立柱建物と、貯蔵・作業等スペースとみられる地下式坑・方形竪穴・竪穴状遺構とが近接して存在していた様子が窺われる。

そのほか、調査区内からは多数の溝状遺構が検出された。溝状遺構は、区画と考えられるもののほか、硬化面が何枚もみられ道路として継続して機能したと考えられるものがある。区画溝には、例えば 4SD-018 などのように地形に沿ったものや、現在の区画とほぼ同じ場所にあるものも多い。硬化面がみられ道路と考えられる 4SD-006、4SD-009 や 2SD-001、7SD-002、7SD-003、SD-005 なども現道とほぼ同じ位置にあり、これらの区画や道が、中・近世まで遡るものであることが明らかとなったと言えるだろう。現在見られる文脇遺跡周辺の景観の基礎は、中・近世に形成されたということであろう。

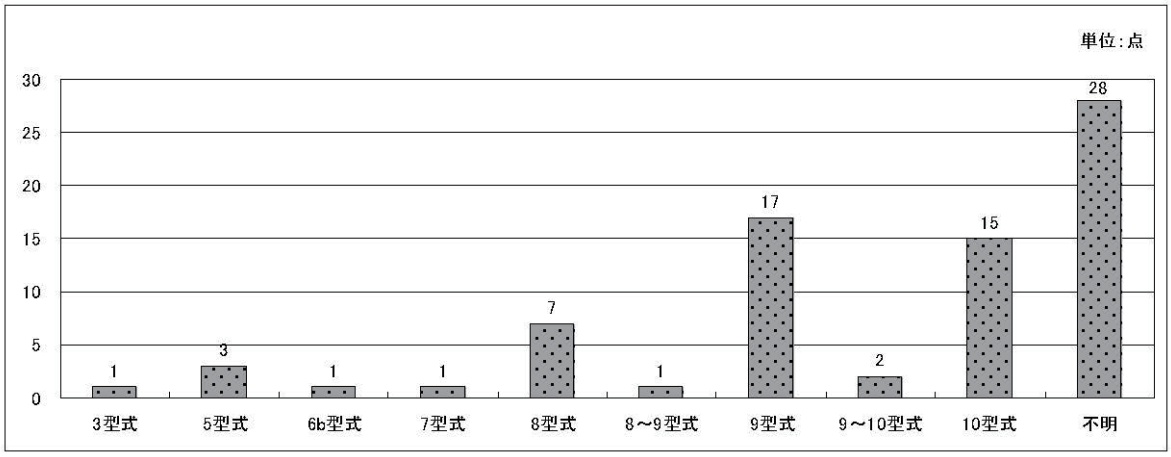
第２節　中・近世の遺物について

１　陶磁器・土器

出土した陶磁器･土器片について、掲載･非掲載を問わず全て分類して数を数えたものが第 20 表である。更にこれをグラフ化したものが、第 361 図である。これらによると、出土した全 1,764 点（接合作業後）の陶磁器・土器片のうち、中世陶磁器・土器が３分の２を占め、残り３分の１を近世以降陶磁器・土器が



第 361 図　出土陶磁器・土器内訳



第 362 図　常滑窯製品　型式別破片数

占めている。このうち中世陶磁器・土器についてのみ産地ごとに見てみると、常滑窯製品が最も多く 502 点で、全体の 43%を占める。次いで土器が 31%（358 点）、瀬戸･美濃窯製品が 20%（226 点）と続き、貿易陶磁器 32 点とその他陶磁器 38 点は僅か３%ずつとなる。これらについて、少し詳しく見ていく。

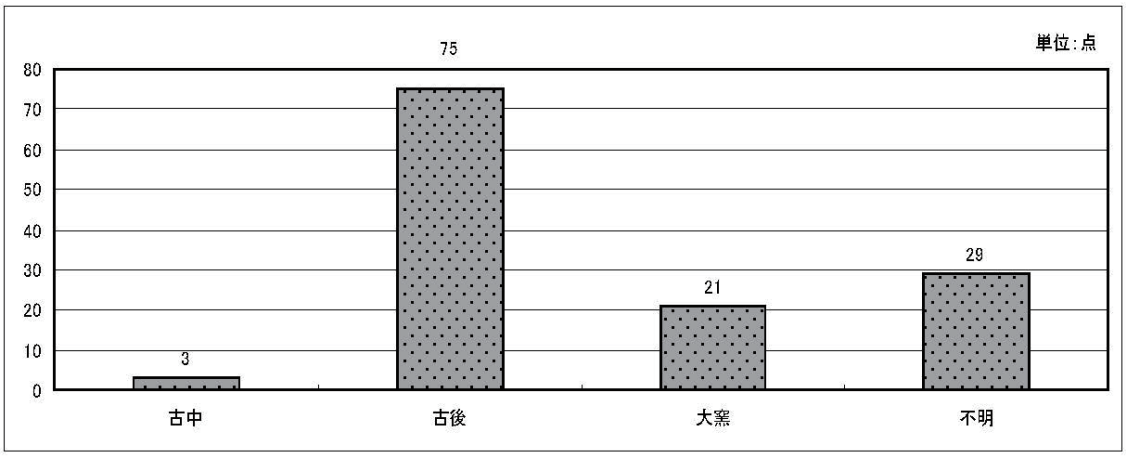
まず、今回最も多く出土している常滑窯製品のうち、85%にあたる 425 点は壺・甕の破片で、残り 15%の 77 点は片口鉢である。図を掲載した 76 点の常滑窯製品について型式を見てみると（第 362 図）、型式が特定できないものが 28 点あるものの、９型式が 17 点と最も多く、次いで 10 型式が 15 点、８型式が７点となる。８～９型式、９～ 10 型式と限定しきれないものも合わせると、型式のわかるもののうち 90%が８型式～９型式となる。なお、11 型式・12 型式に比定されるものはみられない。

常滑窯製品で最も古いものは、溝状遺構 4SD-018 から出土した３型式の片口鉢（第 336 図１）で、ほかに古いものとしては、地下式坑 4SK-012 から出土した大甕（第 104 図１）や方形竪穴 4SK-013 から出土した片口鉢（第 154 図１）、方形竪穴 4SK-036 から出土した広口壺（第 165 図１）などがあり、５型式とみられる。

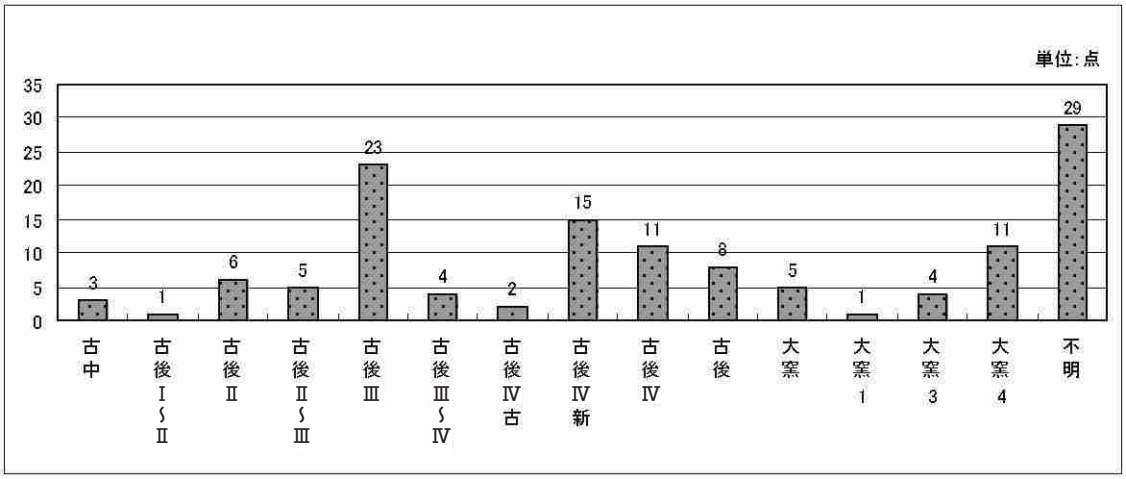
常滑窯製品については、３型式・５型式（12 世紀後葉～ 13 世紀前葉）から現れはじめ、８型式（14 世紀後半）頃から増加し、９型式～ 10 型式（15 世紀代）をピークとして、急速に減少する傾向が指摘できるだろう。

常滑窯製品に次いで多く出土したのは土器で､358 点である。このうち 84%にあたる 301 点はカワラケ、残り 16%の 57 点は鍋･釜である。カワラケは全てロクロ成形によるもので、手捏ねのものはみられない。カワラケは、完形か完形に近い遺存度のものも多く、大きく分けて口径 12㎝前後、底径 6.5㎝前後、器高 3㎝前後で底部から直線的に開く器形の杯と、口径８㎝前後、底径５㎝前後、器高 1.5㎝前後の小皿とがみられる。鍋・釜は、ほとんどが内耳土鍋であるが、東海系羽釜も少量みられる。

瀬戸・美濃製品は 226 点で、器種別にみると、多い順に皿が 65 点（29%）、盤が 51 点（23%）、擂鉢が 44 点（19%）、碗が 38 点（17%）、天目茶碗・瓶が各 10 点（各４%）、その他８点（4%）である。このうち図を掲載した 128 点の中世瀬戸・美濃窯製品について時期を見てみると、約半数にあたる 75 点が古瀬戸後期様式に位置づけられるもので、次いで大窯期のものが 21 点となっている（第 363 図）。古瀬戸中期様式に位置づけられるものはごく僅かしか確認できず、古瀬戸前期様式以前のものはみられなかった。



第 363 図　瀬戸・美濃窯製品　時期別破片数①

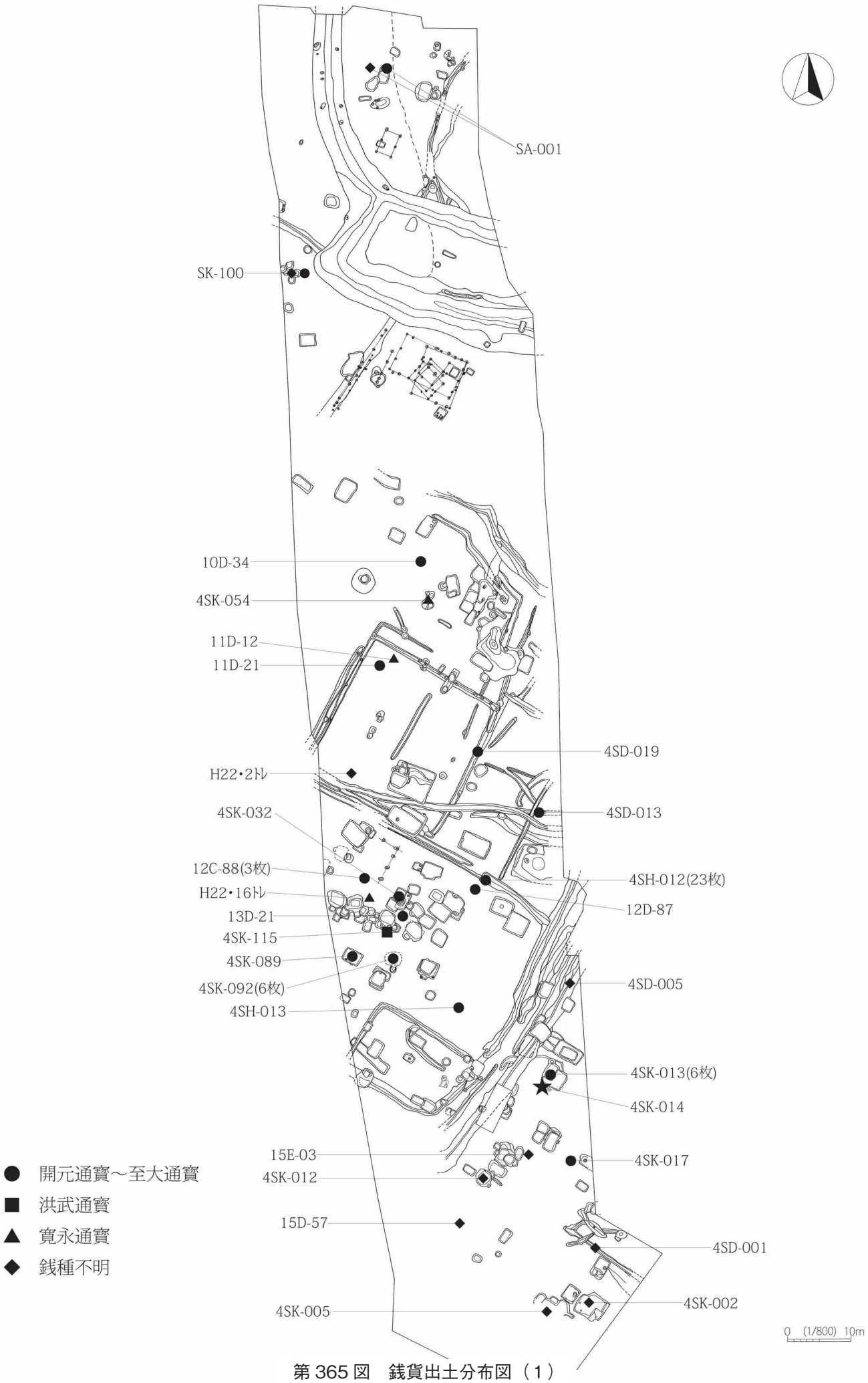


第 364 図　瀬戸・美濃窯製品　時期別破片数②

これらについて更に詳しく見てみると、古瀬戸中期様式のものは、溝状遺構 4SD-009 から出土したⅣ期とみられる折縁深皿（第 330 図３）と、方形竪穴 4SK-005 から出土した入子（第 149 図１）及び花瓶（第 149 図２）しかなく、これらが瀬戸・美濃製品としては最も古いものとなる。古瀬戸後期様式のものもⅠ～Ⅱ期のものは少量だが、Ⅲ期になると 23 点、Ⅳ期は古段階・新段階含め 28 点で、このあたりが主体となるようである。大窯期の製品も比較的多くみられ、中でも大窯期後半からのものが多いようである。大窯Ⅰ～Ⅱ期のものはほとんどみられず、断絶期があるのかもしれない。

瀬戸・美濃窯製品については、古瀬戸中期様式後半（14 世紀中葉）頃から現れはじめ、古瀬戸後期様式Ⅲ期～Ⅳ期（15 世紀中葉～後葉）を一つのピークとして増加するものの、一時断絶し、その後大窯期後半（16 世紀後半）頃にもう一度増加するという傾向が指摘できそうである。

次に、貿易陶磁器は全体に少ないが、中では青磁が最も多く 24 点で（75%）、そのうち碗が 16 点である。白磁は皿２点・壺１点、青白磁は皿２点・壺１点、染付は皿２点しかない。これらのうち、掲載した 19 点から時期を見てみると、青磁蓮弁文碗で 13 世紀代のものがある一方、15 世紀代の白磁小皿や 17 世紀初め頃とみられる青白磁壺などもある。年代幅は広いが、国産陶磁器に対して違和感はないと言えるのかもしれない。



第 365 図　銭貨出土分布図（1）

第 366 図　銭貨出土分布図（2）

２　銭貨（4SK-014 一括出土銭以外）

陶磁器・土器のほかに出土遺物として注目されるのは、銭貨である。土坑 4SK-014 から大量に出土した銭貨については第２章第１節で詳細に分析し、その組成から 14 世紀第Ⅲ四半期を中心とする時期のものであると判断した。ここではそれ以外の出土銭貨（第 19 表）についてまとめる。

土坑 4SK-014 以外から出土した銭貨は、大破して拓本のみ辛うじて掲載できたもの、拓本も写真も掲載できなかったものを含め、計 73 枚を数える。地下式坑４基、方形竪穴６基、土坑５基、溝状遺構５条のほか、土塁下、ピット、遺構外から出土しており、その分布は 4SK-014 を中心として、その周辺に偏る傾向である（第 365・366 図）。この中には、一つの遺構からまとまって出土しているものもあり、特に土坑 4SH-012 からは、23 枚もの銭貨が出土した。そのほか、地下式坑 4SK-092 及び方形竪穴 4SK-013 から、それぞれ６枚ずつ出土した。4SK-013 は一括出土銭が出土した土坑 4SK-014 に隣接しており、4SK-014 との関連も考えられる。

銭種について見てみると、4SK-014 出土銭貨では最も新しいものは至大通寶（初鋳年 1310 年）であるが、4SK-014 以外では、至大通寶より新しいものは５枚しか確認されていない。すなわち、方形竪穴 4SK-115 から出土した洪武通寶 (初鋳年 1368 年) １枚と、土坑 SK-067、4SK-054 からそれぞれ１枚ずつ及び遺構外から２枚出土した寛永通寶の計５枚のみで、ほかは全て 4SK-014 でみられる銭貨である。また、4SK-014 には私鋳銭や模鋳銭、島銭といったものがみられるが、4SK-014 以外で出土した 73 枚の中にはそういった銭貨はみられず、全て本銭であった。

３　動物遺体

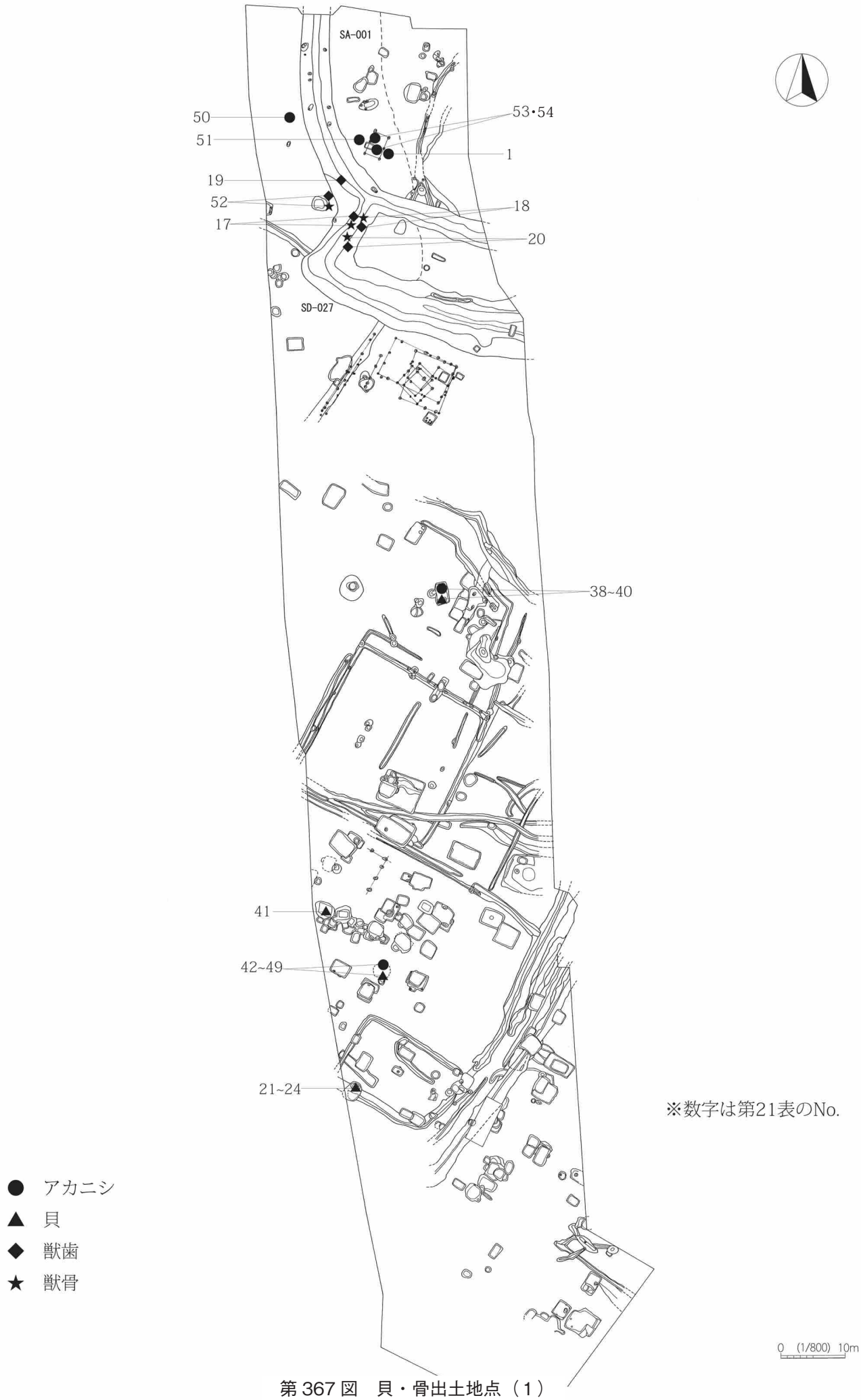
動物遺体は、地下式坑 4SK-092・4SK-055 のブロック貝層中から検出されたネズミ類やヘビ類等の微細骨のほかに、大型獣のものとみられる骨や歯、アカニシの貝殻等が単独で出土している。これらの出土状況についてみてみる。

まず、獣骨・歯についてであるが、これらは同定結果（付章参照）によるとウマかウシと考えられる。分布状況は、地下式坑や方形竪穴、掘立柱建物などの構築物が集中している地点を避けるように、縁辺にある溝状遺構や堀 SD-027 の中及び周辺からのみ出土している（第 367･368 図、第 21 表）。7SD-003 は、硬化面を複数持ち道路として機能していたと考えられる遺構であるが、ウマとみられる骨は、硬化面の下から出土した。また、堀 SD-027 では、ウマとウシの骨が出土している。人とともに生きた家畜が、既存の深い溝や堀を利用して埋葬されたものかもしれない。但し、堀 SD-027 から出土したウシについては、頭骨のみであることから、例えば動物犠牲に伴う祭祀に関係する可能性なども指摘できるのかもしれない。

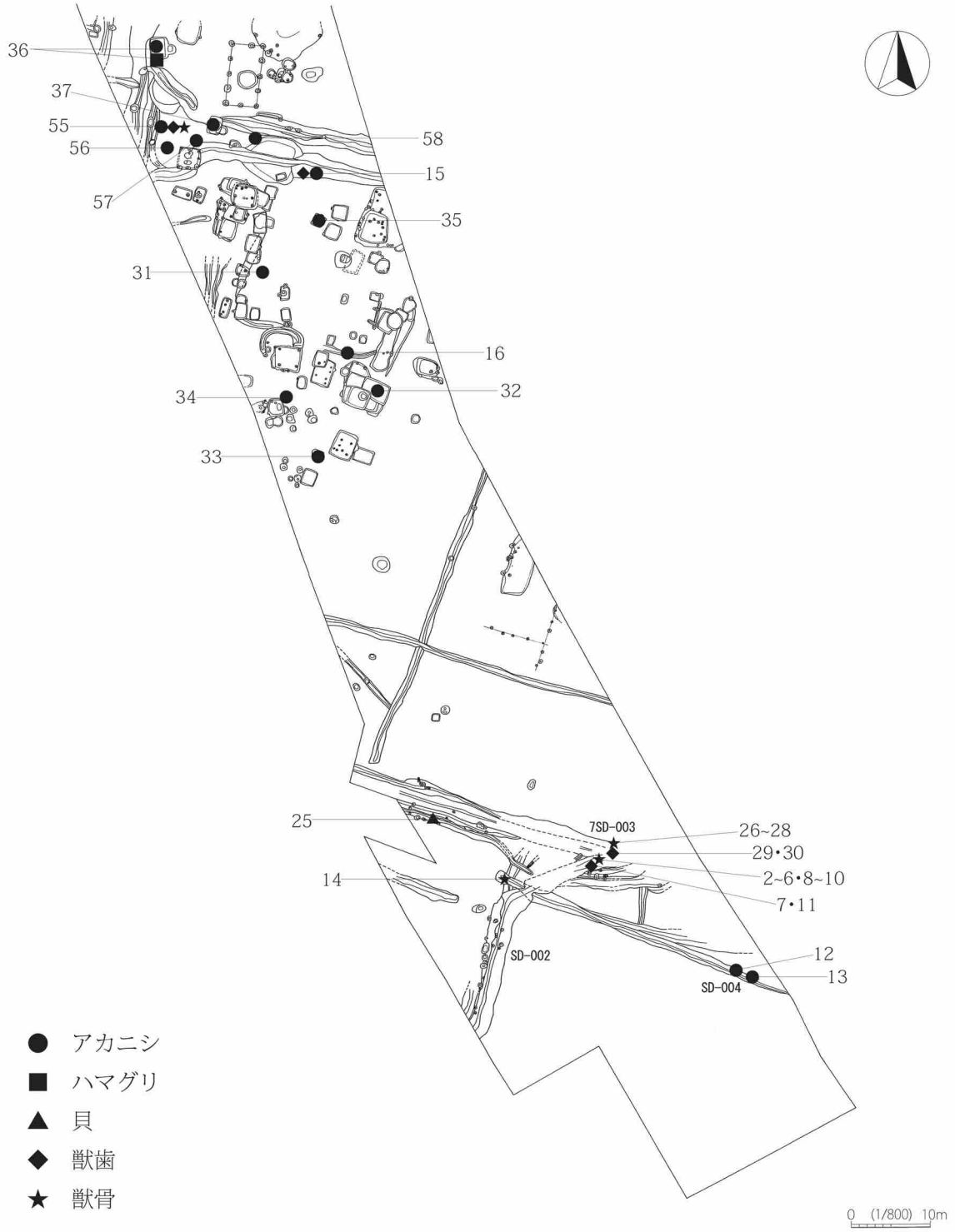
そのほか、目立つのがアカニシの貝殻である。地下式坑のブロック貝層中にも含まれているが、それ以外に遺構から単独で出土している。出土分布を見ると、ウマやウシとは対照的に、地下式坑内や方形竪穴内、掘立柱建物付近、土塁 SA-001 下の掘立柱建物跡 SB-008 周辺など中・近世の遺構が集中する部分に多い様子が見て取れる。アカニシの貝殻は堅牢なため、他の貝殻に比べて遺存しやすいということはあるかもしれないが、単なる食料残滓とは言い切れない出土状況ではないだろうか。このようなアカニシの単独出土例は、松虫陣屋跡（印西市）などでも報告されており、食用以外の目的でアカニシの殻が利用されたのではないかとの指摘もなされている[4)]。例えば、施設の廃絶に伴って、何か祭祀的意味をもってアカニシを埋めた可能性なども考えられるのではないだろうか。

第 21 表　動物遺体一覧表

No.	調査年度	遺構番号(報告時)	遺構種別	遺物番号	遺物名	備考
1	H21	SA-001	土塁	17	アカニシ1点	土塁下部出土
2	H27	SD-002	溝状遺構	4	獣骨	
3	H27	SD-002	溝状遺構	5	獣骨	
4	H27	SD-002	溝状遺構	6	獣骨	
5	H27	SD-002	溝状遺構	7	獣骨	
6	H27	SD-002	溝状遺構	8	獣骨	
7	H27	SD-002	溝状遺構	9	獣歯	
8	H27	SD-002	溝状遺構	10	獣骨	
9	H27	SD-002	溝状遺構	11	獣骨	
10	H27	SD-002	溝状遺構	12	獣骨	
11	H27	SD-002	溝状遺構	13	獣歯	
12	H19	SD-004	溝状遺構	5	アカニシ1点	
13	H19	SD-004	溝状遺構	6	アカニシ1点	
14	H27	SD-004	溝状遺構	3	獣骨	
15	H20	SD-020	溝状遺構	1	アカニシ1点・獣歯1点	アカニシ廃棄済
16	H20	SD-021	溝状遺構	2	アカニシ1点	廃棄済
17	H21	SD-027	堀	10	獣骨・歯	堀壁出土
18	H21	SD-027	堀	11	獣骨・歯	堀底出土
19	H21	SD-027	堀	16	獣歯	
20	H21	SD-027	堀	19	獣骨・歯	
21	H22	4SD-006	溝状遺構	2	ブロック貝層	廃棄済
22	H22	4SD-006	溝状遺構	3	ブロック貝層	廃棄済
23	H22	4SD-006	溝状遺構	4	ブロック貝層	廃棄済
24	H22	4SD-006	溝状遺構	5	貝	廃棄済
25	H27	7SD-001	溝状遺構	5	ブロック貝層	サルボオ主体、ハマグリ少量、ツメタガイ微量
26	H27	7SD-003	溝状遺構	6	獣歯	硬化面下出土
27	H27	7SD-003	溝状遺構	7	獣歯	硬化面下出土
28	H27	7SD-003	溝状遺構	8	獣歯	硬化面下出土
29	H27	7SD-003	溝状遺構	9	獣骨	硬化面下出土
30	H27	7SD-003	溝状遺構	12	獣骨	硬化面下出土
31	H20	SH-014	ピット	1	アカニシ1点	廃棄済
32	H20	SI-025	方形竪穴	1	アカニシ1点	廃棄済
33	H20	SK-009	方形竪穴	1	アカニシ1点	廃棄済
34	H20	SK-028	土坑	1	アカニシ1点	廃棄済
35	H20	SK-050	方形竪穴	2	アカニシ1点	廃棄済
36	H20	SK-065	地下式坑	3	アカニシ2点・ハマグリ1点	廃棄済
37	H20	SK-073	地下式坑	2	アカニシ1点	廃棄済
38	H22	4SK-055	地下式坑	3	ブロック貝層	貝サンプルA
39	H22	4SK-055	地下式坑	4	ブロック貝層	貝サンプルB
40	H22	4SK-055	地下式坑	5	ブロック貝層	貝サンプルC
41	H22	4SK-087	地下式坑	1	貝	廃棄済
42	H22	4SK-092	地下式坑	1	ブロック貝層	貝サンプルA
43	H22	4SK-092	地下式坑	2	ブロック貝層	貝サンプルA
44	H22	4SK-092	地下式坑	7	ブロック貝層	貝サンプルB
45	H22	4SK-092	地下式坑	9	ブロック貝層	貝サンプルC
46	H22	4SK-092	地下式坑	10	ブロック貝層	貝サンプルD
47	H22	4SK-092	地下式坑	14	ブロック貝層	貝サンプルE
48	H22	4SK-092	地下式坑	19	ブロック貝層	貝サンプルF
49	H22	4SK-092	地下式坑	20	ブロック貝層	貝サンプルG
50	H21	4トレンチ		3	アカニシ1点	
51	H21	7C-09		3	アカニシ1点	
52	H21	7C-56		1	獣骨・歯	
53	H21	7D-00～10		2	アカニシ1点	
54	H21	7D-00～10		3	アカニシ1点	
55	H20	20E-16		1	アカニシ1点・獣骨1点・獣歯多数	アカニシ廃棄済
56	H20	20E-25		3	アカニシ1点	廃棄済
57	H20	20E-27		2	アカニシ1点	廃棄済
58	H20	20F-11		2	アカニシ1点	廃棄済



第367図　貝・骨出土地点（1）



第368図　貝・骨出土地点（2）

第３節　中・近世の文脇遺跡について

中・近世における文脇遺跡のこれまでの調査成果について、あわせて考えてみたい。

これまでに検出された中・近世の遺構分布図が第 369 図である。昭和 62 年～平成元年にかけて行われた調査では、道路状遺構４条、掘立柱建物跡２棟、土坑墓２基、竪穴状遺構４基、竪穴住居状遺構１基、溝状遺構 77 条、柵列１条などが検出され、調査区の中央付近で検出された東西に走る道路（２号道路状遺構）を挟んで、南北で遺跡の特徴が異なる様相が捉えられた。すなわち、南側では和鏡を伴う土坑墓や経筒の蓋が検出されるなど宗教的な性格が認められるのに対し、北側は掘立柱建物や溝が多く検出され、耕作地とそれに隣接した屋敷地の一部と推測される状況であった。遺構の時期は、出土した陶磁器などから 12 世紀～ 13 世紀と考えられ、14 世紀前半までには消滅に向かったとみられている[5)]。

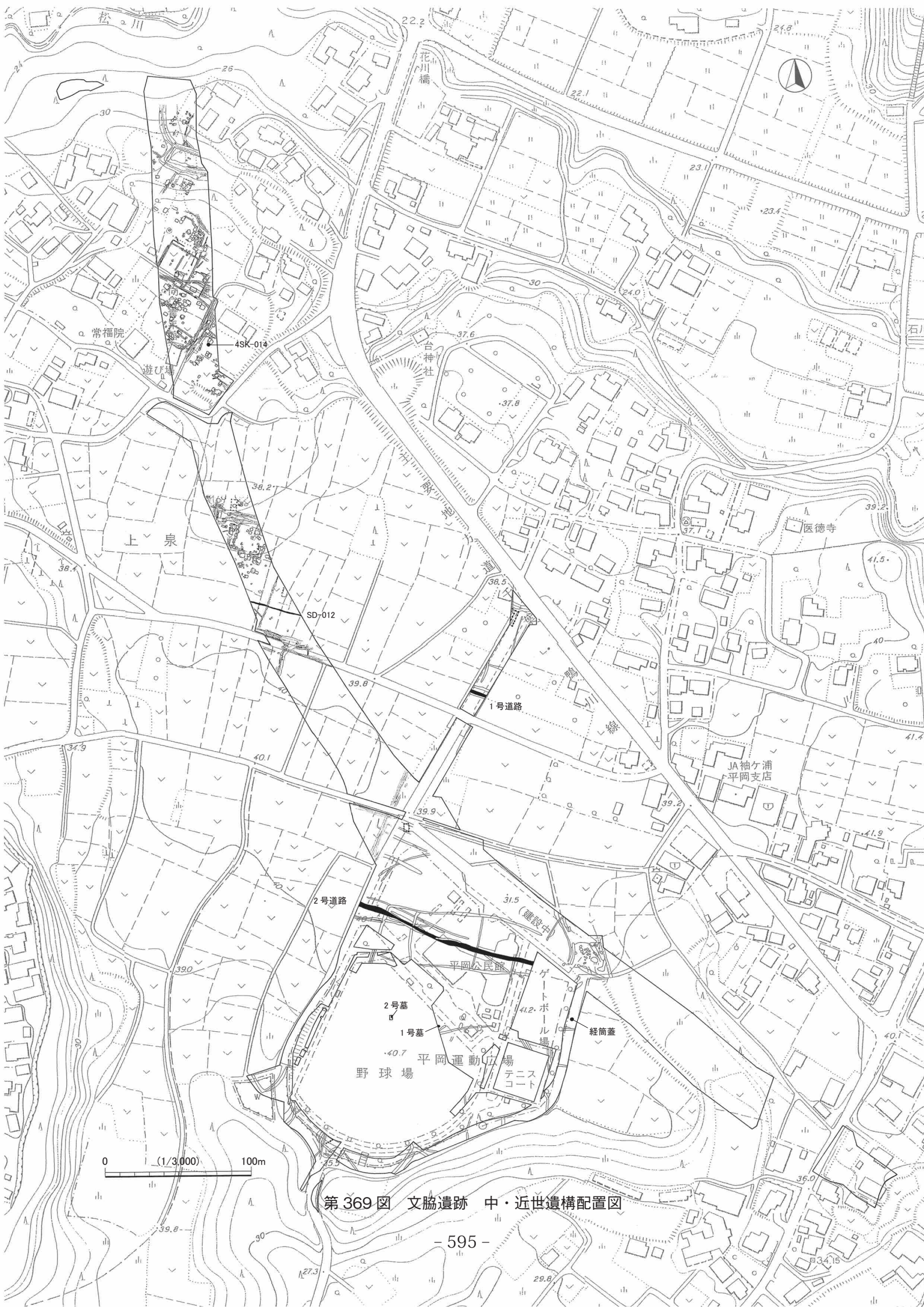
続く昭和 63 年の調査では、先の２号道路状遺構の北側にあたる部分の隣接地が調査地区となり、遺構は地形造成跡及び区画溝１か所、竪穴状遺構１基、土坑９基、溝状遺構９条などが検出された。地形造成跡は溝により３つの区画に分けられ、その最も広い区画には竪穴状遺構や土坑、ピット群などが検出され、建物の存在が想定された。一方、溝と土坑以外は遺構がほとんどみられない区画もあり、耕作地等に利用されたのではないかと考えられている[6)]。

これらを踏まえ今回の成果を見てみると、既調査区に隣接する平成 19 年度調査区周辺では、東西方向及び南北方向の溝状遺構ばかりが検出され、既調査区で想定された耕作地が引き続き展開していたものと推測される。

しかしこの様相は、東西方向の溝状遺構 SD-012 を境として、その北側から全く異なったものとなっている。SD-012 の北側では、地下式坑、方形竪穴・竪穴状遺構、掘立柱建物跡、ピット群などが多数展開しており、それらは谷状にやや低くなる空白部分（平成 22 年度確認調査区）を挟んで更に北側へと広がり、台地の最も北側の松川を望む場所には、堀と土塁に囲まれた館も存在している。そして遺構の合間には、区画或いは道路等とみられる溝状遺構が、縫うように縦横に延びている。

それらの主体となる時期は、出土した陶磁器から 15 世紀後半頃～ 16 世紀後半頃と考えられる。従って、文脇遺跡は 14 世紀前半までに消滅に向かったわけではなく、あくまで南北に狭長な調査範囲の成果としてではあるが、主体となる場所が南方から北方へと移動したとみるのが妥当なのではないだろうか。或いは、北方の今回の調査地区においても 12 世紀後葉～ 13 世紀前葉の遺物が出土し、14 世紀後半頃のものから量が増加する状況があることから、それまで南方・北方ともに耕作地に構築物が散漫に分布するだけの状況であったものが、14 世紀後半頃を契機として、15 世紀後半～ 16 世紀後半頃には、特に北方において領主の館を戴く村落が耕作地に隣接して展開していたと考えるほうが、より適切かもしれない。

遺構と遺物が少しずつ増えてくるとみられる 14 世紀後半は、4SK-014 の銭貨が埋められたと考えられる時期でもある。4SK-014 の平面的な位置は、SD-012 以北の遺構分布域の中では、南北方向では中間的地点と言える場所であり興味深いが、文脇遺跡の調査範囲は、広大な遺跡の中のほんの一部分に過ぎない。一括出土銭のもつ意味については、今後さまざまな観点から慎重に検討されていくべきであろう。



第369図　文脇遺跡　中・近世遺構配置図

注1　簗瀬裕一　2006 「地下式坑の分類と編年試論－中馬場遺跡他の千葉県の事例をもとに－」『房総中近世考古』房総中近世考古学研究会

2　小林清隆　1998 『袖ヶ浦市荒久 (2) 遺跡』財団法人千葉県文化財センター

3　袖ケ浦市教育委員会編　1992 『市民のための袖ケ浦の歴史』

4　黒住耐二・西野雅人「1　貝類」 2010 『成田新高速鉄道・北千葉道路埋蔵文化財発掘調査報告書－印旛村松虫陣屋跡－』財団法人千葉県教育振興財団

5　笹生　衛　1998 「文脇遺跡」『千葉県の歴史　資料編　中世1　考古資料』財団法人千葉県史料研究財団編

6　加藤正信・大谷弘幸　1995 『袖ヶ浦市文脇遺跡』財団法人千葉県文化財センター

付章　自然科学分析

第１節　文脇遺跡出土貝類

１　概要

平成 22 年度に調査した 4SK-055・4SK-092 の地下式坑２基で貝層を検出した。大規模な遺構群であることからすれば、貝層を形成する遺構は少ないが、採取した貝サンプルからは貝類以外に獣骨・魚骨や植物遺体を検出しており、当時の資源利用、食事の実態を知るうえで貴重な資料となるであろう。また、現地採集の貝類としてアカニシ等がある。

同定・分析は、貝類を西野雅人が行い、動物遺体については中村賢太郎氏（株式会社パレオ・ラボ）に委託した（第２節）。また、植物遺体については小林真生子氏（千葉県農林総合研究センター森林研究所）に依頼した（第３節）。

第 22 表　貝類同定結果

貝種	SK055-1	SK055-2	SK055-3	SK055 全	SK092-1	SK092-2	SK092-3	SK092-4	SK092-5	SK092-6	SK092-7	SK092-8	SK092 全	全体
イボキサゴ	2128	69	336	2533	153	15	171	237	4	58		78	716	3249
ウミニナ科	8			8				1					1	9
ツメタガイ					14		9	3		4		1	31	31
アラムシロ	69	1	3	73										73
アカニシ							1	1		1			3	3
マガキ	1		1	2	3		4	5		5		1	18	20
シオフキ	2	1		3	10	2	3	8		5		1	29	32
サルボオ					5		6	6				2	19	19
ハマグリ					51	11	26	43	2	3		19	155	155
マテガイ					6								6	6
バカガイ						1		5		1		1	8	8
アサリ	1			1	20	1	1	10		7		6	45	46
合　計	2209	71	340	2620	262	30	221	319	6	84	0	109	1031	3651
水洗前堆積(ﾘｯﾄﾙ)	9.5	0.8	3.0	13.3	21.0	4.0	11.0	10.5	1.0	8.5	0.1	4.5	60.6	73.9
水洗前重量(kg)	7.0	0.5	2.3	9.8	17.0	2.8	9.2	8.2	1.0	6.4	0.1	3.5	48.1	57.9
水洗後重量(kg)	1.4	0.1	0.3	1.8	2.2	0.4	1.2	1.6	0.2	0.6	0.0	0.6	6.7	8.4
微小貝	7			7	37	6	13	8		1		7	72	79
土器片	1		1	2	2	10		1				1	14	16

第 23 表　貝種組成

貝種	SK055	%	SK092	%	全体	%
イボキサゴ	2533	96.7%	716	69.4%	3249	89.0%
ハマグリ		0.0%	155	15.0%	155	4.2%
アラムシロ	73	2.8%			73	2.0%
アサリ	1	0.0%	45	4.4%	46	1.3%
シオフキ	3	0.1%	29	2.8%	32	0.9%
ツメタガイ		0.0%	31	3.0%	31	0.8%
その他	10	0.4%	55	5.3%	65	1.8%
合　計	2620	100.0%	1031	100.0%	3651	100.0%

その他の内訳

マガキ	2	0.1%	18	1.7%	20	0.5%
サルボオ		0.0%	19	1.8%	19	0.5%
ウミニナ科	8	0.3%	1	0.1%	9	0.2%
バカガイ		0.0%	8	0.8%	8	0.2%
マテガイ		0.0%	6	0.6%	6	0.2%
アカニシ		0.0%	3	0.3%	3	0.1%

第 24 表　標準貝類相

貝種	SK055		SK092	
イボキサゴ	190.45	191	11.82	12
ハマグリ			2.56	3
アラムシロ	5.49	6		
アサリ	0.08		0.74	1
シオフキ	0.23		0.48	1
ツメタガイ			0.51	1
ウミニナ科	0.60	1		
合　計		198		18

標準貝類相：全体の個体数をサンプルの体積 73.9 リットルで除したもの
貝層１リットルの平均的な内容を示す。

4SK-055　地下式坑の覆土中層には天井の崩落に伴うロームブロック主体の層が形成されており、貝層はその直下から検出している。A～Cの３つの貝ブロックごとに全量をサンプリングした。サンプルのカット番号も同じ順序で１～３とした。水洗前の体積はA：9.5リットル、B：0.8リットル、C：3.0リットルである。一度の廃棄によるものが移動した可能性が高い。貝類のほかに植物遺体を検出した。

4SK-092　地下式坑の竪坑に貝層を形成している。ブロック状のまとまりごとに全量をサンプリングしており、取上げ順にA～Gのブロック名をつけた。サンプルのカット番号も同じ順序で１～７とした。cut8は現地で作成した遺物台帳では「一括」、図面ではブロックAの一部となっている。なお、ブロックGのみ60㎝ほど離れた地下式坑本体から検出しているが、本来一連のものが落ち込んだものであろう。貝類のほかに、獣骨・魚骨や植物遺体を検出した。

現地採集の貝類　このほかに、保存が悪くチョーク化した貝殻が採集されていた。ほとんどはアカニシであり、持ち込まれた貝類のうち、堅牢な殻をもつアカニシの一部のみが遺存し、ほかは失われた可能性が高い。貝類がかなり活発に利用された可能性を示す資料だが、出土地点を記録して廃棄した（第21表）。

２　貝種組成と計測値分布

貝種組成　同定された貝類は海産巻貝類５種以上、二枚貝類７種である（第22表）。すべて内湾の干潟から浅瀬に生息する種であり、現在も小櫃川の河口干潟で目にすることができる。遺跡近くの干潟で採取された可能性が高い。ツメタガイは臍孔が大きく開く内湾型（ツメタガイ型）のみであった。第23表は上段に主要６種とその他の種の組成を、下段にその他の内訳を示した。第24表（図版125）は、サンプル１リットルあたりの平均的な内容を示すもので、同定個体数をサンプルの体積（リットル）で除して算出した。二つの遺構で組成が大きく異なるため、二つの資料を作成した。

4SK-055

３つのブロック間に差異はほとんど認められない。全体でいうと、イボキサゴが2533個、96.7％を占め、アラムシロが73個、2.8％混じる。アラムシロとウミニナ類がイボキサゴ層に伴うのは、縄文時代以来の普遍的な特徴であり、かご等を使ったイボキサゴ漁の証拠といえる。わずかに含まれていたマガキ・シオフキ・アサリは稚貝や捕食孔をもつものであり、混獲された可能性が高い。したがって、この貝層はイボキサゴ漁によって持ち込まれたもののみであり、量からいえば１回に利用されたものであるかもしれない。イボキサゴのサイズは平均13.7㎜±0.8㎜（標準偏差）と漁の盛んでない時期としては小振りである。

4SK-092

やはりイボキサゴ主体（69.4％）にハマグリが多く混じり（15.0％）、この２種で84.5％を占める。但し、３％～４％ほどのアサリ・ツメタガイ・シオフキの３種、２％未満のうち、サルボオ・バカガイ・マテガイの３種は大きめの個体、マガキは小さなもののみであった。これらも食用に採取したものであり、イボキサゴやハマグリの多い干潟で雑多な種を採取したものと推定される。

イボキサゴのサイズは平均14.3㎜±0.8㎜とやはり小振りである。一方、ハマグリは平均55.3㎜、最小

第 25 表　貝類計測値分布

イボキサゴ殻径

殻長㎜	SK055	SK092
–10.0		
–11.0		
–12.0	3	
–13.0	58	3
–14.0	135	29
–15.0	96	47
–16.0	19	18
–17.0	2	1
–18.0		
–19.0		
–20.0		
–21.0		
–22.0		
試料数	313	98
平均	13.74	14.28
標準偏差	0.82	0.78
最小	11.36	12.09
最大	16.25	16.68

ツメタガイ殻径

殻長㎜	SK092
–25.0	
–30.0	
–35.0	
–40.0	
–45.0	7
–50.0	5
–55.0	
–60.0	
–65.0	
–70.0	
–75.0	
–80.0	
–85.0	
試料数	12
平均	44.48
標準偏差	2.23
最小	40.14
最大	49.32

二枚貝殻長（SK092）

殻長㎜	マガキ	シオフキ	サルボオ	ハマグリ	アサリ
–25.0					
–30.0					1
–35.0	1				2
–40.0	3		7	2	4
–45.0	2	1	2	3	3
–50.0	1		1	4	1
–55.0			1	1	
–60.0					
–65.0				1	
–70.0				1	
–75.0				1	
–80.0				1	
–85.0				2	
試料数	7	1	11	16	11
平均	39.25	43.20	40.70	55.26	37.17
標準偏差	5.05		5.59	15.31	5.38
最小	31.66	43.20	35.99	39.31	27.90
最大	46.63	43.20	54.53	83.30	47.33

でも 39㎜で、60㎜を超えるものも多く、大きめのものを選んで採取している。アサリやマガキはやや小さくても採取、シオフキやサルボオは大きければ採取したとみられ、味の良さによるえり好みが表れているものと思われる。

3　貝類の所見

イボキサゴとハマグリは、東京湾沿岸に形成された貝塚の二大構成種である。縄文時代中期から古代に至るまでその傾向は変わらないが、中世には二つの点で変化が現れる。一つは、二枚貝の中でハマグリの圧倒的な優位が崩れて、シオフキとアサリが凌駕するようになったことである。もう一つは大きくて粒ぞろいの二枚貝主体で、イボキサゴがほとんど混じらない事例が表れることである。市場と流通の発達を想定させるそうした例と、自己消費のために採取された例があるとすれば、今回報告したものは明らかに後者であろう。

ハマグリは東京湾沿岸の各時代の貝塚で主要構成種となっているが、明治 30 年ごろの漁業統計をみるとバカガイがハマグリの 10 倍近くになっており（西野 2000）、現在は絶滅したとされている。いつ頃からハマグリが減り、バカガイが増えたのかは、東京湾の貝類相と貝類利用の変遷史上、興味深い問題のひとつである。千葉市・村田川河口付近では、14 世紀代の伯父名台遺跡ではハマグリが多く、バカガイはごくわずかであるのに対して、近世・18 世紀代の有吉城跡 SE01（井戸）ではバカガイとアサリが多く、ハマグリが混じっていない事例が存在した（西野 2002）。本報告も、15 世紀～ 16 世紀代の小櫃川河口ではまだハマグリが多かったことを示すものである。

しかし、中・近世の貝層の分析事例は未だ少なく、比較的多くの分析データがある古代以前と、生態調査のデータが豊富な近代以降をつなぐものとして、今後の増加が望まれる。

参考文献

西野雅人　2000「明治期に記録された東京湾の魚貝類相－農商務省水産局『東京湾漁場調査報告』から－」動物考古学 14

西野雅人　2008「貝サンプルの分析結果」『千葉東南部ニュータウン 30 －千葉市伯父名台遺跡－』

西野雅人　2010「貝類の分析結果」『千葉市中野台遺跡・荒久遺跡 (4) －千葉寺地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ－』

第２節　文脇遺跡から出土した動物遺体

中村賢太郎（株式会社パレオ・ラボ）

１　はじめに

千葉県袖ケ浦市に所在する文脇遺跡の発掘調査では、中世～近世の遺構が多数検出され、そのうち溝状遺構、堀、地下式坑から動物遺体が出土した。ここでは動物遺体の同定結果を報告する。

２　試料と方法

試料は、目視で採集された哺乳類（No.1 ～ 7）、1mm メッシュ以上で回収された微細骨（No.8 ～ 13）、1mm メッシュ以上で回収された魚骨（No.14 ～ 19）の計 19 点である。出土した遺構は、No.1 が溝状遺構の SD-020、No.2 が 7C-56、No.3 が 20E-16、No.4 ～ 7 が堀の SD-027、No.8 ～ 19 が地下式坑の 4SK-092（貝層）である。

同定は、肉眼及び実態顕微鏡下で、現生標本との比較により行った。同定の際に、カットマークの有無に着目して観察した。サイズ計測はノギスを用いた。

３　結果

第 26 表に同定された分類群の一覧を示す。

第 26 表　同定された分類群一覧

哺乳綱　Mammal	
ウマ	*Equus caballus*
ウシ	*Bos taurus*
ネズミ類	Rodentia fam., gen. et sp. indet.
爬虫綱　Reptilia	
ヘビ類	Serpentes fam., gen. et sp. indet.
硬骨魚綱　Osteichthyes	
ニシン科	Clupeidae gen. et sp. indet.
スズキ属	*Lateolabrax* sp.
タイ科	Sparidae gen. et sp. indet.
アジ科	Carangidae gen. et sp. indet.
腹足綱　Gastropoda	
腹足綱の一種	Gastropoda fam., gen. et sp. indet.

第 27 表に、遺構ごとに出土した動物遺体の詳細を示す（図版 126）。

溝状遺構の SD-020（No.1）では、ウシの臼歯破片が出土した。

7C-56（No.2）では、ウシの上顎の歯と下顎骨、ウシの可能性がある頭蓋骨、長骨、不明破片が出土した。

20E-16（No.3）ではウマの上顎骨、下顎骨が出土した。巻貝（腹足綱）の破片も見られた。

堀の SD-027（No.4 ～ 7）では、ウシとウマが出土した。ウシは頭部だけ、ウマは頭部をはじめ前肢や

後肢が出土した。

地下式坑の 4SK-092（貝層）（No.8 ～ 19）では、魚類のニシン科、スズキ属、タイ科、アジ科、哺乳類のネズミ類、爬虫類のヘビ類が出土した。

第 27 表　動物遺体同定結果一覧

No.	調査年次	遺構番号	遺構種類	遺物番号	分類群	部位	左右	部分・状態	数量	備考
1	H20	SD-020	溝状遺構	001	ウシ	臼歯	不明	破片	1	
2	H21	7C-56	—	—	ウシ	上顎第1あるいは2後臼歯	左	遊離歯	1	
						下顎骨	左	M2-M3	1	
						上顎第3後臼歯	左	遊離歯	1	
						下顎第4前臼歯	左	遊離歯	1	
						臼歯	不明	破片	＋	
					ウシ？	頭蓋骨	不明	破片	1	
						長骨	不明	骨幹破片	2	
						不明	不明	破片	＋	
3	H20	20E-16	—	001	ウマ	上顎骨	左	P2-M3	1	臼歯列長150mm,歯冠高(P2:29.1mm,P3:39.5mm,P4:41.0mm,M1:35.8mm,M2:42.6mm,M3:34.9mm)
						上顎骨	右	P2-M3	1	臼歯列長152mm
						下顎骨	左	P2-M3	1	臼歯列長153mm,歯冠高(P2:25.1mm,P3:33.1mm,P4:42.3mm,M1:42.6mm,M2:46.8mm,M3:40.7mm)
						下顎骨	右	P2-M3	1	臼歯列長151mm
						上顎骨／下顎骨	不明	破片	＋	
						切歯	不明	上下不明破片	1	
						臼歯	不明	破片	＋	
					腹足綱	貝殻	—	破片	1	
4	H21	SD-027	堀	010	ウシ	下顎骨	左	P3-M3	1	
						下顎骨	右	P4-M3	1	
5				011	ウシ	上顎骨	左	P3-M3	1	
					ウシ？	上顎骨／下顎骨	不明	破片	＋	
6				016	ウシ	上顎第3後臼歯	右	遊離歯	1	
						臼歯	不明	破片	＋	
7				019	ウマ	上顎骨	左	P2-M3	1	臼歯列長160.0mm,歯冠高(P2:55.5mm,P3:68.4mm,P4:75.1mm,M1:67.8mm,M2:72.9mm,M3:68.8mm)
						上顎骨	右	P2-P3,M1-M3	1	
						下顎骨	左	P2-M3	1	臼歯列長156.0mm,歯冠高(P2:55.9mm,P3:75.2mm,P4:76.8mm,M1:77.4mm,M2:82.3mm,M3:64.0mm)
						下顎骨	右	P2-M3	1	臼歯列長155.1mm
						上顎骨／下顎骨	不明	破片	＋	
						下顎？切歯	右？	遊離歯	1	
						歯	不明	破片	＋	
						肩甲骨	左	肩甲頸	1	
						上腕骨	左	遠位端	1	
						上腕骨	右	遠位端	1	
						橈骨	左	近位端	1	
						橈骨	右	近位端	1	
						寛骨	右	寛骨臼	1	
						大腿骨	左？	近位端	1	
						大腿骨	左	遠位端	1	
						大腿骨	右	遠位端	1	
						脛骨	左	近位端	1	
						脛骨	左	近位端	1	
						踵骨	左	ほぼ完存	1	
						距骨	左	ほぼ完存	1	最大長46.0mm
						距骨	右	ほぼ完存	1	最大長49.1mm
					ウマ？	椎骨	—	破片	3	
						不明	不明	破片	＋	
8	H22	4SK-092(貝層)	地下式坑	①微細骨	スズキ属	主鰓蓋骨	右	破片	1	
9				②微細骨	哺乳綱？	不明	不明	破片	2	
10				③微細骨	ネズミ類	臼歯	不明	遊離歯	1	
					哺乳綱	不明	不明	破片	＋	
11				④微細骨	ネズミ類	臼歯	不明	遊離歯	1	
					哺乳綱	歯	不明	破片	1	
					哺乳綱	不明	不明	破片	1	
					ヘビ類	椎骨	—	ほぼ完存	1	
					硬骨魚綱	不明	不明	破片	1	
12				⑤微細骨	哺乳綱	不明	不明	破片	1	
13				⑧微細骨	哺乳綱	不明	不明	破片	2	
14				①魚骨	ニシン科	腹椎	—	椎体	3	
					アジ科	稜鱗	不明	ほぼ完存	1	
					タイ科	歯	不明	遊離歯	2	
					硬骨魚綱	主上顎骨	左	前端	1	
						主上顎骨	右	前端	1	
						不明	不明	破片	＋	
15				②魚骨	ネズミ類？	椎骨	—	完存	1	
					硬骨魚綱	不明	不明	破片	＋	
16				③魚骨	鳥綱	脛足根骨	右	遠位端	1	小型
					硬骨魚綱	椎骨	—	椎体	3	
						不明	不明	破片	＋	
17				④魚骨	ヘビ類	椎骨	—	ほぼ完存	1	
					アジ科	稜鱗	不明	完存	2	
					硬骨魚綱	方骨	左？	関節部破片	1	
						鱗	不明	破片	3	
						不明	不明	破片	＋	
18				⑥魚骨	硬骨魚綱	不明	不明	破片	＋	
19				⑧魚骨	ヘビ類	椎骨	—	椎体	1	
					ニシン科	腹椎	—	椎体	1	
					アジ科	稜鱗	不明	完存	1	
					タイ科	歯	不明	遊離歯	1	
					硬骨魚綱	不明	不明	破片	＋	

※数量の＋は複数ありの意味

4　考察

大型の哺乳類として、ウシとウマが利用されていたと考えられる。ウシとウマが両方出土した堀 SD-027 では、出土部位がウシとウマで対照的であり、ウシ（No.4 ～ 6）は頭部のみ、ウマ（No.7）はほぼ全身が見られた。ウシは解体された後に堀へ廃棄された可能性が考えられる。但し、カットマークは見られず、解体について十分に検討できなかった。ウマの年齢を推定したところ、20E-16 の個体（No.3）は歯冠高から 10 才前後、堀 SD-027 の個体（No.7）は歯冠高と歯の萌出状況から 4 才程度であった。

地下式坑 4SK-092(貝層) から出土したニシン科（マイワシ、サッパ他）、スズキ属（スズキ、ヒラスズ

キ)、タイ科（マダイ、クロダイ他)、アジ科（マアジ他）などの魚類は海産で、食後・調理後に残滓が地下式坑へ廃棄されたと考えられる。ネズミ類やヘビ類も食用にされた可能性を否定できないが、魚類の残滓に寄ってきた可能性も考えられる。

参考文献

松井章　2008『動物考古学』312p　京都大学学術出版会

第３節　文脇遺跡から出土した植物遺体

小林真生子（千葉県農林総合研究センター森林研究所）

１　はじめに

千葉県袖ケ浦市に位置する文脇遺跡は、弥生時代と中・近世を主体とする遺跡である。今回、中・近世の地下式坑から植物遺体が見つかった。出土した植物遺体の同定結果を報告する。

２　試料と方法

試料は、平成 22 年の発掘調査時に地下式坑 4SK-055 及び 4SK-092 より発掘された植物遺体 12 点である。植物遺体は、遺構・遺物発掘時に 1 mm 以上のメッシュを使って拾いだされ、袋や小瓶に乾燥状態で保存されていた。

３　結果

地下式坑より見つかった 12 点の植物遺体の同定結果を第 28 表、図版 127 に示す。

12 点の植物遺体は全て炭化していた。4SK-055 から見つかった植物遺体のうち 1 つは破損しているため同定できなかったが、 1 つはオオムギ *Hordeum vulgare* L. の胚乳だった。

4SK-092 から見つかった植物遺体はイネ *Oryza sativa* L. の胚乳 2 つ、コムギ *Triticum aestivum* L. の胚乳 1 つ、ウメ *Armeniaca mume* (Siebold et Zucc.) de Vriese の核の破片 2 つ、フジ属 *Wisteria* sp. の種子 1 つだった。 4 点の植物遺体に関しては破損していたため分類群を同定することができなかったが 1 点は縦方向の明確な稜線があり、イネの胚乳の可能性が高かった。

第 28 表　文脇遺跡出土植物遺体の同定結果（点数）

分類群		出土部位	4SK-055	4SK-092
オオムギ	*Hordeum vulgare* L.	胚乳	1	
イネ	*Oryza sativa* L.	胚乳		2
コムギ	*Triticum aestivum* L.	胚乳		1
ウメ	*Armeniaca mume* (Siebold et Zucc.) de Vriese	核（破片）		2
フジ属	*Wisteria* sp.	種子		1
不明		種実類	1	4
合計			2	10

４　考察

地下式坑から見つかった植物遺体のうち、オオムギ、イネ、コムギ、ウメは栽培植物であった。穀類であるオオムギ、イネ、コムギは食用として利用されていた可能性が高い。

オオムギ、コムギなどの麦類の出土に関する報告はイネに比べて少ないが、千葉市のうならすず遺跡（平

安時代）や船橋市の印内台遺跡群（奈良～平安時代）の住居跡（新山 2004、住田 2007）、松戸市の根木内城跡（中世）の地下式坑（新山 2004）等の遺跡から報告されている。文脇遺跡から今回見つかった植物遺体は出土点数が少ないが、麦類の栽培や伝播過程、中・近世の人々の食生活を考えるうえで重要な資料になると考えられる。

引用文献

新山雅広　2004「炭化種実」『千葉市平和公園遺跡群Ⅱ　うならすず遺跡』p292-293　財団法人千葉市教育振興財団

新山雅広　2004「根木内城跡から出土した炭化種実」『根木内城跡　第２地点発掘調査報告書』p82-86　松戸市遺跡調査会

住田雅和　2007「印内台遺跡群（44）調査地点出土炭化種実類について」『印内台遺跡群（44）』p61-62　船橋市教育委員会

第４節　文脇遺跡出土の銭紐の素材同定

米田恭子（株式会社パレオ・ラボ）

１　はじめに

文脇遺跡から出土した中世の一括出土銭は、一緡の単位で幾つもつながった状態で、曲物に納められていた。ここでは、銭に通された紐の素材を調べる目的で、植物珪酸体分析を行った。以下に、分析結果及び考察を記す。なお、曲物の素材については樹種同定が行われている（第５節参照）。

２　試料と方法

試料は、土坑 4SK-014 から一括で取り上げられた銭紐の破片 10 点（分析 No.1）である。試料の長さは 0.8 ㎜～ 30.0mm、幅は 1.5㎜～ 5.0mm ほどで、黄緑色～緑褐色を呈する。なお、試料はすべて Z 撚りである。遺構の時期は、鎌倉時代末から室町時代前半とみられている。

はじめに、任意に選んだ試料の表面をアセトンと筆を用いて洗浄し、乾燥させた試料を管瓶にとり、電気炉を用いて灰化処理を試みた。灰化する工程は藤原（1976）を参考にして行った。毎分 5℃の割合で温度を上げ、100℃において 15 分ほどその温度を保ち、その後毎分 2℃の割合で 550℃まで温度を上げ、6 時間温度を保持し、試料の灰化を行った。焼成の結果、試料は白色化（灰化）せず、赤～黒褐色に変化した。この原因は、試料に浸み込んだ銅の成分の影響と考えられる。銅の成分を除去するため、別の試料を用いて灰化処理前に希塩酸 10 パーセント溶液で処理を施したところ、銅成分が除去され、灰化が可能であった。しかし、灰の一部をグリセリンで封入して検鏡した結果、植物珪酸体は全く観察されなかった。これは、試料に含まれる珪酸体そのものが銅に置換されており、希塩酸処理の工程で溶けたと考えられる。したがって、通常の灰化処理よる植物珪酸体の抽出は困難と判断した。

そこで、走査型電子顕微鏡（KEYENCE 社製　VE-9800）を用いて 15mm ほどの長さで、状態の良い試料 1 点（図版 1-2）を選び、試料表面の植物珪酸体の観察を行い、現生標本と比較して銭紐の素材の同定を試みた。残りの試料は、千葉県教育委員会に保管されている。

3　観察の結果

観察された植物珪酸体を第 29 表に示した。

走査型電子顕微鏡で観察を行った結果、イネ型短細胞珪酸体列が試料の表面に観察された。このほかに、ポイント型の不明植物珪酸体が観察された。ポイント型の不明植物珪酸体は、すべてのイネ科植物に類似した形態の植物珪酸体が出現するため（近藤，2010）、形状からの同定は困難である（図版 128）。

第 29 表　分析試料と観察された植物珪酸体

分析 No.	種類	試料名	遺構	時期	植物珪酸体	
					短細胞珪酸体列	不明植物珪酸体
1	銭紐	紐一括	4SK-014	鎌倉時代末～室町時代前半	イネ型	ポイント型

4　考察

走査型電子顕微鏡を用いて銭紐の観察を行った結果、イネの葉身や葉鞘の表面に形成されるイネ型短細胞珪酸体列が観察された。イネ型短細胞珪酸体列は、８の字型の短細胞珪酸体が細胞の形成方向に対して垂直方向に配列し、同様の配列がイネやヨシ、マコモなどにみられる。試料に観察されたイネ型短細胞珪酸体と、現生イネと現生ヨシの葉身の短細胞珪酸体の形態と比較を行ったところ、試料から得られた短細胞珪酸体は、現生ヨシの短細胞珪酸体に比べると、８の字型の中心部分が細くくびれており、隣り合う短細胞珪酸体の間隔が規則正しい。この形態と配列が、イネの短細胞珪酸体列に類似しており、イネ科植物の分類の決め手となる葉身に形成される機動細胞珪酸体は得られなかったものの、銭紐の素材は稲藁である可能性が高い。

一般に、藁製品の製作の際には葉の部分を除去（藁すぐり）して稈の部分を使用する（樋口, 1978）。よって、藁製品に葉が残されている可能性は低く、機動細胞珪酸体が得られる可能性も低い。

銭紐には撚りがかけられており、葉身の部分は銭紐を作製する工程で取り除かれた可能性があるため、分析試料に観察されたイネ型短細胞珪酸体列は、葉身ではなく、葉鞘に由来すると考えられる。

引用文献

藤原宏志　1976「プラント・オパール分析法の基礎的研究（1）－数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法－」『考古学と自然科学』9　15-29

近藤錬三　2010『プラント・オパール図譜』387p　北海道大学出版会

樋口清之　1978「作る－手作り生活の知恵－」『生活歳時記』1148p　三寶出版

第５節　文脇遺跡出土木製品の樹種同定

黒沼保子（株式会社パレオ・ラボ）

1　はじめに

袖ケ浦市に所在する文脇遺跡で、中世の一括出土銭に伴って出土した曲物３点について樹種同定を行った。

2　試料と方法

試料は、SK014 から出土した曲物で、側板と底板、部位不明木材片の３点である。曲物は直径約 40㎝、

高さ約 25㎝とみられ、銭が入れられていた。中国の北宋から南宋の時代（960 ～ 1279 年）に鋳造された銭が多く、1310 年の鋳造年が最も新しいため、鎌倉時代末～室町時代前半に埋められたと推測されている。試料の表面には、アルコールニスが塗布されていた。

樹種同定は、通常剃刀を用いて 3 断面（横断面・接線断面・放射断面）の切片を採取するが、試料の状態が悪く、肉眼観察で針葉樹と判断できたため放射断面のみの採取を行った。ガムクロラールで封入してプレパラートを作製した。これを光学顕微鏡で観察及び同定、写真撮影を行った。プレパラートは、千葉県教育委員会に保管されている。

3　結果

樹種同定の結果、3 点とも針葉樹のスギであった。木取りは、いずれも柾目であった。結果の一覧を第 30 表に示す。

以下に、同定根拠となった木材組織の特徴を記載し、光学顕微鏡写真を図版 129 に示す。

スギ　*Cryptomeria japonica* (L.f.) D.Don　スギ科

仮道管と放射組織、樹脂細胞からなる針葉樹である。早材から晩材への移行はやや急である。樹脂細胞は主に晩材部に散在する。分野壁孔は大型のスギ型で、1 分野に通常 2 個並ぶ。

スギは暖帯から温帯下部に生育する常緑高木である。材は比較的軽軟で、切削加工は容易であり、割裂性は大きい。

第 30 表　樹種同定結果

遺跡コード	遺構・遺物№	遺物名	樹種	木取り	備考
229-036-4	SK-014	曲物側板片	スギ	柾目	アルコールニス塗布
	SK-014	曲物底板片	スギ	柾目	
	SK-014-041	曲物木材片	スギ	柾目	

4　考察

曲物の側板片と底板片、部位不明の木材片は、すべてスギであった。スギは比較的軽軟で加工容易であり、割裂性が大きいため曲物などの薄板にしやすい（平井，1996）。千葉県では、君津市の外箕輪遺跡や市原市の市原条里制遺跡から出土した鎌倉～室町時代の曲物にスギが多用されていた（伊東・山田編，2012）。なお、同時代の東京都や神奈川県、埼玉県から出土した曲物ではスギのほかにヒノキやサワラ、モミ属など比較的多様な針葉樹の利用がみられ、千葉県でもやや離れたいすみ市の畑合遺跡ではモミ属とツガ属が利用されており、様相が異なる（伊東・山田編，2012）。従って、文脇遺跡の周辺地域では、鎌倉～室町時代の曲物にスギを利用する傾向がみられ、曲物の用材傾向は地域ごとに異なっていた可能性がある。

引用文献

平井信二　1996『木の大百科』394p　朝倉書店

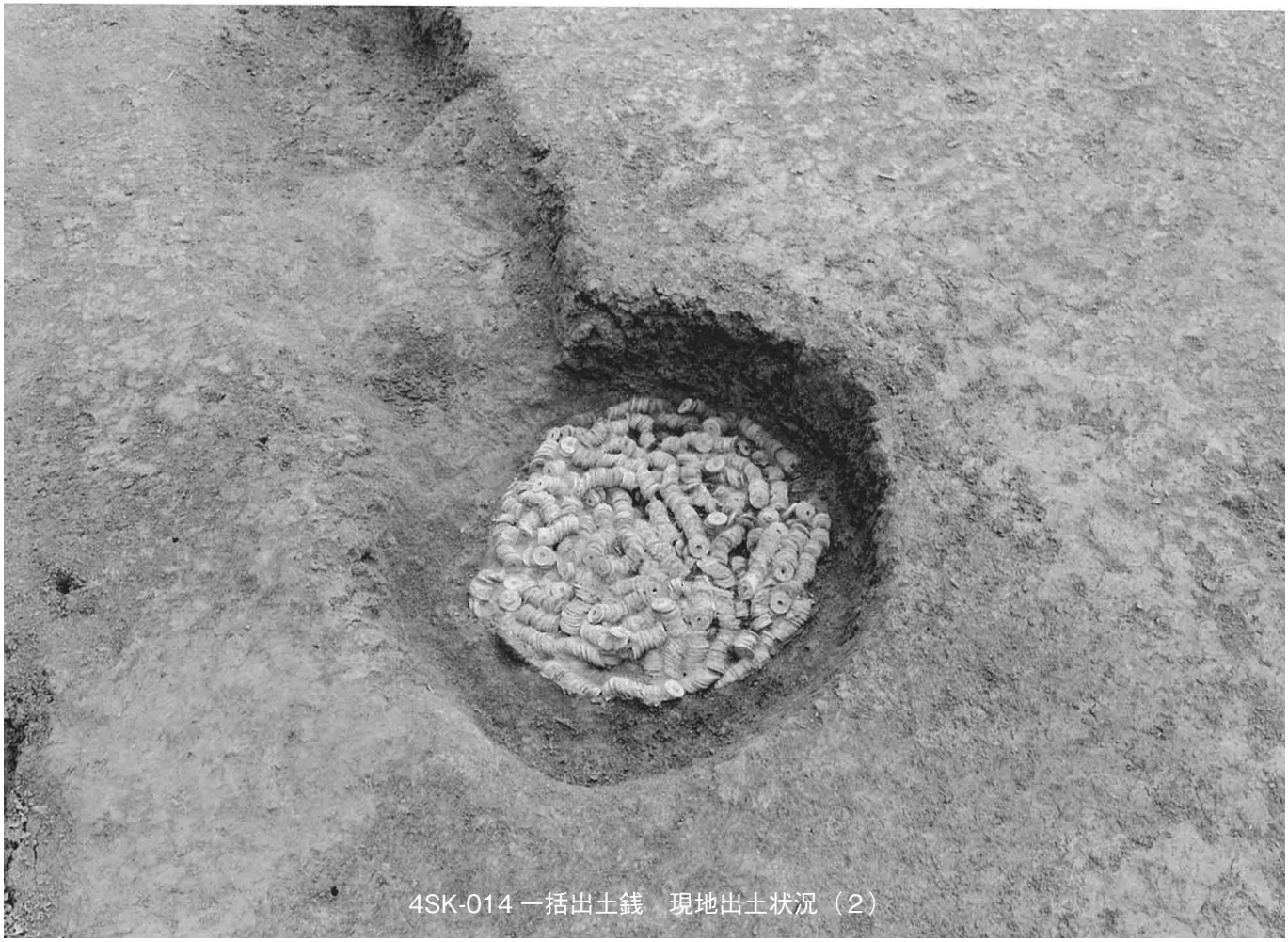
伊東隆夫・山田昌久編　2012『木の考古学－出土木製品用材データベース－』449p　海青社

写真図版

遺跡周辺航空写真（1:10,000）

図版２

4SK-014 一括出土銭　現地出土状況（１）



4SK-014 一括出土銭　現地出土状況（２）

SI-019

SI-020

SI-022・025・SK-041

SI-024・SK-038

SI-025

SI-033

2SI-015

2SI-017

図版４

SK-016

SK-017

SK-018

SK-020

SK-021

SK-022

SK-023

SK-024・025

図版 6

SK-026・027

SK-029

SK-030・031

SK-032

SK-034

SK-035

SK-036

SK-037

SK-039

SK-043

SK-044・045

SK-046～049

SK-050

SK-051

SK-052

SK-053

図版８

SK-054

SK-062・063

SK-065

SK-066・SH-034

SK-067

SK-069・075

SK-070

SK-072

SK-073

SK-076

SK-076 ～ 080

SK-082

SK-083・084

SK-085

SK-086・087

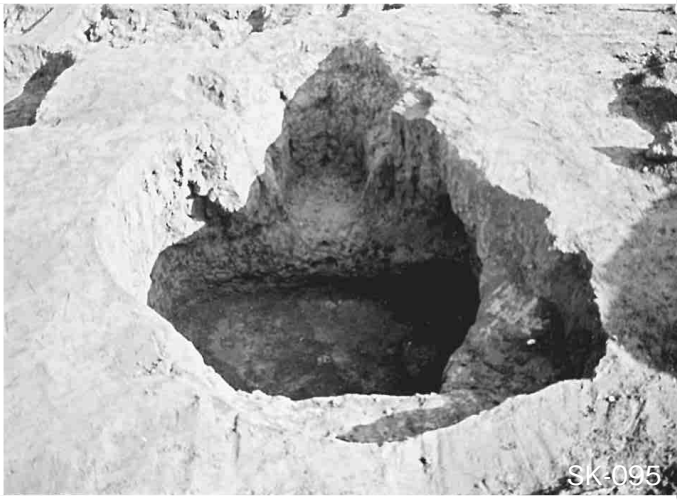
SK-088

図版 10

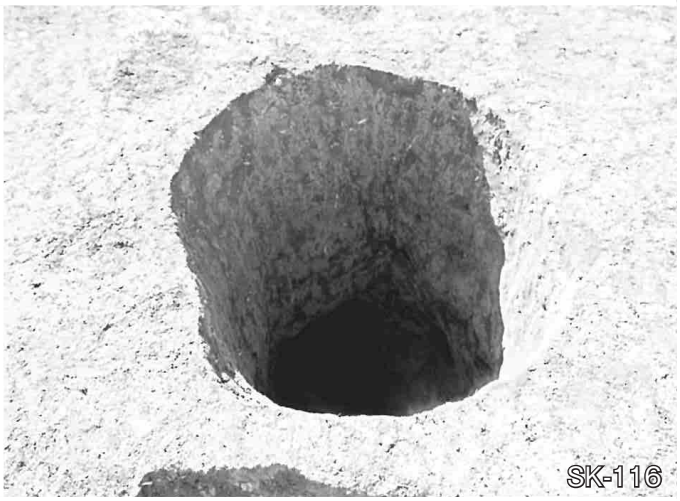
SK-089 ～ 091

SK-092

SK-093・094


SK-095

SK-099


SK-116

SK-118

SK-129

2SK-002

2SK-005

4SK-001

4SK-003

4SK-004

4SK-008

4SK-009

4SK-010

図版 12

4SK-011

4SK-012

4SK-013

4SK-015・016

4SK-018～022

4SK-023

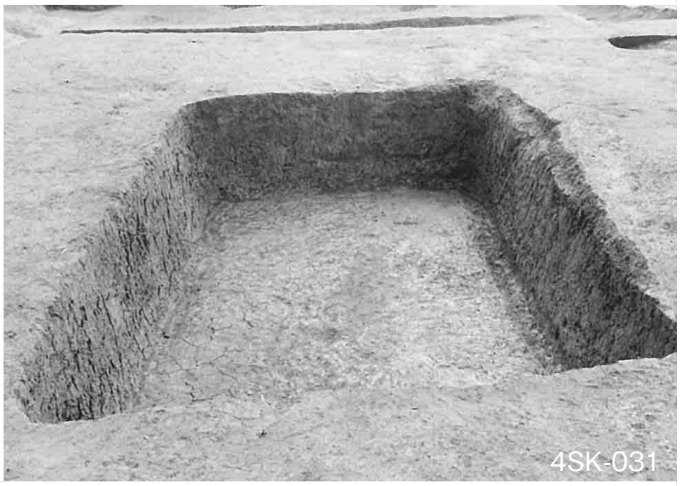
4SK-024

4SK-025

4SK-026・027

4SK-028・029

4SK-030


4SK-031

4SK-032・033

4SK-034

4SK-035

4SK-036

図版 14

4SK-037

4SK-038

4SK-039

4SK-042・043

4SK-044

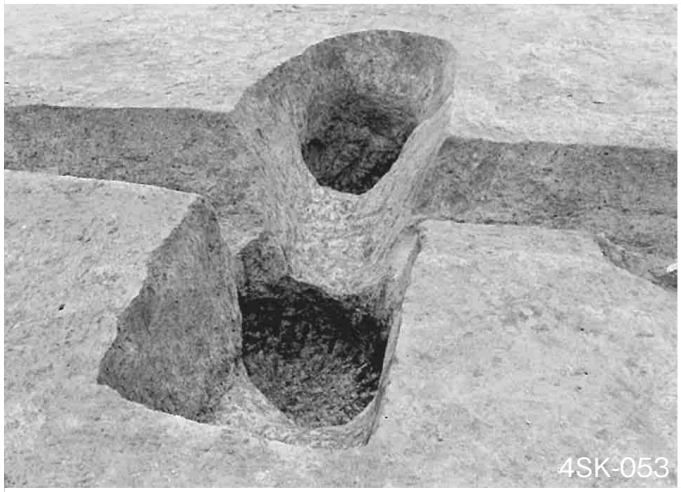
4SK-045

4SK-046

4SK-047・049・065

4SK-050

4SK-051


4SK-053

4SK-054

4SK-055

4SK-056

4SK-058・062

4SK-060・061

図版 16

4SK-066 ～ 071・073

4SK-078

4SK-079・080

4SK-081

4SK-082

4SK-084

4SK-085

4SK-086

4SK-087

4SK-088

4SK-089

4SK-090

4SK-091

4SK-092 入口部分状況

4SK-092 遺物出土状況

4SK-092 完掘状況

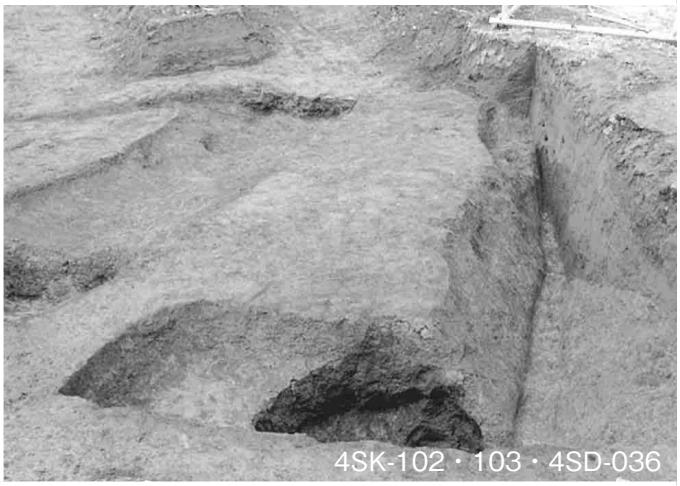
4SK-094 ～ 096

4SK-097

4SK-098・099

4SK-100

4SK-101


4SK-102・103・4SD-036

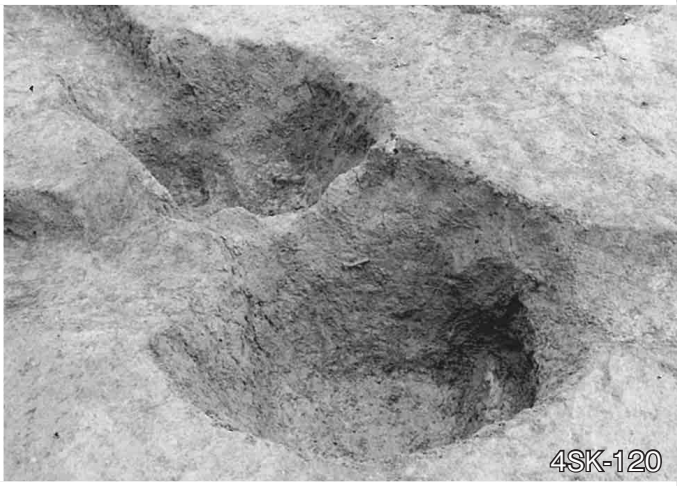
4SK-104・118

4SK-105 ～ 108

4SK-109 ～ 113

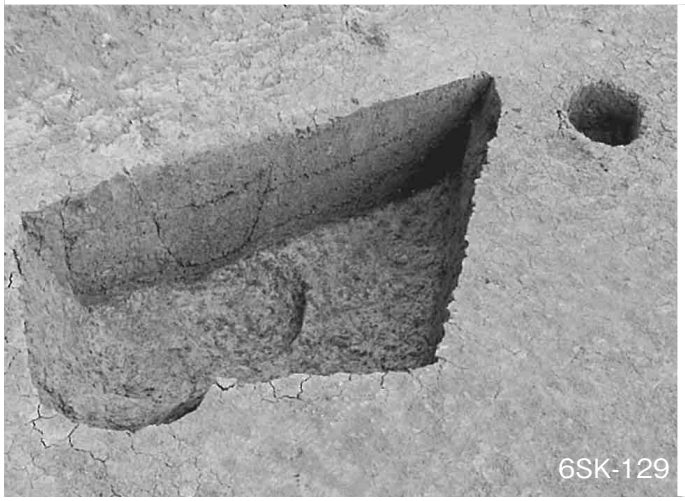
4SK-111

4SK-114 ～ 117


4SK-120

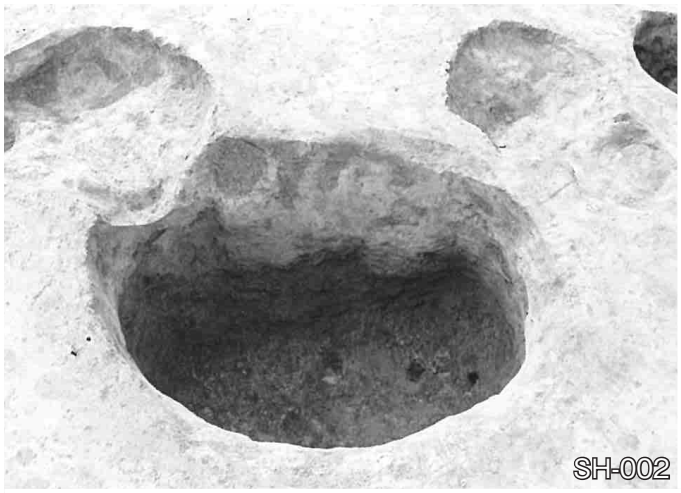
6SK-126

6SK-128


6SK-129

6SK-133

図版 20



SB-001

SB-002 ～ 007

4SB-001

SA-002

2SA-001

2SA-002

土墨（SA-001）
調査前状況（1）

土墨（SA-001）
調査前状況（2）

土墨（SA-001）
土層断面

堀（SD-027）（1）

堀（SD-027）（2）

堀（SD-027）（3）

SD-001

SD-002・003

SD-005

SD-007

SD-008

SD-012

SD-014

SD-015

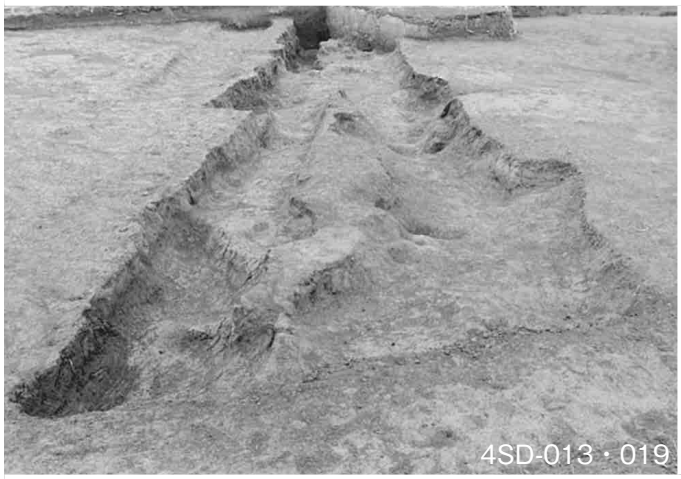
図版 26

SD-030

4SD-006

4SD-007

4SD-010


4SD-013・019

4SD-018

4SD-019・034

4SD-020

図版 28

4SD-021・022

4SD-019・021

4SD-037

7SD-001～003

SD-004・7SD-006

SD-002・7SD-003・008・009

SD-002・7SD-003・008～010

SD-004・7SD-005・011

11D・12D グリッド付近

12D・12E・13D・14D グリッド付近

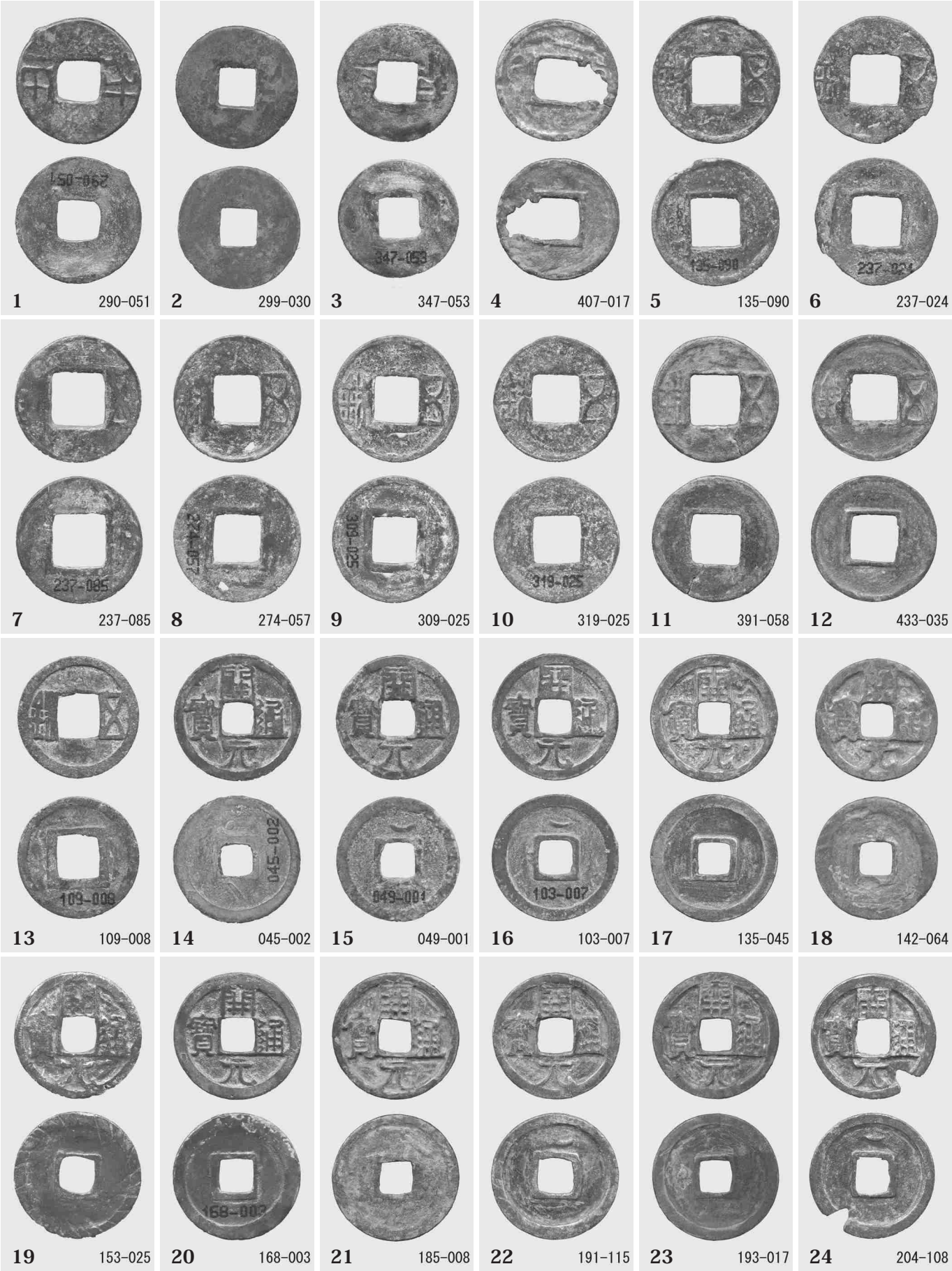
図版 30

14C・14D グリッド付近

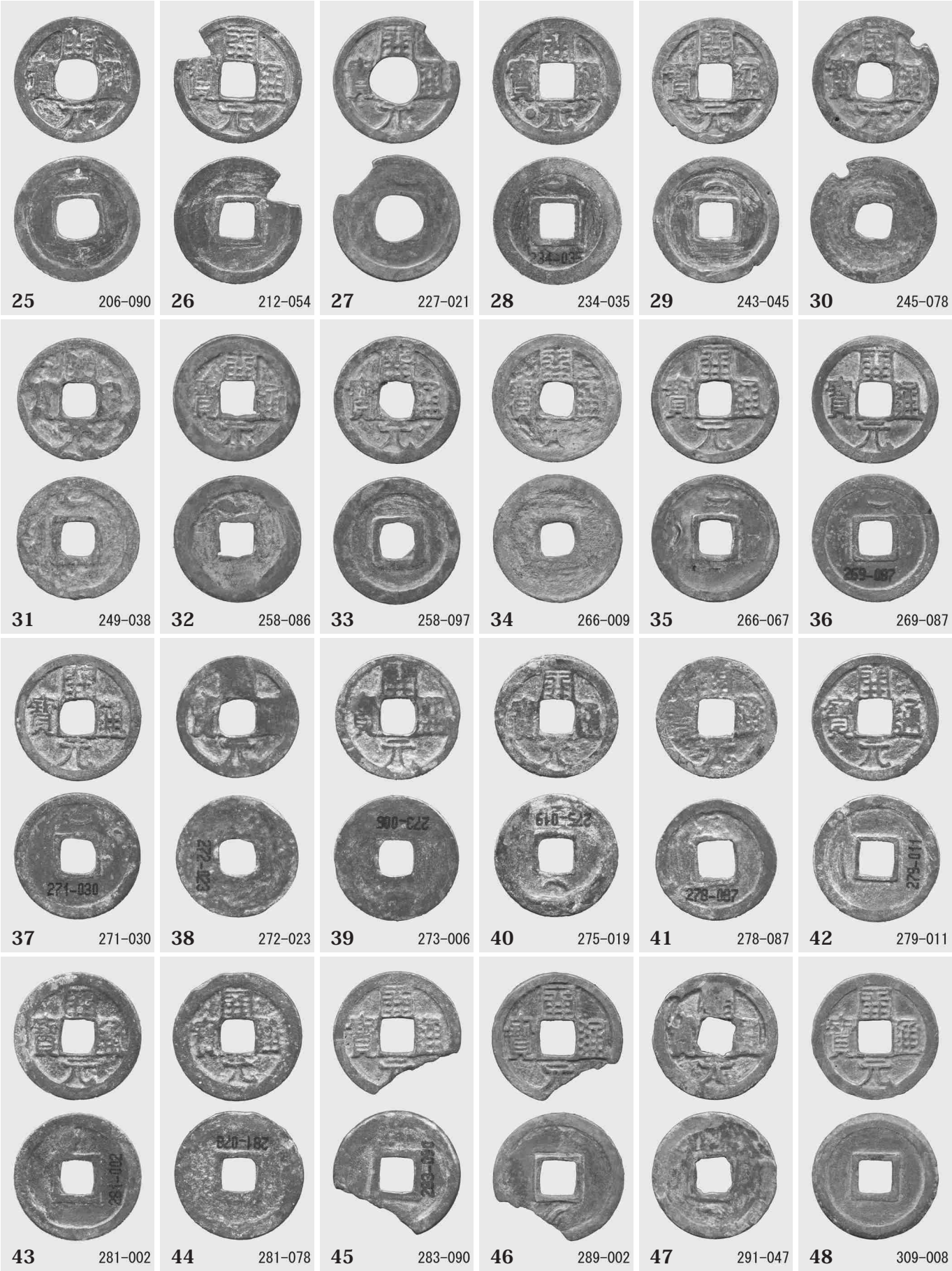
19E・19F・20E・20F・21F・22F グリッド付近

20E・20F グリッド付近

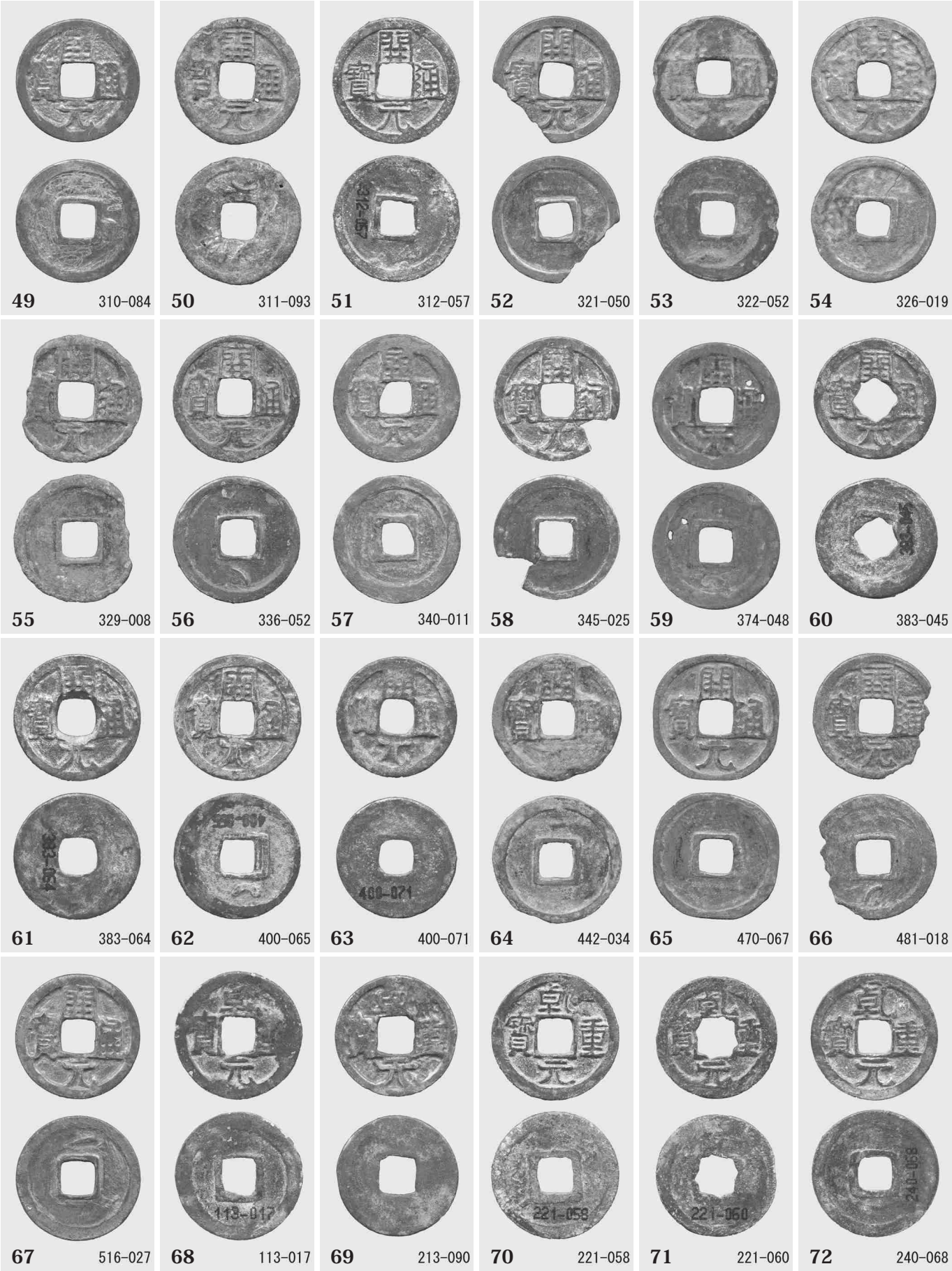
21E・21F グリッド付近



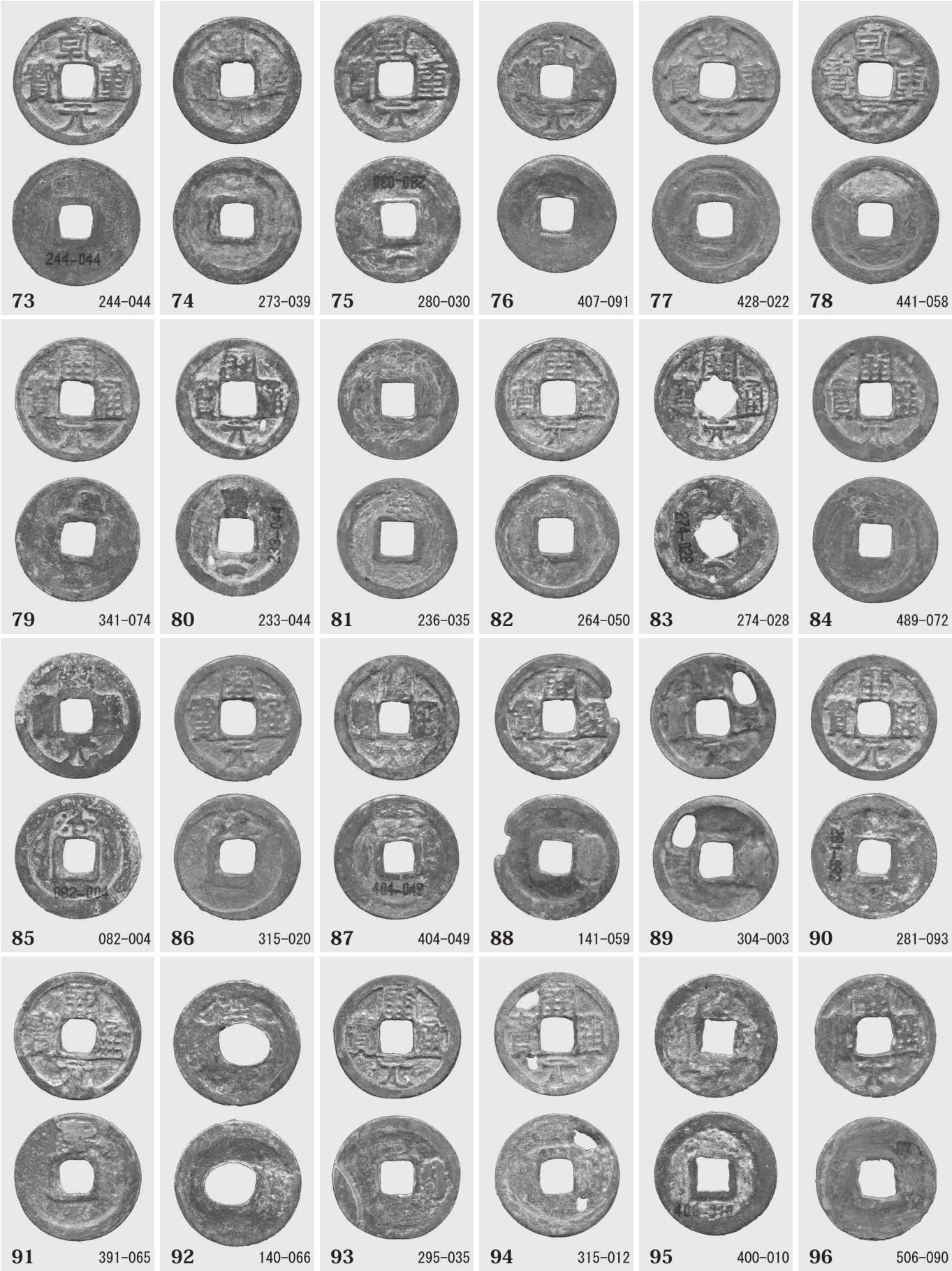
4SK-014 出土銭貨（1）



4SK-014 出土銭貨（2）



4SK-014 出土銭貨（3）



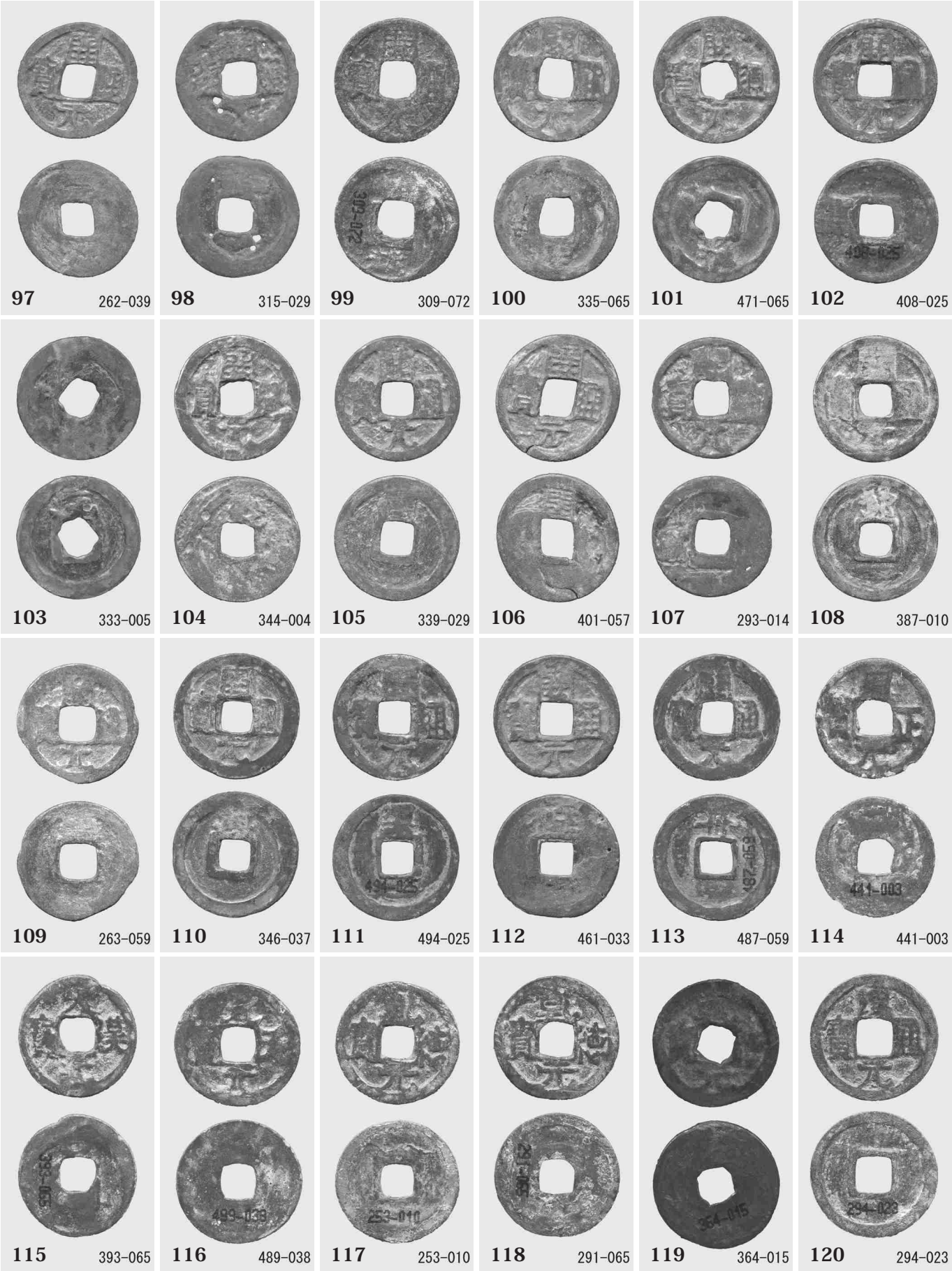
73 244-044 **74** 273-039 **75** 280-030 **76** 407-091 **77** 428-022 **78** 441-058

79 341-074 **80** 233-044 **81** 236-035 **82** 264-050 **83** 274-028 **84** 489-072

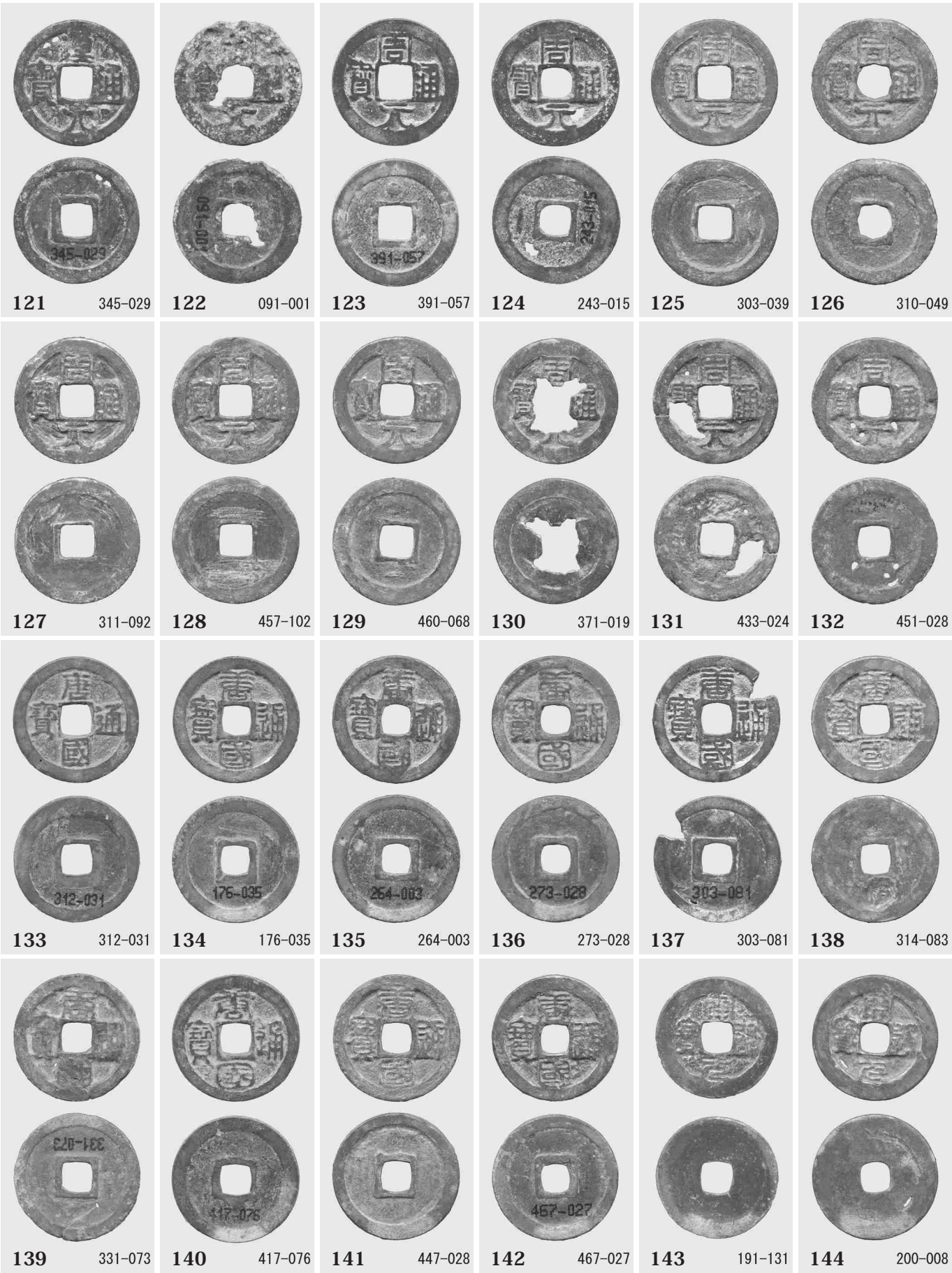
85 082-004 **86** 315-020 **87** 404-049 **88** 141-059 **89** 304-003 **90** 281-093

91 391-065 **92** 140-066 **93** 295-035 **94** 315-012 **95** 400-010 **96** 506-090

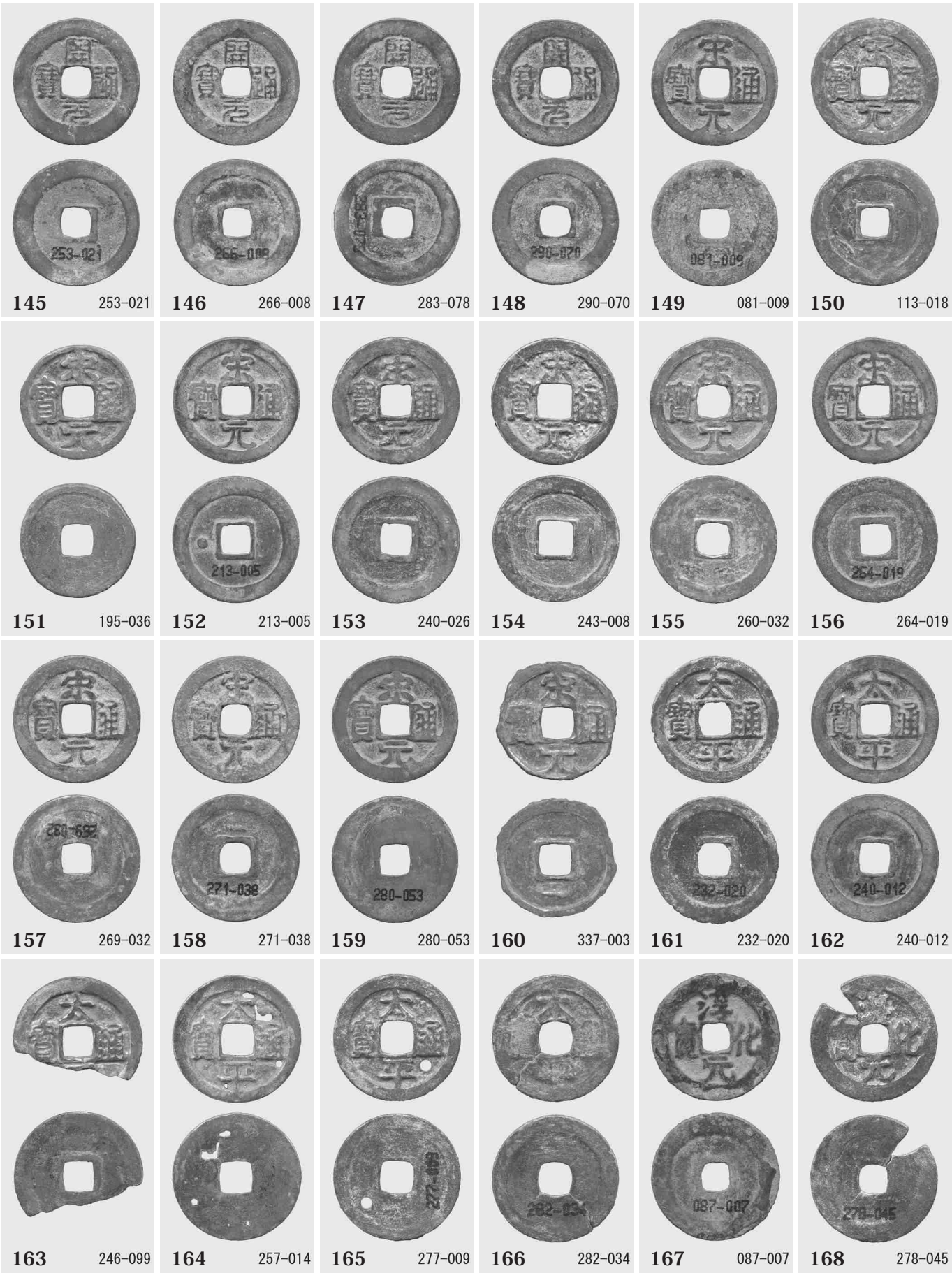
4SK-014 出土銭貨（4）



4SK-014 出土銭貨（5）



4SK-014 出土銭貨（6）



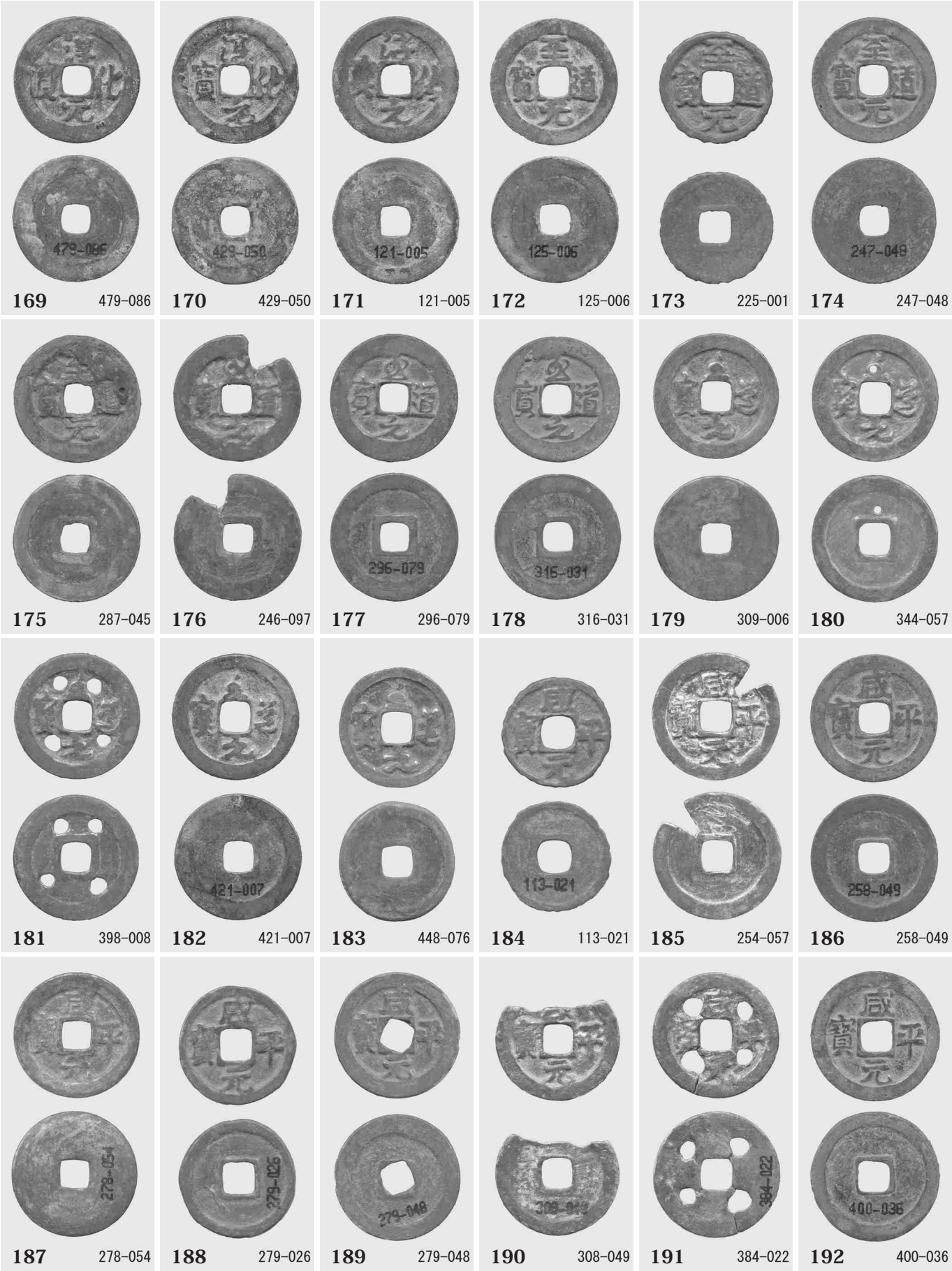
145 253-021　146 266-008　147 283-078　148 290-070　149 081-009　150 113-018

151 195-036　152 213-005　153 240-026　154 243-008　155 260-032　156 264-019

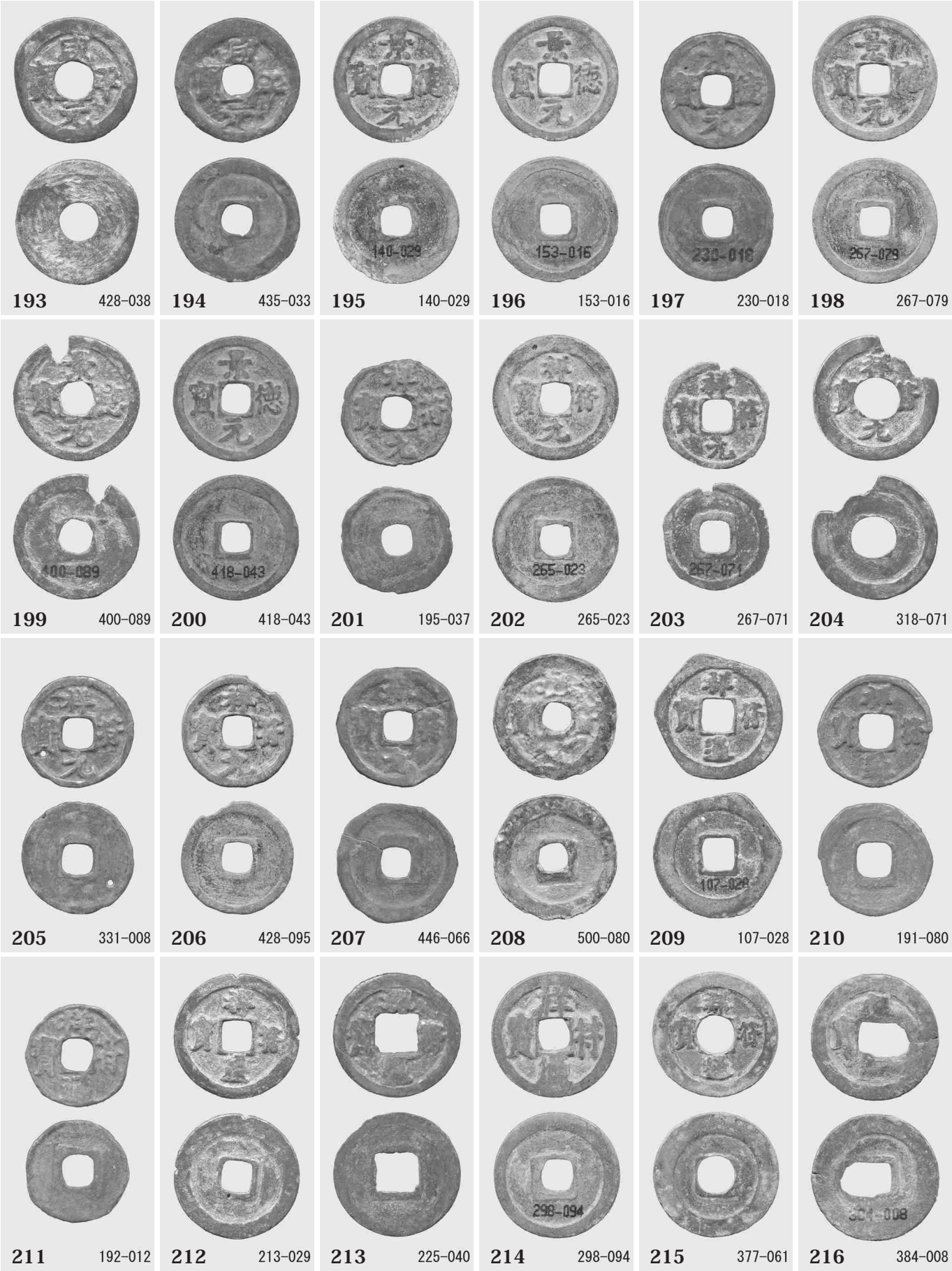
157 269-032　158 271-038　159 280-053　160 337-003　161 232-020　162 240-012

163 246-099　164 257-014　165 277-009　166 282-034　167 087-007　168 278-045

4SK-014 出土銭貨（7）

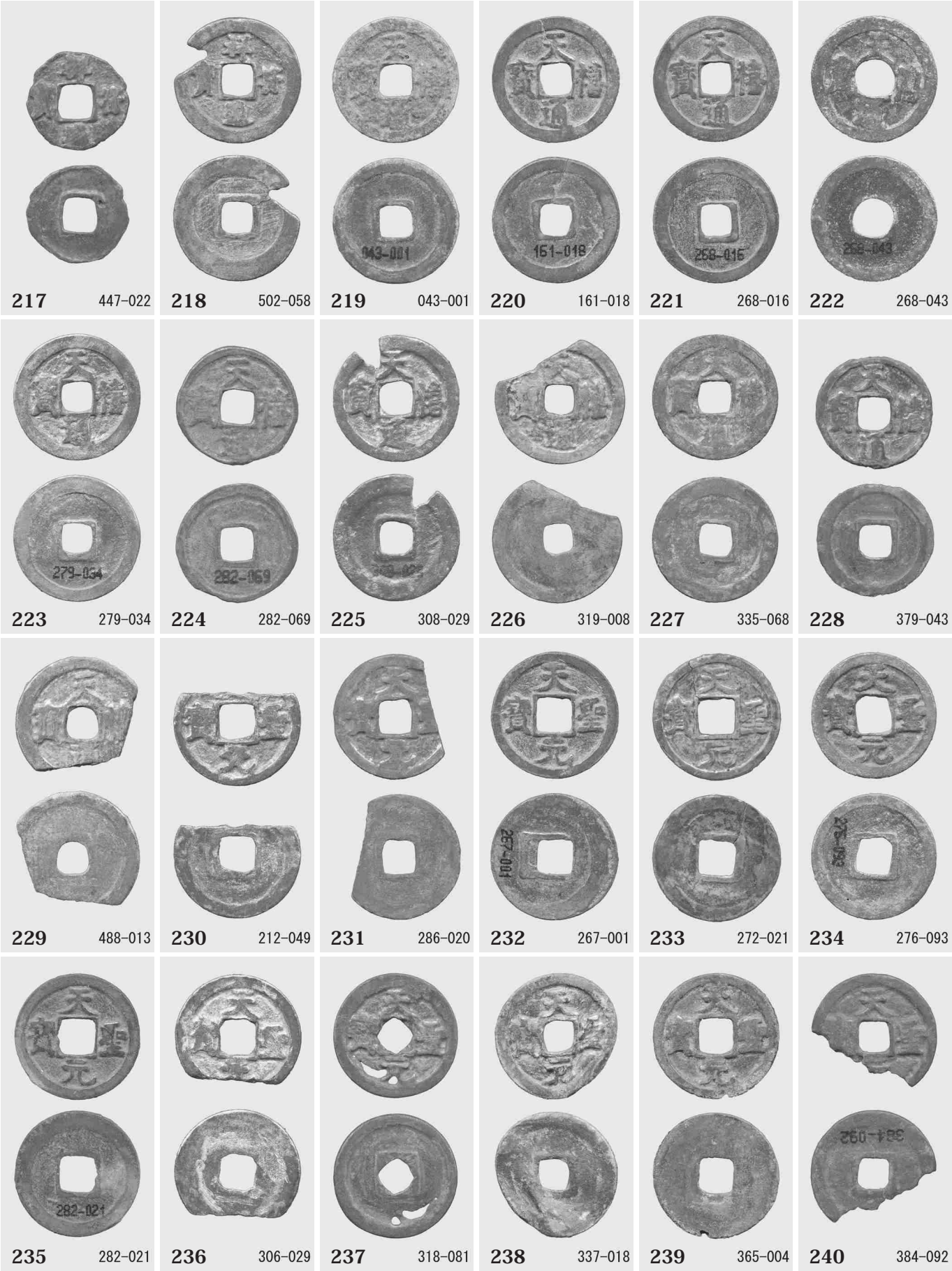


4SK-014 出土銭貨（8）

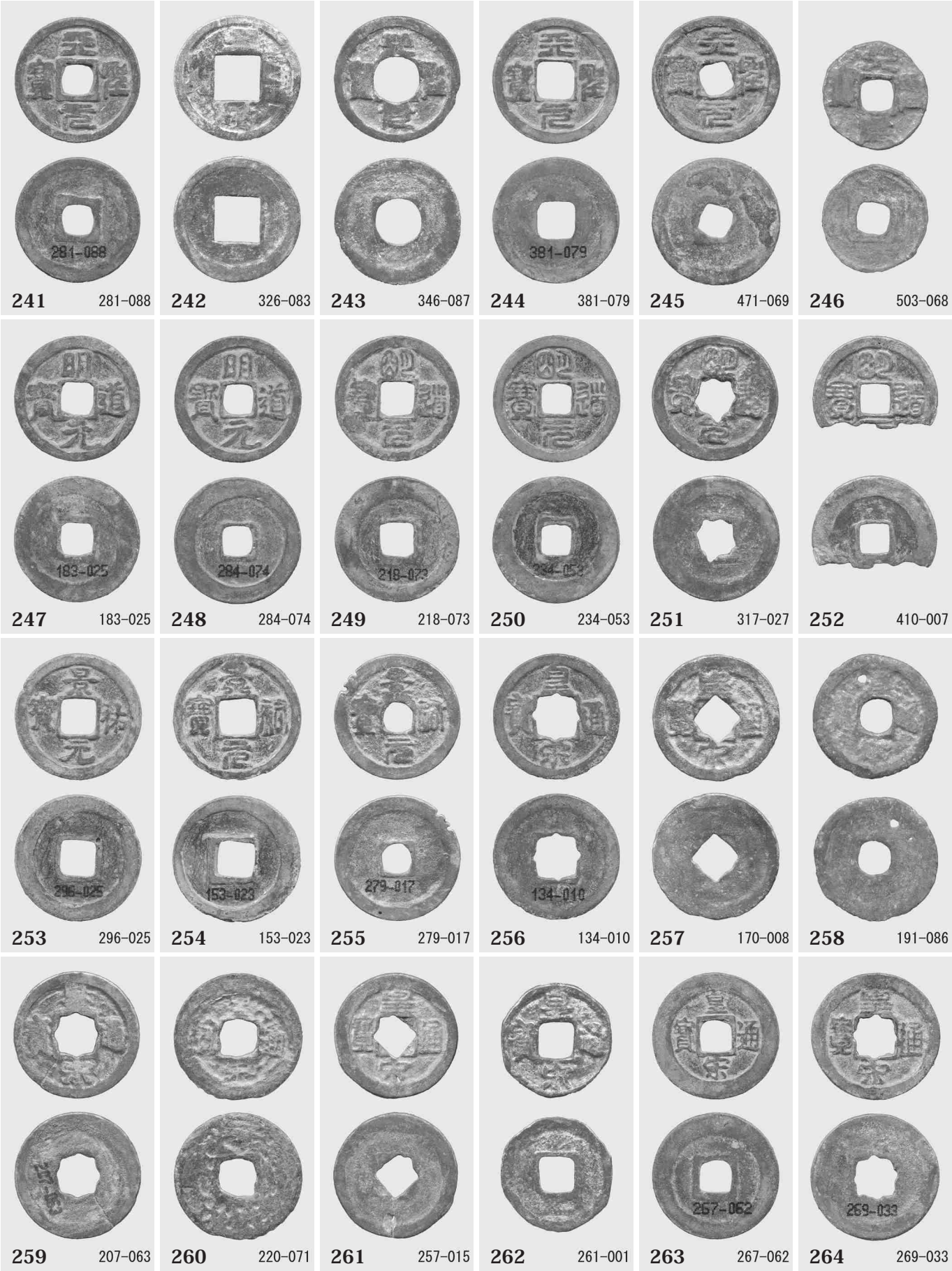


193	428-038	194	435-033	195	140-029	196	153-016	197	230-018	198	267-079
199	400-089	200	418-043	201	195-037	202	265-023	203	267-071	204	318-071
205	331-008	206	428-095	207	446-066	208	500-080	209	107-028	210	191-080
211	192-012	212	213-029	213	225-040	214	298-094	215	377-061	216	384-008

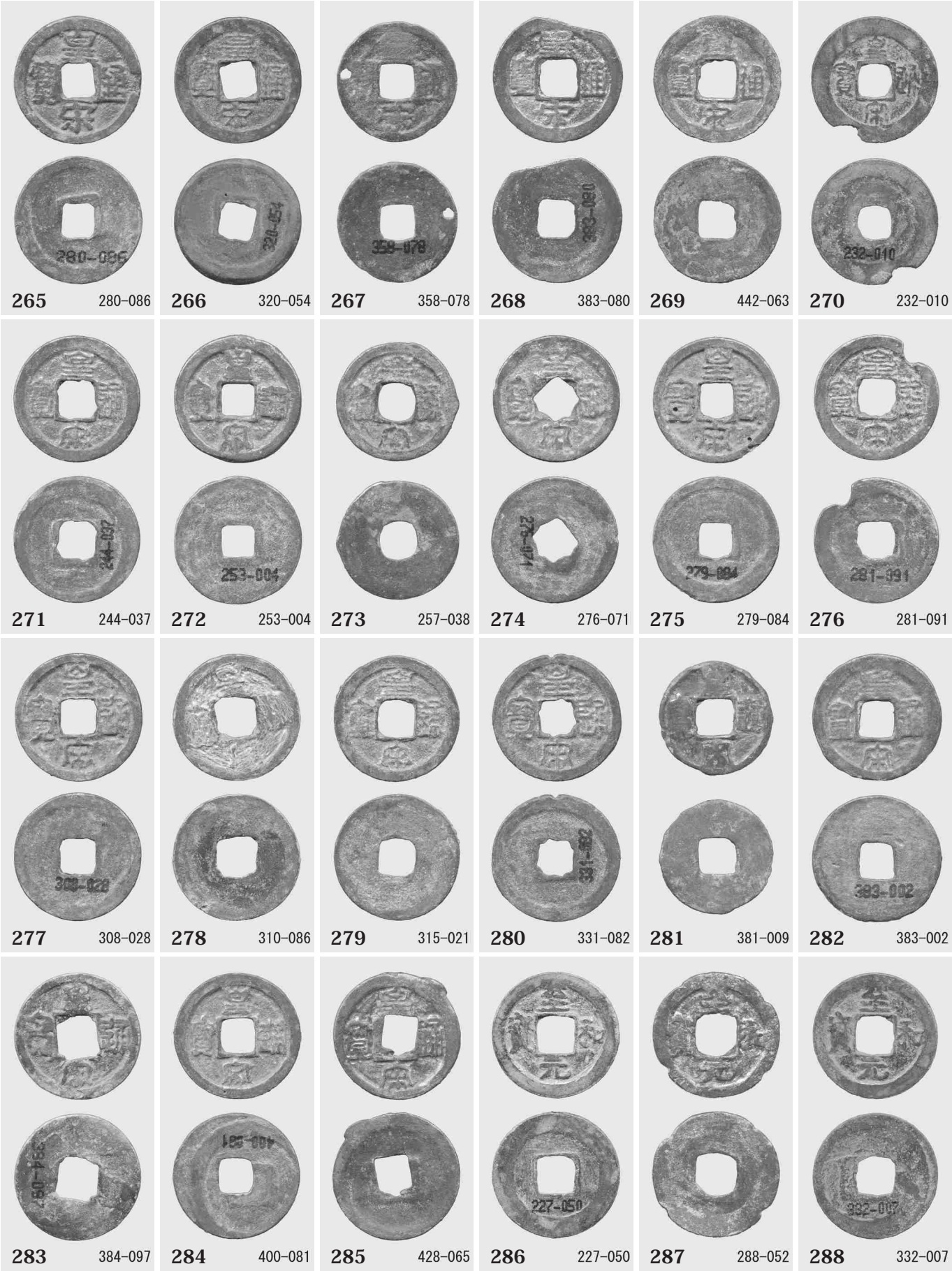
4SK-014 出土銭貨（9）



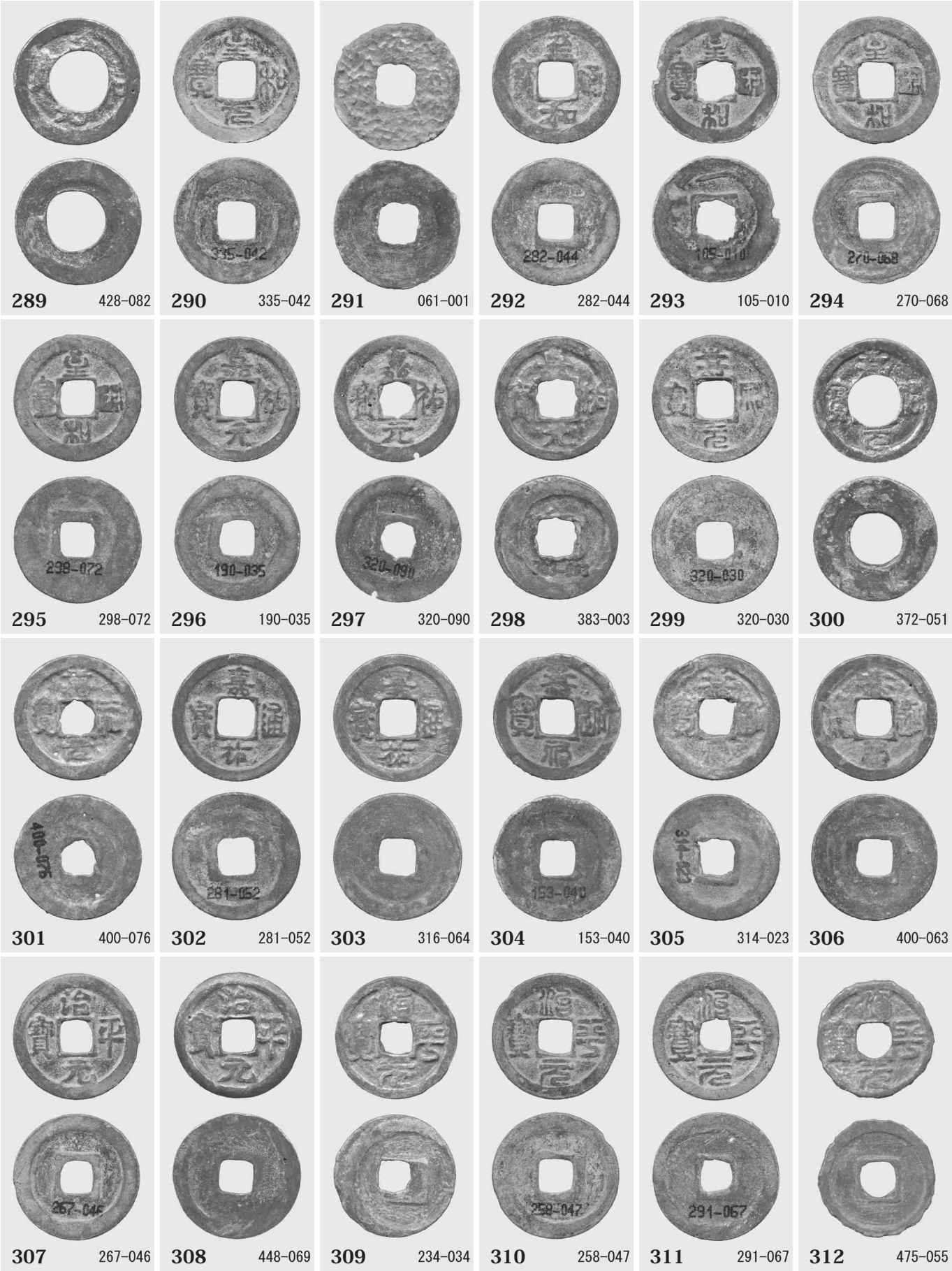
4SK-014 出土銭貨（10）



4SK-014 出土銭貨（11）



4SK-014 出土銭貨（12）

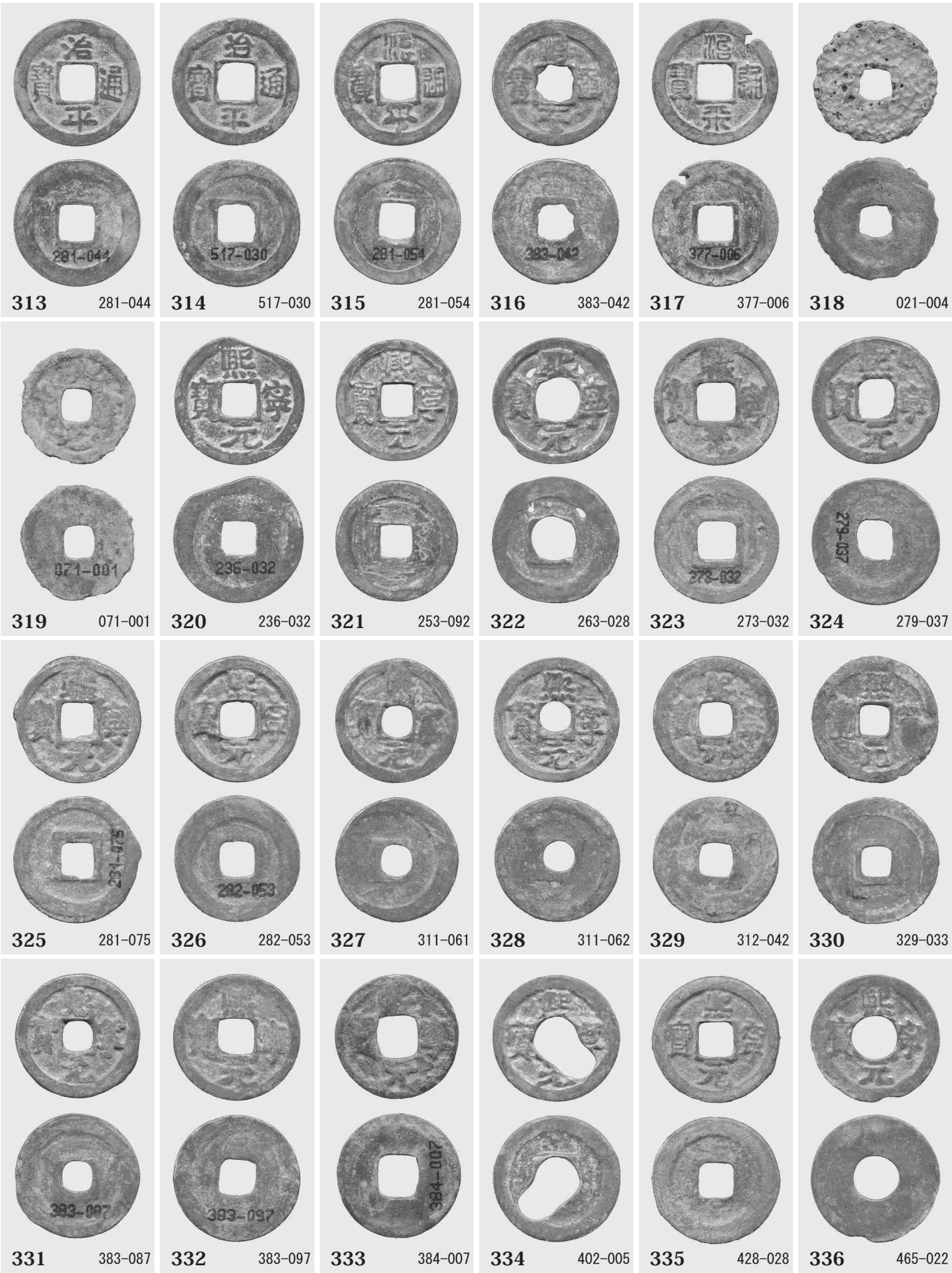


289 428-082　290 335-042　291 061-001　292 282-044　293 105-010　294 270-068

295 298-072　296 190-035　297 320-090　298 383-003　299 320-030　300 372-051

301 400-076　302 281-052　303 316-064　304 153-040　305 314-023　306 400-063

307 267-046　308 448-069　309 234-034　310 258-047　311 291-067　312 475-055



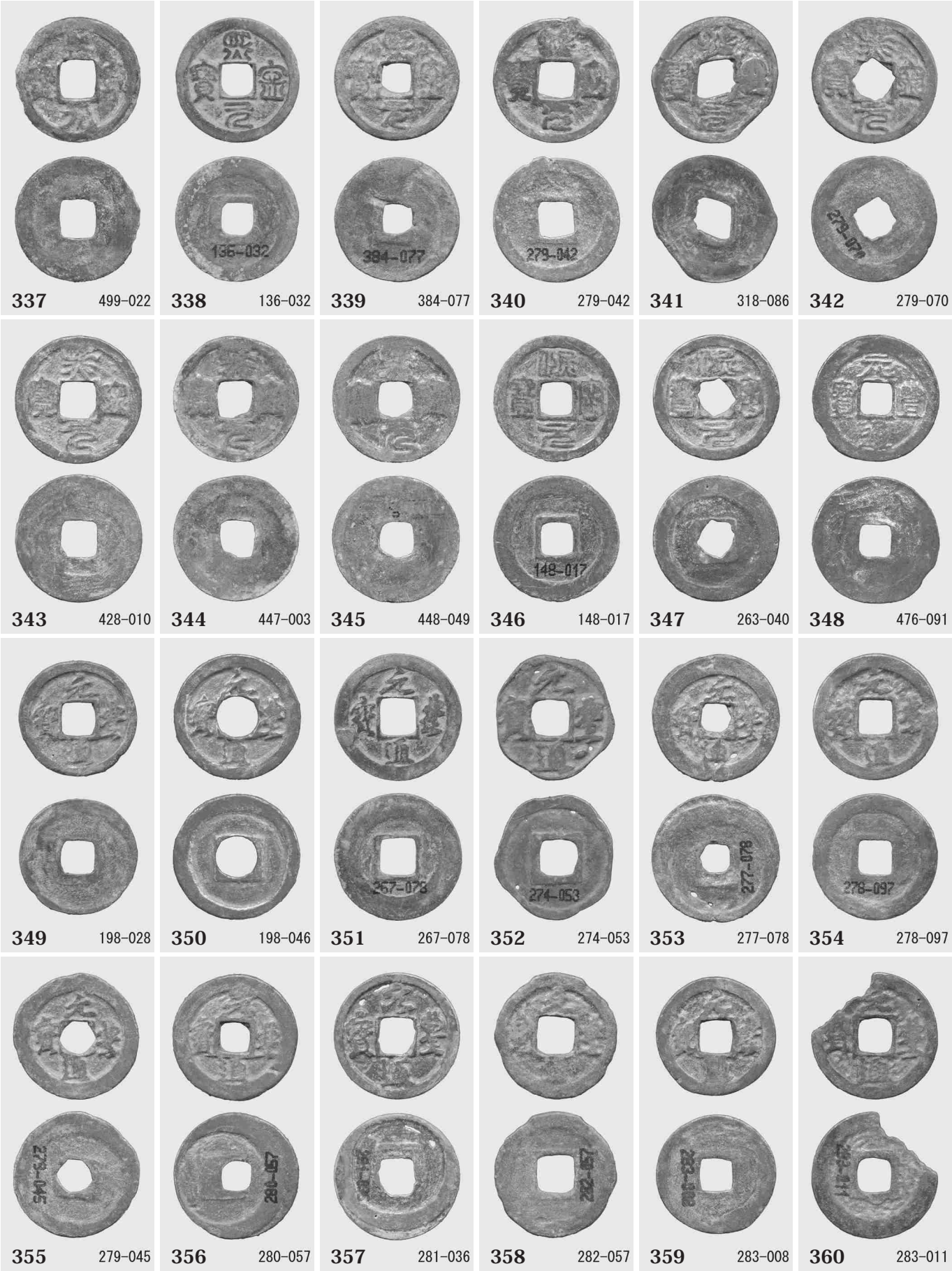
313 281-044　314 517-030　315 281-054　316 383-042　317 377-006　318 021-004

319 071-001　320 236-032　321 253-092　322 263-028　323 273-032　324 279-037

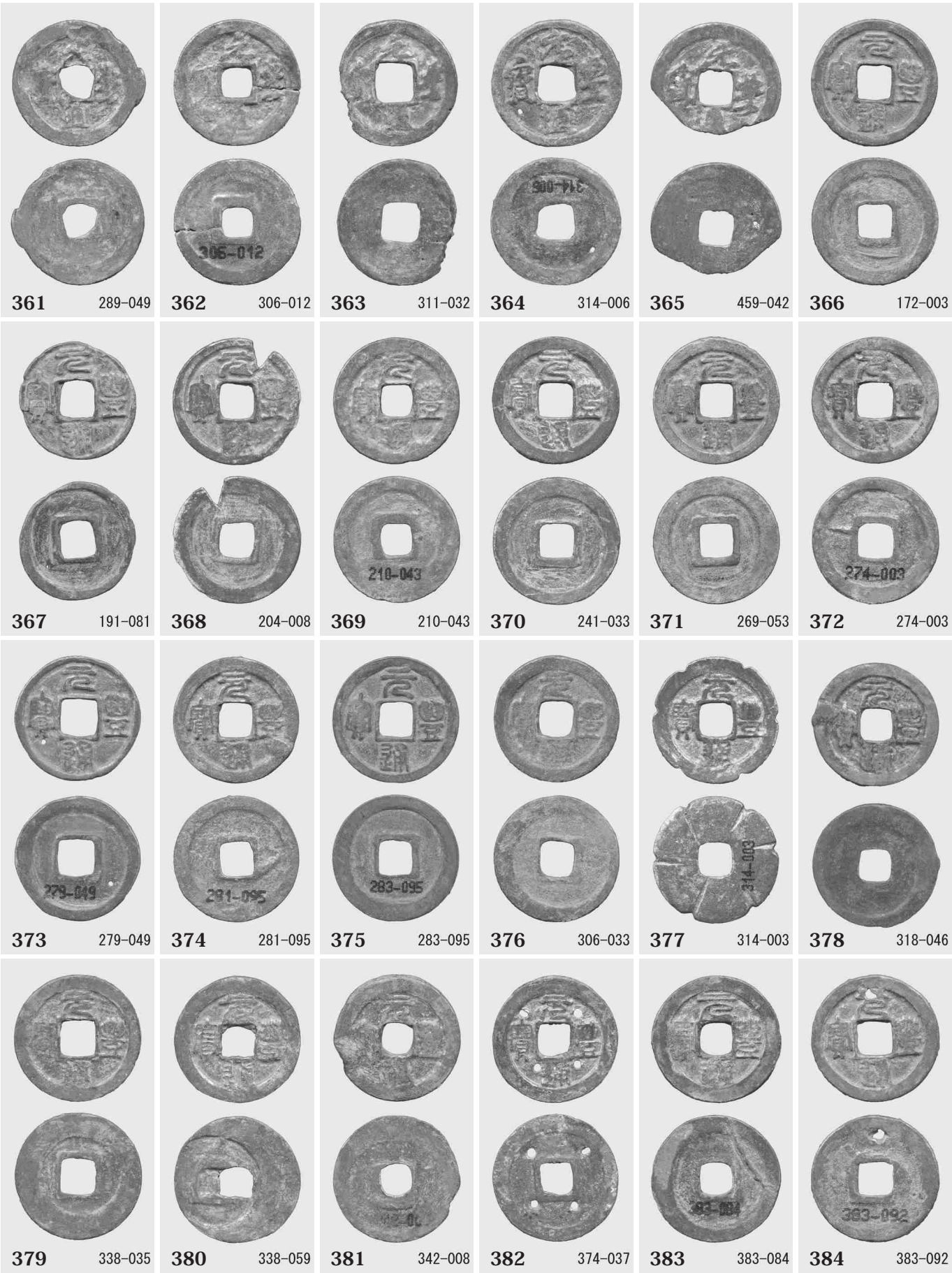
325 281-075　326 282-053　327 311-061　328 311-062　329 312-042　330 329-033

331 383-087　332 383-097　333 384-007　334 402-005　335 428-028　336 465-022

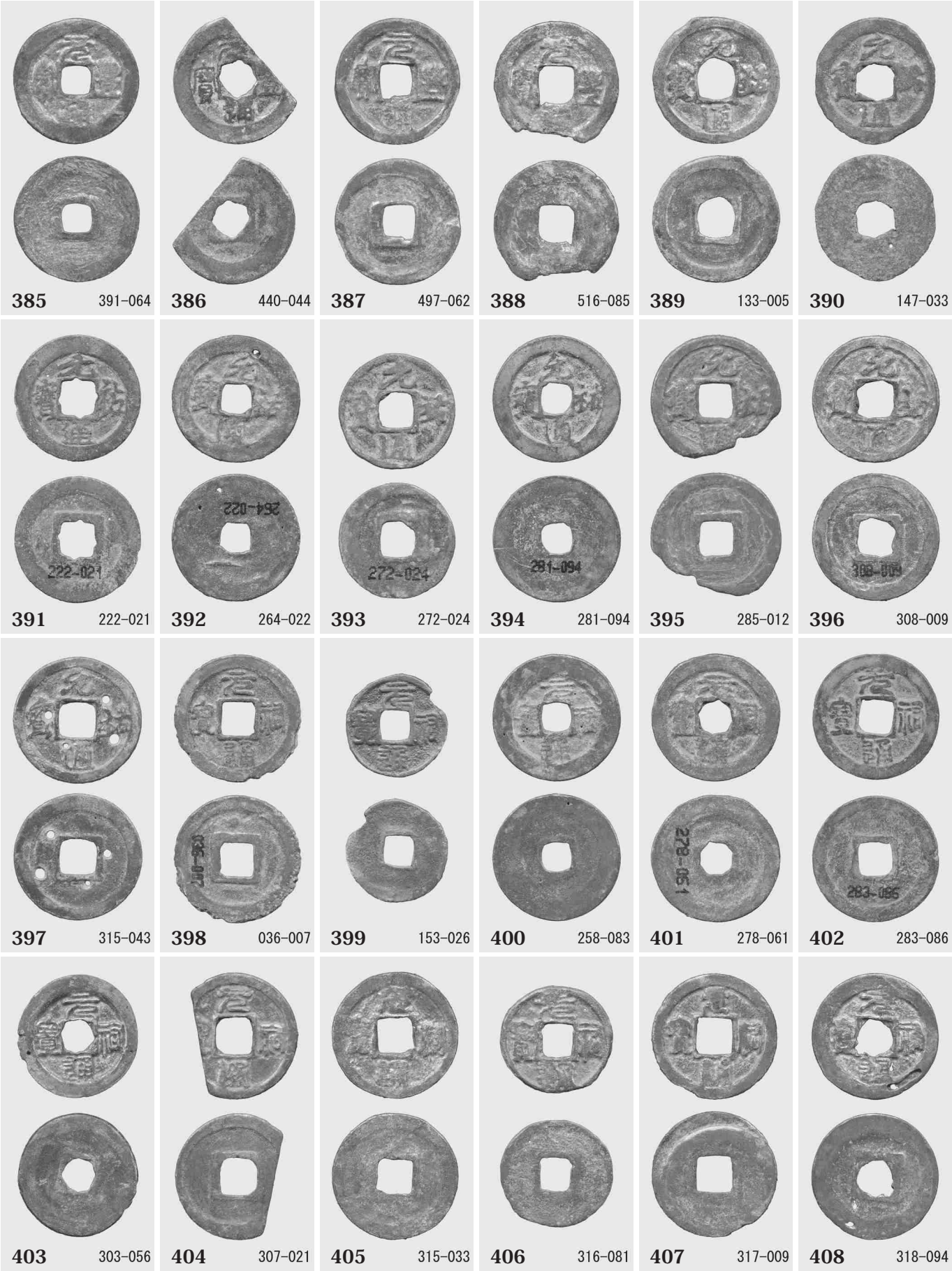
4SK-014 出土銭貨（14）

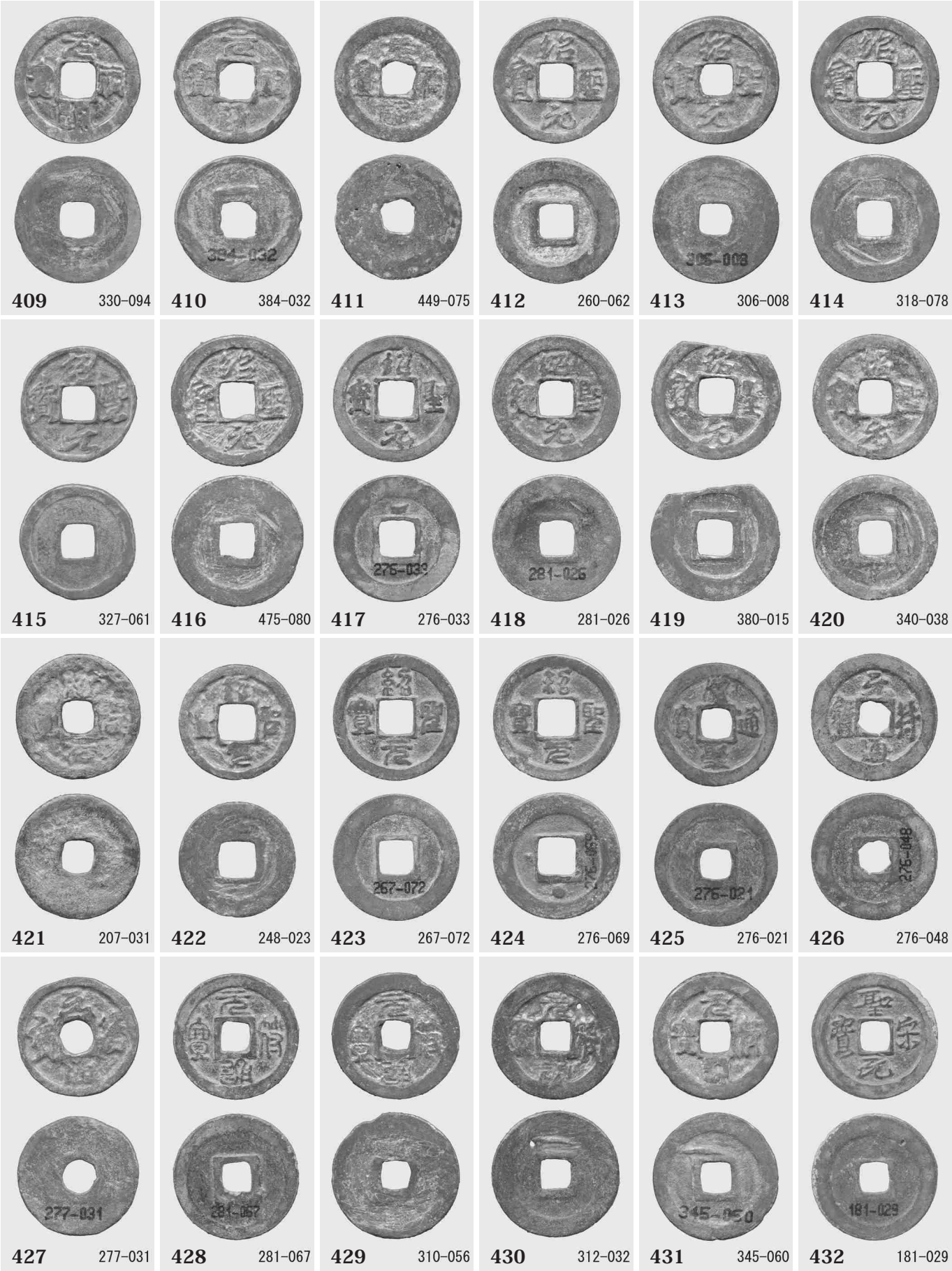


4SK-014 出土銭貨（15）

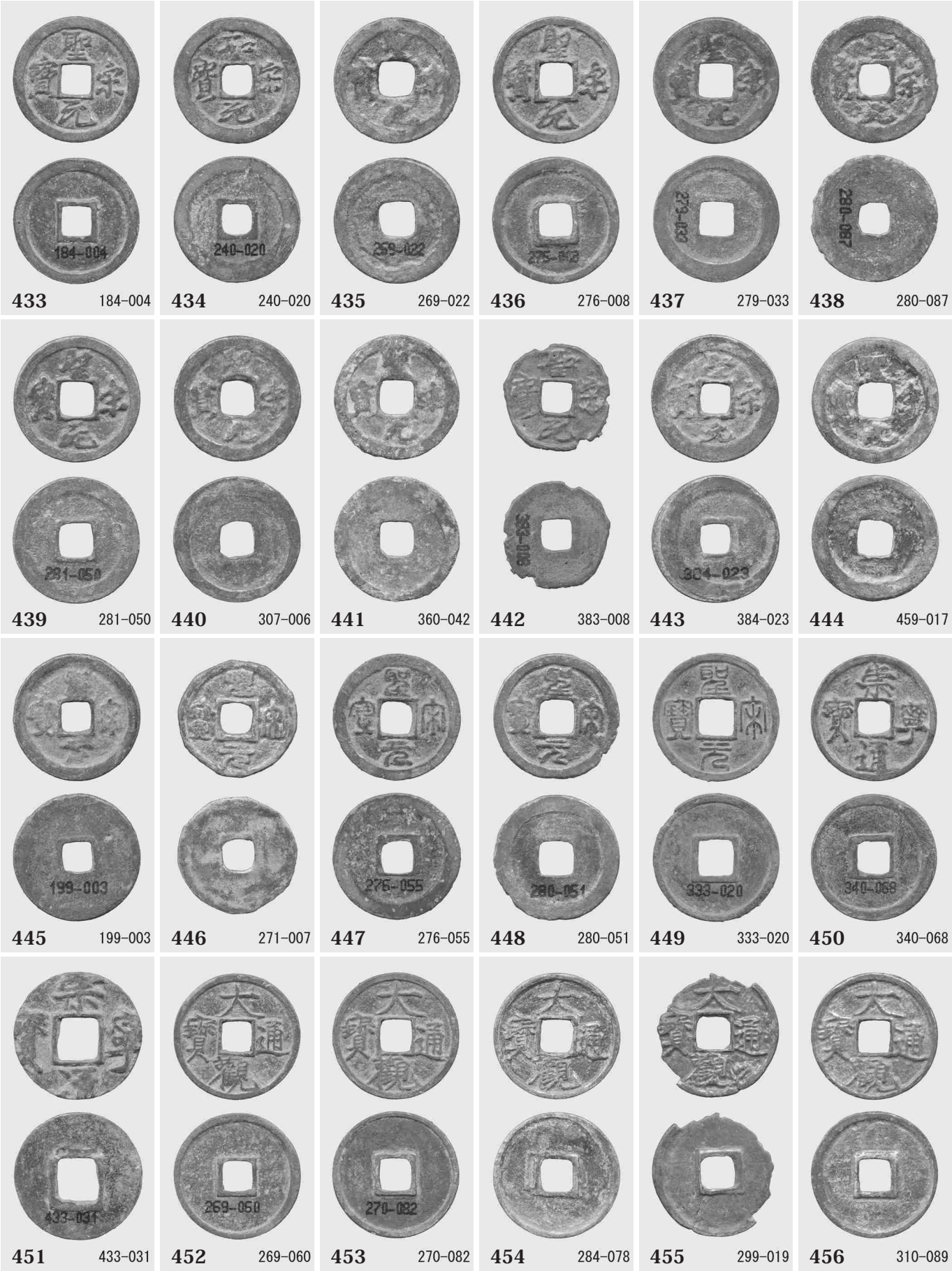


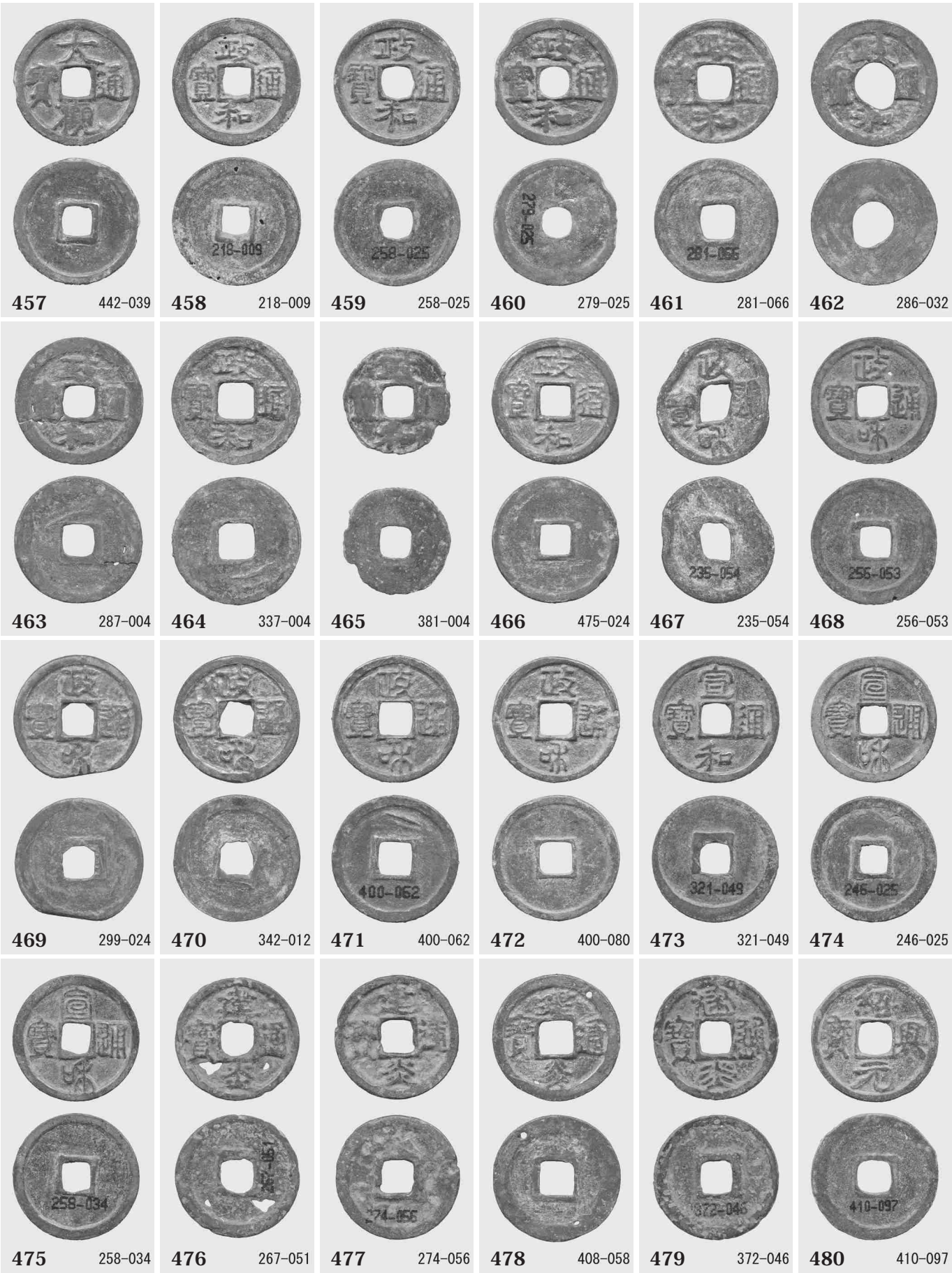
4SK-014 出土銭貨（16）


385 391-064
386 440-044
387 497-062
388 516-085
389 133-005
390 147-033
391 222-021
392 264-022
393 272-024
394 281-094
395 285-012
396 308-009
397 315-043
398 036-007
399 153-026
400 258-083
401 278-061
402 283-086
403 303-056
404 307-021
405 315-033
406 316-081
407 317-009
408 318-094

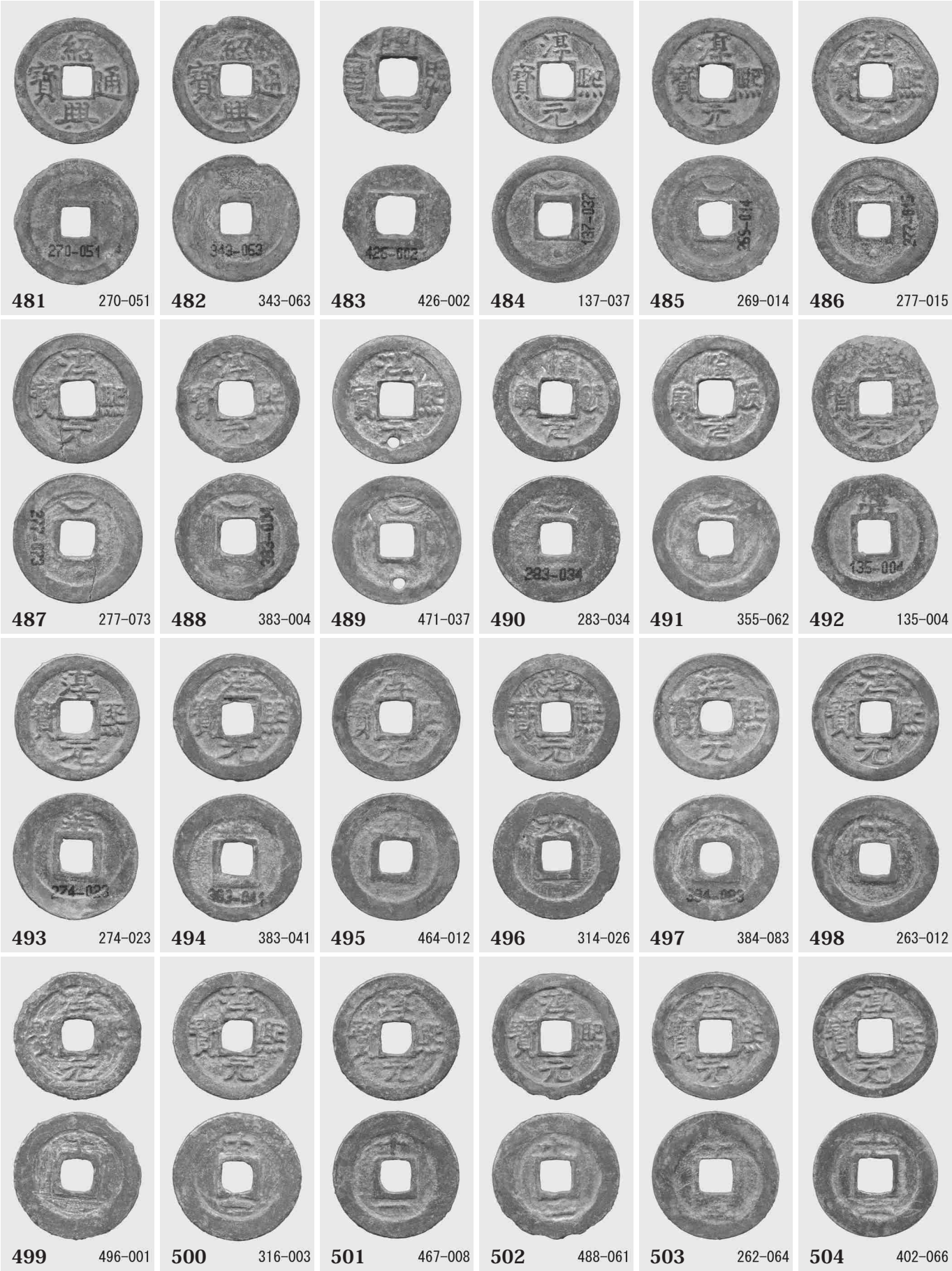


4SK-014 出土銭貨（18）


433 184-004
434 240-020
435 269-022
436 276-008
437 279-033
438 280-087
439 281-050
440 307-006
441 360-042
442 383-008
443 384-023
444 459-017
445 199-003
446 271-007
447 276-055
448 280-051
449 333-020
450 340-068
451 433-031
452 269-060
453 270-082
454 284-078
455 299-019
456 310-089



4SK-014 出土銭貨（20）

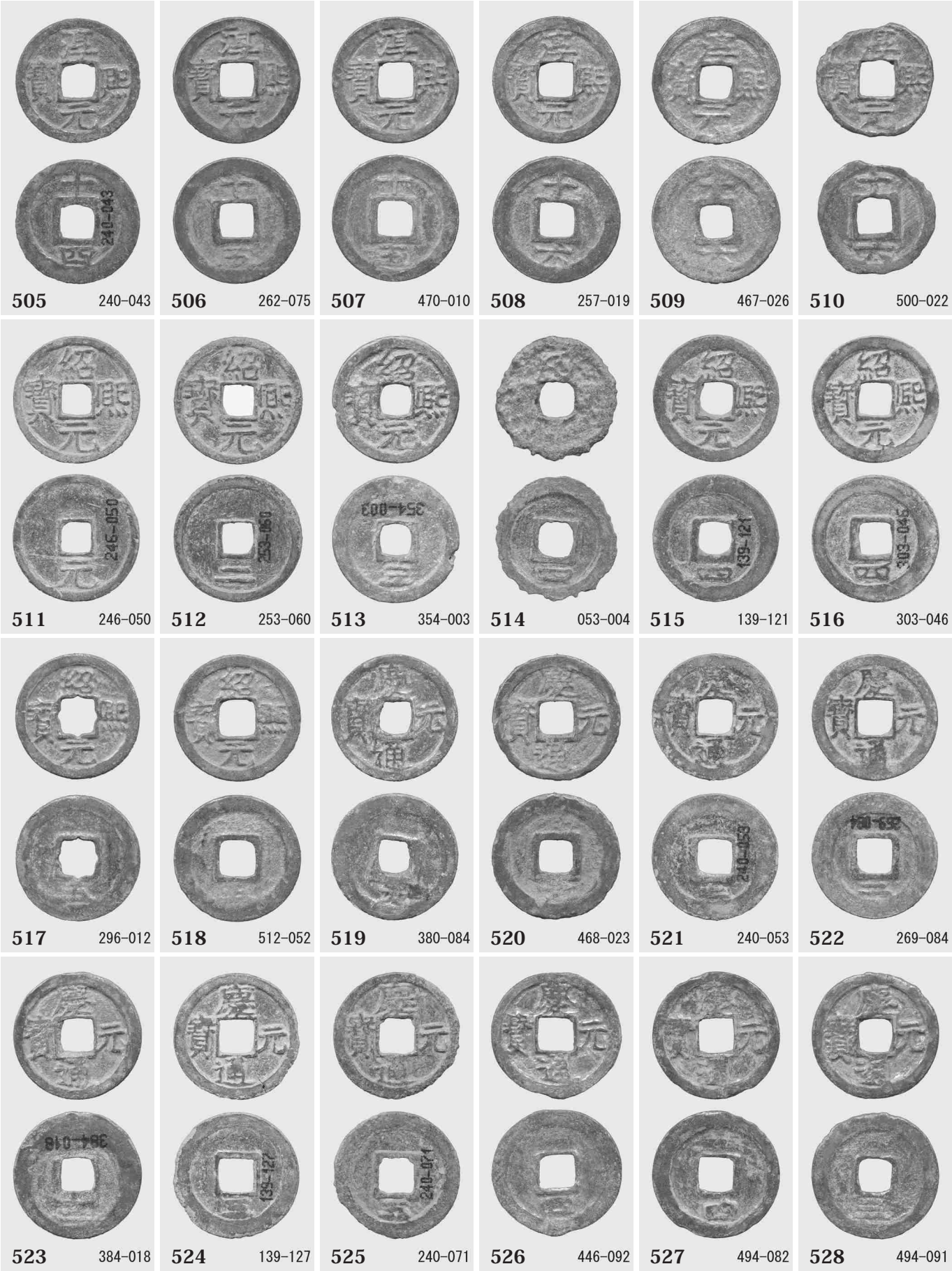


481 270-051　482 343-063　483 426-002　484 137-037　485 269-014　486 277-015

487 277-073　488 383-004　489 471-037　490 283-034　491 355-062　492 135-004

493 274-023　494 383-041　495 464-012　496 314-026　497 384-083　498 263-012

499 496-001　500 316-003　501 467-008　502 488-061　503 262-064　504 402-066

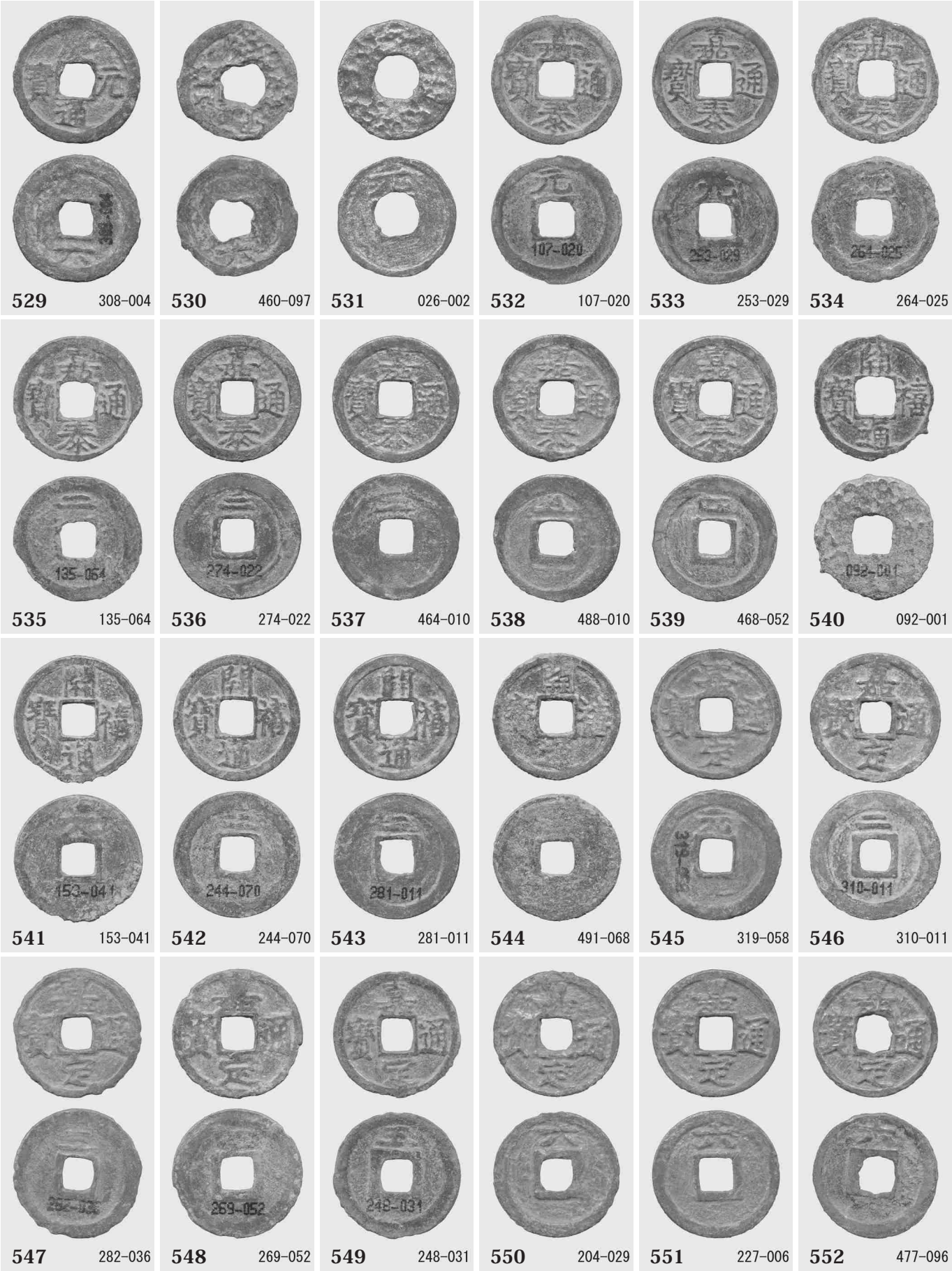


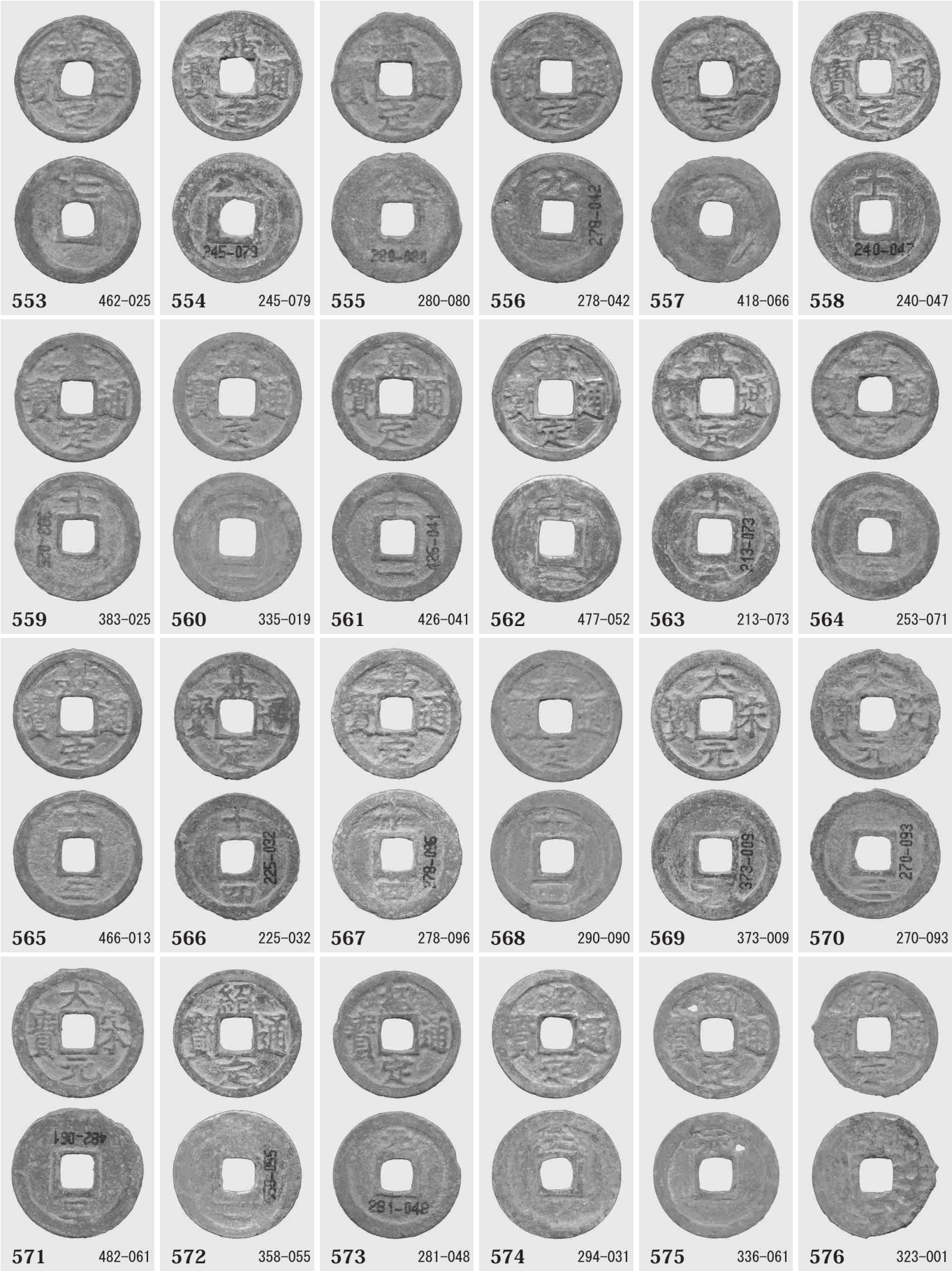
505 240-043　506 262-075　507 470-010　508 257-019　509 467-026　510 500-022

511 246-050　512 253-060　513 354-003　514 053-004　515 139-121　516 303-046

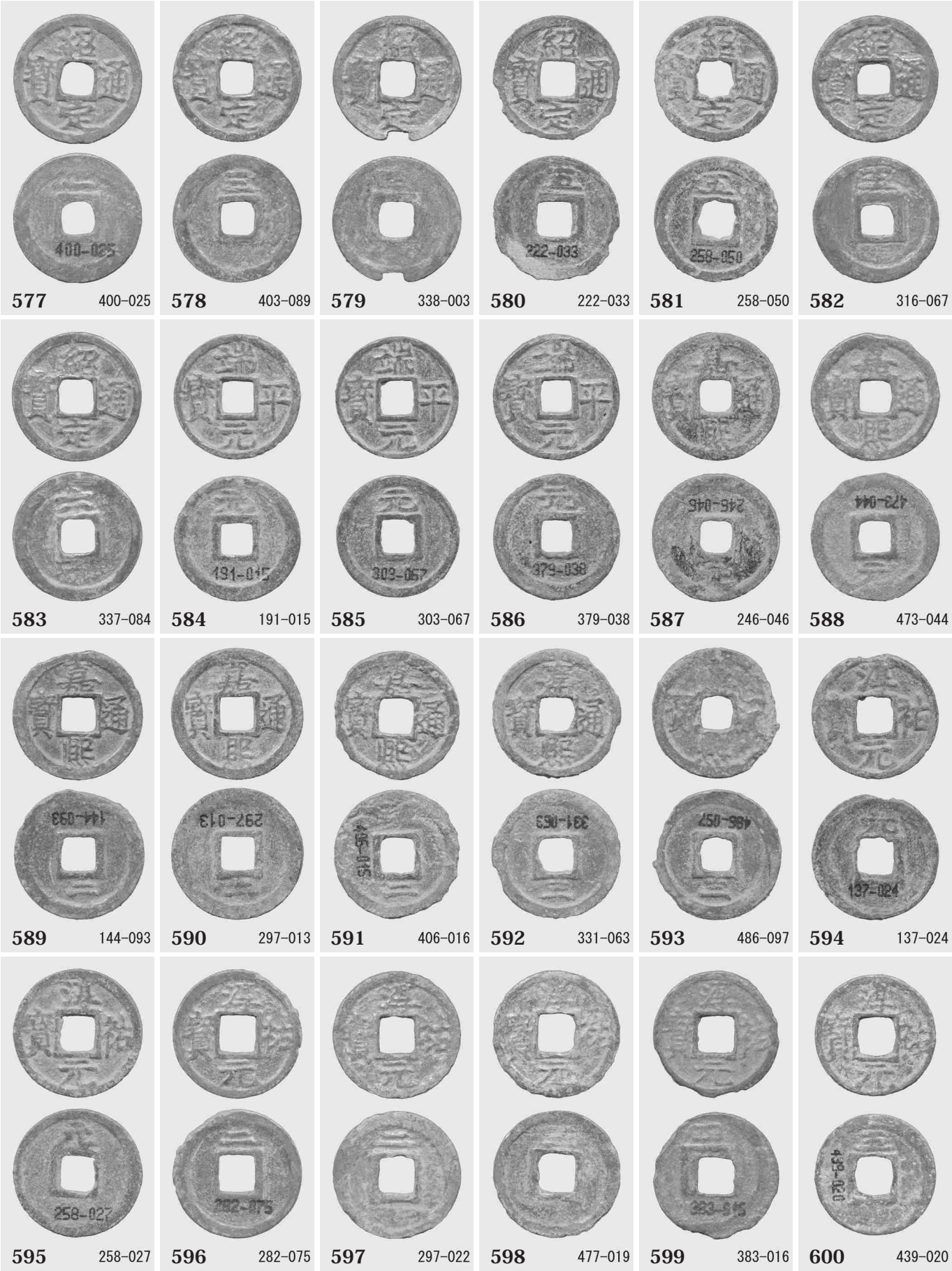
517 296-012　518 512-052　519 380-084　520 468-023　521 240-053　522 269-084

523 384-018　524 139-127　525 240-071　526 446-092　527 494-082　528 494-091


529 308-004
530 460-097
531 026-002
532 107-020
533 253-029
534 264-025
535 135-064
536 274-022
537 464-010
538 488-010
539 468-052
540 092-001
541 153-041
542 244-070
543 281-011
544 491-068
545 319-058
546 310-011
547 282-036
548 269-052
549 248-031
550 204-029
551 227-006
552 477-096



4SK-014 出土銭貨（24）

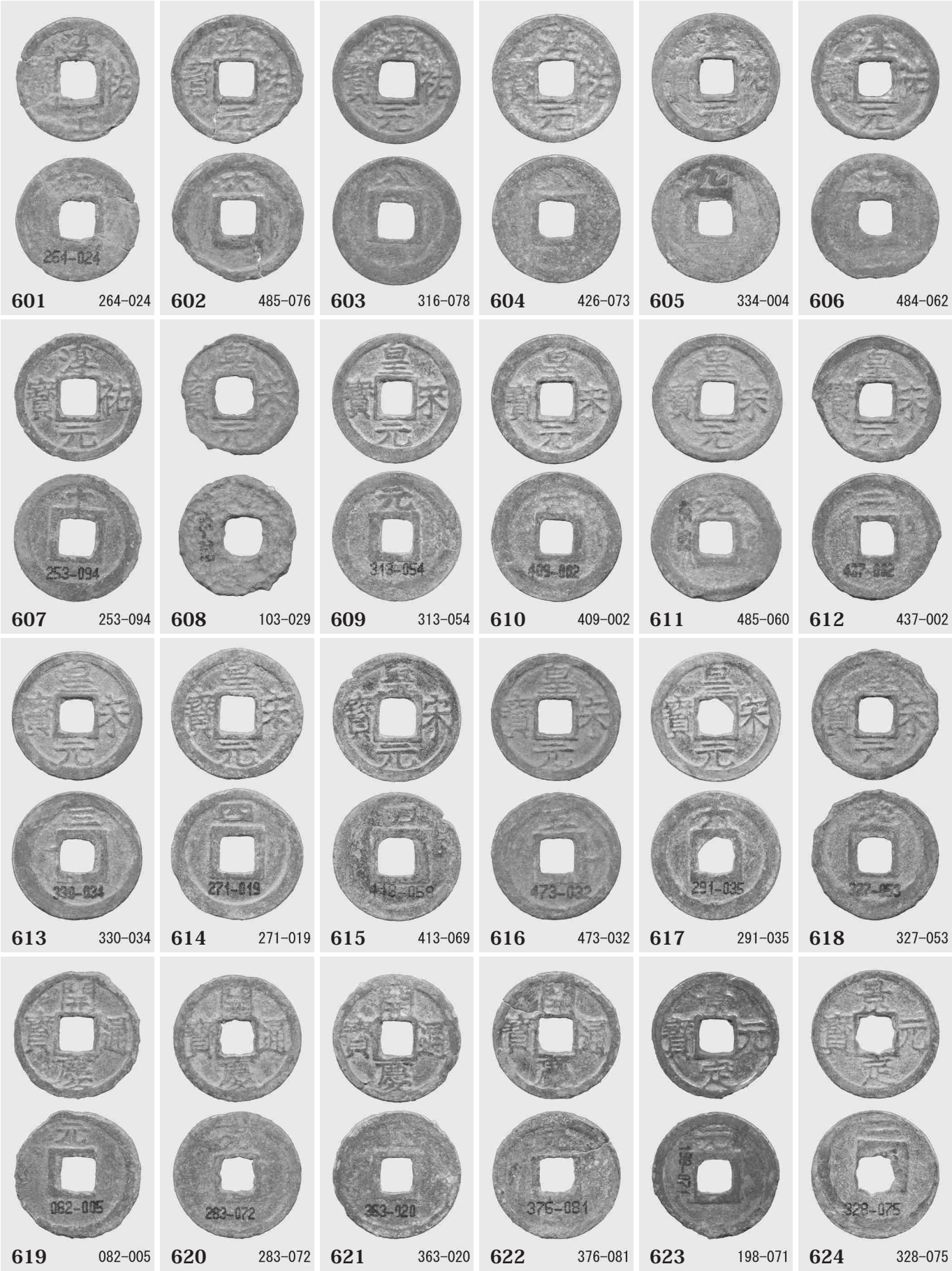


577 400-025　578 403-089　579 338-003　580 222-033　581 258-050　582 316-067

583 337-084　584 191-015　585 303-067　586 379-038　587 246-046　588 473-044

589 144-093　590 297-013　591 406-016　592 331-063　593 486-097　594 137-024

595 258-027　596 282-075　597 297-022　598 477-019　599 383-016　600 439-020



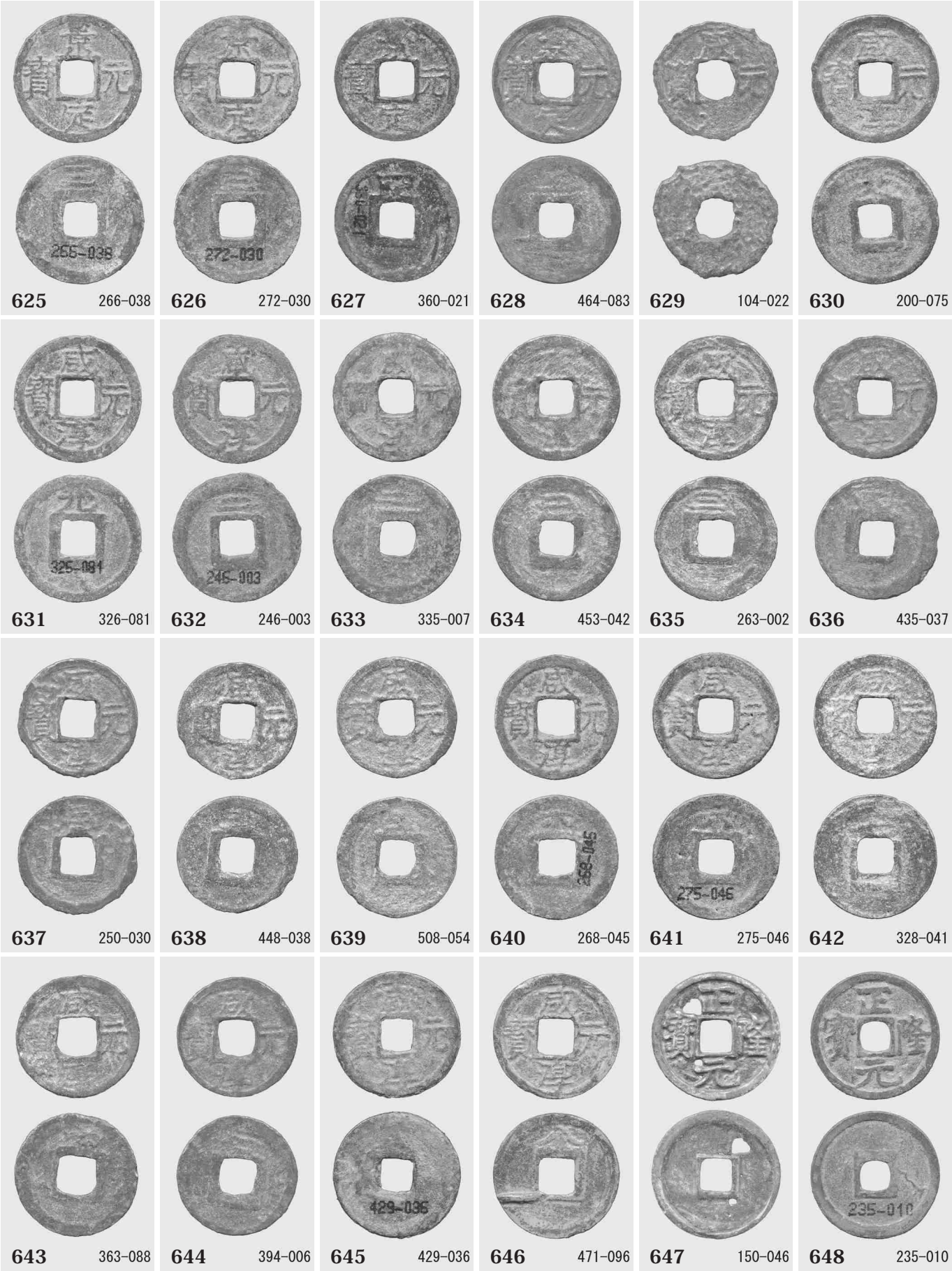
601 264-024　602 485-076　603 316-078　604 426-073　605 334-004　606 484-062

607 253-094　608 103-029　609 313-054　610 409-002　611 485-060　612 437-002

613 330-034　614 271-019　615 413-069　616 473-032　617 291-035　618 327-053

619 082-005　620 283-072　621 363-020　622 376-081　623 198-071　624 328-075

4SK-014 出土銭貨（26）

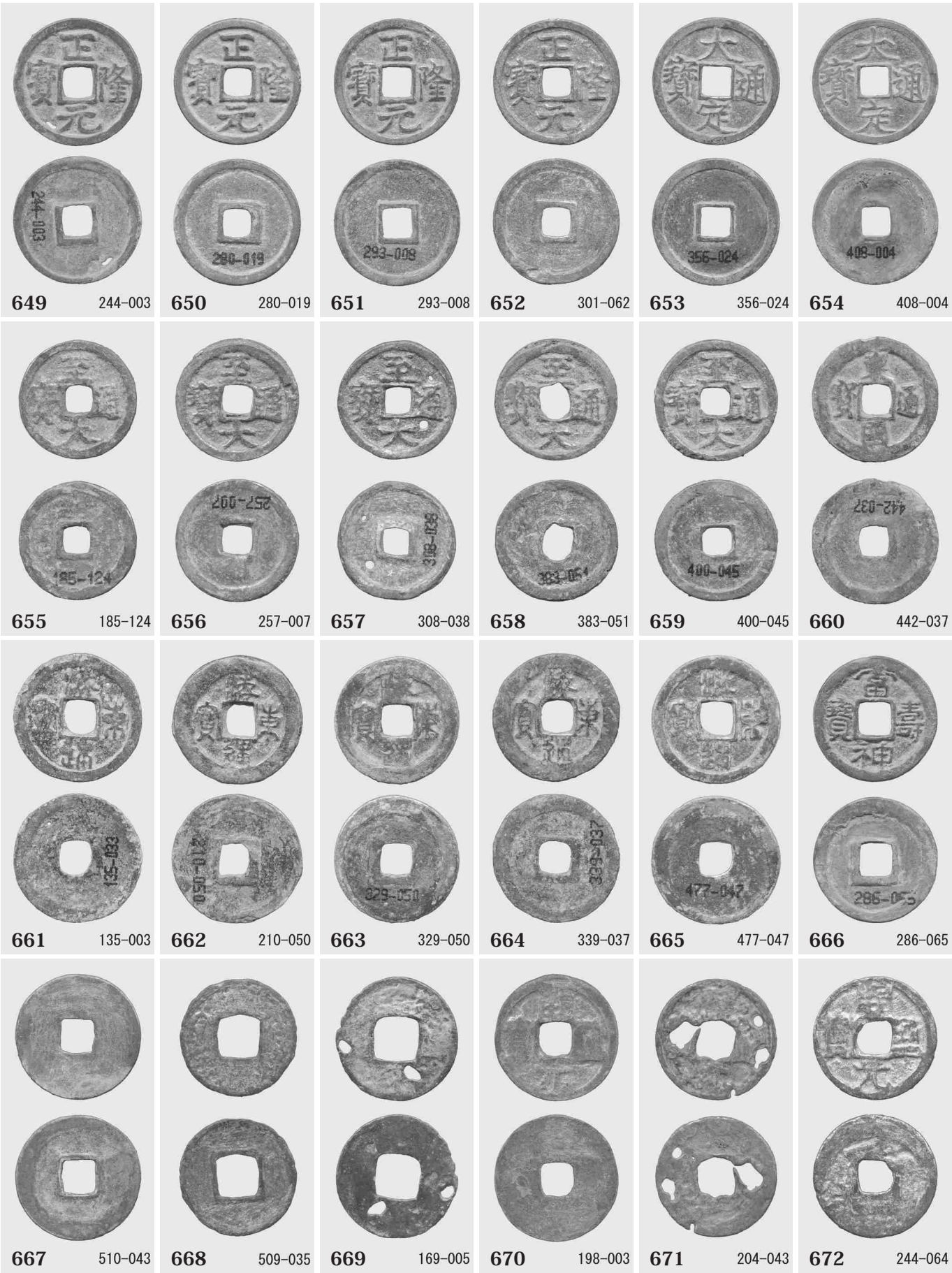


625 266-038　626 272-030　627 360-021　628 464-083　629 104-022　630 200-075

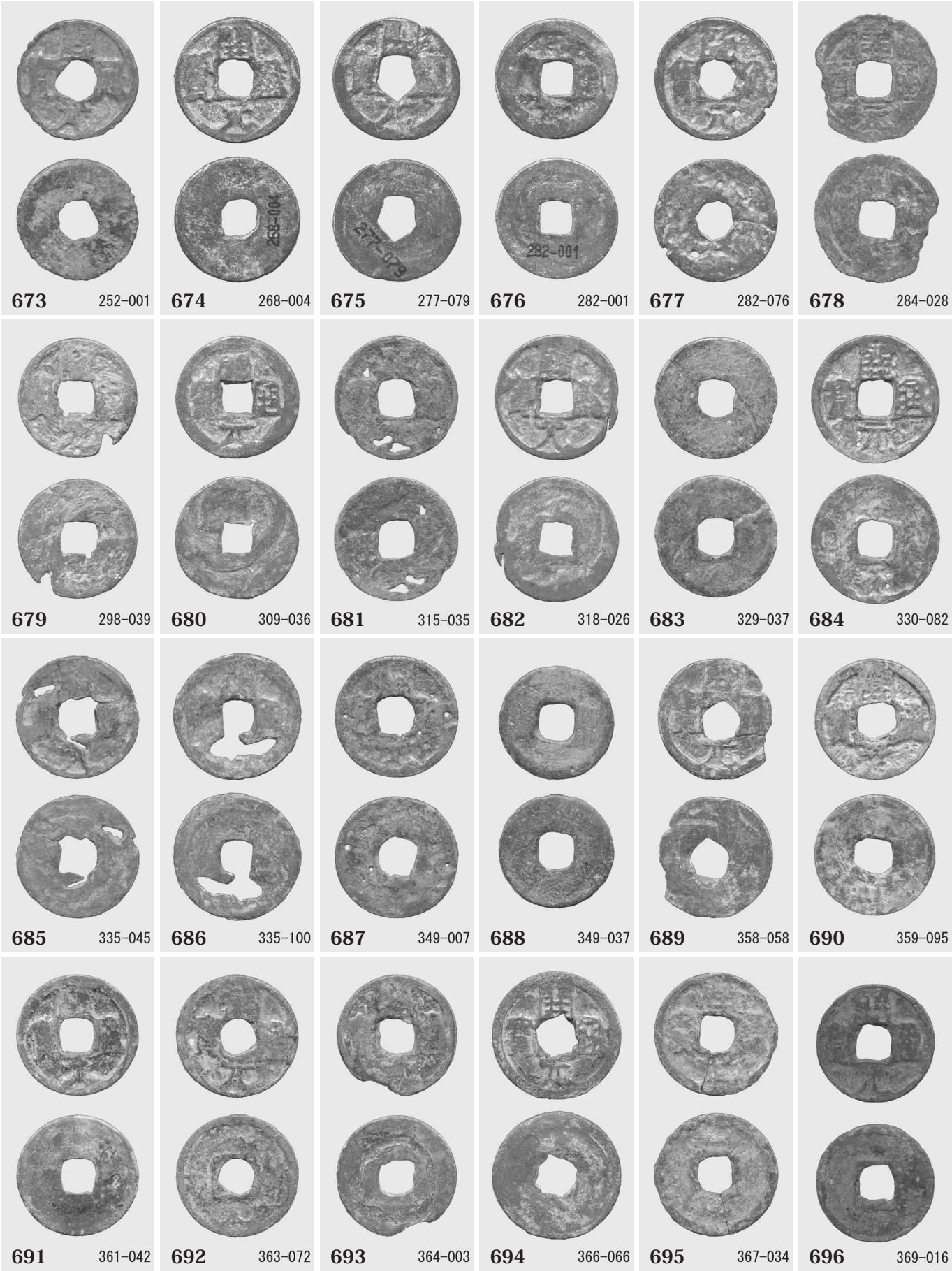
631 326-081　632 246-003　633 335-007　634 453-042　635 263-002　636 435-037

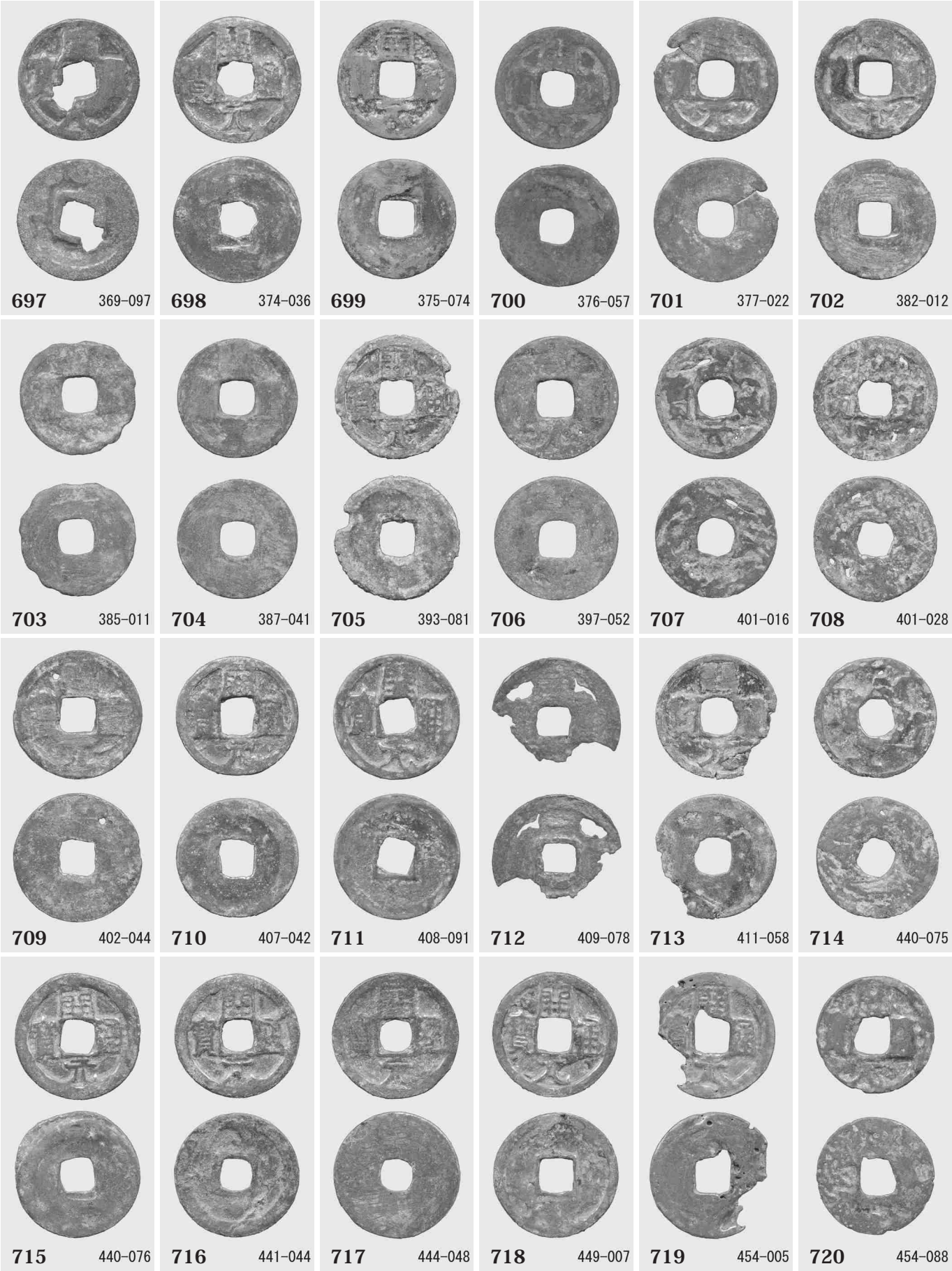
637 250-030　638 448-038　639 508-054　640 268-045　641 275-046　642 328-041

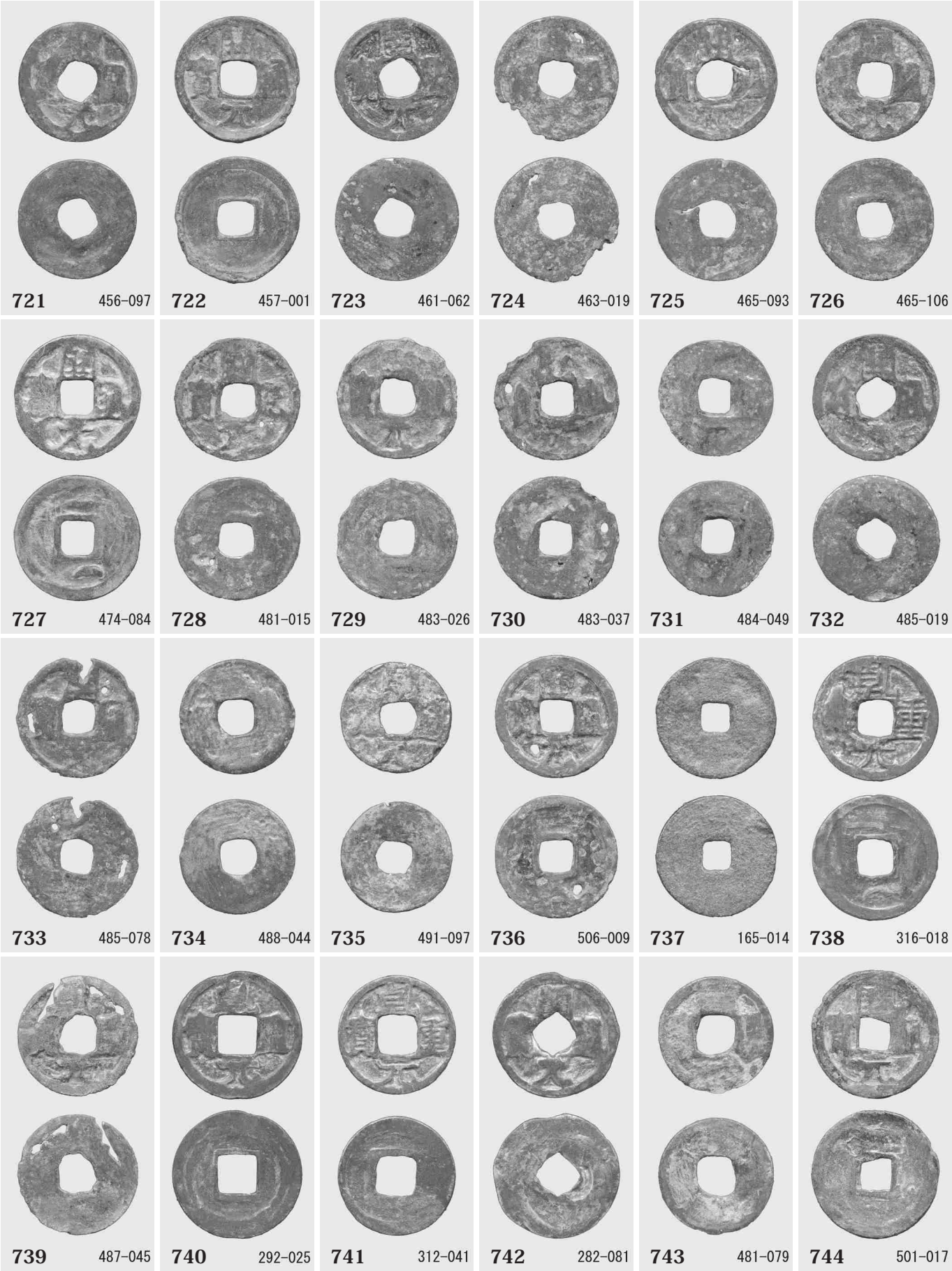
643 363-088　644 394-006　645 429-036　646 471-096　647 150-046　648 235-010

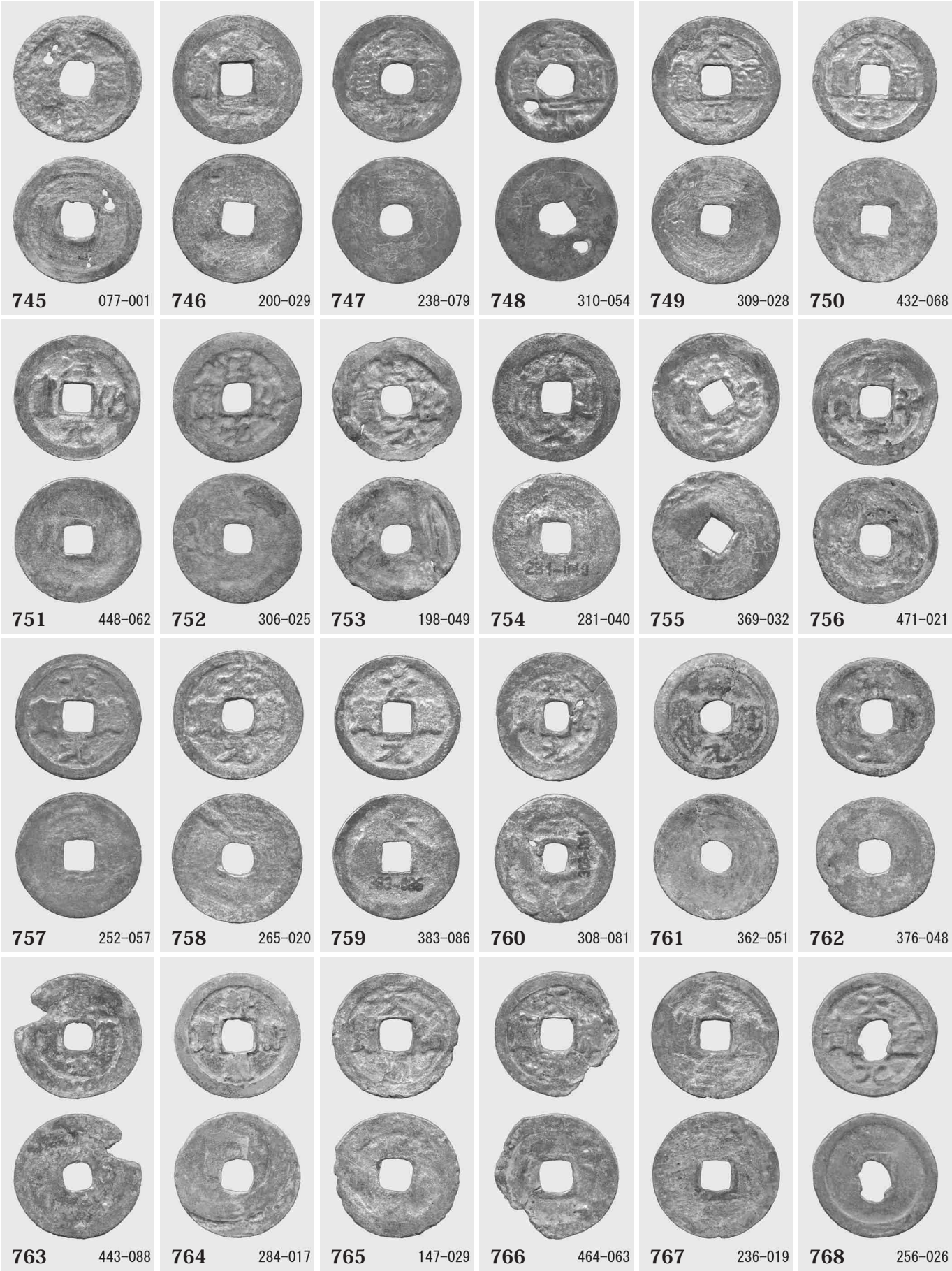


4SK-014 出土銭貨（28）

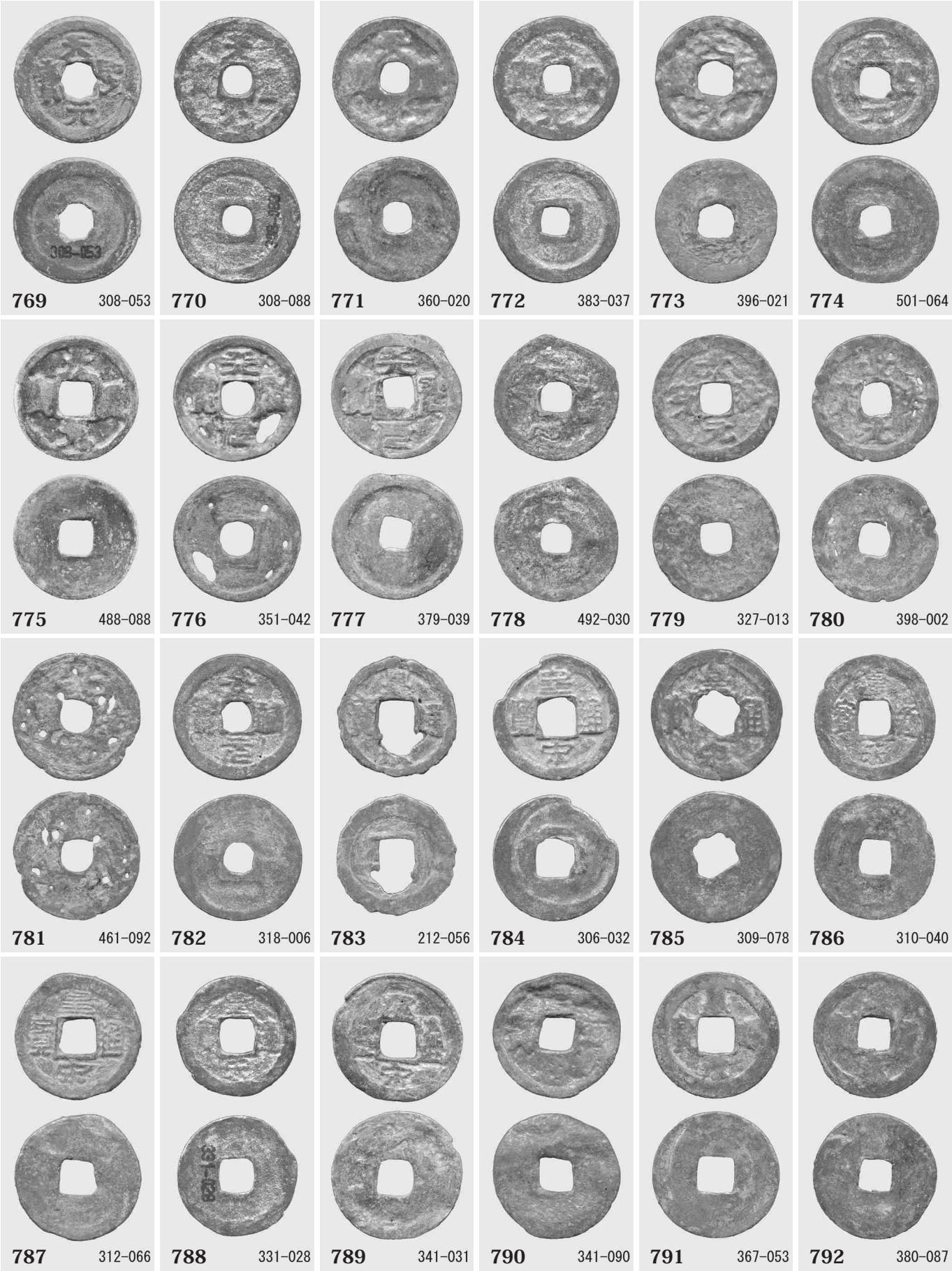

673 252-001
674 268-004
268-004
675 277-079
277-079
676 282-001
282-001
677 282-076
678 284-028
679 298-039
680 309-036
681 315-035
682 318-026
683 329-037
684 330-082
685 335-045
686 335-100
687 349-007
688 349-037
689 358-058
690 359-095
691 361-042
692 363-072
693 364-003
694 366-066
695 367-034
696 369-016

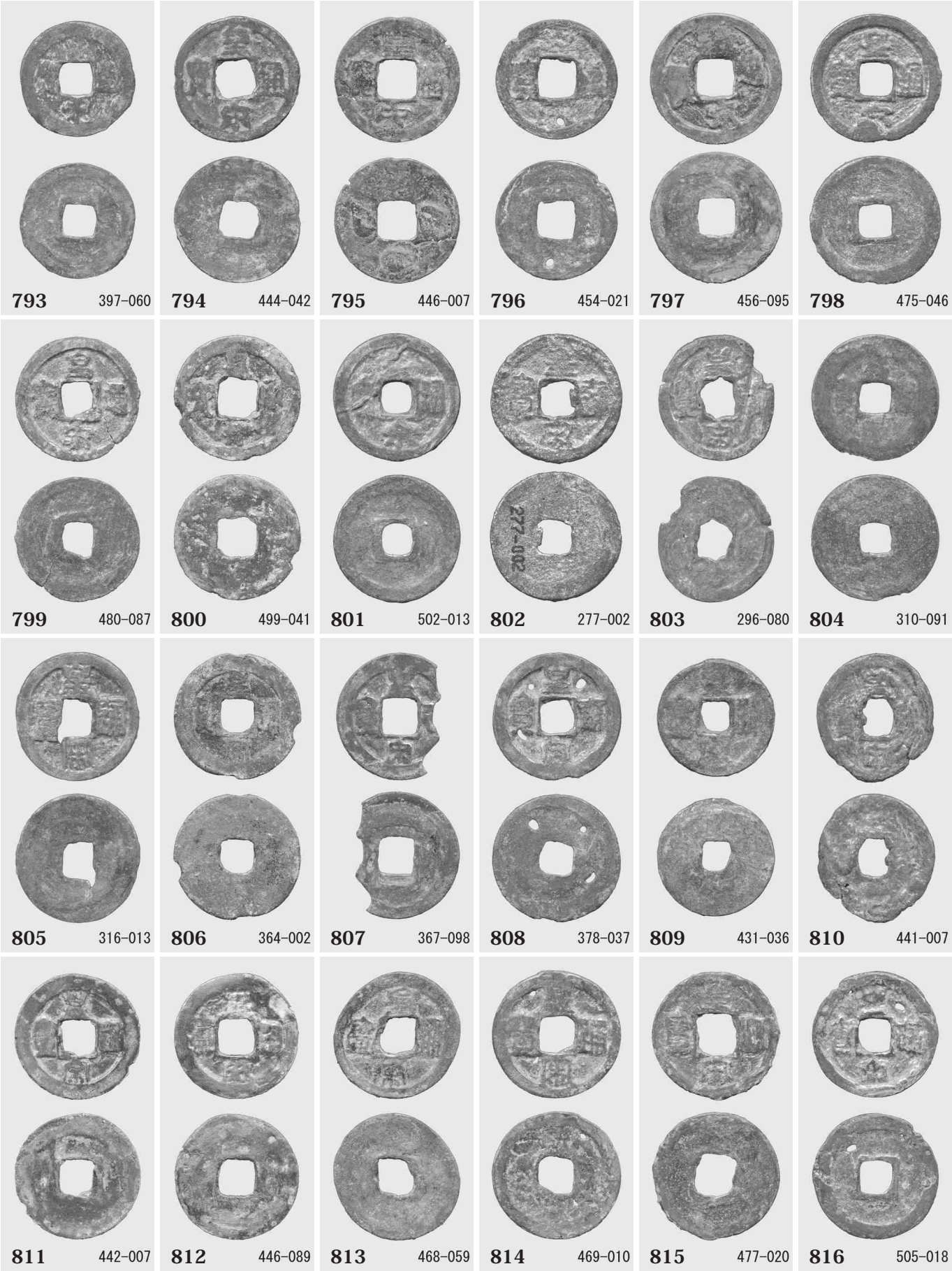

697 369-097
698 374-036
699 375-074
700 376-057
701 377-022
702 382-012
703 385-011
704 387-041
705 393-081
706 397-052
707 401-016
708 401-028
709 402-044
710 407-042
711 408-091
712 409-078
713 411-058
714 440-075
715 440-076
716 441-044
717 444-048
718 449-007
719 454-005
720 454-088


721 456-097
722 457-001
723 461-062
724 463-019
725 465-093
726 465-106
727 474-084
728 481-015
729 483-026
730 483-037
731 484-049
732 485-019
733 485-078
734 488-044
735 491-097
736 506-009
737 165-014
738 316-018
739 487-045
740 292-025
741 312-041
742 282-081
743 481-079
744 501-017

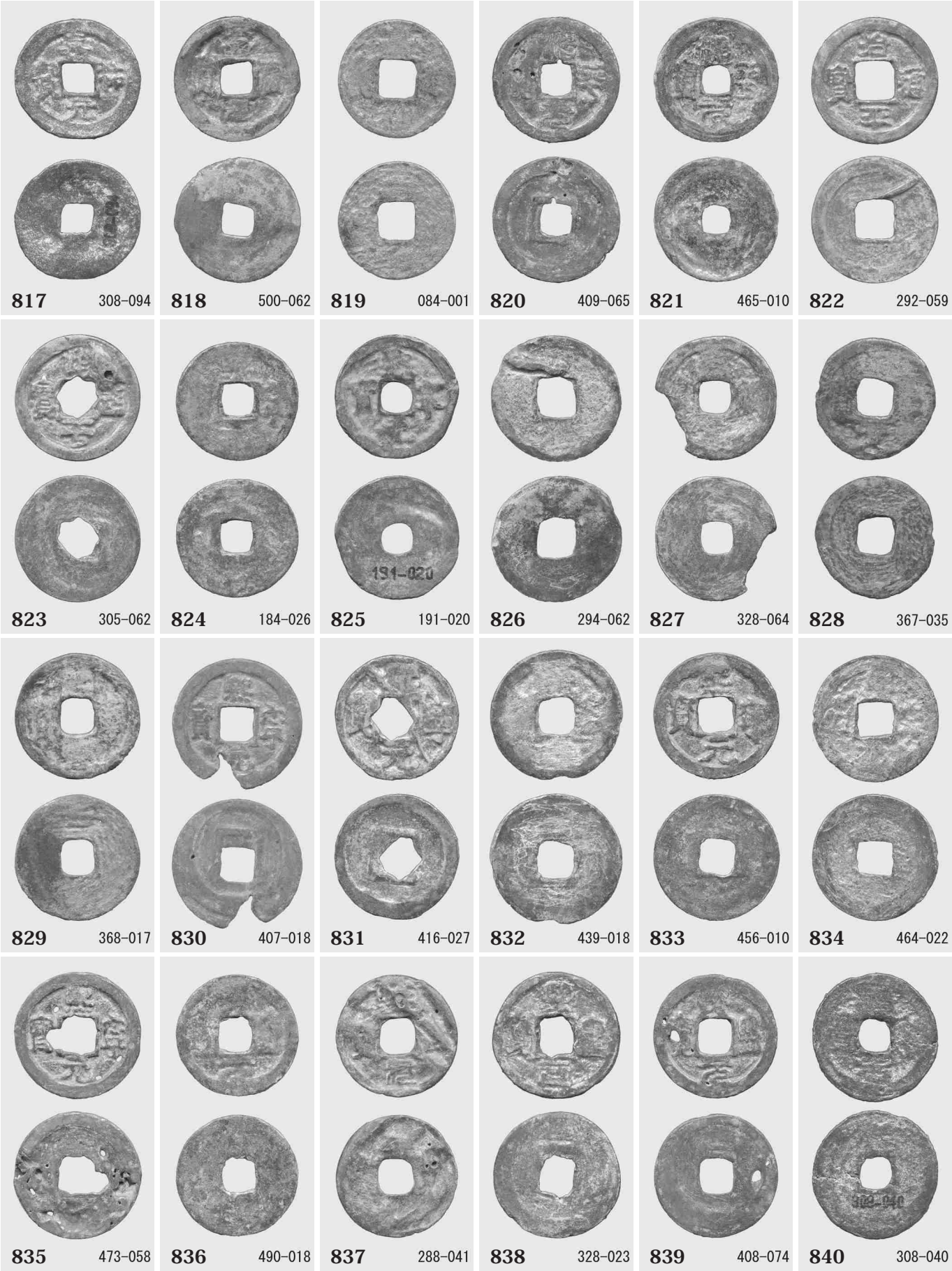


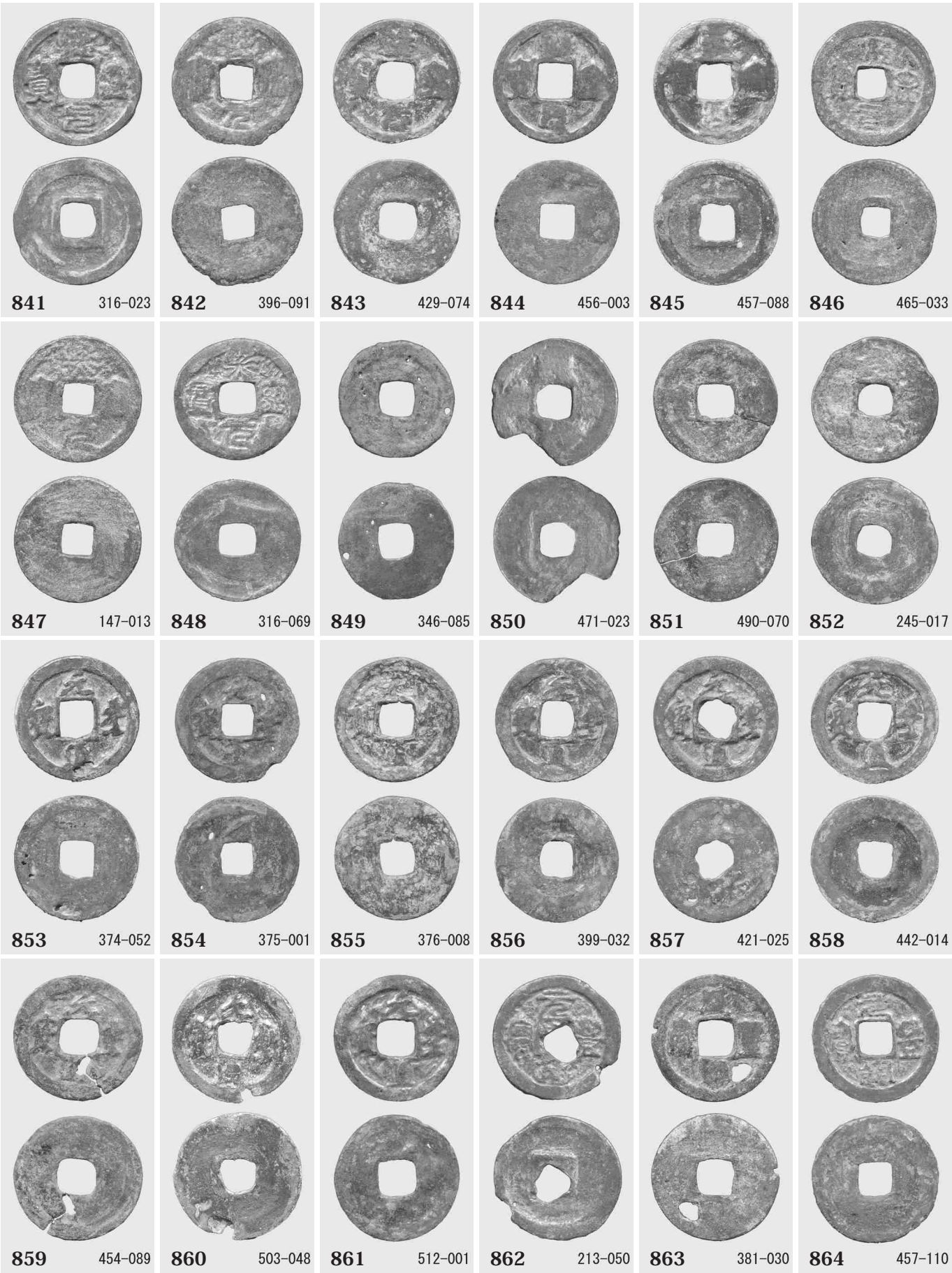
4SK-014 出土銭貨（32）


769 308-053
770 308-088
771 360-020
772 383-037
773 396-021
774 501-064
775 488-088
776 351-042
777 379-039
778 492-030
779 327-013
780 398-002
781 461-092
782 318-006
783 212-056
784 306-032
785 309-078
786 310-040
787 312-066
788 331-028
789 341-031
790 341-090
791 367-053
792 380-087

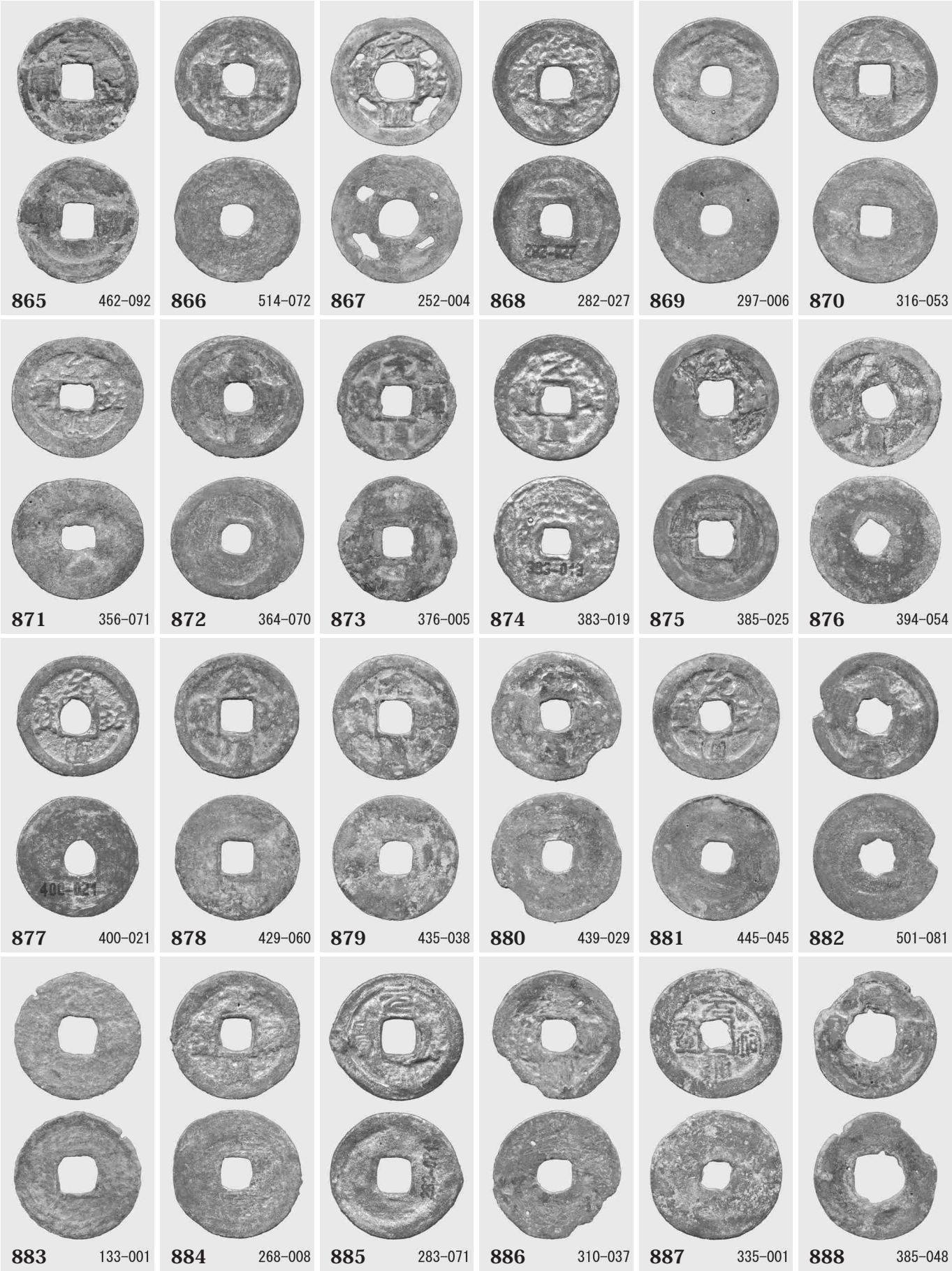


4SK-014 出土銭貨（34）

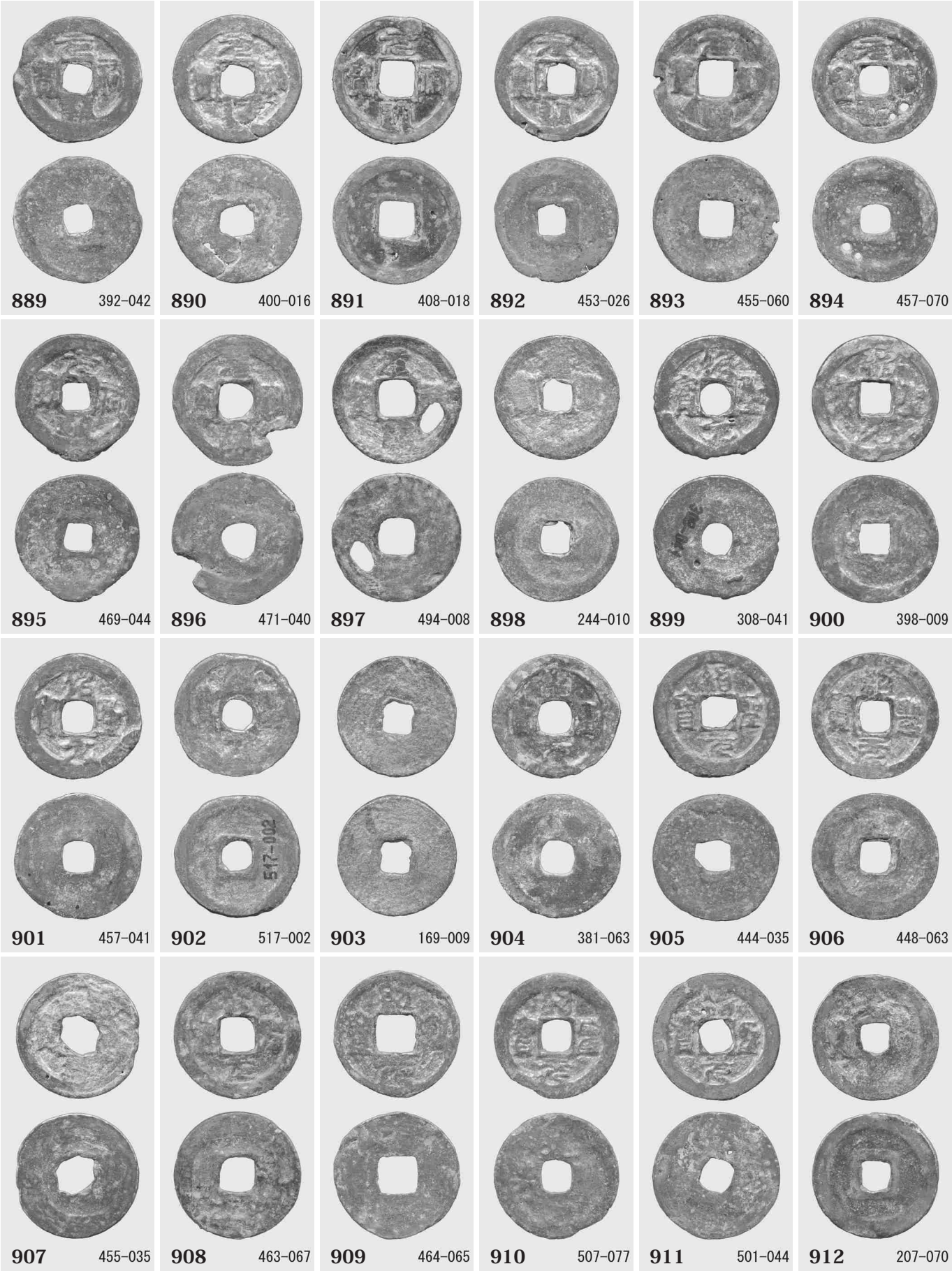

817 308-094
818 500-062
819 084-001
820 409-065
821 465-010
822 292-059
823 305-062
824 184-026
825 191-020
191-020
826 294-062
827 328-064
828 367-035
829 368-017
830 407-018
831 416-027
832 439-018
833 456-010
834 464-022
835 473-058
836 490-018
837 288-041
838 328-023
839 408-074
840 308-040



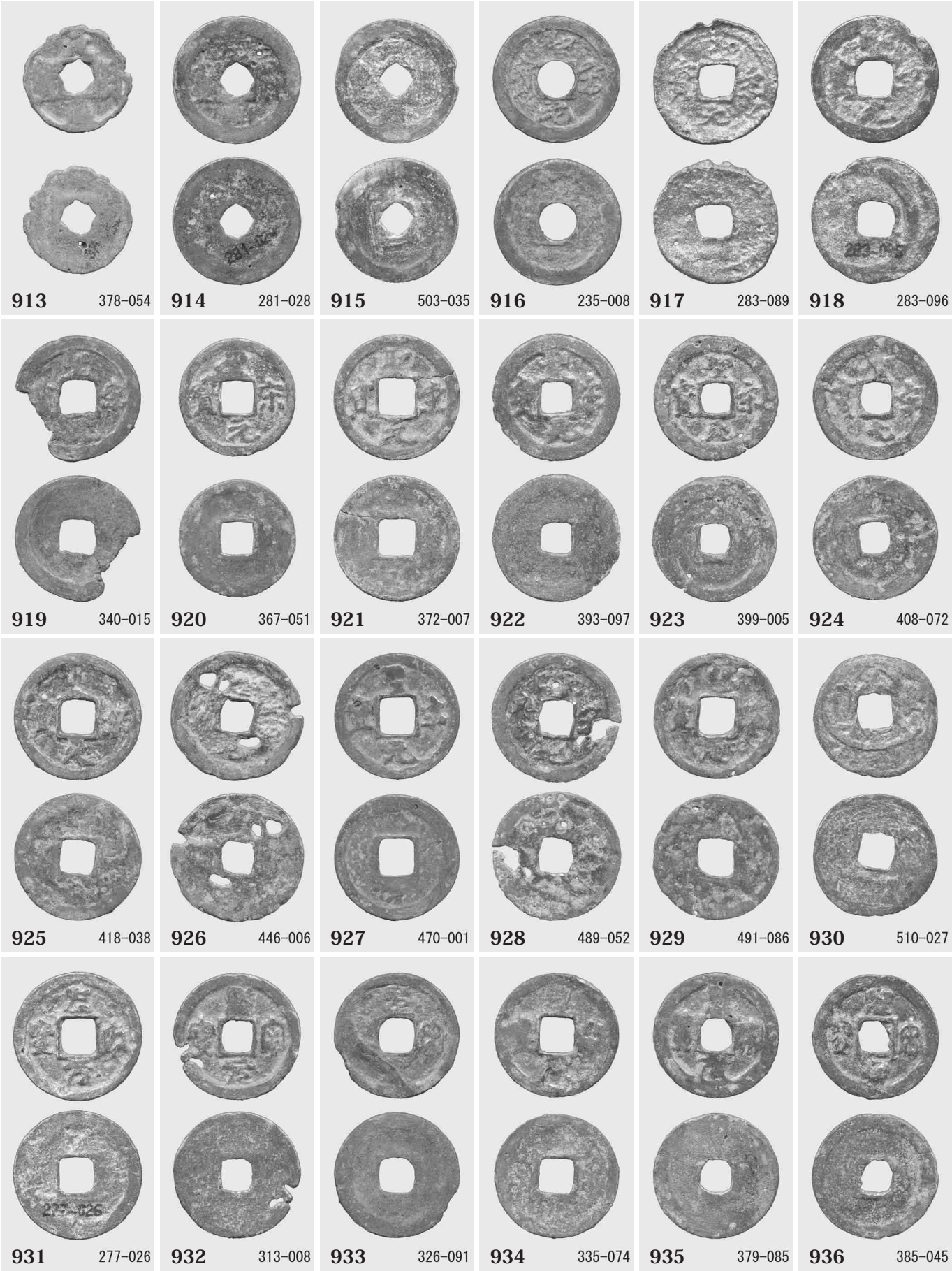
4SK-014 出土銭貨（36）

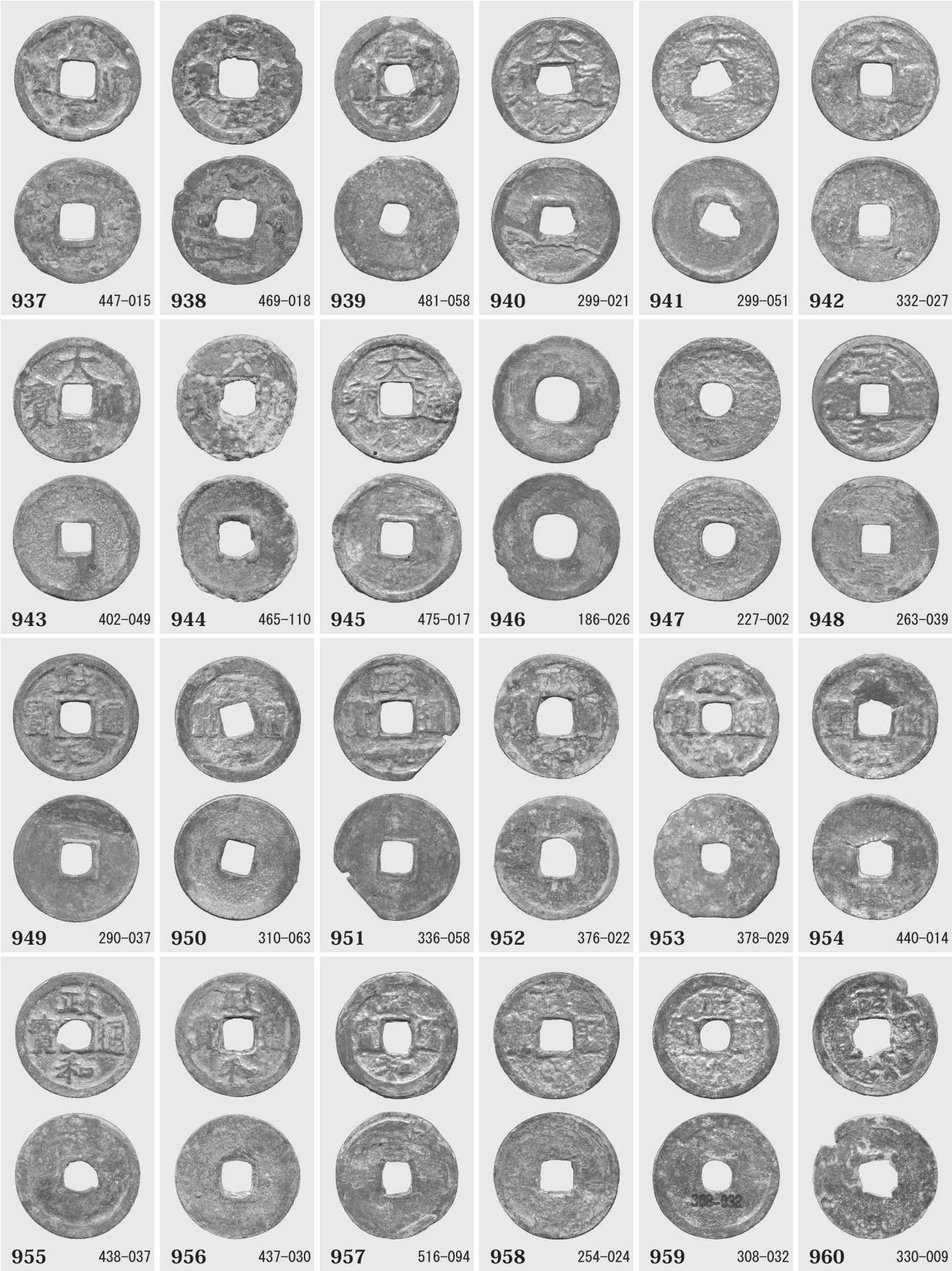


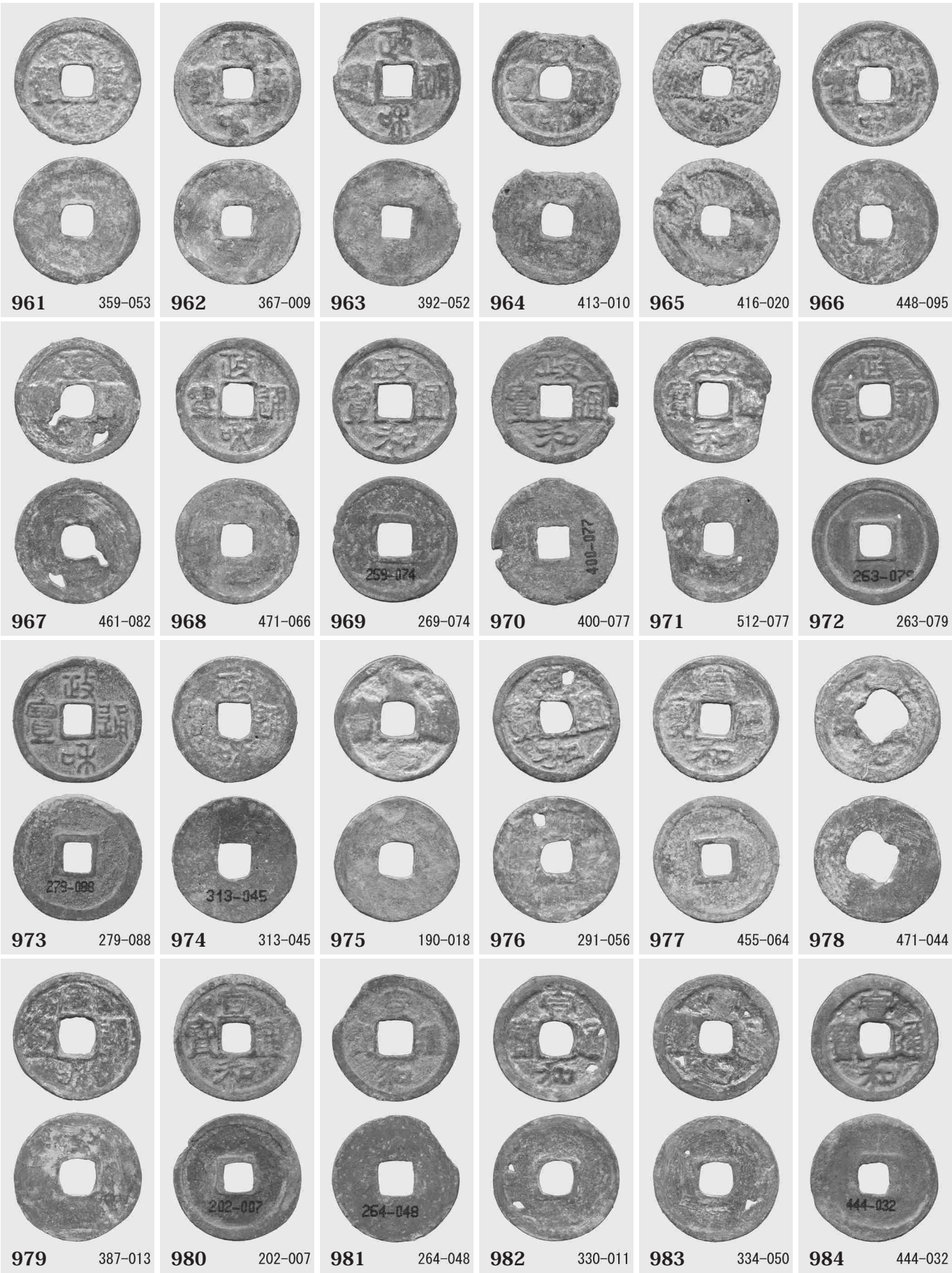
4SK-014 出土銭貨（37）

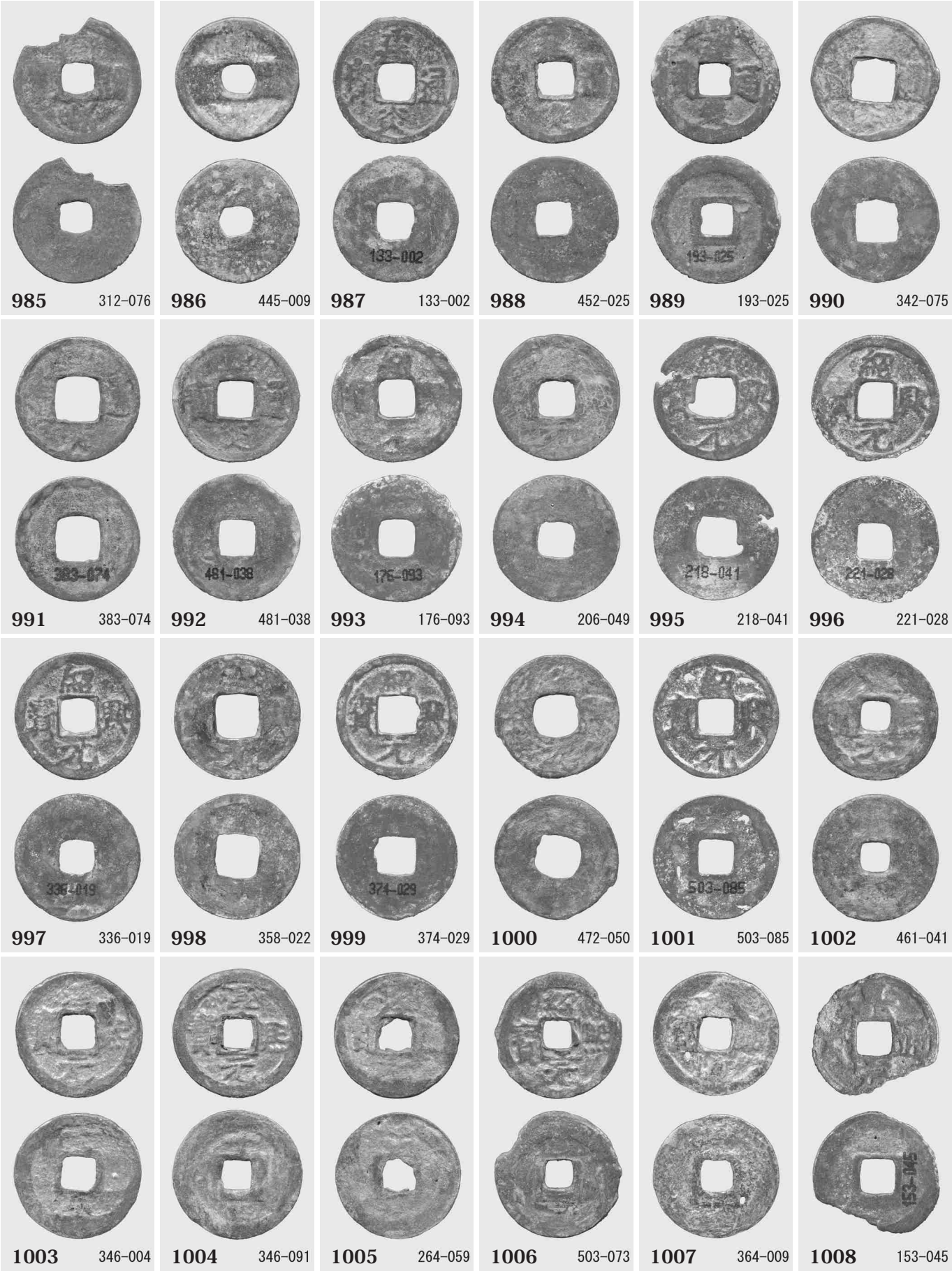


4SK-014 出土銭貨（38）

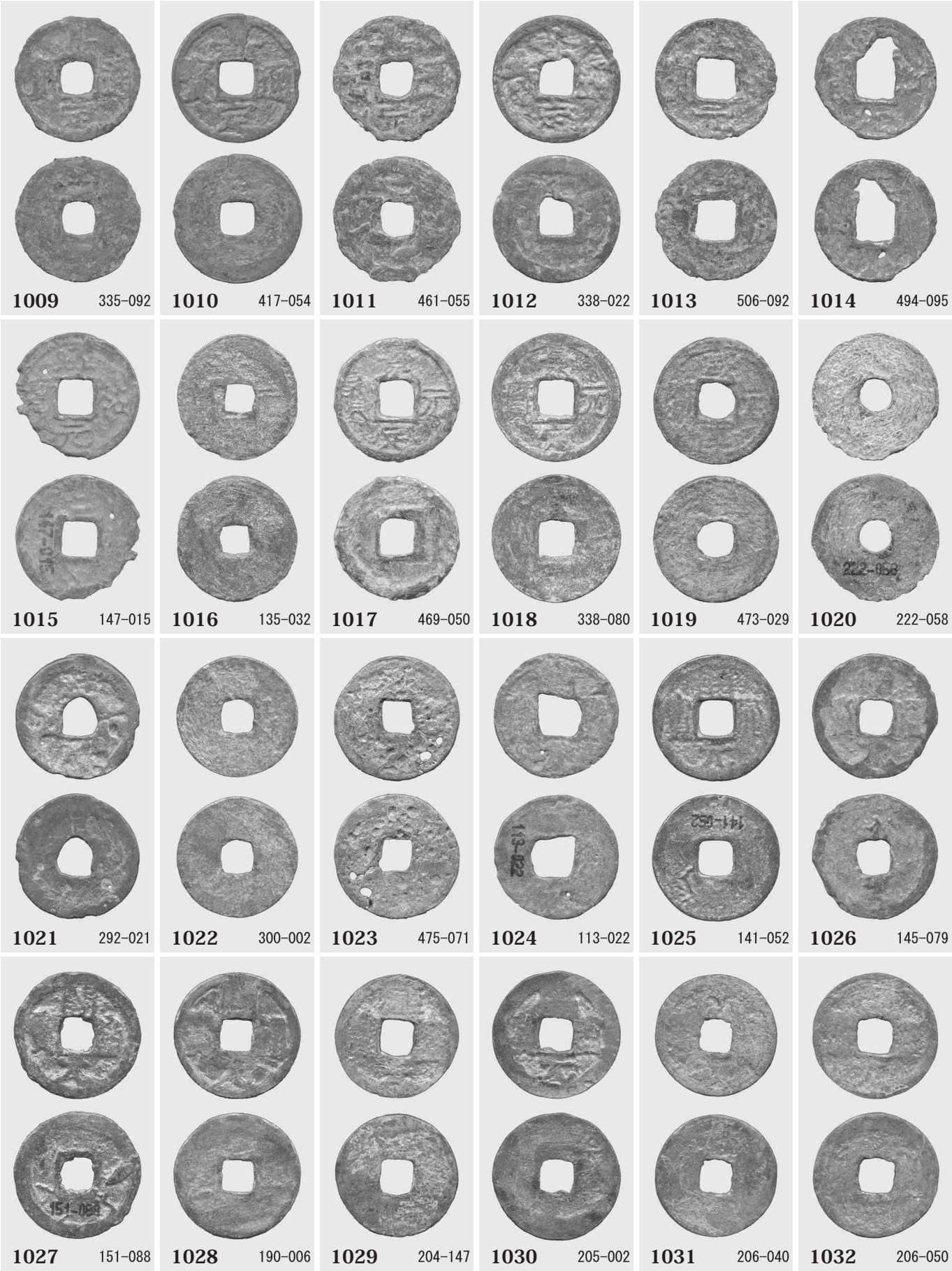

913 378-054
914 281-028
915 503-035
916 235-008
917 283-089
918 283-096
919 340-015
920 367-051
921 372-007
922 393-097
923 399-005
924 408-072
925 418-038
926 446-006
927 470-001
928 489-052
929 491-086
930 510-027
931 277-026
932 313-008
933 326-091
934 335-074
935 379-085
936 385-045

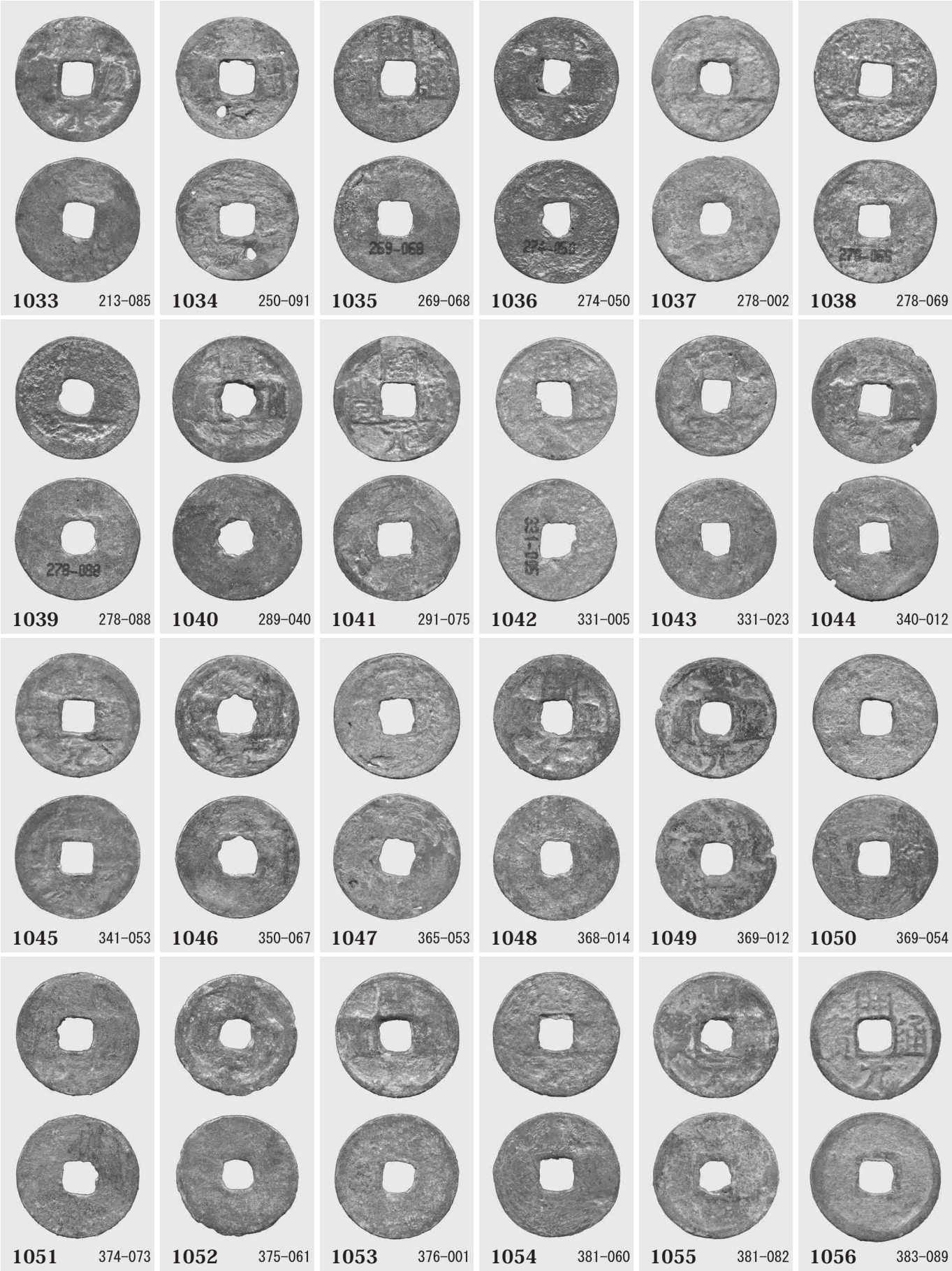

937 447-015
938 469-018
939 481-058
940 299-021
941 299-051
942 332-027
943 402-049
944 465-110
945 475-017
946 186-026
947 227-002
948 263-039
949 290-037
950 310-063
951 336-058
952 376-022
953 378-029
954 440-014
955 438-037
956 437-030
957 516-094
958 254-024
959 308-032
960 330-009


961 359-053
962 367-009
963 392-052
964 413-010
965 416-020
966 448-095
967 461-082
968 471-066
269-074
969 269-074
400-077
970 400-077
971 512-077
263-079
972 263-079
279-088
973 279-088
313-045
974 313-045
975 190-018
976 291-056
977 455-064
978 471-044
979 387-013
202-007
980 202-007
264-048
981 264-048
982 330-011
983 334-050
444-032
984 444-032

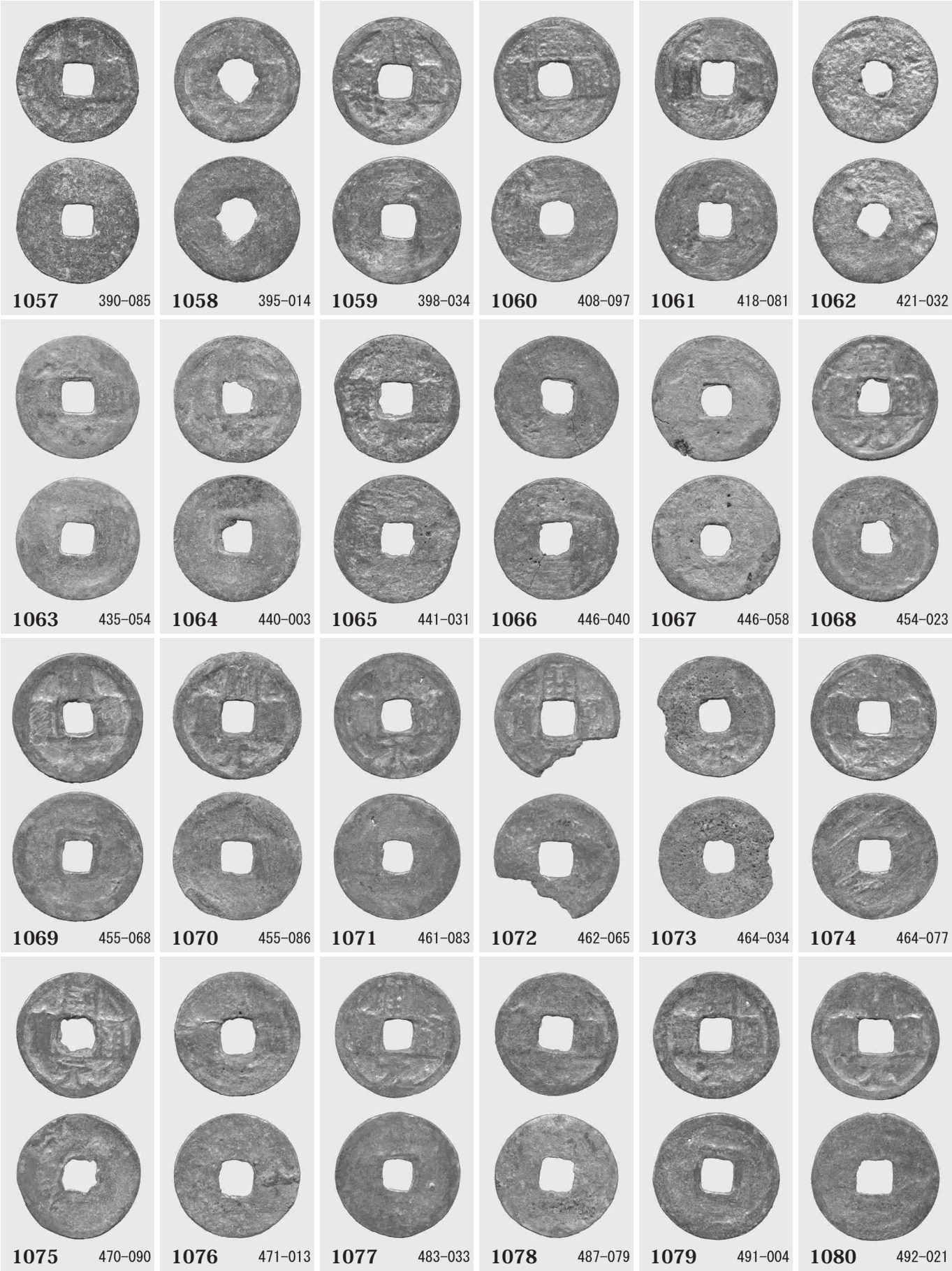


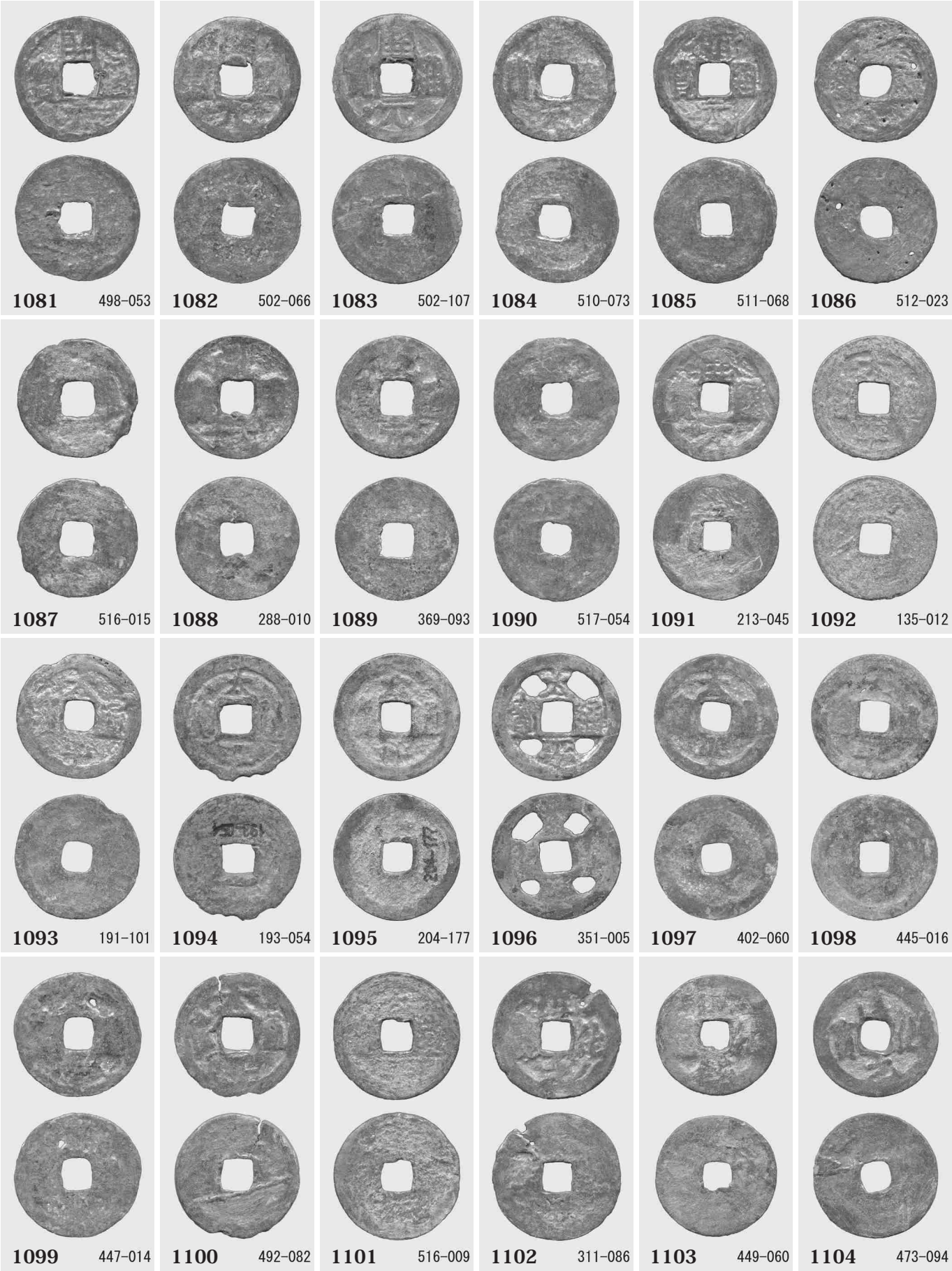
4SK-014 出土銭貨（42）

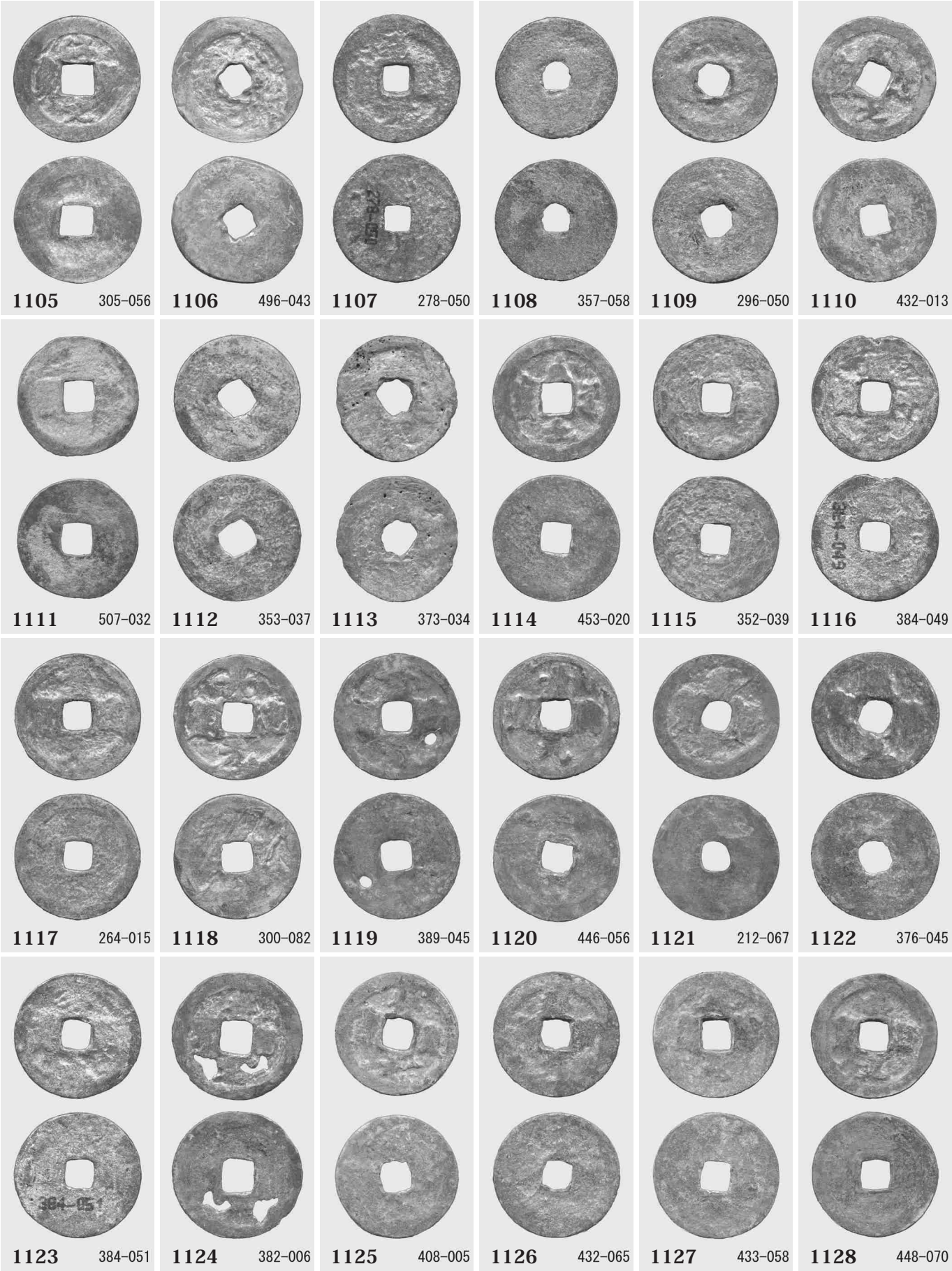

1009 335-092
1010 417-054
1011 461-055
1012 338-022
1013 506-092
1014 494-095
1015 147-015
1016 135-032
1017 469-050
1018 338-080
1019 473-029
1020 222-058
1021 292-021
1022 300-002
1023 475-071
1024 113-022
1025 141-052
1026 145-079
1027 151-088
1028 190-006
1029 204-147
1030 205-002
1031 206-040
1032 206-050

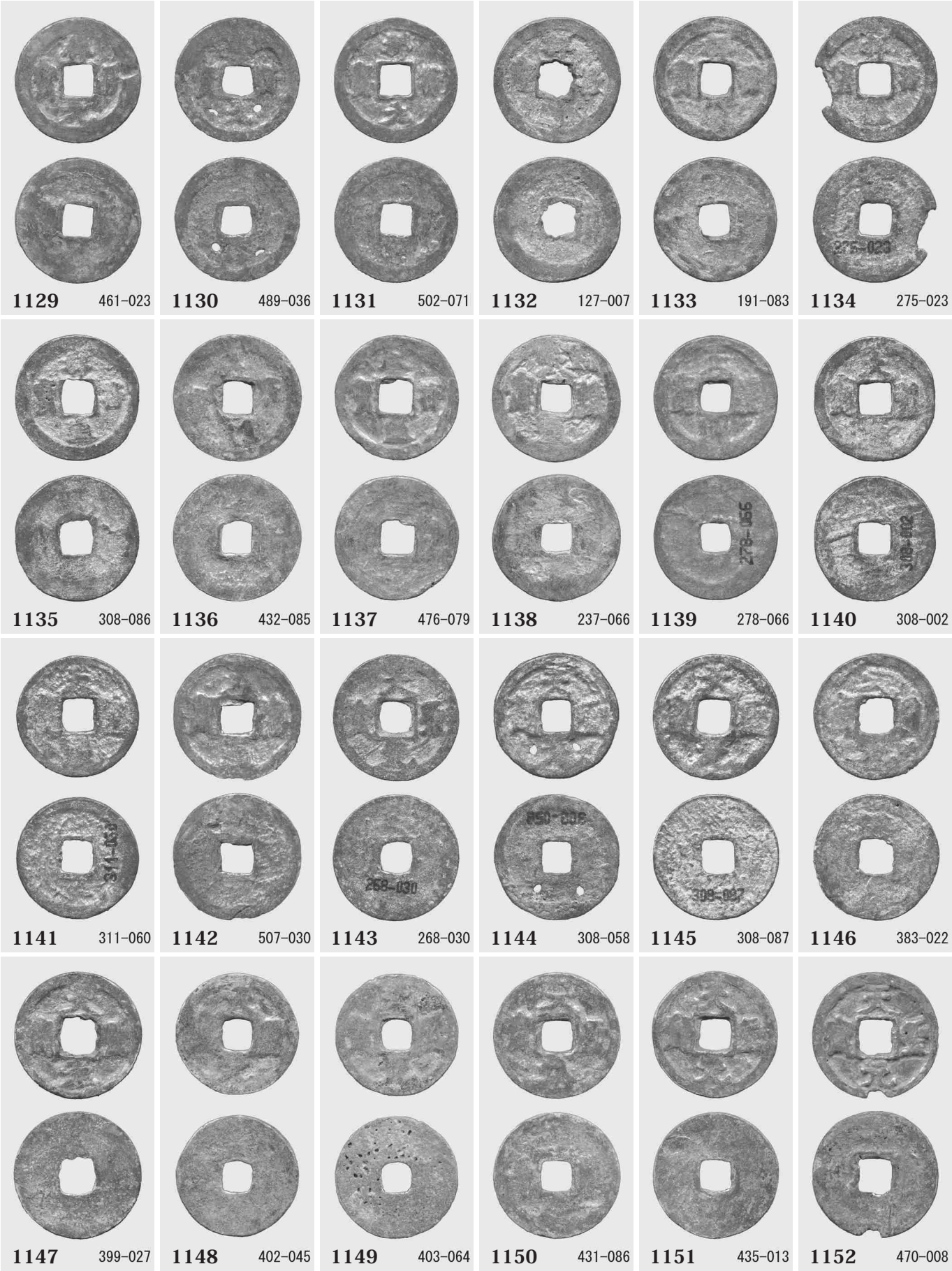


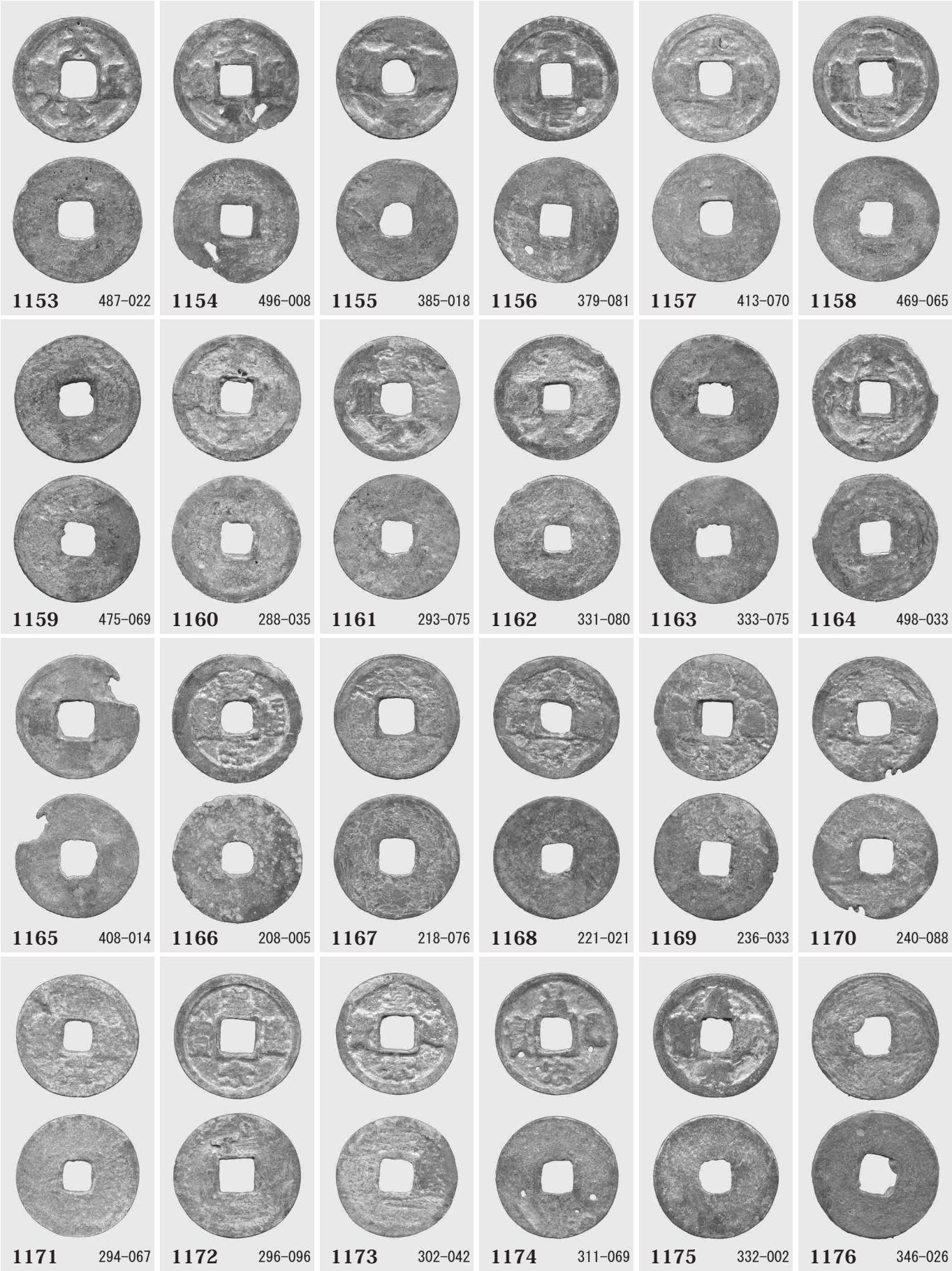
4SK-014 出土銭貨（44）

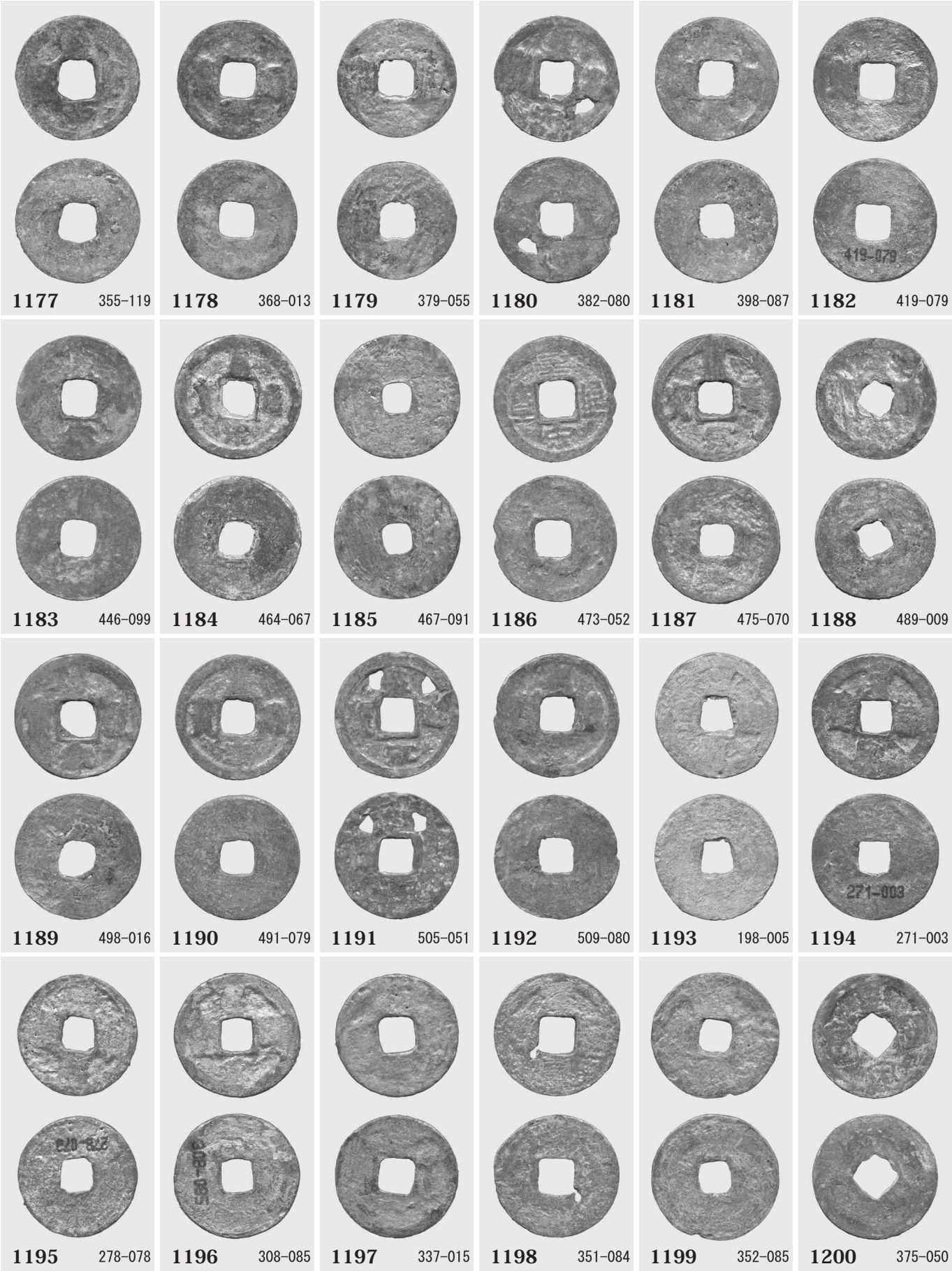

1057 390-085
1058 395-014
1059 398-034
1060 408-097
1061 418-081
1062 421-032
1063 435-054
1064 440-003
1065 441-031
1066 446-040
1067 446-058
1068 454-023
1069 455-068
1070 455-086
1071 461-083
1072 462-065
1073 464-034
1074 464-077
1075 470-090
1076 471-013
1077 483-033
1078 487-079
1079 491-004
1080 492-021


1081 498-053
1082 502-066
1083 502-107
1084 510-073
1085 511-068
1086 512-023
1087 516-015
1088 288-010
1089 369-093
1090 517-054
1091 213-045
1092 135-012
1093 191-101
1094 193-054
1095 204-177
1096 351-005
1097 402-060
1098 445-016
1099 447-014
1100 492-082
1101 516-009
1102 311-086
1103 449-060
1104 473-094


1105 305-056
1106 496-043
1107 278-050
1108 357-058
1109 296-050
1110 432-013
1111 507-032
1112 353-037
1113 373-034
1114 453-020
1115 352-039
1116 384-049
1117 264-015
1118 300-082
1119 389-045
1120 446-056
1121 212-067
1122 376-045
1123 384-051
1124 382-006
1125 408-005
1126 432-065
1127 433-058
1128 448-070


1129 461-023
1130 489-036
1131 502-071
1132 127-007
1133 191-083
1134 275-023
1135 308-086
1136 432-085
1137 476-079
1138 237-066
1139 278-066
1140 308-002
1141 311-060
1142 507-030
1143 268-030
1144 308-058
1145 308-087
1146 383-022
1147 399-027
1148 402-045
1149 403-064
1150 431-086
1151 435-013
1152 470-008


1153 487-022
1154 496-008
1155 385-018
1156 379-081
1157 413-070
1158 469-065
1159 475-069
1160 288-035
1161 293-075
1162 331-080
1163 333-075
1164 498-033
1165 408-014
1166 208-005
1167 218-076
1168 221-021
1169 236-033
1170 240-088
1171 294-067
1172 296-096
1173 302-042
1174 311-069
1175 332-002
1176 346-026

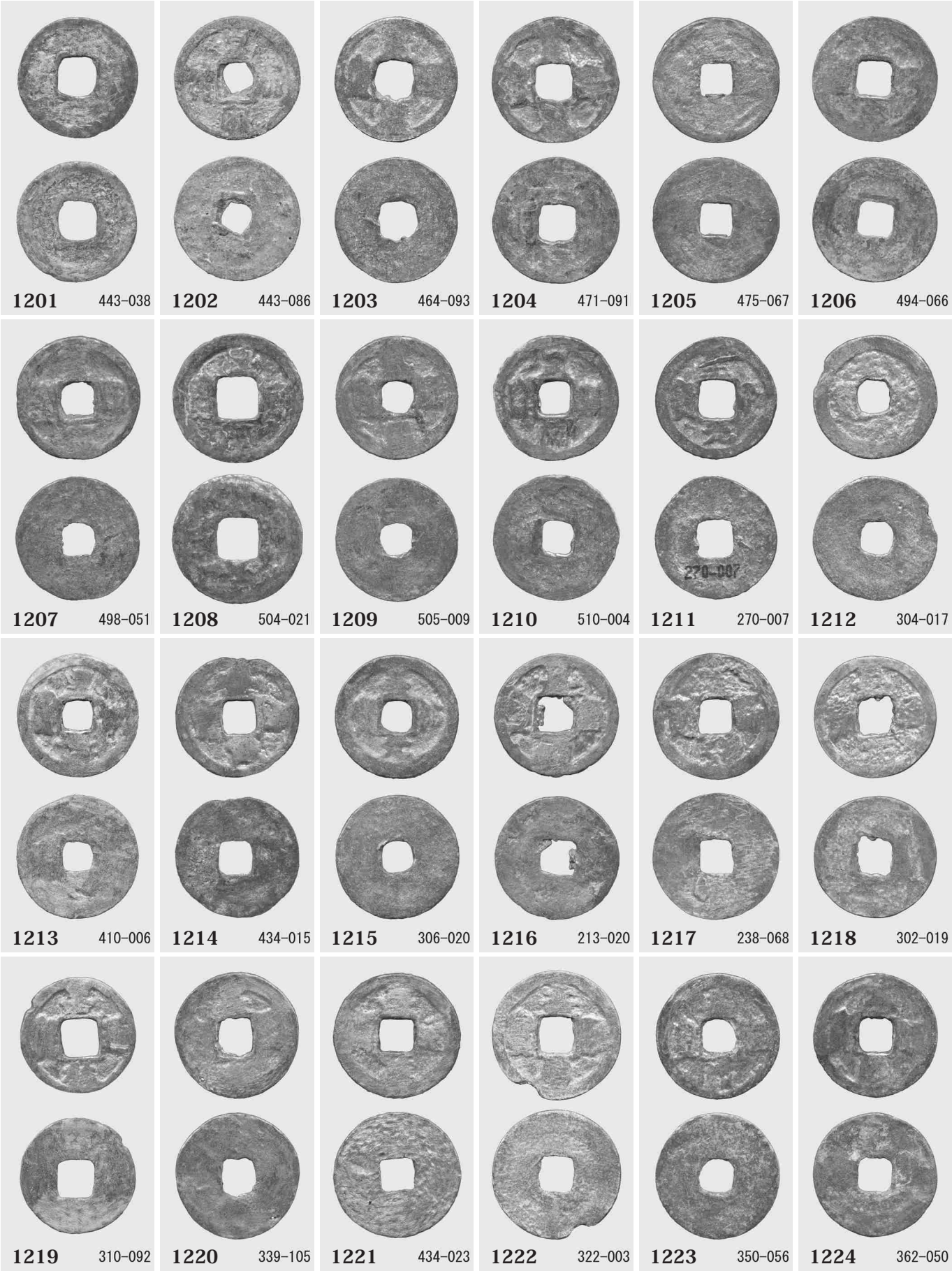


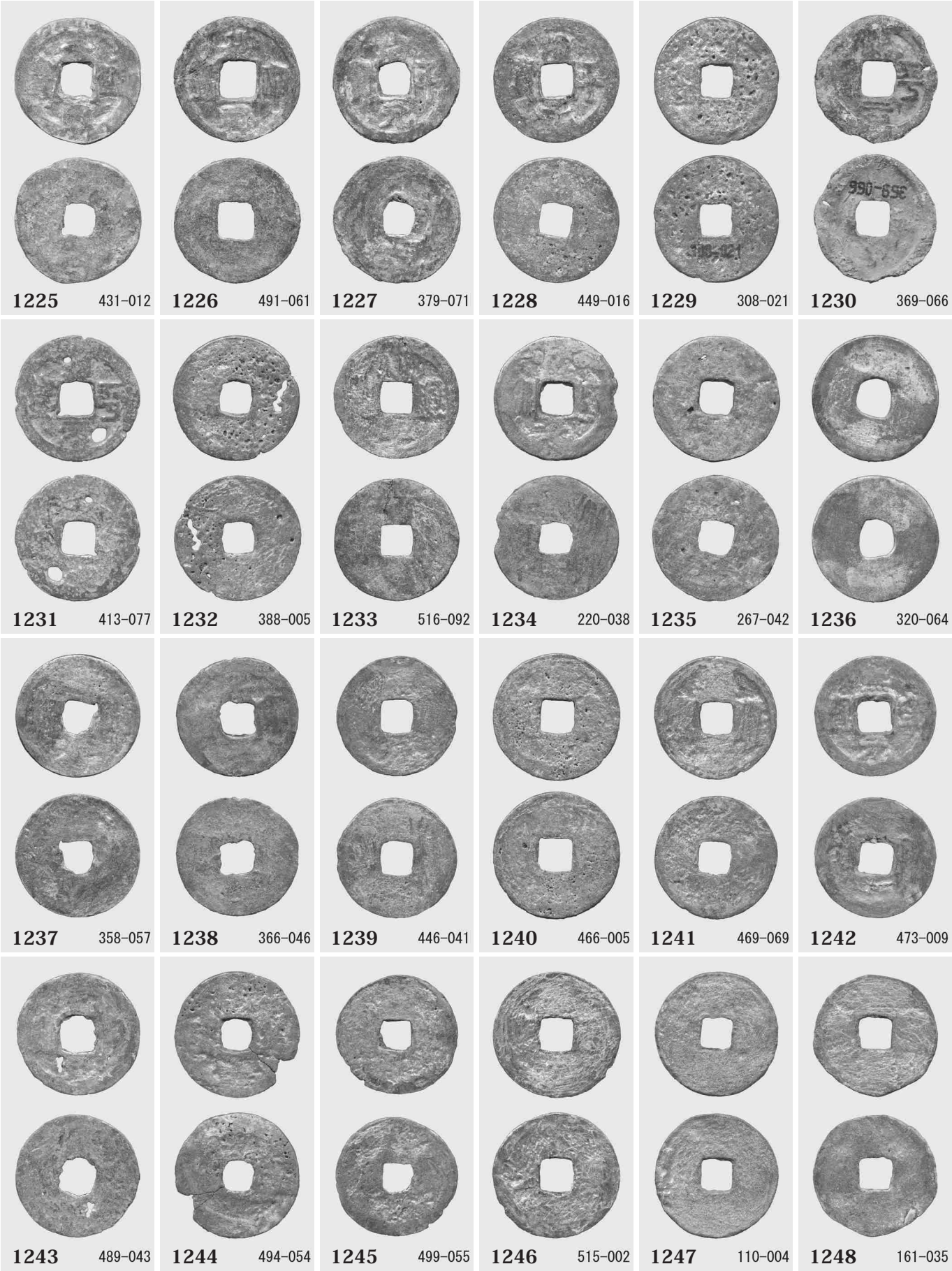
1177 355-119　1178 368-013　1179 379-055　1180 382-080　1181 398-087　1182 419-079

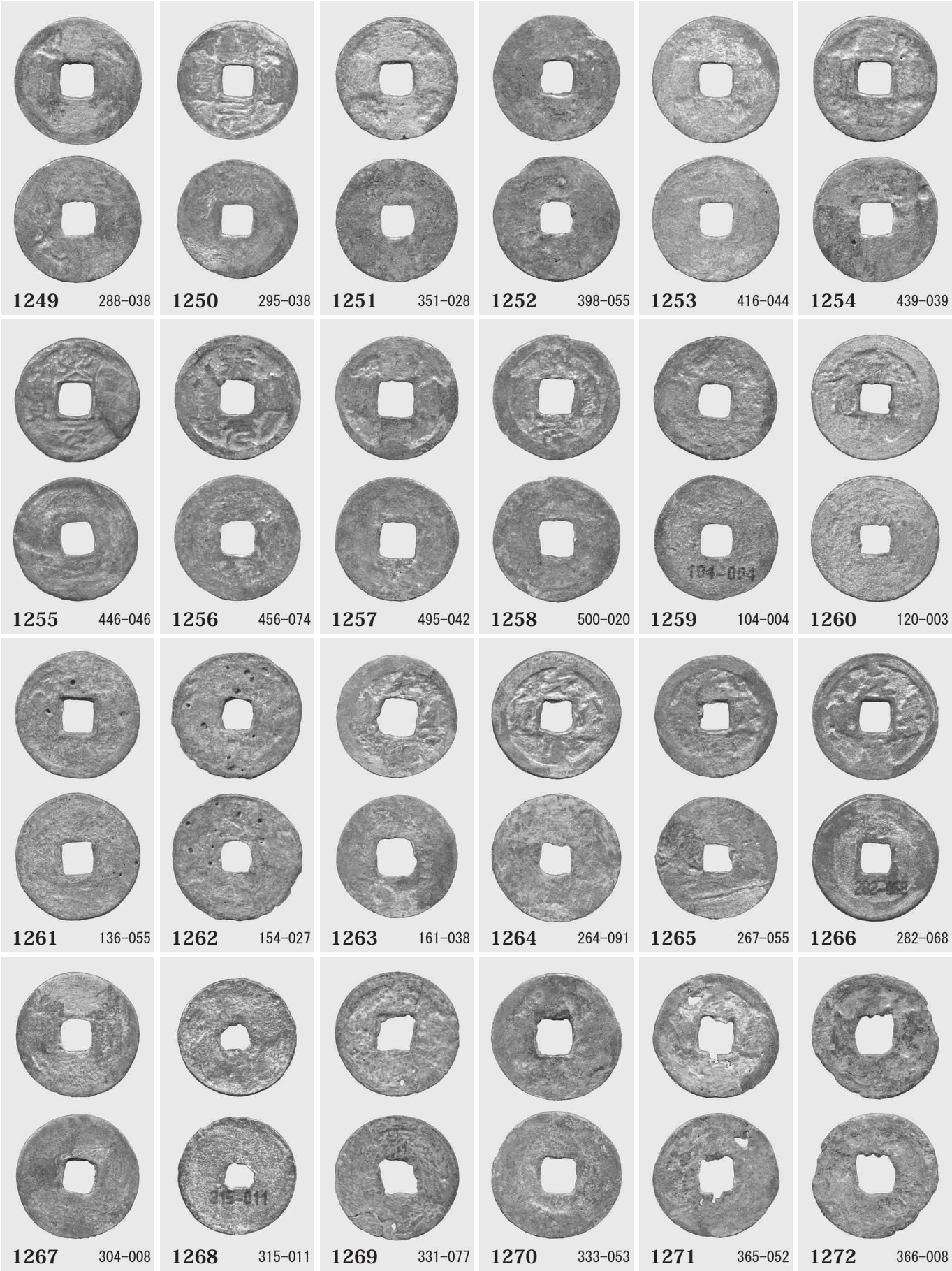
1183 446-099　1184 464-067　1185 467-091　1186 473-052　1187 475-070　1188 489-009

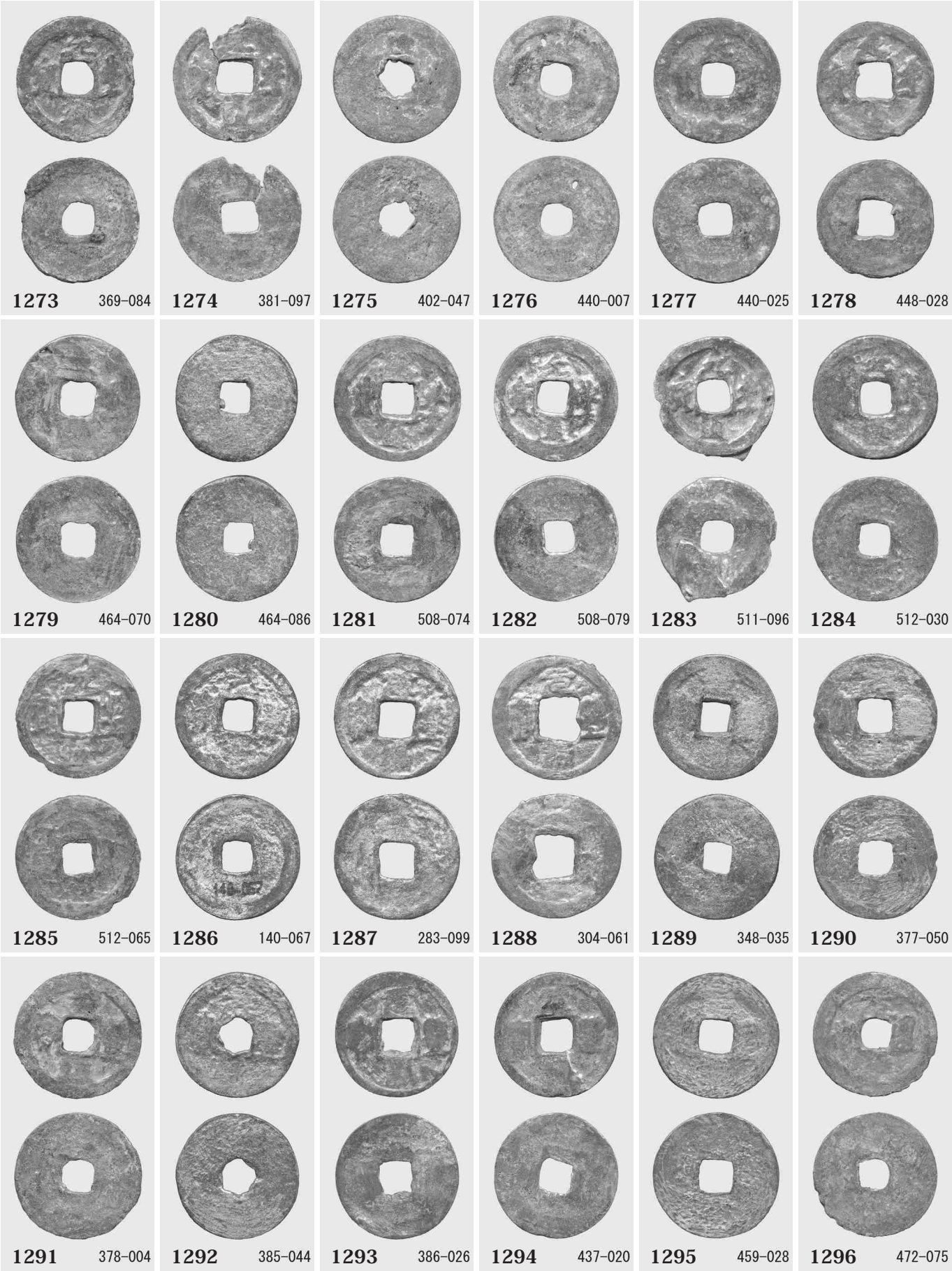
1189 498-016　1190 491-079　1191 505-051　1192 509-080　1193 198-005　1194 271-003

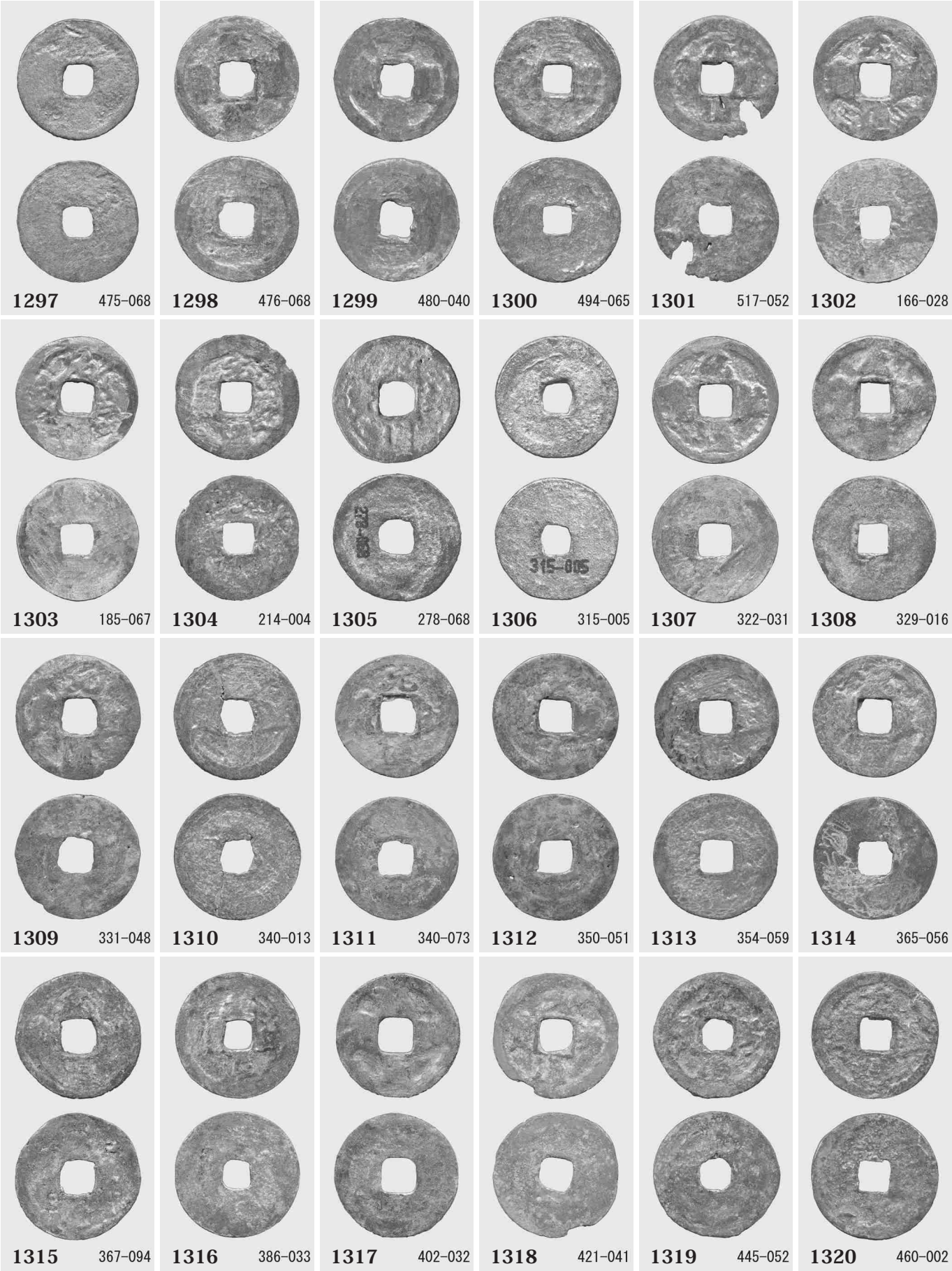
1195 278-078　1196 308-085　1197 337-015　1198 351-084　1199 352-085　1200 375-050

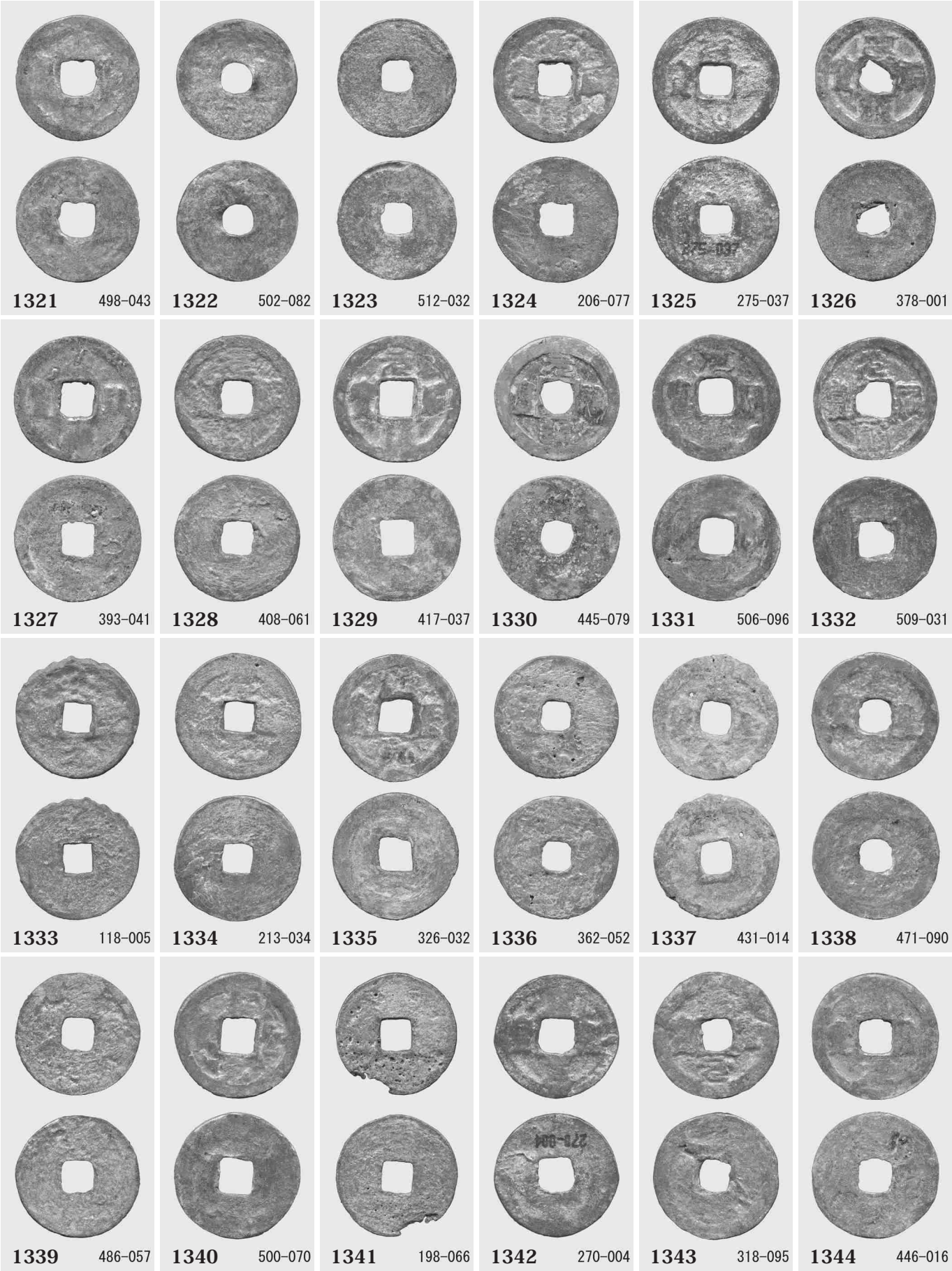

1201 443-038
1202 443-086
1203 464-093
1204 471-091
1205 475-067
1206 494-066
1207 498-051
1208 504-021
1209 505-009
1210 510-004
1211 270-007
270-007
1212 304-017
1213 410-006
1214 434-015
1215 306-020
1216 213-020
1217 238-068
1218 302-019
1219 310-092
1220 339-105
1221 434-023
1222 322-003
1223 350-056
1224 362-050

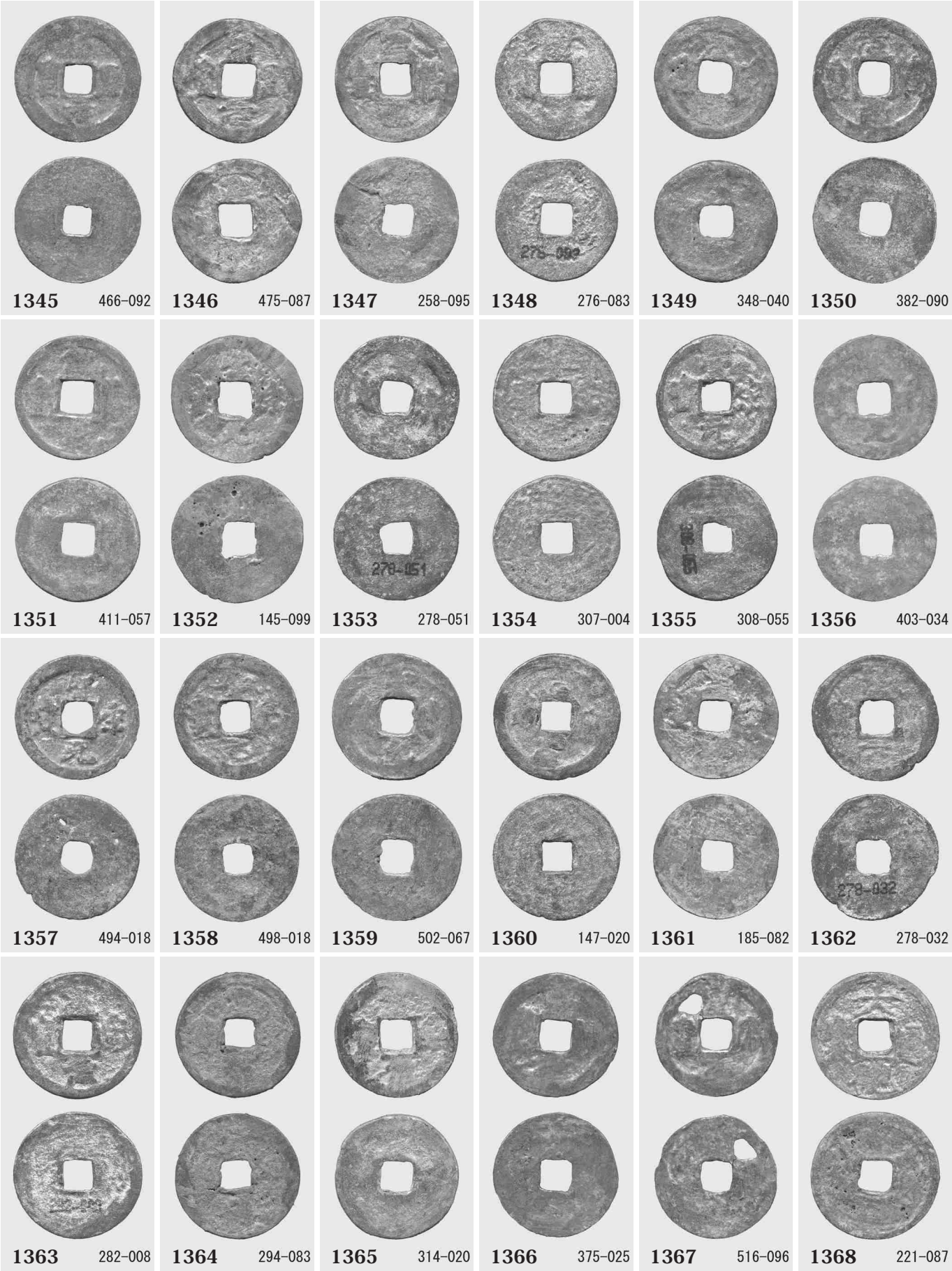

1225 431-012
1226 491-061
1227 379-071
1228 449-016
1229 308-021
1230 369-066
1231 413-077
1232 388-005
1233 516-092
1234 220-038
1235 267-042
1236 320-064
1237 358-057
1238 366-046
1239 446-041
1240 466-005
1241 469-069
1242 473-009
1243 489-043
1244 494-054
1245 499-055
1246 515-002
1247 110-004
1248 161-035

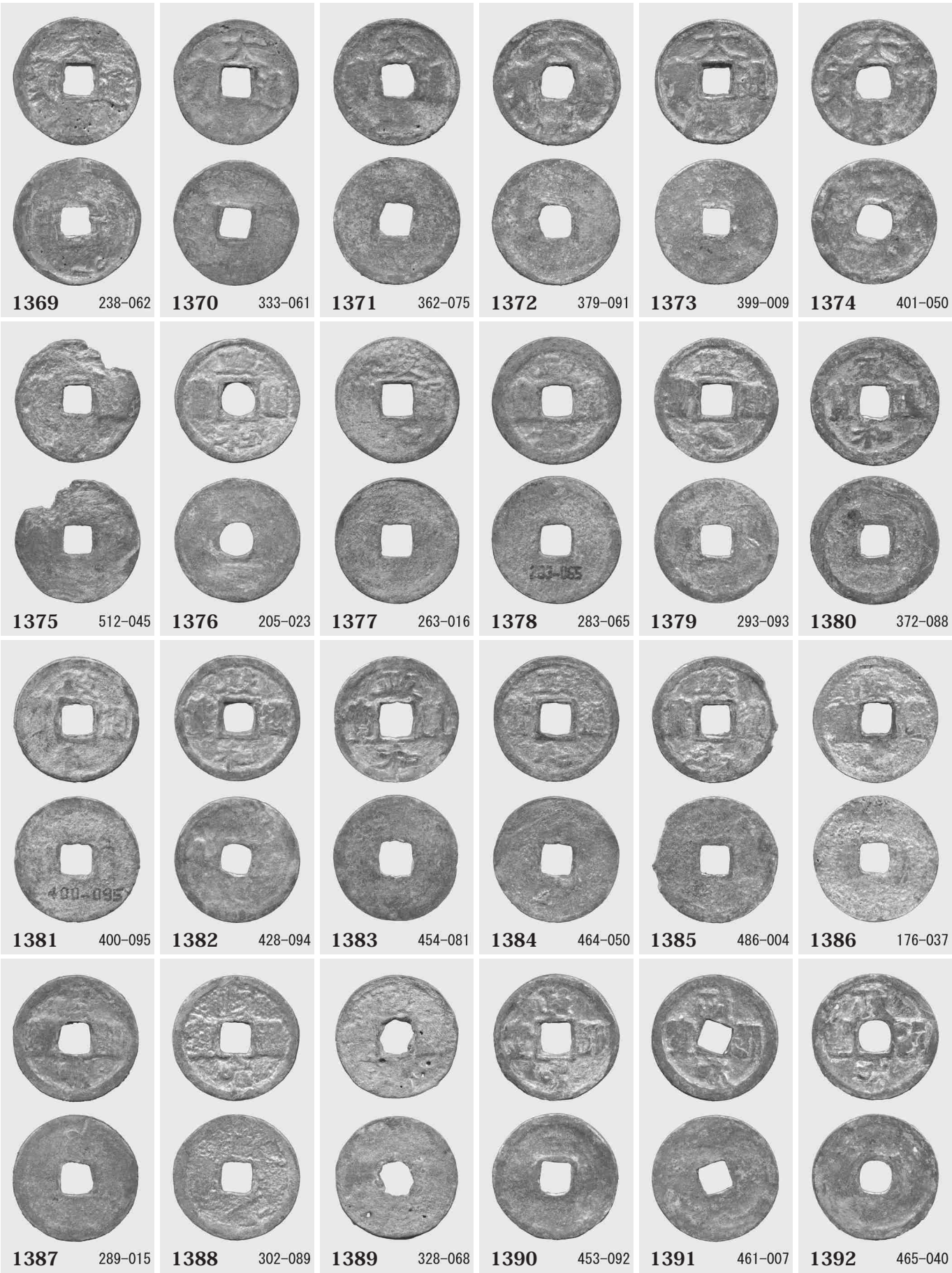

1249 288-038
1250 295-038
1251 351-028
1252 398-055
1253 416-044
1254 439-039
1255 446-046
1256 456-074
1257 495-042
1258 500-020
1259 104-004
1260 120-003
1261 136-055
1262 154-027
1263 161-038
1264 264-091
1265 267-055
1266 282-068
1267 304-008
1268 315-011
1269 331-077
1270 333-053
1271 365-052
1272 366-008

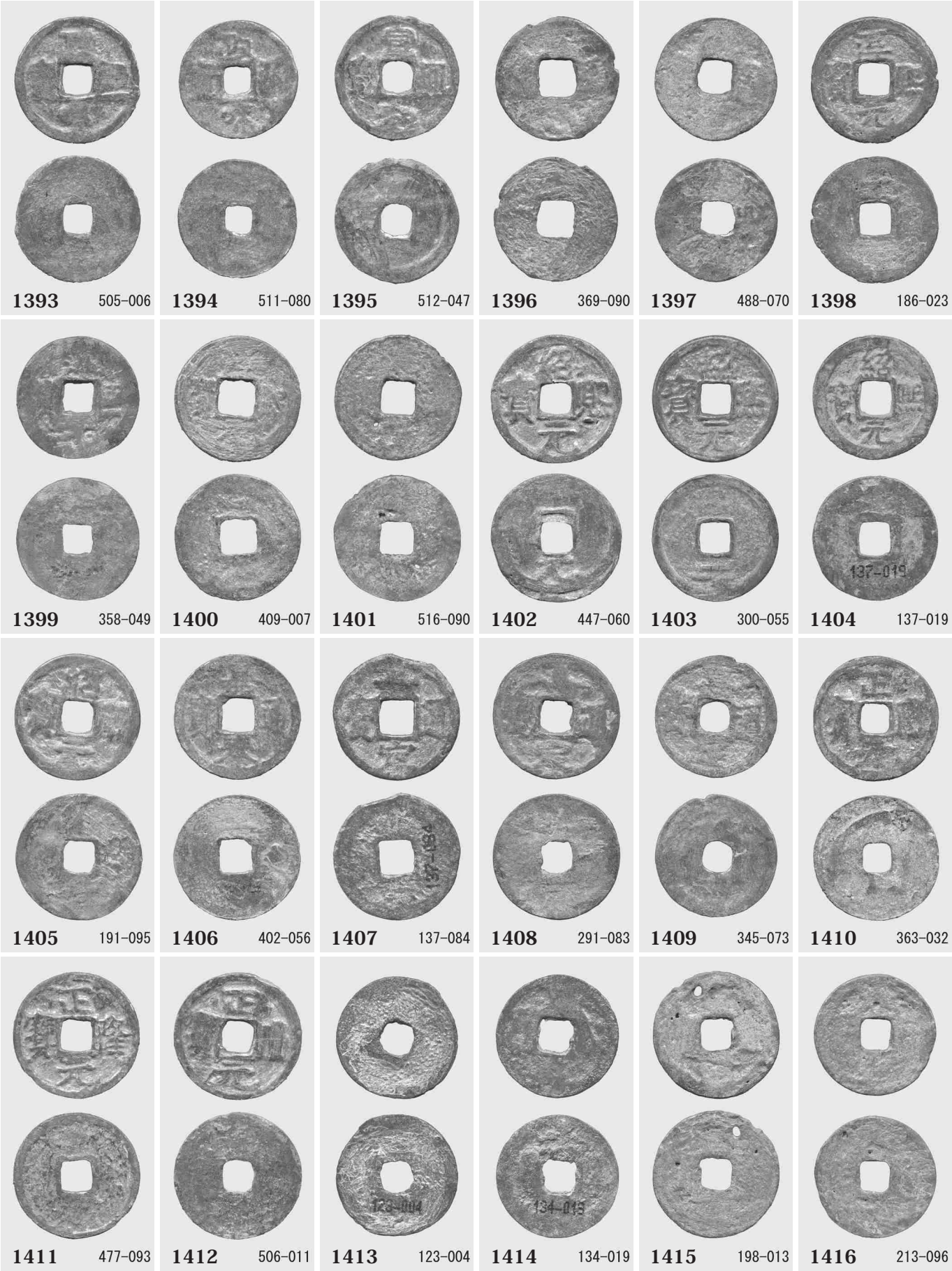

1273 369-084
1274 381-097
1275 402-047
1276 440-007
1277 440-025
1278 448-028
1279 464-070
1280 464-086
1281 508-074
1282 508-079
1283 511-096
1284 512-030
1285 512-065
1286 140-067
1287 283-099
1288 304-061
1289 348-035
1290 377-050
1291 378-004
1292 385-044
1293 386-026
1294 437-020
1295 459-028
1296 472-075

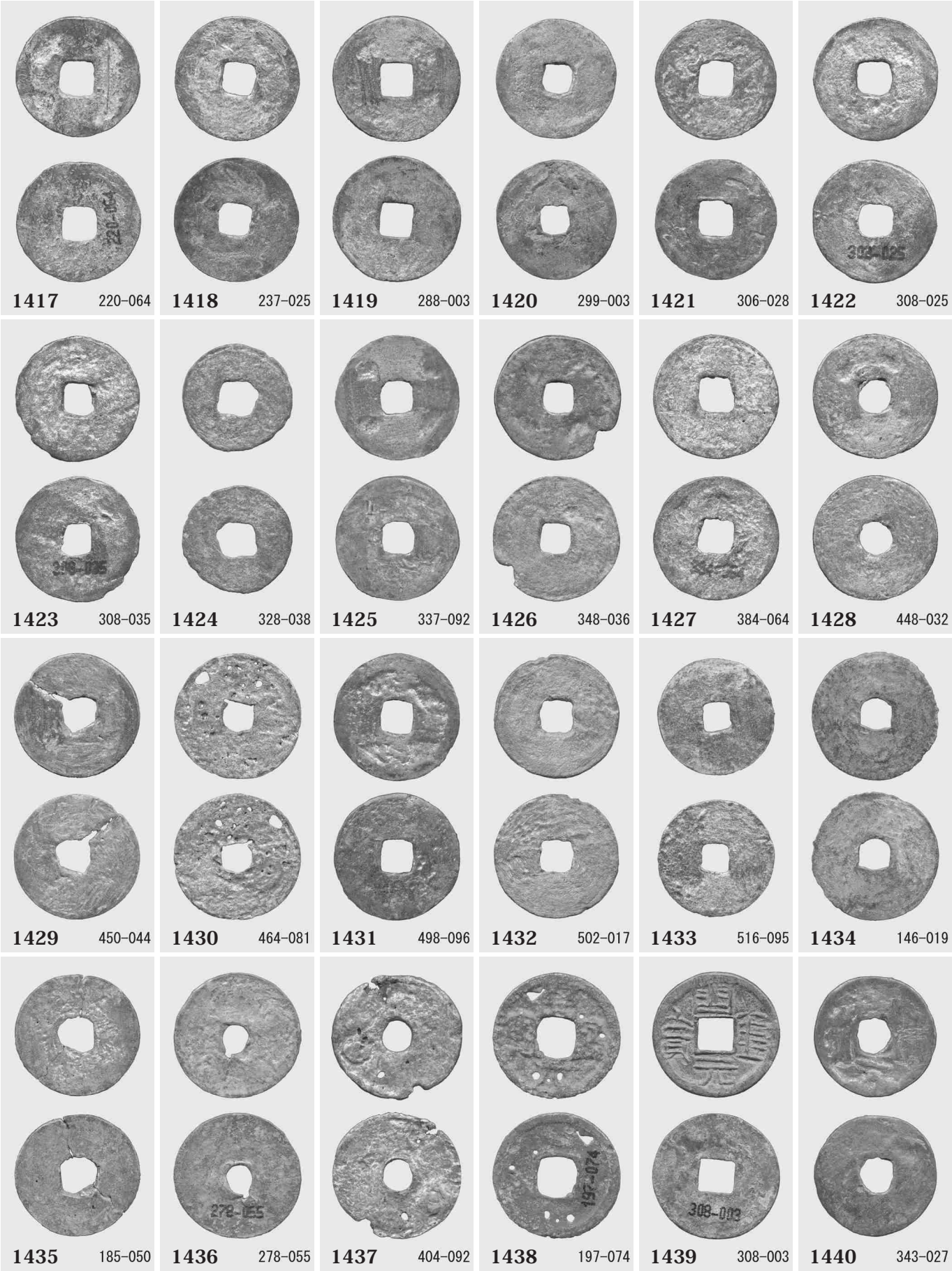

1297 475-068
1298 476-068
1299 480-040
1300 494-065
1301 517-052
1302 166-028
1303 185-067
1304 214-004
1305 278-068
1306 315-005
1307 322-031
1308 329-016
1309 331-048
1310 340-013
1311 340-073
1312 350-051
1313 354-059
1314 365-056
1315 367-094
1316 386-033
1317 402-032
1318 421-041
1319 445-052
1320 460-002


1321 498-043
1322 502-082
1323 512-032
1324 206-077
1325 275-037
1326 378-001
1327 393-041
1328 408-061
1329 417-037
1330 445-079
1331 506-096
1332 509-031
1333 118-005
1334 213-034
1335 326-032
1336 362-052
1337 431-014
1338 471-090
1339 486-057
1340 500-070
1341 198-066
1342 270-004
1343 318-095
1344 446-016

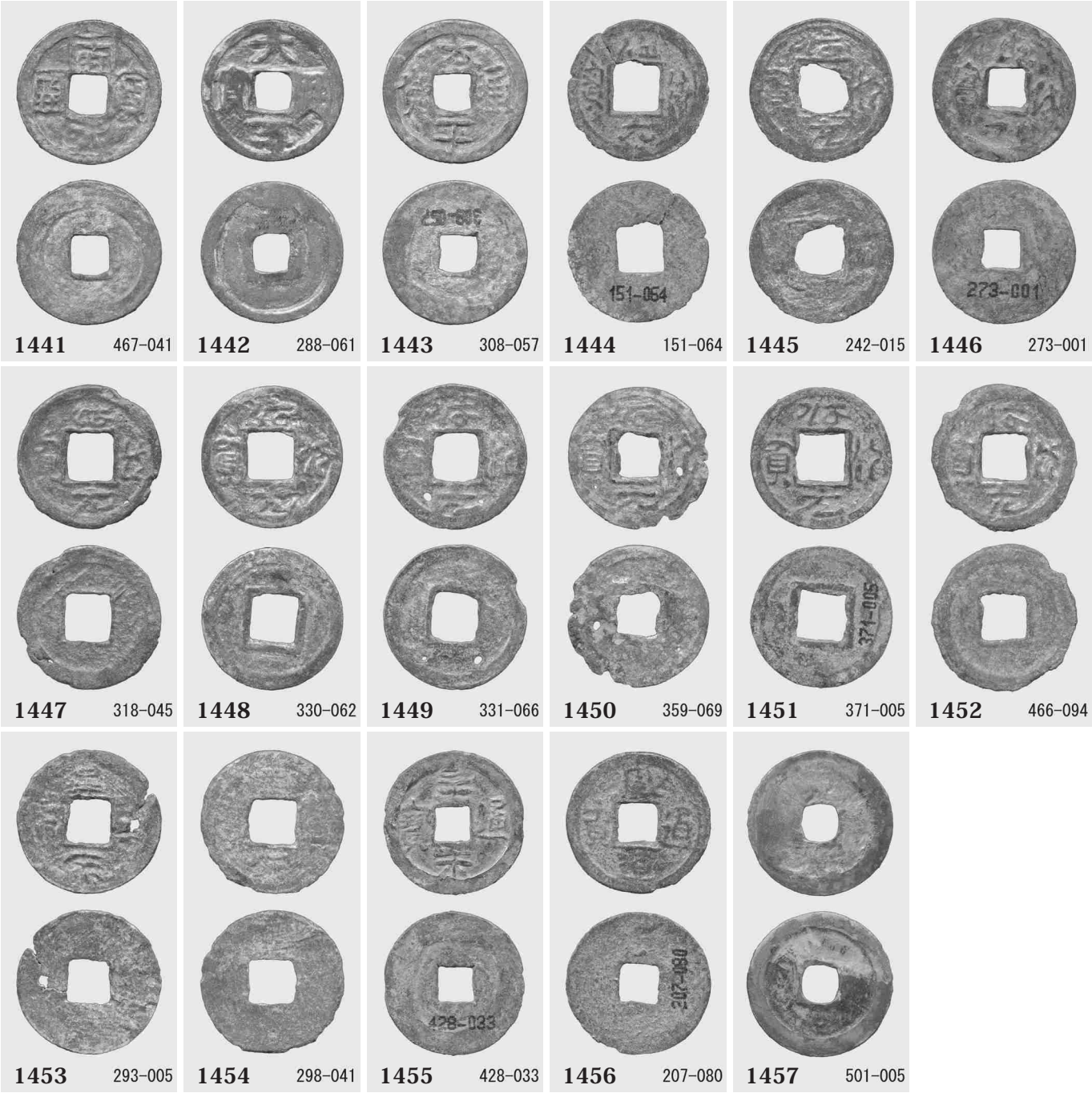

1345 466-092
1346 475-087
1347 258-095
1348 276-083
1349 348-040
1350 382-090
1351 411-057
1352 145-099
1353 278-051
1354 307-004
1355 308-055
1356 403-034
1357 494-018
1358 498-018
1359 502-067
1360 147-020
1361 185-082
1362 278-032
1363 282-008
1364 294-083
1365 314-020
1366 375-025
1367 516-096
1368 221-087


1369 238-062
1370 333-061
1371 362-075
1372 379-091
1373 399-009
1374 401-050
1375 512-045
1376 205-023
1377 263-016
1378 283-065
1379 293-093
1380 372-088
1381 400-095
1382 428-094
1383 454-081
1384 464-050
1385 486-004
1386 176-037
1387 289-015
1388 302-089
1389 328-068
1390 453-092
1391 461-007
1392 465-040


1393 505-006
1394 511-080
1395 512-047
1396 369-090
1397 488-070
1398 186-023
1399 358-049
1400 409-007
1401 516-090
1402 447-060
1403 300-055
1404 137-019
1405 191-095
1406 402-056
1407 137-084
1408 291-083
1409 345-073
1410 363-032
1411 477-093
1412 506-011
1413 123-004
1414 134-019
1415 198-013
1416 213-096



4SK-014 出土銭貨（60）



4SK-014 出土銭貨（61）

SK065-1

4SK092-11

4SK092-31

SK065-4

4SK092-12

SK038-1

SK065-6

4SK092-13

4SK005-1

SK116-2

4SK092-15

4SK047-1

4SK039-1

4SK092-26

4SK047-2

4SK092-5

4SK092-27

4SK069-4

4SK092-8

4SK092-28

4SK069-5

4SK092-9

4SK092-29

4SK053-2

4SK092-10

4SK092-30

SK072-1

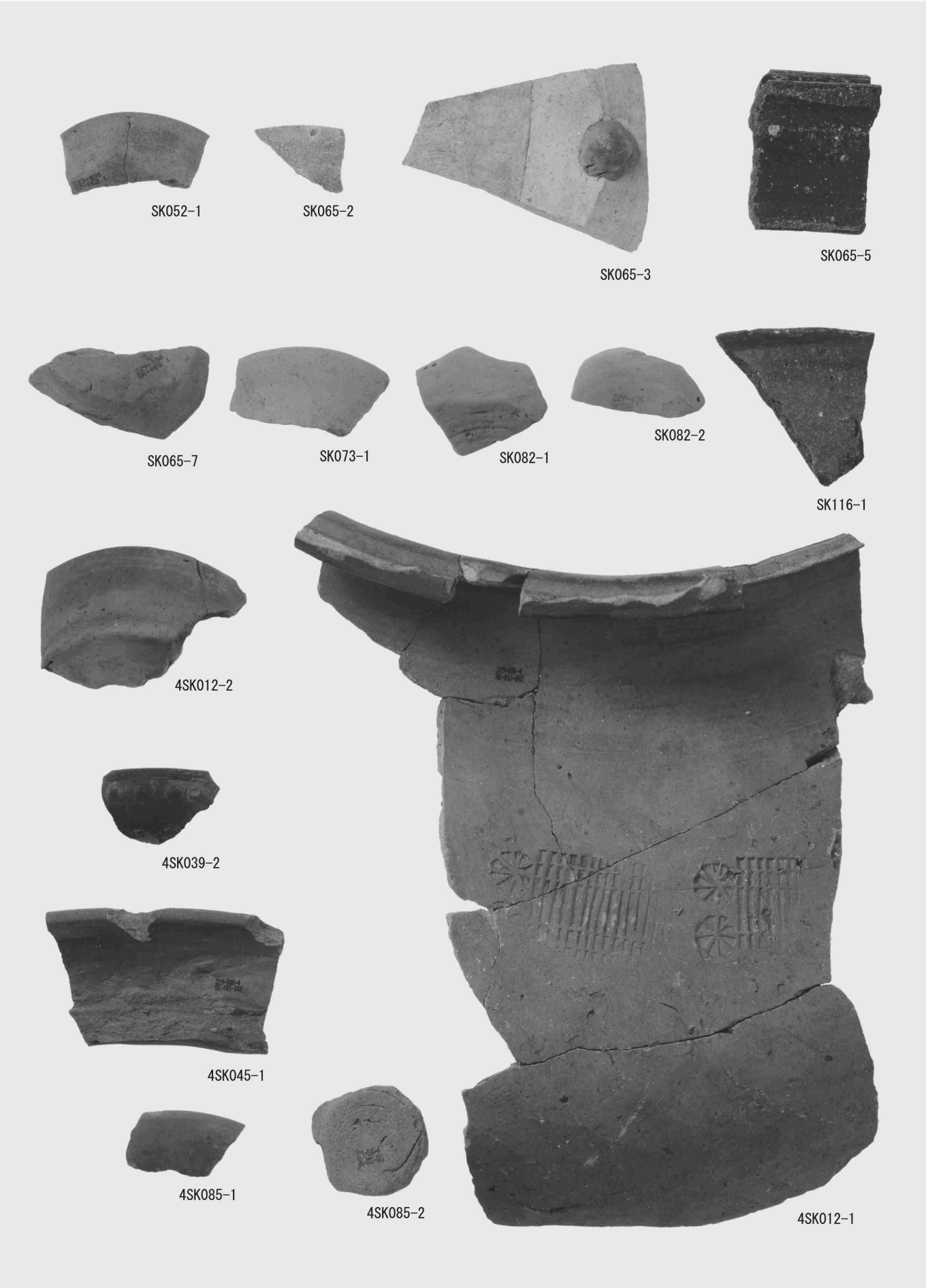
陶磁器・土器（1）

4SK005-2

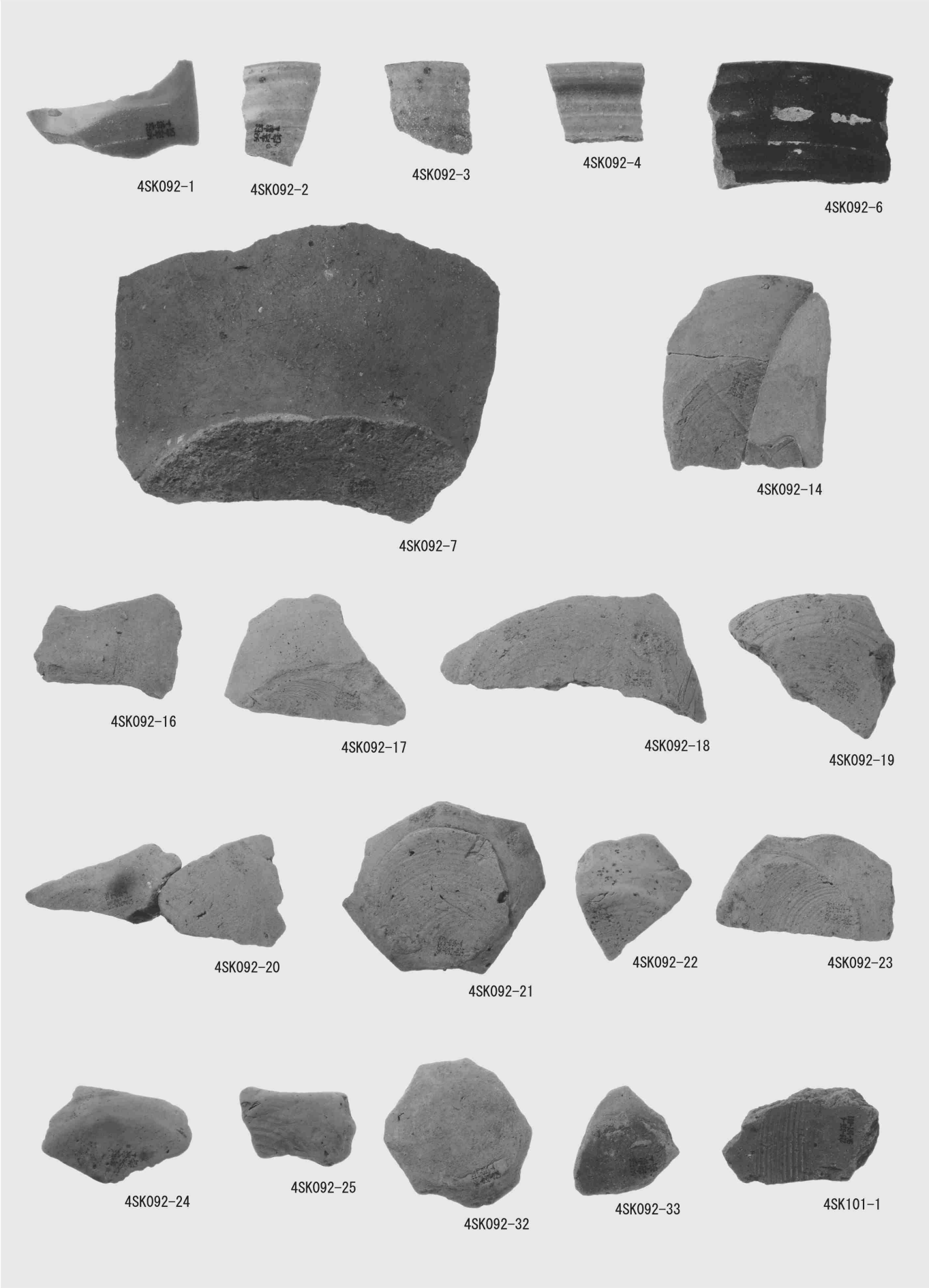
6SE005-1
SD027-4
SD027-9
SH007-9
SH034-8
SD020-8
SD022-3
4SD005-2
4SD005-3

4SD005-21
6SD036-3
4SD009-6
4SD018-1
4SD019-2
常1(19E-63・95)
土1(20E-25)
土2(20E-25)
土3(13D-06)

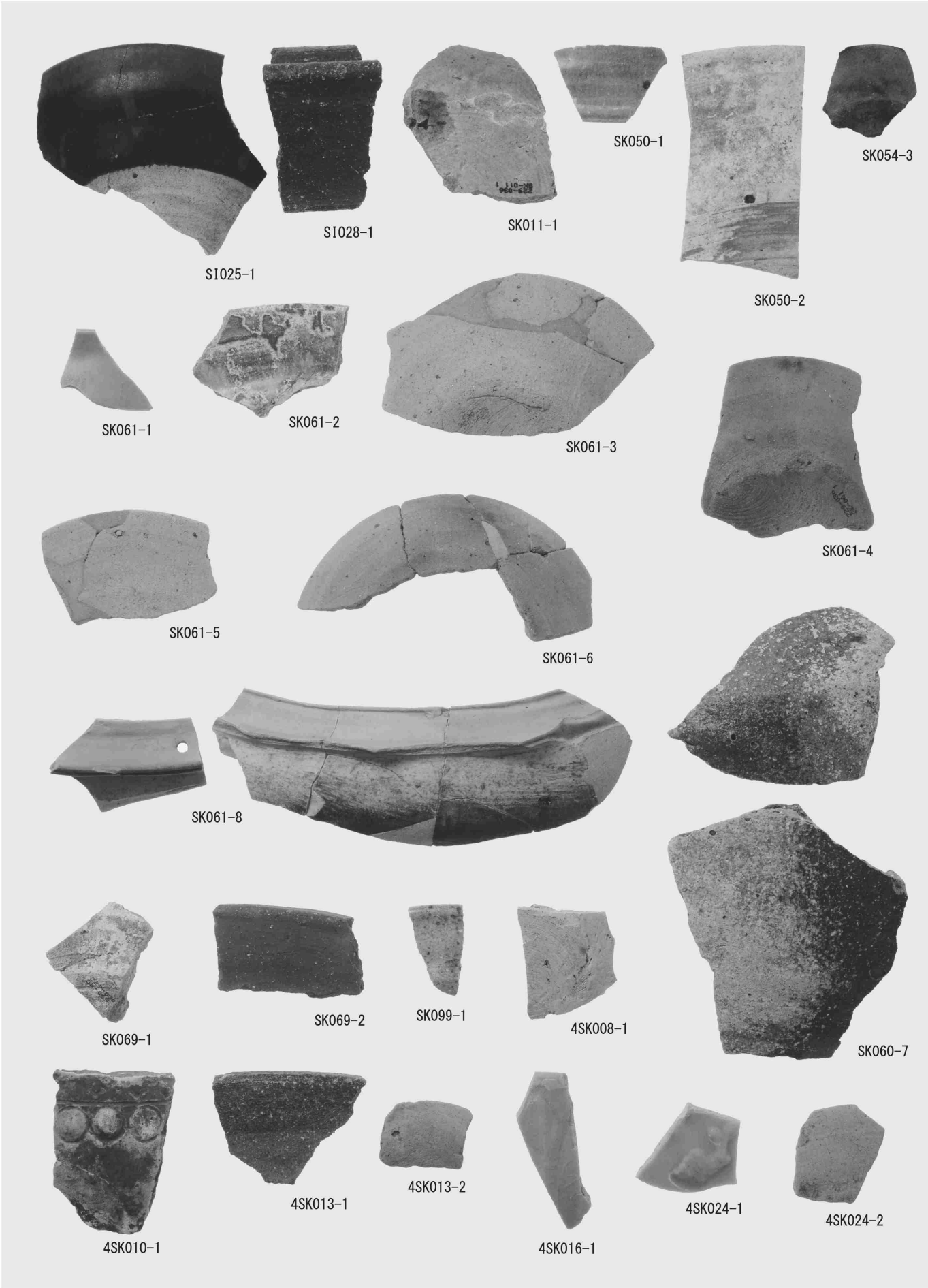
陶磁器・土器（2）



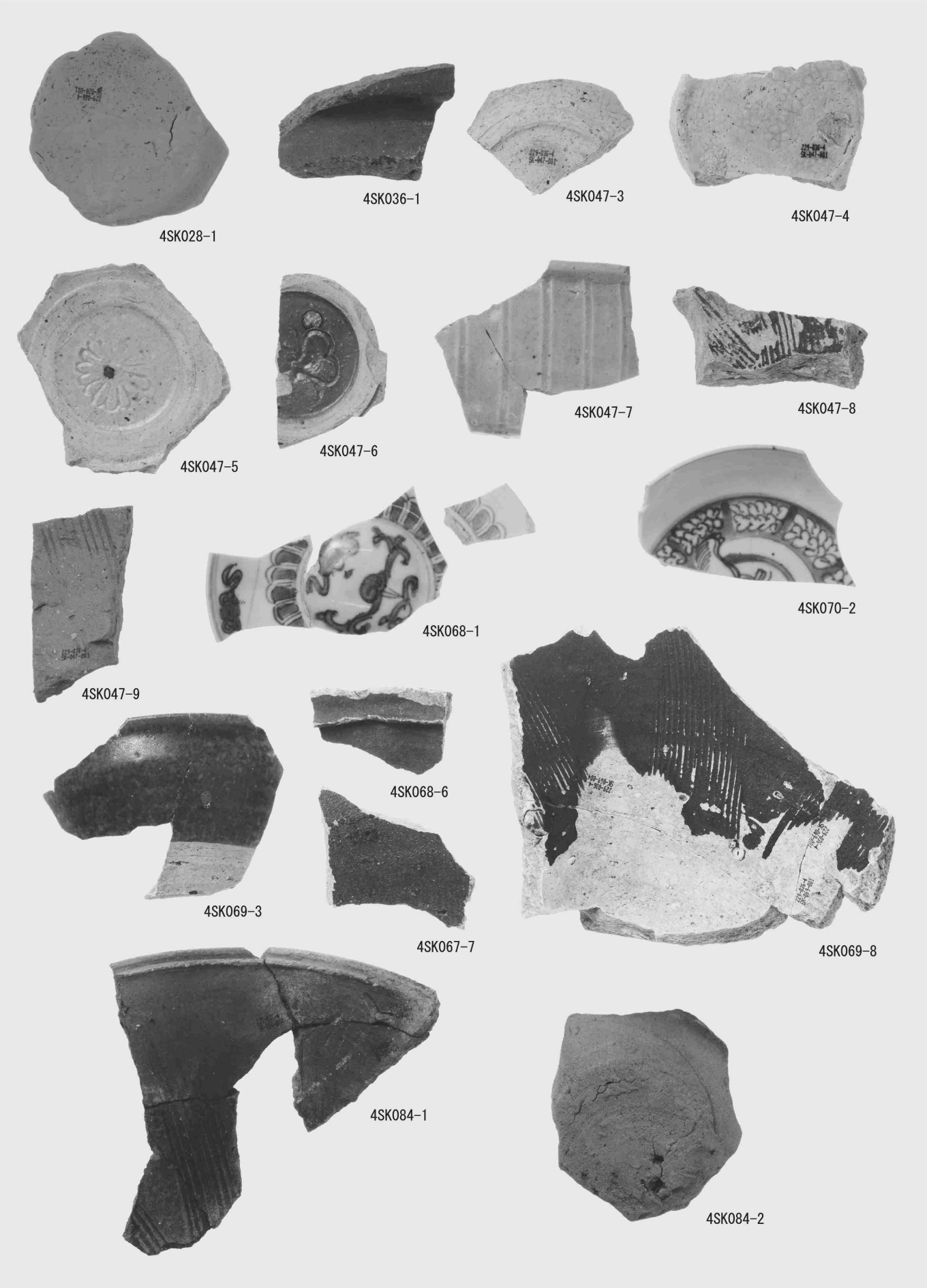
地下式坑出土陶磁器・土器（1）



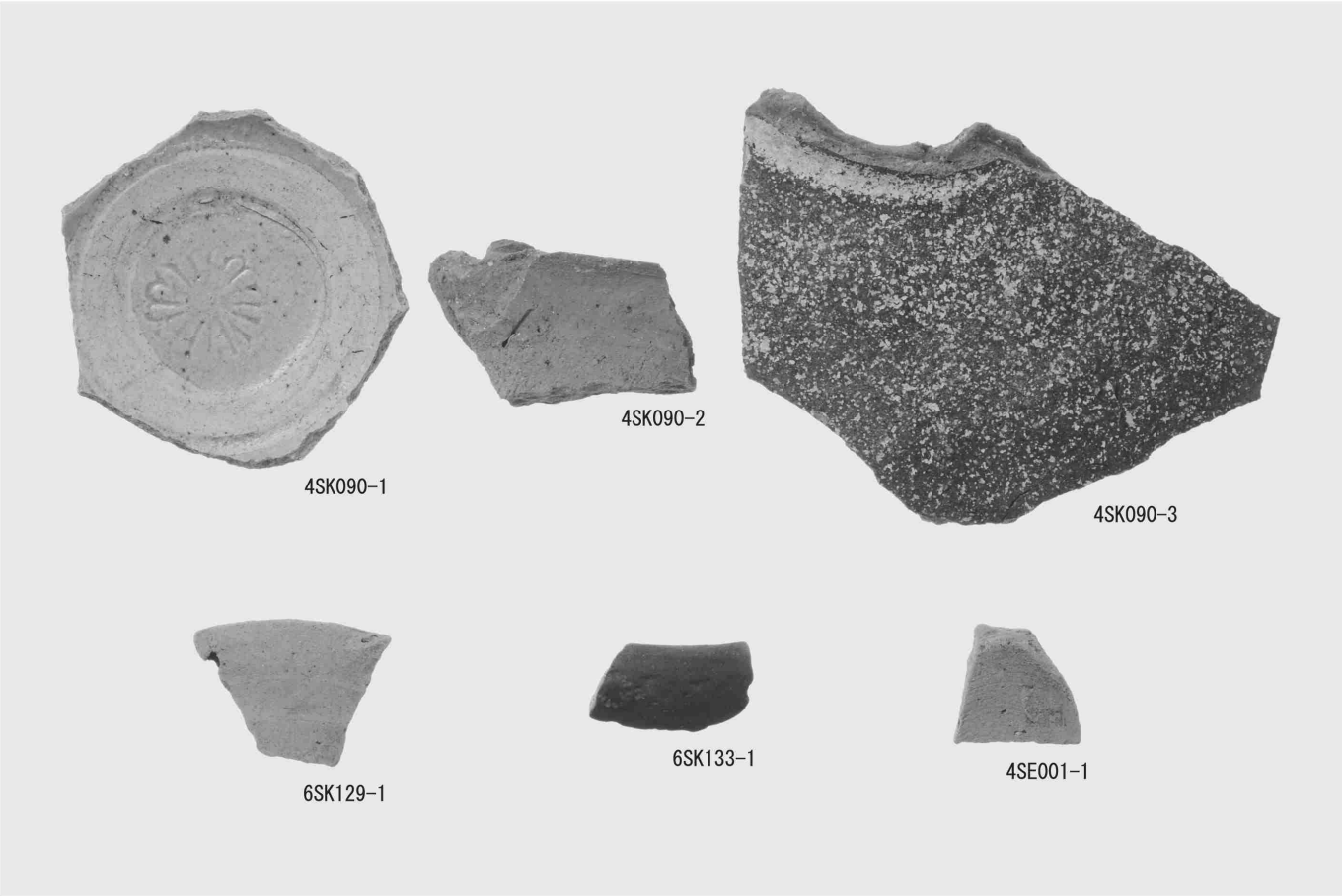
地下式坑出土陶磁器・土器（2）



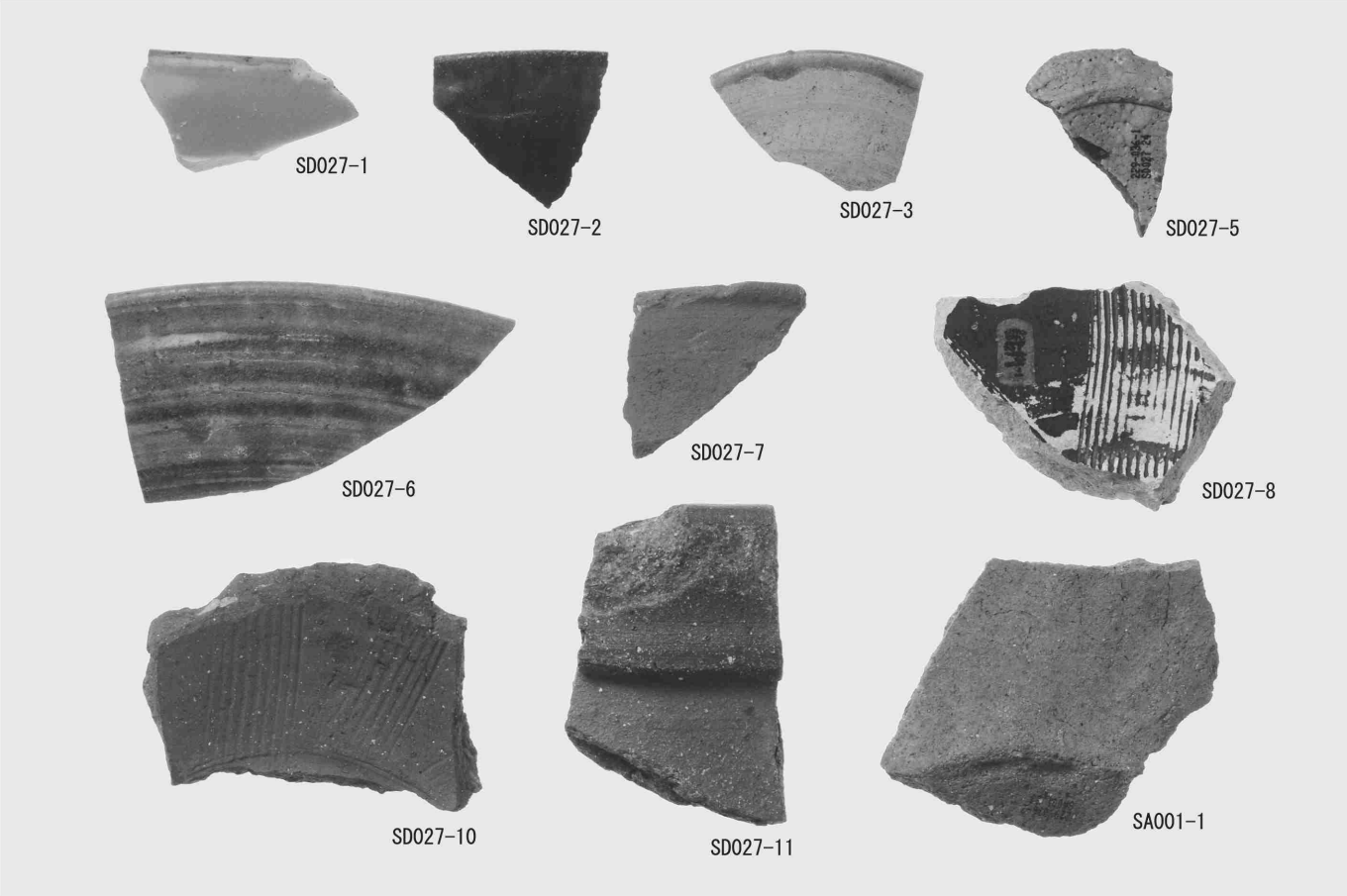
方形竪穴・竪穴状遺構出土陶磁器・土器（1）



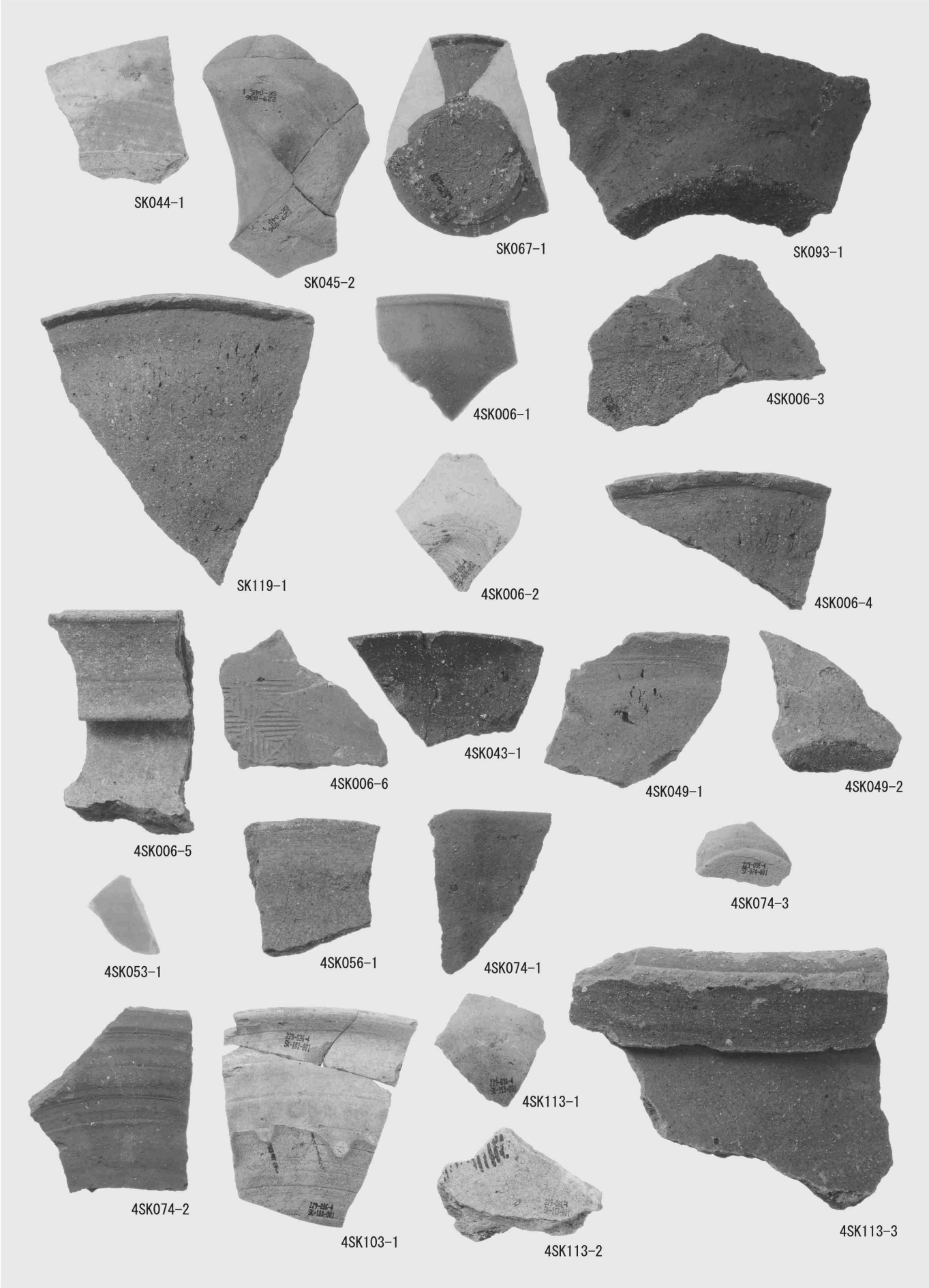
方形竪穴・竪穴状遺構出土陶磁器・土器（2）



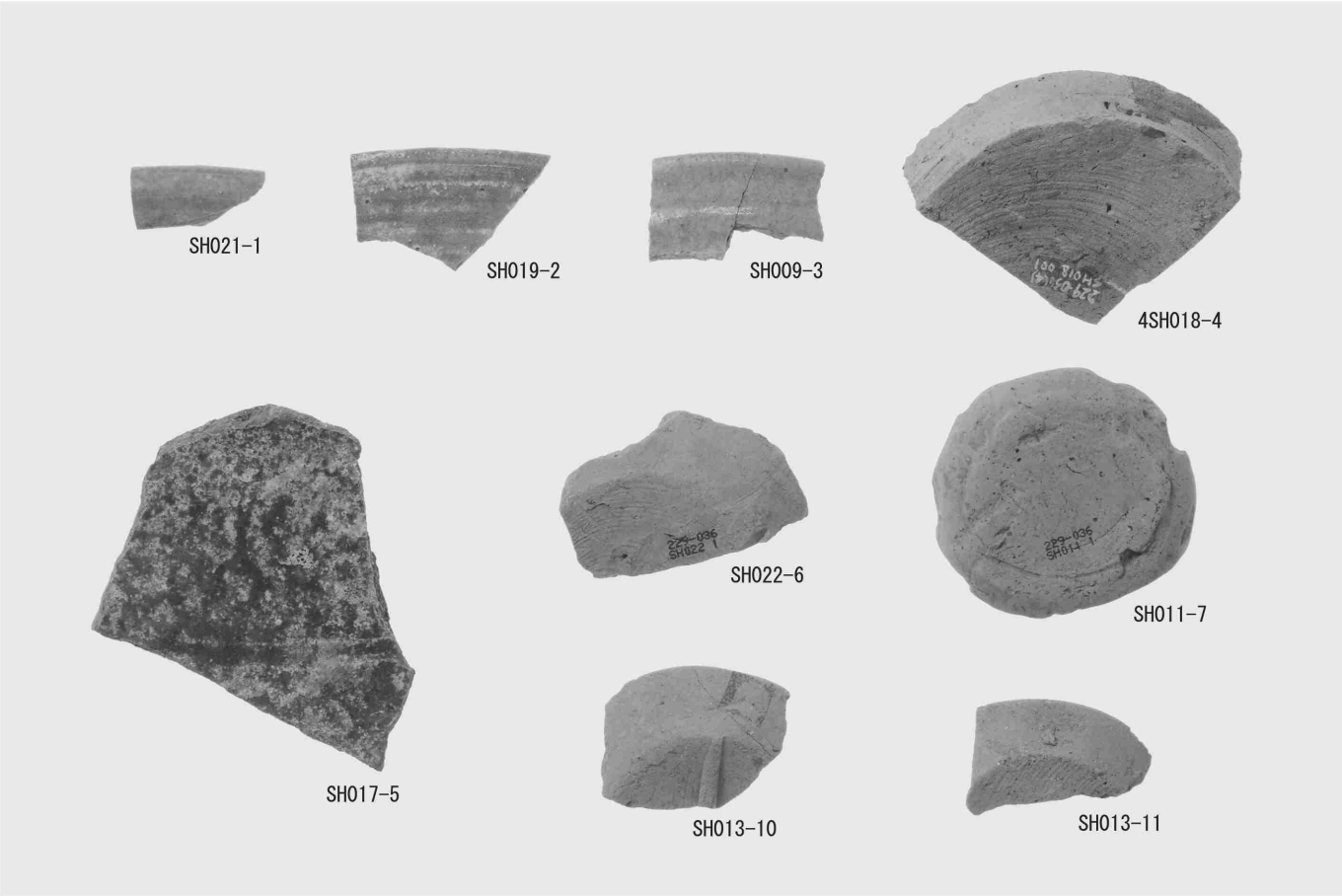
方形竪穴・竪穴状遺構、井戸出土陶磁器・土器



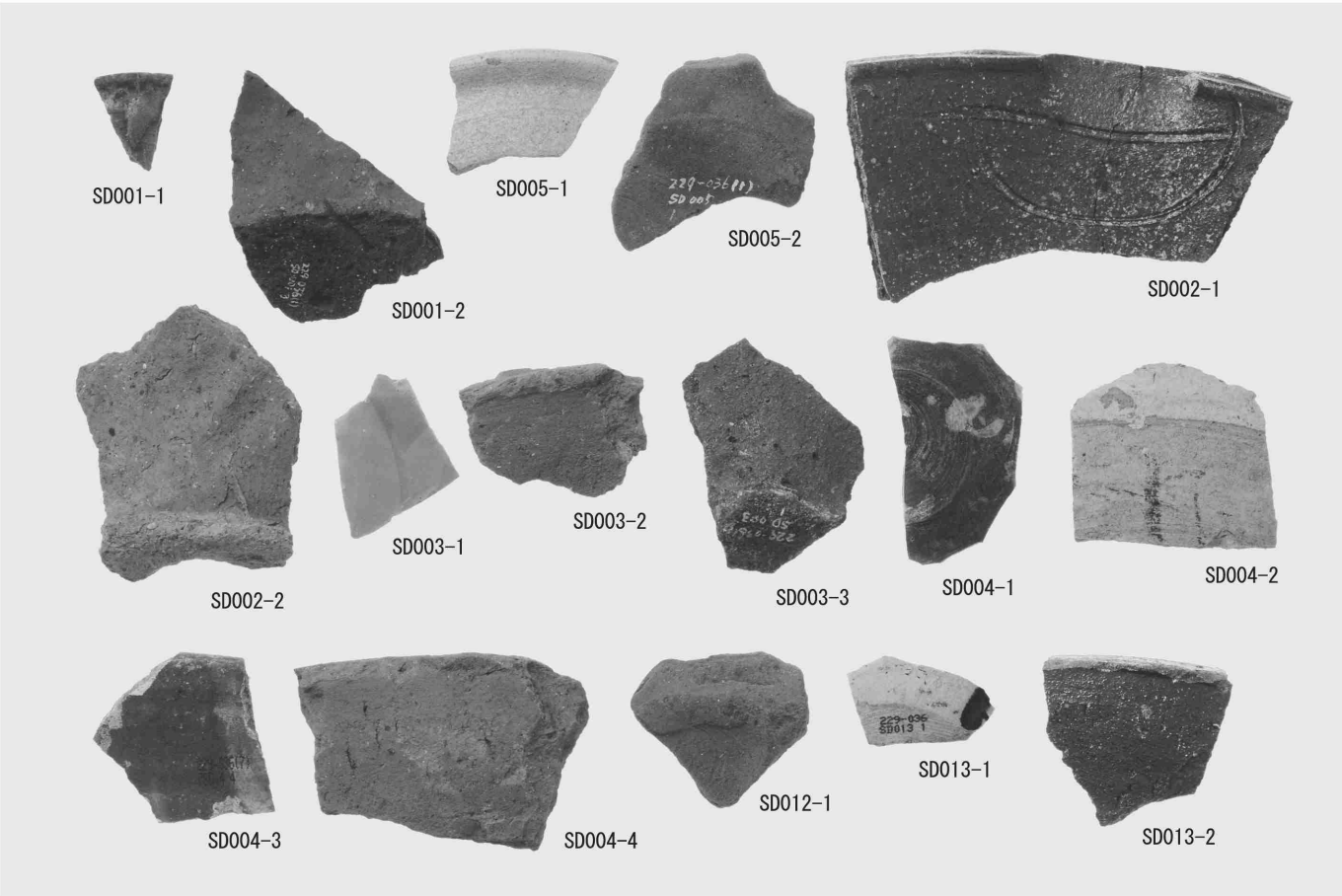
堀・土塁出土陶磁器・土器


SK044-1
SK045-2
SK067-1
SK093-1
SK119-1
4SK006-1
4SK006-3
4SK006-2
4SK006-4
4SK006-5
4SK006-6
4SK043-1
4SK049-1
4SK049-2
4SK053-1
4SK056-1
4SK074-1
4SK074-3
4SK074-2
4SK103-1
4SK113-1
4SK113-2
4SK113-3

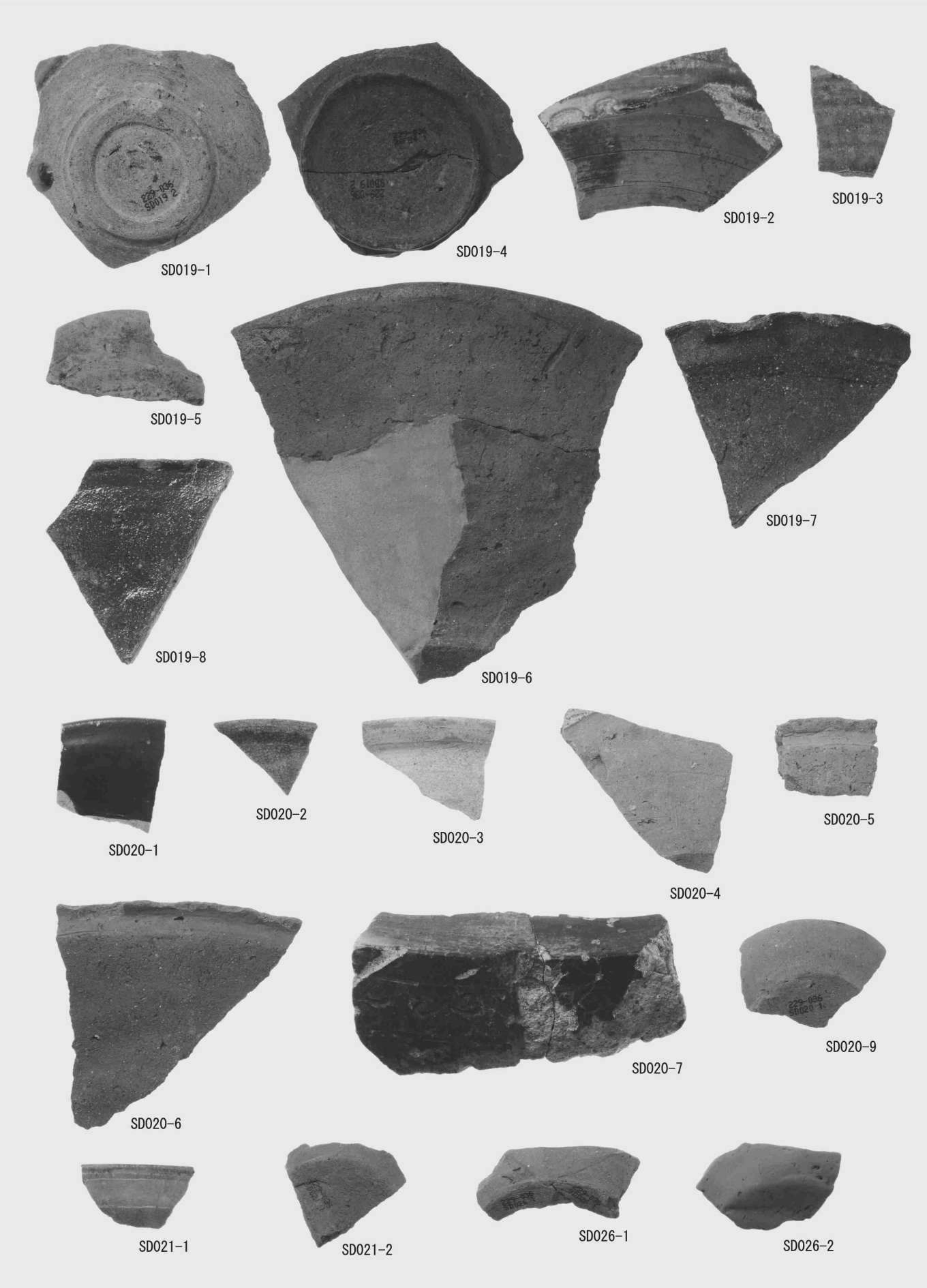
土坑出土陶磁器・土器



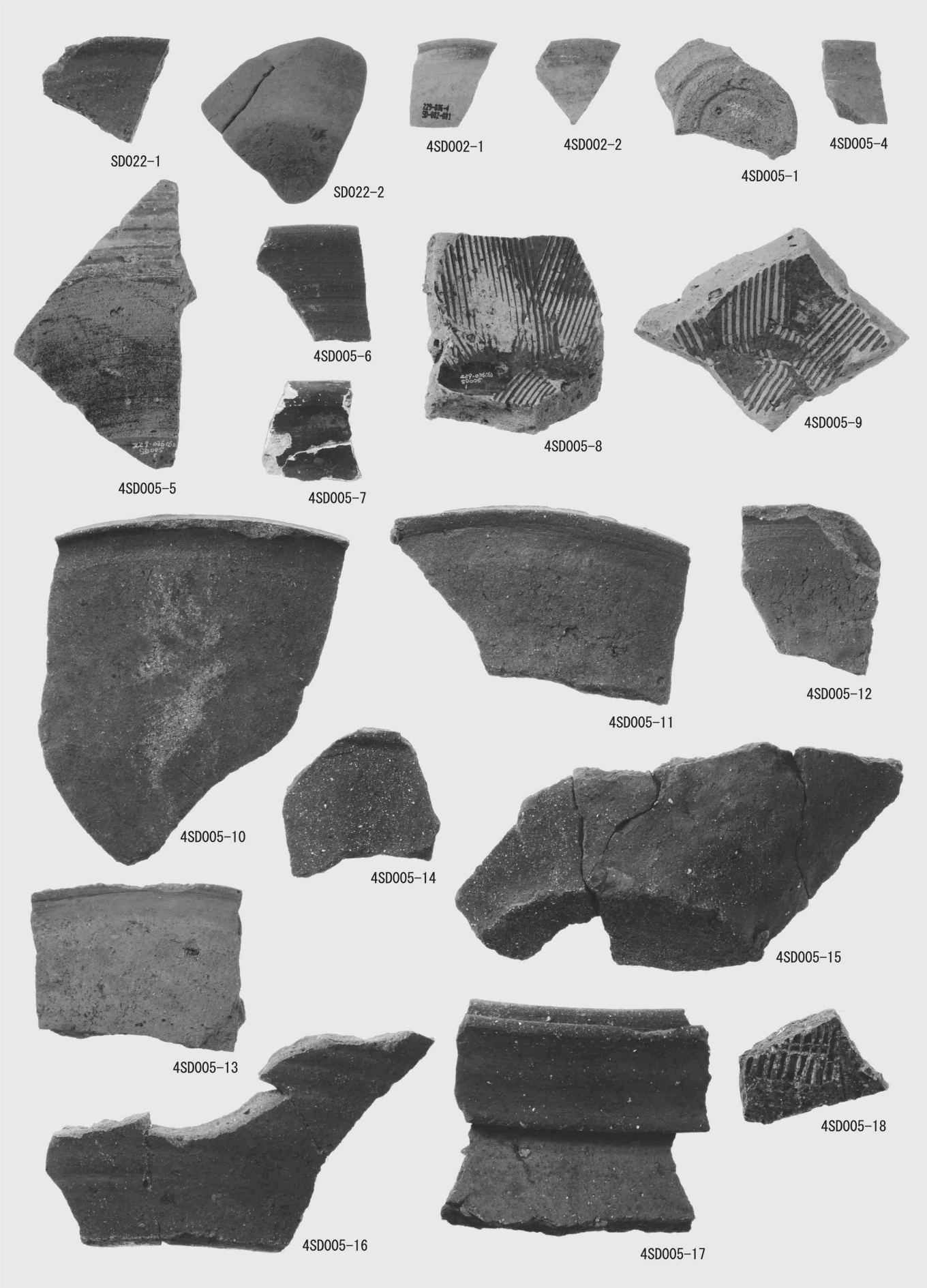
ピット群出土陶磁器・土器



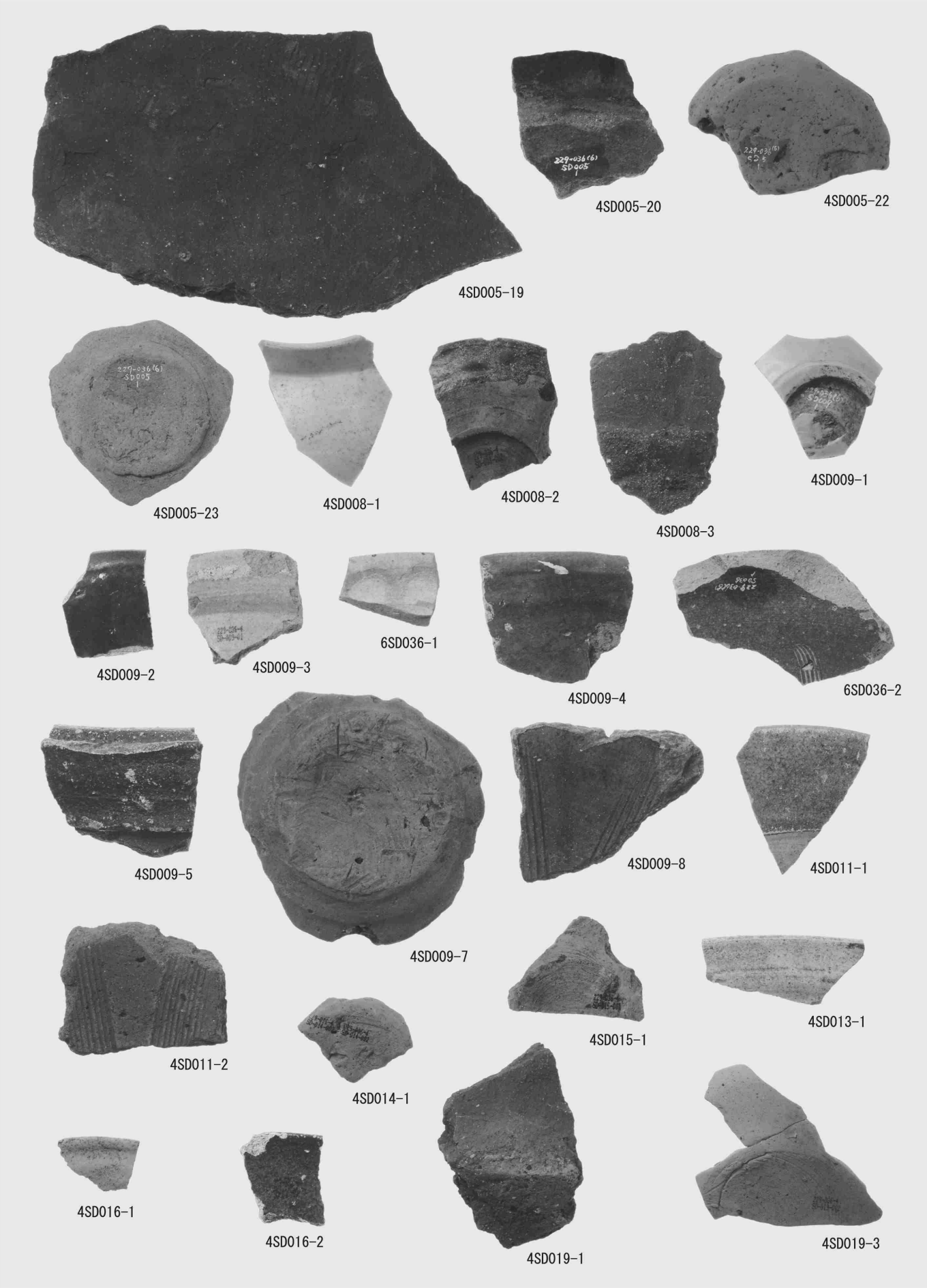
溝状遺構出土陶磁器・土器（１）



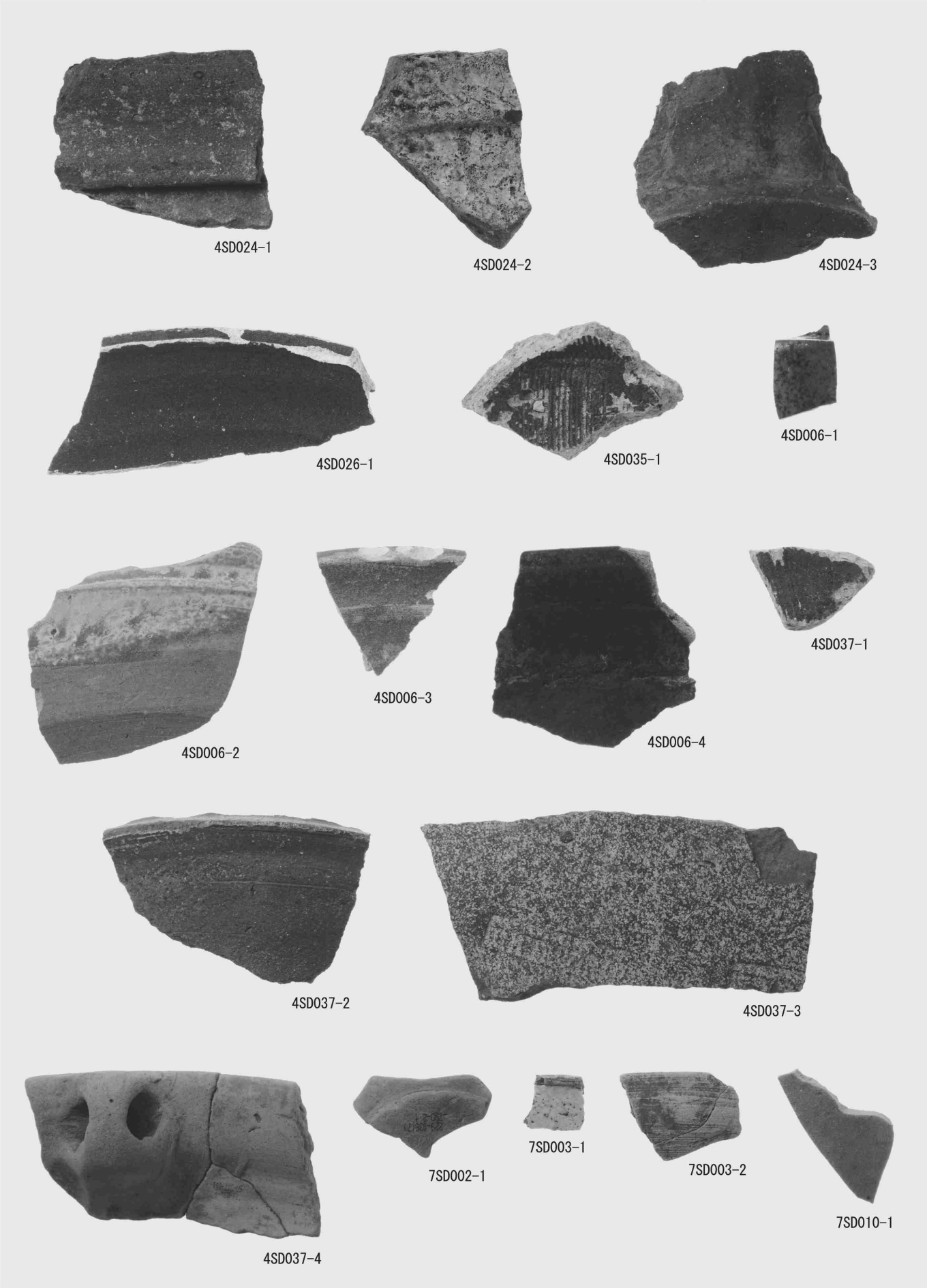
溝状遺構出土陶磁器・土器（2）



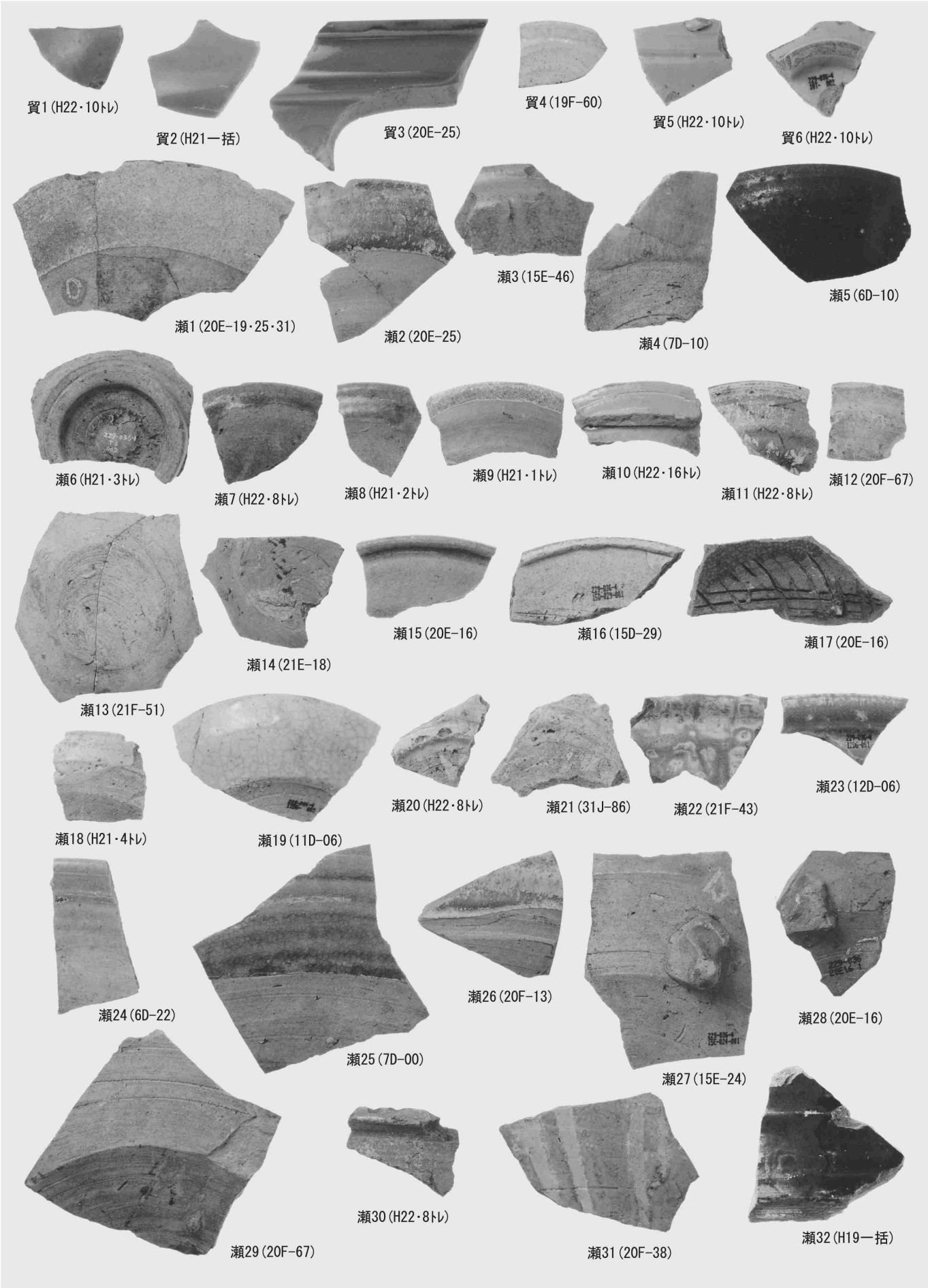
溝状遺構出土陶磁器・土器（3）



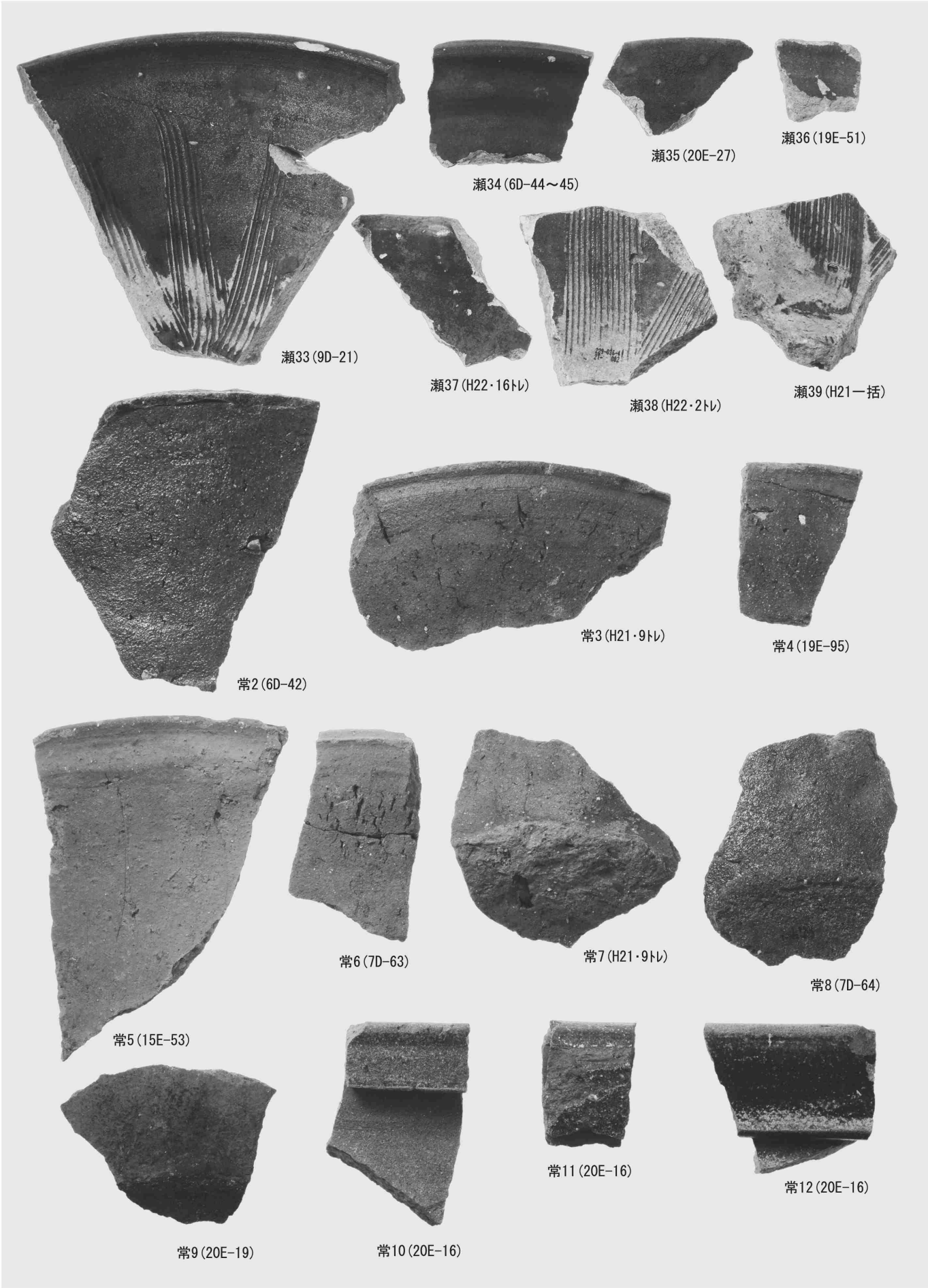
溝状遺構出土陶磁器・土器（4）



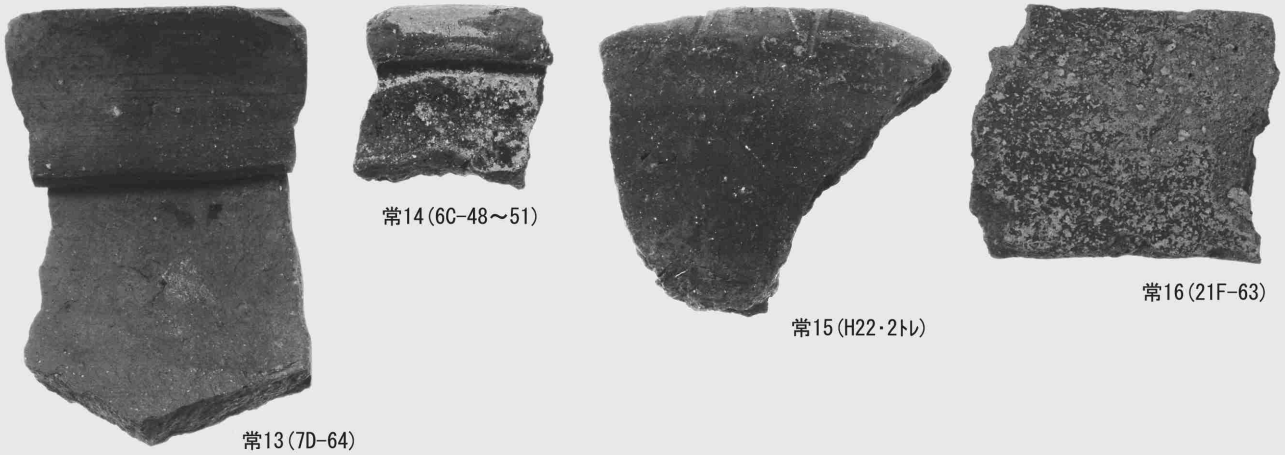
溝状遺構出土陶磁器・土器（５）



遺構外出土陶磁器・土器（1）



遺構外出土陶磁器・土器（２）



常13(7D-64)

常14(6C-48～51)

常15(H22・2トレ)

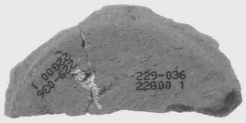
常16(21F-63)

常17(H22・2トレ)

土4(21F-08)

土5(21G-00)

土6(22F-24)



土7(22G-00)

土8(H21・9トレ)

土9(21F-42)

土10(20F-76)

土11(6D-42～53・60～71)

土12(H21・2トレ)

土13(H21・2トレ)

土14(H21・2トレ)

土15(7D-10)

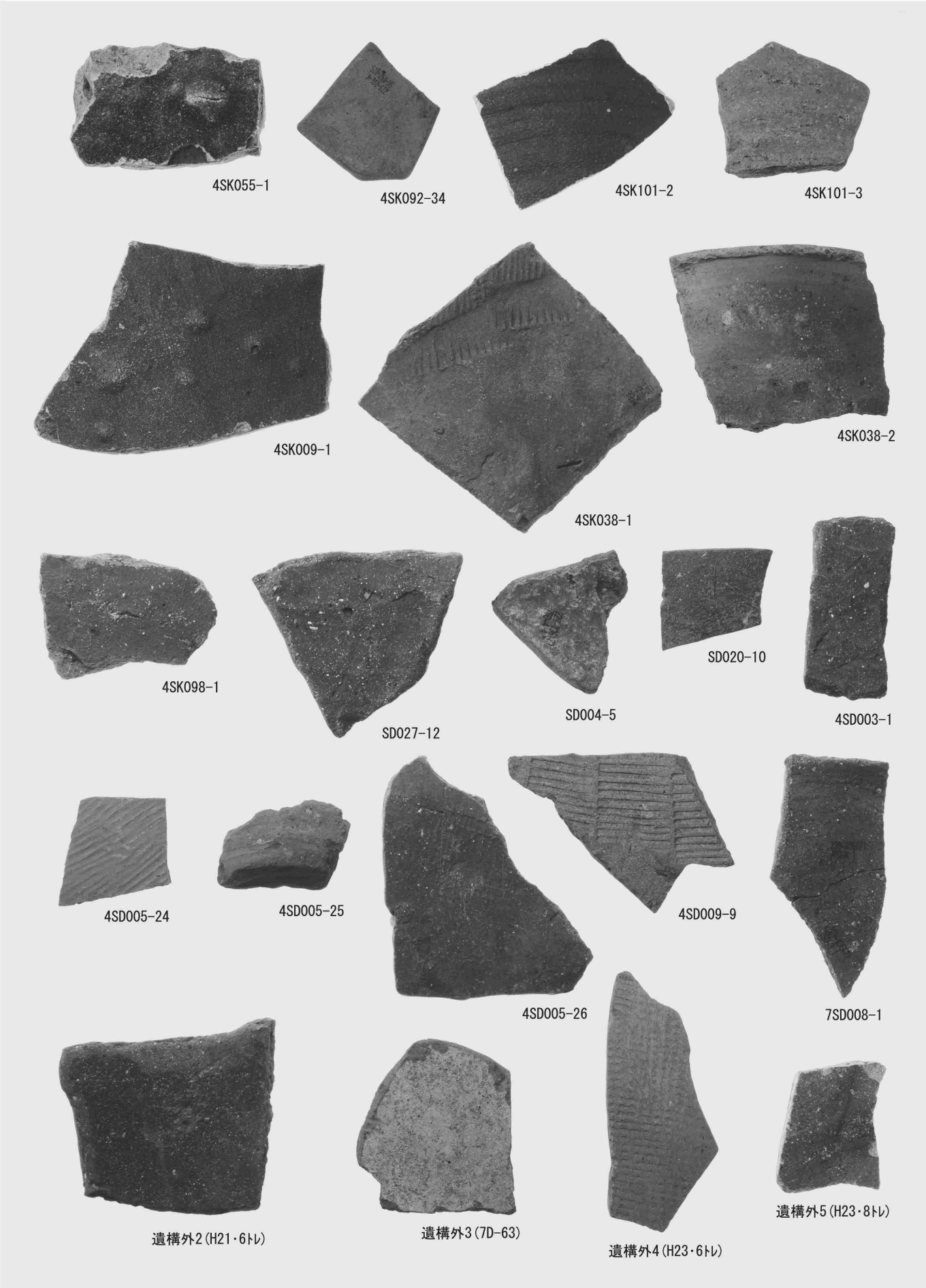
土16(H21・4トレ)

土17(H22・4トレ・16トレ)

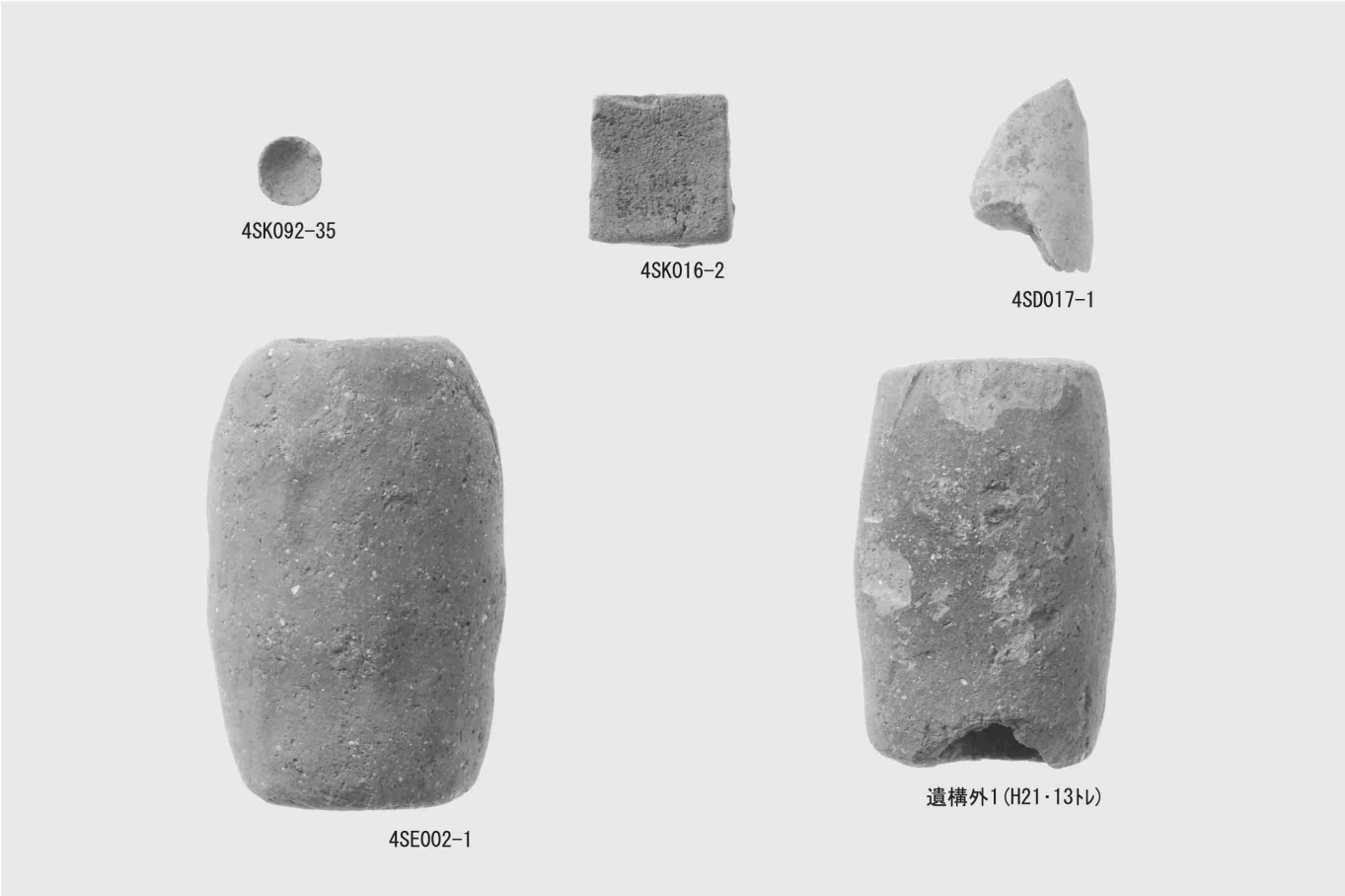
土18(21E-45)

土19(20E-16)

遺構外出土陶磁器・土器（3）


4SK055-1
4SK092-34
4SK101-2
4SK101-3
4SK009-1
4SK038-1
4SK038-2
4SK098-1
SD027-12
SD004-5
SD020-10
4SD003-1
4SD005-24
4SD005-25
4SD005-26
4SD009-9
7SD008-1
遺構外2(H21・6トレ)
遺構外3(7D-63)
遺構外4(H23・6トレ)
遺構外5(H23・8トレ)

土製品（1）



土製品（２）

火葬人骨

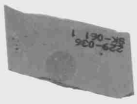
SK073-2

SK116-3

4SK092-36

SI028-2

SI028-3


SK061-9

SK069-3

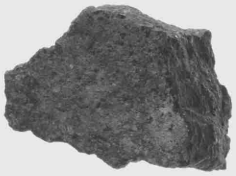
SK069-4

4SK001-1

4SK011-1

4SK030-1

4SK035-1


4SK038-3

4SK050-2

4SK050-1

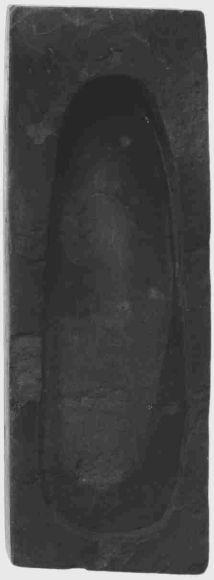
4SK067-9

4SK098-2

4SK110-1

6SK126-1

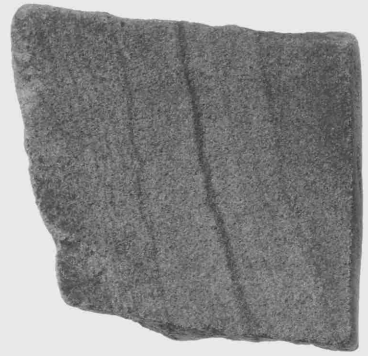
6SK126-2


6SK133-2

石器・石製品（1）

4SK049-3
4SK077-1
SD027-13
SD027-14
SD027-15
SD027-16
SD027-17
SH024-12
4SH004-13
SD018-1
4SD013-2
4SD013-3
4SD016-3
4SD016-4
4SD018-2
4SD017-2
4SD020-1
4SD026-2
4SD035-2
4SD006-5
4SD037-5
4SD037-6

石器・石製品（2）



4SD037-7

6SD036-4

遺構外1(H22・1トレ)

遺構外2(15E-04)

遺構外3(H21・7トレ)

遺構外4(20F-83)

遺構外5(7C-24～35)

遺構外6(21G-20)

遺構外7(6C-82～93)

遺構外8(H23・2トレ)

遺構外9(H21一括)

遺構外10(H21・10トレ)

遺構外11(H22・16トレ)

遺構外12(H22・4トレ)

遺構外16(H21一括)

遺構外13(31J-86)

遺構外14(20E-93)

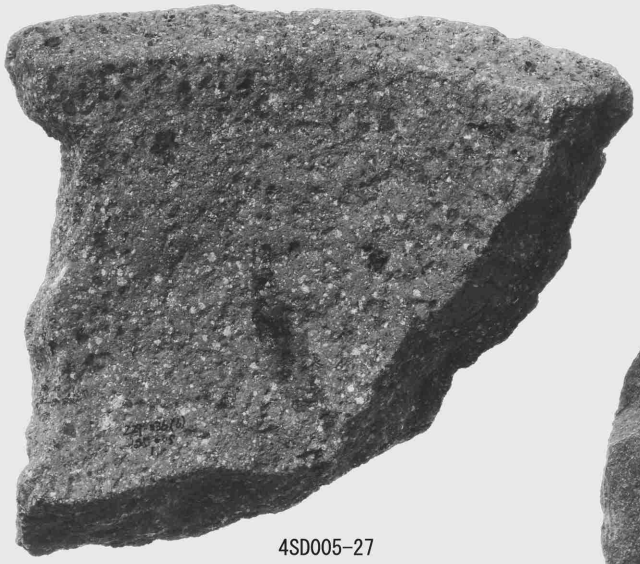
遺構外15(H22・4トレ)

石器・石製品（3）

SD027-18

SA001-2

SD019-9



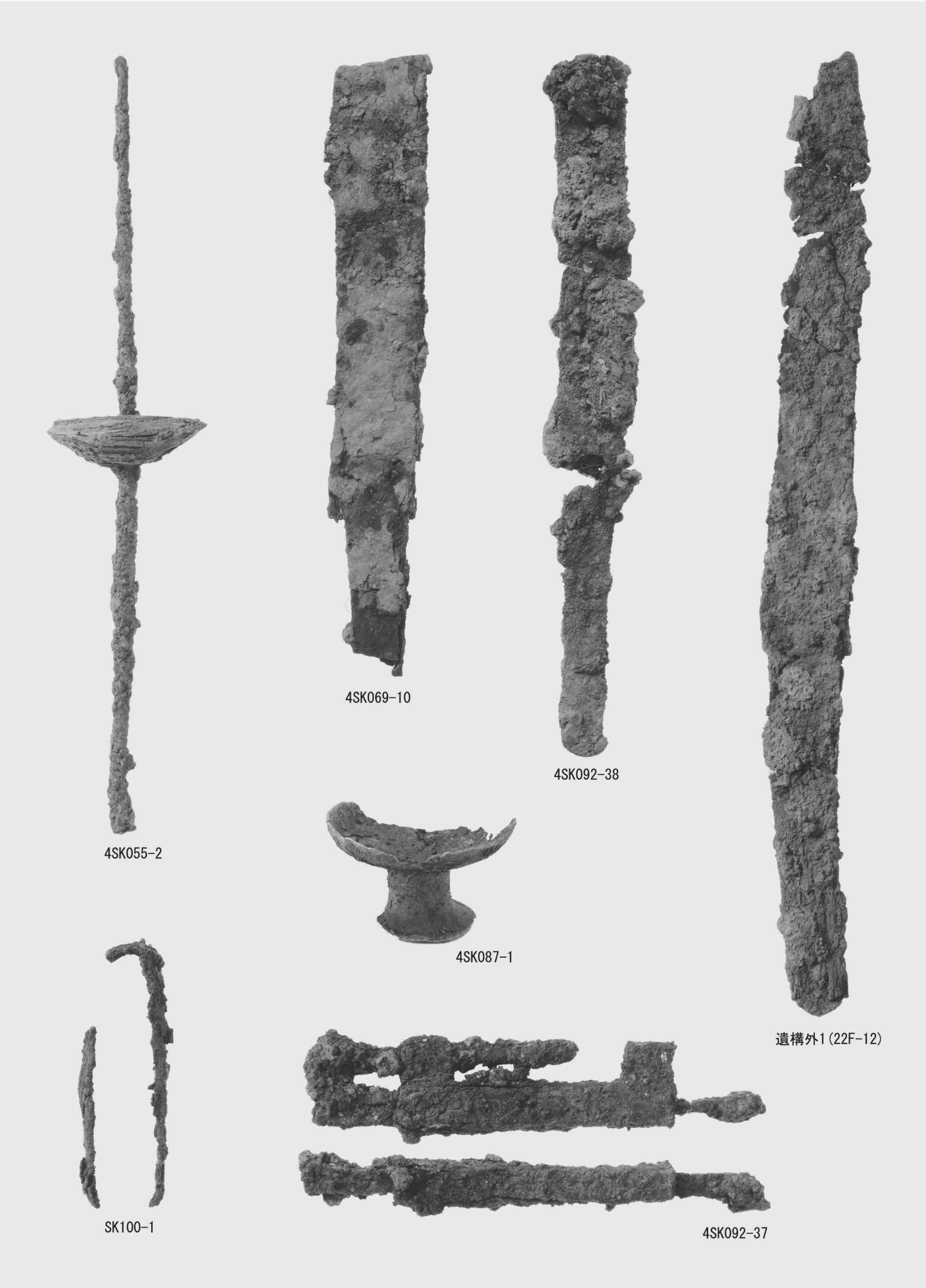
4SD005-27

4SD005-28

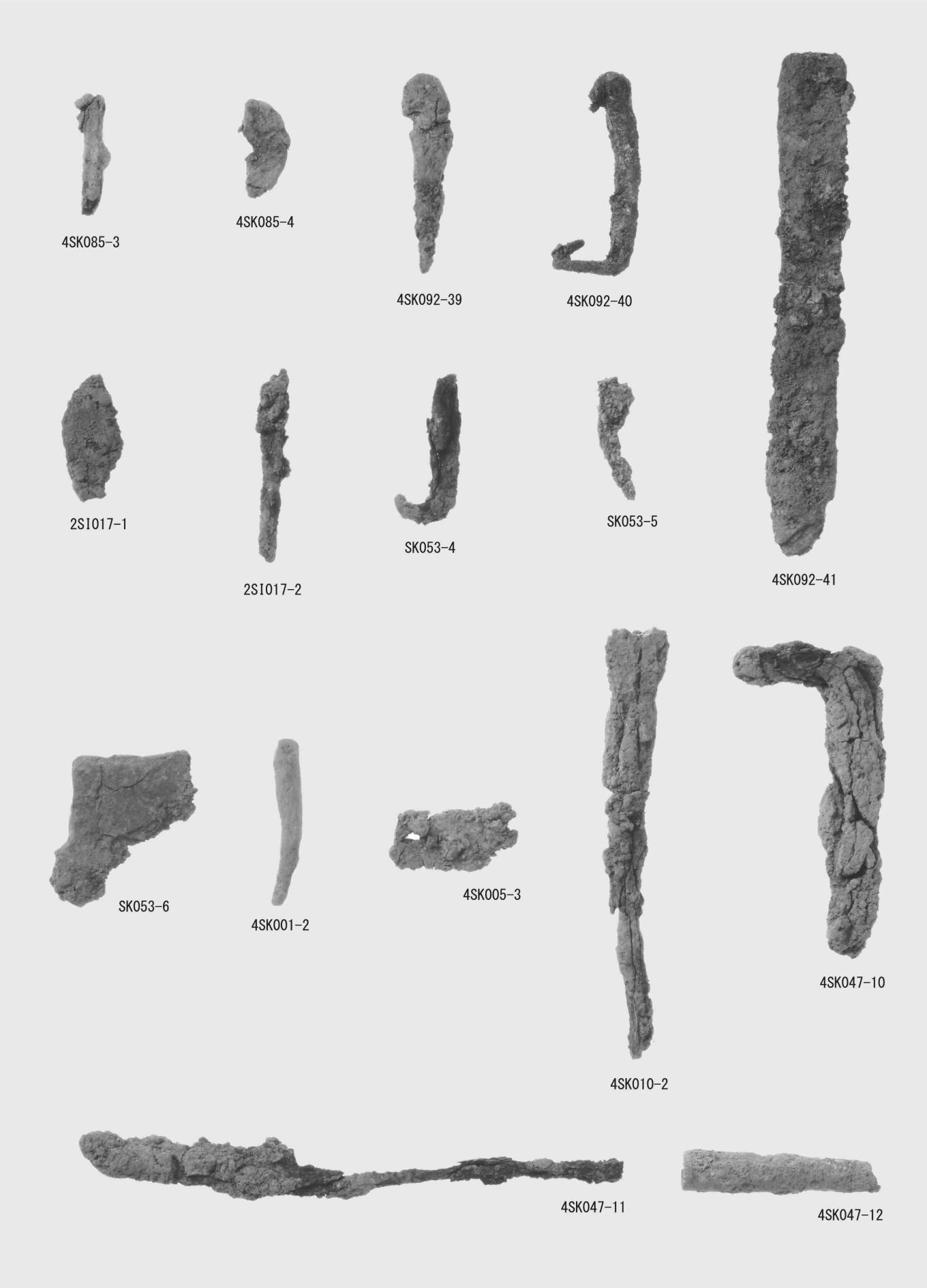
4SD013-4

4SD017-3

石器・石製品（4）


4SK055-2
4SK069-10
4SK092-38
4SK087-1
遺構外1(22F-12)
SK100-1
4SK092-37

金属製品（1）


4SK085-3
4SK085-4
4SK092-39
4SK092-40
4SK092-41
2SI017-1
2SI017-2
SK053-4
SK053-5
SK053-6
4SK001-2
4SK005-3
4SK010-2
4SK047-10
4SK047-11
4SK047-12

金属製品（2）

4SK069-11

4SK070-12

4SK070-13

4SK070-14

4SK090-4

4SK098-3

4SK098-4

4SK098-5

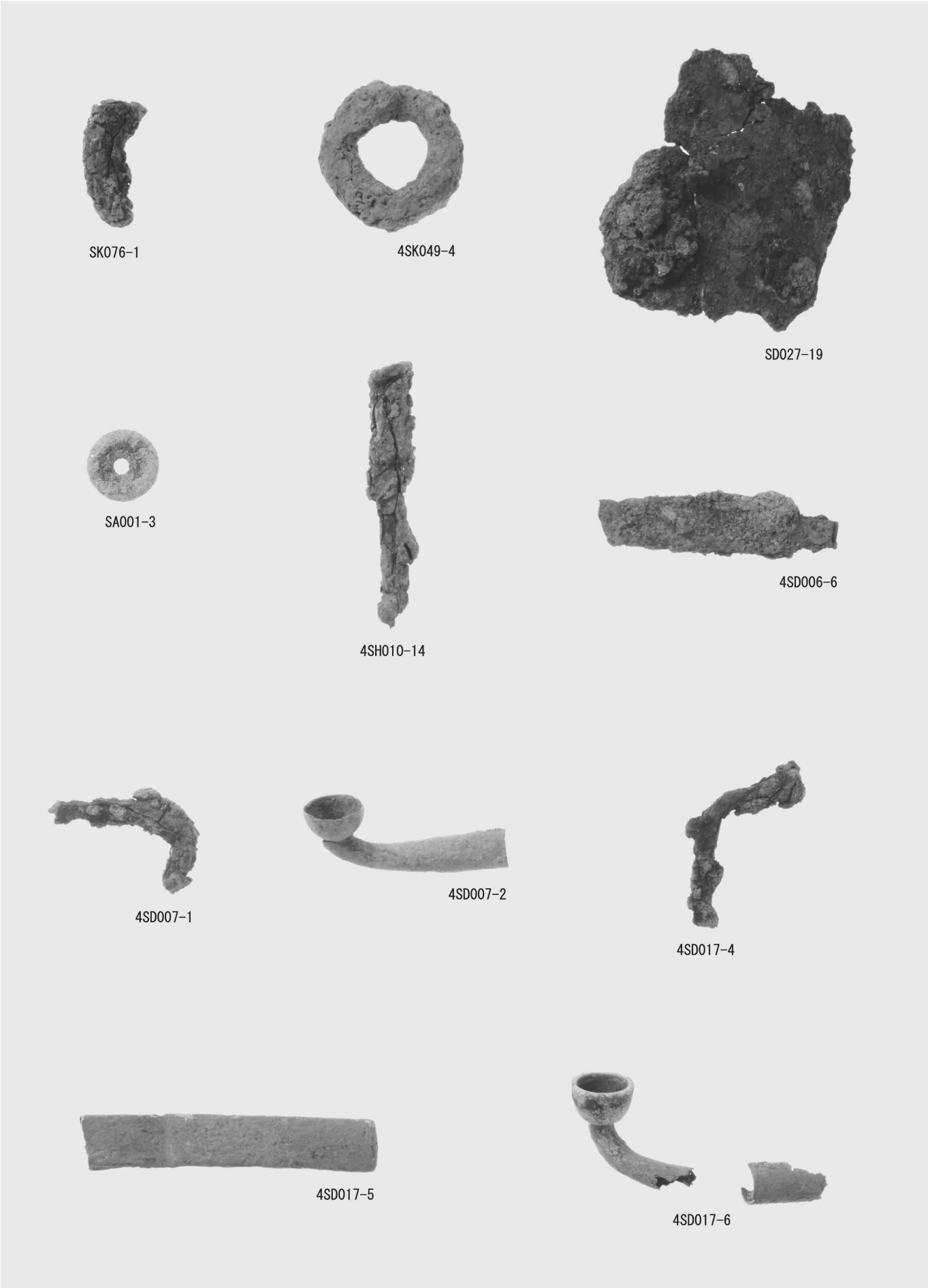
4SK098-6

4SK098-7

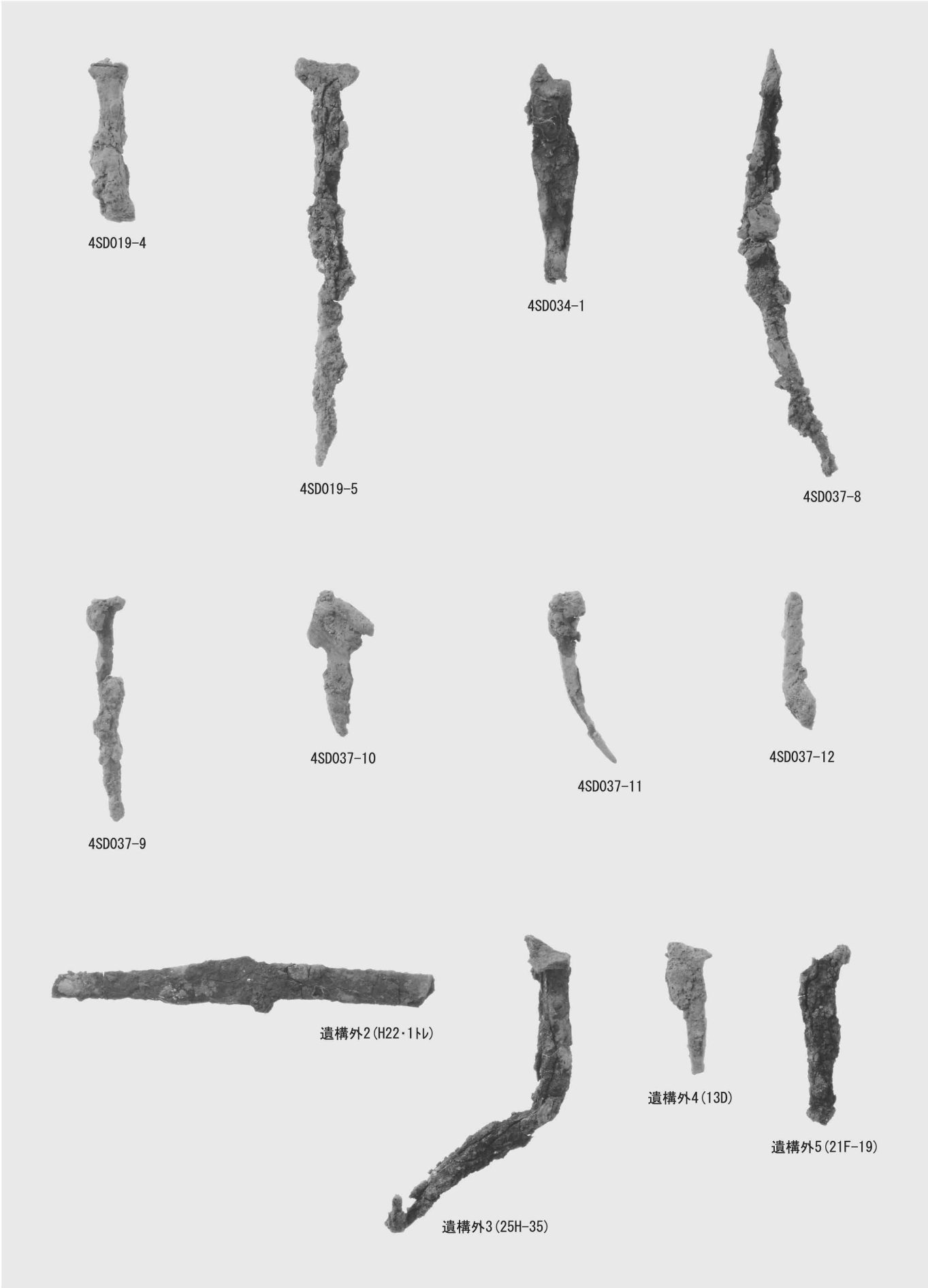
4SK098-8

4SK098-9

金属製品（3）


SK076-1
4SK049-4
SD027-19
SA001-3
4SH010-14
4SD006-6
4SD007-1
4SD007-2
4SD017-4
4SD017-5
4SD017-6

金属製品（4）


4SD019-4
4SD019-5
4SD034-1
4SD037-8
4SD037-9
4SD037-10
4SD037-11
4SD037-12
遺構外2(H22・1トレ)
遺構外3(25H-35)
遺構外4(13D)
遺構外5(21F-19)

金属製品（5）

遺構外6(21F-42)

遺構外7(13D)

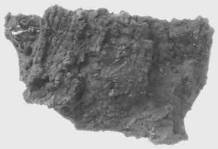
遺構外8(11C-26)

遺構外9(36R-55)

遺構外10(H21・13トレ)

遺構外11(H21・15トレ)

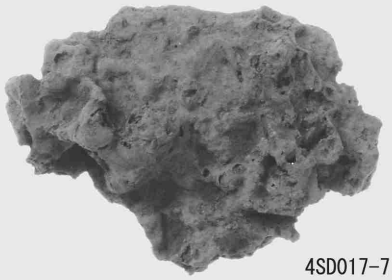
遺構外12(H21・13トレ)



遺構外13(36R-51)

遺構外14(36R-55)

遺構外16(10D-49)

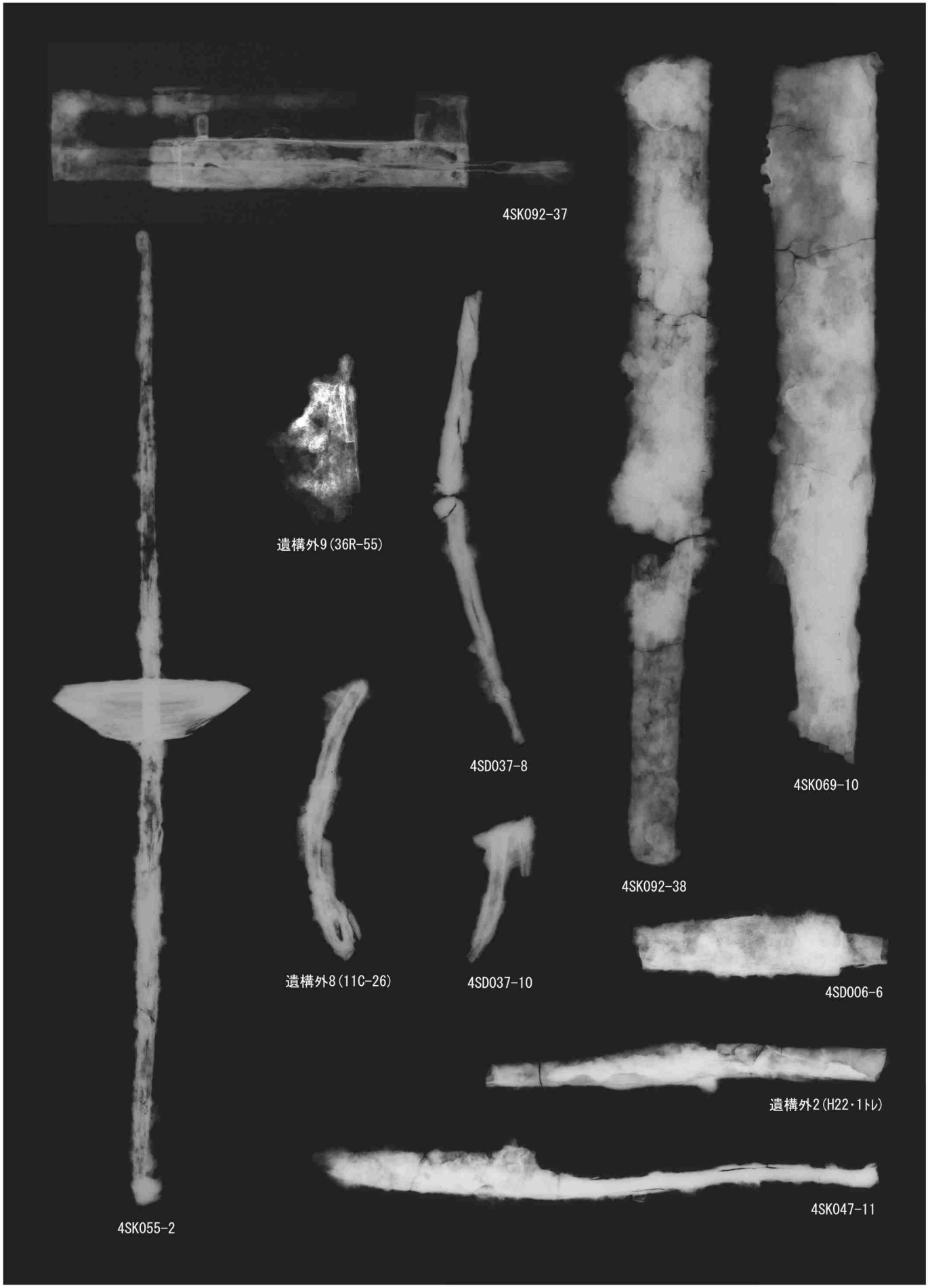


4SD017-7

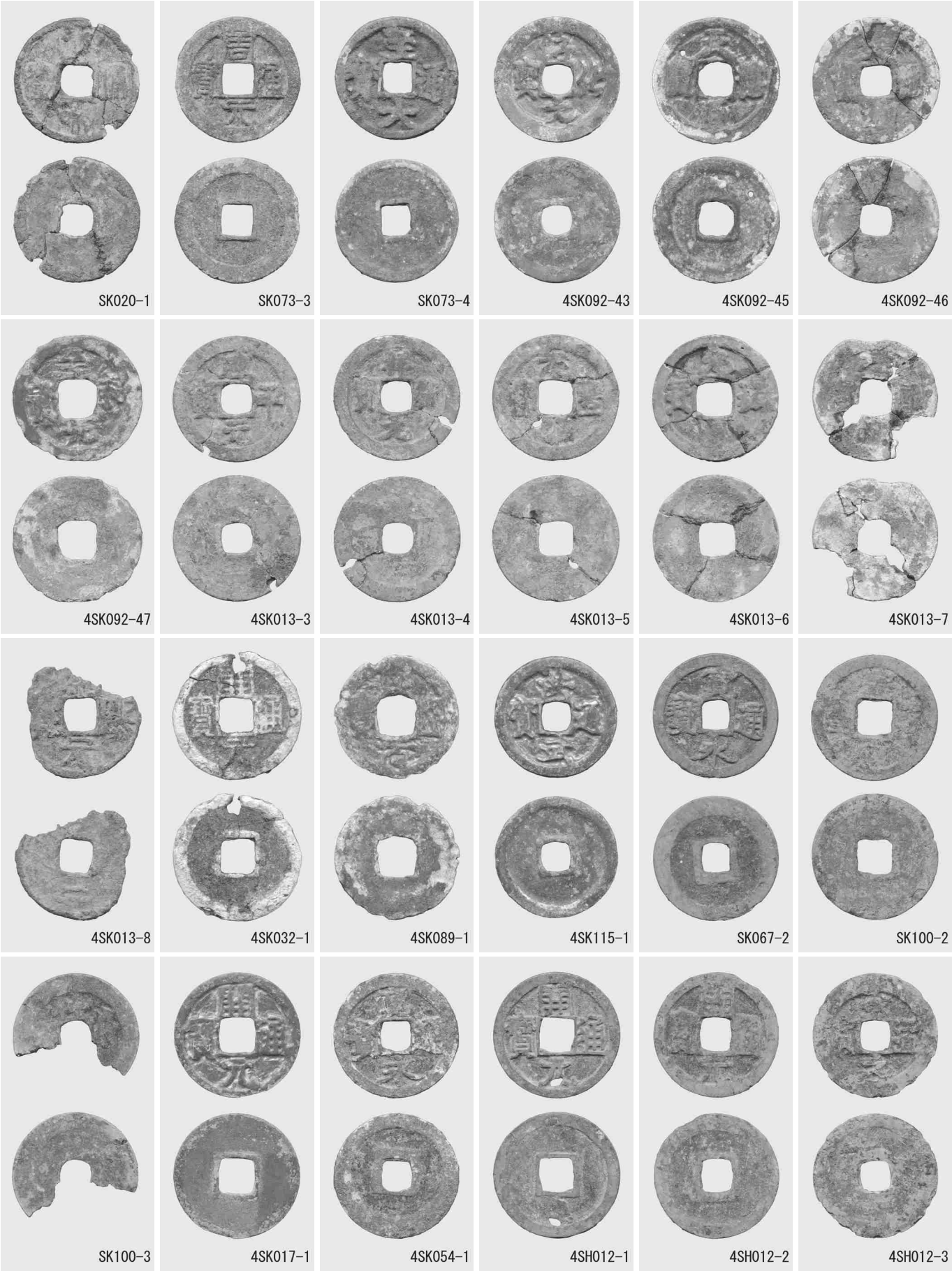
4SK035-2

遺構外15(H23・5トレ)

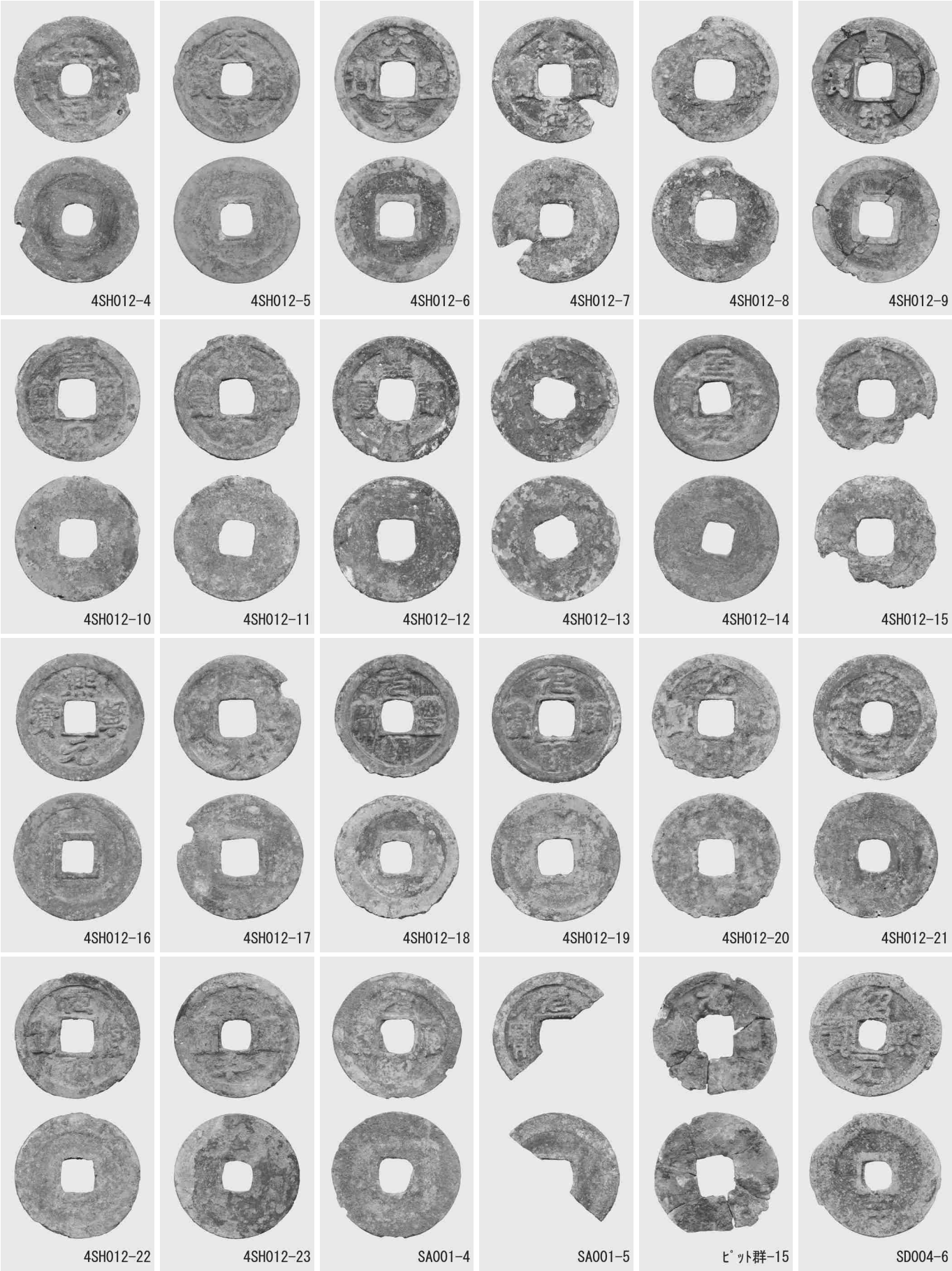
金属製品（6）


4SK092-37
遺構外9(36R-55)
4SD037-8
4SK069-10
4SK092-38
遺構外8(11C-26)
4SD037-10
4SD006-6
遺構外2(H22・1トレ)
4SK047-11
4SK055-2

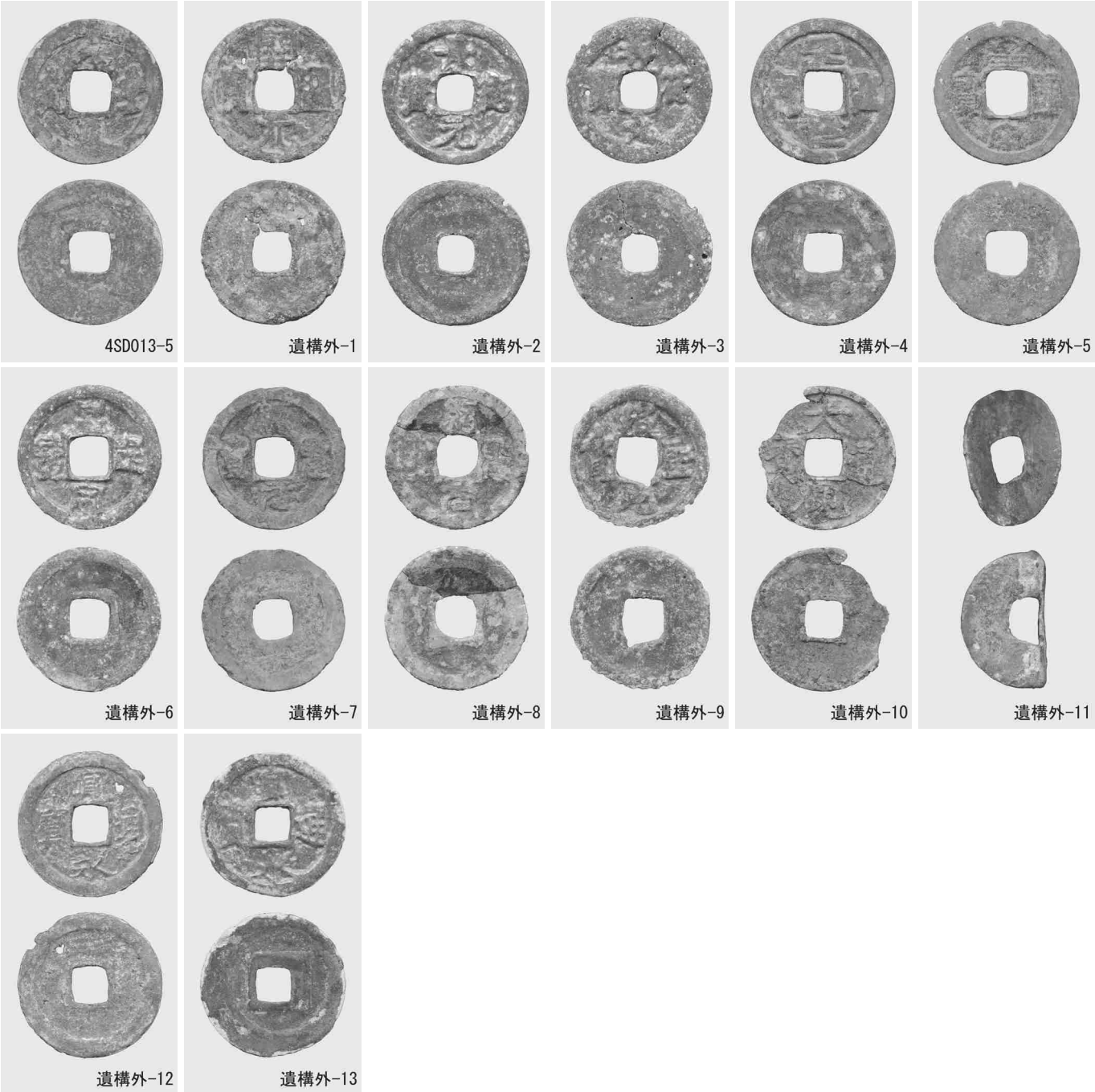
金属製品X線写真



出土銭貨（4SK-014 以外）（１）

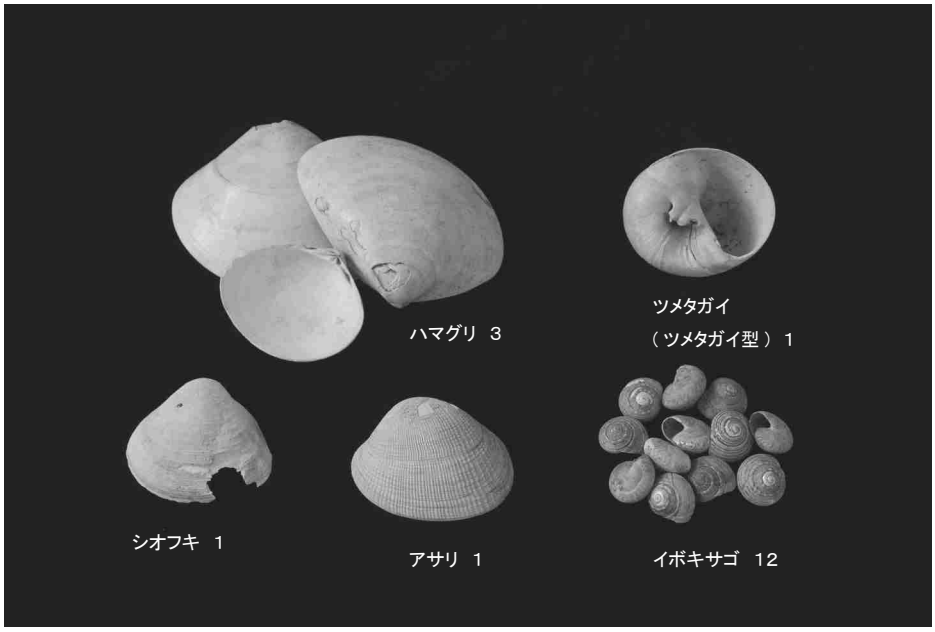


出土銭貨（4SK-014 以外）（２）

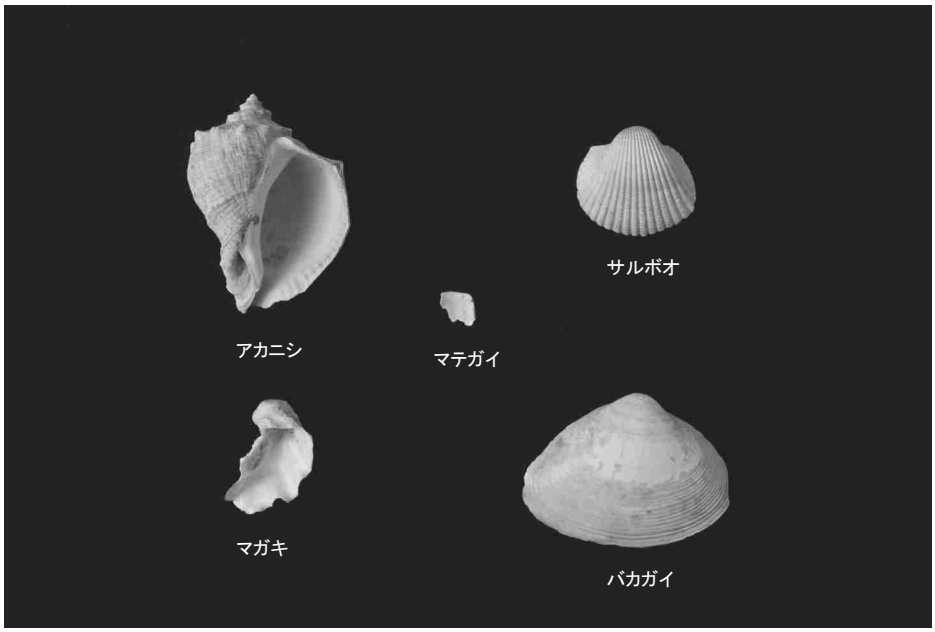


出土銭貨（4SK-014 以外）（3）

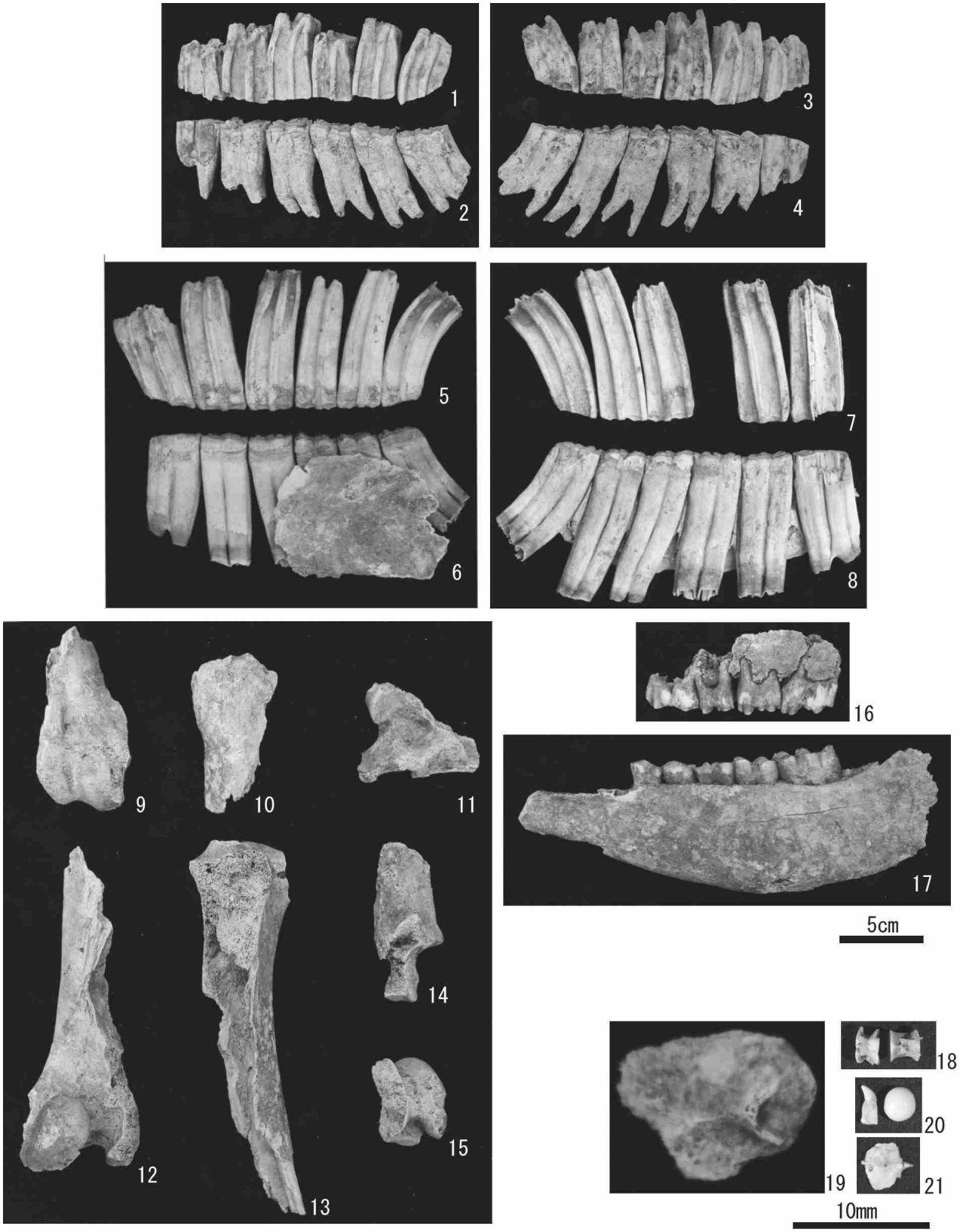
4SK-055 標準貝類相



4SK-092 標準貝類相



主要種以外の貝



文脇遺跡から出土した動物遺体

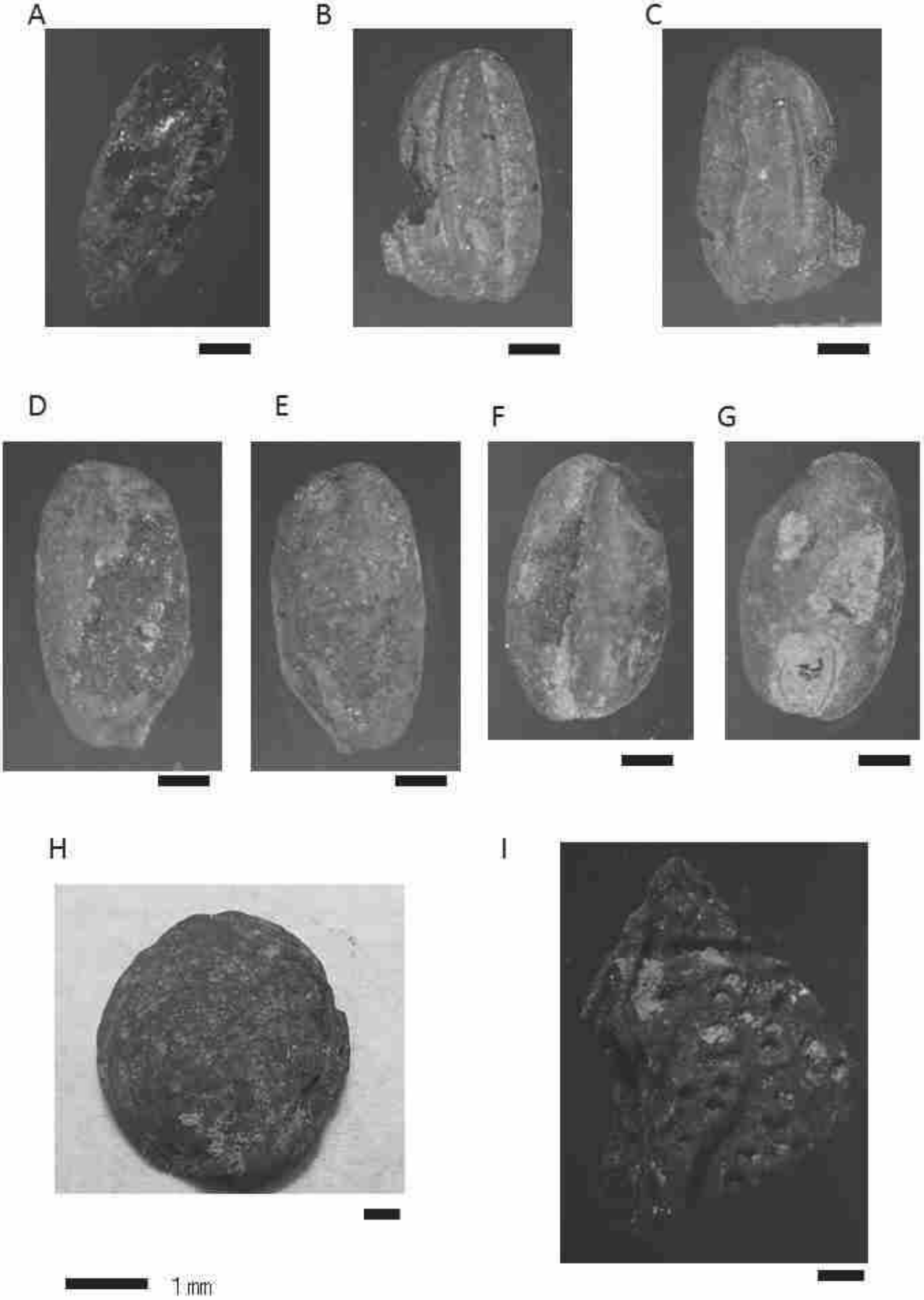
1-4. ウマ(No. 3)：1. 左上顎骨　2. 左下顎骨　3. 右上顎骨　4. 右下顎骨

5-15. ウマ(No. 7)：5. 左上顎骨　6. 左下顎骨　7. 右上顎骨　8. 右下顎骨　9. 左上腕骨　10. 右橈骨

11. 右寛骨　12. 右大腿骨　13. 左脛骨　14. 左踵骨　15. 左距骨

16. ウシ左上顎骨(No. 5)　17. ウシ左下顎骨(No. 4)

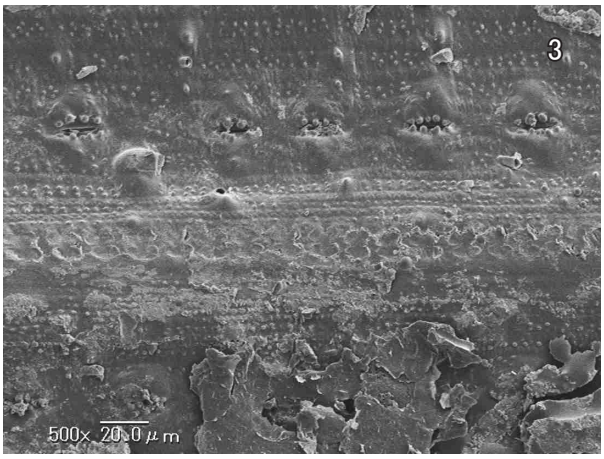
18. ニシン科腹椎(No. 14)　19. スズキ属右主鰓蓋骨(No. 8)　20. タイ科歯(No. 14)　21. アジ科稜鱗(No. 14)

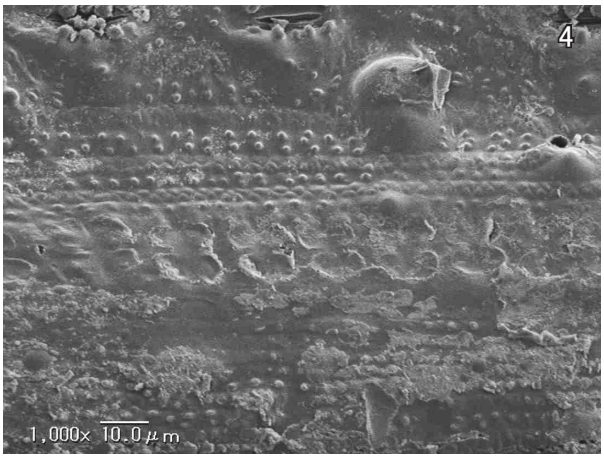


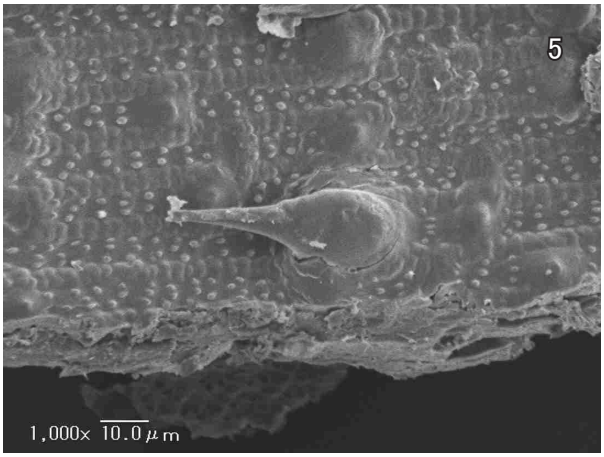
文脇遺跡から出土した植物遺体

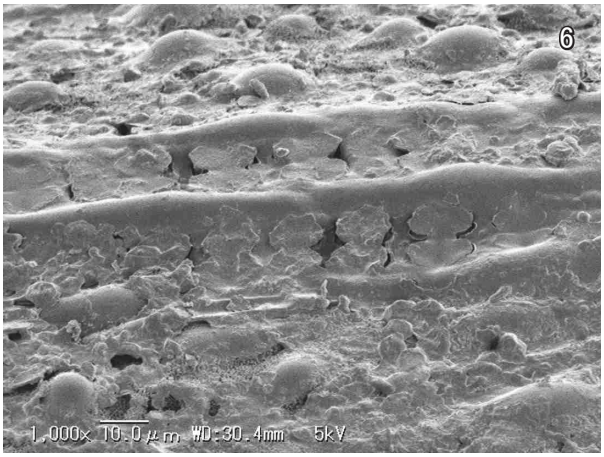
A：オオムギ　胚乳　　B－E：イネ　胚乳　　F，G：コムギ　胚乳　　H：フジ属　種子

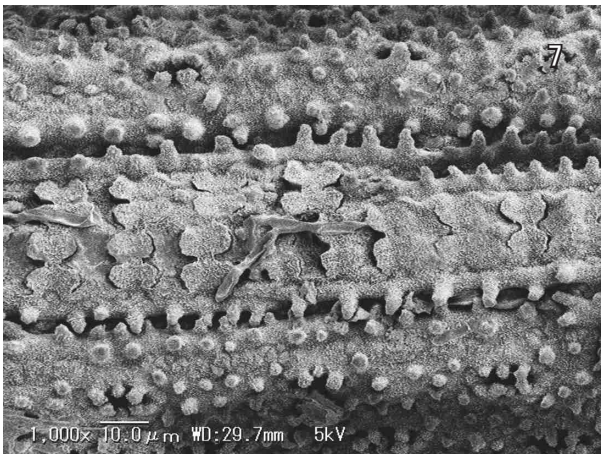
I：ウメ　核（破片）







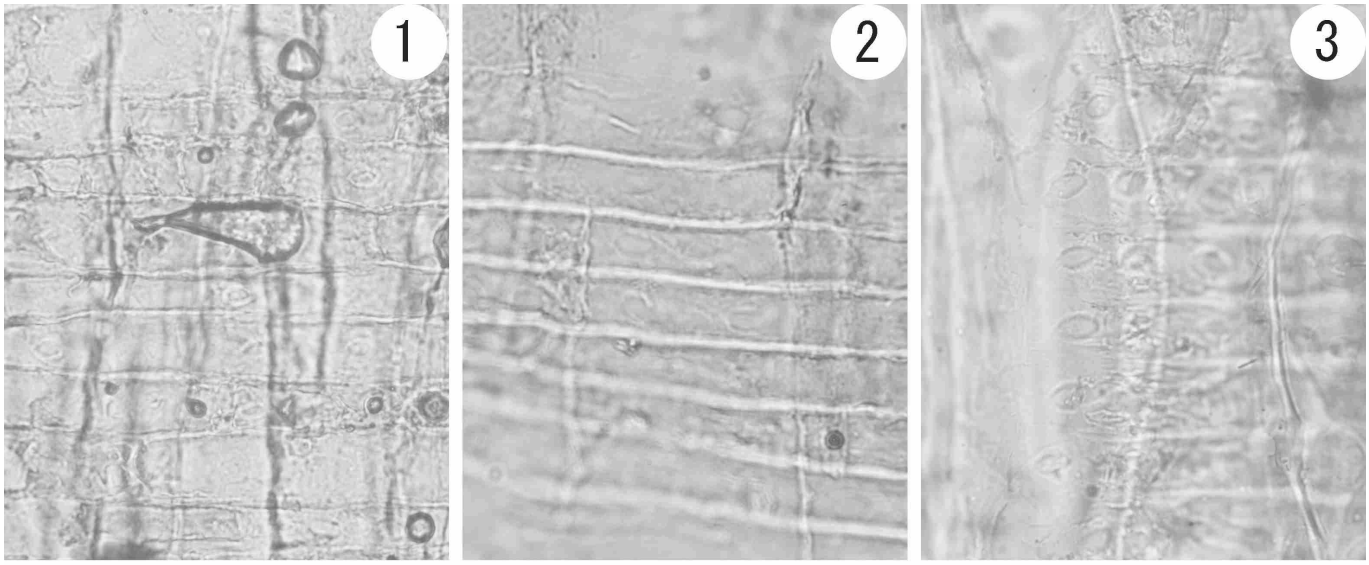




文脇遺跡出土の銭紐と植物珪酸体の走査型電子顕微鏡写真

1．試料全体、2．走査型電子顕微鏡用試料、3．イネ型短細胞珪酸体列、4．イネ型短細胞珪酸体列拡大、5．ポイント型不明植物珪酸体、6．イネ型短細胞珪酸体列（現生イネ葉鞘）、7．イネ型短細胞珪酸体列（現生イネ葉身）、8．イネ型短細胞珪酸体列（現生ヨシ葉身）

※ 2 のスケールは 1 ㎜



スケール：

文脇遺跡出土木材の光学顕微鏡写真（放射断面、スケール=25μm）

1．スギ（曲物側板片）、2．スギ（曲物底板片）、3．スギ（曲物木材片）

報　告　書　抄　録

ふりがな	そでがうらしふみわきいせき（ちゅう・きんせいへん）
書名	袖ケ浦市文脇遺跡（中・近世編）
副書名	主要地方道千葉鴨川線（袖ケ浦市高谷）県単道路改良事業埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	1
シリーズ名	千葉県教育委員会埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第19集
編著者名	半澤幹雄・西野雅人・加藤正信・高梨友子・小林真生子・中村賢太郎・米田恭子・黒沼保子
編集機関	千葉県教育委員会
所在地	〒260-8662　千葉県千葉市中央区市場町1-1　　TEL043-223-4129
発行年月日	西暦2017年3月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積等	調査原因
		市町村	遺跡番号					
文脇遺跡（ふみわきいせき）	袖ケ浦市上泉（そでがうらしかみいずみ） 字南原（あざみなみはら）618-2 ほか	12229	036 (1)～(7)	35度 24分 8秒	140度 2分 45秒	20071203 ～ 20150618	24,582.8㎡	主要地方道千葉鴨川線（袖ケ浦市高谷）県単道路改良事業
				日本測地系				

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
文脇遺跡	包蔵地 集落跡 城館跡	中・近世	地下式坑20基 方形竪穴・竪穴状遺構116基 井戸3基 土坑127基 堀1条 土塁1条 掘立柱建物跡9棟 柵列3条 溝状遺構71条 ピット群	陶磁器・土器、土製品（転用砥石、土錘など）、石器・石製品（砥石、硯、板碑片、五輪塔片など）、金属製品、銭貨	曲物に収められた29,931枚の銭貨が土坑から一括出土した。

要約

調査では旧石器時代から遺構や遺物が認められるが、本書には中・近世についてのみ所収した。調査区内からは、地下式坑や方形竪穴、土坑、溝状遺構などの遺構が集中して多数検出された。北端の松川を望む場所では、堀や土塁も検出された。遺構の時期は、出土した遺物から概ね15世紀代を中心とするものと考えられる。また、土坑の一つ4SK-014からは29,931枚の銭貨が一括出土した。銭の構成は、北宋銭が圧倒的に多く、次いで唐銭、南宋銭で大半を占める。最古銭は前漢の四銖半両（初鋳BC175年）で、最新銭は至大通寶（初鋳1310年）である。模鋳銭や私鋳銭、島銭も認められる。

千葉県教育委員会埋蔵文化財調査報告第 19 集

袖ケ浦市文脇遺跡

（中・近世編）

－主要地方道千葉鴨川線　（袖ケ浦市高谷）

県単道路改良事業埋蔵文化財発掘調査報告書１－

【第２分冊】

平成 29 年 3 月 30 日発行

編集・発行　千葉県教育委員会

千葉市中央区市場町１－１

印　　刷　（株）集　賛　舎

館山市山本 226